富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第7集

梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）

――東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II――

第一分冊

1996年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

巻首図版２

巻首図版４

梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）

―― 東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II ――

第一分冊

1996年

財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

序

富山県下では，ここ十数年の間，高速自動車道や国道バイパスの建設に伴って，大規模かつ長期に亘る発掘調査が行われています。当財団におきましても，日本道路公団の東海北陸自動車道建設に先立ち，平成元年度から4年度にかけて道路建設予定地内に係る遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査した遺跡は，梅原胡摩堂遺跡の他4遺跡で，その総延長は約2.3kmになります。また，出土した遺物は膨大な量となり，この整理作業及び報告書作成作業を平成4年度から7年度にかけて実施いたしました。

本書は，平成6年に刊行した梅原胡摩堂遺跡遺構編の続編で，同遺跡の出土遺物について取りまとめたものであります。梅原胡摩堂遺跡からは，土器陶磁器や木製遺物など様々な生活道具が発見され，調査の結果，鎌倉時代から江戸時代に至る大規模な集落跡であることが判明しました。

この発掘調査の成果が，中世考古学や民衆の生活の解明に役立ち，さらに，砺波地方の歴史を再認識する一つの手掛かりとなれば幸いに存じます。

終わりに，これまでの調査及び報告書刊行にあたり，御指導，御協力を賜りました関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所　長　岸本雅敏

例　　言

1　本書は富山県西砺波郡福光町梅原，同町宗守地内に所在する梅原胡摩堂遺跡の発掘調査報告書「遺物編」である。なお，同「遺構編」は平成６年３月に刊行している。

2　調査は，日本道路公団新潟建設局の委託を受けて，財団法人富山県文化振興財団が行った。

3　発掘調査の期間と本書刊行までの整理期間は次のとおりである。

調査期間　　平成元(1989)年５月29日～平成４(1992)年６月２日

整理期間　　平成４(1992)年４月１日～平成８(1996)年３月31日

4　本書の編集・執筆は，山本正敏，島田美佐子，横山和美，中川道子，越前慎子が担当し，執筆分担は各文末に記した。

5　遺物の写真撮影は，楠華堂（代表　楠本真紀子）及び㈱シン技術コンサルに委託した。

6　珪藻分析及び卒都婆の解読は，邑本順亮氏（日本珪藻学会会員）及び藤澤典彦氏（元興寺文化財研究所）にそれぞれお願いし，その成果について玉稿を得た。

7　自然科学的な分析は，以下の諸機関に委託し，その成果について報文を得た。

土器胎土分析　　土器胎土研究会　（代表　三辻利一）

花粉・種子分析　　㈱パリノ・サーヴェイ

灯明皿脂質分析　　同　上　（坂井良輔，小林正史）

骨・貝同定　　同　上　（金子浩昌）

昆虫同定　　同　上　（藤山家徳）

樹種同定　　富山県林業技術センター木材試験場　（長谷川益夫，塚本英子）

金属製品分析　　㈱新日本製鉄八幡製鉄所ＴＡＣセンター　（大澤正巳）

漆塗膜分析　　漆器文化財科学研究所　（代表　四柳嘉章）

8　本書の作成にあたり，下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略，五十音順）

赤羽久忠，秋田裕毅，石田　仁，伊藤隆三，伊野近富，岩田　隆，上田秀夫，内堀信夫，宇野隆夫，大橋康二，垣内光次郎，柿田祐司，京田良志，後藤道治，鈴木正貴，滝川重徳，塚田一成，楢崎彰一，西山要一，服部実喜，林　浩明，藤沢良祐，藤田邦雄，本郷真紹，本澤慎輔，前川　要，松本建速，水野和雄，水野正好，宮下幸夫，百瀬正恒，森本朝子，山本信夫，吉井亮一，吉岡康暢，吉田　学，和嶋俊二，福野町教育委員会，福光町教育委員会，医王山文化調査委員会

凡　　例

1　本書は３分冊からなる。第一分冊には本文と遺物実測図等の挿図，第二分冊には自然科学分析と遺物観察表等，第三分冊には遺物の写真図版を収める。

2　出土土器については，第Ⅱ章にて種類別に詳述し，出土遺構ごとの共伴関係や出土状況等は第Ⅲ章にて述べる。

3　遺構の名称・番号・表記については，「遺構編」に対応している。

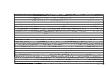
4　第Ⅲ章で用いた遺物番号は，第Ⅱ章で用いた挿図番号と一致する。両者の遺物番号の対応関係は以下のとおりである。

第Ⅱ章　項　　目	第Ⅲ章遺物番号	第Ⅱ章　項　　目	第Ⅲ章遺物番号
A　縄文時代の土器	A－1～　36	6　瀬戸美濃(登窯期以降)	6－1～　18
B　奈良・平安時代の土器	B－1～　40	7　越中瀬戸	7－1～ 184
C　中近世の土器・陶磁器		8　唐津	8－1～ 277
1　中世土師器	1－1～1748	9　伊万里	9－1～ 154
2　珠洲・珠洲系陶器	2－1～ 352	10　信楽・九谷	10－1～　14
3　越前・加賀・常滑・八尾	3－1～　38	11　瓦器・土器類	11－1～　47
4　中国製陶磁器	4－1～ 404	12　その他の陶磁器	12－1～ 107
5　瀬戸美濃(窖窯～大窯期)	5－1～ 257	D　木製品	D－1～ 335

5　施釉陶器等の釉の掛かる範囲は１点破線で示した。２種類以上の釉が掛かる場合や絵付けがされている場合はトレースの濃淡で示した。

6　煤の付着部分及び漆器の赤色漆の部分はスクリーントーンで示した。また，木製品のうち年輪方向がわかるものは，断面図に同心円状のスクリーントーンで模式的に示した。

煤付着部分


赤色漆塗り

7　「遺構編」の遺構全体図では，重要と判断した遺構の番号のみを表示した。しかし，本書では，それ以外の遺構出土の遺物も収録したため，遺構全体図を再録し，その未表示の遺構番号を斜体で表記した。

8　第三分冊写真図版中の遺物番号は第Ⅱ章の挿図番号と一致する。

9　遺跡の略号は「ＵＧ－地区名」である。遺物の注記はこの略号を用いた。

報告書抄録

ふりがな	うめはらごまどういせきはっくつちょうさほうこく　(いぶつへん)
書名	梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告　(遺物編)
副書名	東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告
巻次	II
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第7集
編著者名	山本正敏　島田美佐子　横山和美　中川道子　越前慎子
編集機関	財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒930　富山県富山市五福4384番1号　Tel 0764-42-4229
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
うめはらごまどう 梅原胡摩堂	にしとなみぐんふくみつまち 西砺波郡福光町 うめはら・むねもり 梅原・宗守	16421	180	36度 33分 25秒	136度 54分 20秒	19890529～ 19891227 19900412～ 19901227 19910425～ 19911220 19920420～ 19920602	20,850 16,250 17,680 920	道路（東海北陸自動車道）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梅原胡摩堂	集落跡	縄文後・晩期	土坑4基	土器・石器	12世紀半ばから18世紀にいたる集落
		奈良・平安	溝1条・土坑1基	土師器・須恵器	
		中世	掘立柱建物181棟 溝152条 井戸271基 土坑464基 土壙墓1基	中世土師器・八尾 珠洲・越前・加賀 瀬戸美濃・青磁 白磁・青花・石製品 金属製品・木製品	
		近世	掘立柱建物49棟 土台建物4棟 溝56条 井戸94基 土坑234基	越中瀬戸・唐津 伊万里・石製品 金属製品・木製品	
		近代	井戸1基・土坑20基	陶磁器・石製品 金属製品・木製品	

目　　次

第Ⅰ章　序　　章 …… 1
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　整理の経過 …… 3
4　周辺の環境 …… 4
第Ⅱ章　遺　　物 …… 6
1　遺物の概要 …… 6
2　出土遺物 …… 7
A．縄文時代の土器・石器 …… 7
B．奈良・平安時代の土器 …… 18
C．中近世の土器・陶磁器 …… 21
1．中世土師器 …… 21
2．珠洲・珠洲系陶器 …… 67
3．越前・加賀・常滑・八尾 …… 102
4．中国製陶磁器 …… 108
5．瀬戸美濃（窖窯～大窯期） …… 129
6．瀬戸美濃（登窯期以降） …… 143
7．越中瀬戸 …… 145
8．唐　　津 …… 158
9．伊万里 …… 176
10．信楽・九谷 …… 187
11．瓦器・土器類 …… 189
12．そ の 他 …… 195
D．木製品 …… 206
E．石製品 …… 243
F．金属製品 …… 268
第Ⅲ章　遺構出土の一括遺物 …… 285
1　中世前期 …… 285
2　中世後期 …… 322
3　近世 …… 337
第Ⅳ章　考　　察 …… 353
1　梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年 …… 353
2　中国製陶磁器の分類と編年 …… 370
3　梅原胡摩堂遺跡出土の木製品にみる特徴 …… 381
4　ＳＫ4483出土卒都婆の一考察 …… 389
5　梅原胡摩堂遺跡における金属製品生産 …… 391

挿図目次

第１図　調査区……2
第２図　梅原胡摩堂遺跡周辺の主要遺跡位置図……5
第３図　縄文土器１……10
第４図　縄文土器２・石器１……11
第５図　縄文時代の石器２……12
第６図　縄文時代の石器３……13
第７図　縄文時代の石器４……14
第８図　縄文時代の石器５……15
第９図　縄文時代の石器６……16
第10図　縄文時代の石器７……17
第11図　須恵器……19
第12図　土師器・緑釉陶器……20
第13図　中世土師器皿計測部位……21
第14図　横撫での方法……22
第15図　中世土師器法量表（ＲＡ類）……23
第16図　中世土師器法量表（ＲＢ類）……23
第17図　中世土師器１……24
第18図　中世土師器２……25
第19図　中世土師器３……26
第20図　中世土師器４……27
第21図　中世土師器法量表（ＲＣ類）……28
第22図　中世土師器法量表（ＲＤ類）……28
第23図　中世土師器法量表（ＲＥ類）……29
第24図　中世土師器の調整（ＲＦ類）……29
第25図　中世土師器法量表（ＲＦ類）……30
第26図　中世土師器法量表（ＲＧ類）……30
第27図　中世土師器５……31
第28図　中世土師器６……32
第29図　中世土師器法量表（ＮＡⅠ類）……33
第30図　中世土師器法量表（ＮＡⅡ類）……33
第31図　中世土師器７……34
第32図　中世土師器８……35
第33図　中世土師器の調整（ＮＡⅠ・Ⅱ類）……36
第34図　中世土師器９……37
第35図　中世土師器10……38
第36図　中世土師器法量表（ＮＢⅠ類）……39
第37図　中世土師器法量表（ＮＢⅡ類）……39

第38図　中世土師器法量表（ＮＢII'類）……39
第39図　中世土師器の調整（ＮＢＩ・II類）……39
第40図　中世土師器法量表（ＮＣＩ類）……40
第41図　中世土師器法量表（ＮＣII類）……40
第42図　中世土師器法量表（ＮＣIII類）……40
第43図　中世土師器の調整（ＮＣＩ類）……40
第44図　中世土師器11……41
第45図　中世土師器12……42
第46図　中世土師器13……43
第47図　中世土師器14……44
第48図　中世土師器15……45
第49図　中世土師器16……46
第50図　中世土師器法量表（ＮＤＩ類）……47
第51図　中世土師器法量表（ＮＤII類）……47
第52図　中世土師器法量表（ＮＤIII類）……47
第53図　中世土師器17……48
第54図　中世土師器18……49
第55図　中世土師器19……50
第56図　中世土師器20……51
第57図　中世土師器21……52
第58図　中世土師器22……53
第59図　中世土師器23……54
第60図　中世土師器24……55
第61図　中世土師器25……56
第62図　中世土師器26……57
第63図　中世土師器の調整（ＮＤＩ・II類）……58
第64図　中世土師器法量表（ＮＥ類）……58
第65図　中世土師器法量表（ＮＦ類）……58
第66図　中世土師器法量表（ＮＧ類）……59
第67図　中世土師器27……60
第68図　中世土師器28……61
第69図　中世土師器29……62
第70図　中世土師器30……63
第71図　中世土師器の調整（ＮＧ類）……64
第72図　中世土師器法量表（ＮＨ類）……64
第73図　中世土師器法量表（ＮＪ類）……64
第74図　中世土師器の調整（ＮＪ類）……65
第75図　中世土師器31……66
第76図　珠洲１……73
第77図　珠洲２……74

第78図　珠洲 3 ……75
第79図　珠洲 4 ……76
第80図　珠洲 5 ……77
第81図　珠洲 6 ……78
第82図　珠洲 7 ……79
第83図　珠洲 8 ……80
第84図　珠洲 9 ……81
第85図　珠洲10……82
第86図　珠洲11……83
第87図　珠洲12……84
第88図　珠洲13……85
第89図　珠洲14……86
第90図　珠洲15……87
第91図　珠洲16……88
第92図　珠洲17……89
第93図　珠洲18……90
第94図　珠洲19……91
第95図　珠洲20……92
第96図　珠洲21……93
第97図　珠洲22……94
第98図　珠洲23……95
第99図　珠洲24……96
第100図　珠洲25 ……97
第101図　珠洲26 ……98
第102図　珠洲27 ……99
第103図　珠洲28……100
第104図　珠洲29・珠洲系陶器……101
第105図　越前 1 ……104
第106図　越前 2 ……105
第107図　越前 3 ・加賀・常滑……106
第108図　八尾……107
第109図　中国製磁器 1 ……117
第110図　中国製磁器 2 ……118
第111図　中国製磁器 3 ……119
第112図　中国製陶磁器 4 ……120
第113図　中国製磁器 5 ……121
第114図　中国製磁器 6 ……122
第115図　中国製磁器 7 ……123
第116図　中国製磁器 8 ……124
第117図　中国製磁器 9 ……125

第118図　中国製磁器10……126
第119図　中国製磁器11……127
第120図　中国製磁器12……128
第121図　瀬戸美濃１（窖窯期）……133
第122図　瀬戸美濃２（窖窯期）……134
第123図　瀬戸美濃３（大窯期）……135
第124図　瀬戸美濃４（大窯期）……136
第125図　瀬戸美濃５（大窯期）……137
第126図　瀬戸美濃６（大窯期）……138
第127図　瀬戸美濃７（大窯期）……139
第128図　瀬戸美濃８（大窯期）……140
第129図　瀬戸美濃９（大窯期）……141
第130図　瀬戸美濃10（大窯期）……142
第131図　瀬戸美濃11（登窯期以降）……144
第132図　越中瀬戸皿法量表……146
第133図　越中瀬戸１……149
第134図　越中瀬戸２……150
第135図　越中瀬戸３……151
第136図　越中瀬戸４……152
第137図　越中瀬戸５……153
第138図　越中瀬戸６……154
第139図　越中瀬戸７……155
第140図　越中瀬戸８……156
第141図　越中瀬戸９……157
第142図　唐津１……164
第143図　唐津２……165
第144図　唐津３……166
第145図　唐津４……167
第146図　唐津５……168
第147図　唐津６……169
第148図　唐津７……170
第149図　唐津８……171
第150図　唐津９……172
第151図　唐津10……173
第152図　唐津11……174
第153図　唐津12……175
第154図　伊万里１……180
第155図　伊万里２……181
第156図　伊万里３……182
第157図　伊万里４……183

第158図　伊万里５……184
第159図　伊万里６……185
第160図　伊万里７……186
第161図　信楽・九谷……188
第162図　瓦器・土器類１……191
第163図　瓦器・土器類２……192
第164図　瓦器・土器類３……193
第165図　瓦器・土器類４……194
第166図　その他の陶磁器１……198
第167図　その他の陶磁器２……199
第168図　その他の陶磁器３……200
第169図　その他の陶磁器４……201
第170図　その他の陶磁器５……202
第171図　その他の陶磁器６……203
第172図　その他の陶磁器７……204
第173図　その他の陶磁器８……205
第174図　木製品部分名称……206
第175図　木製品１（農工具）……208
第176図　木製品２（農工具）……209
第177図　木製品３（農工具・服飾具）……210
第178図　木製品４（服飾具－下駄）……212
第179図　木製品５（服飾具－下駄）……213
第180図　木製品６（服飾具－下駄）……214
第181図　木製品７（服飾具－下駄）……215
第182図　木製品８（服飾具－下駄）……216
第183図　木製品９（服飾具－下駄・容器－柄杓）……217
第184図　木製品10（容器－曲物・円形板）……220
第185図　木製品11（容器－円形板）……221
第186図　木製品12（容器－円形板）……222
第187図　木製品13（容器－円形板）……223
第188図　木製品14（容器）……224
第189図　木製品15（容器－漆器椀）……227
第190図　木製品16（容器－漆器椀）……228
第191図　木製品17（容器－漆器椀）……229
第192図　木製品18（容器－食事具）……230
第193図　木製品19（容器－食事具）……232
第194図　木製品20（食事具・遊戯具・雑具）……233
第195図　木製品21（祭祀・木簡・井戸枠）……234
第196図　木製品22（井戸枠・柱）……236
第197図　木製品23（柱）……237

第198図　木製品24（柱・杭）……238
第199図　木製品25（加工木）……240
第200図　木製品26（加工木）……241
第201図　木製品27（加工木）……242
第202図　石製品１……249
第203図　石製品２……250
第204図　石製品３……251
第205図　石製品４……252
第206図　石製品５……253
第207図　石製品６……254
第208図　石製品７……255
第209図　石製品８……256
第210図　石製品９……257
第211図　石製品10……258
第212図　石製品11……259
第213図　石製品12……260
第214図　石製品13……261
第215図　石製品14……262
第216図　石製品15……263
第217図　石製品16……264
第218図　石製品17……265
第219図　石製品18……266
第220図　石製品19……267
第221図　金属製品１（銅・合金製品）……269
第222図　金属製品２（銅・合金製品）……270
第223図　金属製品３（銅・合金製品）……271
第224図　金属製品４（銭貨）……273
第225図　金属製品５（銭貨）……274
第226図　金属製品６（鉄製品）……276
第227図　金属製品７（鉄製品）……277
第228図　金属製品８（鉄製品）……278
第229図　金属製品９（鉄製品）……279
第230図　金属製品10（鉄製品）……280
第231図　土製品・炉壁・鉄滓１……282
第232図　土製品・炉壁・鉄滓２……283
第233図　土製品・炉壁・鉄滓３……284
第234図　遺構出土遺物１……287
第235図　遺構出土遺物２……289
第236図　遺構出土遺物３……290
第237図　遺構出土遺物４……291

第238図　遺構出土遺物５……292
第239図　遺構出土遺物６……293
第240図　遺構出土遺物７……294
第241図　遺構出土遺物８……295
第242図　遺構出土遺物９……296
第243図　遺構出土遺物10……297
第244図　遺構出土遺物11……299
第245図　遺構出土遺物12……300
第246図　遺構出土遺物13……301
第247図　遺構出土遺物14……302
第248図　遺構出土遺物15……303
第249図　遺構出土遺物16……304
第250図　遺構出土遺物17……305
第251図　遺構出土遺物18……307
第252図　遺構出土遺物19……308
第253図　遺構出土遺物20……309
第254図　遺構出土遺物21……310
第255図　遺構出土遺物22……312
第256図　遺構出土遺物23……313
第257図　遺構出土遺物24……315
第258図　遺構出土遺物25……316
第259図　遺構出土遺物26……318
第260図　遺構出土遺物27……319
第261図　遺構出土遺物28……320
第262図　遺構出土遺物29……321
第263図　遺構出土遺物30……323
第264図　遺構出土遺物31……324
第265図　遺構出土遺物32……325
第266図　遺構出土遺物33……327
第267図　遺構出土遺物34……329
第268図　遺構出土遺物35……330
第269図　遺構出土遺物36……332
第270図　遺構出土遺物37……333
第271図　遺構出土遺物38……335
第272図　遺構出土遺物39……336
第273図　遺構出土遺物40……338
第274図　遺構出土遺物41……339
第275図　遺構出土遺物42……341
第276図　遺構出土遺物43……342
第277図　遺構出土遺物44……343

第278図　遺構出土遺物45……344
第279図　遺構出土遺物46……345
第280図　遺構出土遺物47……346
第281図　遺構出土遺物48……348
第282図　遺構出土遺物49……349
第283図　遺構出土遺物50……350
第284図　遺構出土遺物51……351
第285図　中世土師器皿分類……353
第286図　標式遺構出土中世土師器皿……355
第287図　梅原胡摩堂遺跡中世土師器皿編年表……367
第288図　白磁・同安窯系青磁碗皿類の分類……372
第289図　龍泉窯系青磁碗皿類の分類……373
第290図　中国製磁器の編年表(1)……375
第291図　中国製磁器の編年表(2)……377
第292図　中国製磁器の編年表(3)……379
第293図　製品別樹種の割合……381
第294図　近世下駄との比較……382
第295図　下駄の木取り１……382
第296図　下駄の木取り２……382
第297図　古代から中世にみる柄杓の形態と柄の角度……383
第298図　円形板にみる特徴……384
第299図　底板と側板の固定方法……384
第300図　富山県内出土漆器の形態……385
第301図　轆轤爪の位置……386
第302図　井相田Ｃ遺跡出土卒都婆……390
第303図　元興寺蔵『入棺作法』より……390
第304図　Ａ地点の遺構分布……393
第305図　Ｂ地点製銅関連遺構　１．ＳＫ6286・ＳＫ6287　２．ＳＫ6310……394
第306図　Ｂ地点製銅関連遺構　ＳＫ6335……394
第307図　Ｂ地点製銅関連遺構　ＳＫ6282・ＳＫ6292……395
第308図　Ｃ地点炉床……395
第309図　伝安楽寺跡実測図・石碑拓影及び出土遺物……396
第310図　Ｂ地点の遺構分布……398
第311図　Ｃ地点の遺構分布……399

表　目　次

第１表　整理体制……3
第２表　中世土師器胎土含有物……21
第３表　出土銭貨一覧……272
第４表　共伴出土銭貨一覧……272
第５表　釘計測値一覧……275
第６表　中国製磁器碗・皿類分類対比表……371
第７表　木製品の時代別樹種別製品名……381
第８表　柄杓計測値一覧……383
第９表　富山県内出土漆器計測値一覧……385
第10表　坩堝計測値一覧……391
第11表　鞴羽口計測値一覧……392

第Ⅰ章　序　　章

1　調査に至る経緯

昭和46年，東海北陸自動車道の建設について基本計画が提示された。昭和53年，このうちの富山県内の福光・小矢部間について，建設大臣から日本道路公団に施工命令が出された。これに伴い，路線周辺の周知の埋蔵文化財包蔵地以外の埋蔵文化財包蔵地の取扱いに対して，昭和57年11月に富山県教育委員会と日本道路公団との間で協議が行われ，計画路線内の分布調査を実施することとなった。

分布調査は昭和57年12月，富山県教育委員会が主体となり，富山県埋蔵文化財センターが実施した。調査の結果，計19箇所の埋蔵文化財包蔵地が新たに発見され，THJ-01～THJ-19遺跡と仮称された。

昭和58年３月には，福光･小矢部間の路線が発表され，同年福野･福光間に所在するTHJ-02～THJ-19遺跡の試掘調査が行われた。調査は富山県教育委員会が主体となり，福光町管内を富山県埋蔵文化財センターが，福野町管内を富山県埋蔵文化財センターと福野町教育委員会が実施した。調査の結果，福光町の７箇所の遺跡推定地のうちTHJ-13とTHJ-14から，梅原安丸遺跡・梅原加賀坊遺跡・梅原胡摩堂遺跡が確認され，福野町のTHJ-12遺跡で，田尻遺跡が確認された。平成元年，福光町のTHJ-14遺跡内で富山県埋蔵文化財センターによって試掘調査が行われ，久戸遺跡が確認された。

試掘調査の結果をふまえ，昭和63年12月より富山県教育委員会と日本道路公団との間で協議が行われた。この広範囲の遺跡群に対し対応策が検討された結果，平成元年４月に財団法人富山県文化振興財団に埋蔵文化財課が新設されることとなった。財団は富山県教育委員会の指導を受けて日本道路公団と委託契約を締結後，同年５月より本調査を開始し，以後約3年間にわたり上記５遺跡の調査を行った。その総面積は88,650㎡に及ぶ。

2　調査の経過

平成元年度（1989年度）は日本道路公団との協議のうえ，県道・町道のボックス・橋梁工事にかかる３箇所（Ａ・Ｂ・Ｃ地区）と梅原胡摩堂遺跡の南端にあたる県道金沢・井波線の南側全域（Ｃ１・Ｃ２・Ｃ３地区）を対象に行った。調査体制は調査員２名１班として，ボックス・橋梁工事にかかる４地区の調査を優先的に行い，終了した地区の班より漸次Ｃ地区の調査に取りかかった。調査期間は５月29日～12月27日までで，調査総面積は20,850㎡である。

平成２年度（1990年度）は，梅原胡摩堂遺跡（Ａ１・Ａ２・Ａ３Ｎ・Ｂ１・Ｃ１Ｅ地区）・久戸遺跡・梅原加賀坊遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡の計５遺跡を対象とした。調査地区は，協議の上，ボックス・橋梁工事にかかる箇所を優先した。期間は４月12日～12月27日までである。調査総面積は44,420㎡で，うち梅原胡摩堂遺跡の調査面積は16,250㎡である。

平成３年度（1991年度）は梅原胡摩堂遺跡（Ａ３Ｓ・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｂ４地区）・田尻遺跡の調査を実施した。調査期間は４月25日～12月20日までである。調査総面積は23,380㎡，うち梅原胡摩堂遺跡の調査面積は17,680㎡である。

平成４年度（1992年度）は前年度に残したＢ３地区の町道付け替え部分920㎡の調査を行った。調査期間は４月20日～６月２日までの延べ28日間である。最初に擁壁工事にかかる60㎡の調査を行い，残りの部分は住宅への通用口の確保のため，南半と北半に分けて調査した。

X500
X450
X400
X350
X300
X250
X200
X150
X100
X50
X 0
Y 0
Y50
Y100
Y150
A地区
A１地区
A２地区
A３N地区
A３S地区
B１地区
(H２年)
B１地区
(H３年)
B地区
B２地区
B４地区
B３地区
B３W地区
CN地区
CS地区
C１E地区
C１地区
C２地区
C３地区
平成元年度調査区
平成２年度調査区
平成３年度調査区
平成４年度調査区
0
200m

第１図　調査区

3　整理の経過

平成元年からの調査で出土した遺物は，それぞれの年度内に可能な限り洗浄及び注記を行い，大まかに分類して仮保管した。木製品・石製品・金属製品については，メモ写真を撮影して整理台帳を作成した。木製品は，台帳作成の後，保管環境を考慮し，管理の簡略化を図るため，できるだけポリ袋に収納し，圧着器を用いてデータカードとともに仮パックして保管した。各年度の調査の概要については，当財団発行の『発掘調査概報(1)～(3)』，『埋蔵文化財年報(1)～(4)』の一部に掲載している。

正式な報告書刊行に向けての整理事業は，平成４年度から開始した。平成４年度は遺構編の挿図作成を中心とし，平成５年度は遺構編の原稿執筆・編集・印刷，一部遺物の復原と実測図の作成を行った。平成６年度及び平成７年度において，遺物の接合・復原，実測図及び挿図作成，遺物写真撮影，遺物編の原稿執筆・編集・印刷を行った。

遺物の実測作業は，調査員及び整理作業員が行い，文様等が複雑な一部の陶磁器，木製品，石製品，金属製品は委託による写真実測で作成した。実測図は遺物カードに貼り込み，整理した。

遺物カードは，土器・木製品・石製品・金属製品の種類別で作成した。記入項目は，出土位置（遺構）・層位・日付・計測値・残存率・時期・特記事項等を共通項目とし，土器は色調・胎土・焼成・調整等，木製品は樹種・保存処理状況等，石器は石材等，金属製品は材質・保存処理状況等の項目を追加した。カードに記載した内容はパーソナルコンピューターを使用してデータ入力し，遺物管理に利用するとともに，本書に遺物実測図として掲載したものについては印刷出力し，これを遺物観察表として第二分冊に掲載した。データ入力は人材派遣業者を通じて委託し，整理作業員が補足した。

遺物の写真撮影は，大部分を業者委託とした。撮影フィルムは，４×５インチ版及び５×７インチ版を基本として，密着焼付または引伸ばし焼付したものを図版に使用した。遺構写真及び遺物写真のうち特に重要なものについてはプロフォトＣＤ化し，保存をはかった。

自然科学的な分析は，平成５年度及び６年度にそれぞれ専門の機関等に委託し，その成果報告を本書第二分冊に掲載した。

出土木製品・金属製品のうち，遺存状態が良好で特に重要と判断したものは，平成５～７年度に保存処理を元興寺文化財研究所へ委託した。また，中・近世の陶磁器のうち重要な資料21点についても業者に委託して復元を行った。

	平成４年度・平成５年度	平成６年度	平成７年度
総　括	所長　桃野真晃 所長代理　関　清	所長　桃野真晃 所長代理　関　清	所長　岸本雅敏 副所長　加藤善吾
遺物整理総括	調査第二係長　宮田進一	調査第二係長　山本正敏	調査第一課長　山本正敏
担　当	文化財保護主事　島田美佐子 文化財保護主事　中川道子	文化財保護主事　佐賀和美 文化財保護主事　越前慎子	文化財保護主事　横山和美（旧姓 佐賀） 文化財保護主事　越前慎子
庶　務	主事　大房友明 主事　中川靖夫	主任　大房友明 主事　岩崎証意	主任　大房友明 主事　岩崎証意

第１表　整理体制

4　周辺の環境

富山県は日本海に面し，東側を飛騨山脈，南側を飛騨高地及び両白山地，西側を宝達丘陵に囲まれている。平野部は県中央部に突出する呉羽丘陵によって東西に二分されており，東部に複合扇状地平野（狭義の富山平野），西部に主として庄川の扇状地である砺波平野が広がっている。

砺波平野の北半は日本の沖積平野の中でも最大級の面積を有する庄川新扇状地が発達し，扇状地上には庄川の変遷を示す河道跡が放射状に残っている。これに対し西の小矢部川流域の平野は庄川新扇状地の発達に押され，狭い低地となっている。小矢部川の支流によって形成された南砺複合扇状地は砺波平野南西部にあたり，高清水山地の断崖層を浸食し幾つもの谷を形成している。

福光町は県南西部に位置し，南砺扇状地上にあたる北東の平野部は，散居村の風景が広がる豊かな穀倉地帯となっている。町の南西部は標高939mの医王山を頂点とする山々が連なり，石川県との県境をなしている。医王山から北の氷見山地へとつながる丘陵には幾つかの浸食谷があり，そこに源平合戦で知られる倶利伽羅峠や砂子坂峠など，古来から越中と加賀を結んできた交通の要所がある。梅原胡摩堂遺跡は福光町の平野北東部にあり，小矢部川の支流である山田川によって浸食された砂礫段丘と，より低位な河岸段丘上に立地している。

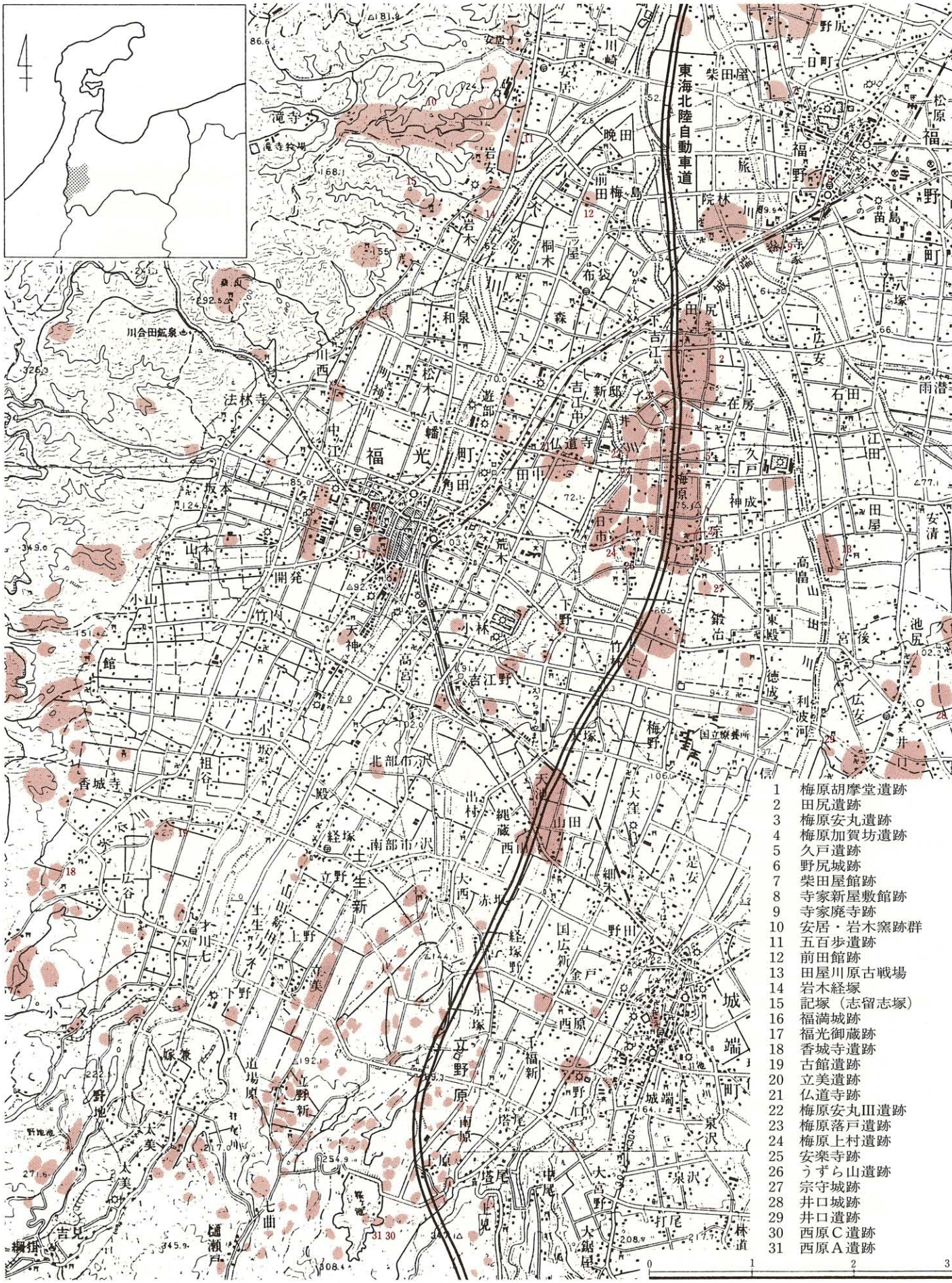
福光町の歴史の幕開けは，立野ヶ原台地に集中する旧石器時代の遺跡群にみることができる。西原C遺跡では立野ヶ原遺跡群中最古といわれるナイフ形石器文化期の石器が，立美遺跡では最終末期に近い尖頭器文化期に属する石器が出土した。

縄文時代には，生活基盤は台地上から平野部に面する丘陵面や段丘へと進出した。旧石器時代末あるいは縄文時代草創期の尖頭器が出土した西原A遺跡，縄文時代前期中葉～後葉の土器が多く出土したうずら山遺跡，後期初頭の気屋式土器が出土した安居五百歩遺跡等が知られる。

奈良時代には「越中国砺波郡」に属し，東大寺墾田地領として大規模な開発が行われたことが東大寺に残る墾田地図から明らかである。『続日本紀』には，地方豪族砺波臣志留志が東大寺へ米300碩を寄進したことによって天平19年（747）には外従五位下の位を授かり，神護景雲元年（767）には墾田100町を東大寺へ献じ外従五位上に昇任するとともに越中員外介に任ぜられたとある。またこのころ蟹谷丘陵の安居・岩木地区には大規模な須恵器窯が築かれ，泰澄大師開山と云われる医王山には天台宗惣海寺を中心に四十八ヶ寺が山裾に建立されたと伝えられる。『越中国官倉納穀交替記』によれば，平安時代前期には一帯は川上と呼ばれ，官倉が群立する穀倉地帯であったとされている。

鎌倉時代には，梅原胡摩堂遺跡周辺は三荘十郷からなる円宗寺領石黒荘のうちの山田郷に属し，地方豪族石黒氏の根拠地であった。付近には福満城，宗守城，野尻城等多くの城館跡がみられる。また安楽寺跡，仏道寺跡，梅原落戸遺跡，梅原上村遺跡等の寺社・集落跡も多く存在する。梅原地内に残る「胡摩堂」「加賀坊」「安楽寺」等の小字名や権現堂川は信仰に関わる地名と考えられる。「闘争記」によれば，文明13年（1481）に石黒氏率いる惣海寺衆徒と，井波町瑞泉寺に結集した一向一揆勢が，山田川の川原（田屋河原）で対戦し，一向一揆勢の圧勝に終わるとともに，惣海寺及びその周辺の天台宗寺院は焼失，石黒氏は滅亡したと伝えられる。その後石黒庄は石山本願寺領に帰した。

近世以降は，加賀藩の支配下で用水路の灌漑等開発はさらに進んだ。寛文11年には加賀藩の御蔵が福光町に設けられ，小矢部川，山田川，大井川には舟によって米を運ぶための船着場がつくられた。また宗守は高岡から城端へ至る巡見使道において交通の要所として栄えた。　　（越前慎子）



第２図　梅原胡摩堂遺跡周辺の主要遺跡位置図

第II章　遺　　物

1　遺物の概要

梅原胡摩堂遺跡から出土した遺物は，縄文時代から近代以降までおよぶ。中でも主体をなすのは中世から近世にかけての遺物で，当時の様々な生活用具が豊富に出土している。以下各時代ごとに概要と注目される遺物について簡単にまとめておく。

縄文時代　遺跡の北半部を中心に散発的に出土している。縄文土器は，Ａ３Ｓ地区から完形品に近いものが１点出土している他は，小破片が多い。時期は中期から晩期まであるが，後期後葉ないし晩期初頭の時期のものが目立つ。石器は打製石斧が多く，その他に磨製石斧や凹石・擦石・石皿などが出土している。

奈良・平安時代　やはり遺跡全体から須恵器・土師器が散発的に出土している。中でも特に，放射状暗文を施す土師器杯は県内では類例が少なく，また猿投窯産と考えられる特殊器形の緑釉陶器は初例の貴重なものである。

中世　本遺跡の主体をなす時代である。遺構・遺物量とも最も多く，種類も豊富である。土器類では，中世前期では中世土師器皿が多くを占め，珠洲や中国製磁器も相当量が出土している。これらのうちには平安時代末期にさかのぼるものもあるが，中世的土器様相への連続性からここで取り扱っておく。また瓷器系陶器では越前・八尾・常滑，施釉陶器では瀬戸美濃などがある。

中世後期では，全体的に遺物出土量が減少する傾向があるが，その中では珠洲，中国製磁器，瀬戸美濃などが比較的多く，中世土師器皿，土師質・瓦質土器，越前，八尾，信楽などが出土している。

中世土師器皿は，溝・土坑などから，完形品やそれに近いものがまとまって出土したものが多く，一括遺物として，今後の中世土器編年の基礎資料となりうるものである。中国製磁器はほとんど破片であるが，種類・点数とも豊富で，県内では他に例をみないほどである。特に白磁II類とされる碗・皿類は，県内では従来一遺跡数点程度の出土しか知られていなかったが，今回相当量出土したことは注目に値する。またＣ３地区の土坑からは，遺存状態の良好な瓦質火舎の優品が出土している。

中世の遺物では土器・陶磁器のほかに，鍬・下駄・曲物・漆器椀・漆器皿・杓子・箸などの木製品をはじめ，石臼・茶臼・石硯・石鍋・砥石などの石製品，各種の金属製品が出土している。

近世　遺跡全体に散在するほか，発掘区中央部の旧以速寺西側から南半部にかけて，ややまとまって出土する。江戸時代前期では伊万里・唐津など肥前陶磁器，瀬戸美濃，越中瀬戸などが中心である。この中では唐津系陶器に良好な資料が多く，胎土目・砂目積み期の椀・皿類，絵唐津の皿・鉢類，叩き目の残る壺・甕類など種類も豊富である。

江戸時代後期以降になると伊万里磁器を中心に唐津，九谷，信楽，瀬戸新製などが加わるようになる。伊万里磁器は日常雑器が中心で，各時期のものが出土している。近世－特に江戸時代後期以降－の陶磁器では生産地が未確認であるため，とりあえず磁器・陶器として一括して報告せざるをえないものが多くあり，これらの産地解明は今後の課題である。近世の金属製品では花瓶・和鏡・銅製の鉄漿皿などが出土しており，寺院跡との関連で注目される。

旧以速寺を巡る溝からは，明治時代以降の陶磁器類も相当量出土しているが，代表的なものを若干参考程度に取り上げておいた。　　（山本正敏）

2　出土遺物

A．縄文時代の土器・石器

縄文時代の遺物は，縄文土器や各種の石器が，調査地のほぼ全域から散発的に出土している。縄文時代の土坑が数基発見されているが，遺構から出土した遺物で図化できたものは少く，多くは包含層や中世以降の遺構から出土したものである。

1．縄文土器（第3・4図，図版1・2）

1は胴上部がわずかに外反する器形の深鉢形土器である。文様は，横位の無文帯の上下に刻目を入れるもので，中期前葉の新崎式[注1]である。2は渦巻状の半隆起線文を施す深鉢形土器で，基線となる渦巻状の貼付文の上に刻目を施す。中期中葉の上山田・天神山式[注2]に比定できる。

以上2点の他，図示した資料の大部分は，後期～晩期の土器と考えられる。3は浅鉢形の器形になる可能性が高い。口縁部には，無文帯と幅広の沈線が巡り，内面には隆帯がみられる。時期ははっきりしないが，後期中葉から後葉と考えておきたい。4は，波状口縁の深鉢形土器である。口縁部には3条の沈線が施され，頸部は無文帯となる。5は，口縁部がわずかに内湾する器形の，浅鉢形もしくは鉢形土器である。口縁部は，縦の沈線で区画した内部に，ゆるい弧線を組み合わせた沈線文様を施している。6・7は同一個体。頸部から口縁部にかけて直立する器形の浅鉢形土器である。口縁部に，幅広の沈線を3条巡らす。8は，胴部小破片で，2条の横位沈線間に細長い列点を施す。9・10は同一個体。胴上半部から外反する器形の深鉢形土器で，胴上部に，沈線が3条巡る。頸部及び胴部は無文となる。11・12も同一個体。胴上部に沈線が巡り，胴部は無文である。口縁部を欠くため明確なことはわからないが，鉢形もしくは壺形土器になる可能性がある。13は太い沈線間に長楕円の列点が施されるものである。

14～26は縄文が施文される土器である。14はA3S地区の中世の土坑のさらに下部の包含層から出土した，斜縄文の深鉢形土器。口縁部には右下がりの，口縁部直下からは縦方向の縄文が施される。胴部中位から口縁部にかけてはほぼ垂直に立ち上る器形で，口縁端部内面には指頭圧痕状の凹みが連続的に施される。また口縁部内面には擦痕状の調整痕が施されている。15は，粗い縄文が施文され，口縁端部内面には指頭圧痕状の凹みがみられる。16・18は口縁部が直立する器形で，口縁端部上面に縄文を施文するものである。20・21は，口縁部に表裏縄文が施される土器である。口縁部内面の上端から1～2㎝の幅で，外面と同一と思われる縄文原体で，斜縄文が施される。20の口縁端部にも縄文がみられる。

19は胴部で内側に若干屈折して，口縁部が直立もしくは外反しながら立ち上る器形になると思われるもので，頸部は無文帯となる。22～26は斜縄文のみられる胴部破片で，器形等詳細は不明である。27～32は条痕文土器である。27は平縁に作る口縁部に突起が付くもので，口縁部が若干外反する器形の深鉢形土器になると思われる。外面には磨消がなされるものの充分ではなく条痕が残る。28は胴上部に沈線が1条巡る。

33～35は無文土器である。33は浅鉢形土器で，頸部で屈折して口縁部がやや内湾して立ち上る器形になると思われる。外面は丁寧なミガキが施される。34は小波状口縁をもつ深鉢形土器である。36は土器底部に網代痕が残る例であるが，圧痕の残りがやや不明瞭で，編み方は確認できない。

以上述べた後・晩期縄文土器のうち時期や型式の判明するものは少い。従来の北陸の該期土器編年に当てはめれば，4は，後期後葉井口II式[注3]，5は後期末葉の八日市新保式[注4]，6・7は晩期中葉の

中屋式に比定できよう。

2．縄文時代の石器（第4～10図，図版3～5）

縄文時代の石器は剝片類を除いて総計125点出土している。内訳は，石匙2点，打製石斧89点，磨製石斧22点，石錘2点，石皿3点，擦石2点，凹石5点である。これ以外に鉄石英の剝片・石核類が数十点ある。石器類は，縄文土器に比べ，量的には目立つが，包含層・表土等からの単独出土が多く，共伴土器がないため，時期の確認できるものはほとんどない。以下器種ごとに述べる。

石匙（第4図37・38）

37は，鉄石英の縦長剝片を素材とする。背面（左図）には節理面が大きく残る。刃部（図下側）や，つまみ部の調整加工は粗いもので，刃部反対側（図上側）は素材作出時の鋭い縁辺をそのまま残し，未加工である。38も鉄石英の縦長剝片を用いる。背面側の刃部及び先端部には整形加工が施されるが，主剝離面側は未加工のままである。つまみ部の加工も明瞭でない。以上2点の石匙は，加工状況から製作途中の未成品と考えられる。

打製石斧（第5図39～第8図78）

縄文時代石器の中では出土点数が最も多い。伝統的な分類法である短冊型（Ⅰ類），撥型（II類），分銅型（III類）に分け，これ以外をその他（IV類）とした。39～49はⅠ類である。両側縁がほぼ平行な短冊型を呈するものである。39・43には，磨滅痕・擦痕が残る。II類はさらに両側縁の形状からIIA類（50～59），IIB類（60～66），IIC類（67～73）に細分する。IIA類は，側縁がほぼ直線的に広がるものである。50・55には両面に研磨痕あるいは摩滅痕が顕著に残る。IIB類は，両側縁がゆるやかに内湾し，刃部が広がる形態のものである。IIC類は，側縁の内湾が強く，くびれ部の作出が明瞭なものである。73は両面に自然礫面がみられるもので，楕円形小円礫をそのまま素材として成形加工を施す希有な例である。III類は，側縁中央付近でくびれ部をもち，基部と刃部の大きさが余り変わらない。いわゆる分銅型である。出土量は少い。その他IV類としたが，76・77は両側縁を外湾させ，楕円形に近い形態にするもの。78は，磨製石斧の欠損品を転用したもので，両側縁に2か所のくびれ部（着柄部）を作出したものである。

基本的な打製石斧の製作工程は，①大型偏平円礫から，背面に礫面の残る楕円形横長剝片を剝離する。②この大型剝片を素材とし，打点側及び先端側を中心に整形剝離を加えて大まかな打製石斧の形態を作り出す。③着柄部のくびれ部等の側縁部や刃部にさらに細かな剝離や敲打を加えて完成する。このため，大部分の打製石斧の片面には自然の礫面が残り，反対面には，横方向からの剝離痕跡を示す，リングやフィッシャー，平坦なバルブなどがみられる。

打製石斧それ自体を時期比定するのは現状では困難であるが，磨製石斧の転用品と考えられる78のように，側縁に2か所のくびれ部を持つ例は，後期初頭の福野町安居五百歩遺跡に例があり[注5]，この資料についてはその前後に位置づけられるかもしれない。

磨製石斧（第9図79～88）

磨製石斧は使用される石材から二分される。出土22点中，蛇紋岩系の石材を用いるものは17点を占める。富山県東部地域で製作され，完成品として運ばれてきたものである。残りは，砂岩・凝灰岩の石材を用いるもので，常願寺川流域の遺跡で製作跡が数カ所確認されている。図示したものでは，87が砂岩系である他は全部蛇紋岩系である。完形品が少く，また，刃部再加工による斧身長の縮小化のみられるものもあるため，大きさによる分類は，不明確な部分もあるが，斧身幅が25～31㎜の小型品，44～63㎜の中型品，67～73㎜の大型品の3類に分類することができよう[注6]。

72は大型の定角式磨製石斧である。胴部中央から折れて刃部側を欠損する。81は，ほぼ完形品であるが刃部の細かな欠損を研磨により，再生をはかっている。83もおそらく，欠損品の再加工品と考えられる。全長に対して細身の作りとなっており，両側面には整形のための敲打と粗い研磨が施されている。86は，部分的に自然の礫面を残す。敲打・整形剝離痕も部分的になされるのみで，刃部を中心に研磨による整形が中心である。素材円礫の形状をあまり変えず，製作技法も稚拙なことから，原石を入手し，当地で加工したものである可能性が強い。磨製石斧自体の時期については，明確でないが，79・80・81・83・84などのように，側面が明瞭で，かつ断面形が長方形，平面形が短冊型に近いものは，中期前葉～中葉に多くみられるタイプである。87・88のように，断面形が丸みを帯びて三味線胴型になるものや，基部が尖り，側縁が二等辺三角形状になるものは，中期後葉以降，後・晩期に多くみられる。

石錘（第9図89）

89は偏平な円礫を素材とする打ち欠きの石錘である。上下両端に小剝離と敲打による糸掛けの作出がみられる。

石皿（第10図90）

90は砂岩製の石皿である。偏平な大型円礫の中央部が浅く凹む。片面のみ使用されている。

擦石（第10図92・93）

石皿とセットで使用される擦石であるが，形態の異なるものが2点出土している。92は，偏平円礫の二側縁に擦面がみられるものである。94は硬砂岩製で，偏平円礫の平坦面に，擦痕と磨滅痕が顕著に残る。

凹石（第10図91・94・95）

91は偏平な砂岩円礫の片面に大きな凹みを持つものである。94・95は，両面に凹みを持つ。94の縁辺部全周にわたって敲打痕と磨滅があり，敲打具あるいは擦石としての機能も合せもつものである。

（山本正敏）

注1　小島俊彰　1974　「北陸における縄文中期の土器編年」『大境』第7号　富山考古学会

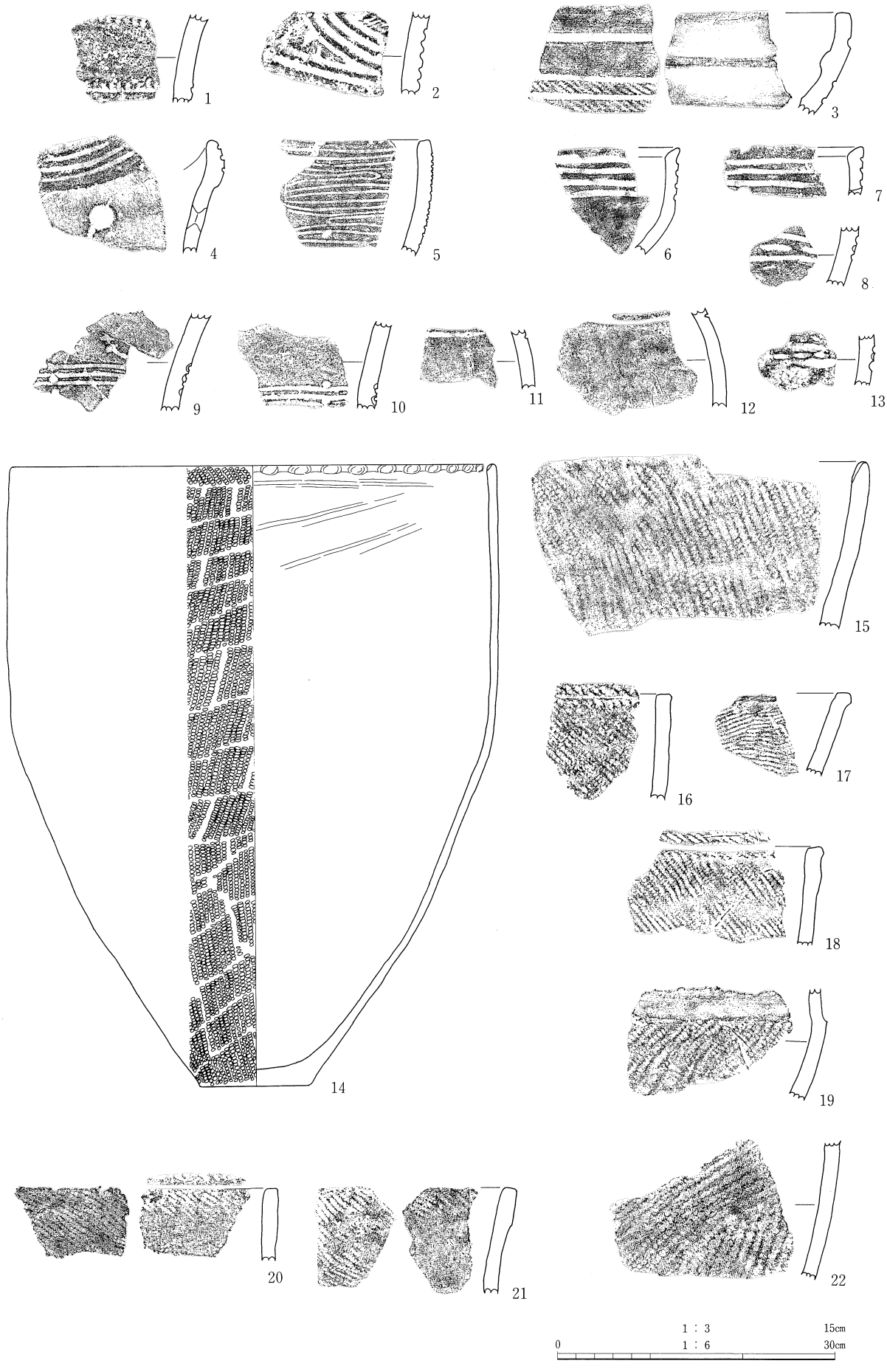
注2　小島俊彰　1974　前掲。

注3　小島俊彰　1966　「東砺波郡井口遺跡出土遺物の紹介」『大境』第2号　富山考古学会，小島俊彰　1988　「井口式土器様式」『縄文文化の研究』第4巻　雄山閣出版

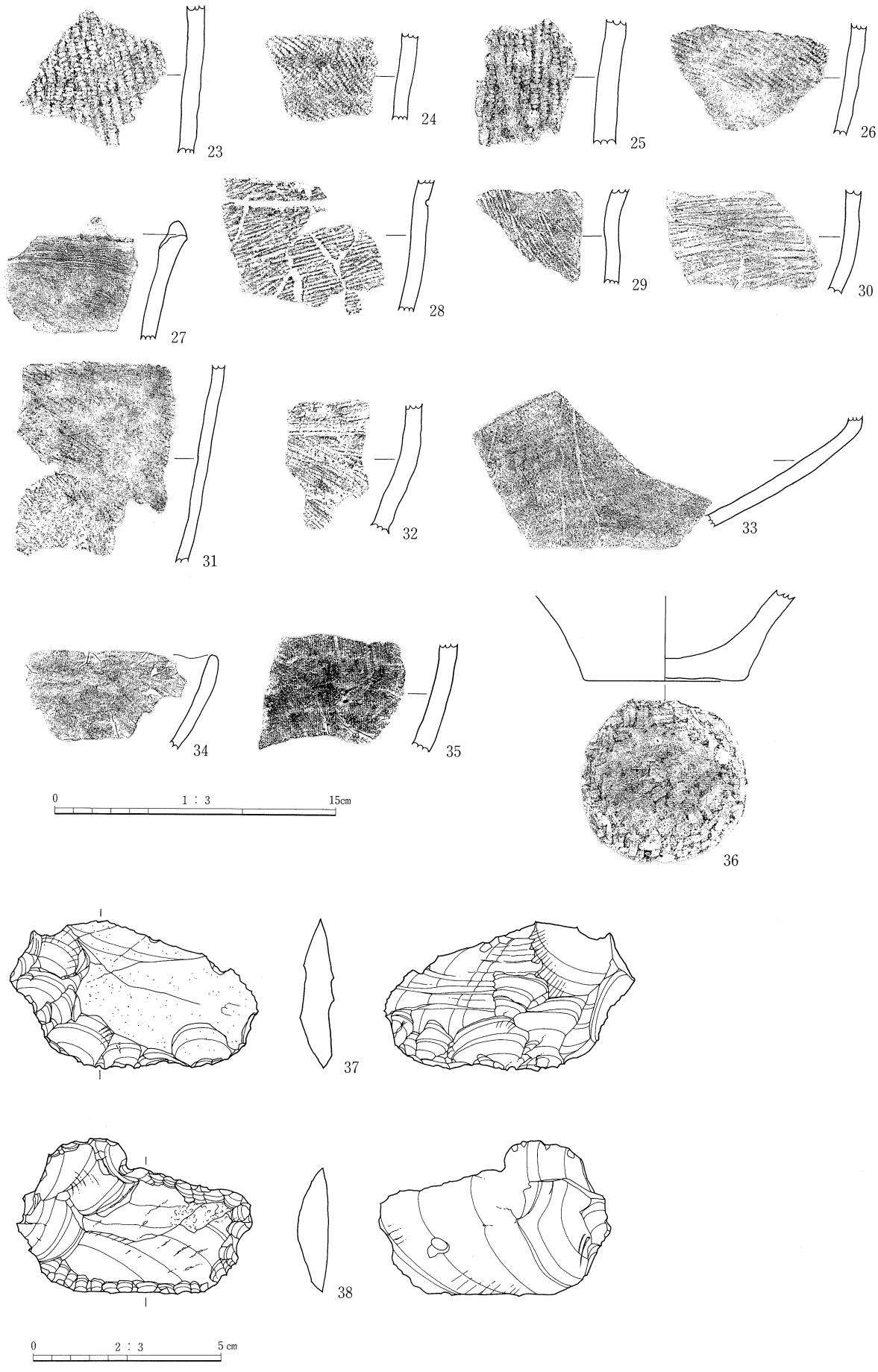
注4　高堀勝喜編　1983　『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会

注5　山本正敏・林浩明　1990　『安居五百歩遺跡Ⅰ』福野町教育委員会

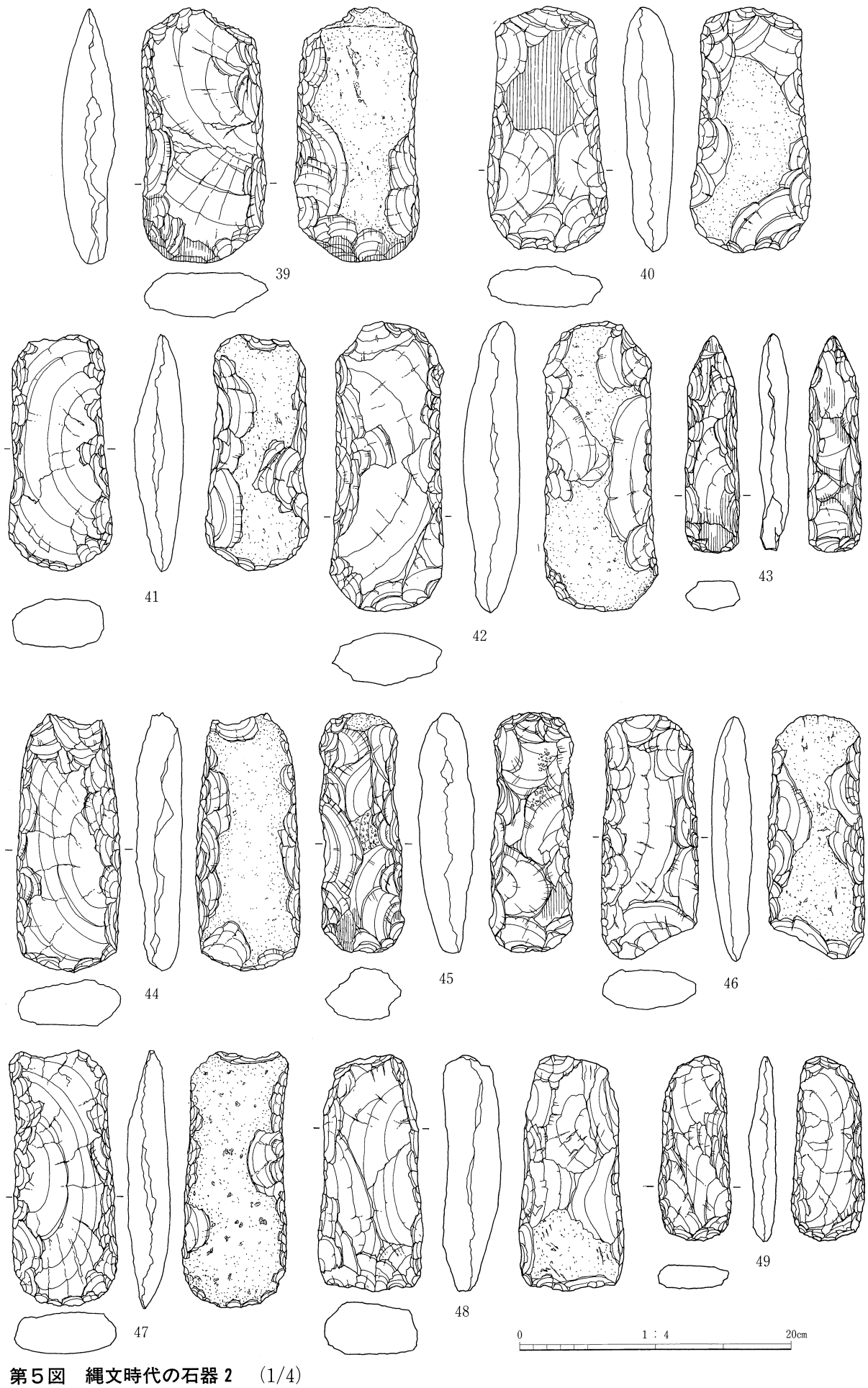
注6　蛇紋岩系磨製石斧の製作遺跡である富山県朝日町境A遺跡では，完成品の大きさから長さ119～162㎜・幅46～68㎜の第1類，長さ84～115㎜・幅38～62㎜の第2類，長さ49～78㎜・幅20～36㎜の第3類，長さ23～47㎜・幅7～25㎜の第4類，の4類に分類している。梅原胡摩堂遺跡の大型品はこのうちの第1類に，中型品は第2類に，小型品は第3類に対比できる。



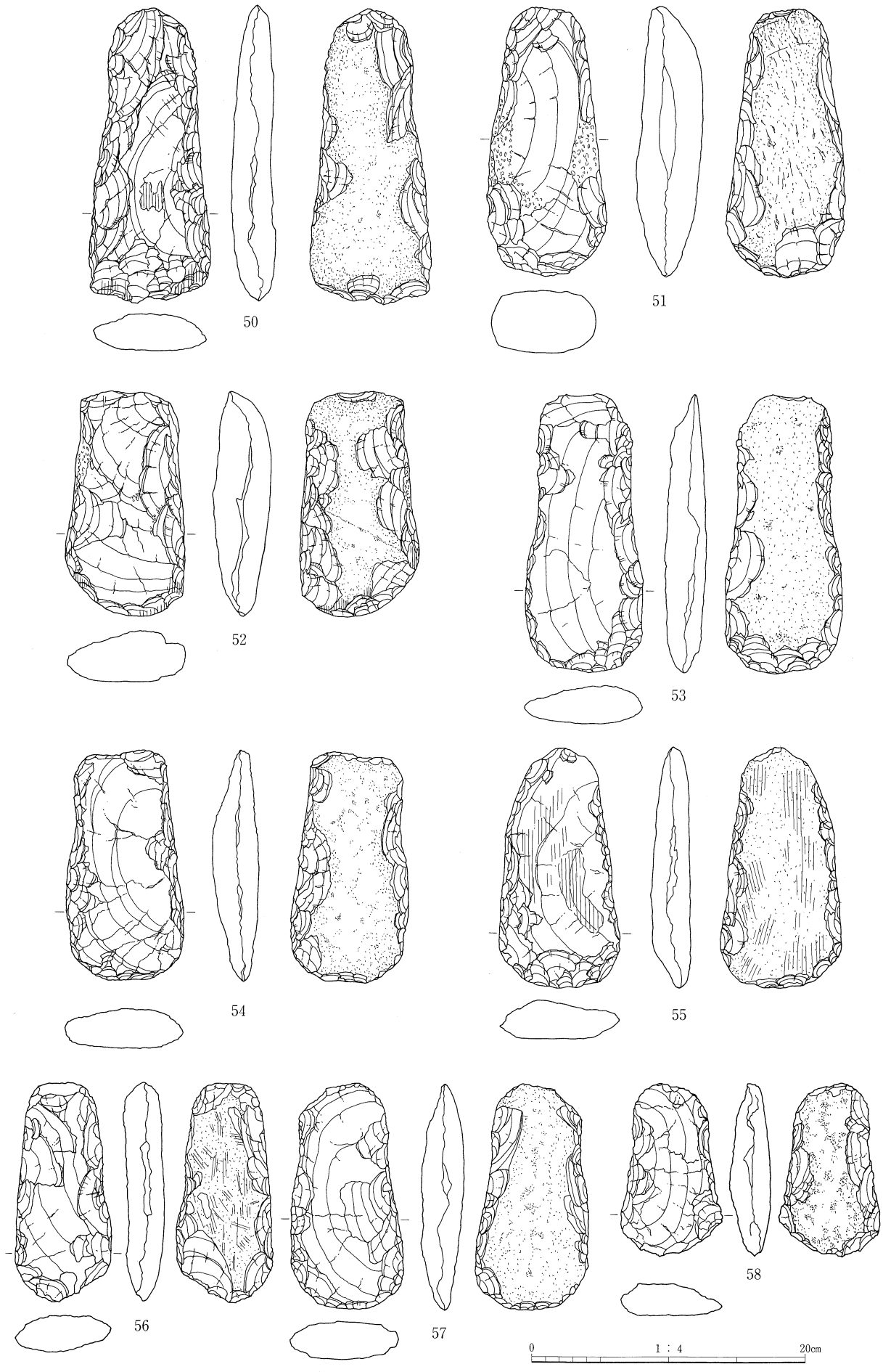
第３図　縄文土器１　(1～13・15～22　1/3, 14　1/6)



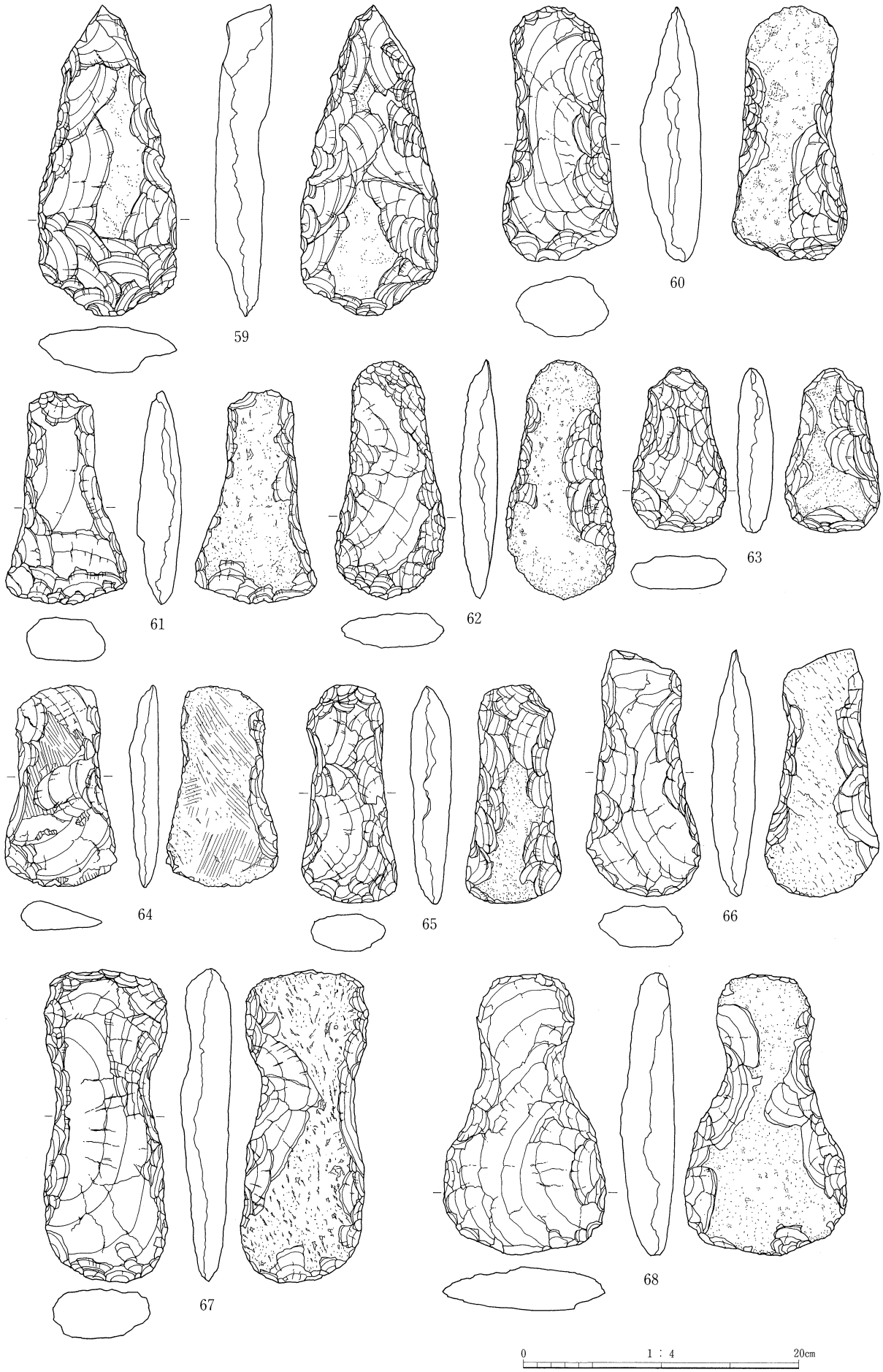
第４図　縄文土器２・石器１　(23～36　1/3，37・38　2/3)



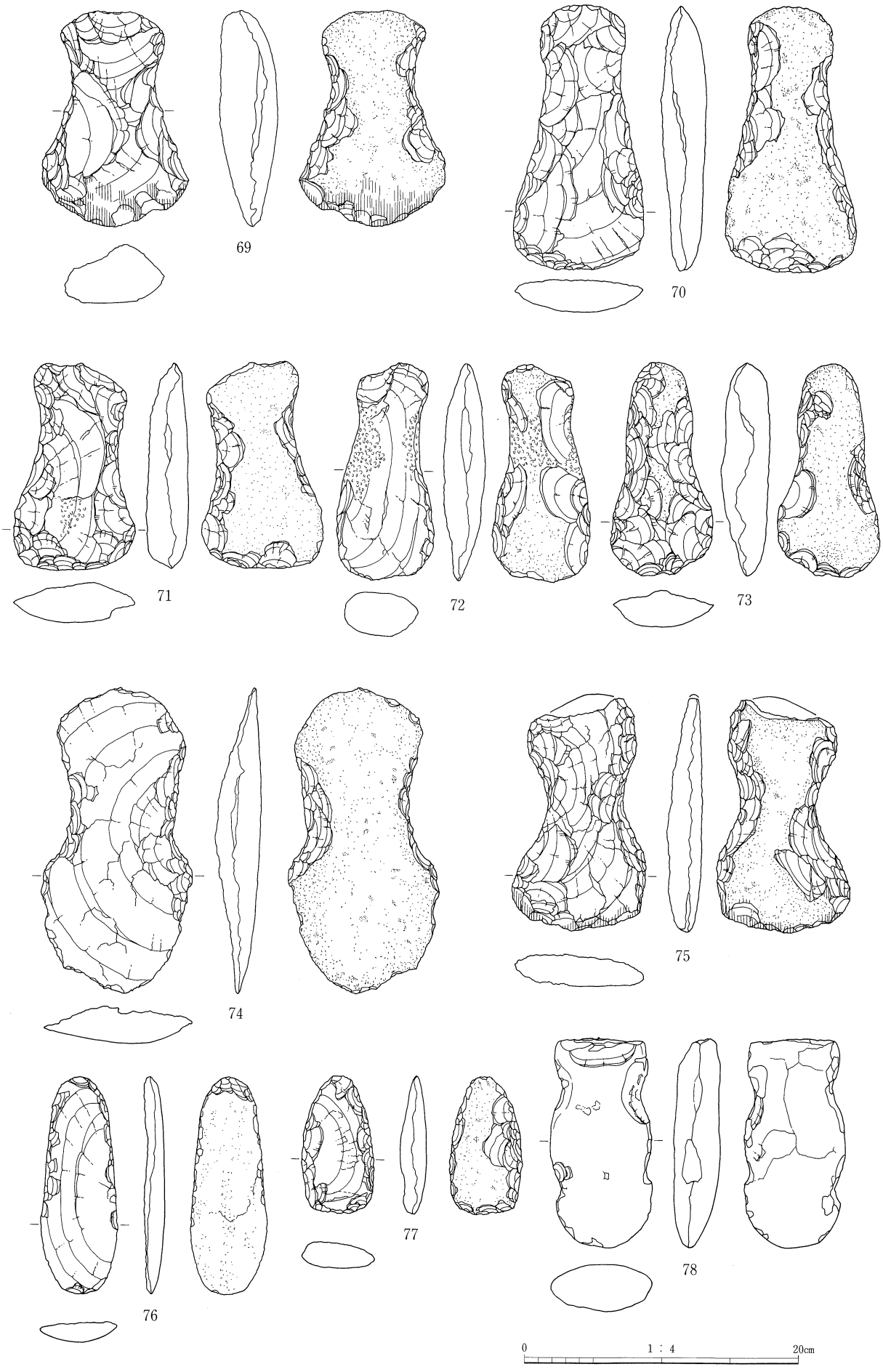
第５図　縄文時代の石器２　(1/4)



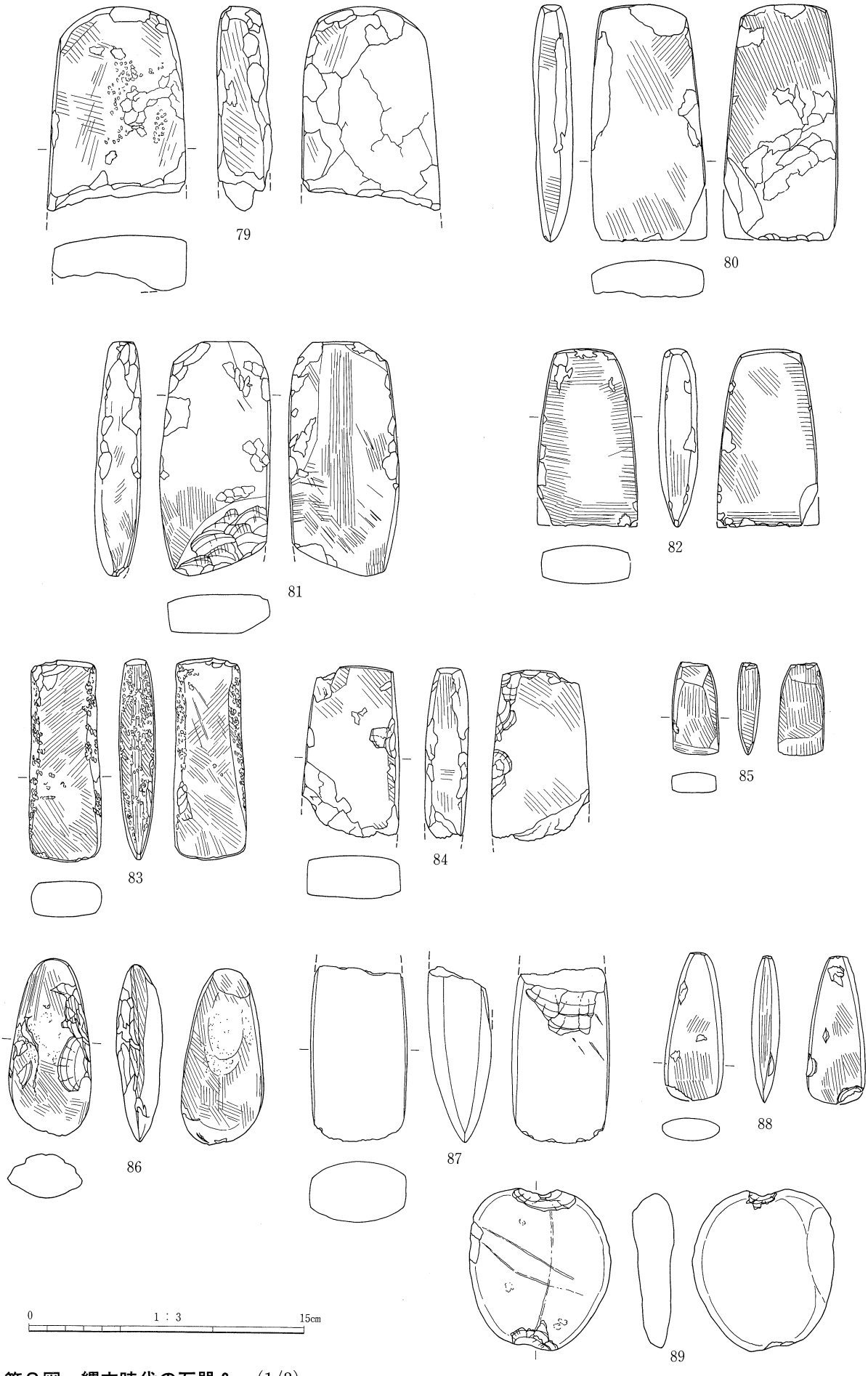
第６図　縄文時代の石器 3　(1/4)



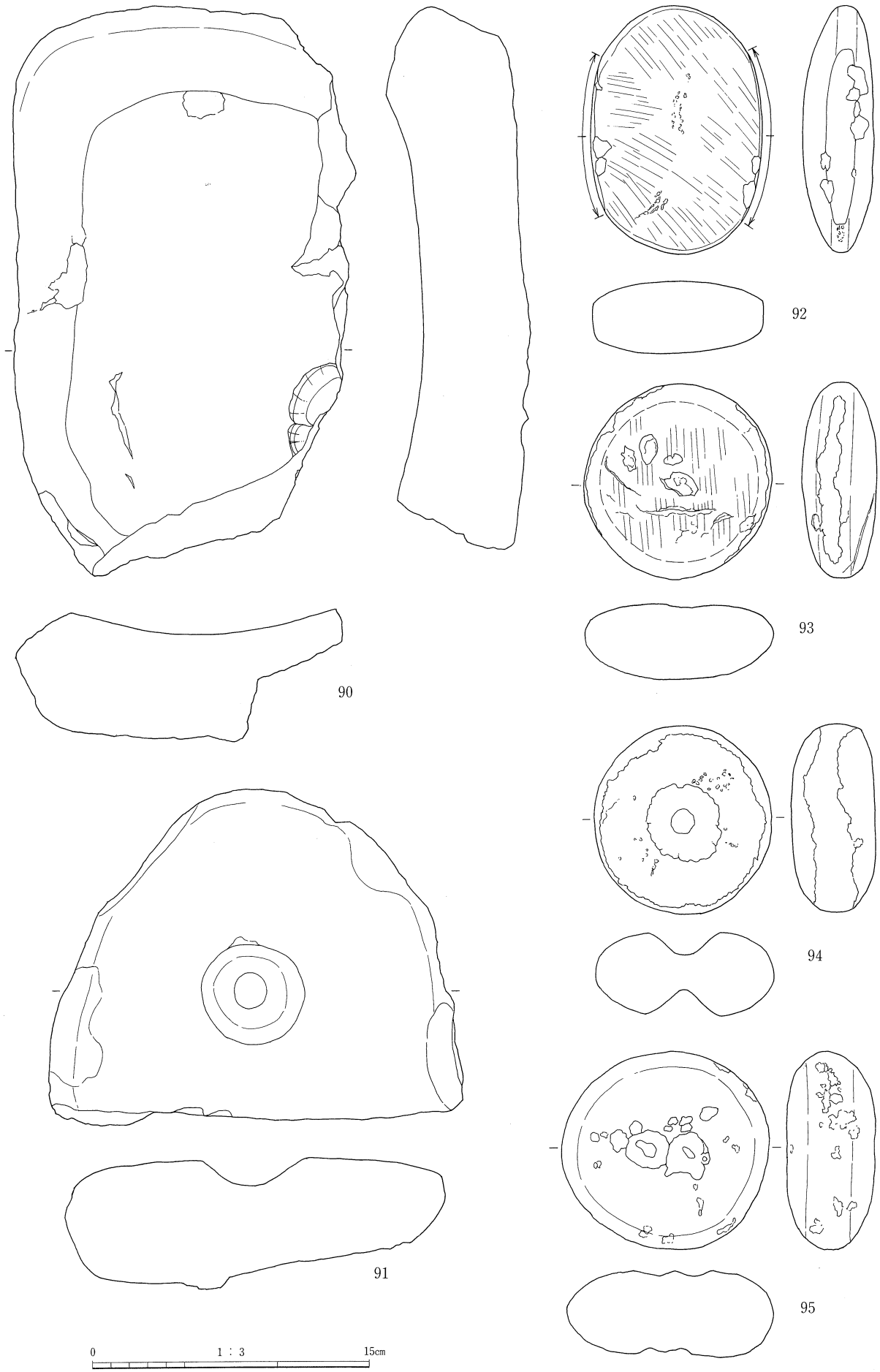
第７図　縄文時代の石器 4　(1/4)



第８図　縄文時代の石器５　(1/4)



第９図　縄文時代の石器 6　(1/3)



第10図　縄文時代の石器 7　(1/3)

B．奈良・平安時代の土器

1．須　恵　器（第11図，図版6・7）

1～4は無台杯である。底部切り離しは全て回転篦切りによる。1・3は胎土中に角閃石を多く含む点で他の製品と異質である。焼成は還元軟質である。2の口縁端部は外反気味に引き出されている。4は体部がやや外方へ開く。1～3は8世紀中頃，4は9世紀前半に比定される。

5は無台皿である。回転篦切りである。内面には，体部と底部の境に沈線状の窪みがある。焼成は還元軟質で，焼きムラがある。9世紀後半～10世紀前半に比定される。

6～8は有台杯である。6・7は，高台が外側へ踏ん張る形態であるが，8は高台を貼りつけた後，外側から強く撫でているため，高台は内方へ押され，体部との境には鋭い稜線が残る。

9～13は杯蓋である。9・10は，端部が下方へ引き出され，断面三角形を呈する。頂部に回転篦削りが施されている。11はやや小振りで頂部に明確な稜をもつ。端部の断面は角ばる。全面に回転撫でが施されている。12・13は端部が丸みをもち，内側へ小さく折りたたまれる。

14は，器壁が薄く，ロクロ目から椀形に開く形態であることが分かるが器種は不明である。

15～22は壺である。15は小壺である。肩部に稜をもつ。16は短頸壺である。胎土中に角閃石を含み，回転撫でによってできる撫で痕が粗雑な点が1・3と近似するため同一窯の製品の可能性が高い。17・18は広口壺の口縁部である。17は，口縁部を横方向につまみ出しているが，18は，縦方向に面をとる。19は頸部が短く，口縁端部は外方に面をとり鋭く尖らせている。小破片のため，口径は不明確である。20～21は有台の壺底部である。21脚部は器壁が薄く，高さがあり，深く折り返されている。22は，高台が欠損し，貼り付け痕のみ残る。内外面を回転撫で調整し，外面の体部下半には回転篦削りを施す。小振りな底径の割に器壁は厚く，焼き締めはややあまい。

23～25は甕である。23は口縁帯をもち，口縁帯直下に8条の波状文，同じ原体による約8㎜単位の装飾文様とそれらを区画する沈線がある。24・25は外面に平行叩き，内面に同心円当て具痕がある。

26～28は双耳瓶である。28は右回りの回転糸切りにより切り離されている。底面より約5㎜上に沈線が一周しているが，これが底部を円板状に作った後体部を貼り合わせた痕跡かどうかは明瞭でない。

2．土　師　器（第12図，図版6・7）

29・30・33・34・36は長胴甕である。焼成は29が酸化軟質，他は還元軟質である。29は外面は撫で，内面は口縁部から横方向の刷毛目がみられる。30は，頸部は横撫で，体部は外面に縦方向の刷毛目，内面に横方向の刷毛目が残る。33は頸部下から内外面に縦方向の刷毛目がある。34は内外面に縦・横方向の刷毛目がある。36はロクロ撫でで，外面頸部より若干下がった位置から縦方向の刷毛目がある。

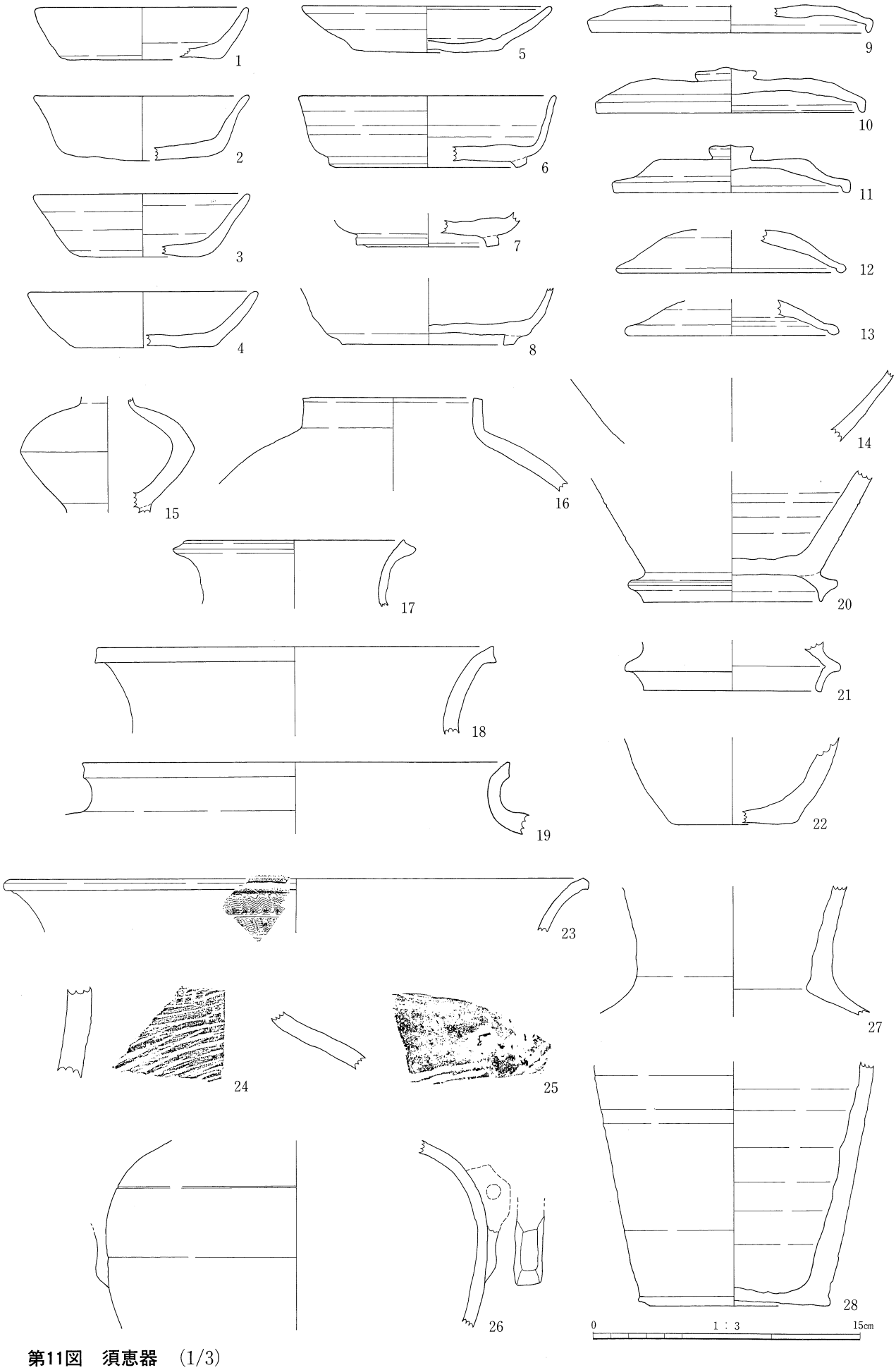
31・32・35は鍋である。31・32は非ロクロで，外面に縦方向の刷毛目，内面に横方向の刷毛目がある。頸部は内面に鋭い稜をつくって屈曲する。35はロクロ成形で，口縁端部は上方へ折れる。

37は椀である。右回転糸切り痕を残す。焼成は酸化軟質である。38はロクロ成形の内黒椀である。

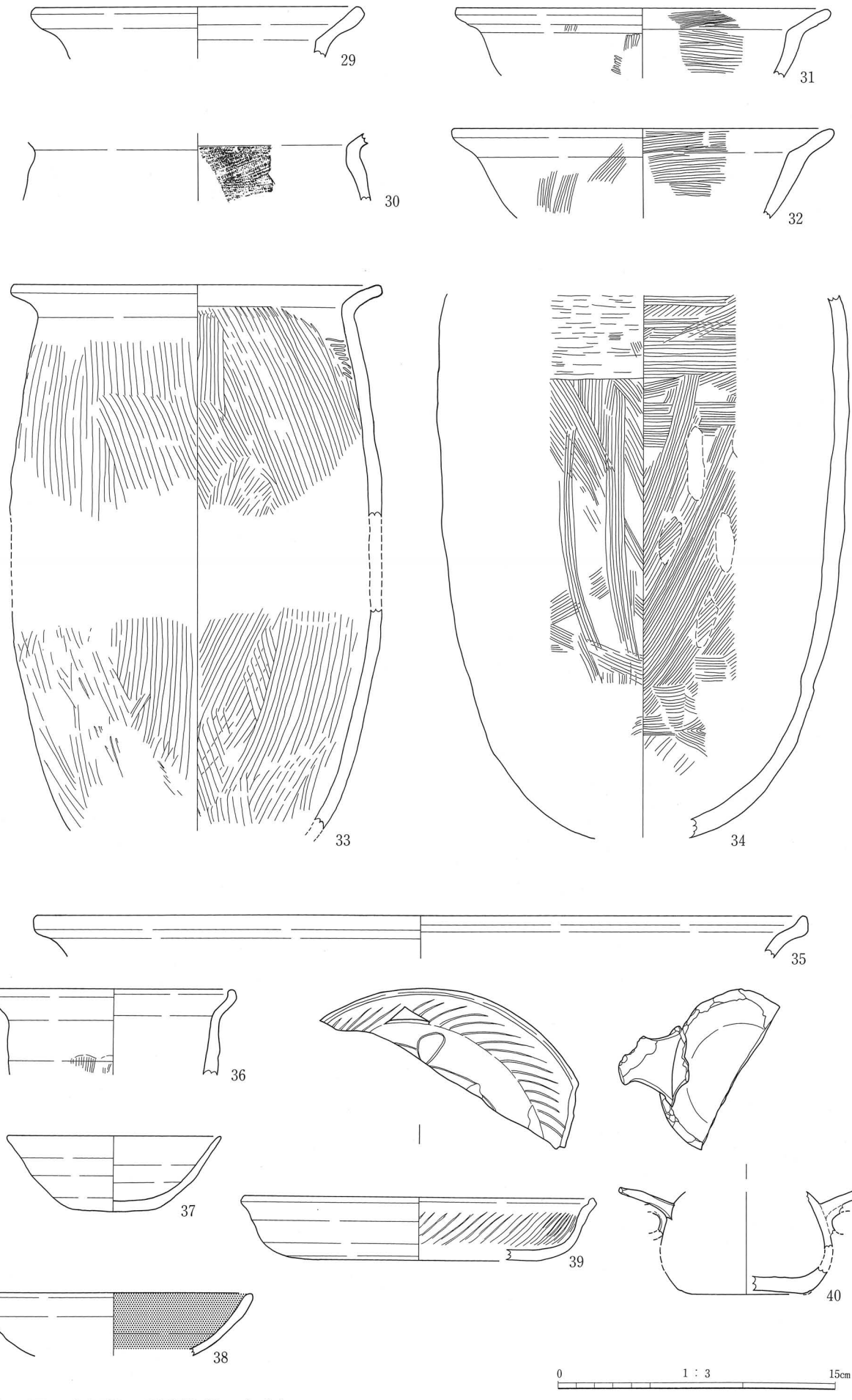
39は杯である。内面底部に粗略化したラセン暗文，体部に一段放射暗文を施す。ロクロ成形で，底部外面に不定方向の篦削りを行う。焼成は酸化硬質である。8世紀第2四半期に比定される。

3．緑 釉 陶 器（第12図，図版7）

40は東濃系の緑釉陶器である。全面に緑釉がかかる。内外面を撫で，体部外面の下部を篦削りする。底外面は篦削りし，糸切り痕を消している。把手は撥形に型どられ，上面に鎬状の稜があり，縁端は面取りされている。下にはこれを支える粘土紐が貼りつけられているが欠損しており，リング状に復元される可能性がある。9世紀後半に比定される。（越前慎子）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
1：3
15cm

第11図　須恵器　(1/3)



第12図　土師器・緑釉陶器　(1/3)

C．中近世の土器・陶磁器

1．中世土師器

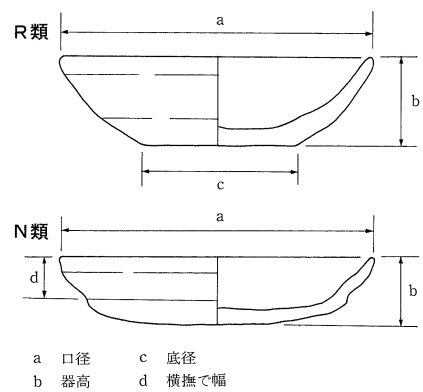
梅原胡摩堂遺跡では多様な形態の中世土師器が出土した。資料数が多く個別に記述すると煩雑になるため，はじめに製作手法及び形態によって分類を行い，分類ごとに法量，調整，色調，胎土について分析した結果を述べる。分析の対象としては良好な資料約2200点を任意に抽出した（実測図を掲載していないものも含む）。なお個別の観察結果と出土遺構については観察表を参照されたい。

(1) 分析の方法

① 法量（第13図）

法量は，口径・器高・底径・横撫で幅の計測を行った。ただし，底径については，非ロクロ成形の場合体部から底部への変換点が曖昧なため，底部糸切りのものに限り糸切り部分の径を計測した。また，横撫で幅は非ロクロ成形皿に限り外面の横撫で調整の幅を計測したものである。実測図においては横撫で調整部分と無調整部分の境を実線で示した(実線が2本ある場合は，口縁部の面取り等の稜が強いことを示す)。

なお，法量及び径高指数(器高／口径×100)は口縁部または底部の残存率が25%以上あるものに限りグラフ化を行った。



第13図　中世土師器皿計測部位

② 個体数

個体数の計算（調整方法の比率等）には，個体識別法を用いる。従って破片数，口縁部残存率等に関わらず，同一個体を１個体と数える。

③ 色調

色調は厳密に判定しようとすれば一個体の中でも微妙な色調差がある。そのため対象資料の内外面の最も大きな表面積を占める色を挙げた。判定基準は「新版　標準土色帳」を用い，蛍光灯の下で肉眼対比を行った。色調は，この表示方法に基づき色の三属性（色相／明度／彩度）及び色の和名で表す。ただし煩雑さを避けるため文中では和名のみ記述し，三属性については遺物観察表に記載した。

④ 胎土

胎土は肉眼で観察できる範囲で，特徴のある含有物を表記した。ルーペで観察した結果との対照表を以下に揚げる。なおルーペ観察は後藤道治氏に依頼しご教示を得た。

表　記	色　調	形　状	ルーペによる観察
角閃石	黒色不透明	長柱状	角閃石もしくは輝石の結晶
石英	半透明	粒状	肉眼による細分は難しいが石英である場合が多い
骨針	白色不透明	針状もしくは板状	従来海綿骨針といわれているが，ルーペ観察では表面が滑らかで鉱物の結晶であると思われる
赤色酸化粒	赤色不透明	不定形	酸化鉄か

第２表　中世土師器胎土含有物

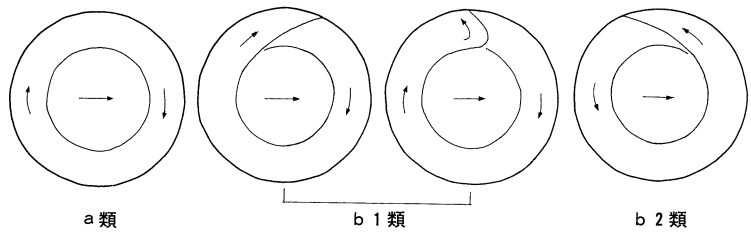
⑤ 製作技法

横撫での方法（第14図）　非ロクロ成形皿の横撫での方法について以下の分類を行った。

a類　外へ撫で抜かない。

b１類　右回りに外へ撫で抜く。

b２類　左回りに外へ撫で抜く。



第14図　横撫での方法（模式図）

内面調整

a１類　見込みを一方向に撫でた後，口縁部を横撫でする。

a２類　口縁部を横撫でした後，見込みを一方向に撫でる。

a３類　口縁部を横撫でし，見込みは無調整。

a４類　縦方向に細かく撫で，口縁部と見込みの端を帯状に横撫でする。見込みは一方向に撫でる。

b　類　見込みを刷毛状（の痕跡を残す）工具で不定方向に撫でた後，口縁部を横撫でする。

c　類　口縁部を横撫でし，刷毛状工具の端を螺旋状に当てて押さえる。見込みは横撫での前に一方向に撫でるか，b類が併用される場合が多い。

d　類　口縁部を横撫でし，刷毛状工具の端を放射状に当て，中心を基点として引きずる。

e１類　全面ロクロ撫で。

e２類　ロクロ撫で後，見込みを一方向に撫でる。

上記のb～d類の「刷毛状工具」の原体がどのようなものかは不明である。器面に１～２㎜間隔の筋を残すもので，湾曲した部分にも使用されており柔軟性があるものと考えられる。c類は，薄い工具の端を内面の横撫で部分に斜位に連続して押し当てたもので，b・d類のような筋は残らないが，b類と併用される場合が多いことから同様の工具を使用して器面調整した後撫で消したものと考えられる。

底部外面調整

a　類　回転糸切り（ロクロ回転を利用しているが回転方向は不明）。

a１類　右回転糸切り。

a２類　左回転糸切り。

b１類　糸切りを撫で消す。

b２類　糸切りを篦状の工具で消す。

c　類　無調整。成形時の指頭圧痕等はあるが，器面に気泡や粘土粒の付着があり，平滑でない。

d　類　無調整で板状圧痕がある。焼成前に板または簀の子状のものの上に置いたときの圧痕と考えられる。中には圧痕部分だけが著しく窪むものがあり，単に置いたというより，平底に仕上げるために板状のもので連続的に押さえたか棒状のものを転がしたのではないかと思われるものもある。（底部が多く残存する場合のみ確認できるので実際はデータの数値以上あると考えられる。なお，無調整以外で板状圧痕がある場合は併記した。）

e　類　不定方向に撫でる。器面の凹凸をなくすほどではないが，軽く撫でて平滑に仕上げる。

f　類　刷毛状工具で撫でる？板状圧痕に似るが，筋の間隔が均等で，浅い。

g　類　体部下半を不定方向に篦削りし，底部の角を削ぎ落として丸底に仕上げる。

(2) 皿

皿はロクロ成形（R類）のものと非ロクロ成形（N類）のものに大分され，さらに形態や調整の方法等により細分が可能である。以下，分類ごとにまとめて記述し，各々の特徴についてはその中でふれていきたい。また挿図は分類ごとにまとめ，原則として出土した遺構の番号の昇順に掲載した。

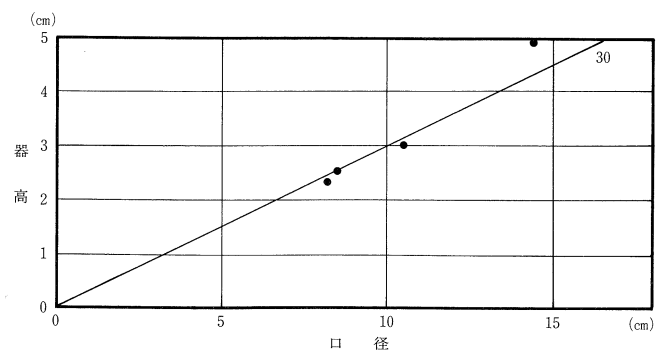
① ロクロ成形皿

ＲＡ類（第15・17図１～16，図版８）

柱状高台をもつ皿で，法量を計測できるものは少ないが，大・小の２規格に分かれる。口径は大型のもので約14cm，小型のもので約8～10cmを測る。径高指数の平均値は30である。高台の周辺の調整が丁寧で，高台を作り出そうとする意志が明らかなもの（Ｉ類，１～13）と，高台周辺の調整は特に無く，糸切りの筋が高台半ばに付けられるなど，底部の切り離しが粗雑なもの（II類，14～16）がある。

Ｉ類は，高台がほぼ垂直かあるいは裾で若干広がり，体部は残りのよい１と６について見ればやや内湾気味に開き，口縁部を上方に向かってかるくつまむ形態である。調整は全体的に丁寧で，体部はロクロ目を残さず器壁の厚みを均一に仕上げている。底部の切り離しは右回転の糸切りで，板状圧痕が付くもの（12）もある。１の底外面は，細かい糸目は消えて砂粒が弧を描いて左から右へ動いた跡が残っており，糸切りが撫で消されたものと思われる。胎土は比較的緻密なものが多いが，５㎜前後の小石を含むもの（12），骨針が含まれるもの（13），角閃石が含まれるもの（15）もある。色調はにぶい黄橙色を呈するものが多い。また器表面あるいは断面が部分的に煤けたように黒く変色しているもの（以下「黒変」とする。焼成時に変色するものと思われる）が多い。

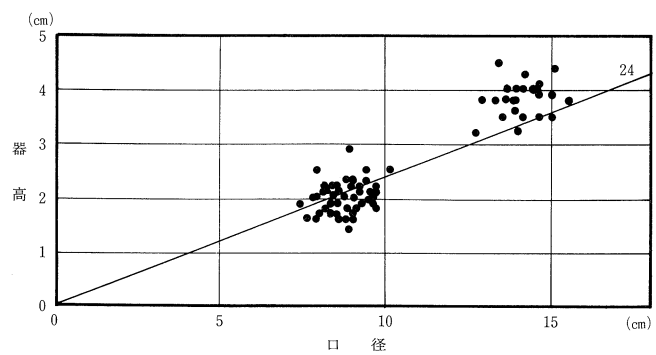
ＲＡII類は，高台がＲＡＩ類に比べて低く，作りだしも曖昧である。ＲＡＩ類の高台が低くなったものかあるいはＲＢ類の高台切り離しがやや低い位置で行われたとも考えられる。調整は粗く，ロクロ目が残る。底部の切り離しは，右回転の糸切りで，14は押し引いたような深い板状圧痕が残る。胎土は，石英と白色の粗粒を多く含むもの（14），角閃石･石英を含むもの(15)，比較的緻密で赤色酸化粒を含むもの（16）がある。色調はにぶい黄橙色を呈し14には黒変がみられる。



第15図　中世土師器法量表（ＲＡ類）

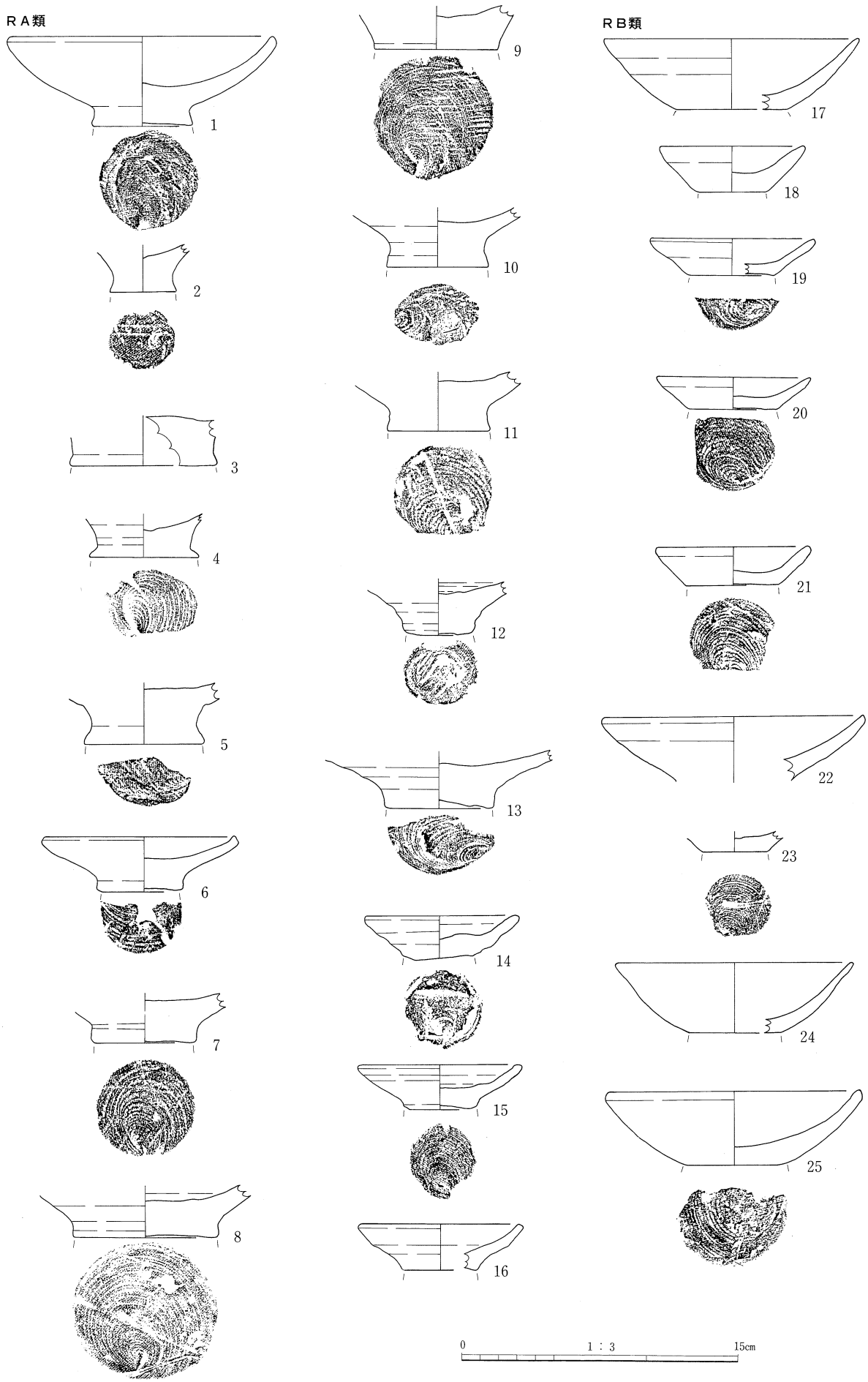
ＲＢ類（第16・17～20・27図17～120，図版８）

体部は直線的または内湾気味に開き，端部は丸くおさめるものと，外方に面を取るものがある。法量は，大・小の２グループに分かれ，大型のものは口径約13～15cm，器高約３～4.5cm，小型のものは口径約８～10cm，器高約1.2～2.5cmを測る。径高指数の平均値は24であるが，大型は平均値より高い位置に集中し椀形態に近く，小型は低く皿形態を呈する。

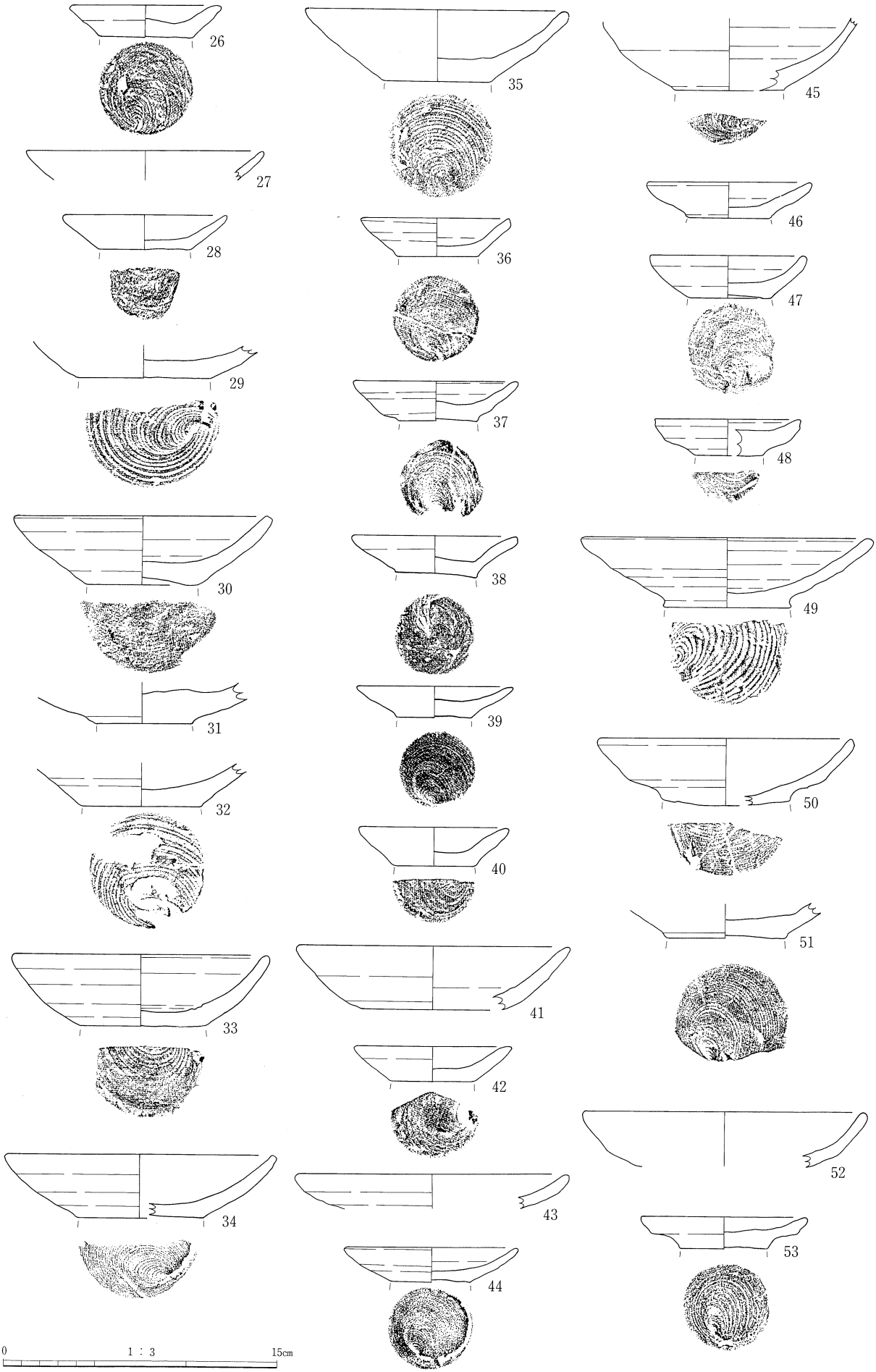


第16図　中世土師器法量表（ＲＢ類）

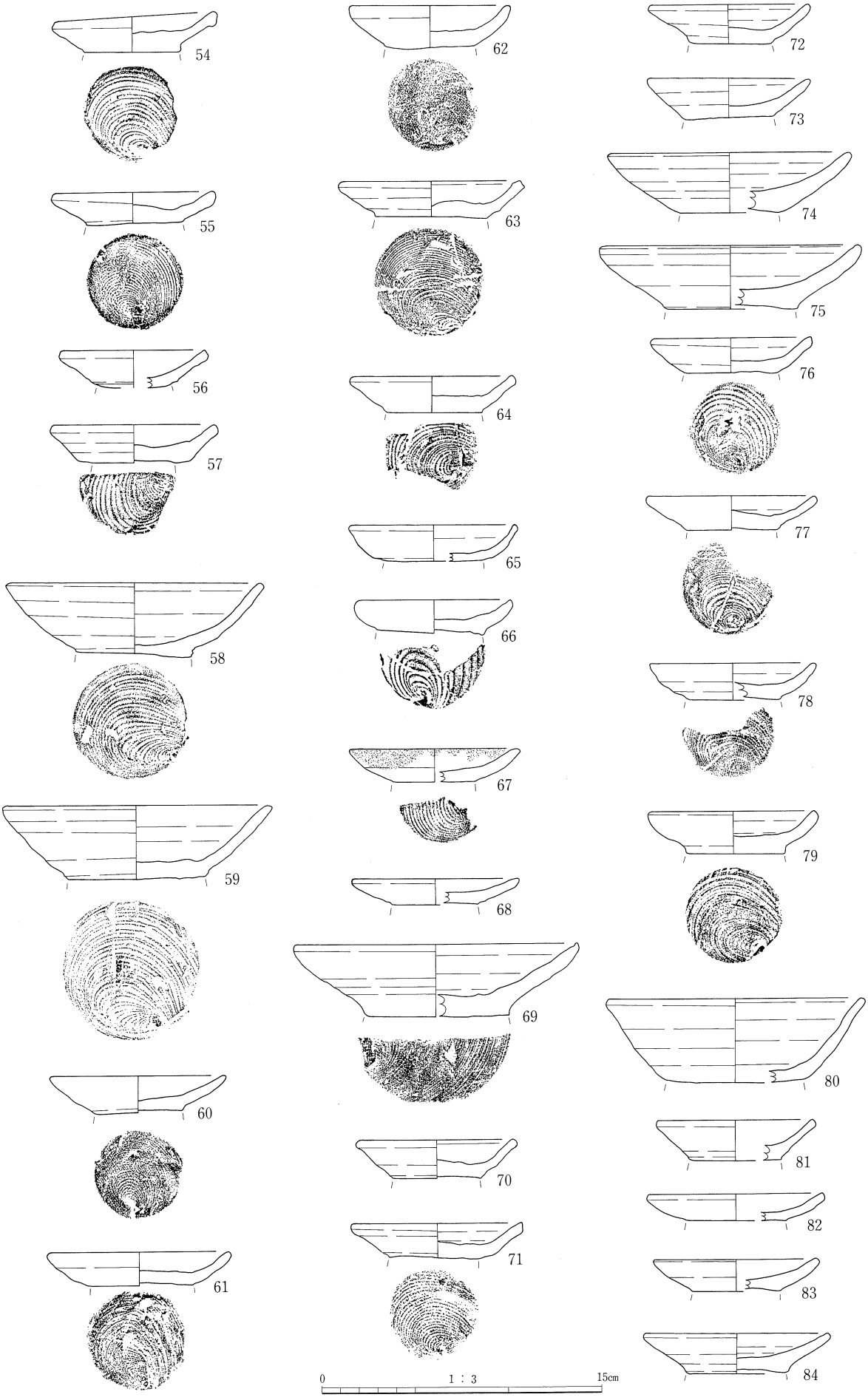
調整は体部外面及び内面全面をロクロ



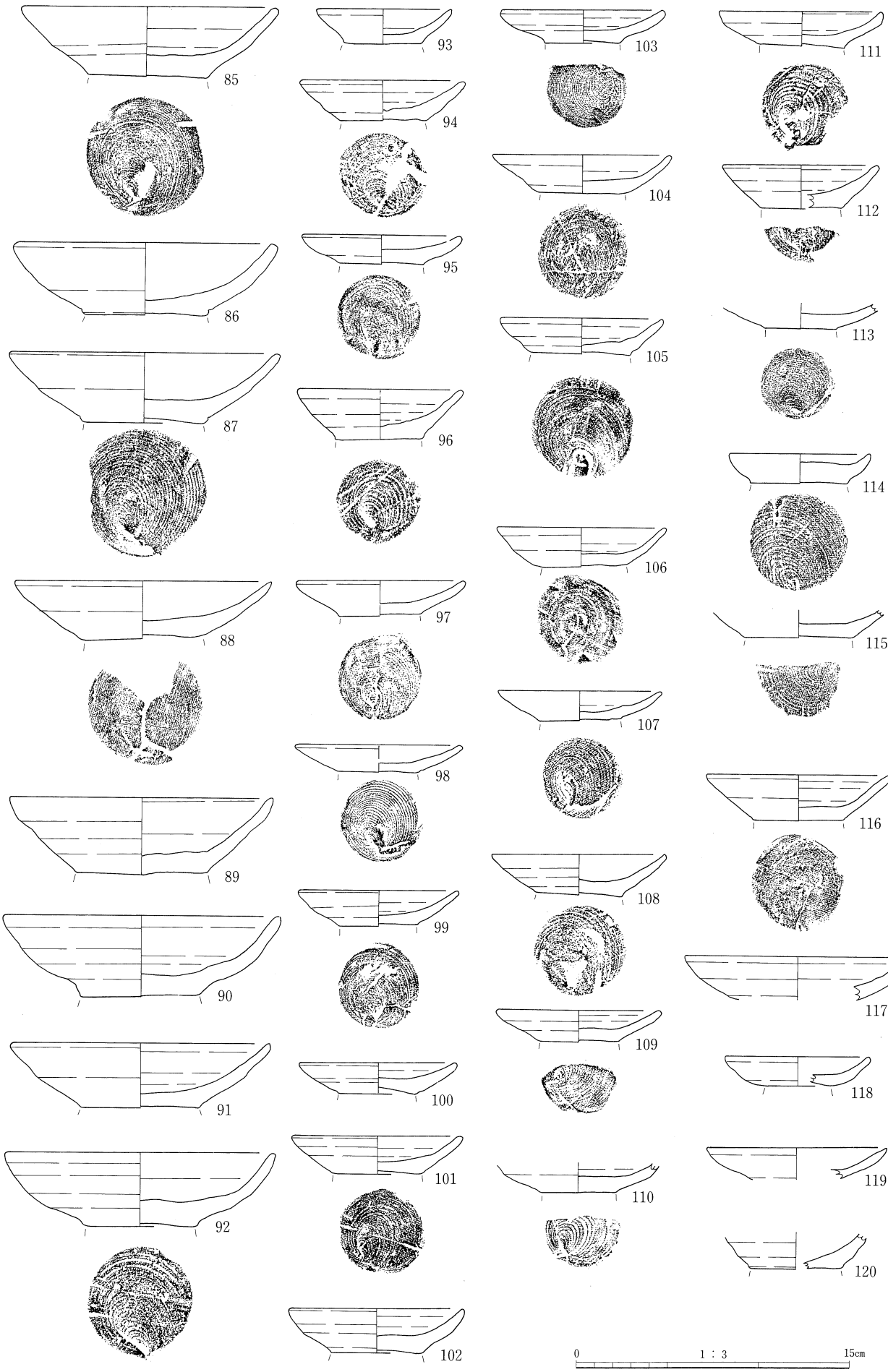
第17図　中世土師器１　(1/3)



第18図　中世土師器 2　(1/3)



第19図　中世土師器 3　(1/3)

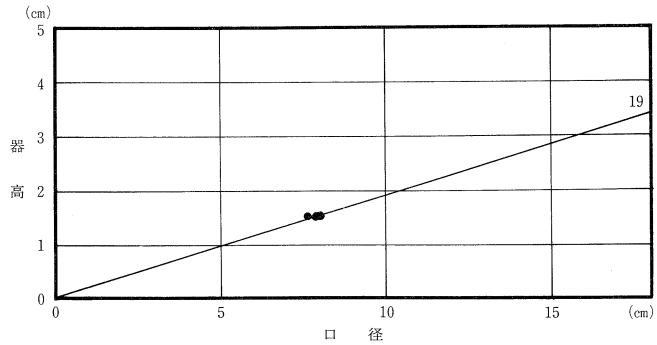


第20図　中世土師器 4　(1/3)

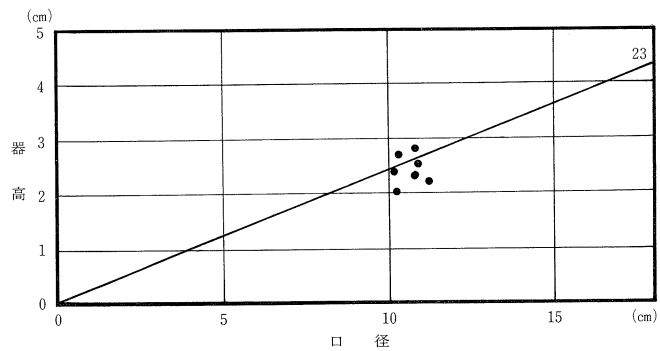
撫でし，内面には中心から渦巻き状のロクロ目をくっきりと残すものが多い。特殊な例として，内面のロクロ撫では体部のみにとどめ，見込みは不定方向に撫でるもの（59），見込みにのみ細かなロクロ目を残し，体部半ばの内面に段ができているもの（93）がある。底外面は右回転の糸切りがほとんどで，希に左回転の糸切りがある（48）。色調はにぶい黄橙色を呈するものが最も多く，橙色を呈するものも一定量ある。黒変したものもある。胎土はＲＡ類に比べてきめが粗く，骨針，赤色酸化粒を含むものもある。灯芯油痕とみられる煤が付着する例は稀少であるが，98は口縁部の約1/3に付着している。

ＲＣ類（第21・27図121～123，図版９）

底面は右回転の糸切りによって極めて平坦に切られており，口縁部は短く直線的に開く。体部外面及び内面全面をロクロ撫でする。色調は121・123が浅黄橙色，122はにぶい黄橙色を呈する。胎土は精良で，123は表面の剝離がみられることから化粧土をかけた可能性もある。122は内面に，121は口縁部から底部にかけて煤が付着し，灯明皿に使用されたと考えられる。



第21図　中世土師器法量表（ＲＣ類）



第22図　中世土師器法量表（ＲＤ類）

ＲＤ類（第22・27図124～131，図版９）

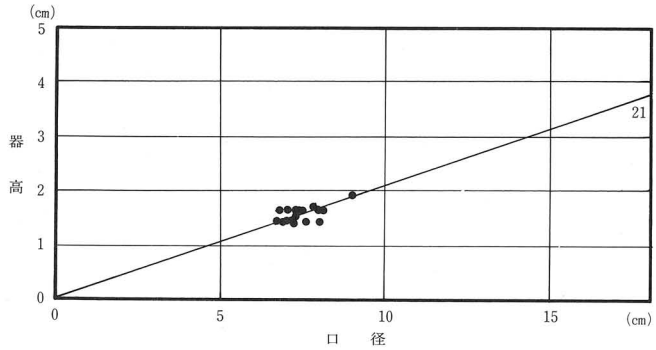
見込みは広く，体部は丸みを帯びて内湾しつつ短く立ち上がる。見込みを広くつくりだそうとして体部下方は押し広げられるため，中央部は取り残されて一段高くなっている。もともと糸切りの径が大きいもの（約６～７cm，125･128･129）と，糸切りの径は小さい（約５cm）が体部下半を糸切りの高さまで押し下げて底部としたもの（124･126･127･130･131）がある。口径は10～11cm，器高は２～３cmを測る。体部外面及び内面全面をロクロ撫でするものがほとんどであるが，内面の見込みに一方向の撫でを施すもの（131）もある。底外面は右回転の糸切りである。色調はにぶい黄橙色を呈するものが多く，ほとんどが黒変している（125～131）。胎土はきめが細かく，129は表面の剝離がみられる。128は細かな砂粒を多く含みややきめの粗い土である。122の口縁部には煤かと思われるものがみられるがはっきりわからない。

ＲＥ類（第23・27図132～150，図版10）

底部から口縁部までの立ち上がり方はＲＤ類と酷似しており，同じ製作技術集団によってつくられた小皿と考えられる。見込みの形態によって，見込みが盛り上がり中央部を撫でてへこませたもの，または桟状に隆起したもの（Ⅰ類，132～134・137～139・141・146・148・149），見込みが盛り上がるもの（Ⅱ類，135・142・143・145・150），見込みが平坦なもの（Ⅲ類，136・140・144・147）に分けられる。底部の糸切りの径は約３～５cmを測る。糸切りの周囲に幅，深さとも１～２㎜の沈線状の溝ができているものがあるが，これは元の底部が外面に１～２㎜突出していたため，周りに押し下げられた体部の器壁との間に隙間ができたものと思われる。また145は糸切り痕が溝の外側（体部外面）に

も及んでいることから，底部の切り離しは，体部下半をロクロ回転を利用して押し下げた後に行われたものと考えられる。法量はＲＤ類を大とするなら中・小があり，中型は口径９cm，器高1.9cm，小型は口径約７～８cm，器高1.5cm前後を測る。

色調は浅黄橙色，にぶい黄橙色を呈するものが多く，酸化し橙色を呈するもの（134・150）もある。



第23図　中世土師器法量表（ＲＥ類）

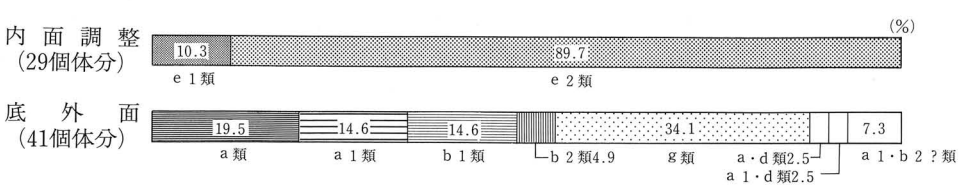
胎土は粗砂粒をやや多く含むものから緻密なものまであるが，特に144・147はきめが細かく，器壁も薄く仕上げられている。Ⅰ・Ⅱ類に煤が付着するものが多く灯明皿に使用されたものと思われるが，Ⅲ類には煤が確認されるものはない。Ⅰ・Ⅱ類の見込みの形態は灯明皿として使用する上で何らかの利点があるものかもしれない。

ＲＦ類（第24・25・27・28図151～205，図版11）

器壁が薄く体部は直線的に開く。底部の形態もあわせて全体の形から細分するべきであるが，底部まで残存する個体が少なく，口縁部のみの破片は分類が困難であるためあえて細分はさけたい。口縁部は外側にかるく面を取って断面三角形を呈するもの（157・165・176・181・185・190・191・197・199），薄く挽き出すもの（153・156・160・164・175・180・182・184・188・189・193・195・196・200・201・205），内湾し上方へ摘むもの（152・154・159・169・171・178・187・194），外反し端部を上方へ摘み上げるもの（151・162・163・168・172・173・174・177・179・192・202・203），丸くおさめるもの（158・167・183・204）がある。また全体的に器壁が薄いことが特徴であるが，例外的に器壁が厚く調整もやや雑なもの（204）もある。

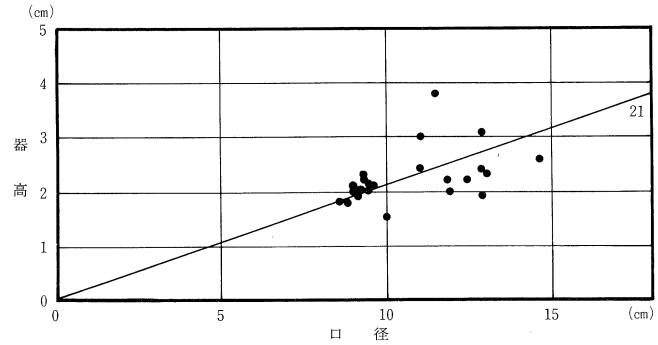
内面は，ロクロ撫での後見込みに仕上げ撫でを施すものが多い。また見込み部分に糸切りより一回り小さい圏線（ロクロ回転によってつくり出された凹線。指ではなく工具等を使うことによってその端が接する部分にできるのではないかと思われる。圏線内は盛り上がっているものが多い。）を残すものと，圏線が無く平滑なものがあり，前者が多い。しかし両者の全体の器形には明確な違いは認められない。また後者については仕上げ撫でが施されており，圏線がもともと無かったのか撫で消したのかは不明である。

底部外面は，糸切り痕を残すａ類（153・160・161・165・166・171・180・181・187・191・196・197・198・199・201・205），糸切り痕を撫でによって消すｂ１類（152・158・178・190・204）または篦によって消すｂ２類（155・156・185?・186?），篦削りによって底部の角を削り落とし丸底に仕上げるｇ類（151・154・159・162・163・164・167・170・174・177・179・188・202・203）がある。ａ類には板状圧痕が残るものもある（166）。ｂ類は糸切りが部分的に薄く残るものもあるが，滑らかな底面のものを１類とし，平行な凹凸が残り堅い板状の工具で撫でるように消したと思われるものを２類とした。ｇ類の篦削りは体部の下半から不定方向に行われている。



第24図　中世土師器の調整（ＲＦ類）

口径は８cm～15cmの間に分布し，８～10cmの小型のものは径高指数が21前後でまとまっているが，大型のものは口径・器高ともばらつきがある。大型のばらつきは小破片のため正確な計測が行われていないことに起因するものがあるかもしれないが，一方で細分の可能性を示唆するものと考えることもできる。いずれにしても径高指数は21以下のものが多く，長く挽きだした体部をできるだけねかせて器高の低い皿形に成形しているといえる。



第25図　中世土師器法量表（ＲＦ類）

色調はにぶい黄橙色が中では最も多いが，橙色も目立ち，他多様で，黒変もみられる。胎土はきめ細かく精緻なものが多く，希に骨針を含むものもある（161・174）。

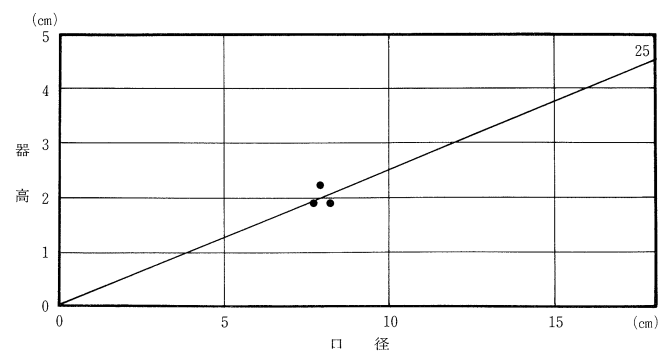
煤は，口縁部の広い範囲に付着するものが多いが，一部に付着するものもあり，完形のものが少ないためはっきりとした傾向はつかめない。また，大型のものにも煤は付着しているが，タール状に厚く付着するものはなく，小型のものに多くみられる。

ＲＧ類（第26・28図206～208，図版12）

体部と底部の境を強く撫で，体部はやや外反し，口縁端部は上方へ向かって摘み先細りする。器壁の厚さは一定で体部と底部の境を内面から押し出した分外面底部に膨らみがでているＲＧＩ類（206・207）と，体部と底部の境は摘んでロクロ撫ですることにより器壁が薄くなり，体部半ばで再び肥厚するＲＧII類（208）に細分できる。Ｉ類はII類に比べて技術的に未熟な感があり，底部内面端の窪んだ部分はやや凹凸がありロクロ回転を利用しきれていない。II類は全体にわたって精緻なロクロ撫でが施されている。206・208は見込みに仕上げ撫でを施す。Ｉ・II類の違いは，同じ形態を目指して生じた両者の技術的な差と思われるが，これが製作者（生産地）の違いを示すものか，あるいは時期差を示すものかは不明である。底部切り離しは右回転の糸切りで，207は板状圧痕が残る。

法量は口径８cm前後，器高２cm前後，底径は４cm前後を測る。

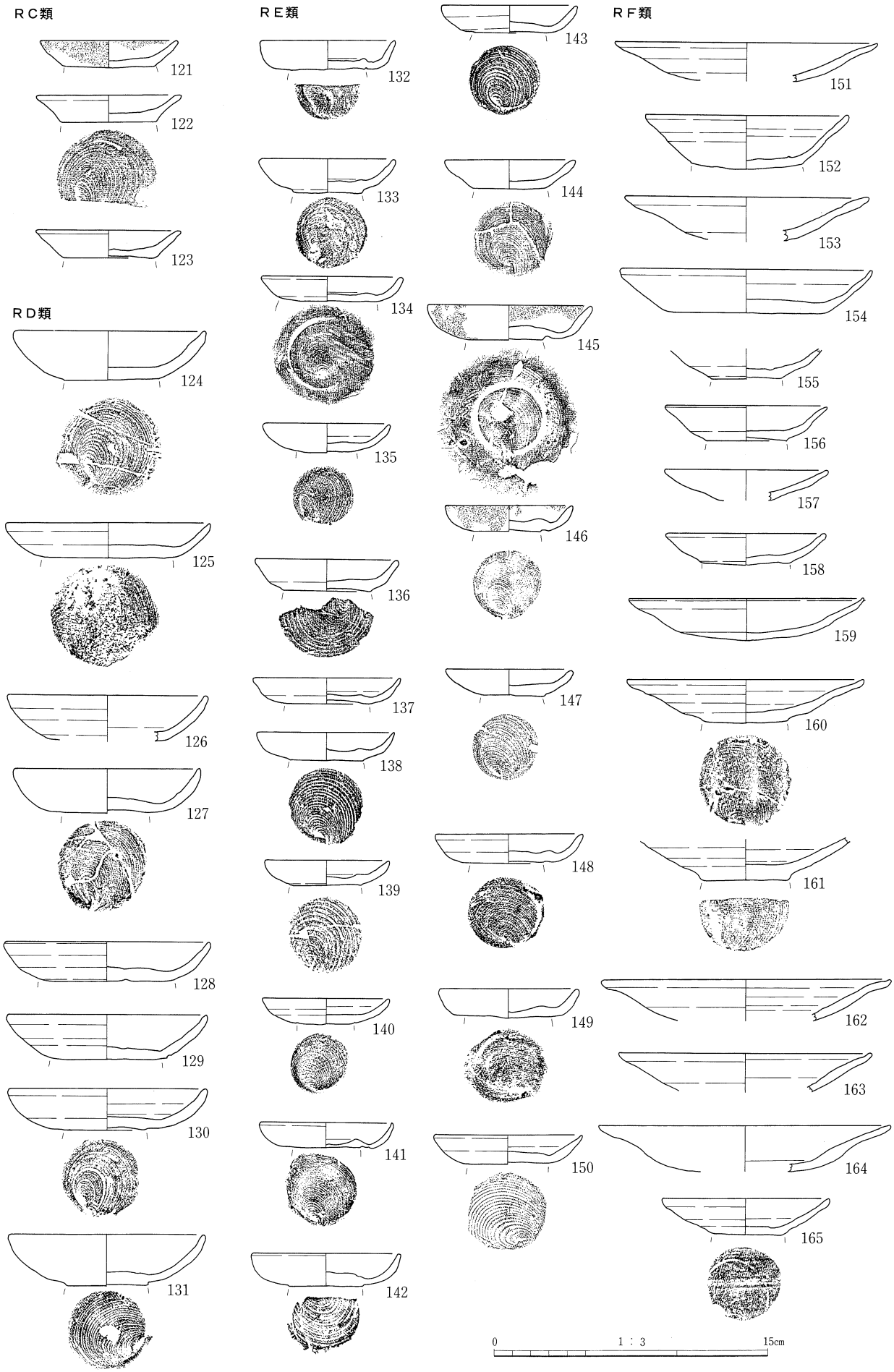
色調は，Ｉ類がにぶい橙色，II類がにぶい黄橙色を呈する。胎土はＩ・II類とも石英等を含み若干ざらつきがあるがきめは細かい。煤の付着は206が口縁部約半周に，207・208は口縁の一部にみられ，灯明皿として使用されたものと考えられる。



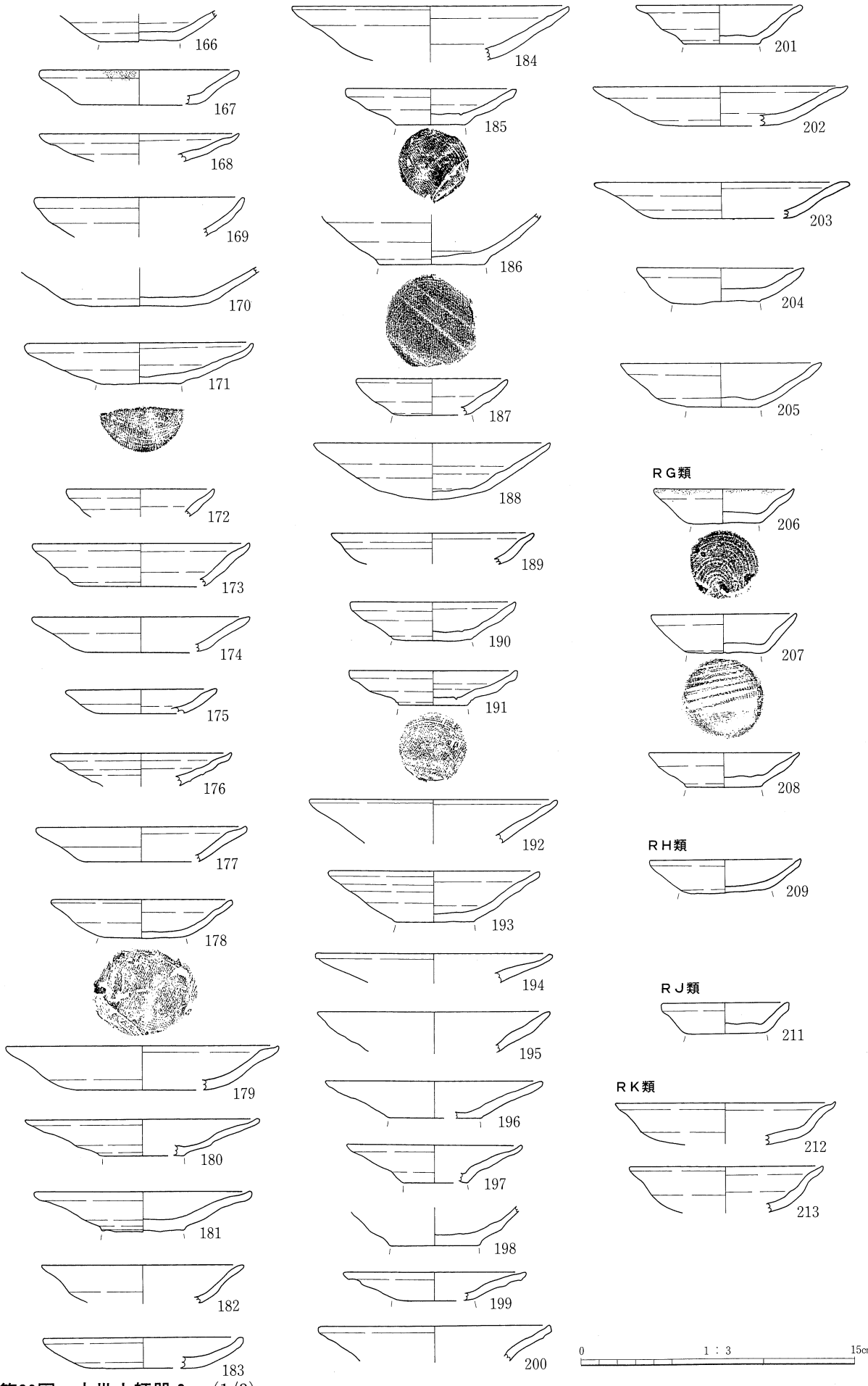
第26図　中世土師器法量表（ＲＧ類）

ＲＨ類（第28図209，図版12）

内面は底部から口縁部にかけて緩やかに弧を描き，外面は底部の角を回転篦削りによって帯状に削り取り器形に丸みを出している。口縁部は摘み，外側は面取りされて断面三角形を呈する。底外面の回転篦削りは中心部まで行われているが，底面は極めて平坦に近く，角を削り取った後は一気に中心まで削っていると思われる。内面調整は中心までロクロ撫でにより平滑に仕上げられている。内面及び外面の口縁部に明褐色の顔料が塗布されている。



第27図　中世土師器 5　(1/3)



第28図　中世土師器 6　(1/3)

法量は口径8.2cm，器高1.9cm，底径5.0cmを測る。径高指数は23である。胎土には細かい気泡が若干含まれるがきめこまかく，色調は橙色を呈する。

煤が口縁部全周（残存部）に認められる。付着部分は口縁端部内外面３～４㎜の帯状の範囲である。

ＲＪ類（第28図211，図版13）

平坦な底部に短く直線的に立ち上がる口縁部が付く。口縁端部は摘み，外面は面取りされて断面三角形を呈する。体部と底部の境は，外面にはやや丸みがあるが，内面は屈曲が強く見込みの端が落ち込んだ状態である。調整は全面ロクロ撫でで，見込みを一方向に撫でる。底部は右回転の糸切りである。

法量は口径6.9cm，器高1.7cm，底径4.4cmを測る。径高指数は25である。胎土は石英を含むが，緻密である。色調はにぶい橙色を呈する。外面の口縁部から底部にかけて煤が付着する。

ＲＫ類（第28図212・213，図版13）

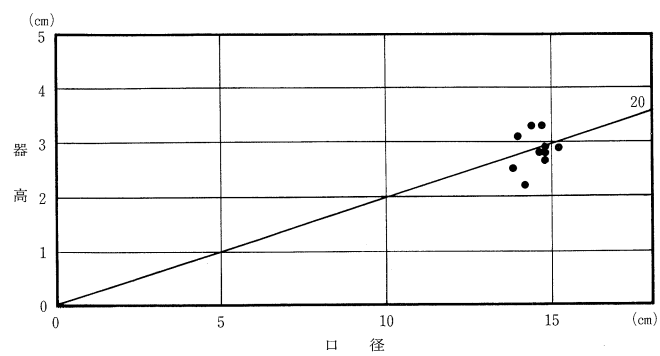
完形の個体は確認されていないが，腰が張り，口縁部は強く外反して水平に近い面をつくりだし，端部は上方へ摘み上げる。ＲＦ類と同様に器壁が薄く胎土も似ているので，ＲＦ類の特殊形と思われる。体部と底部の境は緩やかに湾曲するため明確でないが，212は外面に糸切りかと思われる痕跡が残る。粘土粒が付着してはっきりわからないが，糸切りとすれば底径は約７cmに復元される。口径は約10～12cm，器高は2.5cm前後を測る。胎土は極めてきめ細かく，色調は212が橙色，213がにぶい黄橙色を呈する。212は外面の一部に，213は内面の一部に煤らしきものが付着する。

② 非ロクロ成形

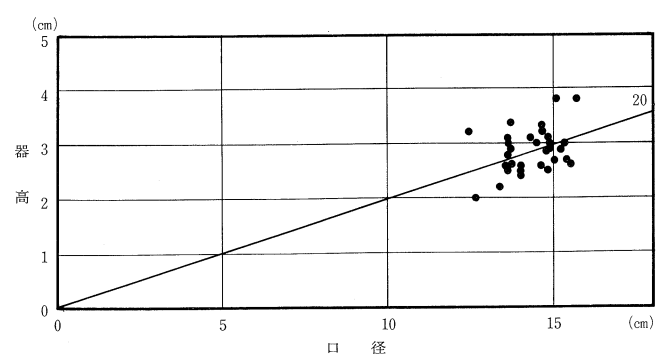
ＮＡ類（第29～33図214～291，図版13・14）

口縁部に二段の横撫でを施す。器壁が厚く重量がある。上段をつまみ上げるように撫で，二段の境界が明確な稜となってあらわれているもの（Ｉ類，214～233），二段の境界が曖昧になり稜は部分的にみられるかほとんど無いもの（II類，234～290），深身のIII類（291）がある。

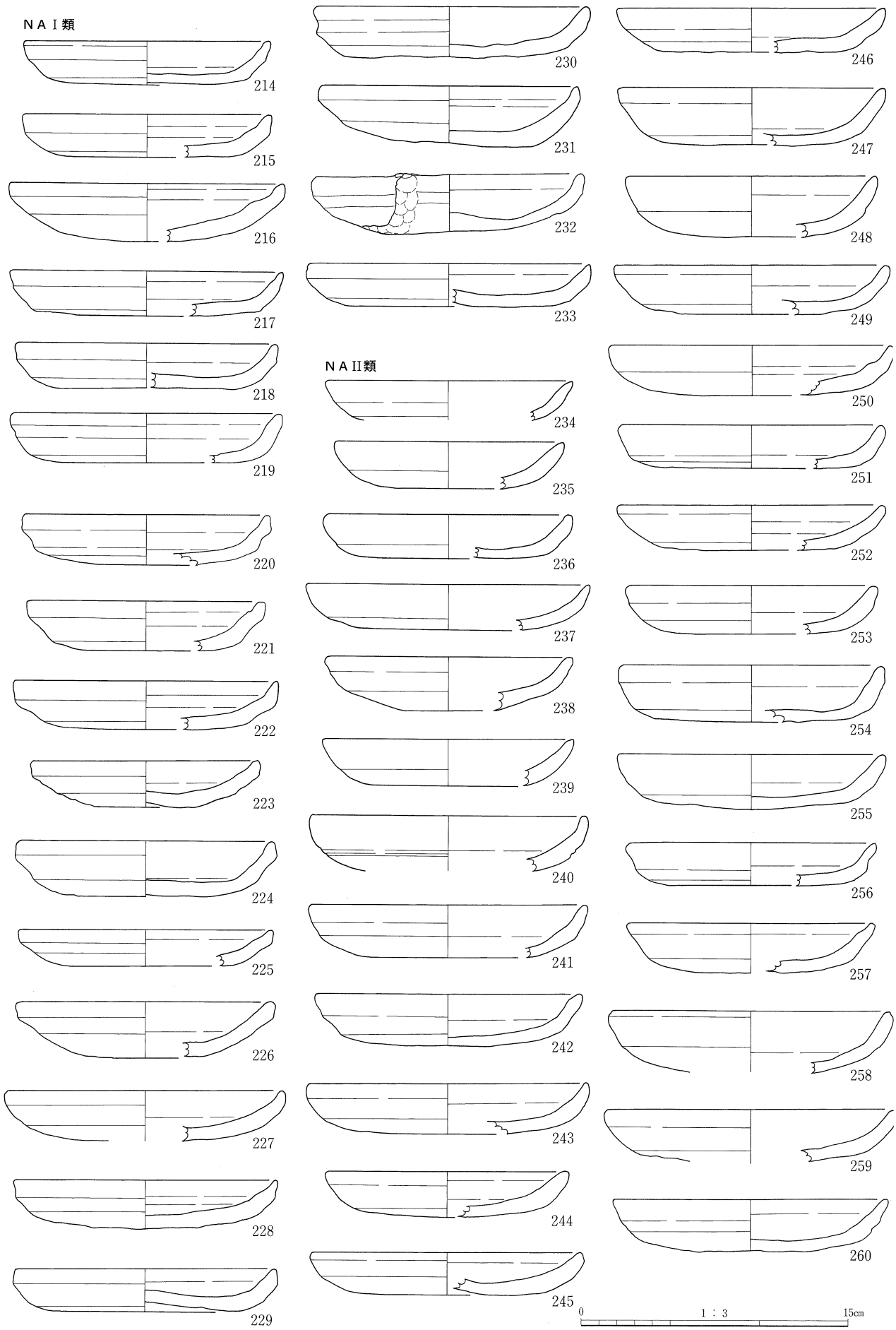
Ｉ類の内面調整は，見込みを中心に刷毛状工具による撫で（以下，刷毛状撫で）を施した後口縁部を横撫でを施すｂ類が半数以上ある。216は完形ではないが，残存部には刷毛状工具の使い方が特殊なｄ類がみられる。横撫での方法は完形のものが少ないため正確な傾向はつかめないが撫で抜き痕を残すものはみられない。底外面は特に調整といえる痕跡が認められないｃ類で，板状圧痕かと思われるものも１点のみあった。粘土の接合痕と思われる不規則な筋が底外面等に残るものがあるが撫で消されているものがほとんどである。232は成形の方法として特殊な例で，すでに横撫でを施した皿に切り込みをいれ，右上にして重ね貼り合わせたものである。継ぎ目は口縁部から底部に



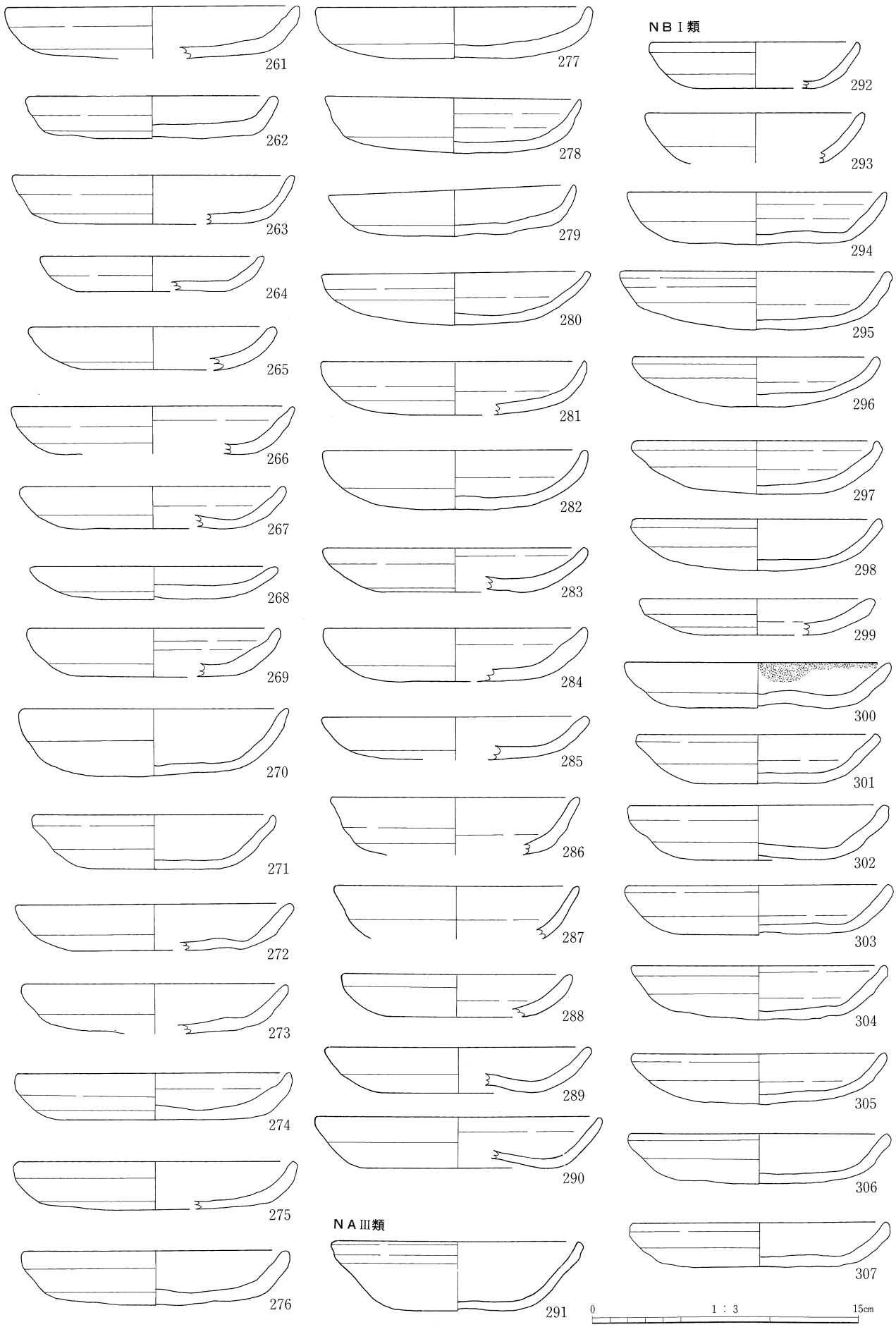
第29図　中世土師器法量表（ＮＡＩ類）



第30図　中世土師器法量表（ＮＡII類）



第31図　中世土師器 7　(1/3)



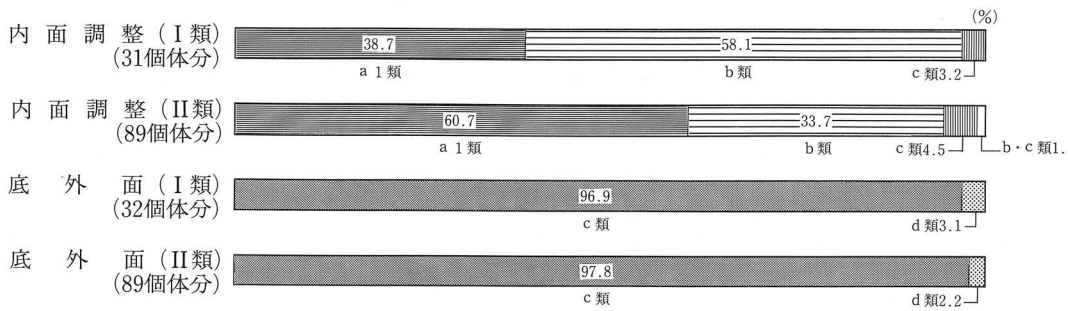
第32図　中世土師器 8　(1/3)

及び，内外面に貼り合わせたときの指頭圧痕が残る。法量は口径約14～16cm，器高は約２～3.5cmで径高指数の平均値は20である。

II類の内面調整は，刷毛状撫でを施さないａ１類が半数を超えるが，刷毛状工具を用いるｂ類，ｃ類，ｂ類とｃ類を組み合わせたものがある。横撫での方法は右回りに撫で抜くものが多く左回りに撫で抜くものも１点のみある。底外面は無調整で，板状圧痕を残すものも稀にある（264･271）。法量は口径約13～16cm，器高２～４cm，径高指数の平均値は20である。

III類の内面調整はｂ類，底外面はｃ類である。法量は，口径13.6cm，器高3.9cm，径高指数は29である。横撫で幅は器高に対して狭く，1.3cmである。横撫では二段の境が稜をなし，一段の幅は狭い。器壁はＩ・II類に比べて非常に薄い。

色調･胎土はＩ～III類に共通の傾向がある。色調はにぶい黄橙色を呈するものが多く，黒変が多い。胎土は角閃石や石英を含み，稀に骨針もみられ，きめが粗い。特徴は角閃石を多く含むことである。煤が付着するものも少数ある。



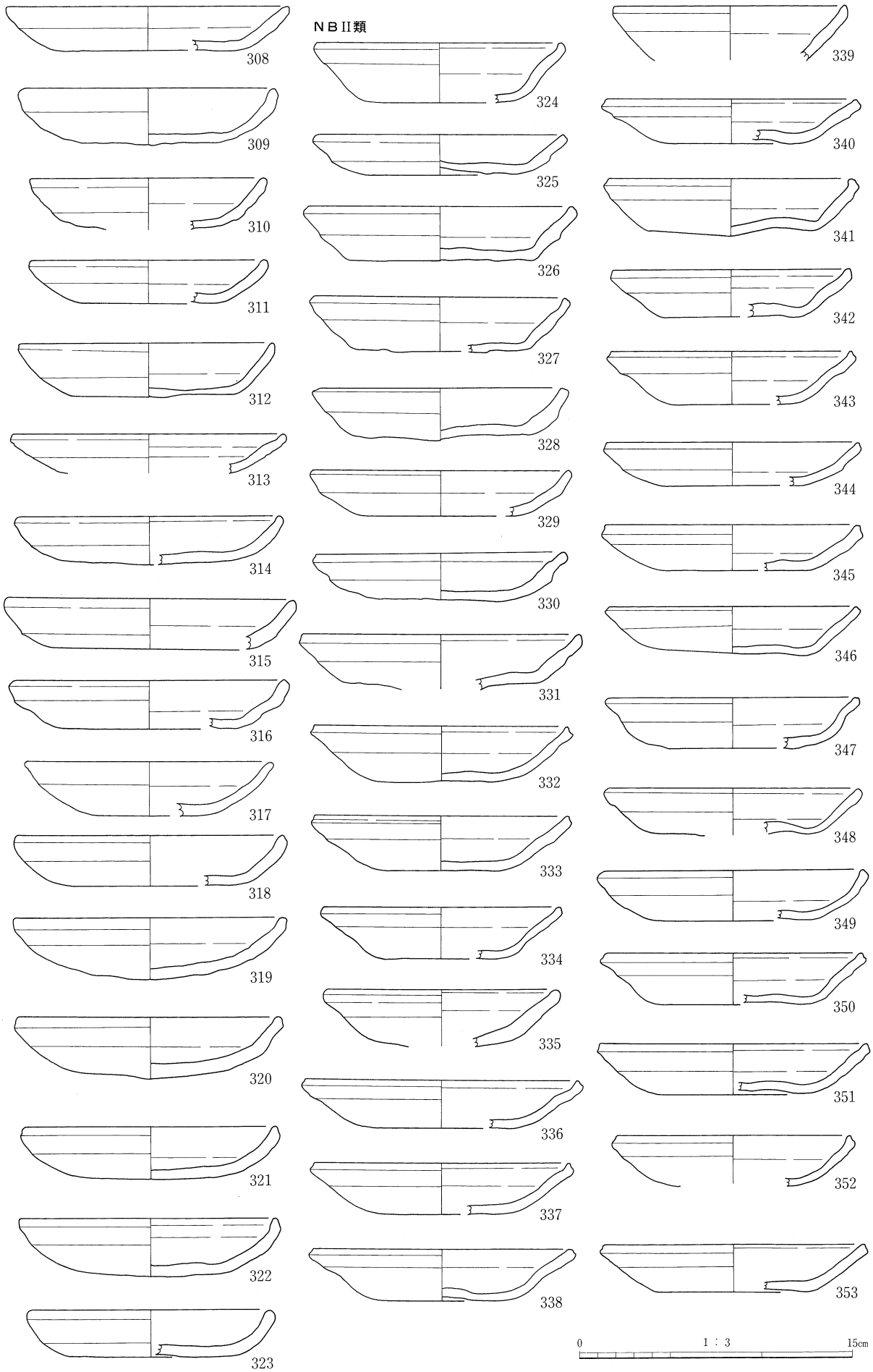
第33図　中世土師器の調整（ＮＡＩ・II類）

ＮＢ類（第32・34～38・39図292～402，図版14・15）

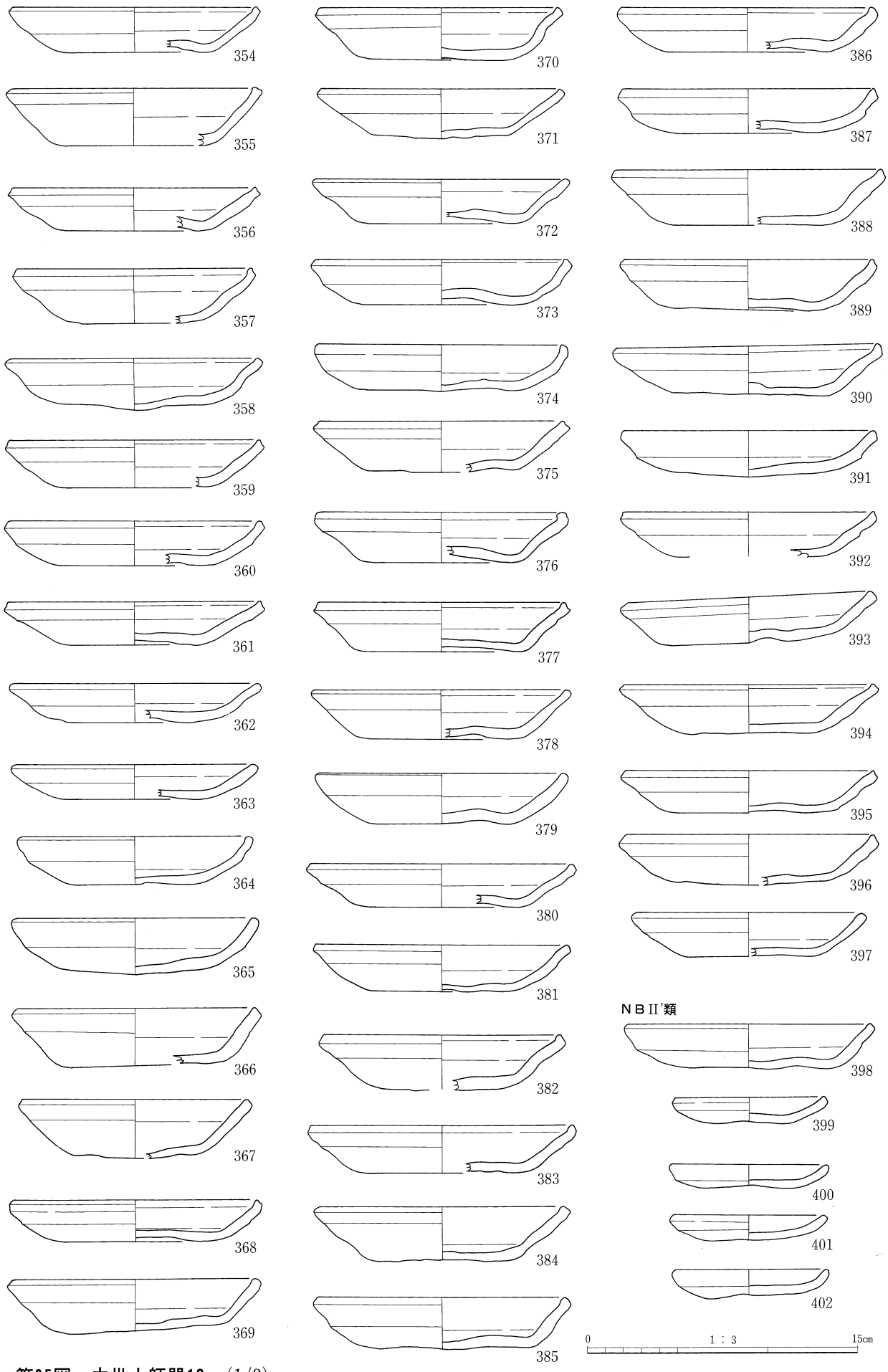
口縁部に一段の横撫でを施す。横撫で幅は狭く，1.1～2.1cmに分布する。端部外面に面取りし断面三角形を呈するものまたは面取りがやや弱く端部が丸いもの（Ｉ類，292～323），端部を口縁部の傾きに対して垂直方向から強く押さえるように面取りし，断面が方形を呈するもの（II類，324～402）がある。II類は面取り部分に筋状の窪みができるもの，内端面をつまみ内側に小さく肥厚するものが多い。またＩ類は底部から口縁部に欠けて緩やかな丸みを帯びて立ち上がるものが多いが，II類は内底面の端を外側へ押し出し気味にして平底に仕上げ，真横からみた形態は逆台形を呈するものが多い。Ｉ類は器壁が厚く，重量があるものが多いが，II類は薄手で，全体の器形に歪曲が目立つ。

Ｉ類の内面調整はほとんどが見込みを一方向に撫でた後横撫でを施すａ１類で，横撫で後に見込みを撫でるａ２類，刷毛状撫でを施すｂ類，工具痕が放射状に残るｃ類は少数である。横撫での方法は右回りに撫で抜くｂ１類である。底外面は無調整で，板状圧痕が残るものもある。法量は口径約13～15cm，器高約2.5～3.5cm，径高指数の平均値は21である。色調はにぶい黄橙色が最も多く，橙色も一定量ある。胎土は石英を含むものが多く，骨針，角閃石，赤色酸化粒を含むものもある。黒変したもの，煤が付着するものもみられる。

II類の内面調整は，刷毛状撫でを施すｂ類が約3/4を占め，ｃ類を併用する場合が多い。撫で調整のみを施すａ類も一定量ある。横撫での方法がわかるものは，右回りに撫で抜くｂ１類が８個体，左回りに撫で抜くｂ２類が１個体ある。底外面は無調整で，板状圧痕が残るものが半数近くある。法量は口径約13～15cm，器高約２～3.5cm，径高指数の平均値は20である。色調はにぶい黄橙色が最も多く，



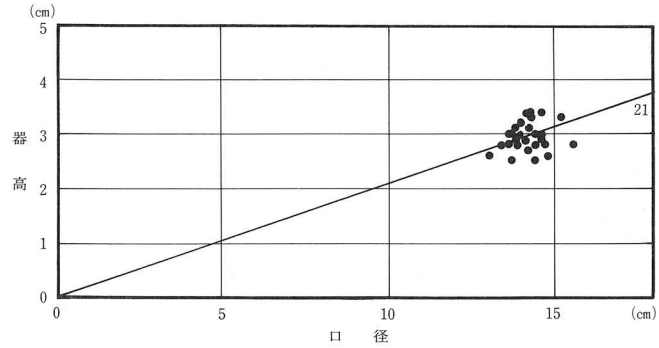
第34図　中世土師器 9　(1/3)



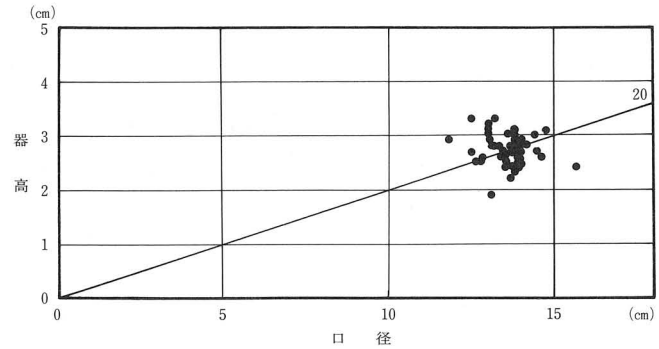
第35図　中世土師器10　(1/3)

橙色も一定量ある。他のものに比べて，赤みの強いものが目立つことが特徴的である。胎土は石英を含むものが多く，角閃石，骨針，赤色酸化粒を含むものもある。黒変したもの，煤の付着するものも，全体に対する割合としては多くないが，少数みられる。底部にモミ状の圧痕が残るものが少数ある。

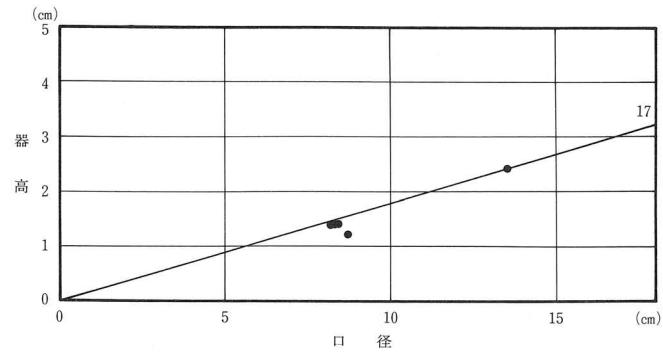
なおＳＺ1199出土の398はＮＢII類で，内面調整はｂ類とｃ類を組み合わせたものであるが，同遺構から出土した小型の皿（399～402）も同様の調整が施され，口縁部の特徴，色調，胎土が同一でセットで製作されたことが明らかであることから，例外的にＮＢII'類としてまとめた。法量は，398は口径13.5cm，器高2.4cmで，399～402は口径約8.5cm，器高約1.4cmである。色調は他より白く，にぶい黄橙色を呈し，胎土は石英，骨針，赤色酸化粒を含む。またこれらと色調，胎土が異なるが，形態，調整，法量が非常に似た小皿がＳＤ1252から出土している。



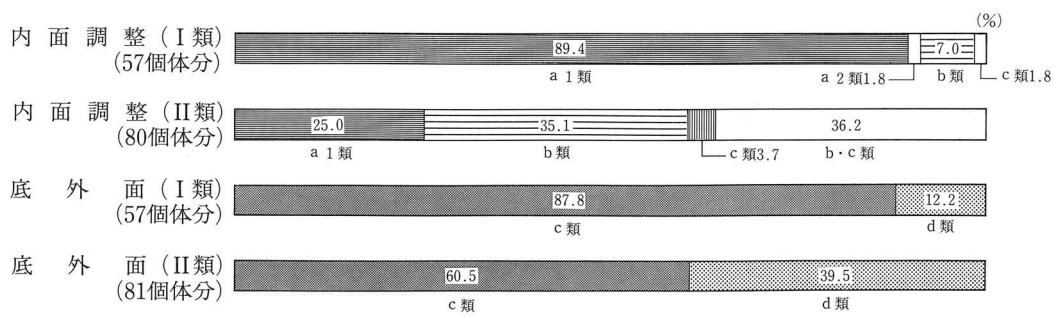
第36図　中世土師器法量表（ＮＢⅠ類）



第37図　中世土師器法量表（ＮＢII類）



第38図　中世土師器法量表（ＮＢII'類）



第39図　中世土師器の調整（ＮＢⅠ・II類）

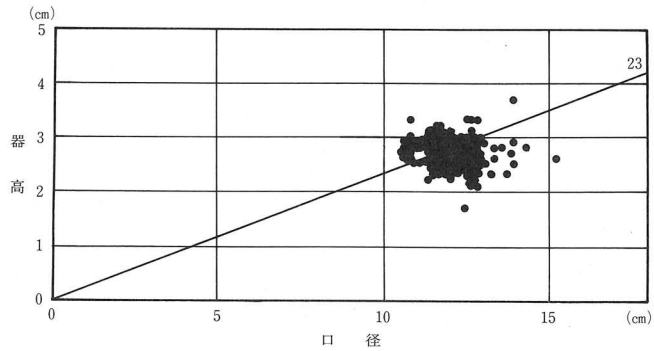
ＮＣ類（第40～49図403～690，図版16～17）

口縁部に一段の横撫でを施す。端部は面を取るものと取らないものがある。内底面の端を指押さえして平底に仕上げるⅠ類(403～644)，底部から体部にかけて丸みを帯び口縁部は短く直立気味に立ち上がるII類（645～660），器壁が厚く丸底のIII類（661～690）がある。Ⅰ類は，口縁端部の形態，体部の立ち上がり方，法量，横撫で幅，内底面の指押さえの強さ（横撫で下の底部の張り出し方）等により様々な違いがみられるが，小破片の細分は困難であるため，大枠で捉えた。II類・III類はこの大枠

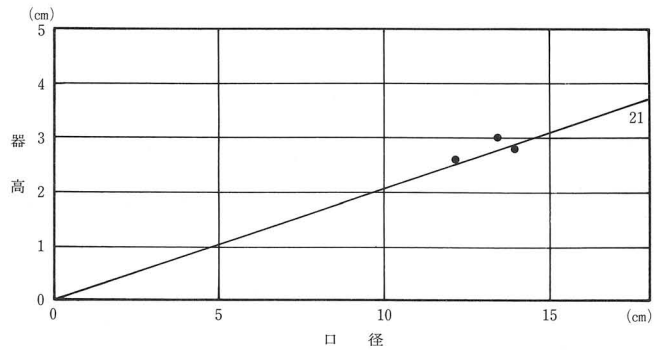
の中から特に特徴的なものを抜き出したものともいえる。

Ⅰ類の内面調整は見込みを撫でた後横撫でを施すａ１類が大半を占め，横撫で後に見込みを撫でるａ２類，刷毛状撫でを施すｂ類，工具を放射状に当てるｃ類は少数である。見込みの撫では，稀に「の」字状等の軌跡で，粗い調整痕を残して撫でるものもある（610・611）。横撫での方法がわかるものは，撫で抜かないａ類が１個体，右回りに撫で抜くｂ１類が53個体，左へ撫で抜くｂ２類が１個体ある。537は横撫で直下に，撫でたときについたと思われる沈線状の傷が一周しており，少しづつ撫でては止まる軌跡を現している。底外面は無調整で，板状圧痕を残すｄ類が一定量あり，軽く撫でたと思われるｅ類が稀にみられる。

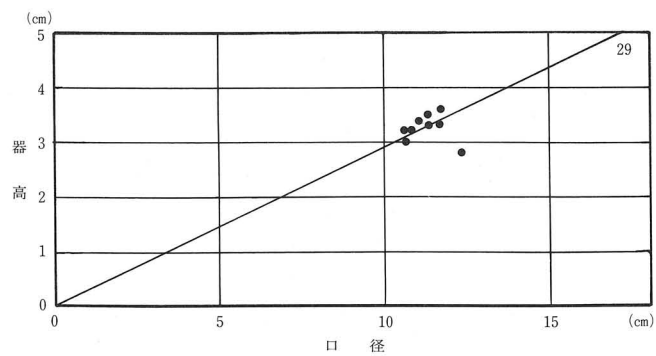
口径は約11～14cmに分布し，約12～13cmに集中する。器高は約2～3.3cmである。径高指数の平均値は23である。色調はにぶい黄橙色が最も多いが，橙色，にぶい橙色，浅黄橙色もまとまった数量でみられる。胎土は様々で，石英を含むものが多く，骨針，赤色酸化粒を含むものもみられるが，角閃石を含むものは稀である。また，黒色を呈する縮れた糸状のもの（植物繊維？）が混入するものが少数ある。煤の付着，黒変は全体に対する割合は少ないが一定量ある。底外面にモミ状の圧痕を残すものが稀にある。



第40図　中世土師器法量表（ＮＣⅠ類）



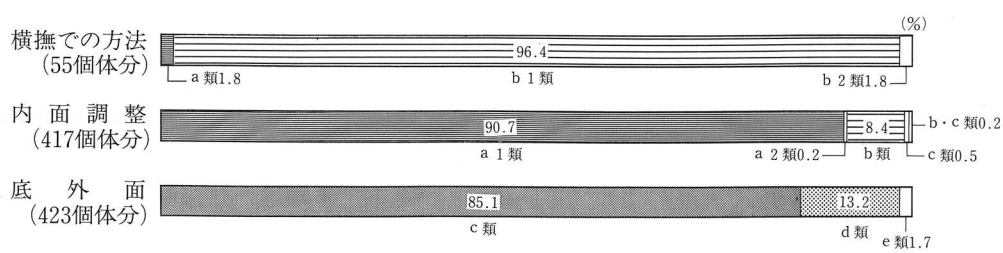
第41図　中世土師器法量表（ＮＣⅡ類）



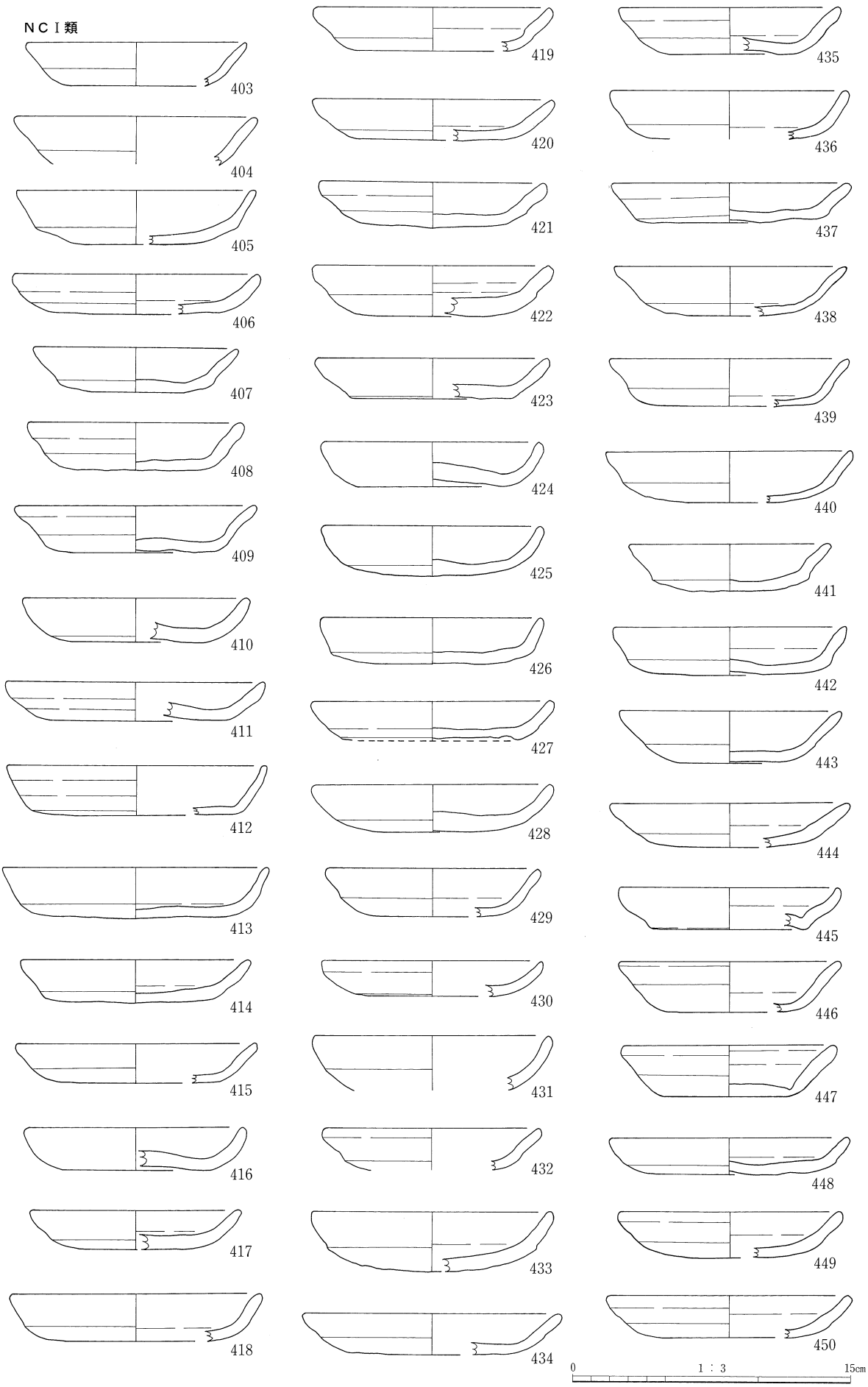
第42図　中世土師器法量表（ＮＣⅢ類）

Ⅱ類の内面調整はすべてａ１類で，横撫での方法は，完形がないため不明である。底外面はすべて無調整である。色調はにぶい橙色，橙色が多い。胎土は石英，骨針，赤色酸化粒を含むものがある。煤の付着は１個体のみみられる。

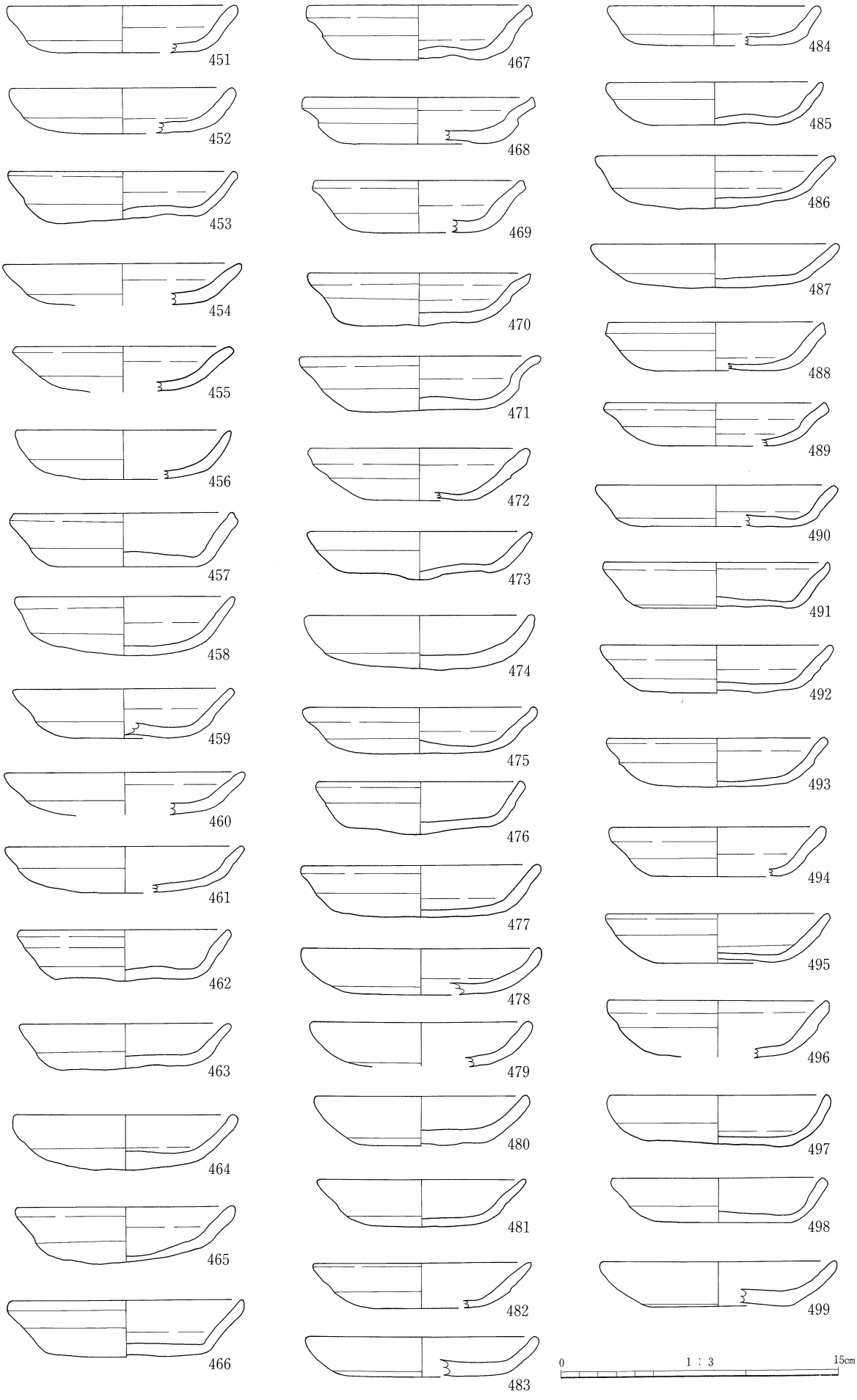
Ⅲ類の内面調整はａ１類が38個体，ａ２類が３個体ある。横撫での方法がわかるものは４個体で，すべて右回りに撫で抜く。底外面は無調整で板状圧痕を残すものは稀である。法量は，口径約11～12



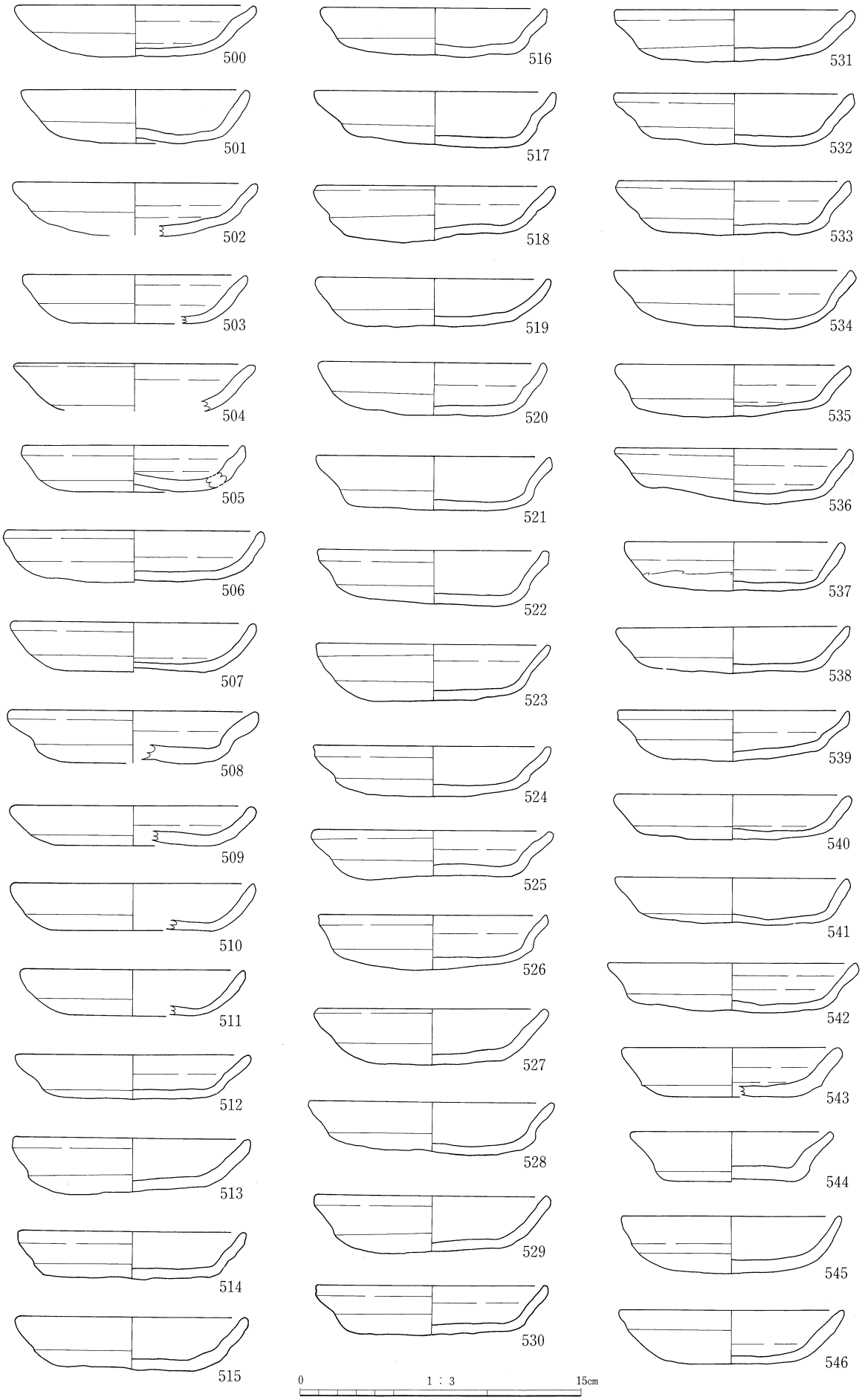
第43図　中世土師器の調整（ＮＣⅠ類）



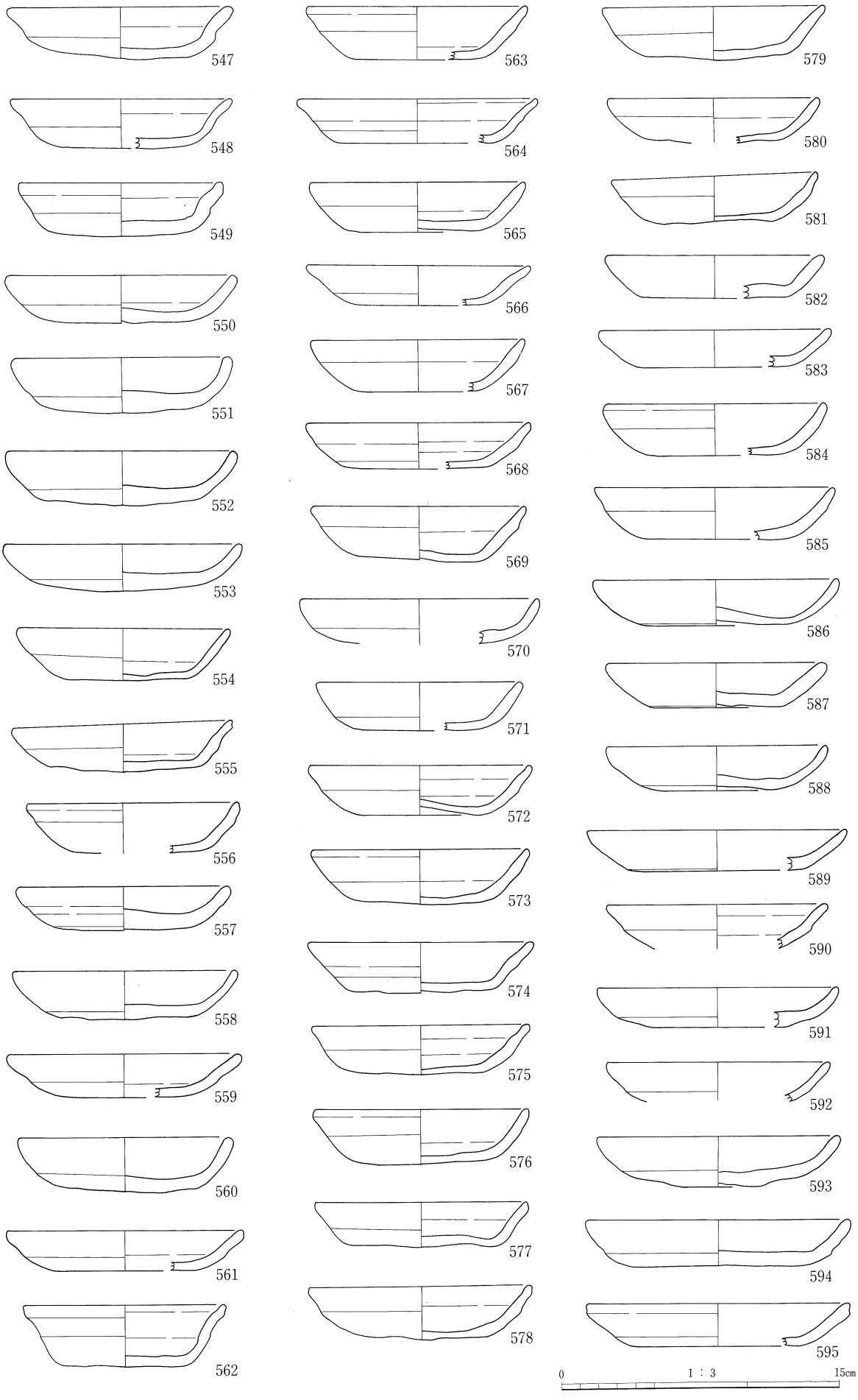
第44図　中世土師器11　(1/3)



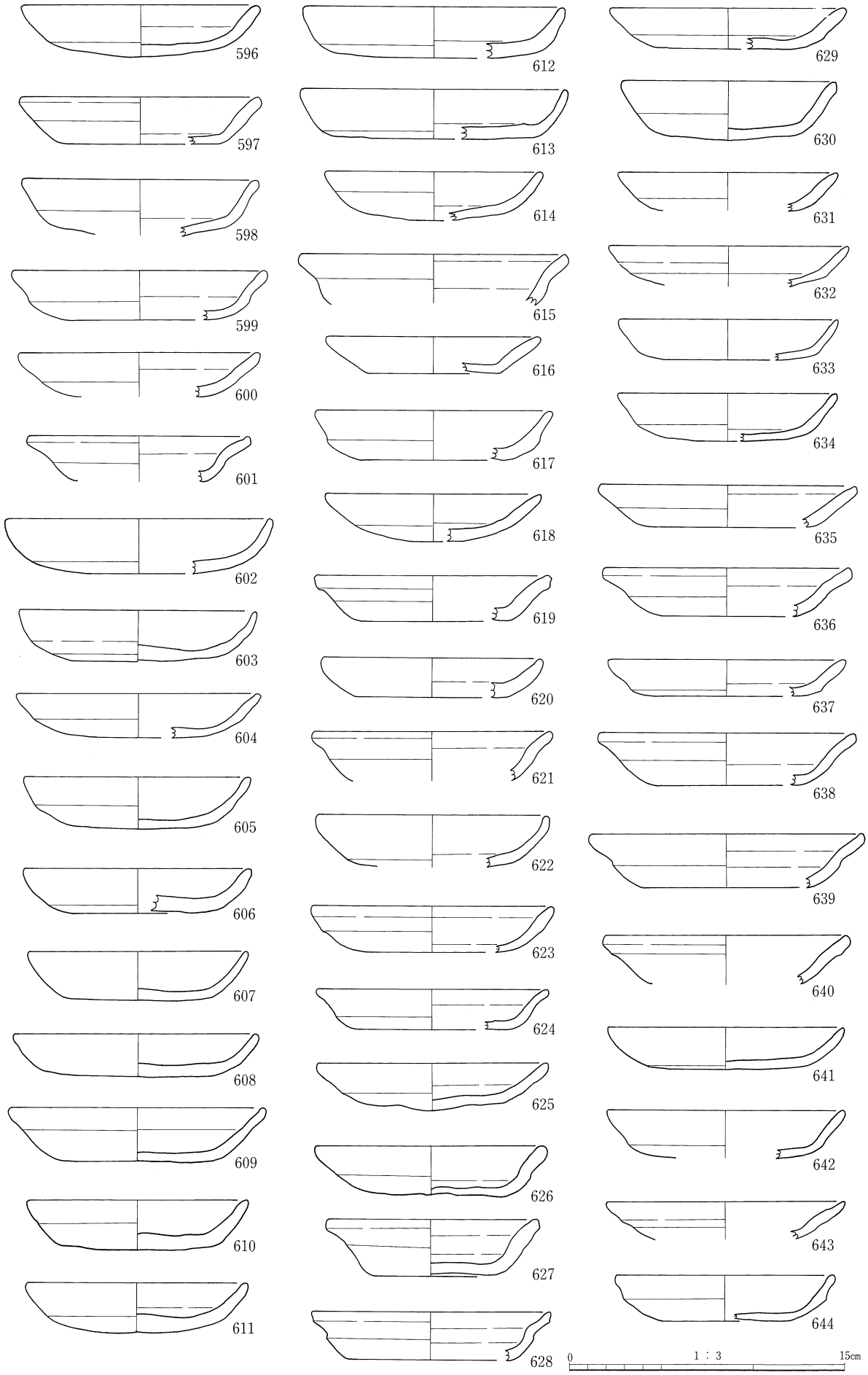
第45図　中世土師器12　(1/3)



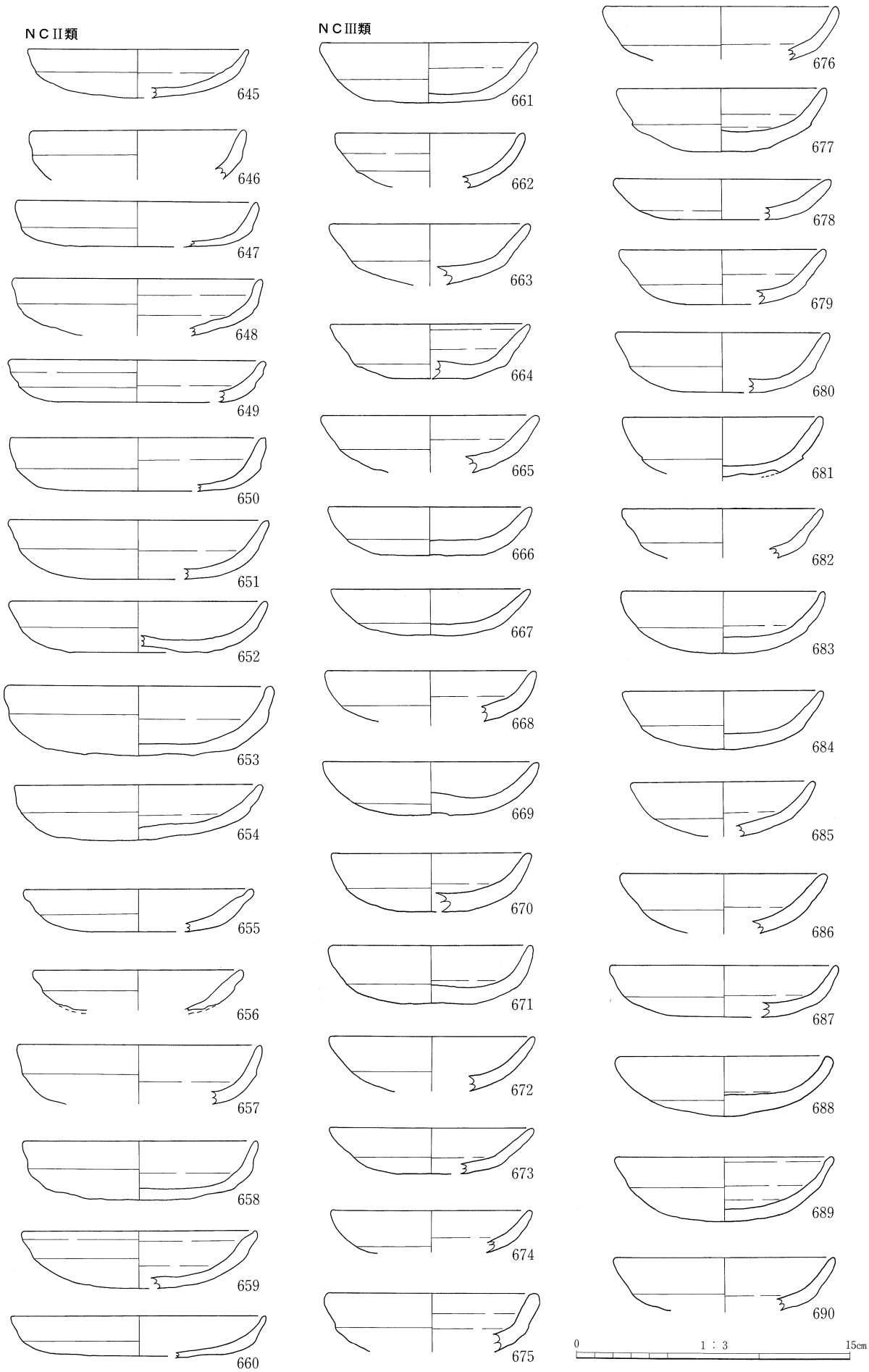
第46図　中世土師器13　(1/3)



第47図　中世土師器14　(1/3)



第48図　中世土師器15　(1/3)



第49図　中世土師器16　(1/3)

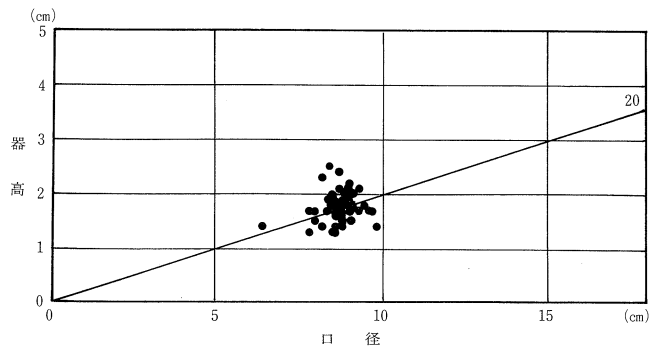
cm，器高約３～3.5cm，径高指数の平均値は29である。色調は橙色が最も多いがにぶい黄橙色も一定量ある。胎土は赤色酸化粒を含むものが多く，石英，骨針を含むものもある。また粗い砂粒を含むためか気泡が多く，特に底外面に多くみられる。煤の付着するもの，黒変したものは少数みられる。

ＮＤ類（第50～63図691～1527，図版17～19）

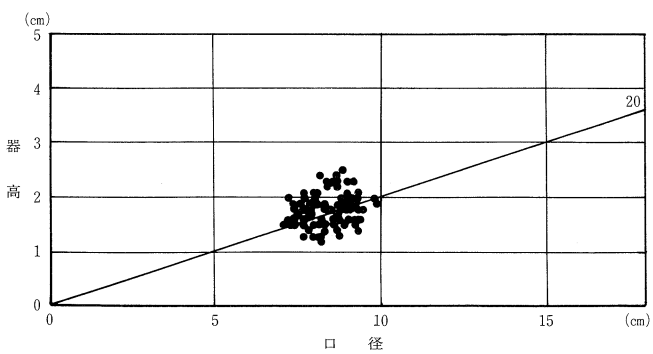
ＮＡ～ＮＣ類の小型の皿にあたると考えられる。口縁部にＮＡＩ類同様の二段撫でを施すものをＩ類（691～768），一段撫でを施すものをII類（769～1495），II類にあたるものの内で，底部の中心を指によって押し上げいわゆるへそ皿状にしたものをIII類（1496～1527）とした。ＮＡＩ類に対応する小皿はＮＤＩ類と考えられるがＮＡII類以下はそれぞれに対応する小皿を特定することは難しい。

Ｉ類の内面調整は見込みを撫でた後横撫でを施すａ１類が半数で，残りの半数は刷毛状工具を使用するｂ類，ｃ類，ｄ類を様々に組み合わせたもので構成される。横撫では，撫で抜かないａ類が５個体，右回りに撫で抜くｂ１類が５個体ある。底外面はすべて無調整である。法量は口径約7.5～10cm，器高約1.2～2.5cm，径高指数の平均値は20である。色調はにぶい黄橙色を呈するものが多い。胎土は，石英，角閃石を含むものが多く，骨針，赤色酸化粒を含むものもある。

II類の内面調整はａ１類が大半を占め，ａ２類，ａ３類，ｂ類，ｃ類が少数ある。ａ３類はＮＤII類にのみみられる調整で，見込み部分のきめが粗く無調整と思われる。小皿は横撫でだけで大部分を撫でることができるので，見込み部分の調整は省略したものと思われる。横撫での方法がわかるものは，ａ類が10個体，ｂ１類が170個体，ｂ２類が７個体みられる。底外面は無調整のｃ類が大半で，板状圧痕を残すｄ類，軽く撫でたｅ類が少数ある。法量は口径約７～10cm，器高約1.2～2.5cm，径高指数の平均値は20である。色調はにぶい黄橙色，橙色，にぶい橙色が多い。胎土は石英を含むものが多く，骨針，角閃石，赤色酸化粒を含むものもある。炭化した植物繊維状のものを含むものもある。

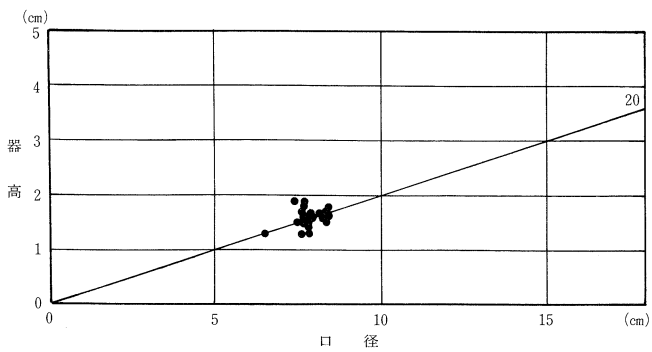


第50図　中世土師器法量表（ＮＤＩ類）



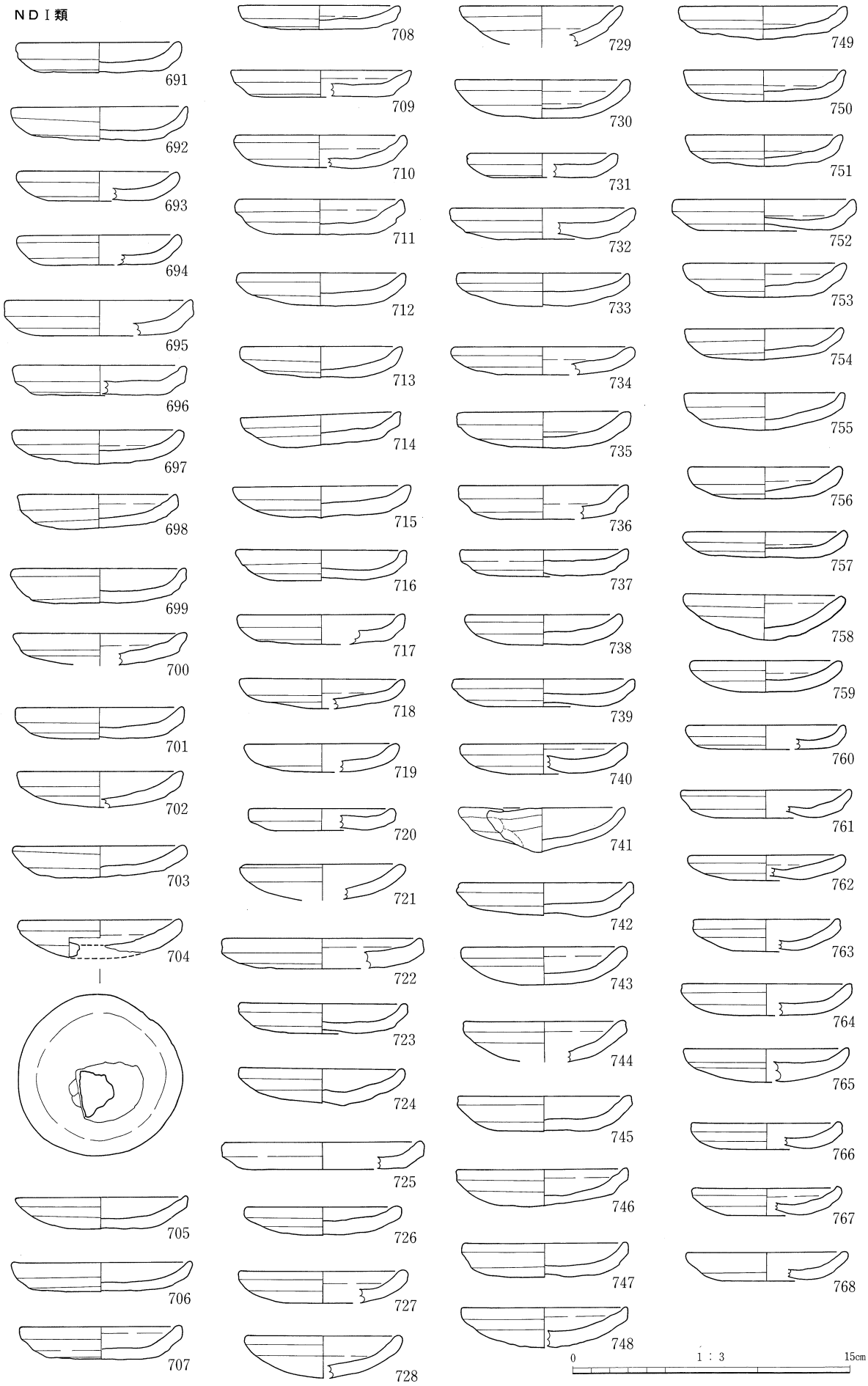
第51図　中世土師器法量表（ＮＤII類）

III類の内面調整はすべてａ１類で，横撫での方法は右回りに撫で抜くｂ１類，底外面は無調整である。法量は口径約6.5～8.5cm，器高約1.3～２cm，径高指数の平均値は20である。色調は浅黄橙色，にぶい黄橙色が多い。胎土は石英を含むものが多く，骨針，赤色酸化粒を含むものもある。1519・1520は口縁部にタール状の煤が付着しており，灯明皿に使用されたものと考えられる。

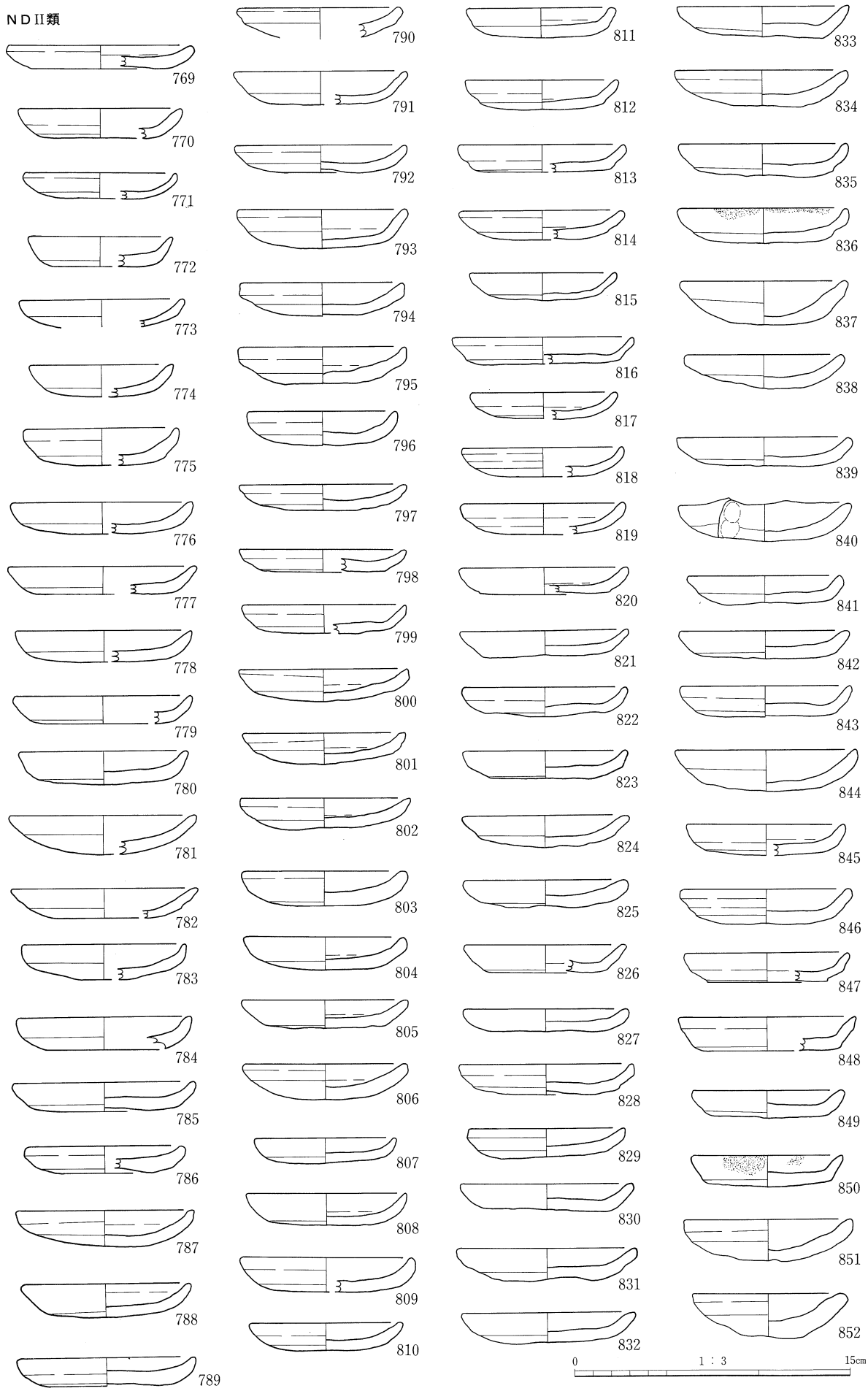


第52図　中世土師器法量表（ＮＤIII類）

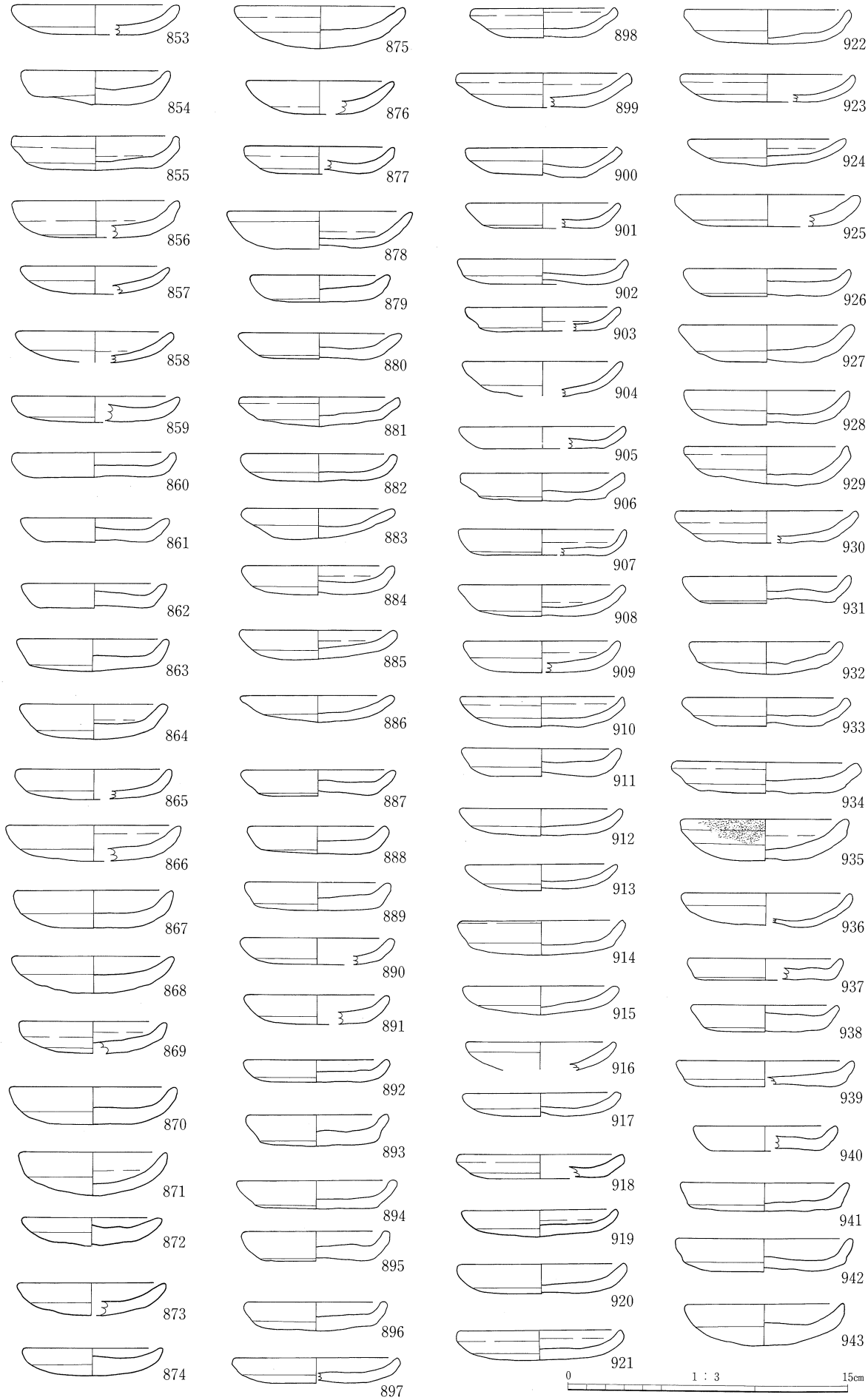
Ｉ類741・II類840・952は，ＮＡ類232



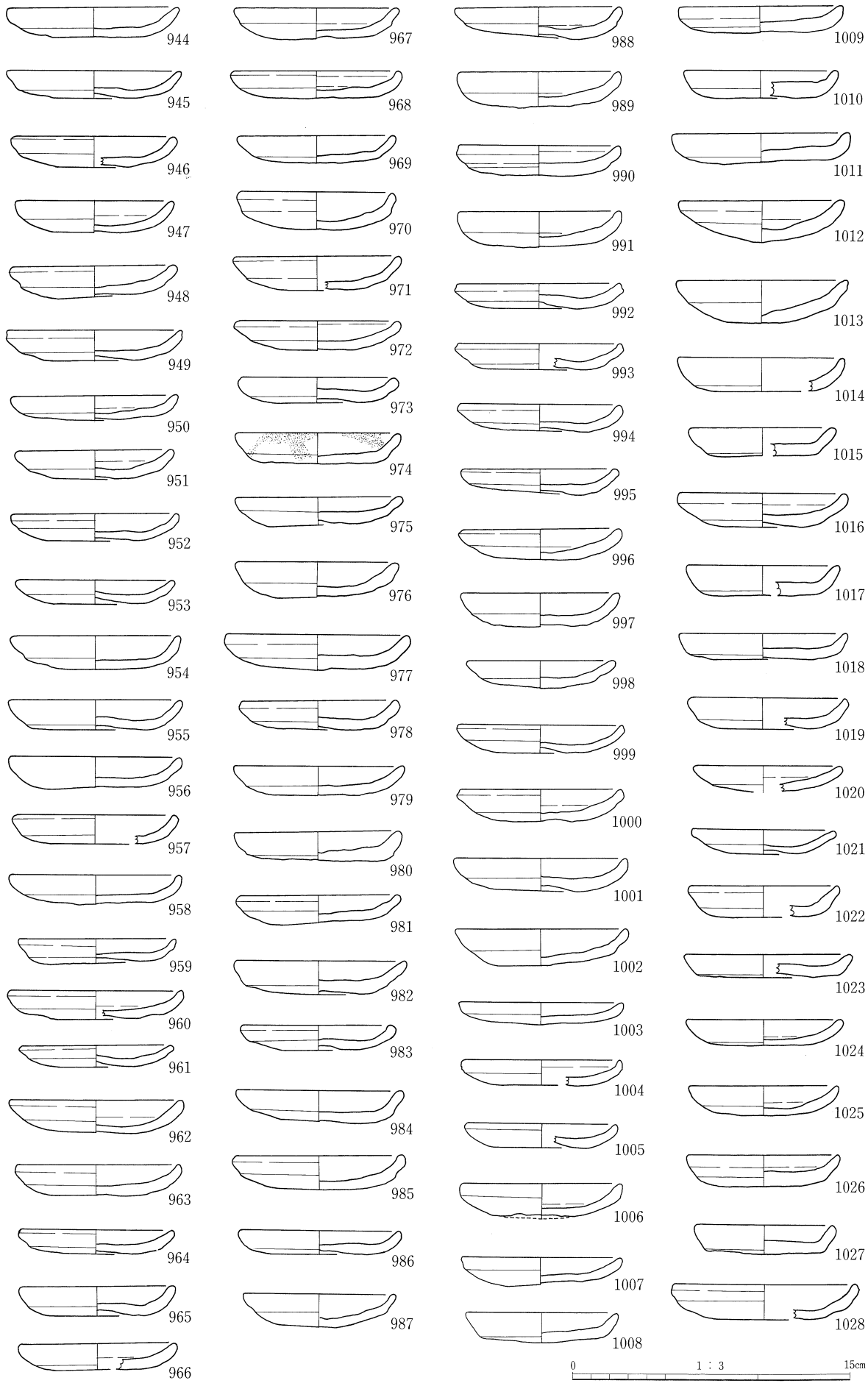
第53図　中世土師器17　(1/3)



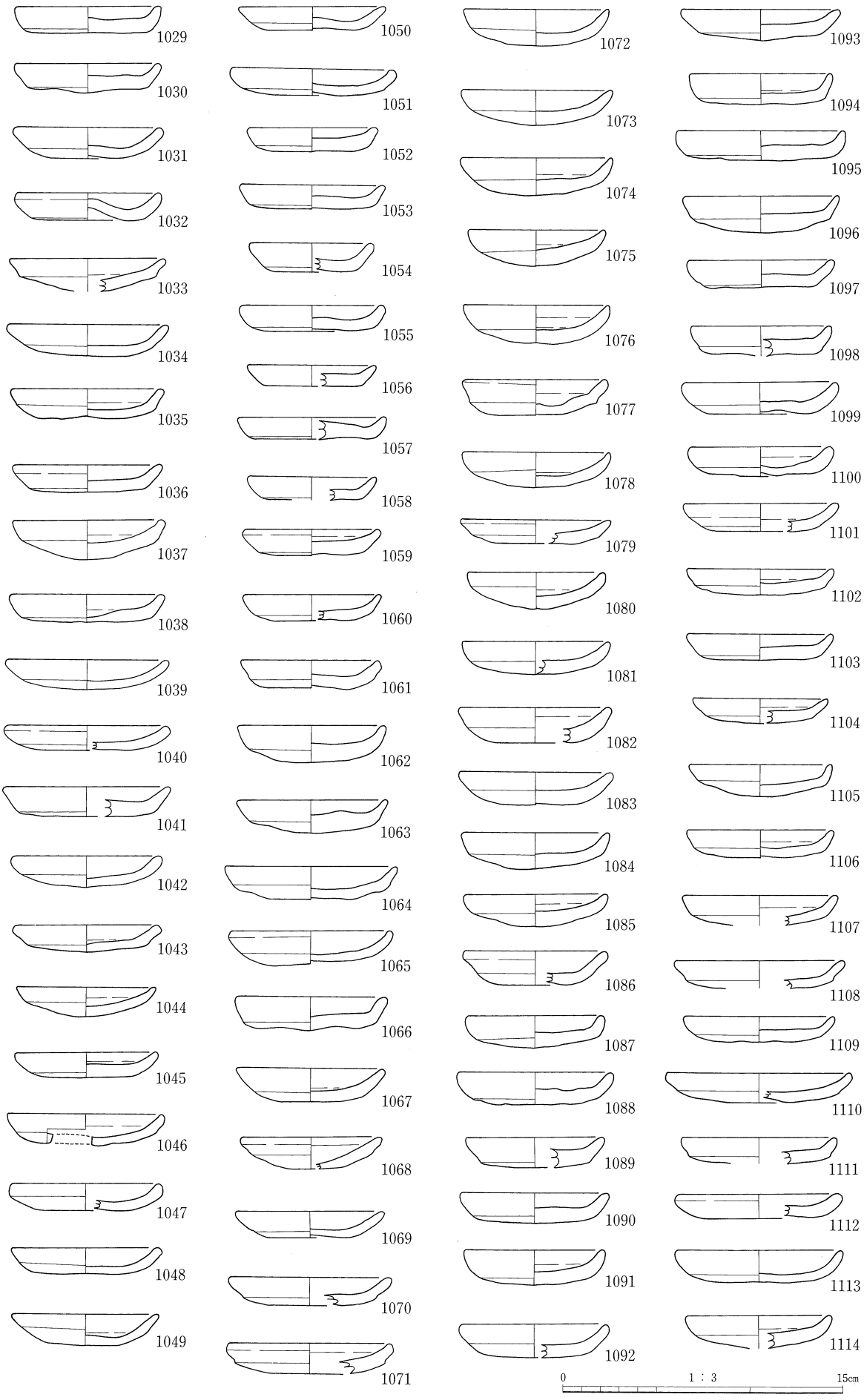
第54図　中世土師器18　(1/3)



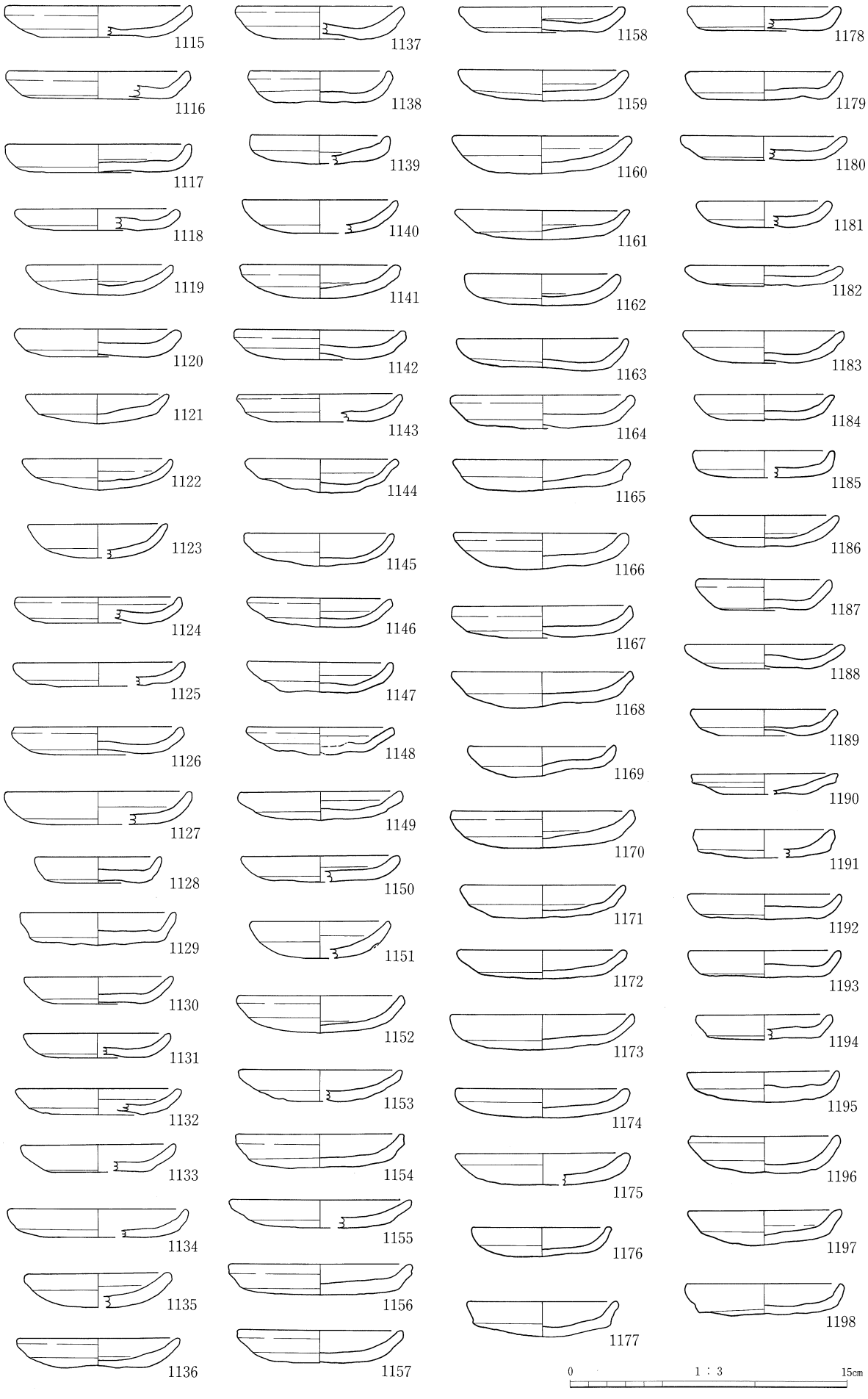
第55図　中世土師器19　(1/3)



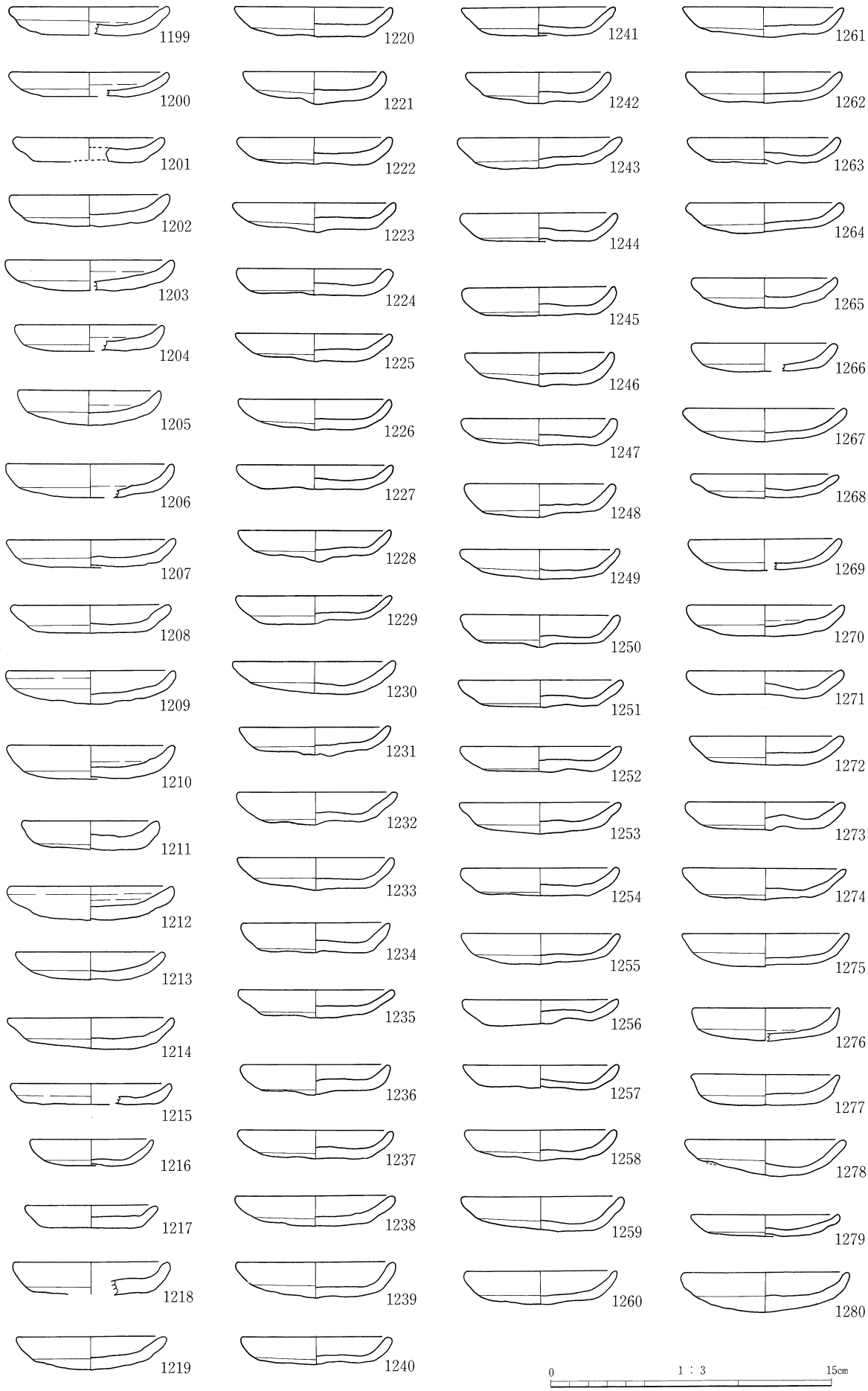
第56図　中世土師器20　(1/3)



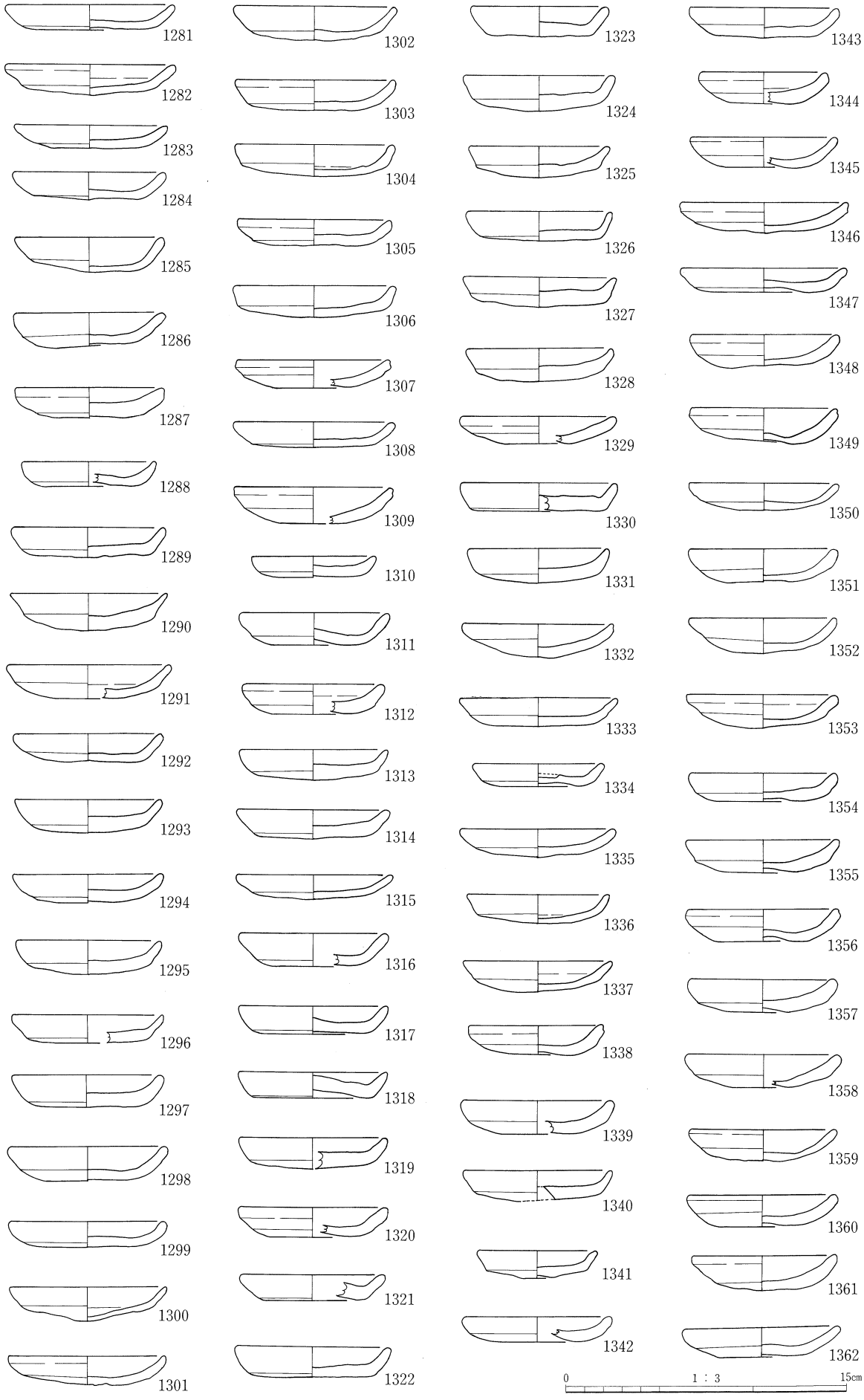
第57図　中世土師器21　(1/3)



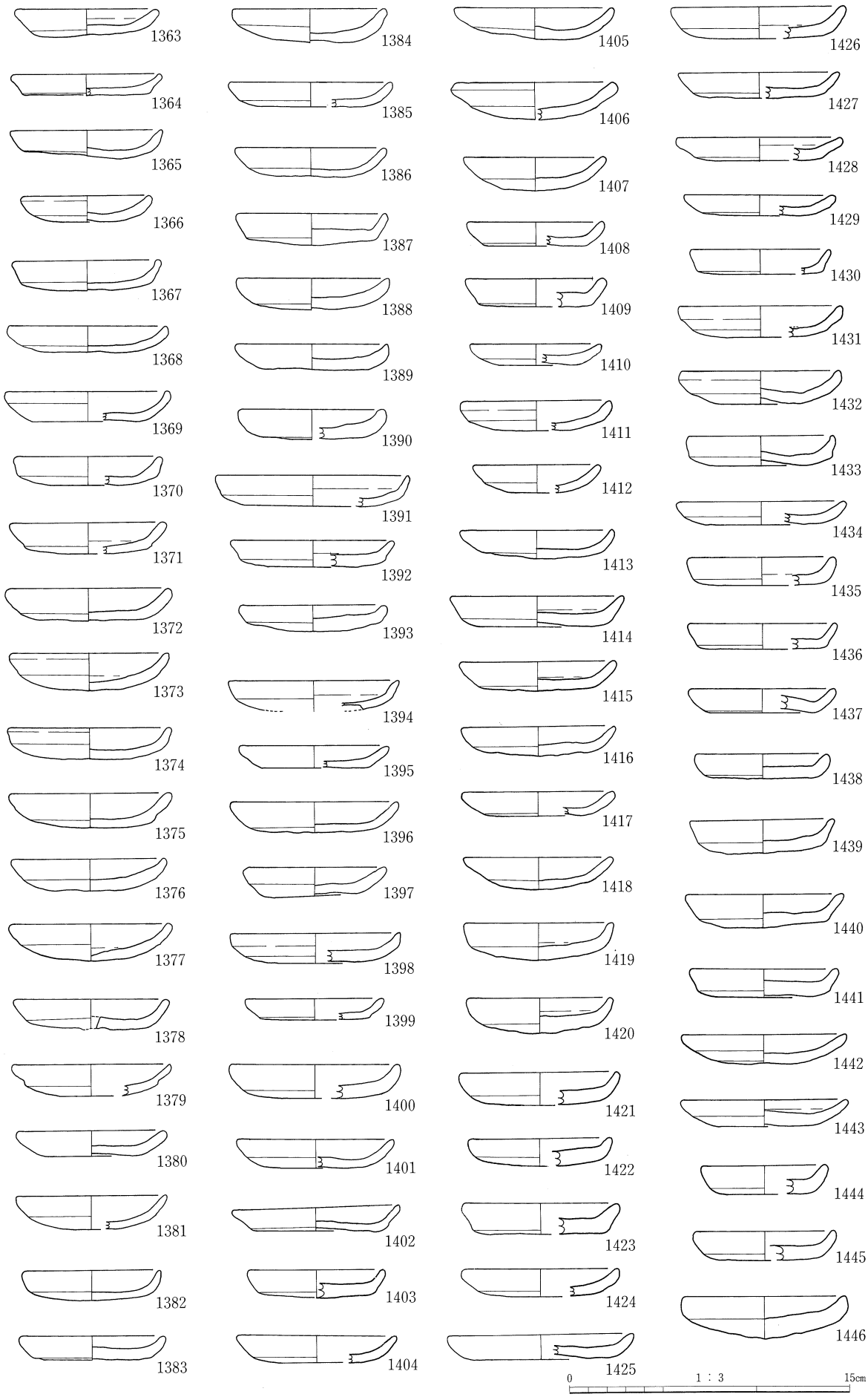
第58図　中世土師器22　(1/3)



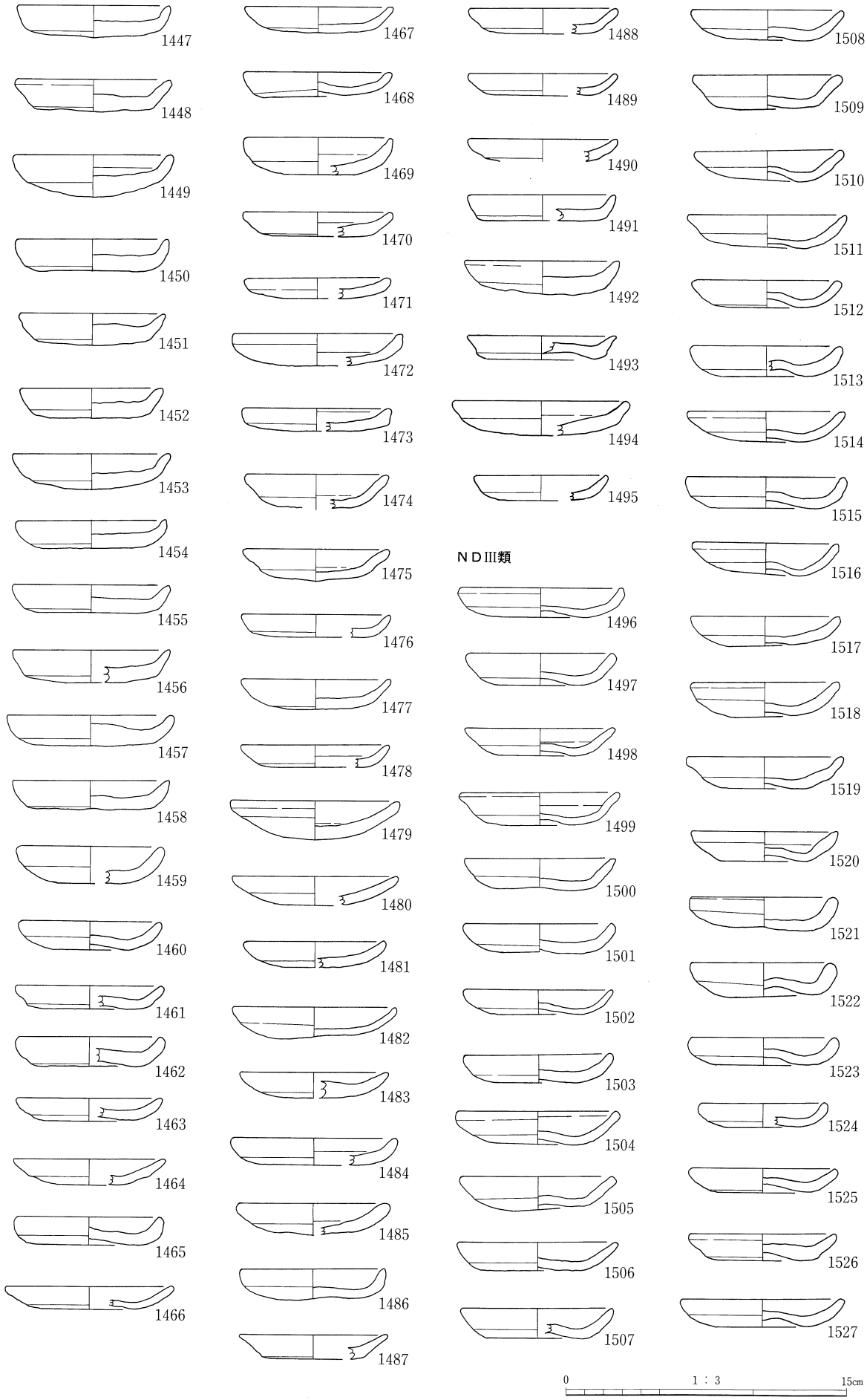
第59図　中世土師器23　(1/3)



第60図　中世土師器24　(1/3)



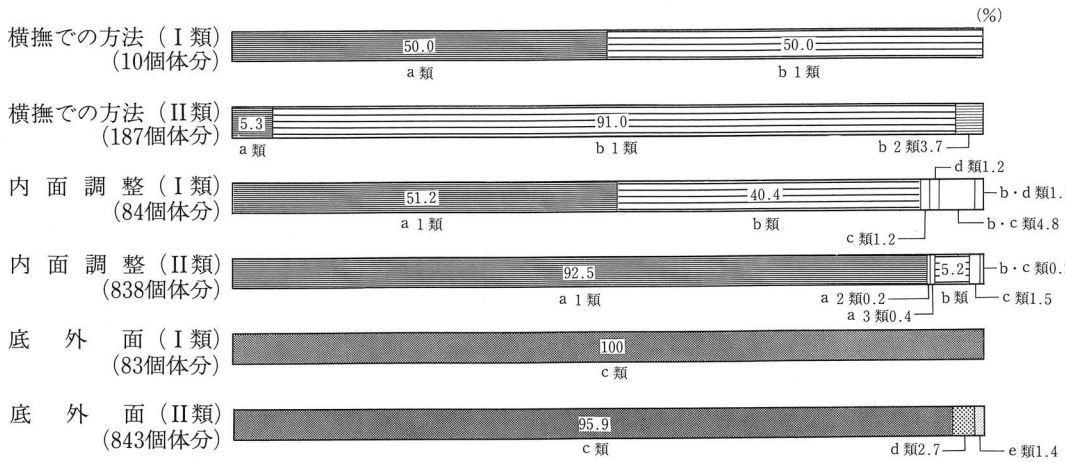
第61図　中世土師器25　(1/3)



第62図　中世土師器26　(1/3)

同様に横撫で後に切り込みをいれて貼り合わせたものである。他は底部外面等に粘土接合痕かと思われる筋が不規則にみられるもの，螺旋状で粘土紐を巻き上げたものかと思われるものもある。

Ⅰ・Ⅱ類には見込みのほぼ中央に穿孔されたものが数点ある。Ⅰ類704は完形で孔は外面に向けて広がっており焼成後に穿孔されたと考えられる。Ⅱ類1046，1398は中央部の割れ口が小さな弧を描くが孔の中の調整が無く完形でないため，穿孔か偶然できた割れ口かは不明である。1201，1340，1378は孔の中が平滑であり，焼成前に穿孔されたと考えられる。

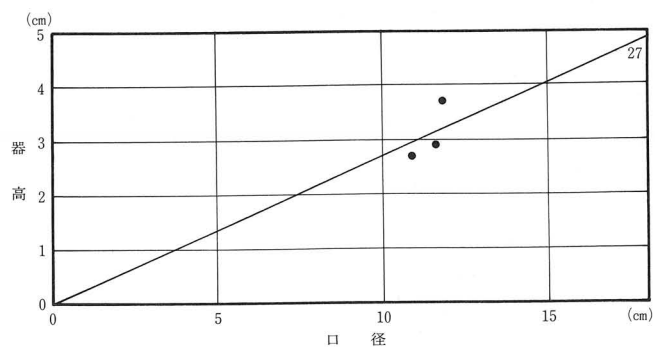


第63図　中世土師器の調整（ＮＤⅠ・Ⅱ類）

ＮＥ類（第64・67図1528～1537，図版20）

口縁部に一段の横撫でを施し，横撫で下を強い指押さえによって成形する。内面の体部下半は強い指押さえによって押し出され深身につくられている。外面は無調整で平滑に調整されてはいないが，体部下半は強く指押さえするため横撫での部分が帯状に突出しており，横撫で直下には細かい爪の痕跡が多く残るものもある。

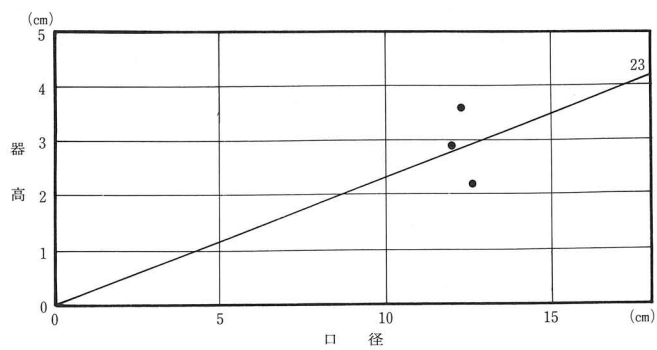
法量は完形のものが少ないため正確な数値を出せないが，口径約11～12cm，器高約2.5～4cm，径高指数は平均27である。色調は，にぶい黄橙色や浅黄色等を呈する。胎土は緻密で石英を含むものが多く，赤色酸化粒や骨針を含むものも少量ある。



第64図　中世土師器法量表（ＮＥ類）

ＮＦ類（第65・67図1538～1541，図版20）

体部が直線的に開き椀形に近い形態で，平底を呈する。横撫で調整の幅は，比較的広く1.9～2.6cmで，1538は底部の際ま

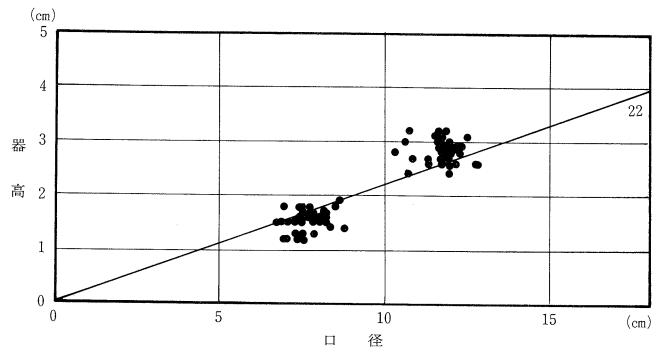


第65図　中世土師器法量表（ＮＦ類）

で横撫でする。量的に少なく，法量に統一性がないので，ＮＣＩ類の特殊形と考えることもできる。ただ1539と1540は形態や法量が類似しており同遺構（ＳＤ911）から出土していることから特定の製作者によってつくられたものと思われる。また1541もやや器高が低く厚手であるが同遺構からの出土である。内面調整は見込みを撫でた後横撫でを施すａ１類で，底外面は無調整で，1538は板状圧痕を残す。法量は，1538は口径13cm，器高2.1cm，1539は口径約12.3cm，器高約3.6cm，1541は口径約12cm，器高約2.9cmである。径高指数は平均値は23であるが，1538では17，1539では29である。色調は灰黄色(1538)，浅黄色(1539)，にぶい黄色(1540)，浅黄橙色(1541)を呈する。胎土は石英や骨針を含むもの（1539・1540）がある。1538は全体的に煤けたように黒変する。1540は口縁部に帯状に煤が付着しており灯明皿に使用したものと考えられる。

ＮＧ類（第66～69・71図1542～1662，図版21・22）

体部は垂直に立ち上がり，平底を呈する。器壁の厚みが均等なものと，体部下半から底部縁辺にかけて器壁が厚くなるものがあり，後者が多い。厚くなっている部分は，断面の気泡が内側のカーブに沿って圧縮されたようになっており，内側から粘土を足して内底面に丸みをもたせたものとも思われる。また前者の中には，強い横撫でのため，底部外面の際が突出し体部と底部の境にズレが生じているように見えるものもある。



第66図　中世土師器法量表（ＮＧ類）

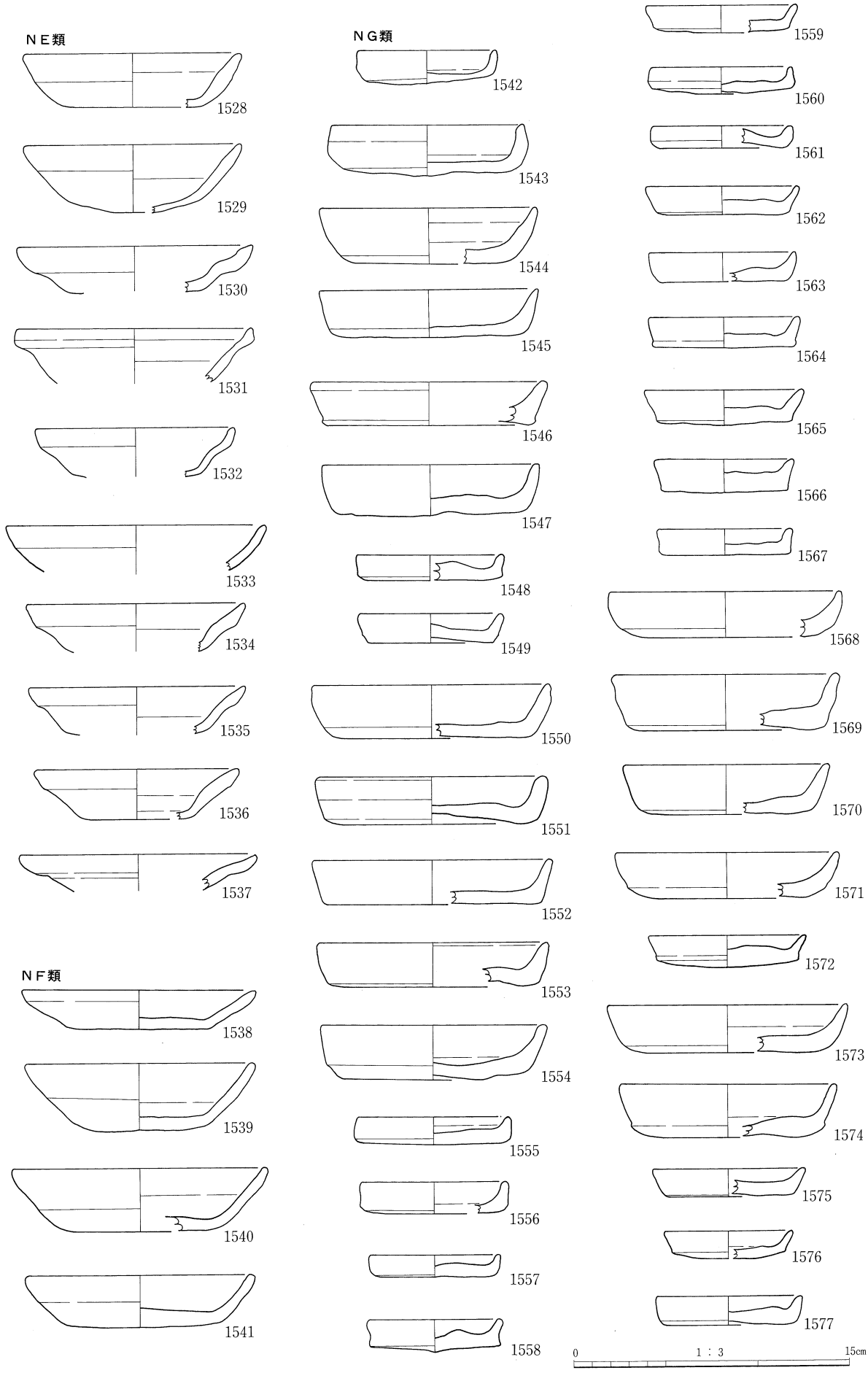
外面が緩やかな丸みをもつものは，底部の中程に粘土接合痕と思われる弧状の割れがあるものが多く，角張るものは底部の縁辺部に接合痕を残すものが多い。小皿は，底部の端を折り曲げるかあるいはつまみ出して口縁部としたものが多い。

口縁端部は，丸みをもつものと先細りするものがある。1263は底部が丸みを持つ特殊な形態であるが，口縁部の形態が似ているためこの分類の中に含めた。

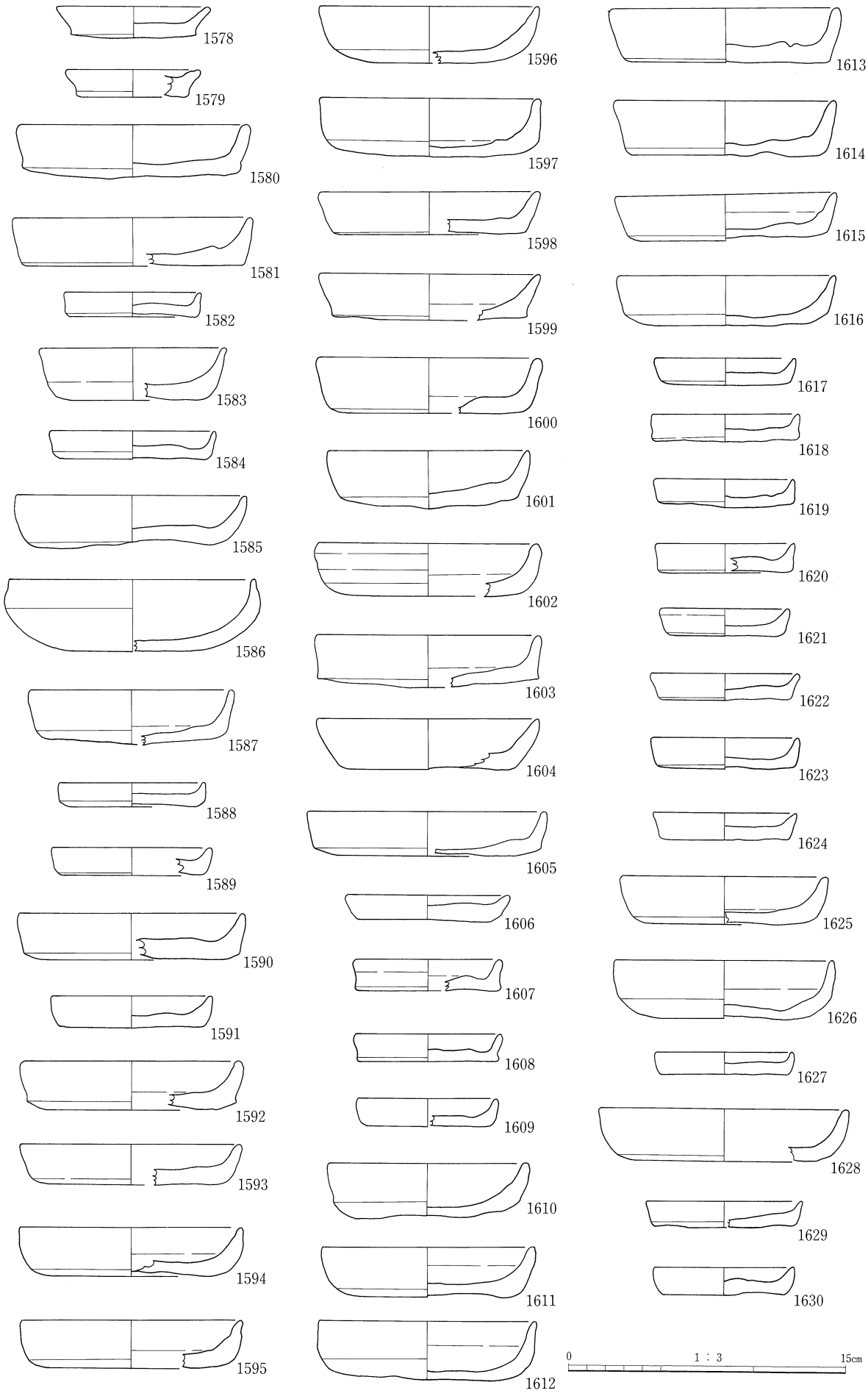
内面調整は見込みを撫でた後横撫でを施すａ１類がほとんどで横撫で後に見込みを撫でるａ２類が１点ある。小皿には見込みを一応撫でてはいるが極端な凹凸をそのままにしたものが多い（後述の1558も含む）。稀に，見込みに細かい爪の圧痕が多数残るものがある（1610・1657）。横撫での方法は撫で抜かないａ類が６個体，右回りに撫で抜くｂ１類が５個体，左回りに撫で抜くｂ２類が１個体ある。底外面は，無調整のｃ類と板状圧痕を残すｄ類で半数，軽く撫でて表面のざらつきを除いたｅ類で半数を占める。少数例として，板状圧痕より細かく，目が規則的なｆ類（刷毛状撫でに似る）が５個体，ｅ類に板状圧痕が残るものが１個体ある。

法量は大小の２規格ある。大型のものは口径約10～13cm，器高2.4～3.2cm，小型のものは口径約７～8.5cm，器高1.2～1.9cmである。色調はにぶい黄橙色を呈するものが多い。胎土は石英を含むものが多く，赤色酸化粒や骨針を含むものも少数ある。

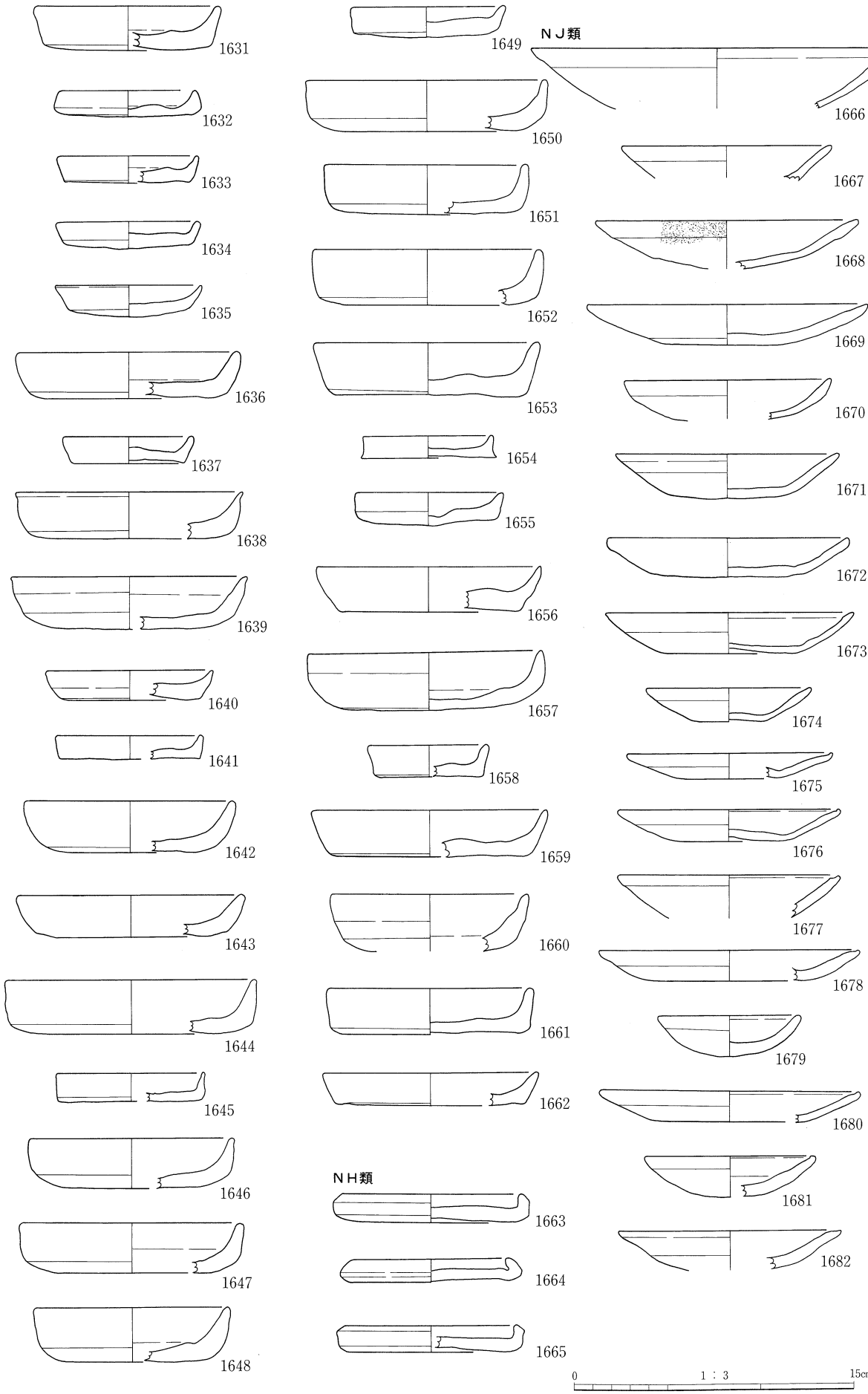
煤の付着するものは少数あるが，明らかに灯明皿として使用されたと考えられるものは少ない。大型の1554はそのひとつで，内面と口縁部全周にタール状の煤が付着している。また1558も内面に煤が付着するが，見込み部分が盛り上がって中心が窪んでおりＲＥＩ類に似ている。ただしこれはＲＥ類



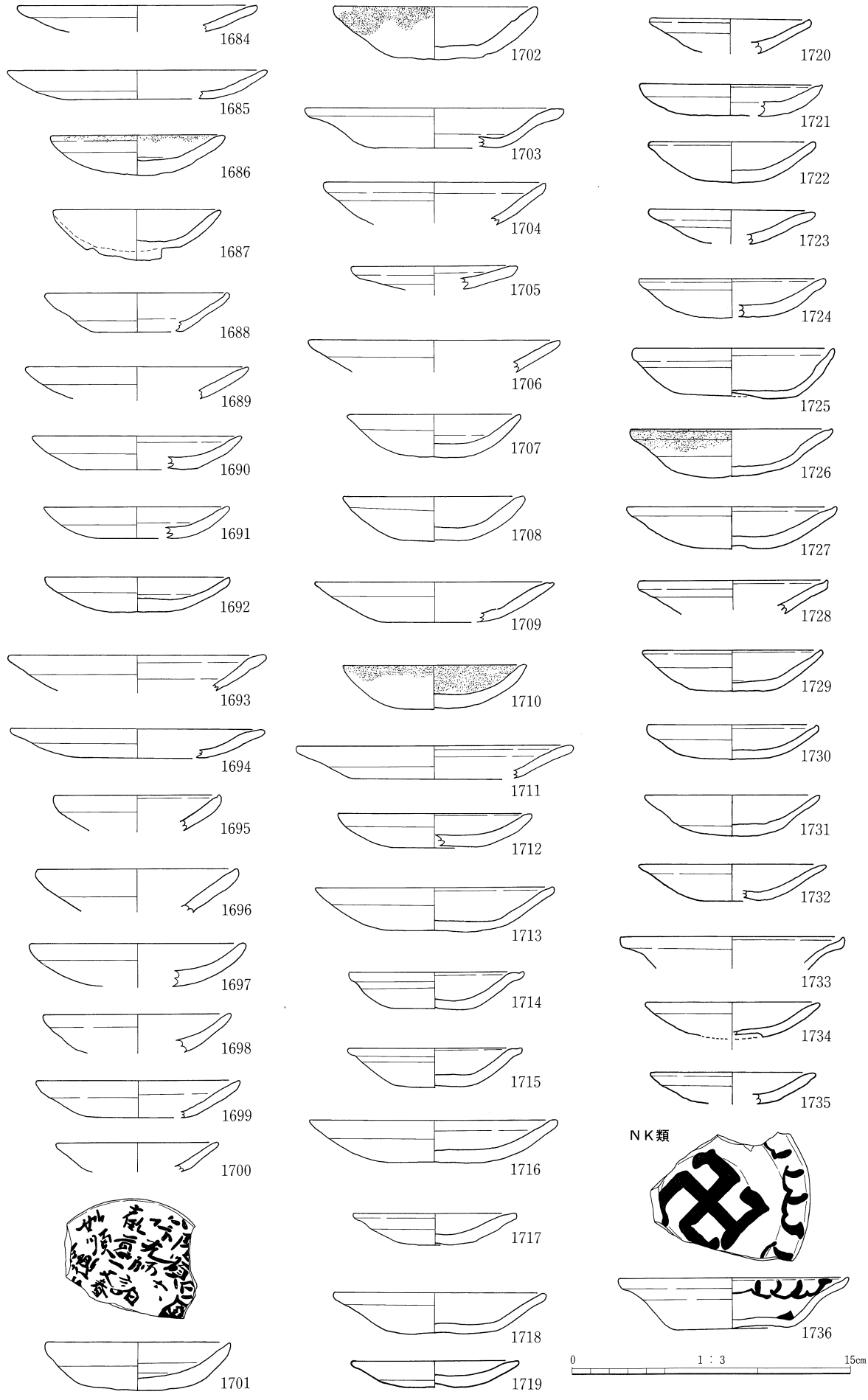
第67図　中世土師器27　(1/3)



第68図　中世土師器28　(1/3)

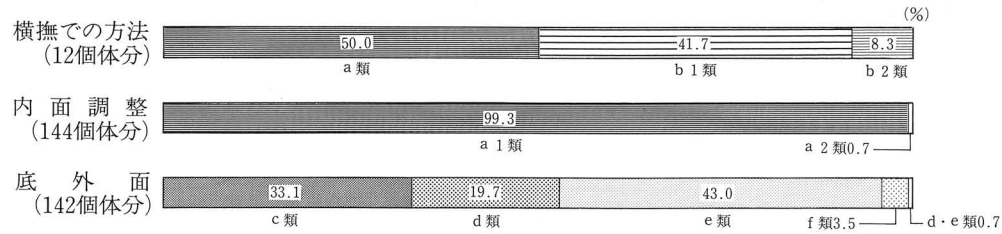


第69図　中世土師器29　(1/3)



第70図　中世土師器30　(1/3)

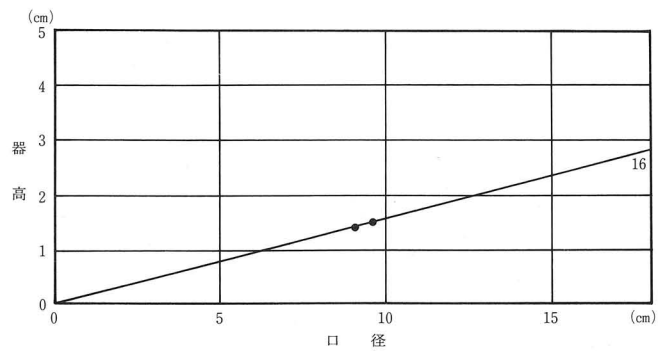
のように整ったものではなく，意図的に作られたものか，調整の手抜きかは不明である。



第71図　中世土師器の調整（ＮＧ類）

ＮＨ類（第69・72図1663～1665，図版22）

いわゆるコースター型である。口縁部の形態は，直立し端部は外側に面を取って断面三角形を呈するもの(1663・1665)と，内側に強く折れるものがある(1664)。底面は内外面とも平坦である。



第72図　中世土師器法量表（ＮＨ類）

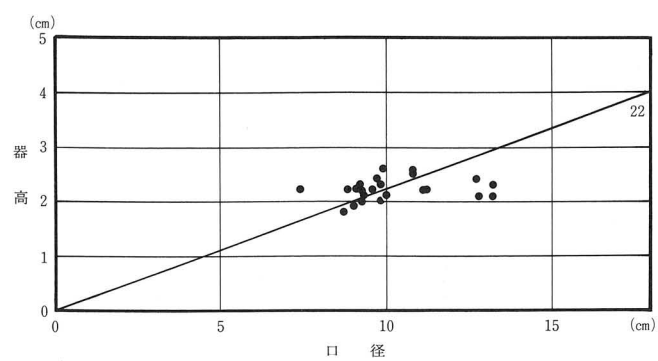
内面調整は見込みを一方向に撫でた後口縁部及び見込みの1/3を横撫でし，底部は無調整である。見込み部分の撫で調整痕が体部の横撫での部分に比べて目が粗いことから，見込みは直接指で撫でず，板または布状の工具等を使用している可能性がある。

法量は口径約９～10cm，器高約1.5cmで，径高指数は16である。横撫で幅は1.1～1.2cmで，底部の際まで撫でる。色調はにぶい黄橙色を呈し，1664は黒変する。1663・1664は胎土に角閃石を含む。

ＮＪ類（第69・70・73・74図1666～1735，図版23・24）

口縁部に一段の横撫でを施す。器壁が薄く体部は直線的またはやや内湾気味に開く。器高は口径の大小による変化がないので，口径が大きくなると見込み部分も広がって平底となり，小さくなると丸底になる。口縁端部を上方へ小さく摘むものが多い。また以下に挙げる少数の特殊形態がある。1714・1715は口縁部が強く外反し，摘み上げた端部の内側には，瀬戸美濃の折縁皿や唐津の溝縁皿にみられるような溝がある。1679は小振りで，口縁端部は丸く，全体の形態は半球状を呈する。1703は口縁部の外反が強く，ＲＪ類になる可能性があるが，小破片であるため不明である。

内面調整は，見込みを撫でた後横撫で調整を施すａ１類がほとんどで，横撫で後に見込みを撫でるａ２類が１個体，ａ４類が１個体ある。ａ４類は1679のみにある特殊な例で，見込みから口縁部の近くまで縦方向に細かく撫で，その後底部に一周，口縁部に一周の幅の狭い横撫でが施される。横撫での方法がわかるものは撫で抜かないａ類が２個体，右回りに撫で抜くｂ１類が10個体ある。大型のものでは右回りに撫でて最後は逆方向へ戻るように撫で抜くものが多い（ｂ１類に含めた)。また内面には布状の圧痕が残るものがある。焼成前に付いたものと思わ



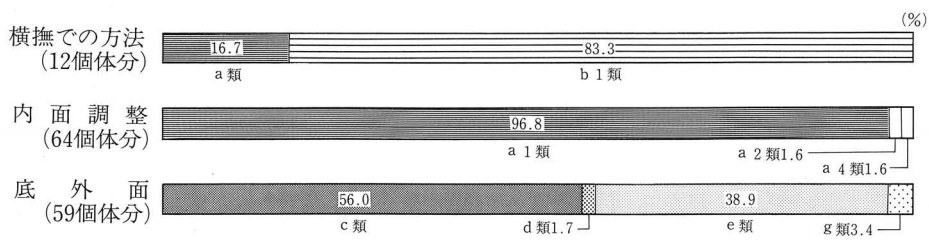
第73図　中世土師器法量表（ＮＪ類）

れ，撫で消されて一部残った状態のものが多い。底外面は無調整ｃ類が半数以上を占め，軽く撫でるｅ類も一定量ある。板状圧痕は１個体にみられる。篦削りするものは３個体ある（1666・1704・1711）が，1666・1711はＲＦ類になる可能性がある。

法量は，口径によりある程度のまとまりで分ければ，大（約13cm）・中（約11cm）・小（約7.5～10cm）がある。しかし，大中小の規格ではっきり分かれているというより，様々な規格が，小から大の間に幅広く分散しているとも考えられる。器高は口径にかかわらず1.8～2.6cmである。特殊形態として上述した1679は，口径7.4cm，器高2.2cmである。

色調はにぶい黄橙色が最も多い。黒変もみられる。胎土は石英，骨針を含むものが多く，赤色酸化粒，角閃石を含むものも稀にある。ロクロ成形で形態の似たＲＦ類に比べると混入物が多く，ざらつきがあるが，非ロクロ成形の中では緻密といえる。煤の付着が多くみられ，口縁の一部に付着するもの，口縁部を一周するように付着するもの，内面全面に付着するものがある。厚いタール状になっているものが目立ち，灯明皿に使用されたものと考えられる。

1701は内面に墨書がある。19文字がみえ，すべては読みとれないが，口縁部から中心へ向かって，「〔 〕遍ヵ」「隆ヵ」「□光師」「妙順」「□徳」，中心からやや逸れた場所に「一回ヵ春」の文字が読みとれる。前者は５名の僧侶の法名と考えられ，その中でも「妙」は浄土真宗の尼僧に冠せられる例が多い。また後者は，「一」と「春」の間の文字が「七」であるとすれば「一周忌」を意味する。形態から落書と考えられる[注1]。一部に，焼成前につけられたと考えられる布の圧痕がみられる。



第74図　中世土師器の調整（ＮＪ類）

ＮＫ類（第70図1736，図版24）

口縁部に一段の横撫でを施す。口縁部は強く外反して水平に近い面をつくり出し，端部は上方に小さくつまみ上げる。平底を呈する。見込み部分にＲＦ類に似た圏線があり，その中は盛り上がっている。圏線の中は一方向に撫で，その後横撫でが施される。底外面は無調整である。法量は，口径12.3cm，器高2.7cm，径高指数は22である。横撫で幅は1.2cmである。色調は浅黄色を呈し，胎土は石英，骨針を含む。内面に墨書がある。見込みに卍が書かれ，口縁部は花弁状の文様で縁取られている。

(3)　大　　皿（第75図1737～1741，図版25）

口径が16cm以上で器壁が厚い大型の皿が，数点出土した。

1737は，平底で体部はやや開きながら立ち上がり，口縁端部は摘み尖らせる。内面調整は見込みを撫でた後横撫でを施し，外面は無調整である。横撫では，段はないが２回程で撫でているようである。色調は橙色を呈する。胎土は石英，骨針を含み，ややざらつきがある。

1738は深身になると思われるもので，口径は約19cmに復元される。横撫で幅は2.2cmで，調整痕は深い沈線状の傷となって残る。底外面は無調整である。色調はにぶい橙色を呈し，胎土は石英を含む。

1739～1741は底部から口縁部にかけての立ち上がりがなく偏平な形態である。1739は器壁の厚みが一定で口縁端部を丸くおさめる。1740は口縁部がやや外反し，端部は丸くおさめる。内面調整は見込

みを撫でた後横撫で，外底面は無調整である。色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土はすべて石英を含み，1741のみ骨針がみられる。また1741の底外面には直径約７cmの輪高台状のものの接着痕が残るが，脚部がどのような形状であったのかは不明である。高坏の可能性がある。

(4) 高台付皿（第75図1742～1747，図版25）

輪高台の付く皿は中世前期の溝，土坑から少数出土している。

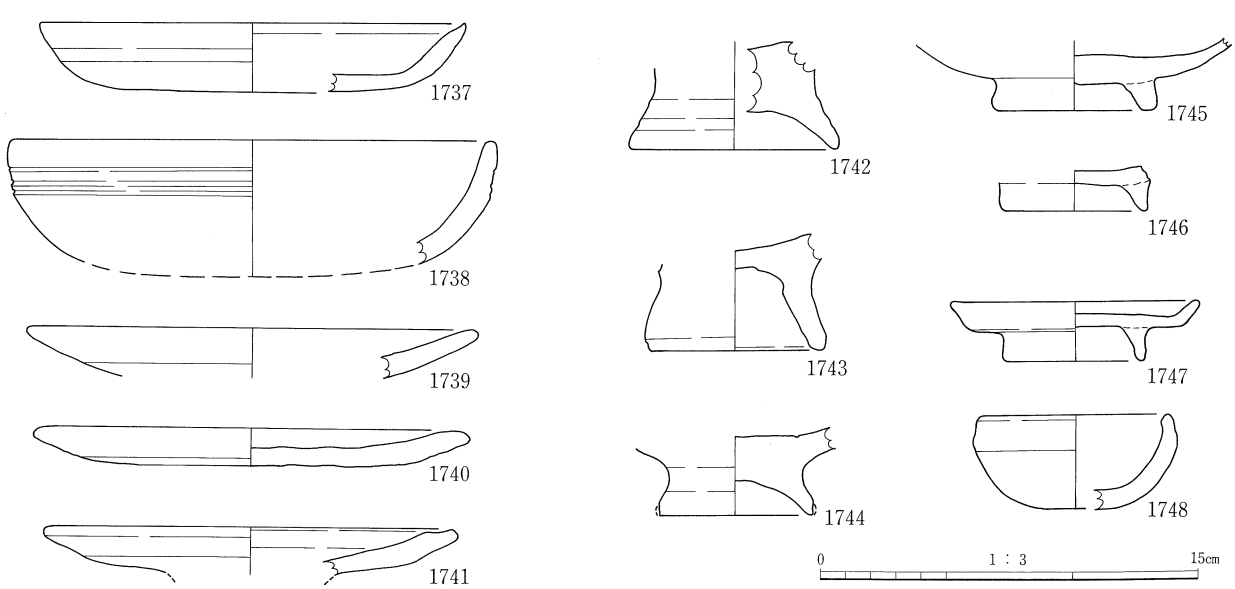
1742～1744は高足高台がつく。上部の形態は不明である。1742・1744はロクロ成形で，内側が丸くえぐられた形態でロクロ撫でを施す。色調は1742がにぶい黄橙色，1744はにぶい橙色を呈する。胎土は，1742は石英を含み，1744は骨針を含む。1743は非ロクロ成形で，帯状の粘土を輪にして貼り付けている。体部内面は撫で，高台部分は下半を横撫でするが，付け根部分は無調整で，指頭圧痕を残す。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は石英，赤色酸化粒を含む。

1745～1747は低い高台が付く。1745は端部が丸く厚みのある高台で，体部は口縁部を欠くが皿形になると思われる。体部内面は刷毛状撫でを施し，外面は軽く撫でるが気泡がみられ無調整に近い状態である。底外面は高台に沿って撫でられているがロクロは使用されていない。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は石英を含む。1746の高台は断面三角形を呈する。内面は撫で，外面は高台周辺を撫でる。ロクロは使用されず，高台接着部の外面は丁寧に撫でられているが，内面調整は雑で接着面に隙間がある。色調は橙色を呈する。胎土は石英と植物の繊維かと思われる糸状の炭化物を含む。1747は体部は口縁部が上方へ短く屈曲し底部が平坦である。高台は端部が丸く厚みがある。高台の形態と接着部分の調整は1745に似る。非ロクロ成形で，高台はやや歪んで厚みも均一でなく，全体の器形にも歪みがある。体部内面は見込みを一方向に撫でた後横撫でを施す。外面は全面に横撫でを施す。色調はにぶい黄橙色を呈し，胎土には石英，角閃石，骨針が含まれる。

(5) そ の 他（第75図1748，図版25）

小型の容器で，完形ではないが残存部から復元すると口径7.5cm，器高3.8cm程度になる。横撫で幅は1.4cmで，口縁部に施している。底部内面は不定方向に撫で調整しているが，外面は成型時に指で押さえた痕跡を残すだけである。付着物はなく，用途は不明である。色調は橙色を呈する。胎土は石英を含み，ややざらつきのある土である。（越前慎子）

注１　墨書の解読については本郷真紹氏にご教示頂いた。



第75図　中世土師器31　(1/3)

2．珠洲・珠洲系陶器

珠洲は遺跡全般にわたって多数出土しており，推定される年代幅も珠洲初現から末期までの長期に及ぶ。本章では，出土遺構の年代を考慮しつつ，現在編年の標式となっている窯資料との対比によって個々の珠洲片の年代を推定した。編年観は吉岡康暢氏の研究成果を拠り処としており[注1]，文中で用いる時期区分は，氏の７期編年を準用する。７期はさらに細分され小型式が設けられているが，当遺跡の資料を小型式に分類することは困難であるためⅠ～Ⅶ期の大枠にのみ分類した。ただし当遺跡から出土した資料の中には現在確認されている窯跡資料に先行するものとしてⅠ$_1$期の時期区分を与えられているものがある[注1]ので，Ⅰ$_1$期のみ小期を明示した。なお，各期の歴年代は次のように推定されている。Ⅰ$_1$期：12世紀中葉，Ⅰ期：12世紀後半，Ⅱ期：13世紀前半，Ⅲ期：13世紀中葉～1270年代，Ⅳ期：1280年代～1370年代，Ⅴ期：1380年代～1440年代，Ⅵ期：1450年代～1470年代，Ⅶ期：1480年代～1500年。また，叩打成形・還元焔焼成・無釉の産地不明の陶器片を，珠洲系陶器として章末に記す。

(1)　甕（第76～92図，図版26・27・30・32）

１～５はⅠ$_1$期に比定される。１は，体部が膨らみ，口頸は弧状に強く外反する。口縁端部は外方へ短く挽き出され，断面は鋭い三角形を呈する。頸部下方から体部にかけて，内面に紐巻き上げ痕を残す。頸部上方の内面には，横撫で或は工具によって生じた段が狭い間隔で数条みられる。外面は肩部から下に平行叩きがみられる。Ⅰ期以降に比べると，幾分下がった位置から叩打されている。２・３は包含層から出土した破片で，同種のものと思われる。従来，珠洲Ⅰ$_1$期とされてきたが，今回の三辻氏による胎土分析の結果，珠洲の胎土とは若干異なることが判明した。口頸部は直線的に開き，端部は上方へ短く挽き出され，三角形を呈する。４は外面に格子叩き，内面は粗い撫でを施し，指頭圧痕を残す。内面は凹凸が目立つが，珠洲特有の石を当てたものかどうかは明確にわからない。胎土は２～３㎜の白色粒や小石を含む。断面はサンドイッチ状になっている。内面の一部に漆が付着する。須恵器と珠洲の中間的な要素をもつ資料であるが，珠洲とするには今後の検討を要する。５は底部破片で，内面に同心円当て具痕，底外面に木の葉痕を残す。葉身は10㎝程度で，複状葉と思われる。葉柄は約３㎜で中肋も太く，クズの可能性が高いが，側脈が若干密であり断定し難い[注2]。また外面の底部際には板状の工具の端を斜め（左上がり）にして，連続的に押圧した痕跡が残る。

６～20はⅠ期に比定される。コの字状に外反する長頸をもつ。口縁形態は，ほぼ水平に挽き出し先端を摘み嘴状ないし舌端状としたもの（６～８・10～13・15～20），端部を鋭く外屈，垂下したもの（９），器壁が薄く，端部は直線的に斜め上方へ屈曲させたもの（14）がある。ただし14は長頸であることからⅠ期の甕としたが，特殊な形態であるので今後検討を要する。調整は口頸を丁寧に撫で，外面は頸基部から若干下がった位置から平行叩き，内面は当て具痕を残す。口縁を屈折する際の工具による押圧痕を残すものが多い（６・７・13・17・19）。15・16は口縁部内面に波状文が施される。

21～25はⅠ～Ⅱ期に比定される。口縁形態は，端部を外屈，垂下したもの（22）と，ほぼ水平に挽き出し，やや短い嘴状としたもの（21・23～25）があるが，外面は，頸基部直下から叩打するもの（22・24）とやや下がった位置からのもの（25）がある。25は口縁を屈折させる際の押圧痕が残る。22・24は頸基部内面に粘土接合痕を残す。24はＳＤ2453とＳＥ1255の接合資料である。

26～29はⅡ期に比定される。口縁端部の挽き出しが弱い嘴ないし舌端状のもの（26・29），肥厚し短く垂下するもの（28），長頸でコの字の形態を保ちつつ端部は方頭におさめたもの（27）がある。外面叩きは頸基部直下からのもの（27・29）と一段下がった部位からのもの（25・28）がある。28は内面に頸部を外反させる際に使用した工具痕が強く残っている。

30～37はII～III期に比定される。口縁形態は，長頸でくの字状に屈曲し端部は円頭ないし方頭を呈する。肩部より膨らむものと，膨らみのないもの（35）がある。外面は頸基部より若干下がった位置から平行叩き，内面は頸部は丁寧な撫でにより粘土接合痕等を消し，体部は当て具痕が残る。35は内面を縦方向に細かく撫で，当て具痕を消している。撫での間隔は密で，一単位５～７㎜を測る。33は焼成があまく，軟質で白色に近い色調を呈する。

38～50はIII期に比定される。口縁形態は，長頸でくの字状に深く屈折し端部は円頭ないし方頭を呈するもの（38～46・49・50），内屈するもの（47），短い円頭を呈し，深く屈折するもの（48）がある。外面は頸基部より若干下がった位置から平行叩きを施すもの（38～44・47・49・50）と直下から施すもの（45・46・48）がある。叩き原体は，３㎝幅に約12条を数えるものから，約８条の粗いものまでが混在する。口頸から体部まで全体的に薄作りである。体部は，肩部が若干張り出すが，膨らみを抑えた器形である。焼成は，大半がよく焼き締まっているが，焼きが甘く粉っぽいもの（40）もある。48は胎土に含有する粗い礫粒が目立つ。また，内面に漆が付着している。

51～90はIV期に比定される。口縁形態は，短頸でくの字状に屈折し端部は方頭ないし円頭を呈するもの（51～62・64～66・70～74・79・85～88・90），短く下向きに屈折し，方頭を呈するもの（63・67～69・75～78・80～84・89）がある。体部は，肩の張り出しが無く，膨らみを抑えたものがほとんどである。口頸は丁寧に撫で，体部は外面平行叩き，内面当て具により叩打する。外面は頸基部との間隔をほとんど空けずに叩打をはじめるものが多く，原体は３㎝幅に8～9条に統一される。焼成は若干の差はあるが良好である。胎土は前段階までのものと同じく，微細な白色粒や海綿骨針を少量含むものが多い。68は肩部に「⊗」の記号文が刻印されている。径13㎜を測る。78は肩部に「｜」の篦記号をもつ。

91～104はIV～Ｖ期に比定される。口縁形態は，短頸または若干長頸に近いほぼ直角のくの字状に屈折し端部は方頭ないし円頭を呈するもの（91・93・94・97～103），短く下向きに屈折し方頭を呈するもの（95・104），長頸の水平口縁で方頭を呈するもの（96）がある。91の口縁は，IV期の平均的な短頸方頭より若干屈曲がゆるく長頸で，肥厚している。91・92の底部は砂底である。92は，ＳＤ3425・ＳＫ3528・ＳＥ3599・ＳＫ3750の４遺構より出土した接合資料である。外面は平行叩き，内面は上半に当て具痕を残すが，下半は撫でによって，体部と底部の境の接合痕を丁寧に消している。93・102は，若干頸部が引きのばされ，長頸に近くなっている。93は胎土に粗い礫粒を多く含み，口縁部の作工はあまく，工具で頸部を連続的に押圧した痕跡が残っている。95は口縁部が肥厚し，屈曲は深い。肩部は厚さ１㎝弱の薄作りとなっている。胎土には海綿骨針や白色の微細粒を含む。97，100は漆継ぎ痕がある。100は外面に約1.5㎝幅の織物片が漆とともに付着している。

105～126はＶ期に比定される。口縁形態は，短頸で直角または鈍角のくの字状に屈曲する方頭（105・107～117・120・122～125），円頭（118・121），長頸でくの字状に折れる方頭（126），長頸の水平口縁（106），短頸の水平口縁（119）がある。肩部の張り出しはほとんど無く，体部の膨らみはわずかである。外面の平行叩きは，すべて頸基部直下から施され，中には頸基部の調整が粗雑で体部との境が明瞭でないため，頸下半にも叩打をうけているもの（107・109・112～114・116）がある。原体は118が３㎝幅に約10条を数える他は，７～８条である。胎土は，粗い礫粒や白色粒を含むものが多い。108・113・121・123は断面に漆継ぎ痕がある。

127～136はＶ～VI期に比定される。口縁形態は，短頸で直角または鈍角のくの字状に屈曲する方頭（127・129・131・134），円頭（132・133・135・136），ほぼ直立に近い立ちあがりで端部がやや内湾するもの（128・130）がある。外面叩きは頸基部直下からであるが，頸部と体部の境をこえて，頸部

下半にかかるものが多い。頸部の調整が粗雑なものが多く，132，136などは端部が工具により押し潰され歪んだままになっている。叩き原体は3㎝幅に6～7条を数える。内面当て具は前段階までと同様のものの他に，当て具自身が大型かあるいは器面を転がしたものか判然としないが，一単位が大きく，凹みも深いもの（131・134・136）がある。胎土は海綿骨針や微細な白色粒を含むものと，粒の粗い礫粒を含むものがある。焼成は若干焼き締まりに差があるが，良好である。131～133は肩部に「大」の刻文をもつ。筆順，書体，工具の太さは三者三様である。

(2) 擂　　鉢（第93～101図，図版28・29・31・33）

137～179はⅠ期に比定される。体部は内湾ぎみに膨らみをもって立ちあがる。器壁が薄く小振りなものが多い。口縁形態は，外傾するもの（137・139・143・144・160・179），端部が拡張ぎみになるもの（138・155・166），端部に水平な面をとるもの（140～142・146～149・151・152・156・161～165・167・170・171・173～178），内傾するもの（145・172），端部は外傾し内端を嘴頭状に小さく突出させたもの（153・157・168），小さく丸くおさめるもの（154・159）がある。内外面のロクロ目が顕著で，器面の凹凸が目立つものが多い。底部の切り離しは，回転糸切または静止糸切による。140は右回りの回転糸切である。150は，中心が円弧を描き回転糸切状になっており，その上に重なるように左右端に直線的な静止糸切痕が残る。169は約半分が直線的な静止糸切状になっており，端の方では回転糸切状に糸目が弧を描いて集結している。175は静止糸切である。小破片が多いため明確ではないが，卸目をもつのは稀である。139は5～6条の卸目をまばらに入れる。原体は幅が狭く，溝は浅い。173は，横方向に3条の波状の卸目が入る。胎土は海綿骨針と微細な白色粒を含むものが多い。焼成は良好であるが，やや焼き締めのあまいものもある。

180～184はⅠ～Ⅱ期に比定される。180は体部がやや膨らみをもちつつ開き，口縁部は内湾ぎみにおさめる。端部は外傾する。10条の波状の卸目が口縁下から底部にかけて施される。底部の切離しは静止糸切による。181～183は口縁部は水平に面をとる。181は口縁部外面を若干強く撫でる。小破片のため，181～183の卸目の有無はわからない。184は口縁端部は水平に面をとるが，上面の撫でが強く，口縁下はしっかり摘んで撫でているため端部がやや拡張ぎみになっている。6～7条の卸目が浅く施される。胎土には微細な白色粒や海綿骨針を含むものが多く，焼成は良好である。

185～205はⅡ期に比定される。口縁部の形態は，外傾し方頭を呈するもの（185・186・196～200・202・205），外傾し内端を爪状に尖らせたもの（188・191・193・195・201・203），水平口縁で端部がやや拡張するもの（187），口縁下外面の撫でがやや強い水平口縁（190），水平口縁で方頭を呈するもの（192・204）がある。Ⅰ期のように体部ロクロ目の凹凸がはっきりしているものは無く，滑らかにロクロ撫でするものが多いが，粘土接合痕がきれいに消されていないもの（198・201）もある。底部切り離しは静止糸切りによる（189・196）。卸目は細く，溝も浅い原体によってまばらに上から下へ直線的に入れるもの（184・185・188・190・198・200・202・203），装飾的な波状の卸目を入れるもの（194・196）がある。一単位の卸目を数えられるものは，198が1㎝幅の原体で5条，200が1㎝幅の原体に8条，203は2.3㎝幅に10条，194が1.5㎝幅に5～6条，196が1.2㎝幅に5条である。197は外面と口縁端面に同じ原体を用いた波状文を施す。8㎜幅の原体に3条を数える。

206～213はⅢ期に比定される。体部上半の器壁の厚みを均一に作っている。口縁形態は，外反し内端を摘み上げ尖らせるもの（206），外反し方頭を呈するもの（209・212・213），水平口縁で外端を挽き出したもの（207・208・211）がある。卸目は，前段階より幅広の原体を使用し，溝も深く刻まれている。209は2.8㎝幅の原体に卸目10条，212は1.9㎝幅に8条を数える。211の卸目は途中で破片が割れ

ているため，原体の幅，条数は不明であるが，残存部分では1cmに7条を数え，前段階の幅狭で溝の浅い原体の名残りとみられる。胎土はやや粗い白色粒や礫粒を含み，前段階の緻密さを失ったものが多い（206～210・212）。206は特に混入物が目立ち，径7㎜の礫粒等が器表面を割って露出している。

214～226はIII～IV期に比定される。器体は内湾し膨らみをもって立ちあがるものと，直線的に開くものがある。口縁形態は，外傾し方頭を呈するもの（214・216～218・221），水平に面をとるもの（215・219・220・222～226）がある。卸目は，幅広で溝の深い原体により，間隔をあけながら施入されている。卸目の数を確認できるものでは，215が2.4cm幅で12条，217が2.6cm幅で10条を数える。体部上半から口頸までの器壁が均等なものが多いが，口縁基部を若干強く摘んで撫でるもの（217・218・220）もある。胎土は海綿骨針や微細な白色粒を含むものの他に，やや粗い礫粒を含むものもある。焼成は大半が良好であるが，やや焼き締めのあまいもの（219・224）もある。

227～242はIV期に比定される。器体はほぼ直線的に開くものが多いが，わずかに膨らみをもって開くものもある。器壁に一定の厚みがあり，法量も大型のものが目立ってくる。口縁形態は，厚みがあり角張りの強い方頭を呈するものが多く，外傾するもの（227・229・230・236・237），水平に面をとるもの（228・231～235・238～242）がある。水平口縁は，面を作る際に外方へわずかに挽き出す傾向がみられる。卸目は幅広で溝の深い原体を用いるものがほとんどである。239のみ原体は幅広であるが，溝が浅く弱く施入されている。卸目の入れ方は，前段階に比べ密であり，体部上半でやや間隔を開けるものが多い。また間隔のとり方が不規則なものもある（237・239）。卸目の数を確認できるものでは，228が2.7cm幅に11条，229が3cm幅に10条，233が3cm幅に11条，236が2cm幅に10条，237が2.5cm幅に9条，237が3cm幅に15条，238が3cm幅に15条，239が2.3cm幅に10条を数える。焼成はほとんどが良好で堅緻に焼き締まっているが，胎土に粗い礫粒や白色粒を多く含むもの，気泡の目立つものが多い。

243～281はV期に比定される。器体はほぼ直線的に開くものが多く，底部の立ち上がりが急でやや深身のものも若干ある（243・262・281）。口縁形態は，外傾し端面を広くとる方頭（243・251・260・262），口縁の器肉が一定の三角頭（246・247・249・250・253・255・258・274），端面が肥厚した三角頭（248・252・254・261・263・267・269・277・278），幅広の端面が鋭い長三角頭（256）がある。また加飾として口縁端面に櫛目波状文をめぐらすものが多くなる。卸目は密度が高く重なり合うように隅無く施入されており，櫛歯原体も幅広でしかも一条の溝幅が太く深いものが多い。また，溝の断面が丸く，凸部は細い筋状になったこの時期特有の卸目もみられる。卸目の条数を数えられるものは，243が3cm幅の原体に12条，248が3cmに11条，249が3.2cmに12条，251が3.5cmに14条，262が3.5cmに11条，264が3.3cmに9条，266が2.5cmに10条，270が4cmに14条，272が2cmに9条，273が3.5cmに11条，274が2.3cmに9条，277が3.2cmに9条，281が3cmに8条である。また，底内面の卸目は，体部から延長して上から下，または下から上へ放射状に施すもの（243・273・281），放射状ではあるが体部とは一度分断されるもの（265），体部から延長したものに重ねて底内面のみ放射状に短く追加するもの（251），体部は放射状に施入し底内面は中心に向かって弧を描くように施入するもの（280）がある。底外面の切り離しは静止糸切による。胎土は，2～3㎜の粗い白色粒・礫粒を含むものが多くなる。焼成は大半が良好であるが，焼き締めのややあまいもの，酸化硬質のもの（249）もある。

282～288はVI期に比定される。器体は直線的に開く形態である。口縁形態は，端部の面とりが消失しやや肉厚で丸みをおびたもの（282），面とりが弱く端部を細く挽き出した長三角頭（283・285・288），端面が肥厚し内側へ傾斜した三角頭（284・286・287）がある。282のみ形骸化した口縁端面に，溝の深い幅広の原体により櫛目波状文が加飾されている。卸目はV期と大差ない原体を踏襲しているが，

焼き締めがあまく軟質のため磨耗しているものが多い。卸目の条数を数えられるものは，283が２㎝幅の原体に７条，284が2.3㎝幅に８条，286が３㎝幅に11条(割れ口にかかるので或いはそれ以上)，287が3.2㎝幅に12条である。胎土は，雲母，微細な白色粒の他に，３～５㎜の粗い白色粒または礫粒を含み気泡も多く粗雑である。焼成は良好なもの（282・288）もあるが，他は焼き締まりが悪く軟質で砂気が多い。また部分的に酸化し赤味があるもの（285）もある。

(3) 壺（第102～104図，図版29～31）

289・290はⅠ$_1$期に比定される。289は口頸が直線的に立ちあがり端部は尖頭で外方へ小さく摘み出している。内外面横方向に撫でられているがロクロを使用したものかどうかは不明である。290は叩打成形の大壺または中壺の口頸部である。短頸でくの字状に立ちあがり，端部は方頭を呈する。口縁端面と頸部内面に７条の櫛目波状文を加飾している。内外面は丁寧に横撫でされている。胎土は両者とも微細な白色粒を含む。焼成は良好である。

291～304はⅠ期に比定される。291はロクロ成形で撫でが強くロクロ目が稜をなしている。口縁部は残存していないが，頸部径が小さいため水瓶と推測される。頸基部は精巧な蓮弁座で飾られている。肩部には断面三角形の突帯が一周する。胎土は少量の微細な白色粒を含み，よく焼き締まっている。外面は自然釉を被り褐灰色になっている。292～298はロクロ成形の口頸部である。短頸で弧状に外反するものが多く（292・294～296・298），やや直線的に斜めに立ちあがるもの（293・297）もある。端部は外傾するもの（293・296・297・298），垂直方向に面をとるもの（292・294・295）がある。299は倒卵形の上胴部で，肩部には上下に大きく弧を描く櫛描波状文が加飾されている。櫛歯原体は1.2㎝幅に７条を数え，溝は浅く彫り込まれている。300～302は四耳壺で，ブリッジ状の横耳が付く。口頸は外反し端部は外面で垂直方向に面をとる。300は，肩部に２段の櫛描波状文が加飾されている。301は肩部に３～４条の櫛描波状文を施す。肩部で二つに割れた後，漆継ぎにより接合されている。底部切り離しは静止糸切による。303・304は底部で，底外面には回転糸切痕が残る。304は糸切後，底外面の端に沿って帯状の砂の付着がみられる。胎土は少量の微細な白色粒を含み，よく焼き締まっているものがほとんどであるが，粗い白色粒・礫粒を含みややキメの粗いもの（304）もある。

305～309はⅡ期に比定される。305・306・308・309は叩打成形である。305・308・309は頸部がくの字状に折れ端部は外傾する。口頸部の調整は丁寧であるが回転台を使用したものかどうかは不明である。外面は頸基部より若干下がった部位から平行叩き，内面は当て具痕が残る。308は頸部を強く撫で，基部には段ができている。306は頸部がほぼ直立して立ち上がり，端部は水平に面をとりつつ外方へ嘴状に挽き出している。丁寧に横撫でされている。307はロクロ成形である。頸部は弧状に外反し，端部は方頭を呈し外傾する。305～309の胎土は微細な白色粒や海綿骨針を少量含み，焼成は良好である。

310～324はⅡ～Ⅲ期に比定される。310～313はロクロ成形の底部破片である。底部はすべて静止糸切で，糸切の上に板状圧痕を残すもの（311・312）もある。311・313は内外面とも平滑にロクロ撫でされているが，312は底部内面に螺線状に捻れた圧痕を残す。ロクロ回転を利用して，底部を絞りながら内側を縦方向に強く撫でた痕跡であろうか。胎土は，311・313が粗い白色粒・礫粒を含み，他は精良な土を利用している。焼成はすべて良好である。314は壺類に含めたが全体の器形は推定し難い製品である。胎土の精緻さからⅡ～Ⅲ期に比定した。体部はやや内湾ぎみに開く形態で全面を丁寧にロクロ撫でする。器壁が非常に薄く特に底部では３㎜の厚さしかない。底外面は静止糸切である。315～321・323・324は叩打成形の大中壺である。口頸部のみ残存する315・321・322を除いてはすべて外面平行叩き，内面当て具痕を残す。外面叩きは頸基部のほぼ真下から施すもの（316・317・319・320・323），

基部から一段下がった位置から施すもの（318・324）がある。くの字状の短頸で肩は強く張り出す。口縁形態は，外端部を下向きないし水平に突出させた冠頭（315～318･321～323），方環頭（324），方頭を呈し端部は外傾するとともに内端を上方へかるく摘み上げられるもの（320）がある。321と323は端面に櫛目波状文を加飾している。319は肩部に印花文が刻印されている。

325はIII～IV期に比定される。体部は肩が張り，ほぼ直立する口頸をとりつける。口縁端部は外屈し方冠頭を呈する。外面叩きは頸基部直下より綾杉状に施す。断面に漆継ぎ痕跡がある。

326～335はIV期に比定される。口縁形態は，稜環状におさめる冠頭（326～328・330・331・334），外端部をやや下向きに突出させた冠頭（332･335），端部は丸みを帯び口縁下を強く撫で冠頭状につくりだしたもの（329）がある。329・330・334・335は口縁基部直下より外面平行叩きを施す。329外面には三つ巴文が重なり合うように刻印されている。327は外面叩きを撫でまたは削磨により平滑に消している。胎土は精良なものと粗い白色粒，礫粒を含むものが半々で，焼成は良好である。

337はIV～V期に比定される。ロクロ成形の小壺で，頸部は外方へ屈曲し端部はやや肥厚し丸くおさめる。胎土は微細な白色粒を含み，精良で堅緻に焼き締まっている。

336・338はV期に比定される。336は肩部に鰭耳を付ける削磨壺である。耳は半ばを破損している。338はロクロ成形の小型壺で，肩が張り丸みを帯びた体部にくの字状の口頸をとりつけ端部は丸くおさめる。胎土は粗い白色粒や礫粒を多く含み，内面は粘土紐巻き上げ痕を残し粗雑なつくりである。

(4)　珠洲系陶器（第104図，図版33）

339～352は，産地不明陶器の壺または甕の破片である。還元焔焼成により堅緻に焼き締まっている。

339は外面を叩打，内面には横方向の粗い撫でを施す。叩打原体は溝の間隔を広くとる平行叩きで，溝は浅く器面に原体の木目が転写されている。器面の砂粒が上下に動いており，一部に強い撫でまたは削りが施された痕跡と思われる。胎土は粒子が細かく粘りがある素地に白色の粗粒が混入し，断面は濃淡のある薄い層が重なってうねりをみせている。

340･341は，外面に溝幅のやや狭い平行叩き，内面に粗い横撫でを施す。胎土は，340は若干粗粒を含むが，341は精良で微細な白色粒を少量含む。340は焼成により断面の色調が三層に分かれている。

342～344は外面に叩子叩き，内面に粗い横撫でを施す。外面叩きは撫でにより消されている部分が多い。胎土は341に類似しているが，断面は焼成による色調差が２～３層に分かれている。

345・346は，外面に溝幅が広く浅い平行叩き，内面に横撫でを施す。溝の端部は角ばり単位が揃っている。胎土は339に断面の様相が似ているが，粗粒の混入率は低い。

347･348は外面の細かい平行または叩子叩きを撫で消し，内面は粗い横撫でを施す。胎土は341に類似しているが，焼成による断面の色調差が２～３層に分かれている。

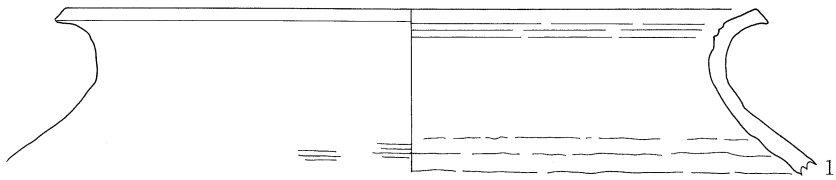
349・350は，外面平行叩きの上を灰オリーブ色の自然釉が厚く覆う。内面は横撫でを施すが，凹凸や粘土接合痕を残す箇所が多い。胎土は341に似るが，一部に339に似た断面を見せるところがある。

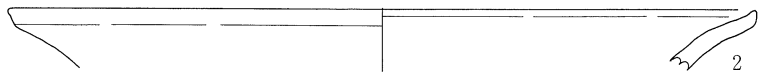
351は，外面に「×」を３重以上の正方形の枠で囲んだ刻印がある。叩きの有無は表面に付着した砂と厚い自然釉により不明である。内面は不定方向に軽く撫でられているが器面の凹凸は残っている。

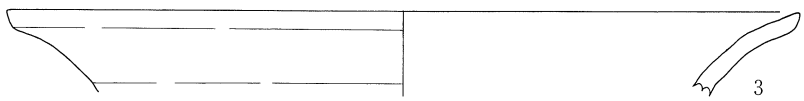
352は，球胴型に膨らむ器体から短く直立する頸部が伸び，口縁端部は水平に面をとる。外面は，皮状のもので撫でられたものか，平滑に仕上げられているが，刷毛状の細かい擦痕が約４cmの帯状の単位で上から順に右下がり，左下がり，右下がりの襷状に残っている。内面は不定方向の細かい擦痕が残り，青黒い付着物が広い範囲にみられる。胎土は精良である。　（越前慎子）

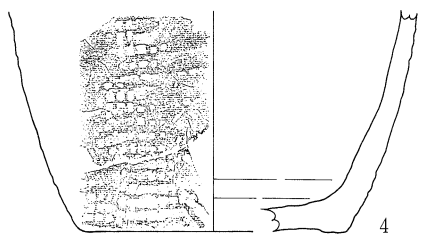
注１　吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

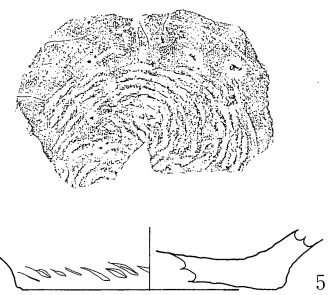
注２　石田仁氏の御教示による。

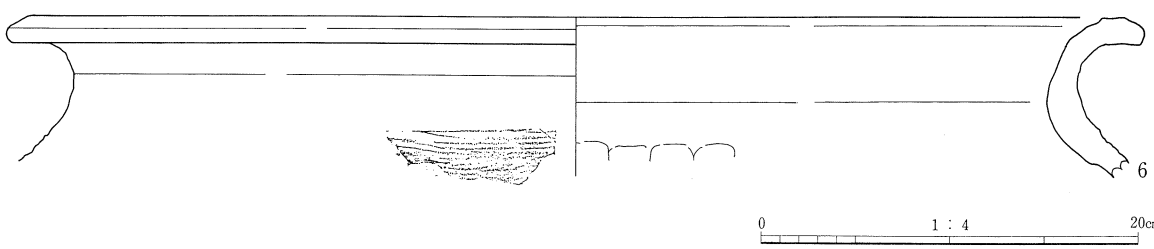


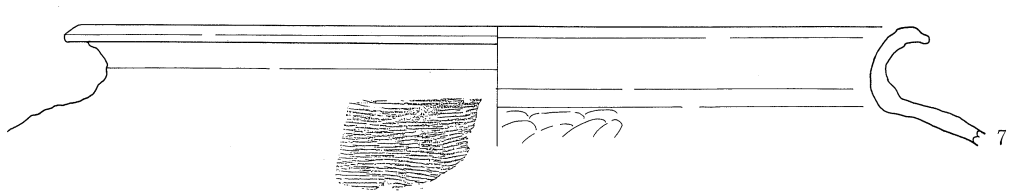




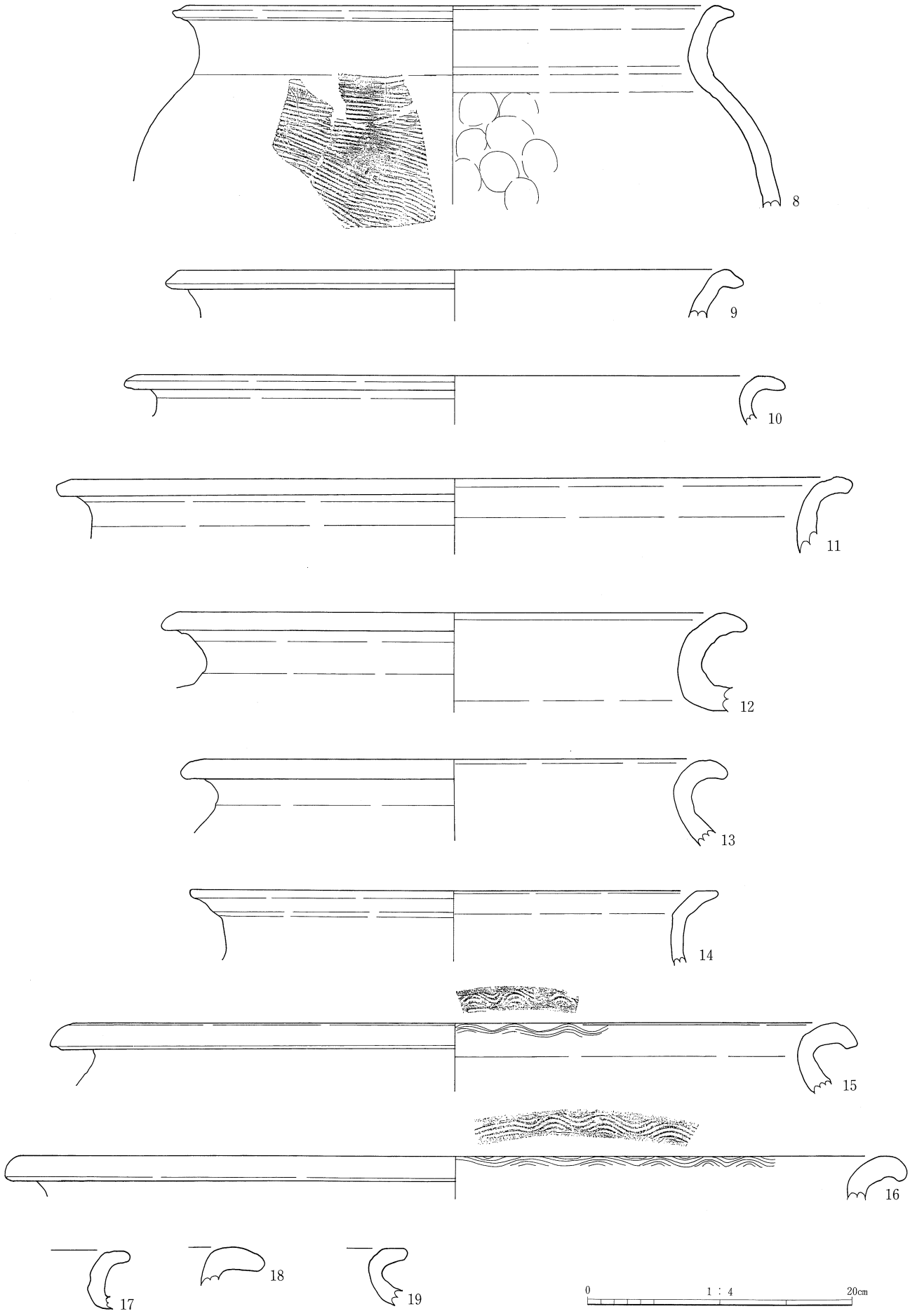




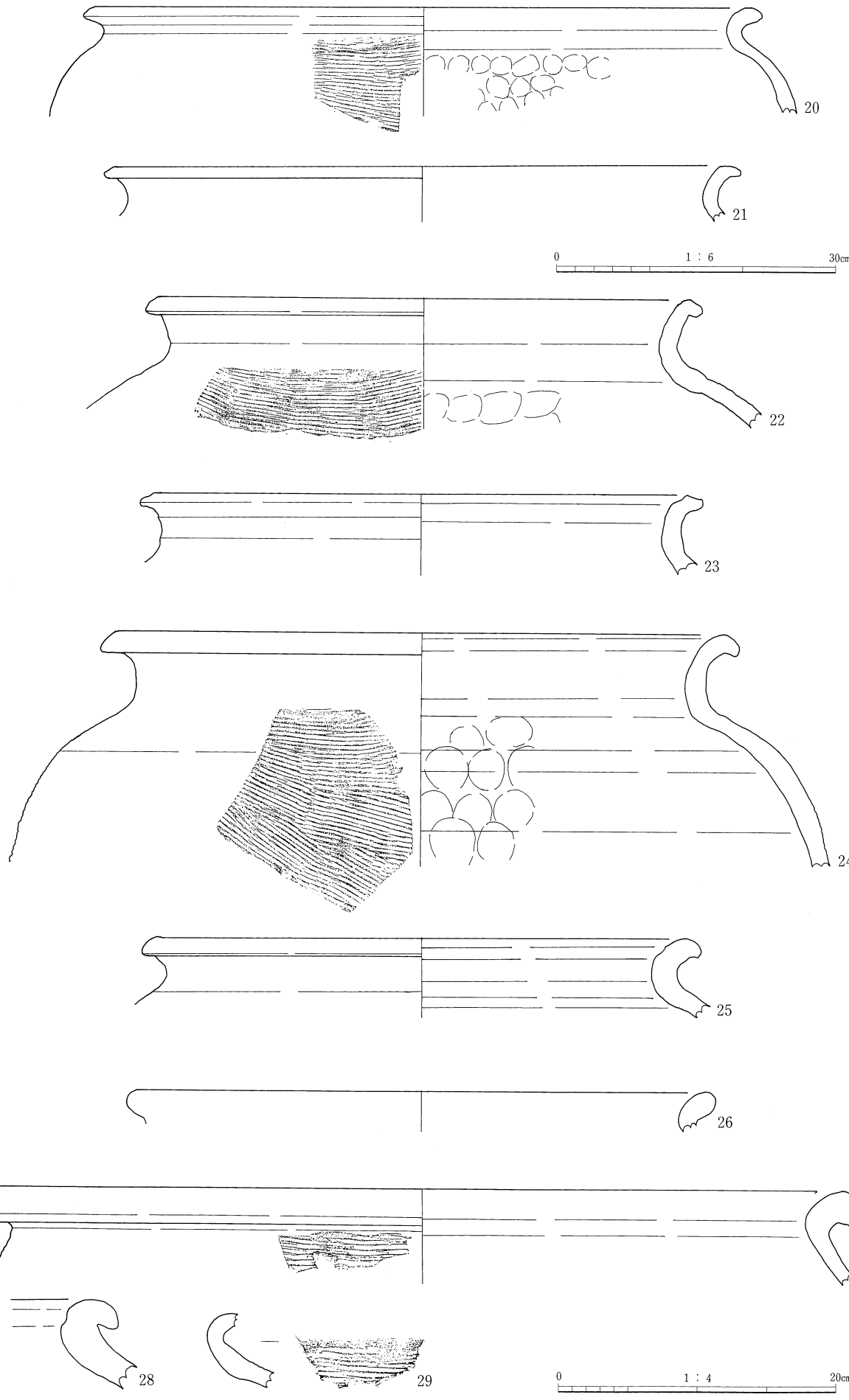




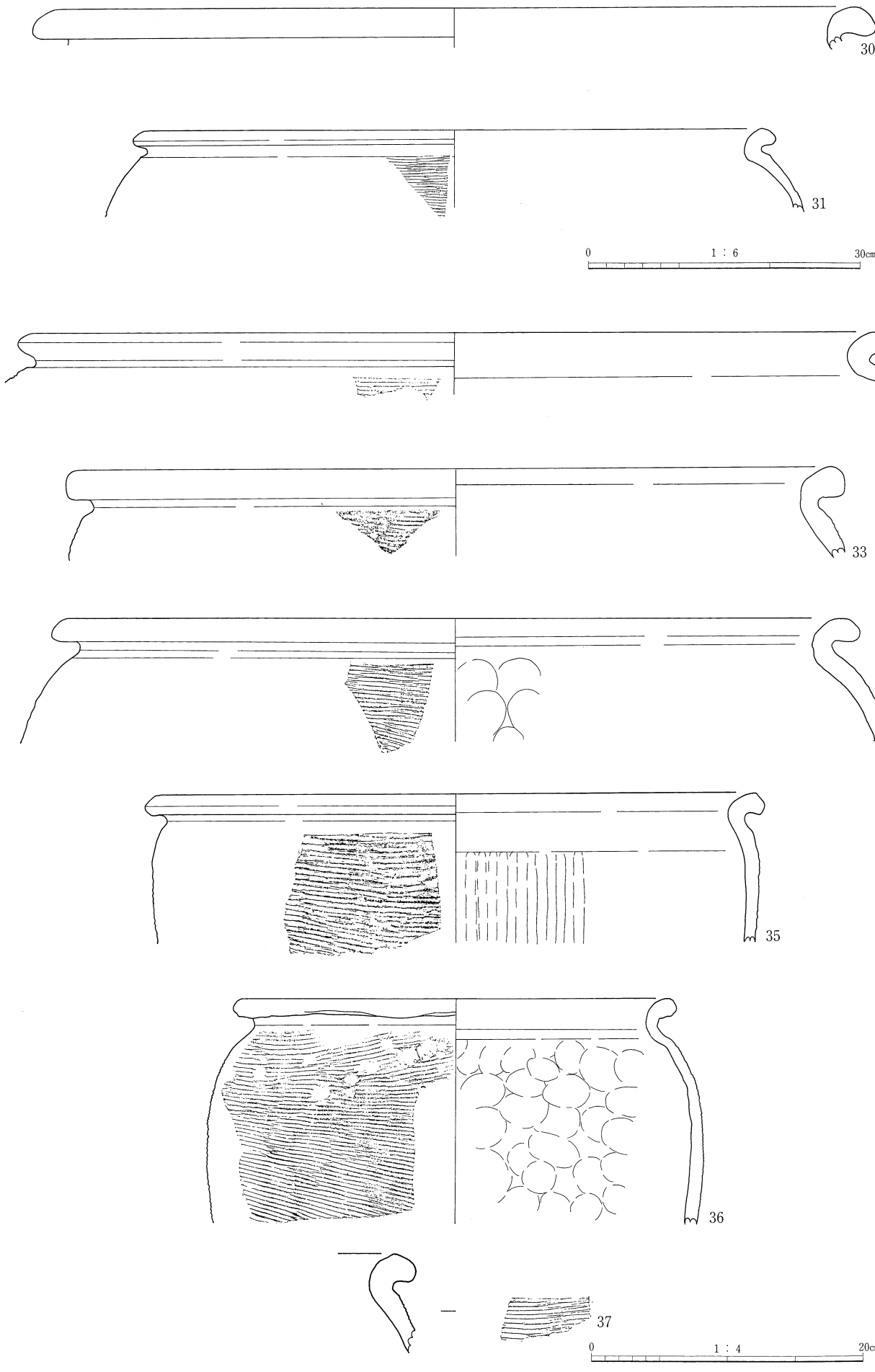
第76図　珠洲1　(1～6　1/4, 7　1/6)



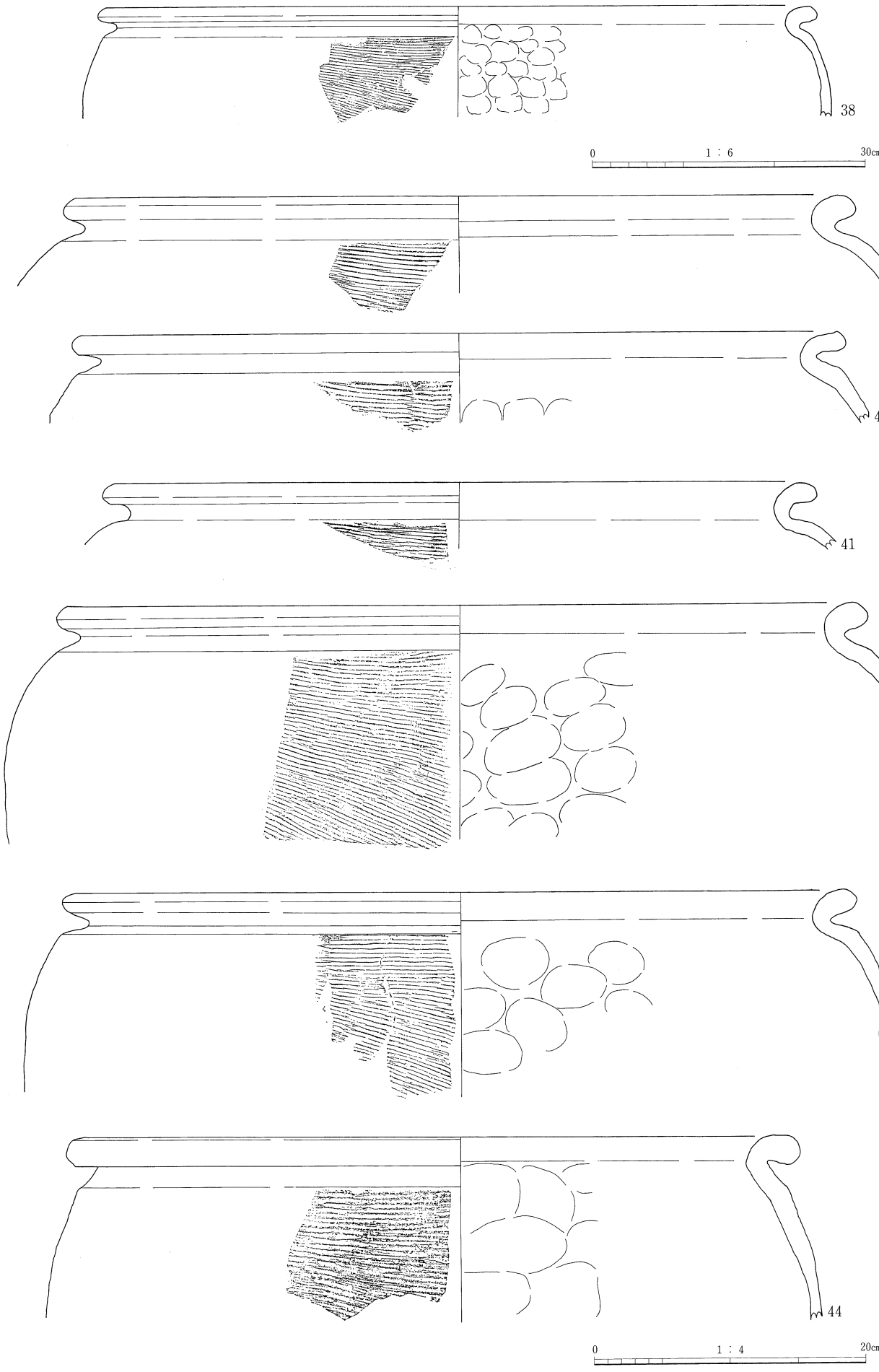
第77図　珠洲 2　(1/4)



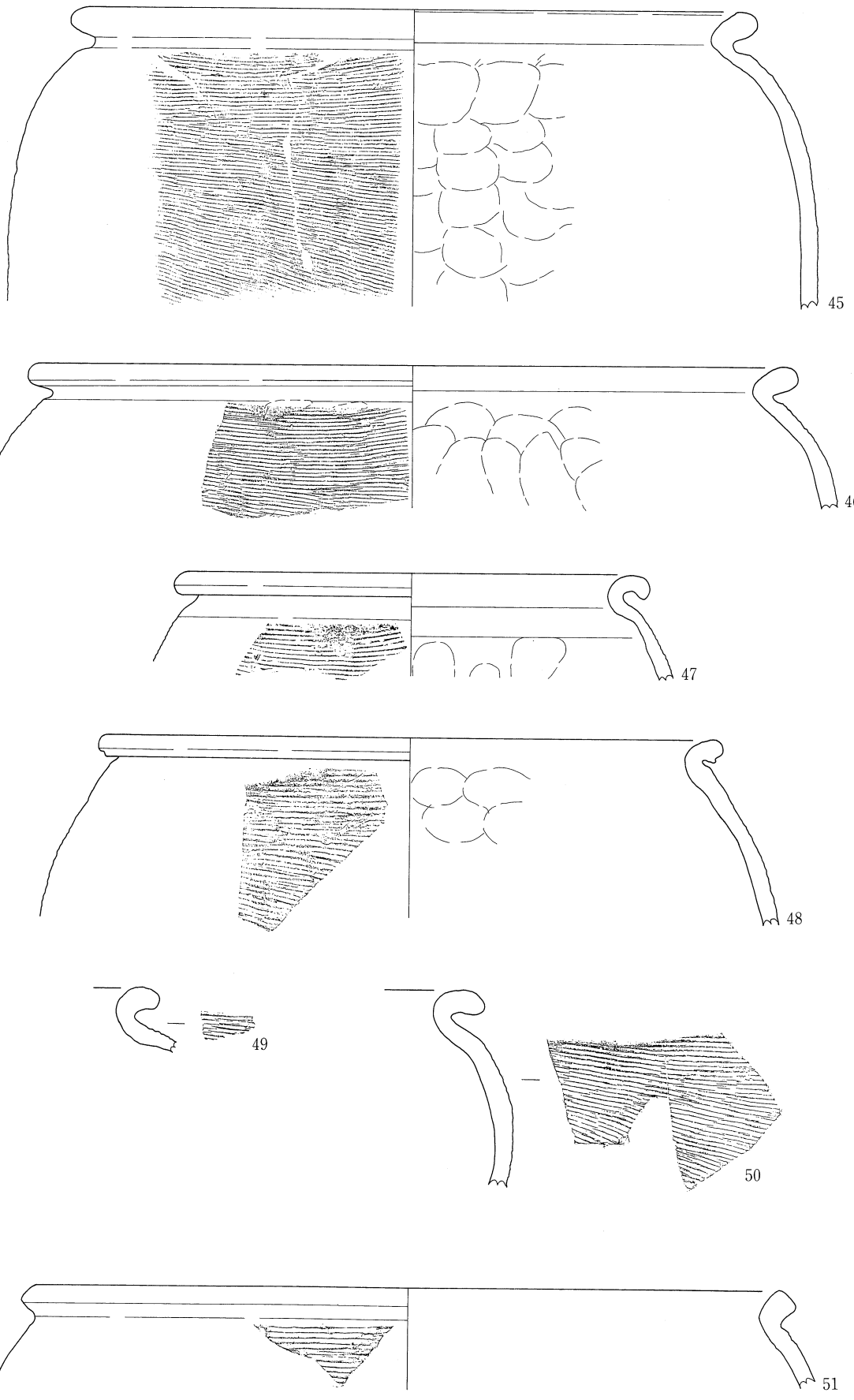
第78図　珠洲 3　(20・21　1/6, 22～29　1/4)



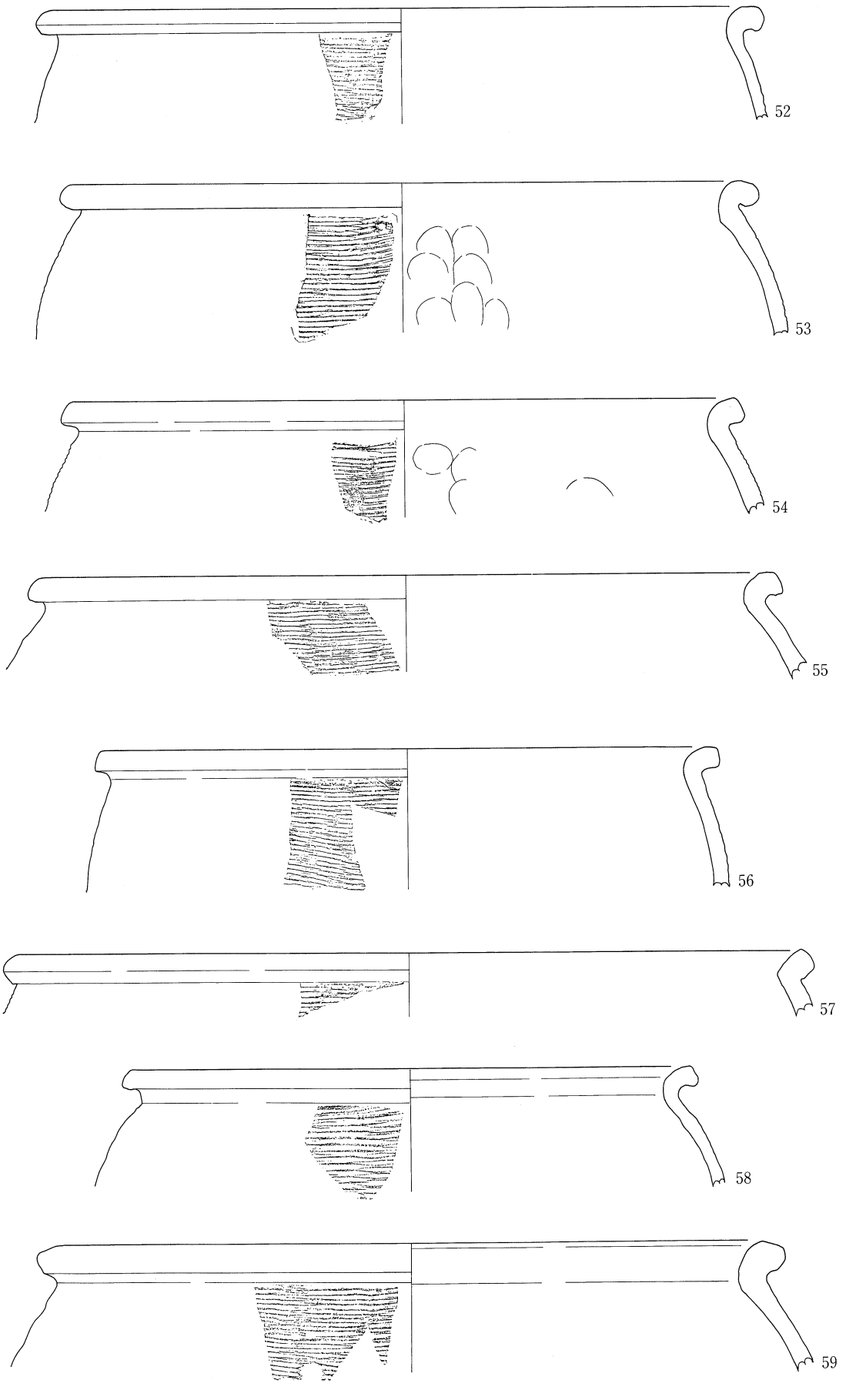
第79図　珠洲 4　(30・32～37　1/4，31　1/6)



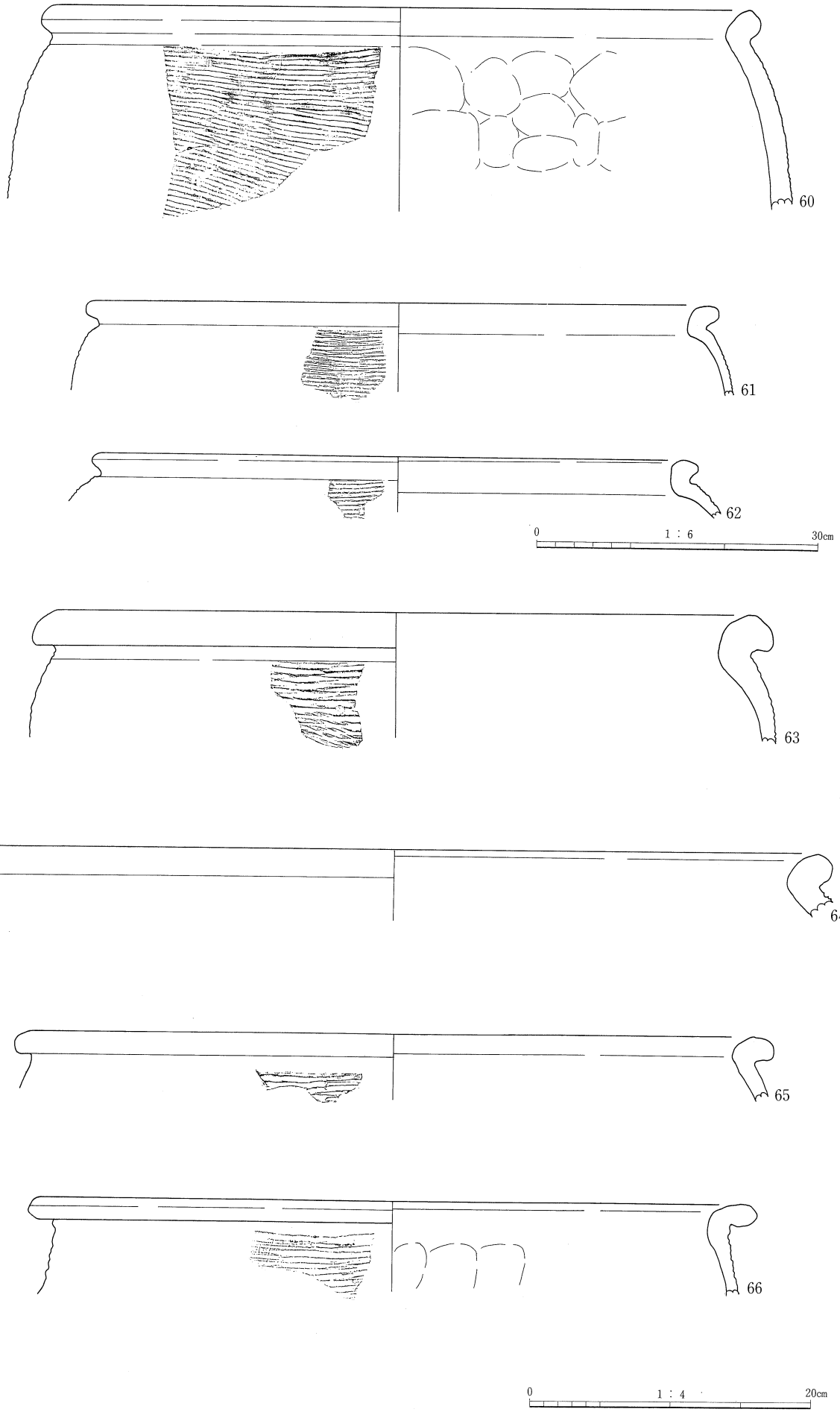
第80図　珠洲 5　(38　1/6, 39～44　1/4)



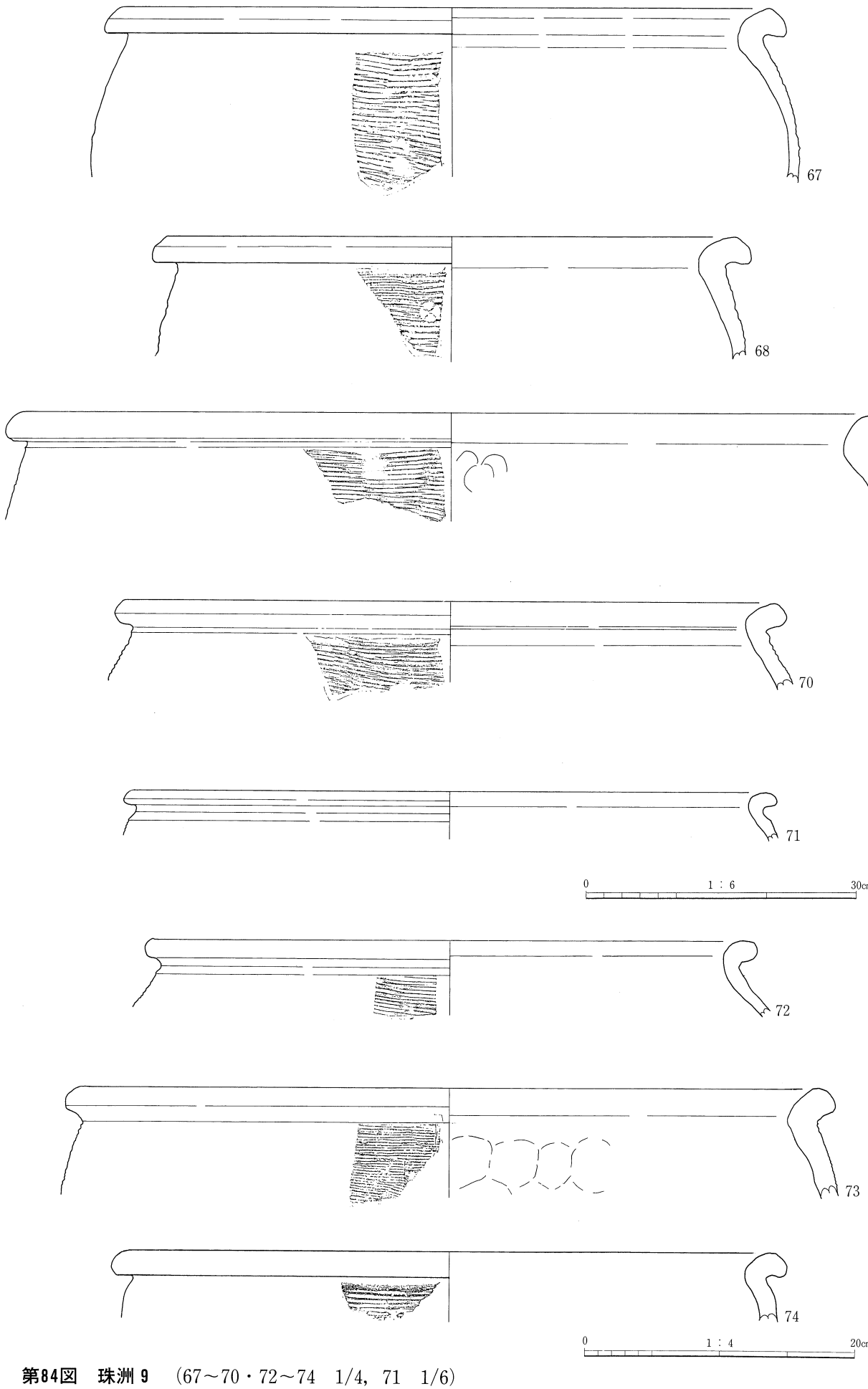
第81図　珠洲 6　(1/4)



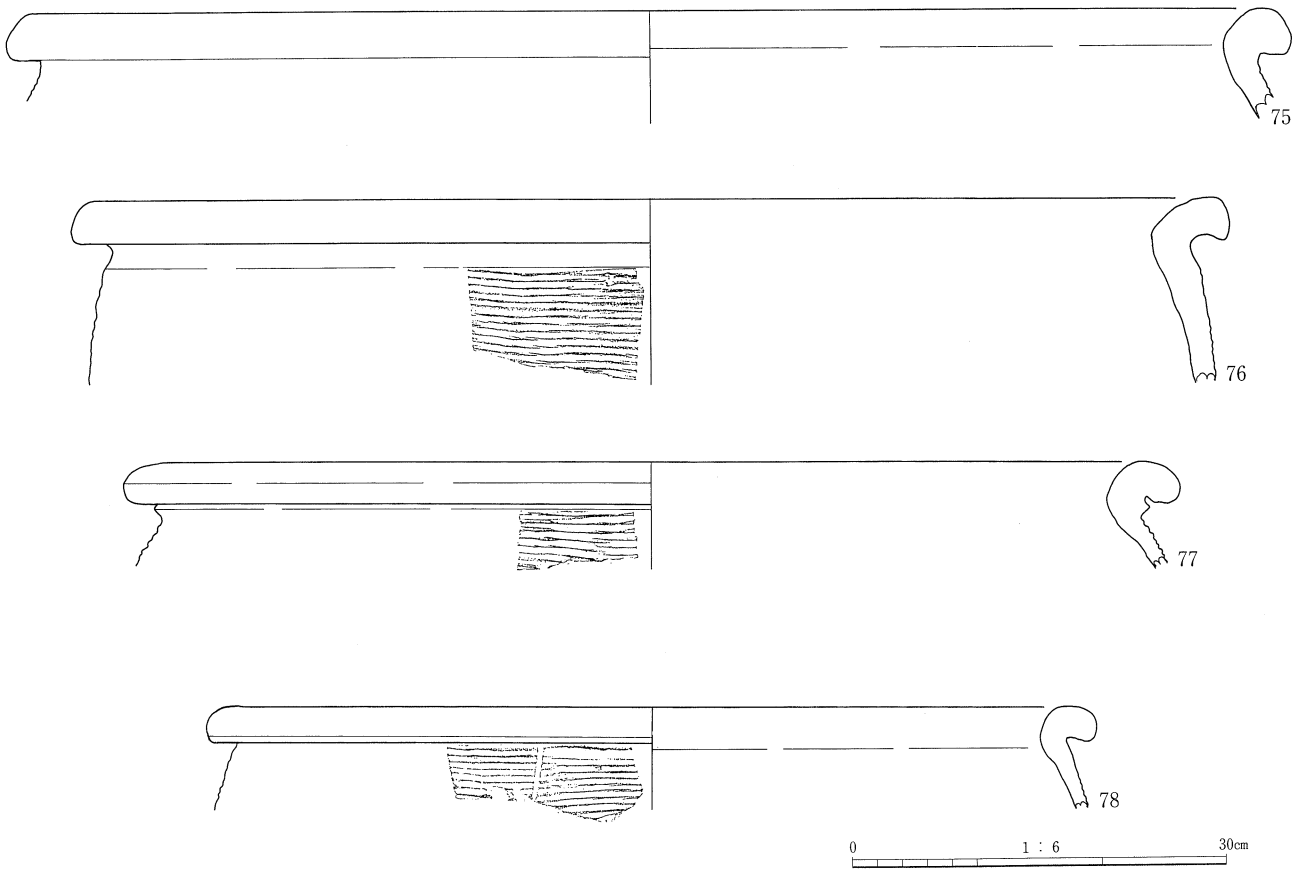
第82図　珠洲 7　(1/4)



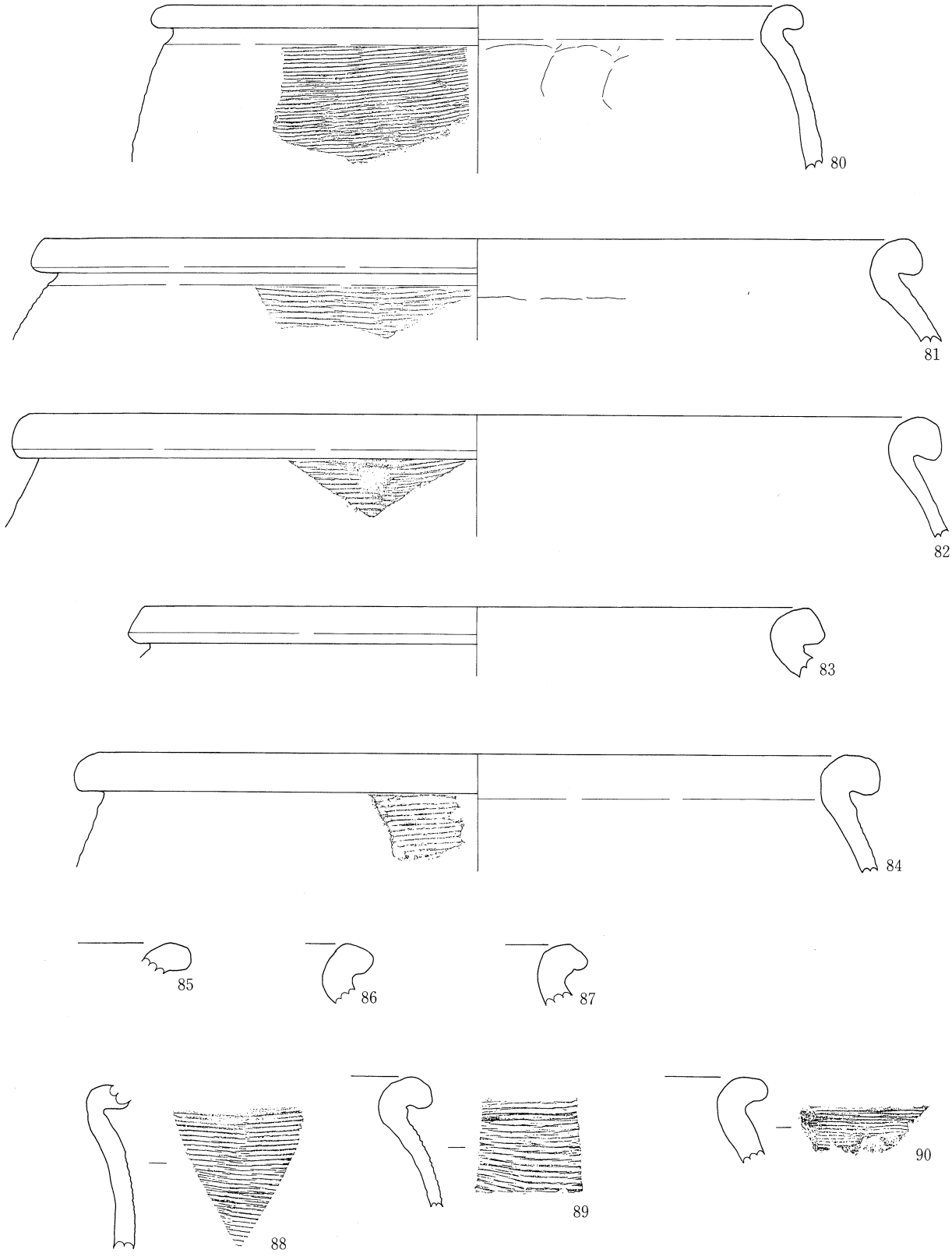
第83図　珠洲 8　(60・63～66　1/4, 61・62　1/6)



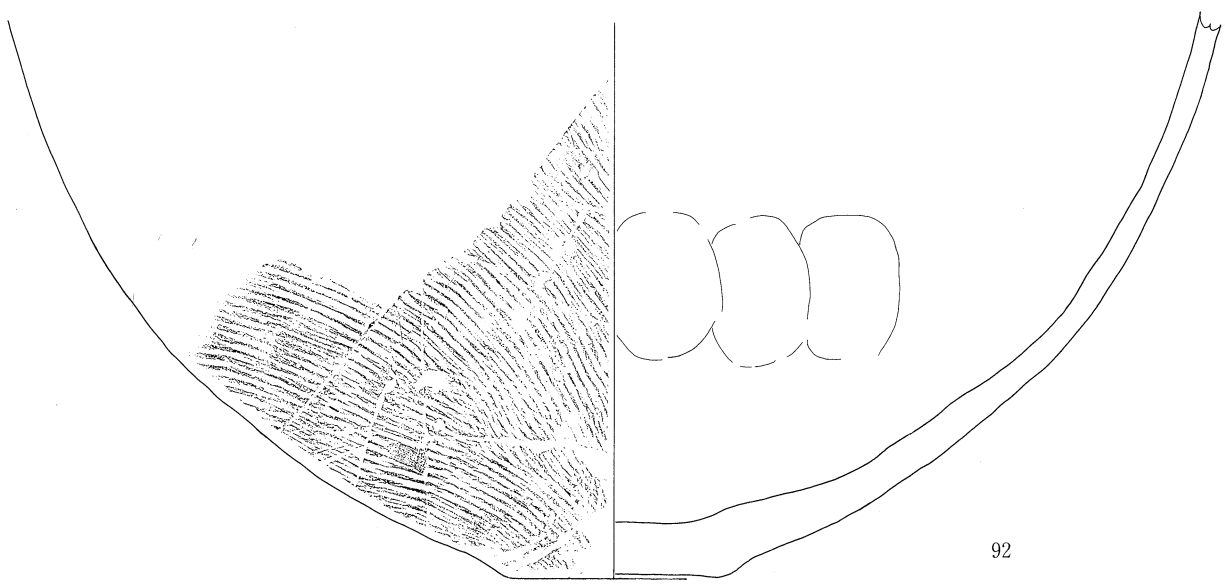
第84図　珠洲 9　(67～70・72～74　1/4, 71　1/6)

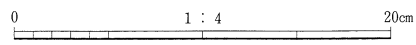


第85図　珠洲10　(75～77・79　1/4，78　1/6)

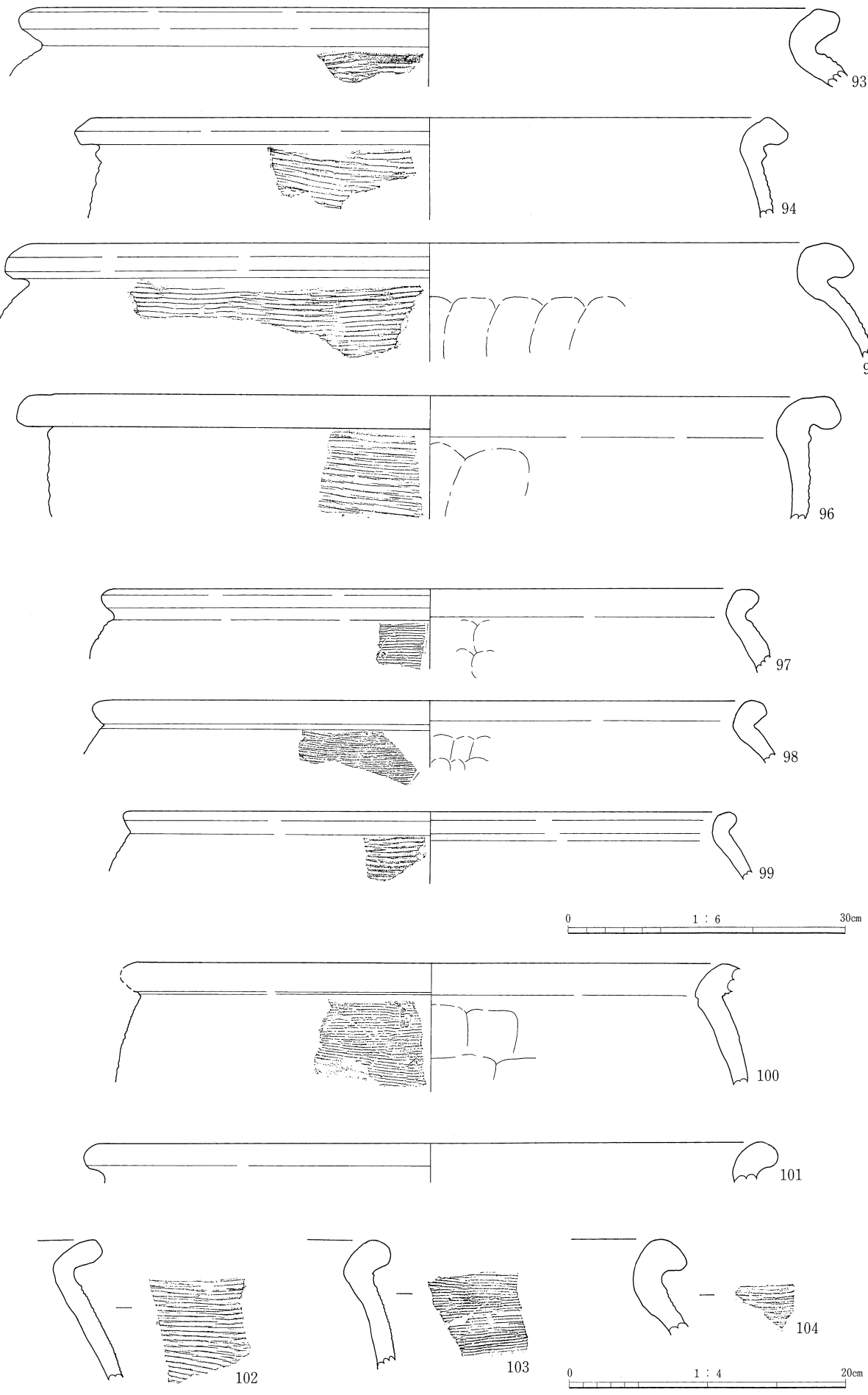


第86図　珠洲11　(1/4)

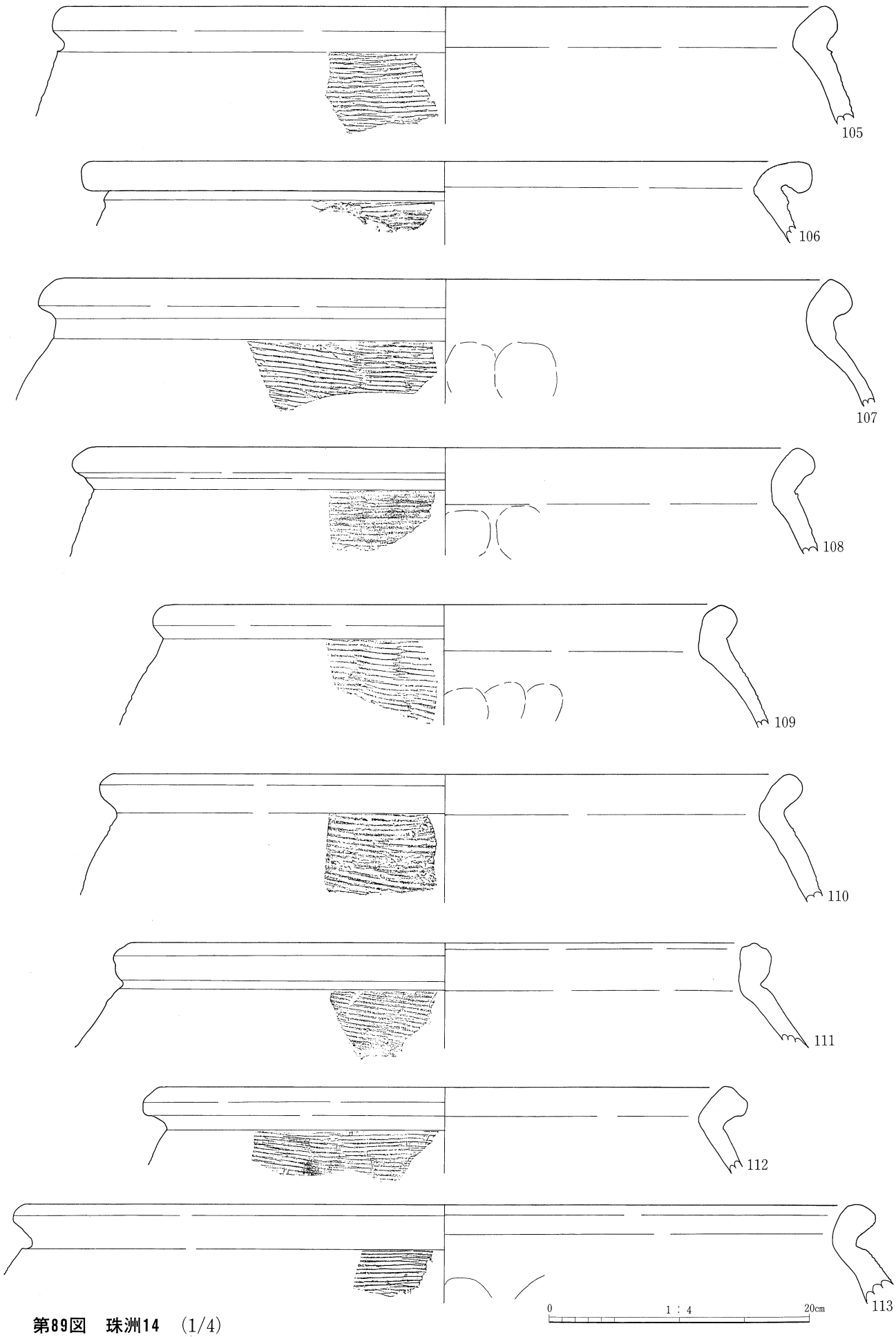




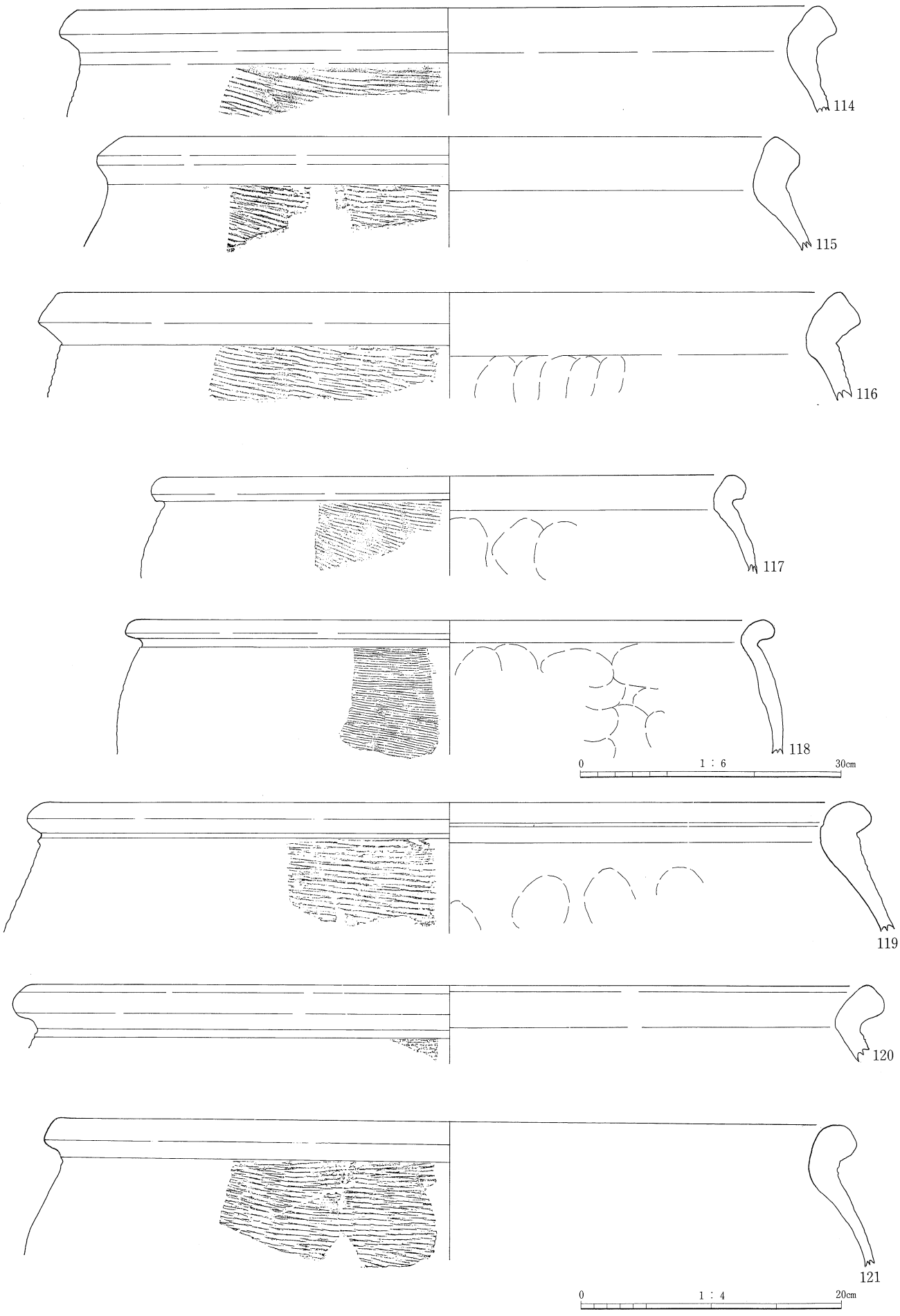
第87図　珠洲12　(1/4)



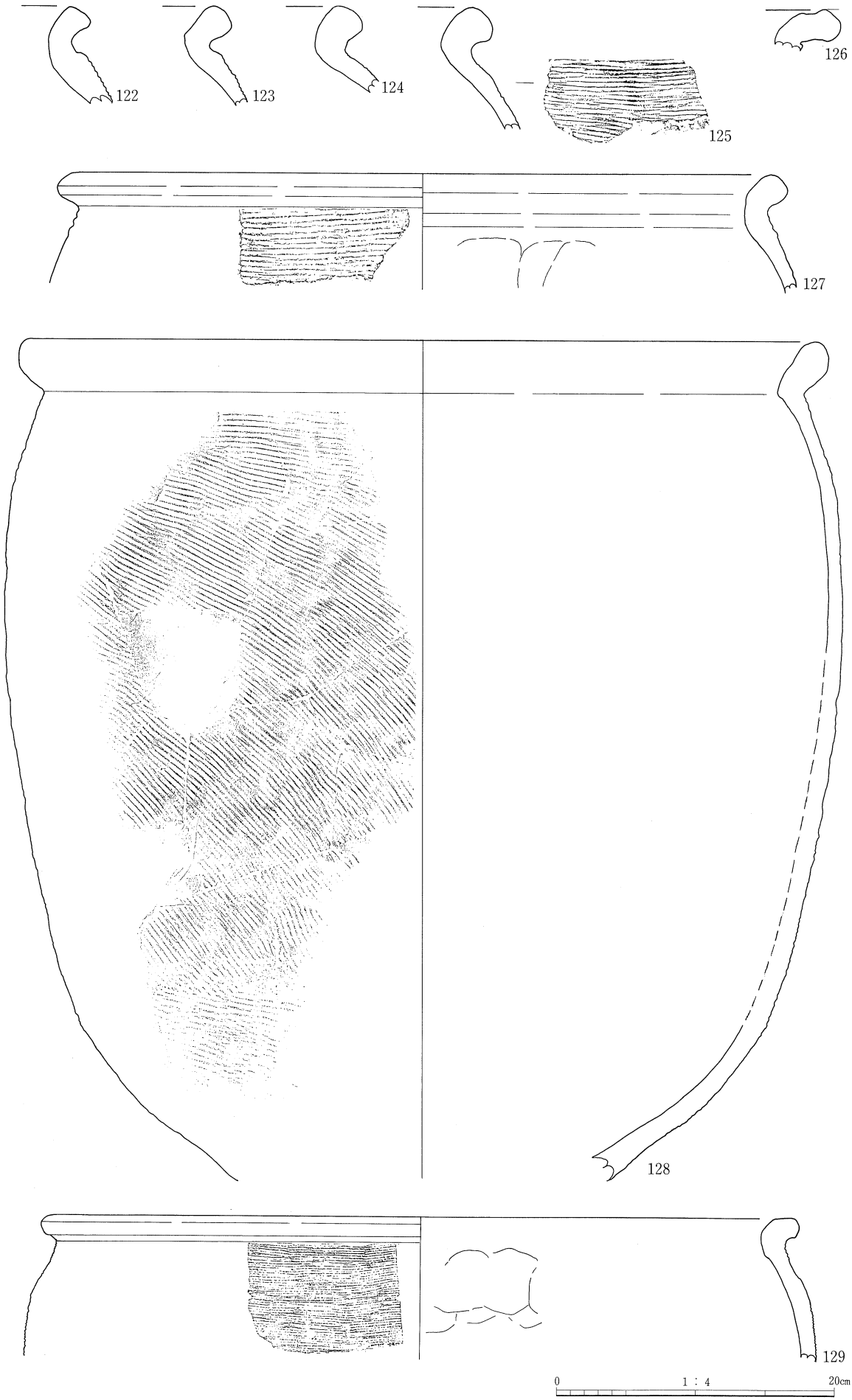
第88図　珠洲13　(93～96・100～104　1/4, 97～99　1/6)



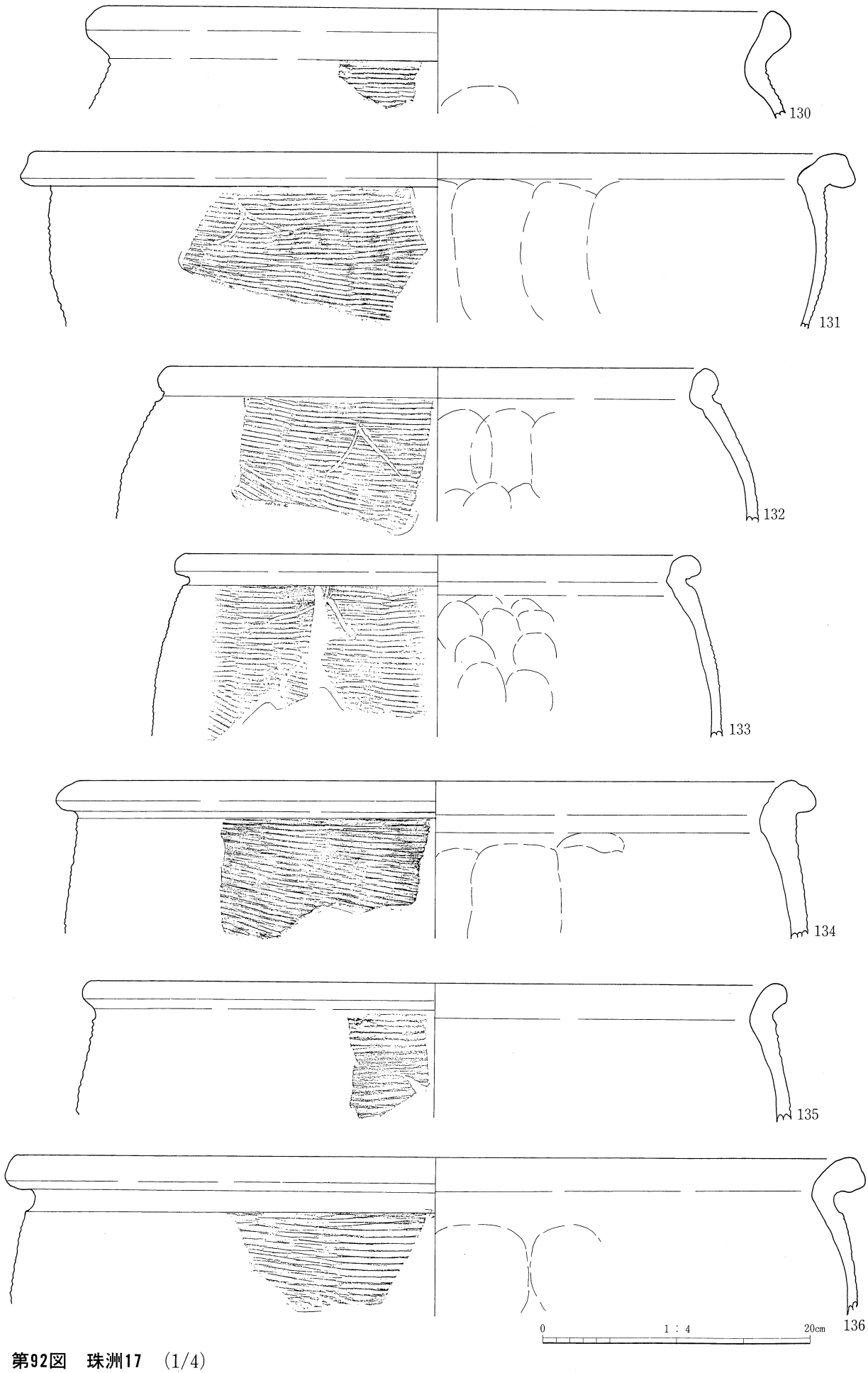
第89図　珠洲14　(1/4)



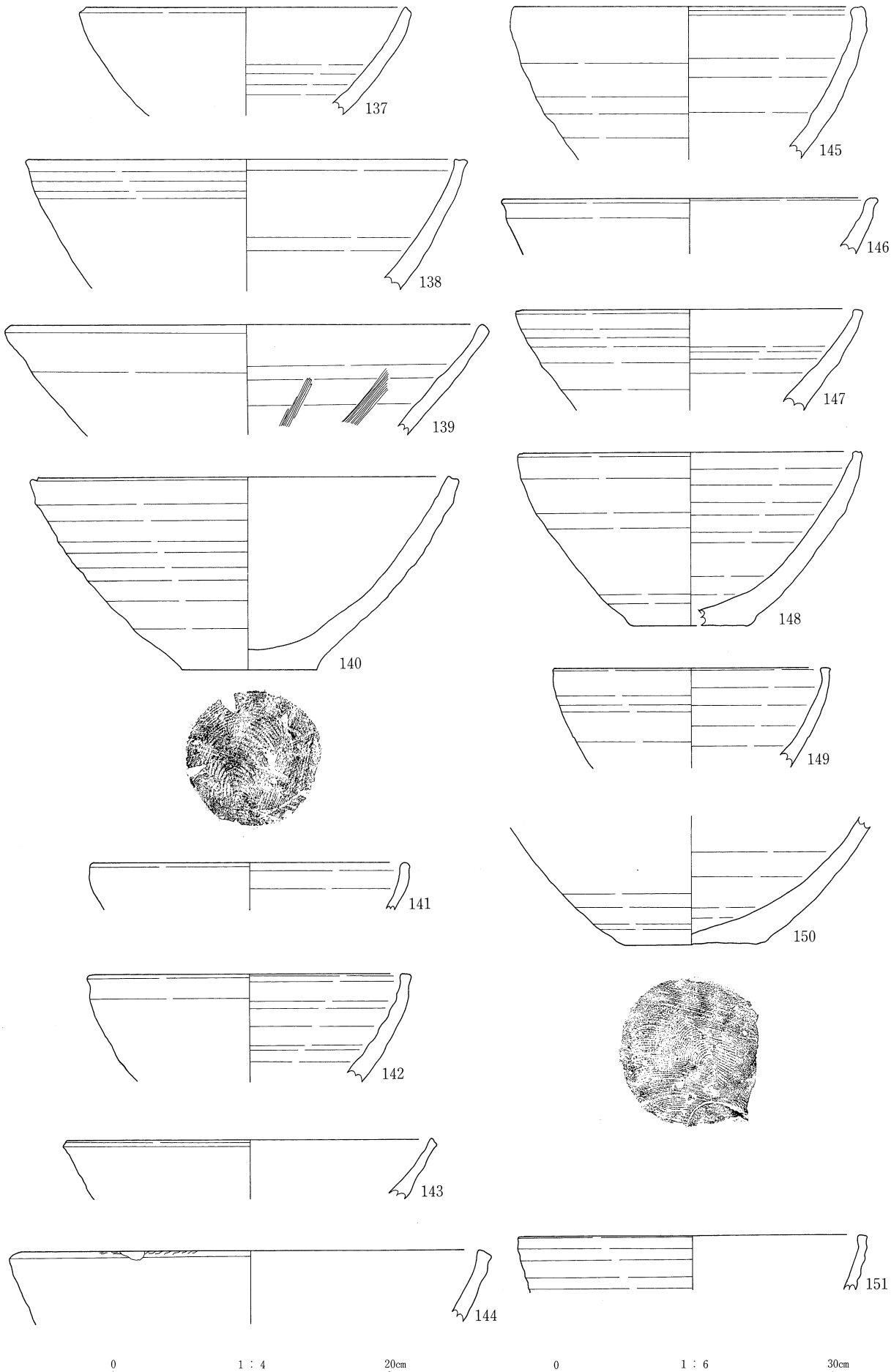
第90図　珠洲15　(114～116・119～121　1/4，117・118　1/6)



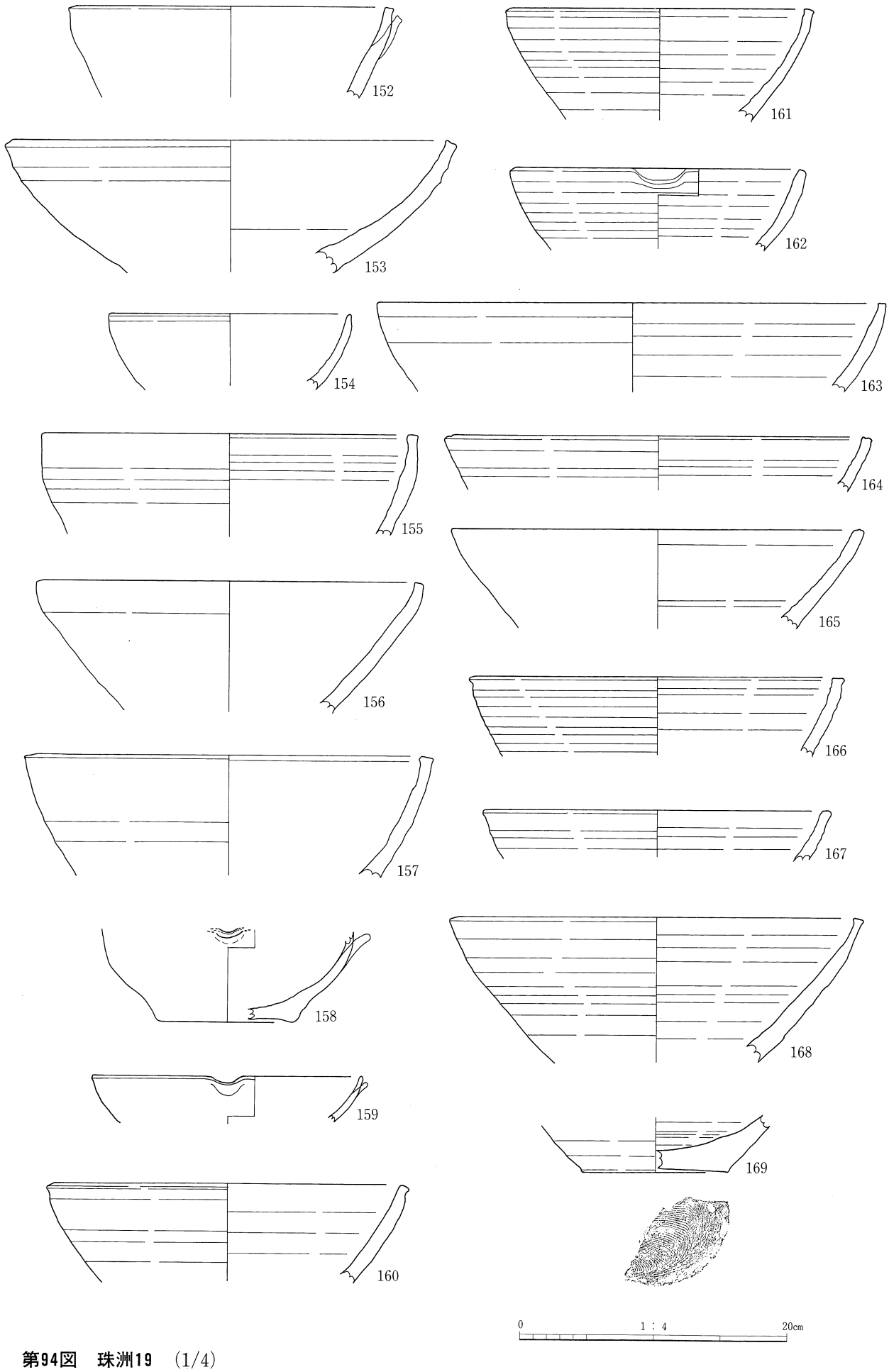
第91図　珠洲16　(1/4)



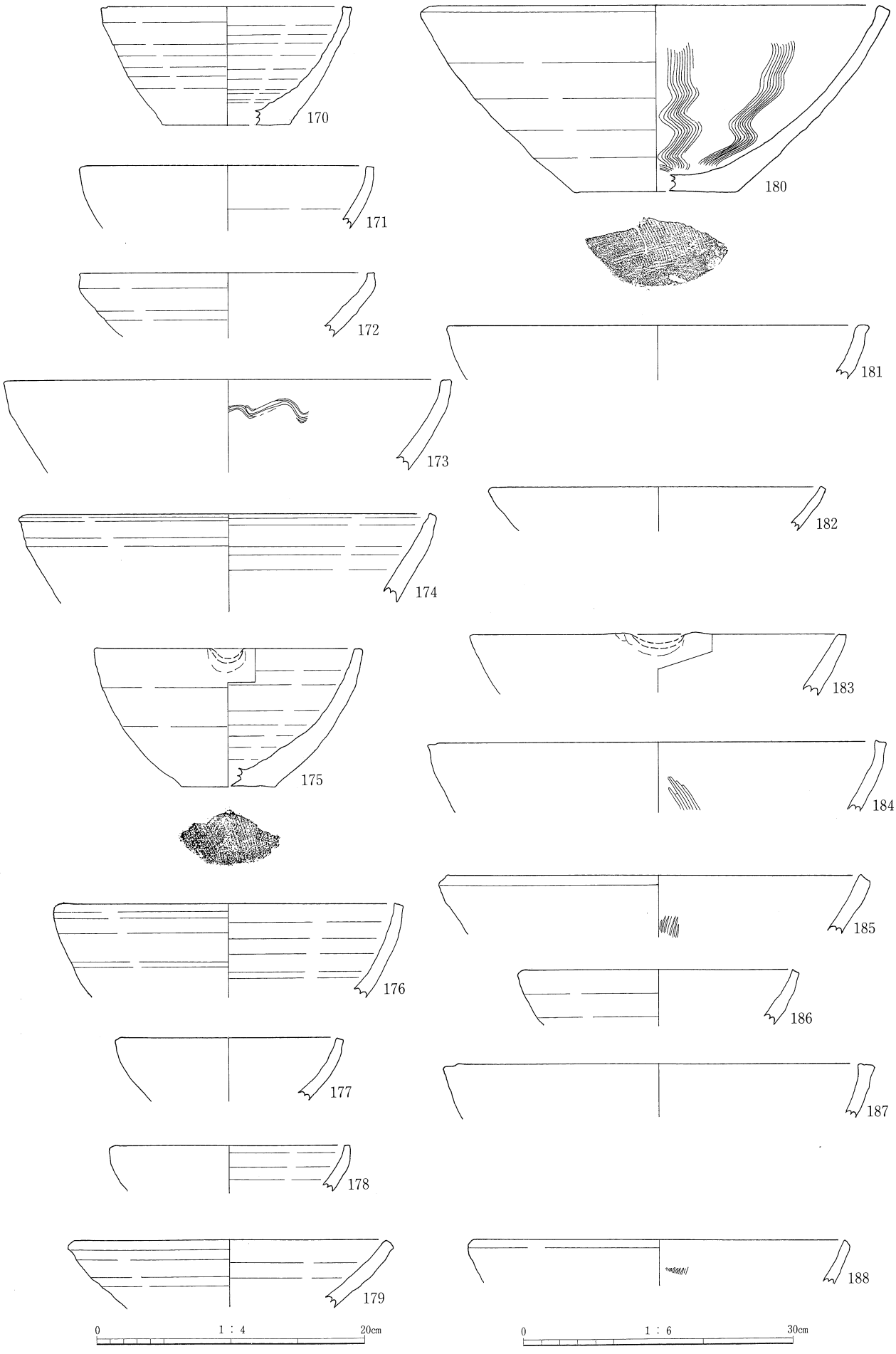
第92図　珠洲17　(1/4)



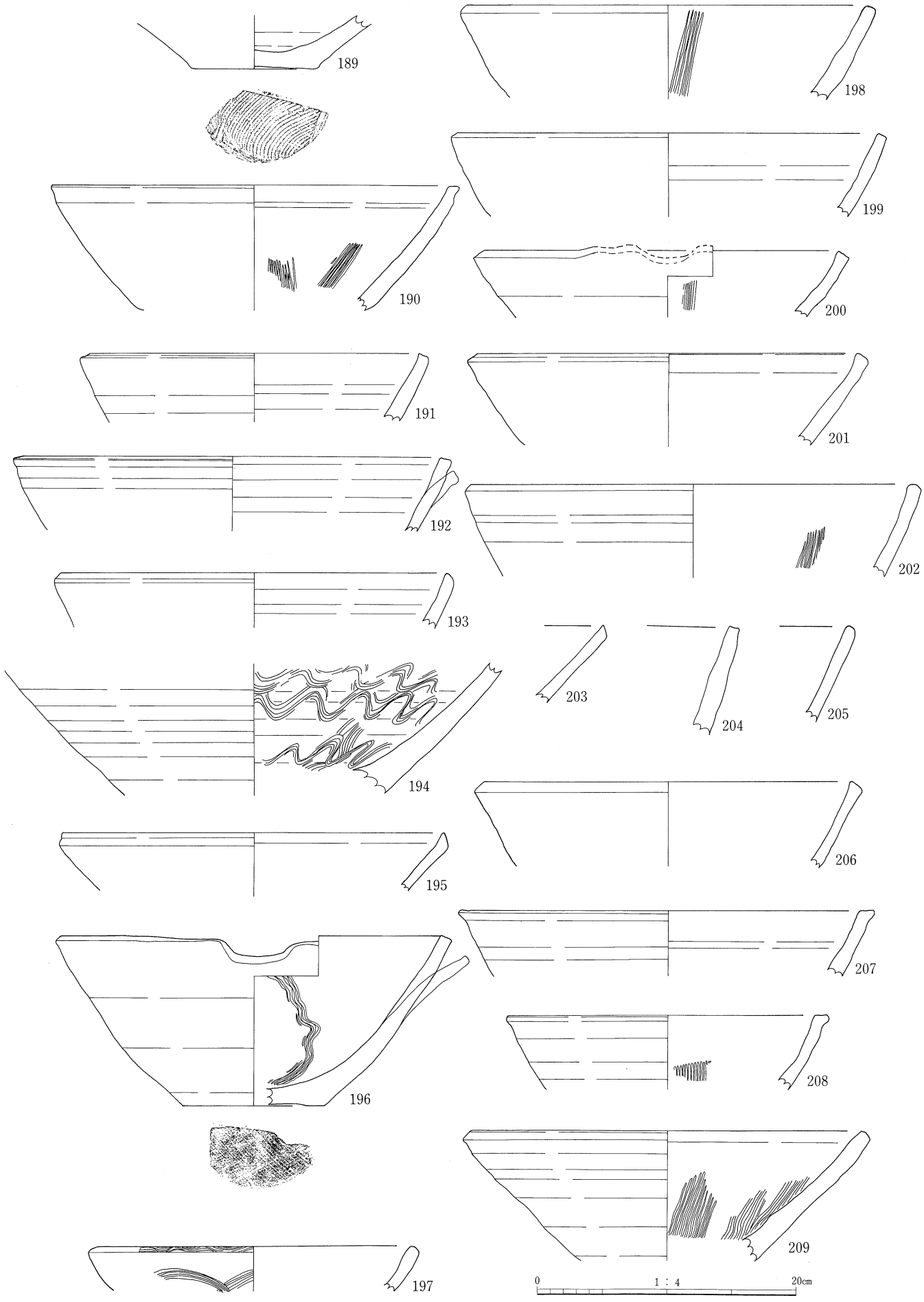
第93図　珠洲18　(137～150　1/4，151　1/6)


152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
0
1：4
20cm

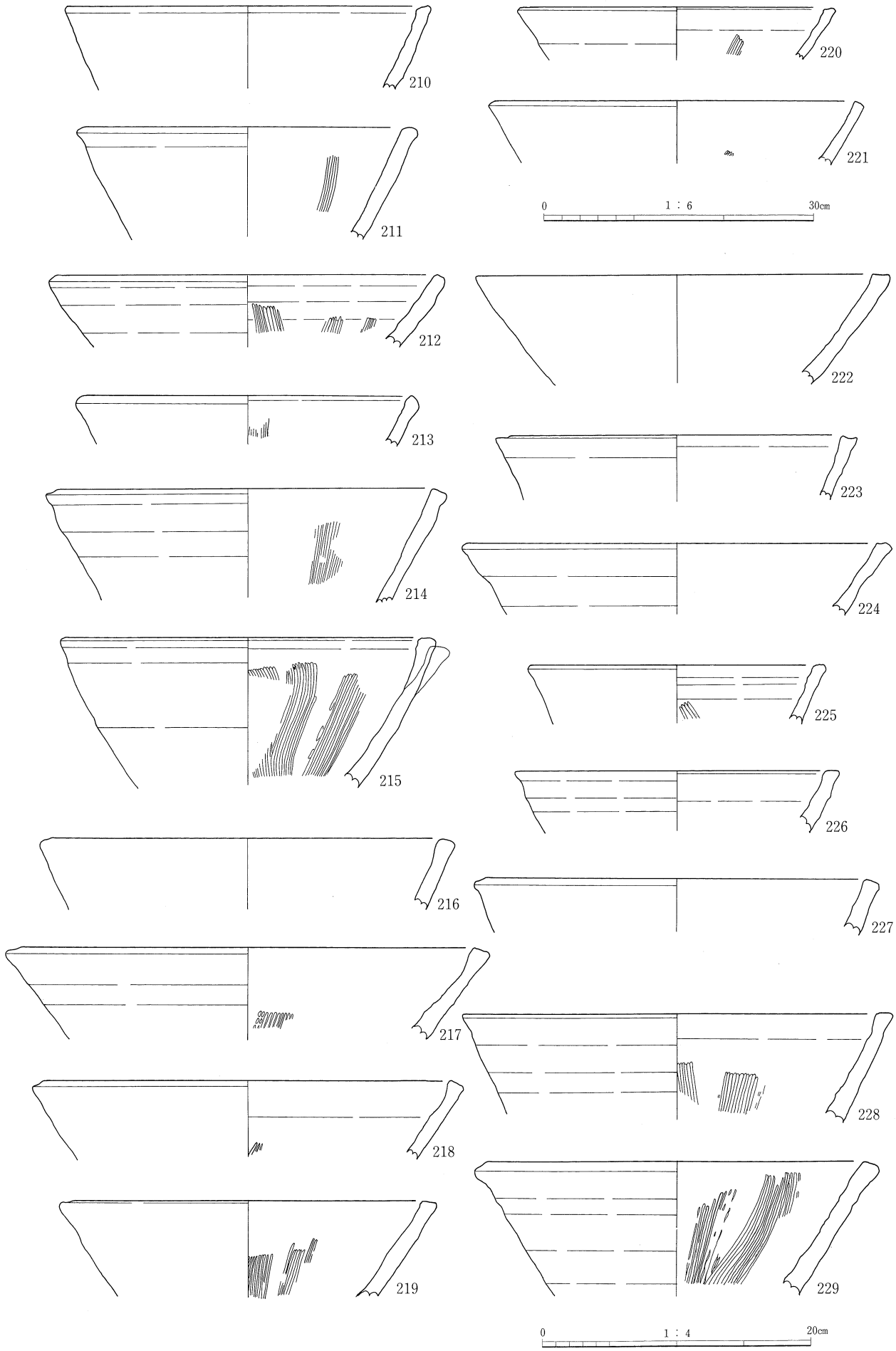
第94図　珠洲19　(1/4)



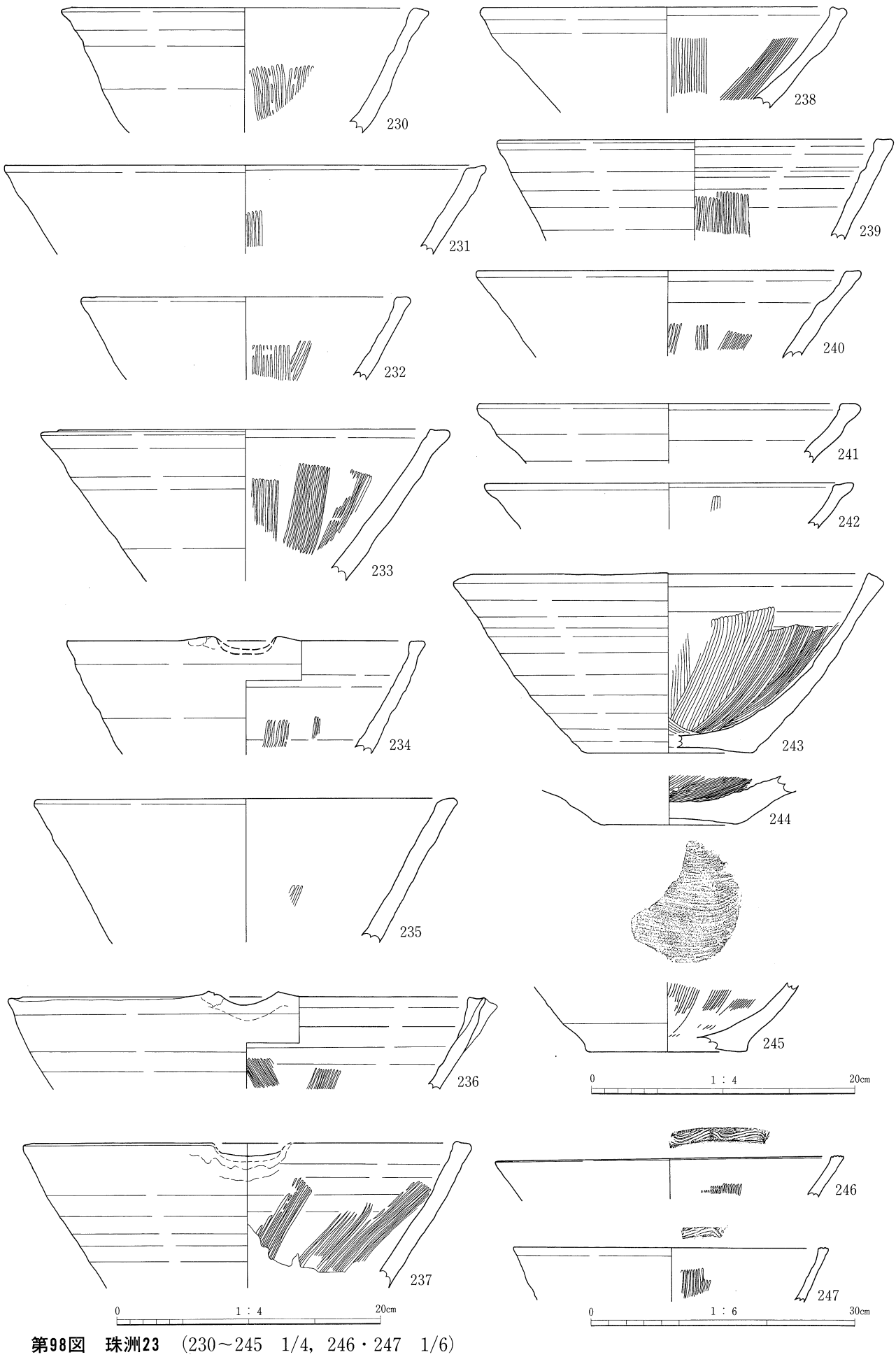
第95図　珠洲20　(170～181・183～187　1/4，182・188　1/6)


189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
0
1 : 4
20cm

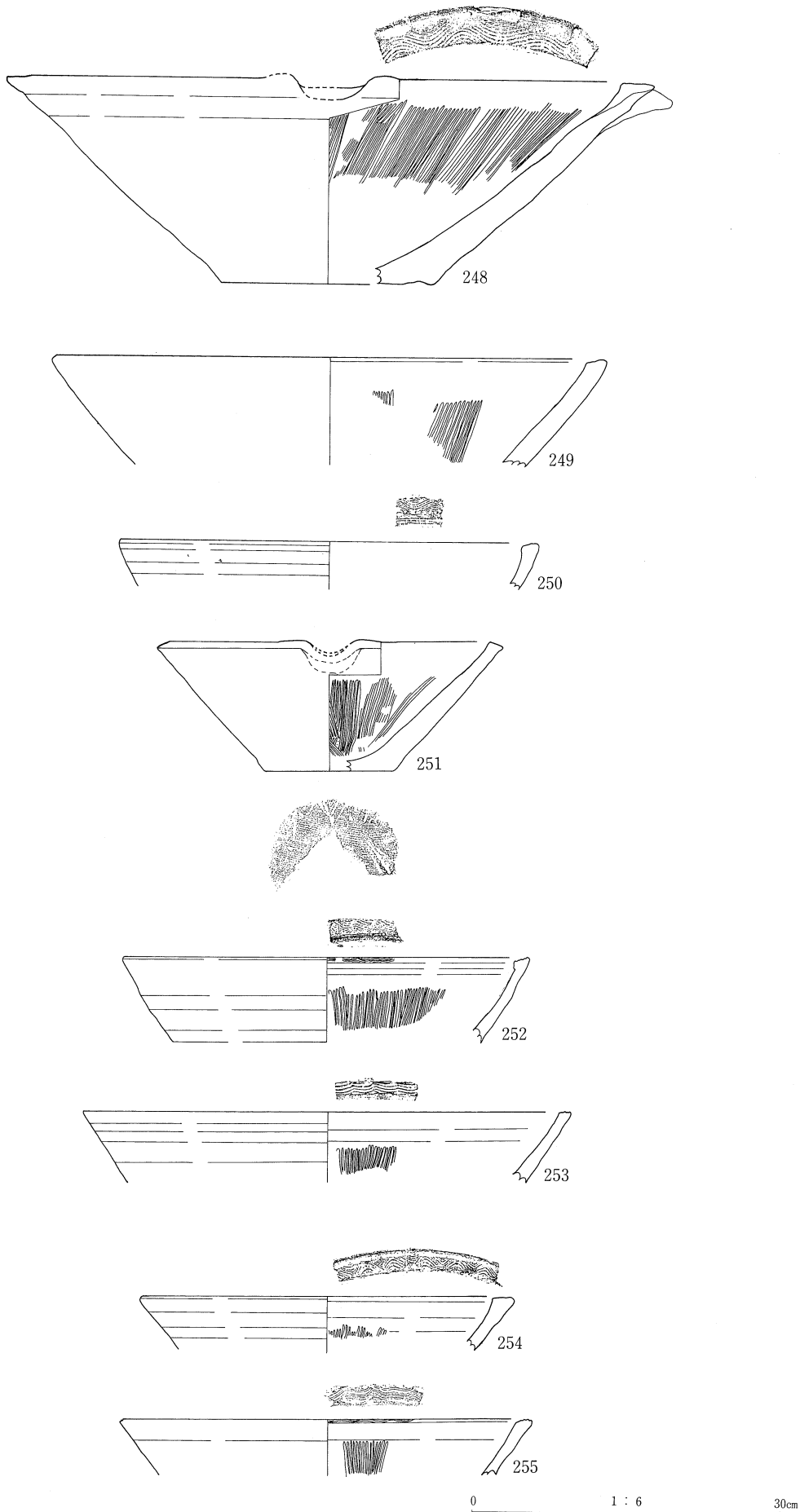
第96図　珠洲21　(1/4)



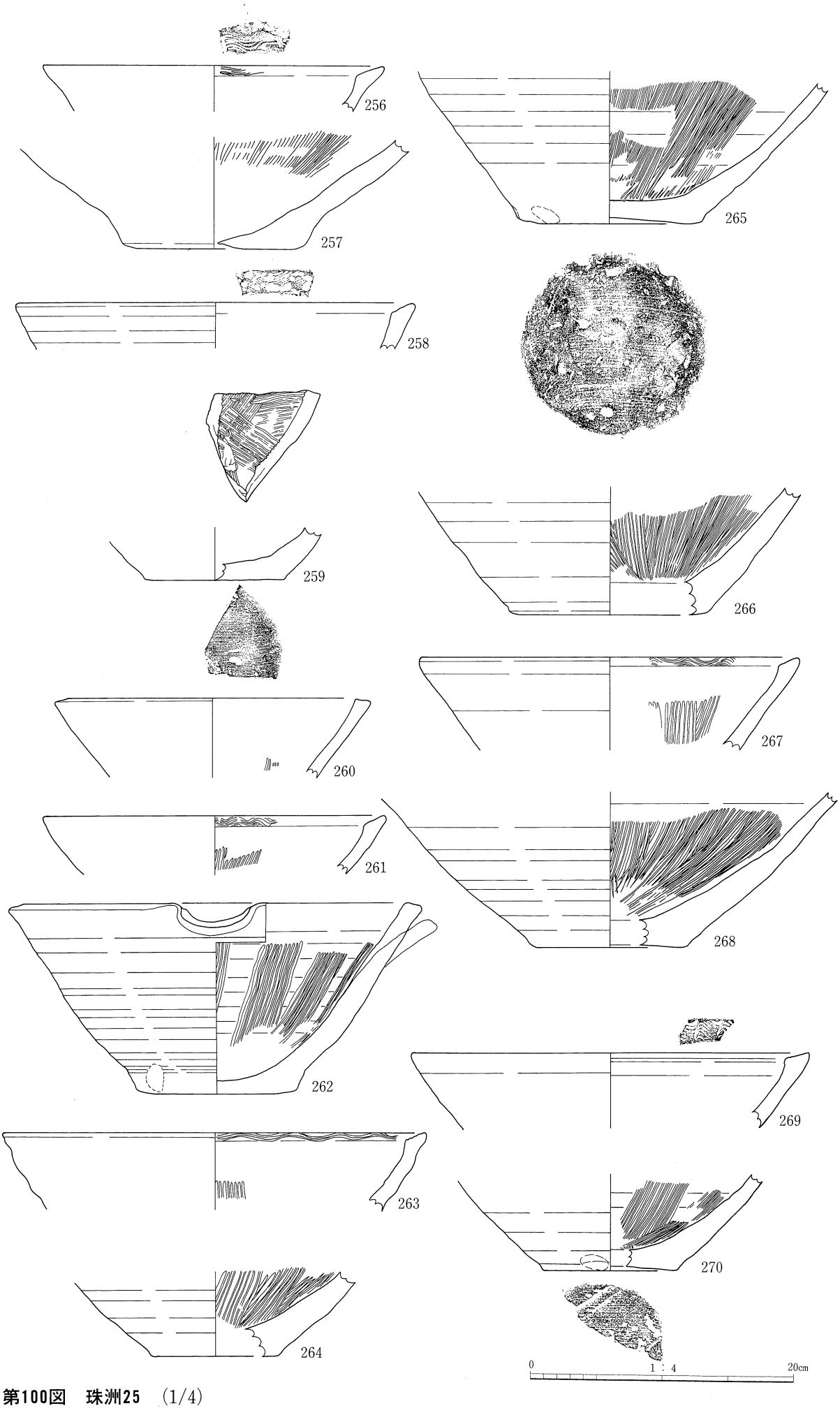
第97図　珠洲22　(210～219・222～229　1/4，220・221　1/6)



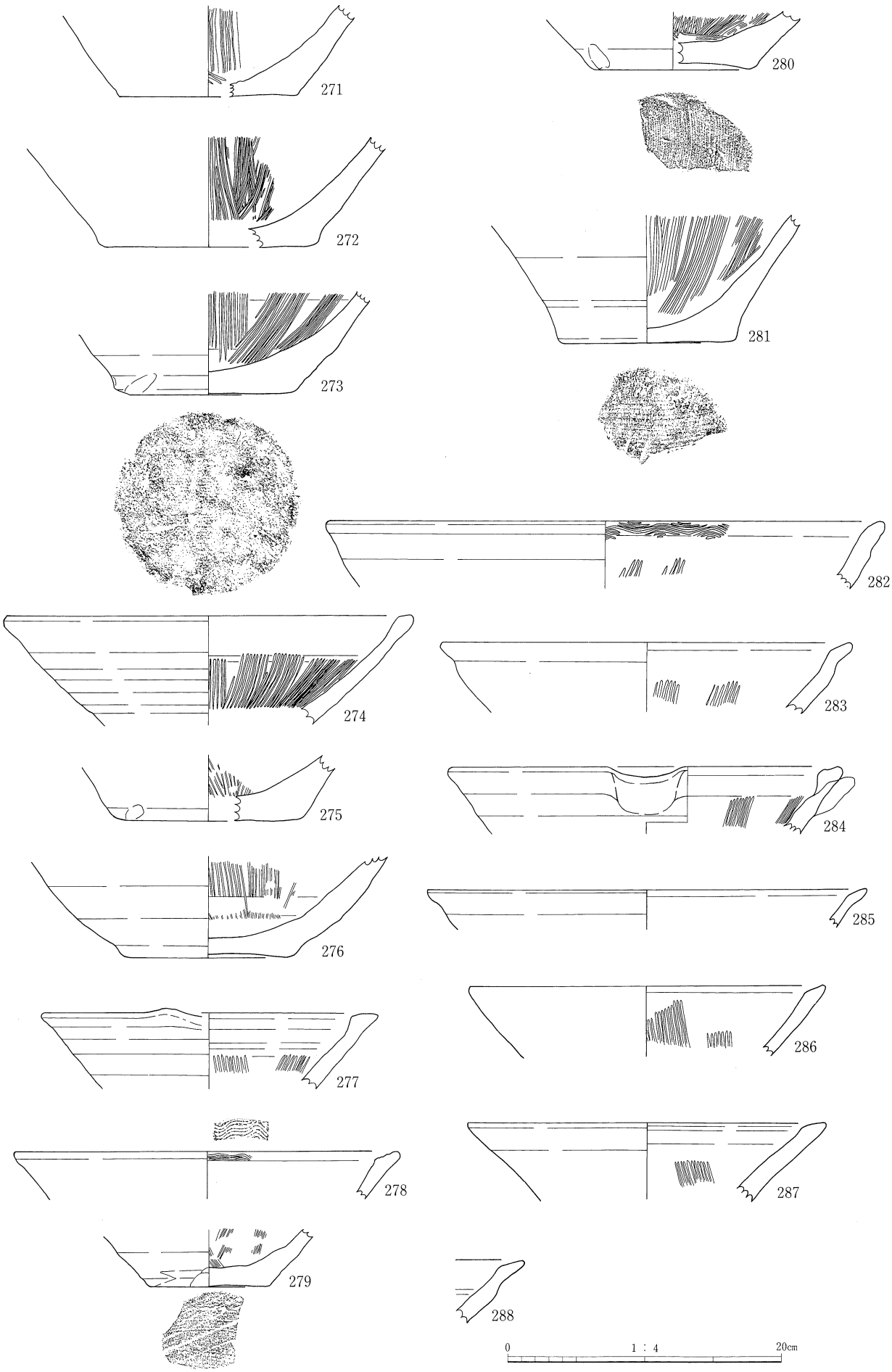
第98図　珠洲23　(230～245　1/4，246・247　1/6)



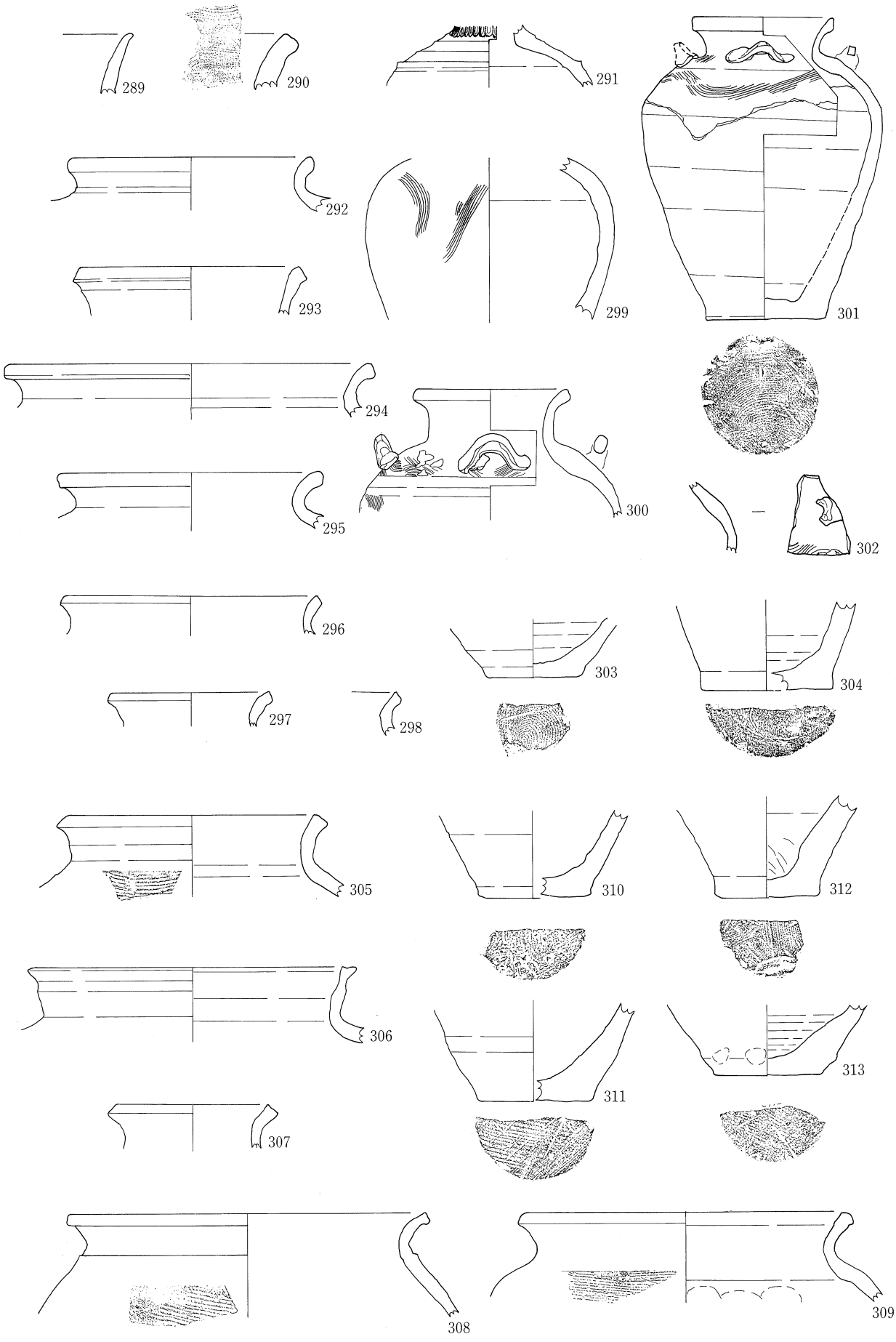
第99図　珠洲24　(1/6)



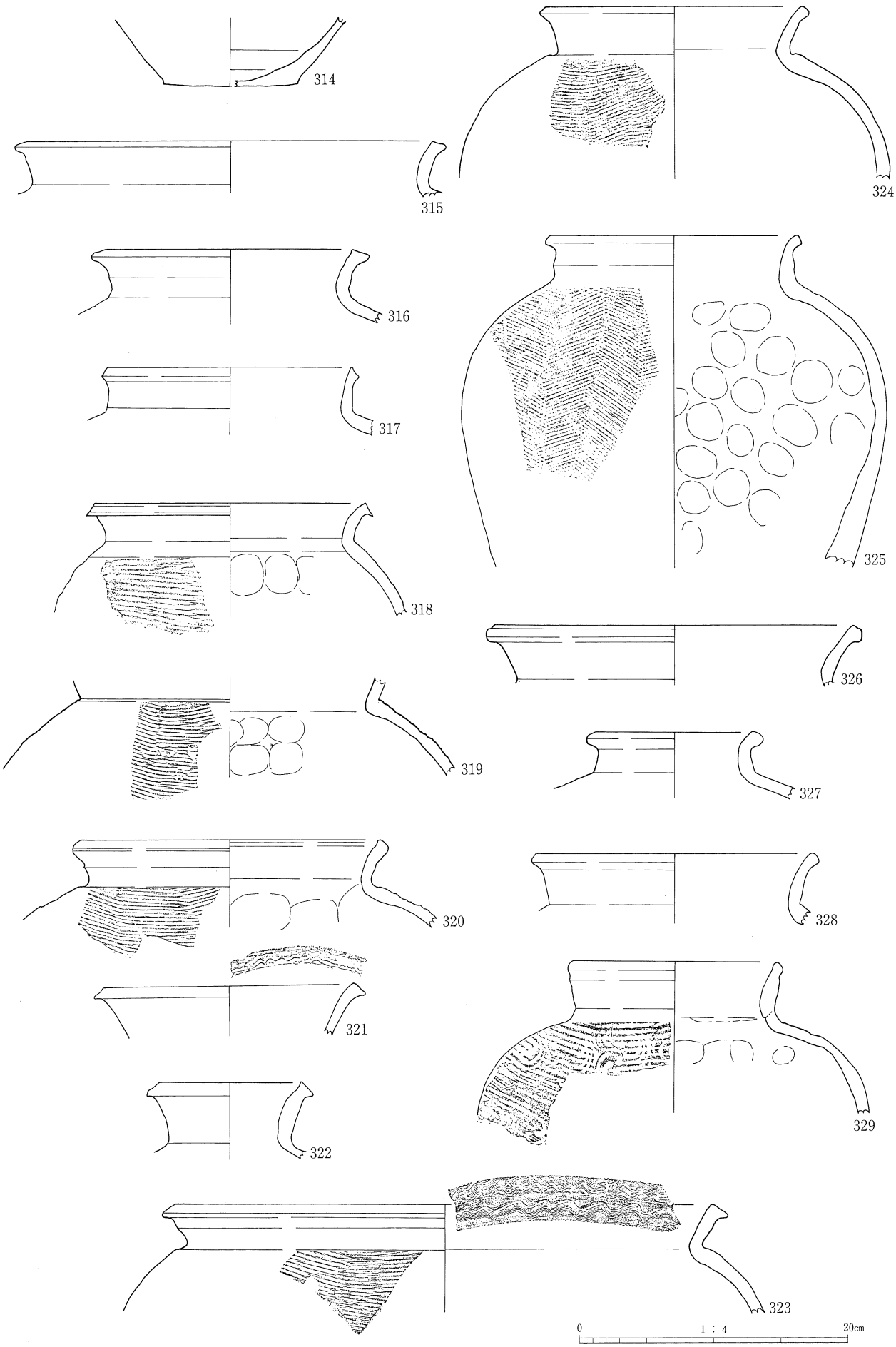
第100図　珠洲25　(1/4)



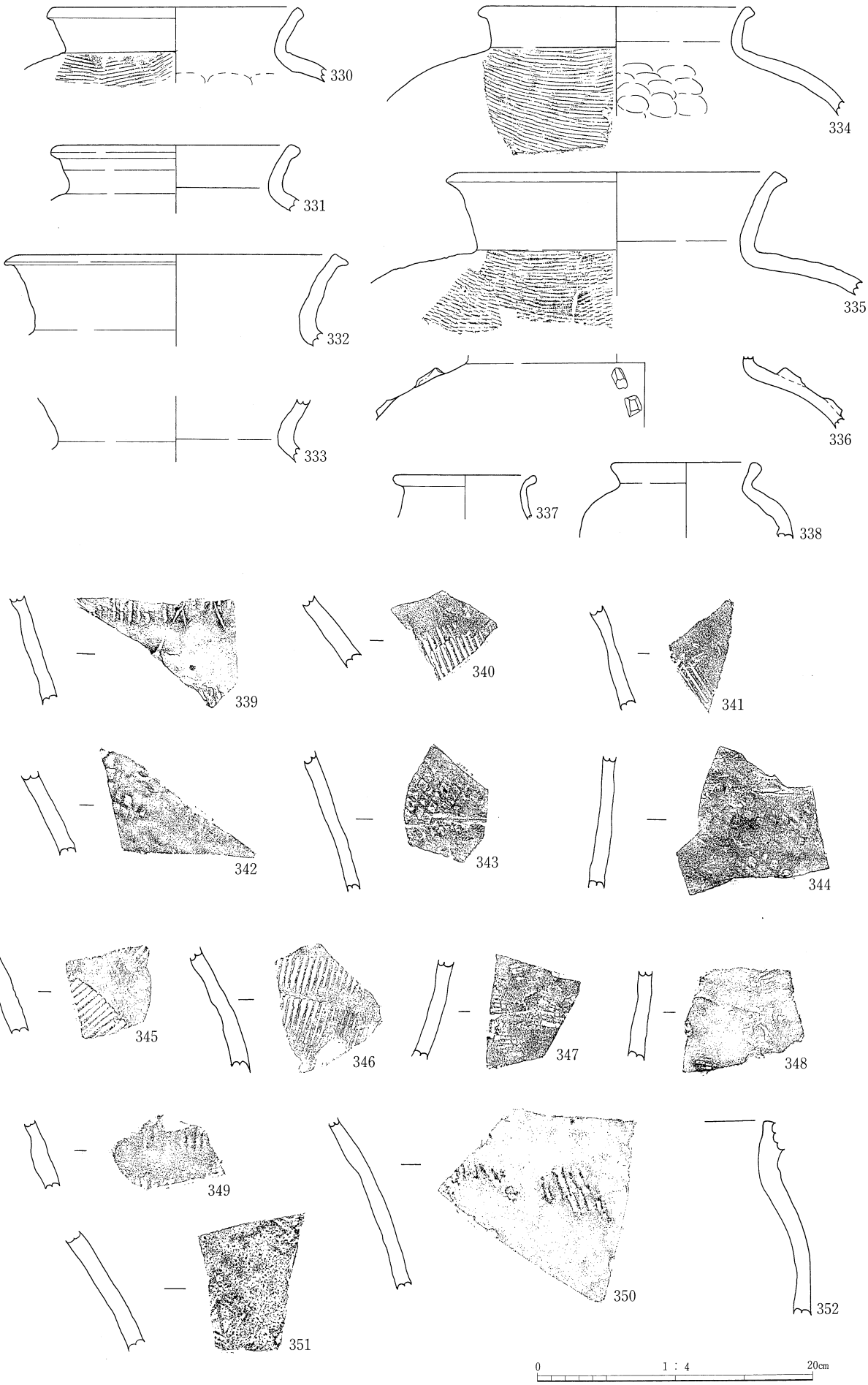
第101図　珠洲26　(1/4)



第102図　珠洲27　(1/4)



第103図　珠洲28　(1/4)



第104図　珠洲29・珠洲系陶器　(1/4)

3．越前・加賀・常滑・八尾

ここでは瓷器系陶器について報告する。越前については，福井県立朝倉氏遺跡資料館の岩田隆氏に年代等をご教示頂き，その他のものは北陸中世土器研究会等の最近の研究成果[注1]を参考にした。

(1) 越　　前（第105～107図，図版34）

1～7は擂鉢である。1は焼成があまく，淡黄褐色を呈し，表面は磨滅が激しい。卸目は内面の沈線よりやや上から9条施す。体部下半から底部の内側を押し出して膨らみをもたせ，体部半ばから上は直線的に開く。16世紀後半頃に比定される。2・3の体部は直線的にのび，口縁部は上面にやや幅広の平坦面をつくり角ばる。卸目は口縁部から深く刻みこまれており，2は密に，3は一単位10条を間隔をあけながら施している。底外面には砂が付着する。2・3とも16世紀後半から末に比定される。4～7は口縁下で器壁がうすくなり，口縁部内面はやや肥厚し，端部は外方へ挽き出す。卸目は深いもの（5・7）と浅いもの（4・6）がある。卸目原体の条数は4・5・7が10条，6が8条である。7の底外面には砂が付着し，内面には煤状の炭化物が付着している。4～6は17世紀初頭，7は17世紀前半～中頃に比定される。

8～12は壺である。8は口縁部が外方へ開き，上方へ屈曲する。内面には灰オリーブ色の自然釉がかかる。口縁形態や，約14cmの口径から，片口壺と考えられる。9は底部破片である。底径10～15cmの小振りなものである。8・9は13世紀後半から14世紀前半に比定される。10は頸部が直立し，口縁端部は外方へ小さく挽き出す形態をもつ。16世紀後半～末に比定される。11は短い頸部が直立し，肩に丸みを帯びた形態をもつ。外面口縁部から体部にかけて鉄釉がかかる。16世紀末から17世紀前半に比定される。12は大型壺の口縁部である。立ちあがりはわずかに内湾し，口縁部は方頭を呈する。外面には沈線状のくびれがある。胎土は粗く，2～3㎜の白色粒を多く含む。16世紀頃に比定される。

13～36は甕である。13・14はN字状口縁を呈する。13の外面には灰オリーブ色の自然釉が厚くかかる。14の口縁部上面はN字状につくり出す際の沈線状の工具痕が残る。13・14とも13世紀後半～14世紀前半に比定される。15はN字状口縁を上方へ長く挽き出し，端部を丸く肥厚させた形態をもつ。内面の段を作りだすために用いられた断面丸味のある工具痕が残る。肥土は粗く，2～3㎜の白色粒を含む。15世紀前半に比定される。16～26は口縁部が方頭を呈する。16はやや外傾ぎみに直立する長い頸部をもつ。16～26は，外面口縁部下に断面三角形を呈する鋭い稜がある。また内面口縁下には，浅い段がある。17は長い頸部が外へ開く形態である。内面口縁部から外面全面に灰オリーブ色の自然釉が厚くかかる。18～21は頸部が短く，口縁部外面の稜の直下で，外方へ折れて肩部へとつながる。19・20の内面の段は，他より深く，断面に丸みがでる。また，黒褐色の自然釉をうすく被ることも共通しており，同一個体の可能性もある。18は体部内面に成形時の指頭圧痕を残す。口縁部から外面は丁寧な横撫でを施すが，体部内面の横撫では粗雑である。16～21，24・25は16世紀前半に比定される。22は口縁から内側の段までの幅が若干せまい。頸部はやや長く，直立する。16世紀中頃に比定される。23も口縁から段までの幅がせまく，口縁端部の外方への挽き出しがやや強くなり尖る。頸部はやや長く，外傾する。口縁部内面と外面全面にオリーブ黄色の釉がかかる。調整は，口縁部から頸部までを丁寧に横撫でするが，内面の撫では粗雑で粘土接合痕や指頭圧痕が残る。16世紀後半に比定される。26は，口縁端部の外方への挽き出しがより強くなるとともに，上部平坦面の幅が拡がり，全体的に厚みをもつ。16世紀後半～末に比定される。27は肩部の破片である。半ばで「く」の字状に屈曲し，稜をもつ。肩の稜よりやや上に格子と凹字の「本」のスタンプが押されている。外面の調整は，稜より上は不定方向に篦削りした痕が少し残るが，撫でにより消されている。これに対して稜より下は斜め方向の篦削りの痕が顕著に残る。内面は横方向に粗く撫で調整しているが，指頭圧痕が残る。16世紀

中頃に比定される。28は，体部破片であり，スタンプがあることから肩部付近と思われるが，傾きはよくわからない。スタンプは凹字の「本」と，丸と四角を交互に組み合わせた格子状のモチーフを用いている。内面は横方向の粗い撫で調整を施している。16世紀中頃のものと思われる。29は肩部の破片で外面に縦長の「十」の篦記号がある。内面は横方向の粗い撫で調整を施す。16世紀に比定される。30は小型の甕である。口縁内面の段は無く，横撫でによるわずかな窪みがみられる程度である。外面には断面三角形の稜がある。口縁部内面から外面全面は丁寧な横撫で，体部内面は指頭圧痕の残る粗い横撫でを施す。胎土に微細な白色粒を多く含み，表面はザラついている。31は口縁部が肥厚し，口縁部内面には，段ではなく沈線が一条ある。外面の稜は顕著である。32は底部破片である。底部外面は無調整で，細かい粘土粒が付着するが，他に縄状の圧痕が数条見られる。内面には漆が付着している。焼成は，焼き締まってはいるが，赤く酸化している。30～32は16世紀後半から17世紀初頭に比定される。33・34は口縁部が著しく肥厚し，内面の段や沈線はみられない。外面には鋭い稜はなく，丸味を帯びて膨らみ，幅広の口縁部を形成する。口縁帯の半ばよりやや下に沈線状の窪みを一条入れている。口縁部は内外面を横撫でし，体部は不定方向に撫でる。体部内面には指頭圧痕が残る。17C初頭に比定される。35は，口縁端部が外方へ挽き出されるように肥厚する。内面には浅い段がある。外面の稜はほとんど無いが，わずかな盛り上がりとして残っている。内外面に黒褐色の釉がかかり，その上から暗オリーブ色の自然釉が垂れている。36は口縁部が断面逆三角形を呈する。口縁部上端は厚く，頸部では極単に薄くなる。内面の段は無く，外面には端部に一条の沈線がある。内外面に灰褐色の鉄釉がかかる。断面には層状の焼成むらがみられる。35・36は17世紀に比定される。

(2) 加　　賀（第107図，図版34）

37は甕の体部破片である。外面には，格子状と思われる押印がある。内面は横撫で，外面は不定方向に撫でられているが，あまり丁寧ではなく器面に凹凸が残る。

(3) 常　　滑（第107図，図版34）

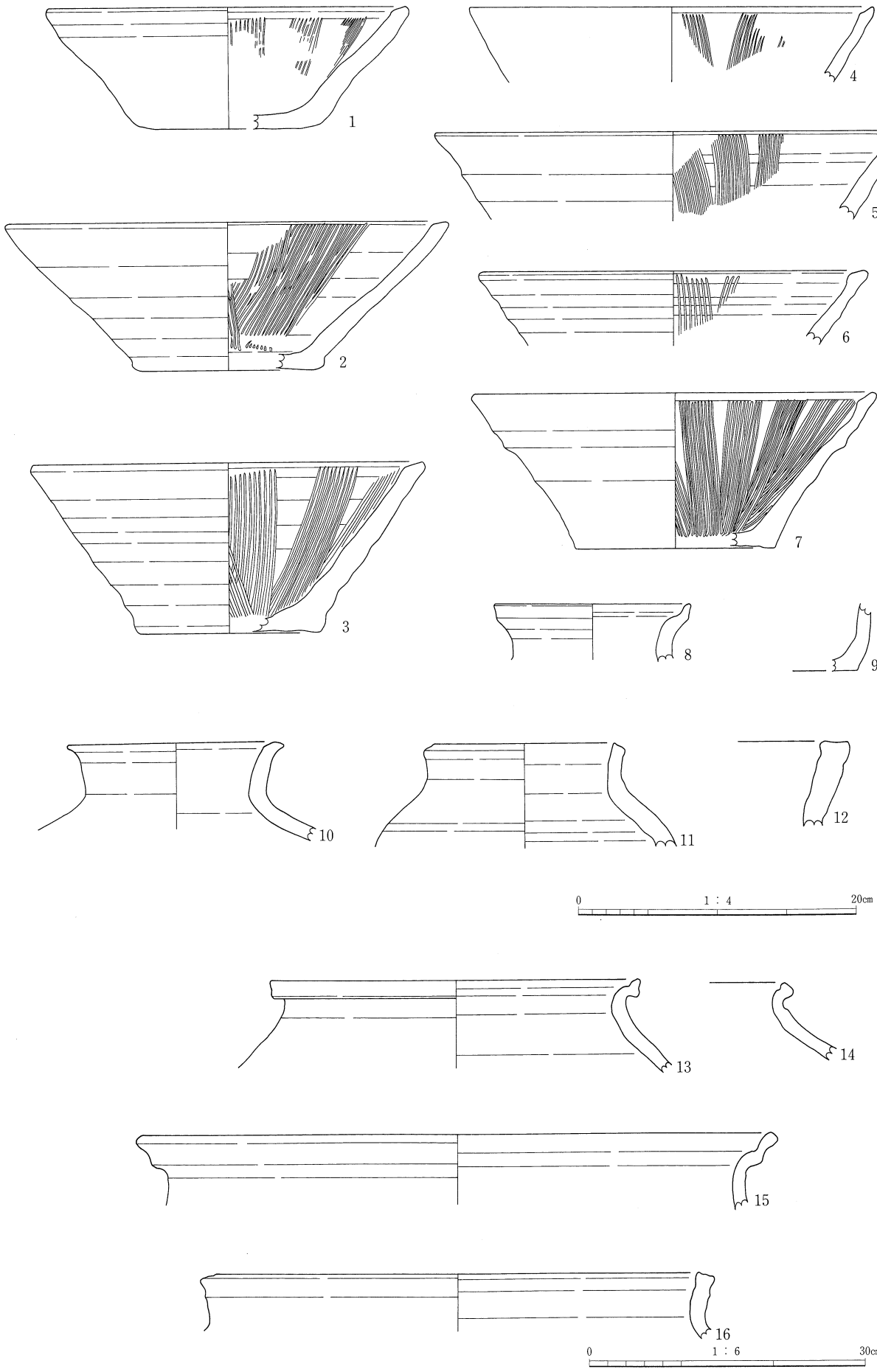
38は鉢である。底部には外方へ張り出す高台が貼り付けられている。内面の体部と底部の境は強い撫でによる沈線状の窪みが一周する。高台には貼りつけの際の圧痕等が残り，やや歪曲した部分もある。12世紀に比定される。

(4) 八　　尾（第108図，図版34）

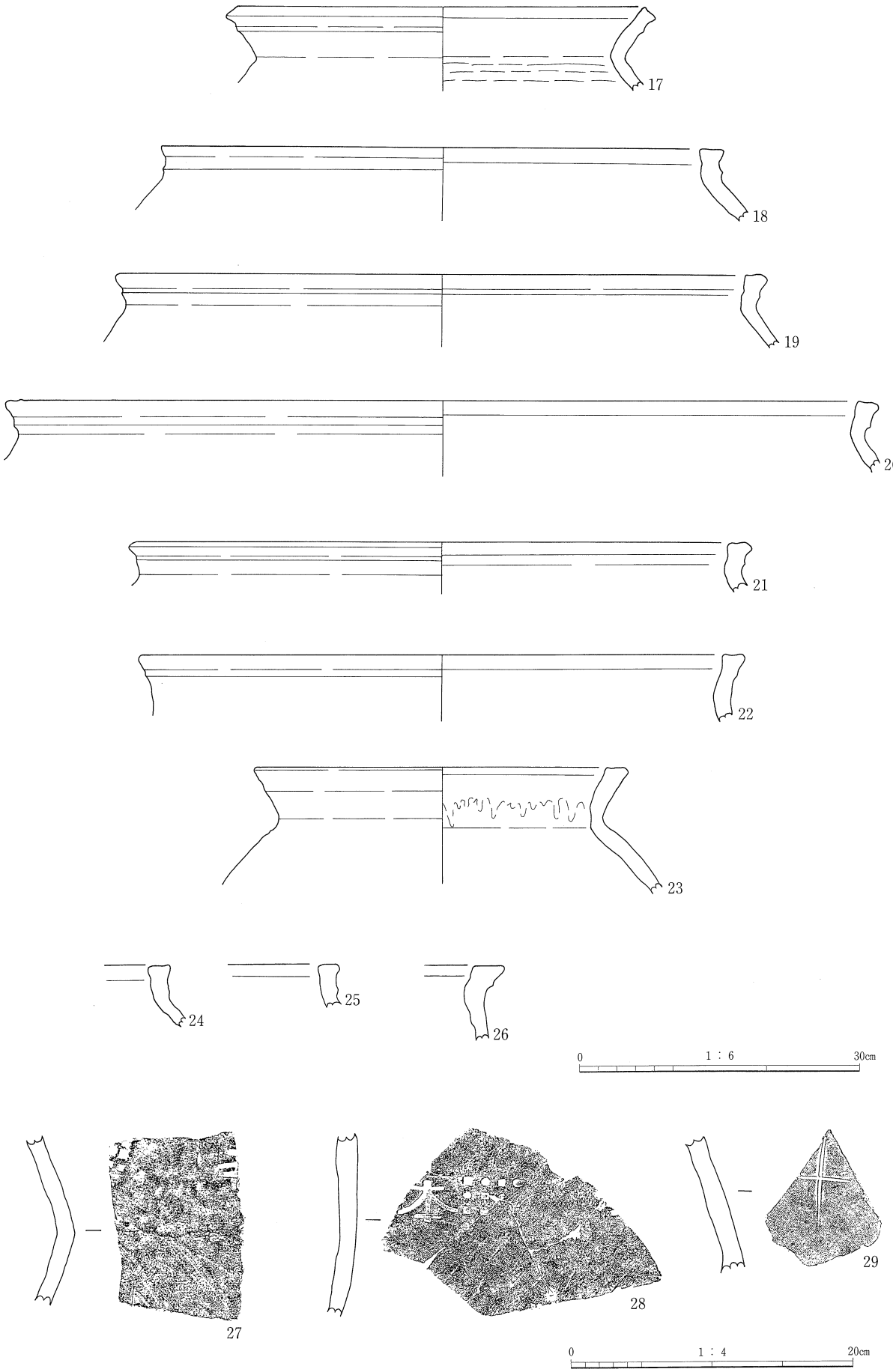
39～47・49・50は甕である。全てN字状口縁を呈するが，N字状が未発達で，垂下した部分が丸味をもっておわるもの(40・41・46・47)，N字状が発達し，垂下する部分が幅広で下端は鋭く尖るもの(39・42・43・44)に大別できる。前者は13世紀後半，後者は14世紀前半に比定される。また45は両者の中間的な様相をもつ。色調は，40が断面・内外面とも黄灰色，42が断面黄灰色で灰オリーブ色の自然釉を被るほかは，すべて断面は灰色系，内外面は褐色系を呈する。焼成は堅緻に焼き締まっている。調整は，口縁部は丁寧な横撫で，体部内面は粘土の継ぎ目や指頭圧痕を残す粗雑な横撫でを施す。体部外面は45が撫で，46は板状工具によるかき上げ痕を残している。49・50は底部である。体部外面は撫で，内面は指頭圧痕を残す粗雑な横撫でを施す。50は内面の体部と底部の境に指で強く撫でた痕が一周する。底部外面は無調整で，植物の繊維状の圧痕を残す。焼成は堅緻であるが，40は火膨れがある。

48は擂鉢の体部破片である。卸目は6条で，斜め方向に交互に錯走している。焼成は堅緻であるが，断面は黒色を呈する部分もあり，焼成むらがみられる。　　（越前慎子）

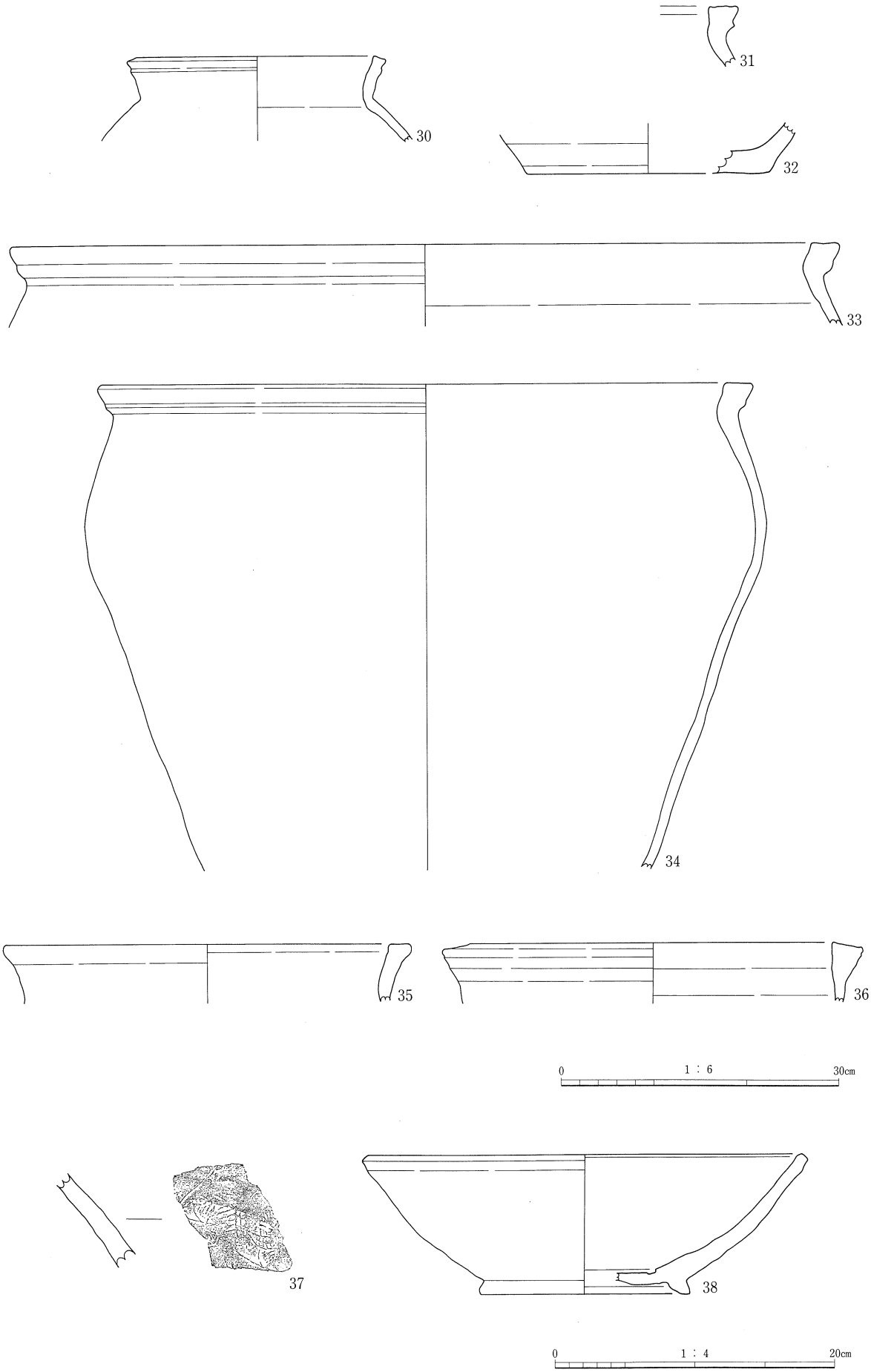
注1　福井県陶芸館　1986　『越前名陶展』
北陸中世土器研究会　1989　『越前陶の諸問題』
北陸中世土器研究会　1990　『中世北陸の在地窯』



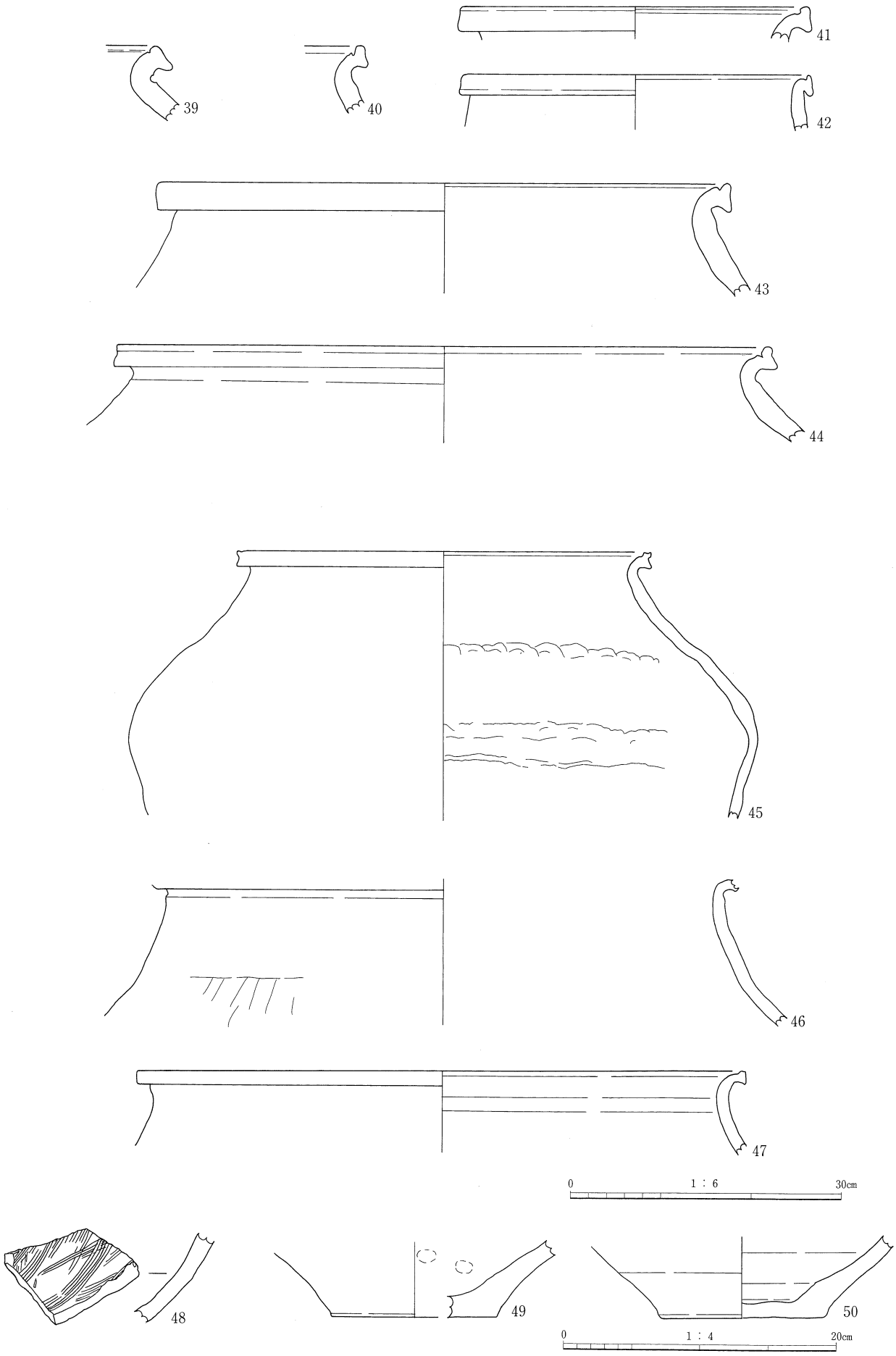
第105図　越前1　(1～12　1/4，13～16　1/6)



第106図　越前 2　(17～26　1/6, 27～29　1/4)



第107図　越前3・加賀・常滑　(30～36　1/6, 37・38　1/4)



第108図　八尾　(39～44・48～50　1/4，45～47　1/6)

4．中国製陶磁器

中国製陶磁器は，包含層出土のものを含めると，相当量になるが，ここでは遺構出土資料を中心に，代表的なもののみを図示し，報告する。説明にあたっては，白磁・青白磁・青磁・染付（青花）・その他に大分類し，青磁については龍泉窯系青磁と同安窯系青磁に区分して行うことにする。さらに形態・文様等による細分については，福岡県太宰府出土品の分類と編年[注1]やその後，『貿易陶磁研究』に公表された研究成果[注2]等に対比しながら，分類・記述する。

(1) 白　　磁（第109～112図，図版35～39）

碗（１～85）　図示したものを10類に細分した。

１類（１～13）　体部がやや内湾しながら立ち上る器形で，口縁部に小さな玉縁を有する。口径は12.5～16cmで器高のわかる資料はない。釉は薄目でやや黄色味を帯びるものが多い。胎土は灰白色を呈し，やや軟質なものが含まれ，釉下に化粧土を施すものもみられる。小破片が多く，全体の器形を復元できるものはない。これらについては，太宰府出土資料による分類（以下太宰府分類と略す）でいえば，「II類１ａ」とされるものである。

２類（17・18）　胎土・釉調が１類と共通で，器形は，口縁部が外方に直線的に開き，玉縁とならないものを一括した。18は，体部内面に白堆線のみられるものである。外面は体部中程まで釉が掛かり，以下は露胎となる。最近の太宰府分類では，「II類４ｂ」とされるものである。17は小破片で全形を知りえないが，同じく「II類３・４」の口縁部である。

14～16は，１類及び２類の底部である。外面は，体部途中まで施釉され，下半は露胎となる。高台は外面を垂直に，内面を斜に削り出す。内底面（見込み）は，段を持ち，中央部が一段窪むもの（14）と，なだらかなもの（15・16）がある。前者は，「II類４」に分類されよう。

３類（19～36）　体部がごくわずかに内湾するものの，ほぼ直線的に開く器形で，口縁部に大きめの玉縁を有するものである。口径は14.5～18cmである。釉は１・２類に比べやや厚めで，灰味を帯びた白色を呈するものが多い。口縁部内外面に，釉だれのみられるものもあり，また施釉は体部外面は中程までで，下半及び底部は露胎となる。器壁は比較的厚手の作りとなっている。胎土はやや硬質で，灰白色を呈する。内底面近くで，沈線を巡らせるものが多くみられる。これらは太宰府分類の「IV類」にあたる。37～40は，３類の底部である。高台は厚く，低い形態をなし，高台内部の削り込みはわずかである。

４類（41）　体部が丸味を持ち，口縁部は外方に開いて端部を丸くおさめるものである。体部下端の高台近くまで施釉される。太宰府分類では「Ｖ類１ａ」とされるものであろう。

５類（42・43）　同じく体部が丸味を持ち，口縁部が外反する器形のものである。太宰府分類で「Ｖ類２ａ」とされるものに類似する。

６類（44～56）　体部がやや内湾ぎみに丸味を持って立ち上り，口縁端部が外方に折れて嘴状になる器形のものである。器壁は比較的薄く，胎土は灰白色を呈する。薄くかかる釉は，やや灰色を帯びている。口縁部内面と，内底面近くに沈線を巡らすものが多い。無文の６ａ類（44～52）と，内面に櫛目文の施文される６ｂ類（53～56）に細分される。これらは，太宰府分類の「Ｖ類４ａ・４ｂ」に対比できる。57～59は４類～６類の底部である。細く高く直立した形態の高台で，施釉は体部下半部もしくは，高台との境付近までである。60～64は，６類の器形に似るものであるが，全形が不明なため，内底面の釉を輪状に剝ぎ取るいわゆる太宰府分類の「VIII類１」との区別が困難な資料である。

７類（65～69）　体部がほぼ直線的に開き，全体的に浅い器形のものである。口縁部は外方に折れ，

内面には沈線が巡る。胎土・釉調は6類に似る。内面が無文の7a類（65～67）と，櫛目文を施す7b類（68・69）に細分でき，太宰府分類の「VI類1a・1b」に対比できる。

8類（70～72）　体部中程から外反ぎみに口縁部が開く器形である。70は口縁輪花となり，内面に白堆線がみられる。72は，やや細身の低い高台を持つもので，8類の底部と考えられる。施釉は体部外面下半までである。これらについては太宰府分類の「VII類」に相当しよう。

9類（73～80）　体部がほぼ直線的に開き，端部を丸くおさめる器形のものである。口縁部内面やや下った位置で沈線が巡る。胎土・釉調等は6類に似る。81～83は細身で低い高台を持つもので，内底面の釉を輪状に剝ぎ取る。施釉は体部と高台の境付近までで，底部は露胎となる。これらは9類の底部と考えられるものである。太宰府分類の「VIII類2」に対比できる。

10類（84・85）　口縁端部の釉を剝ぎ取る，いわゆる口ハゲの碗である。口縁部がわずかに外反する器形であるが，小破片のため，皿との区別が明瞭ではない。釉は薄く，やや透明な白色を呈する。太宰府分類では「IX類」にあたる。

皿（86～114）　図示したものをさらに11類に細分した。

1類（86・87）　口縁部は大旨直線的に開き，端部は丸くおさめる器形である。釉は全体に薄く，黄色味を帯びた白色を呈する。施釉は体部外面下半までで胎土はやや軟質である。胎土・釉調は碗1・2類に似る。底部及び内底面の形状が不明だが，太宰府分類の「II類」もしくは「III類」に相当する。

2類（88～90）　口縁部はわずかに外反する器形のもので，胎土・釉調は皿1類に似る。内底面は，輪状に釉剝ぎするもので，外面の施釉は体部下半までである。90は2類の底部である。低く厚味のある高台を削り出し，内底面には輪状の釉剝ぎがみられる。これらについては太宰府分類の「III類1」にあたる。

3類（91）　胎土・釉調等は2類に似る。厚味のある断面四角形の高台を削り出し，内底面は全面施釉である。太宰府分類の「III類2」にあたる。

4類（92～95）　薄手の作りの口縁部がやや内湾しながら立ち上る器形で，口縁部内面の屈折部に段を持つものである。釉は薄く，やや黄色味を帯びた白色である。施釉は体部下半までで底部は露胎となるようである。太宰府分類の「VI類1a」にあたる。

5類（96・97）　底部破片のみであるが，体部内底面近くに段を持つものである。胎土・釉調・施釉部位は，皿4類に似る。底部はほぼ平底となる。太宰府分類の「VI類1b」にあたる。

6類（98）　平底で，内面に放射状の櫛目文を施すものである。胎土・釉調等は，皿4・5類と似る。太宰府分類の「VI類2」にあたる。

99～101は，太宰府分類の「V類～VII類」にあたるが，上記4～6類に明瞭に分類できないものである。

7類（102～104）　口縁部が内湾して立ち上り，内面上位に沈線状の段を持つ。釉はやや厚く，灰白色を呈する。底部は釉剝ぎされており，やや上げ底風の平底になる。内面に草花文が施される7a類（102・103）と，無文の7b類（104）に細分できる。これらは太宰府分類の「VIII類1a・1b」にあたる。

8類（106～109）　体部が直線的に開き，端部のみがわずかに外反する器形で，口縁端部を釉剝ぎする，いわゆる口ハゲのものである。全形の残る例はないが，底部も含めて全面施釉されると考えられる。釉はやや厚めにかかり，灰白色を呈する。胎土はやや硬質で灰白色である。口径約10cmの109と，口径12cm前後の106～108に分けられる。これらは太宰府分類の「IX類1b・1c」にあたる。

9類（110）　体部がやや内湾しながら立ち上り，口縁部は直線的に開く器形である。口縁端部は釉剝ぎする，いわゆるロハゲのものである。胎土・釉調は8類と共通するが施釉は体部外面下半までで，底部は露胎となる。太宰府分類の「IX類2」にあたる。

10類（105）　小破片で全形は不明であるが，体部がゆるく内湾しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直線的に外方に開き，端部は丸くおさめる。底部は高台が付くと考えられ，森田分類の白磁「D群」，小野分類[注3]の白磁皿「B群」に相当しよう。

11類（111～114）　体部が内湾しながら立ち上り，口縁部が外反する器形の端反皿である。高台は，下端のいわゆる畳付がやや尖る逆三角形で，細身のものである。高台下端部を中心に細かな砂が付着するものがある。釉は，やや厚く灰白色を呈するものが多い。これらについては，森田分類の白磁「E群」，小野分類の白磁皿「C群」にあたる。

以上1～11類の他に図示しなかったが，いわゆる菊皿が1点出土している。薄手の作りで，口縁部周辺はやや薄緑色を帯びる釉調である。小野分類の白磁皿「D群」に相当しよう[注4]。

小杯（115～118）　体部は内湾しながら立ち上り，口縁部がゆるく外反する器形のものである。口径8.5～9cm，器高約4cmをはかり，高台を削り出す。釉は薄くかかり灰白色を呈するが，透明感のあるものもみられる。胎土はやや軟質なものがあり，施釉は体部外面下半までで，以下底部にかけては露胎となる。117・118の内底面には目跡が残る。118は高台下端に浅い切り込みを入れるものである。

角杯（119）　体部が面取りされるもので，底部から体部下半にかけてしか残っていないが，いわゆる角杯に分類されるものである。胎土・釉調等は小杯に似る。高台内側には漆様の塗料による記号風の書き込みがみられる。高台下端には浅い切り込みが入る。

壺類（121～127・129～134）　大型（121～127・129・131～133）と小型（130・134）がある。釉は灰白色を呈し，中には黄色味を帯びるものがあり，やや厚めに施されるものが多い。胎土は灰白色でやや硬質となるものが多い。121・122は四耳壺で，肩部に横位に耳が付く。釉は外面は厚く，内面は薄くかかる。123～127は，口縁部破片である。口縁部がゆるく外反し，端部が断面三角形状に肥厚するもの（123・124）と下方へ折れるもの（125～127）とがある。この中には小破片から図を復元したものもあり，水注等が含まれるかもしれない。129は内面頸部以下が露胎となるもので，壺もしくは水注である。胎土はわずかに灰色を帯びた白色で焼成も良い。131・132は壺類の体下半部破片である。131は外面に縦方向の沈線を施している。釉は外面のみにかかり，内面無釉。胎土はやや軟質である。132は底部近くで内外面施釉される。133は底部破片で，高台を持つ。130・134は小型の壺である。

水注（128）　頸部に把手が付く水注である。

以上の壺・水注類のうち131・134は，太宰府分類の「II類」に，他は同じく「III類」に相当しよう。

壺蓋（135～138）　小型壺の蓋になるものである。上面にはやや厚めの釉が施され，下面（裏面）は無釉となる。直径や形態に変化が認められる。これらについては太宰府分類の「II類」に相当する。

(2)　青　白　磁（第112図，図版39・47）

碗（139～142）　139は内面に櫛目文を密に施文する。底部をわずかに削り込むことで高台状の高まりを作出している。釉は透明感のある，わずかに青緑色を帯びた灰白色で外面は高台下端まで施釉されている。140も同様の形態で，内面にはかすかに櫛目状の文様が認められるが明瞭でない。141は前者に比べやや大きめの高台を削り出すものである。内面には櫛描あるいはへら状具による文様が施される。釉は，透明感のある水色を帯びた白色で，外面は高台下端との境まで施釉される。142は，非常に薄手の作りで，内面に櫛描文が施される。

皿（143～148）　形態と施文から数種類に分けることができる。143は，口縁部が外反する器形で，体部内面中程に段を持つ。口縁部は輪花状で，縦方向に白堆線がみられる。144～146は，内面無文のもので口縁部を欠く。底部は平底で，体部中程に段を持つ。釉は体部外面のみかかり，底部は無釉。透明感のある水色を帯びた白色を呈する。147･148は小型の皿で内面に型押しによる文様が施される。147は浮彫り状の蓮弁文を重ねるものである。釉は水色を呈し，外面は体部下半までかかる。底部はごく低平な高台を削り出す。148は内面に花文を施す。釉は白色を呈し体部外面は中程までかかる。底部は平底である。

瓶類（149～151）　瓶類の体部小破片である。外面に櫛状具による唐草文が施される。釉は水色を帯びた白色を呈し，外面はやや厚め，内面には薄くかかるものと，無釉のものとがある。いわゆる梅瓶に類似すると考えられるが，小破片であるため，詳細は不明である。

壺（152･153）　小型の壺である。152は体部外面に少し不明瞭であるが鎬蓮弁文を施す。釉は，水色を呈し，内面にも施す。口縁端部の上面と内面の釉はカキ取る。153は，体部外面下半部に浮き彫状の蓮弁文を数段巡らせるものである。胎土は灰色を呈し，青味を帯びた灰色の釉は，内外面とも体部途中までかかり，下半部と底部は露胎となる。

合子（154～158）　154・155は体部外面に細身の蓮弁文を施す合子身である。釉は水色を帯びた灰色を呈し，外面は体部最下部までかかり，外底面は露胎となる。156は外面に花文がみられる合子身である。全体を六角形状に型押し作りするもので，釉はわずかに水色を帯びた白色を呈し，外面上半部と内面にのみ施釉される。胎土はほぼ白色を呈し硬質である。158・159は体部に細身の蓮弁文，天井部には花文のみられる合子蓋である。口縁端部と内面は無釉となる。159は全形が不明であるが，碗もしくは壺類の体部下半部と考えられる。

(3)　龍泉窯系青磁（第113～117図，図版39～45）

碗（162～281）　図示したものを19類に細分した。

1類（162～167）　体部がゆるく内湾して立ち上がり，口縁部がほぼ直線的に外方に開く器形で，内外面無文のものである。釉はやや青味を帯びた緑色が主体で，中にはオリーブ色や青灰色に近いものもある。胎土は灰白色ないし淡い灰色を呈し，やや硬質である。施釉は高台外面までで，高台下端と内側及び外底面は露胎となる。167は1類の底部と考えられる。高台はやや外に開く断面四角形で，底部はぶ厚い。底部と体部の境は稜を持ち，体部は折れて立ち上がる。太宰府分類では「Ⅰ類1ａ」にあたる。

2類（168）　1類とよく似た器形で，内外面無文である。口縁部に輪花のみられるものである。釉調・胎土等は1類に共通する。

3類（169～180）　体部は内湾してゆるく立ち上り，口縁部がほぼ直線的に外方へ開く器形で1・2類と共通する。内面に蓮華文を片切彫りで施し，外面無文のものである。釉調・胎土等も1・2類と共通する。170は底部まで残る資料である。全体に焼成不良で，釉調は黄緑色ないしオリーブ色をしており，胎土も軟質である。高台は内外両面の角を面取りする。底部はぶ厚く，高台内面の削り込みも浅い。太宰府分類の「Ⅰ類2」に相当する。

4類（182～183）　器形・釉調・胎土等は上記1～3類に共通する。内面にヘラおよび櫛状具で花文を施すものである。太宰府分類の「Ⅰ類3」にあたる。

5類（181・184～189）　これも器形・釉調・胎土等は上記1～4類に共通する。内面を2本の縦沈線で区画し，その中に飛雲文を片切り彫りするものである。これらは太宰府分類の「Ⅰ類4」にあた

る。中でも口縁部輪花のある181は「Ⅰ類４ｂ」にあてはまるが，184～189も破片が多く，輪花の有無は確認できないので，とりあえず一括しておく。

190～195は内面にヘラ及び櫛状具による花文を施すもので，３類ないし４類にあてはまるものである。このうち192は３類，他は４類に分類できるかもしれないが，いずれも小破片であるため断定は差しひかえておく。196～198は底部破片である。上記３～５類の底部となるものである。これも，196は４類，197は５類，198は３類の底部となる可能性がある。

６類（199・200）　器形・釉調・胎土等は上記１～５類に類似する。内外面無文であるが，口縁部輪花となり，内面を白堆線で縦に区切る。太宰府分類の「Ⅰ類４ｃ」にあたる。

７類（201～214）　これも器形・釉調・胎土等は上記１～６類に似る。体部外面には鎬蓮弁文を施し，内底は無文となるもので，太宰府分類の「Ⅰ類５ｂ」にあたる。

８類（215～217）　体部外面には鎬蓮弁文を施し，内底面に花文や，渦巻状の幾何学文様を型押しするものである。外面の施釉は大旨高台外面までで，高台下端部や高台内側は露胎となる。高台内側の削り込みは浅く，底部はぶ厚い作りとなる。太宰府分類の「Ⅰ類５ｃ」にあたり，上記７類のうち一部にはここに含まれるものもあろう。

９類（218）　体部外面には鎬蓮弁文を施した後，櫛描文を入れるものである。底部のみの破片で口縁部形態は不明である。内底面には不明瞭ながらヘラ彫りもしくは型押しによる曲線文様がある。太宰府分類では「Ⅰ類６ｂ」とされるものである。

10類（219～224）　体部から口縁部にかけてゆるく内湾しながら立ち上る器型で，体部外面にやや細身の鎬蓮弁文を施文するものである。釉調は，水色を帯びた淡い緑色や，緑色を帯びた青灰色を呈し，厚くかけられるため，蓮弁文の鎬がやや不明瞭となる。釉は細かな気泡が入り，半透明である。また蓮弁文先端部が丸味をおびるものもある。口径は12～16cmと，やや小ぶりのものが目立つ。223・224は10類の底部である。高台は小さく，下端がやや尖るもので，底部は比較的薄手の作りとなる。また高台下端を除き，全面施釉される。太宰府分類では「Ⅲ類２」にあたる。

11類（225・226）　口縁部が直線的に開く器形で，口縁端部は丸くおさめる。外面にヘラによる片切り彫りの蓮弁文を施すもので，鎬のないものである。太宰府分類では「Ⅳ類」。上田氏による青磁碗の分類[注5]（以下上田分類と略す）では，「ＢⅠ'類」にあたる。

12類（227）　体部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上るもので，口縁端部は厚みをもたせて丸くおさめる。釉は淡い黄緑色で，厚くかかる。体部外面中程から下半部にかけて，丸味をもった鎬のない蓮弁文をヘラ彫りで施す。上田分類の「ＢⅡ類」に相当する。

13類（228～230・256・257）　口縁部がやや内湾しながら立ち上るか，外方に開く器形になるもので，口縁端部は若干肥厚して丸くおさめる。口縁部外面にいわゆる雷文帯を持つものである。釉は，淡い黄緑色や青味を帯びた緑色を呈し，厚めにかける。胎土は灰白色で，やや硬質なものが多いが，暗灰色を呈し軟質なものもある。口径は12～13cmと小ぶりのものである。上田分類では「ＣⅡ類」にあたる。256・257は，内底面に型押による花文や「宝」字文が施される。大旨，高台外面まで施釉され，高台内側は露胎となるもので，13類の底部と考えられる。

14類（231・232）　体部はゆるく内湾し，口縁部が外反する器形のものである。器形はやや薄く，口径は17～19cmと大ぶりである。内外面とも無文で後の15類に比べシャープな作りとなっている。太宰府分類では「Ⅳ類」，上田分類では「ＤⅠ類」に相当しよう。

15類（236・239～244）　体部は内湾して立ち上り，口縁部が外反する器形のものである。全体に厚

手の作りで，釉調・胎土にバラエティーがある。口径12～15cmをはかり，やや小ぶりである。これらは，上田分類の「ＤII類」に相当する。

なお233～235・237・238などは，14類と15類の中間的な形態で，区別が不明確なものである。口径は15～16cmをはかり「ＤII類」に含められる可能性があるが，取りあえず即断はさけておきたい。245～248の底部は，内底面に型押しによる花文のみられるもので，太宰府分類のIV類，上田分類の「ＢＩ'類」・「ＣＩ類」・「ＤＩ類」等の底部になると思われる。

16類（250～255）　体部は内湾しながら，やや外に開きぎみに立ち上り，口縁端部を丸くおさめる器形である。体部内外面とも無文である。焼成のややあまいものが目立ち，釉の発色もバラエティーがある。これらは，上田分類の「Ｅ類」・「Ｅ'類」に相当する。254・255は16類の底部と考えられる。255の内底面には型押しによる「大」字文と花弁文がみられる。

258～262の底部は，内底面に花文が型押しされるものを含み，高台内側まで施釉されるもので，上記12～16類等の底部と考えられる。

17類（263～269）　体部が内湾し，口縁部が立ち上る器形で，口縁端部は丸くおさめる。体部外面に線描の細蓮弁文を施すものである。蓮弁頂部は連弧状に沈線を引くが，縦線との対応関係は若干乱れるものがある。釉は青味を帯びた緑色・青灰色・暗黄色など変化に富み，胎土も白色に近いものから暗灰色まで様々である。口径は11～15.5cmと小ぶりである。これらは上田分類の「ＢIV類」に相当する。

18類（270～274）　器形は17類に類似し，釉調・胎土も変化に富む。体部外面の線描細蓮弁文は，さらに乱雑になり，蓮弁頂部の連弧状沈線も乱れ（271・272），直線ですませるもの（273・274）や省略するもの（270）などもある。これらは上田分類の「ＢIV'類」に相当する。

275・276は上記17・18類の底部と考えられる。内底面には，片切彫による文様（275）や型押しによる花弁文（276）が施される。276は全面施釉後，高台内面を輪状に釉剝ぎするものである。

19類（277・278）　体部が内湾して口縁部が立ち上る器形で，釉調・胎土等は16～18類のように変化に富む。口縁部外面に簡単な沈線文様を施すもので，上田分類の「ＣIII類」にあたる。

皿（282～292）　皿はさらに３類に細分した。

１類（282・283）　体部中程で折れて，口縁部が直線的に開く器形である。釉調は灰味を帯びた緑色で，胎土は灰色を呈する。内底面には櫛状具・ヘラ状具による文様が施されている。口径10cm前後でやや小ぶりである。太宰府分類では「Ｉ類２ｂ・ｃ」に相当しよう。

２類（286）　１類と同様の器形になると考えられる。内底面に片切り彫りによる魚文を施すものである。外底面は釉を剝取る。釉は灰味を帯びた明緑色で，胎土は灰白色を呈する。太宰府分類では「Ｉ類２ｄ」にあたる。

284・285は口縁部のみの破片で，内底面の文様・底部の形状等は不明である。太宰府分類の「Ｉ類２」に含められようが，細分類はできない。

３類（287～292）　体部中程で屈曲して口縁部が大きく外反し，口縁端部に浅い削りを波状に入れる。いわゆる稜花皿である。釉は明るい灰緑色で，胎土は灰白色ないし灰色を呈する。内面には櫛状具・ヘラ状具による文様が施される。287は体部外面に飛沫状の鉄釉？を加えるものである。

杯（293）　体部が直線的に外上方に立ち上り，口縁部を外反させるものである。釉は明るい青灰色で厚くかかり，胎土は明灰色を呈する。体部外面に蓮弁文が削り出される。太宰府分類では杯「III類４」にあたる。

小碗（294・295）　底部のみの破片である。内外面無文で，明るい灰青色や灰味を帯びた緑青色の釉が厚くかかる。高台下端を除き全面施釉されるもので，露胎部周辺は鉄色の発色がみられる。これらは太宰府分類の「III類１」にあたる。

盤（296～301）　体部が内湾しながら外上方に開き，口縁部が屈曲して外に折れ，端部が小さく立ち上る器形のものである。口径は23～38cmと差があり，口縁部形態にも若干の差異が認められる。釉は灰味を帯びた青緑色で厚くかかる。299～301は盤類の底部である。299は外面に蓮弁文があり，内底面には浮き彫りの魚文が施される。高台はやや細身で高く，端部が若干尖る。高台下端を除き全面施釉される。300・301は高台外側が屈曲せずに体部下半に続くものである。これも厚く釉がかかり，高台内部は露胎となる。盤のうち，296・297・299は太宰府分類の「III類」に，その他は同じく「IV類」にあたる。

鉢（302）　大きくみれば，盤に含められるかもしれないが，体部がほぼ垂直に立ち上る器形のものを鉢とした。口径38cmをはかる大型品で，口縁の形態は盤と同じである。体部内面の上部には片切り彫りによる雷文帯，体部から内底面にかけても蓮弁文？が描かれている。釉は灰味を帯びた明るい青緑色で薄くかかり，胎土は灰白色を呈する。高台は角を若干の面取りするもののほぼ四角形で，底部は薄手の作りとなっている。高台下端を含め全面施釉するが，高台内面を輪状に釉剝ぎしている。露胎部周辺は鉄色の発色がみられる。

蓋（303）　いわゆる酒海壺の蓋である。外面及び口縁部周辺に，灰味を帯びた緑色の釉が厚くかかり，胎土は灰白色を呈する。内面は無釉である。太宰府分類の「IV類」にあたる。

壺（304）　小破片のため全形を知りえないが，壺類の口縁部と考えられる。緑味を帯びた灰青色の釉が厚くかかり，胎土は明灰色を呈する。太宰府分類の「III類」にあたる。

香炉（305・306）　305は底部のみ残る。緑味を帯びた灰青色の釉が内外面にかかり，円板状の底部は無釉となる。306は口縁部が内側に肥厚し，外面は竹節状になる。これも緑味を帯びた灰青色の釉が，外面はわずかに厚く，内面は薄くかかる。２点とも太宰府分類の「IV類」に相当する。

(4)　同安窯系青磁（第118図，図版45・46）

碗（307～322）　図示したものを３類に細分した。

１類（307・308）　体部はわずかに内湾しながら外上方に開くもので，器厚は比較的薄い。釉は薄くかかり，青灰色あるいはわずかに緑味を帯びた青灰色で，透明感のあるガラス質のものである。胎土は明灰色を呈し，やや硬質である。体外面は無文で内面には櫛描文が施される。308は底部破片である。施釉は体部外面の下半までで，以下底部は無釉となる。高台は外側を垂直に，内側を斜に削り出し，底面中央が凸レンズ状に膨らむ。太宰府分類では同安窯系青磁碗「Ｉ類１ａ」にあたる。

２類（309～320）　器形・胎土等は１類に共通する。釉調は１類と同様のものがある他，オリーブ色や，明るい灰緑色・水色に近いものなどがあり，透明感のあるガラス質で，薄くかかる点は共通する。内面の櫛描文の他，外面にも縦方向の櫛描文が施される。体部外面の櫛描文は細かなものと粗いもの（312・313）がある。体部外面の施釉は中程もしくは下半部までで，底部は無釉となるようである。これらは，太宰府分類の「Ｉ類１ｂ」にあたる。

321の底部片は内面に櫛描文を施し，高台は外側は垂直に，内側を斜に削り出すもので形態は308に似るが，体部外面の櫛描文は有無不明。

３類（322）　体部破片であるため全形は不明であるが，１・２類に共通した器形になろう。体部外面にヘラによる片切り彫りを縦に入れるもので，内面にはこれも片切り彫りの花文？を施す。釉は灰

味を帯びた淡い緑色で，体部外面のかなり下部までかかる。太宰府分類の「III類」に相当しよう。

鉢（323）　器形・釉調・胎土等は碗１・２類に近似しているが，口径が21cmと大ぶりのもので，鉢に分類しておく。口縁部内面に沈線が１条巡り，外面には櫛描文が引かれる。

皿（324～342）　図示したものをさらに３類に細分した。釉調・胎土等は碗１・２類に共通する。

１類（324）　口縁部の形態は不明であるが，体部中程から底部にかけて無釉のもので，内面は無文である。太宰府分類の同安窯系青磁皿「Ｉ類１ａ」にあたる。

２類（325）　体部中程で屈曲して，口縁部がわずかに外反しながら外上方に開く器形で，皿１類と同様体部下半及び底部は無釉のものである。内底面に櫛描文が施されるもので，太宰府分類では「Ｉ類１ｂ」に相当する。

３類（326～335）　体部が中程で屈曲し，口縁部がわずかに外反しながら開く器形である。全面施釉後，底面の釉のみを剝取るもので，底部はやや上げ底状になるものが多い。内底面にはヘラによる片切り彫り及び櫛描文を組み合わせて施文している。太宰府分類の「Ｉ類２ｂ」にあたる。336～342はいずれも小破片のため，上記１～３類の細分にあてはめることができなかったものである。

(5)　染　　付（第119・120図，図版48～50）

碗（343～374）　破片が主で，全形のわかる資料が少い。これを口縁部形態と文様・器厚等を手がかりに，３類に分けておく。なお底部形態については別に触れる。

１類（343～352）　体部が内湾しながら立ち上り，口縁部が直線的に外上方に開くか垂直近くに立ち上るものである。343は，体部外面にややくずれているが丸を三つ結合した文様を施文するもので，小野分類[注6]の「III類」（Ｃ群）に類似する。345は体部外面に蓮花文？と，同じく下部に渦巻文を描くものである。346は口縁部外面に波濤文帯がめぐるもので，小野分類では「Ｉ類」（Ｃ群）に相当するかもしれない。347は，口縁部外面に雷文帯がめぐり，体部には飛龍文？が描かれている。349～352は，白化粧土をかけるものである。351・352は体部外面に唐草文が施される。

２類（354～362）　体部が内湾して立ち上り，口縁部が外反する器形のものである。356・357は体部外面に唐草文を施すもので，小野分類では「XI類」（Ｂ群）に相当するかもしれない。355・361は，体部外面に渦文，口縁内面に波濤文帯？が巡る。354は，体部外面に濃い呉須による線描の渦文を施すもので，高台は高く，やや外に向く。

３類（353）　体部は内湾しながら立ち上り，口縁部はやや外方に開く。全体に厚手の作りで，浅い器形である。体部外面には草花文？内底面には「福」字が描かれる。高台下端周辺には黄白色の繊維状物質が多く付着する。

363～374・376は，碗の底部である。365はいわゆる蓮子碗タイプで，体部外面下半に芭蕉葉文，内底面には蓮花文が描かれる。これは小野分類の「Ｉ類」（Ｃ群）にあたる。366は内底面に「福」字が記される。367・369・371は，内底面が内側に膨らむものでいわゆる「饅頭心碗」にあたる。370は，体部外面に唐草文が描かれている。373は，釉下に白化粧土を施すものである。

小杯（375）　375は，口縁部が外反する器形の小杯である。

鉢（377）　体部破片であるが，377は鉢と思われる。体部内面には草花文が描かれている。胎土は明灰色を呈するもので，釉下には白化粧土が施されている。

皿（378～404）　口縁部・底部の形態から，図示したものを３類に分類する。

１類（378～380）　いわゆる碁笥底を有するものである。口縁部まで残存する例はないが，ゆるく内湾して外上方にのびる器形になるものと思われる。378は，体部外面下半に芭蕉葉文で内底面に花弁

が描かれるもので，小野分類の「Ⅰ類」（C群）にあたる。

2類(388～390)　高台を持ち，体部が内湾して立ち上り，口縁部が外反する器形のいわゆる端反りの皿である。381～387は底部のみ残存するものであるが，内底面の染付文様から，口縁部端反りの器形になる可能性が非常に強いもので，ここに含めておく。381・385・387は内底面に玉取り獅子が描かれるもので，小野分類では「Ⅶ類」（B_1群）にあたる。382～384は内底面に十字花文（羯磨文）が描かれる。これらは小野分類では「Ⅵ類」（B_1群）にあたる。386・388～390は以上の皿に比べ時期的にはやや後出的なものである。390は口縁部内面に四方襷文，体部外面には唐草文が描かれるもので，小野分類では「Ⅸ類」（B_2群）に相当するかもしれない。

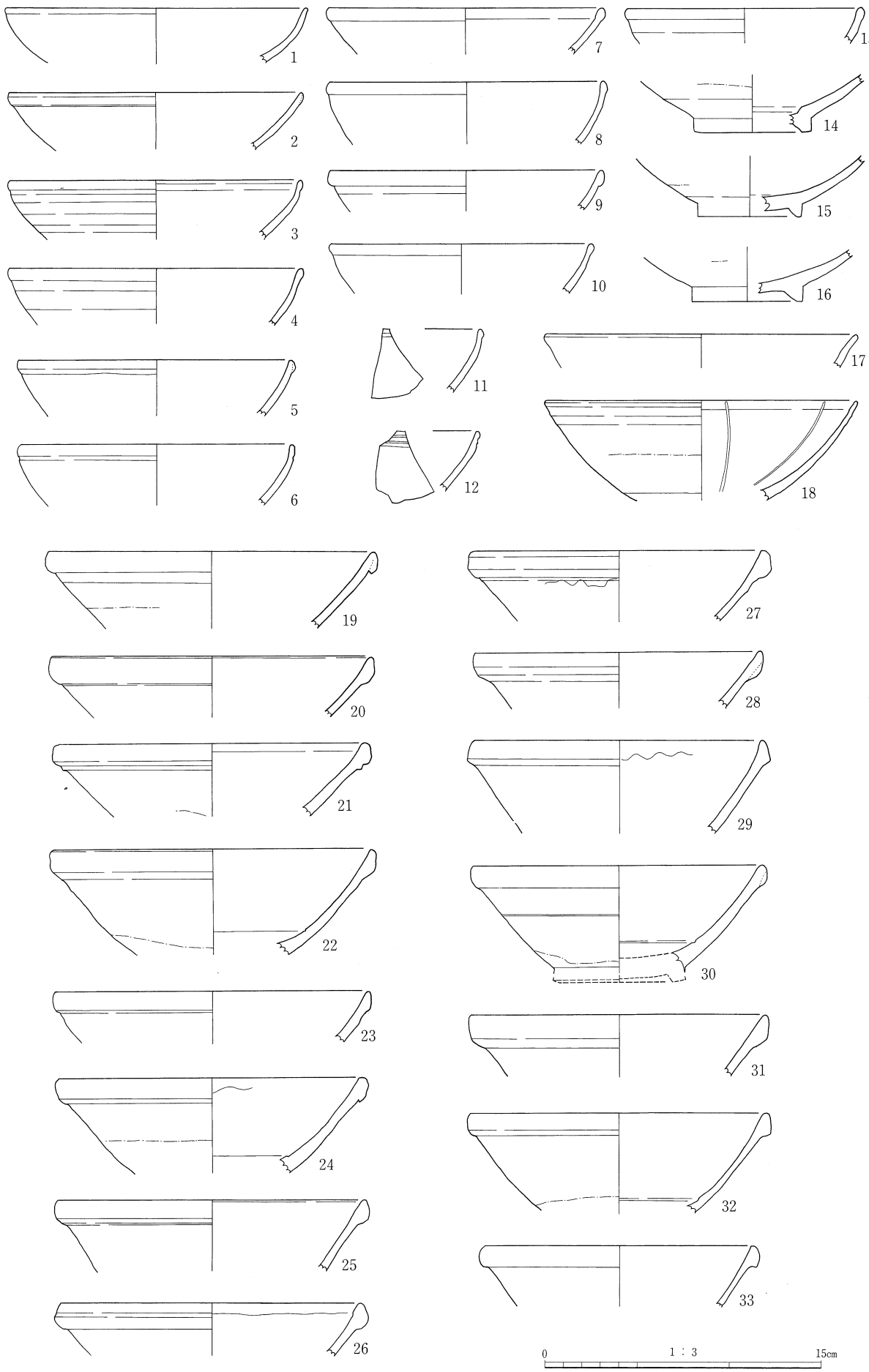
3類（391～396・398)　高台を持ち，体部が内湾して，口縁部が外上方に立ち上る器形のものである。391～396は同一の文様構成をとる。口縁部内面には四方襷文，内底面には蟠龍文が描かれる。高台下端は釉剝ぎされ，砂の付着するものが目立つ。398は体部外面に唐草文，内底面に花弁？を描くものである。これらは小野分類の「Ⅺ類あるいはⅫ類」（E群）に相当すると考えられる。397・402～404なども細片で詳細は不明であるが，この類に含めておきたい。なお403は釉下に白化粧土を施すもので，時期的にもやや後出的なものである。399～401は大型の皿で，399・400は同一個体。釉下に白化粧土を施すものである。

(6)　そ　の　他（第112図）

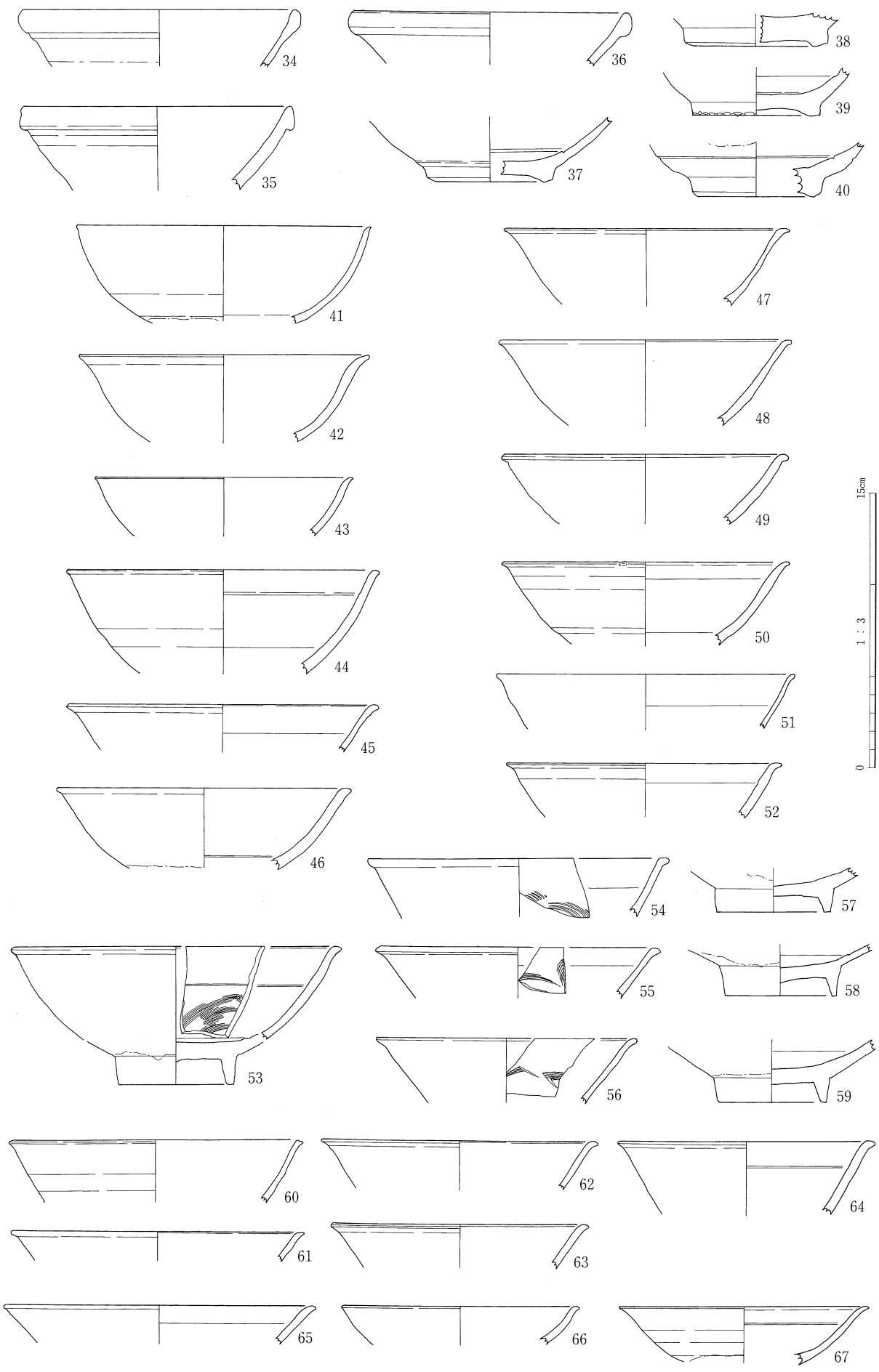
160は褐釉の四耳壺である。口縁部は玉縁状になり，肩部に横位の耳が付く。釉は薄く，茶褐色を呈し，外面と内面は頸部下までかかる。胎土は暗灰色を呈し，やや硬質である。産地については不明な点も多く，国産品である可能性も捨てきれないが，取りあえず，中国製として扱っておく。161は天目椀である。胎土は黒色に近く，硬質である。釉は黒色で口縁部のみ褐色に発色している。これも中国製品であると断言できないが，国産陶器の胎質とも異なっており中国製品の中に含めておく。

（山本正敏）

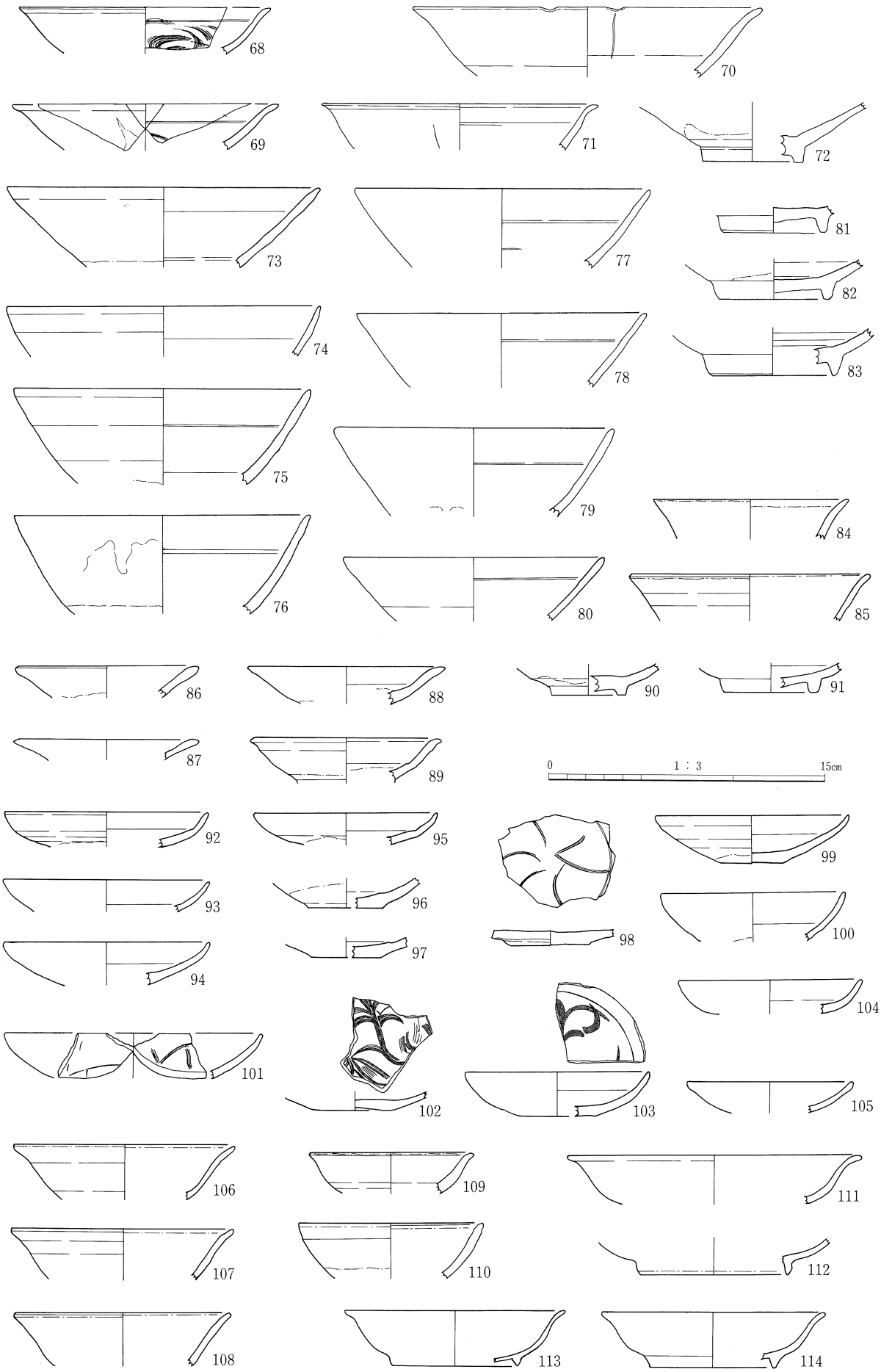
注1　横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
　　山本信夫　1988　「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府出土例を中心として－」『貿易陶磁研究』No.8
注2　森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
　　上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
　　小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
注3　小野正敏　1982　前掲
注4　これについては仮に皿12類としておく。
注5　上田秀夫　1982　前掲
注6　小野正敏　1982　前掲



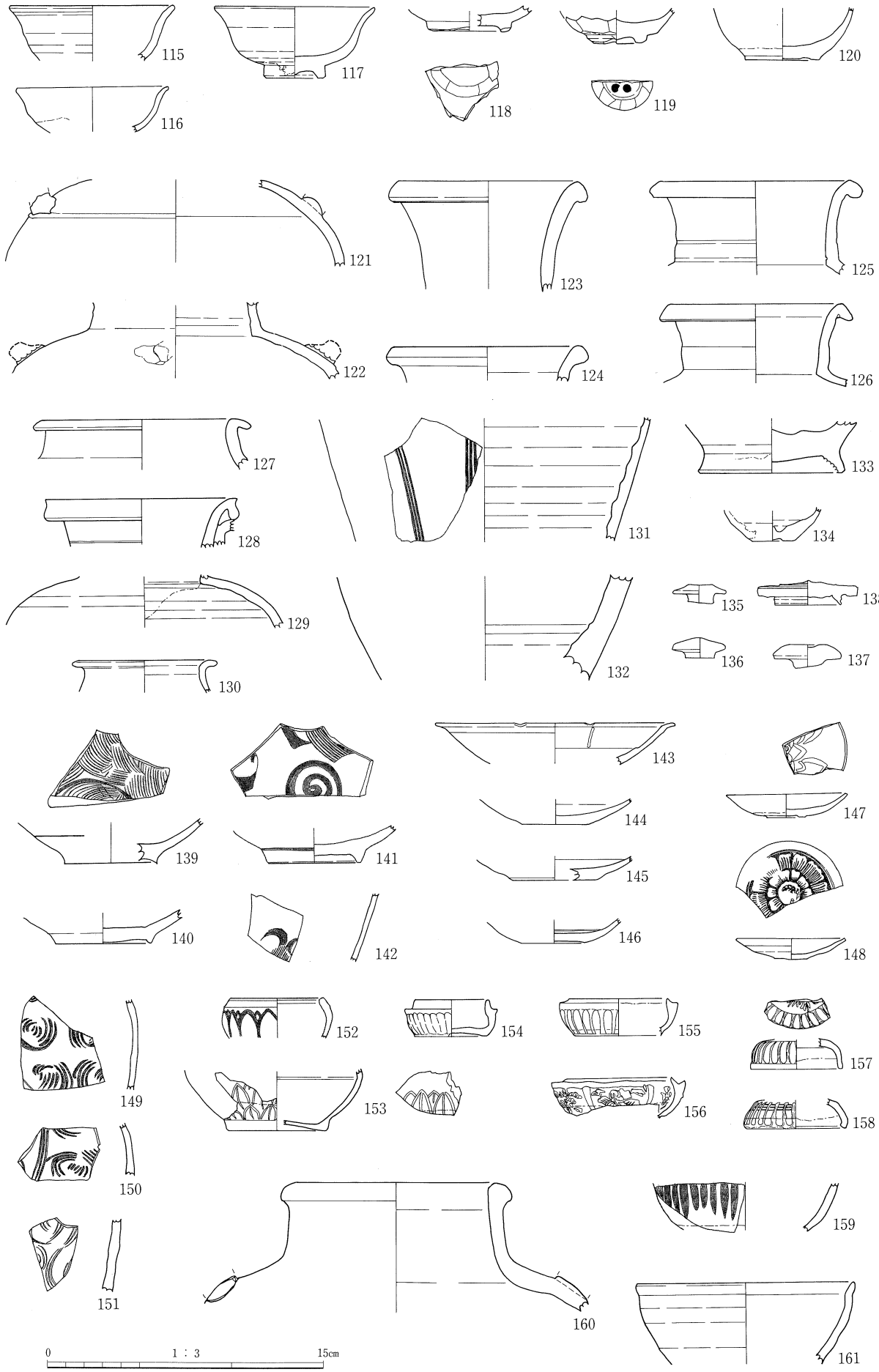
第109図　中国製磁器 1　(1/3)



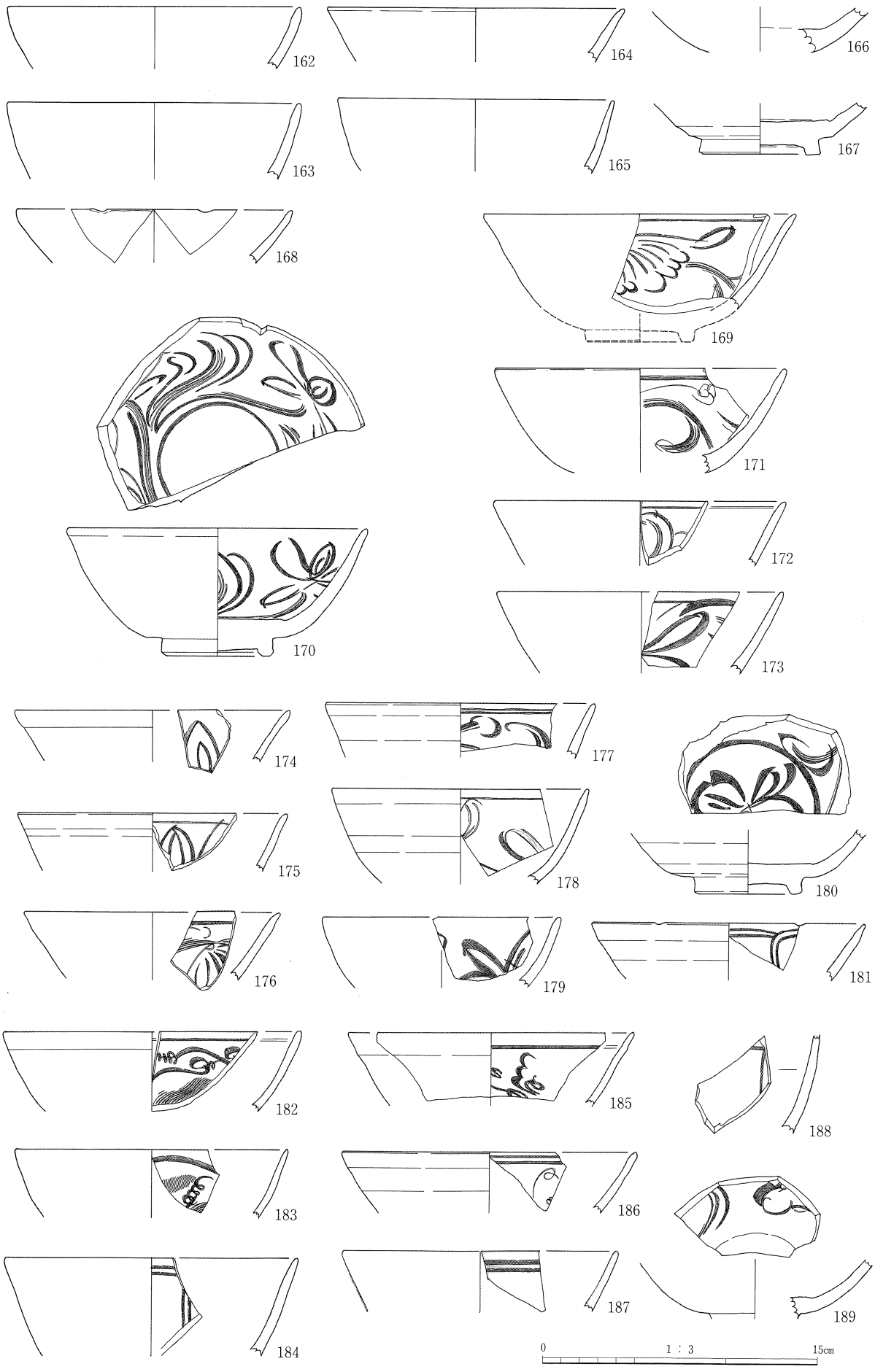
第110図　中国製磁器 2　(1/3)



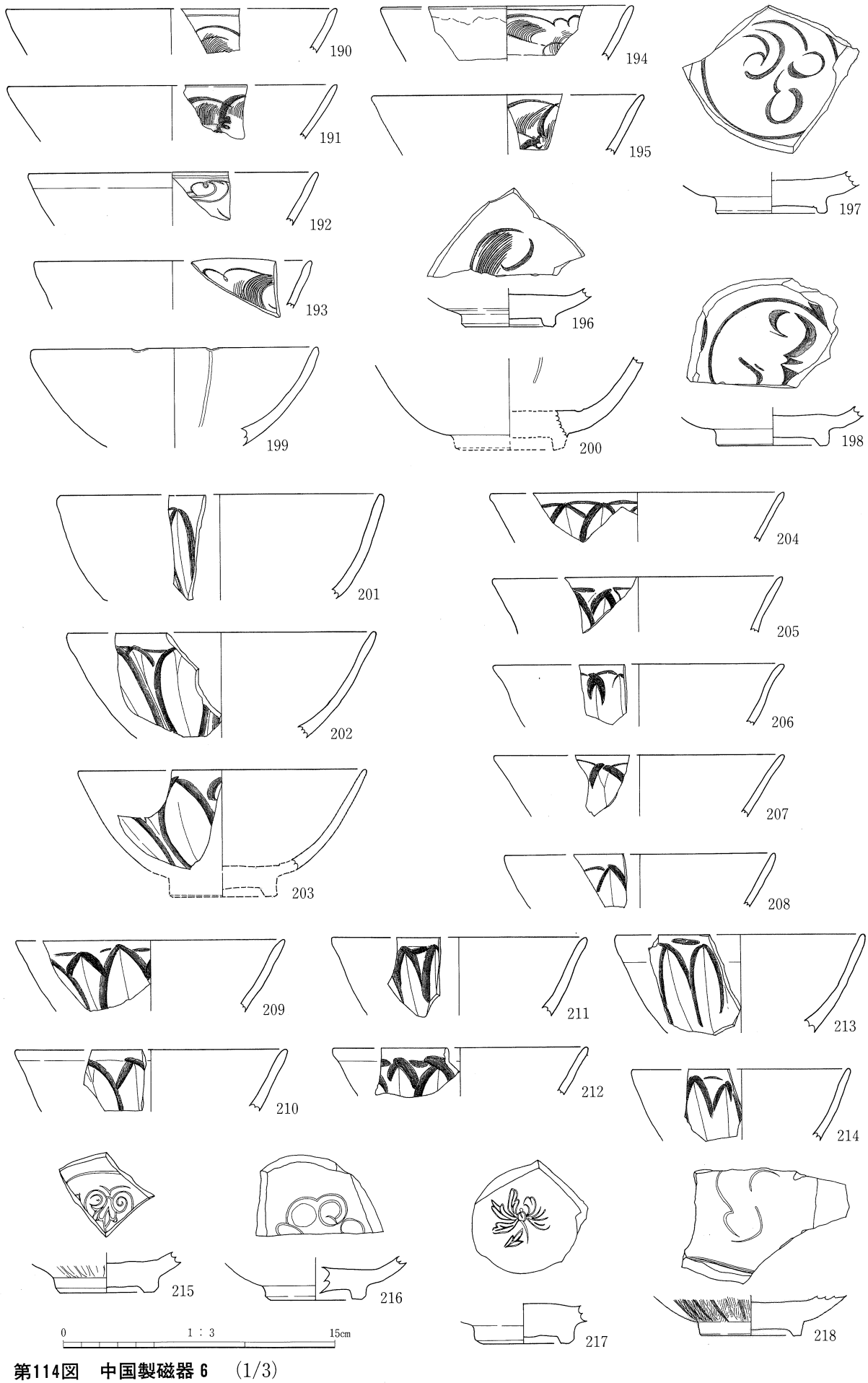
第111図　中国製磁器 3　(1/3)



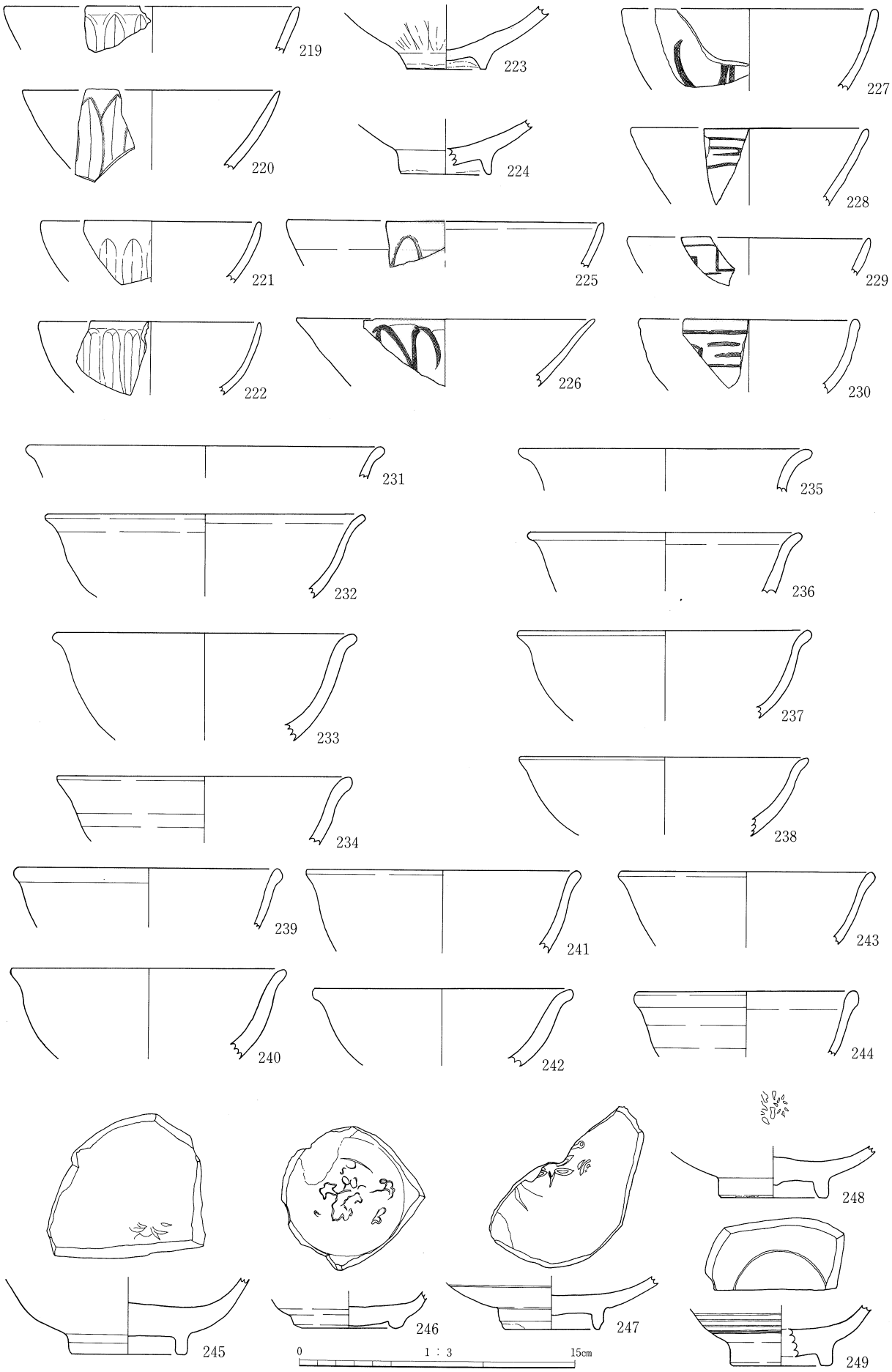
第112図　中国製陶磁器 4　(1/3)



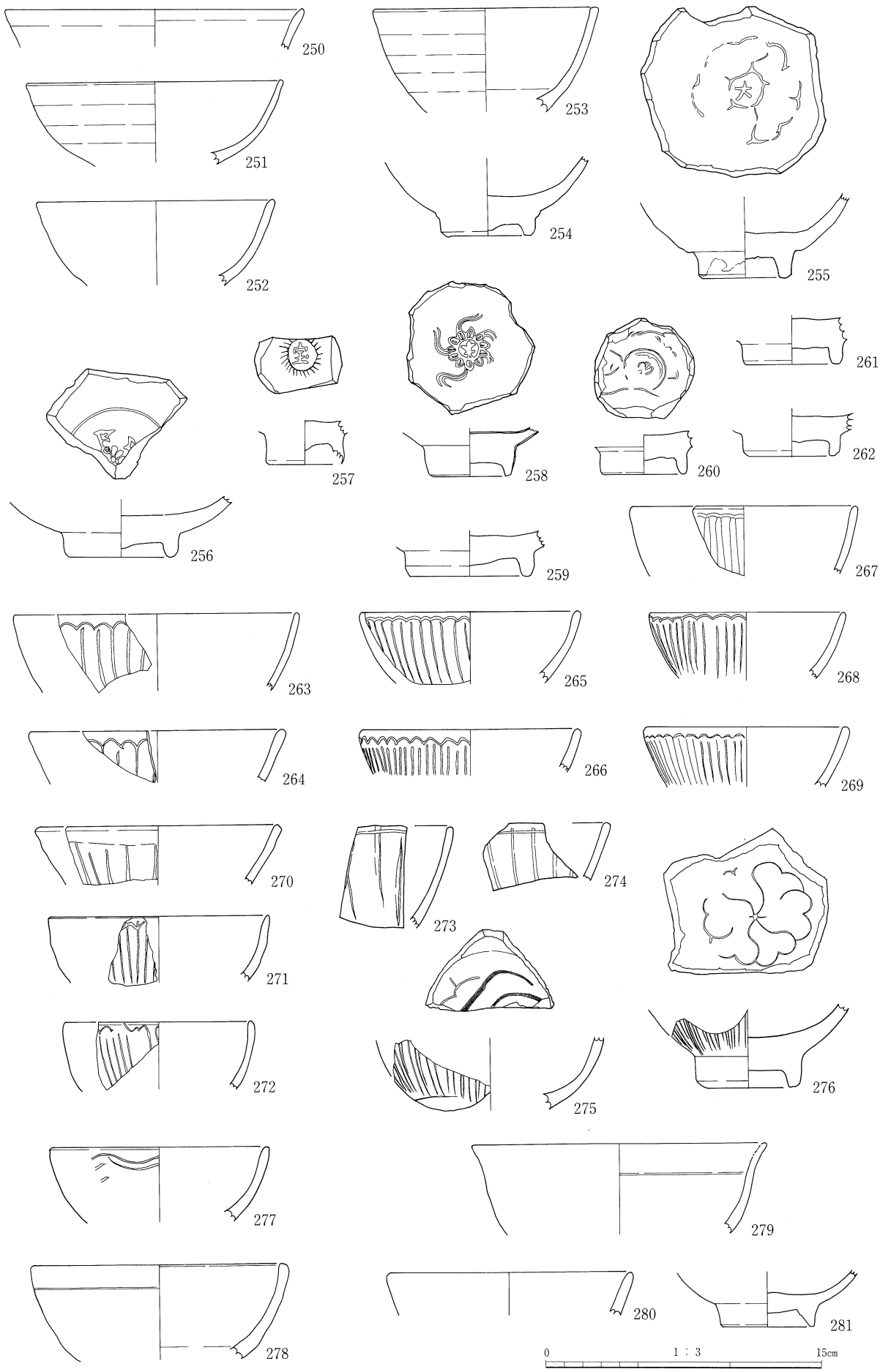
第113図　中国製磁器 5　(1/3)



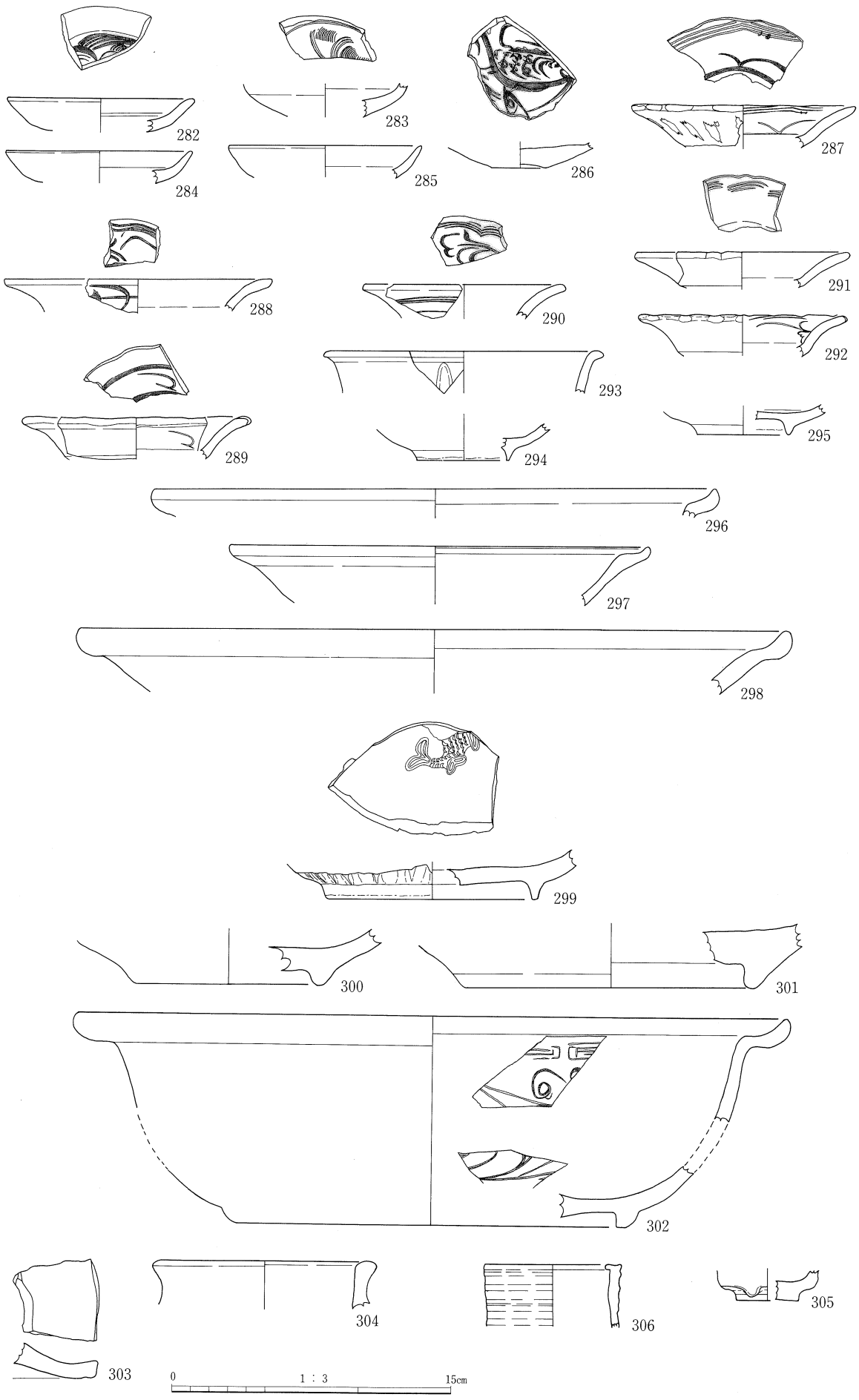
第114図　中国製磁器 6　(1/3)



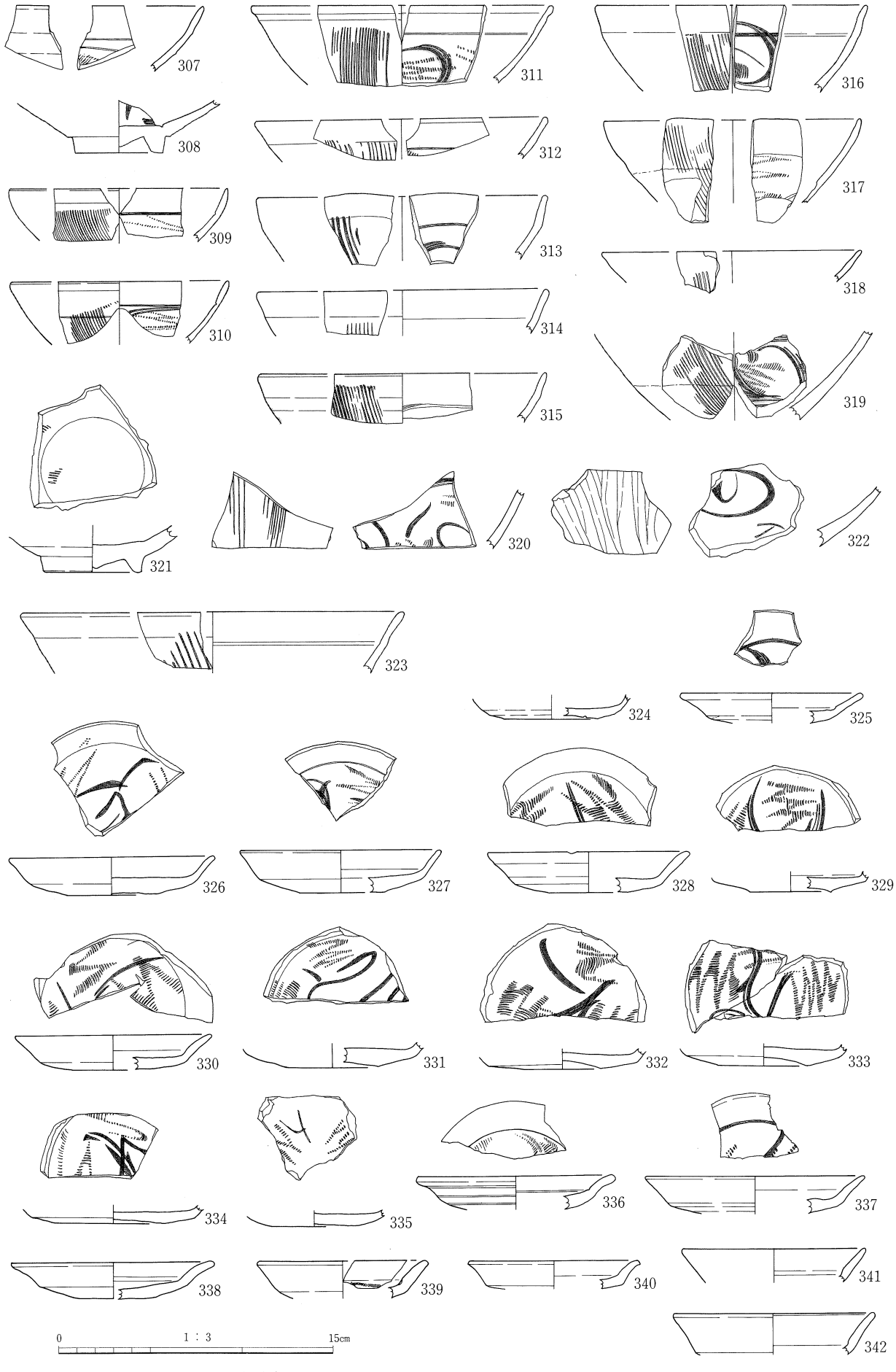
第115図　中国製磁器 7　(1/3)



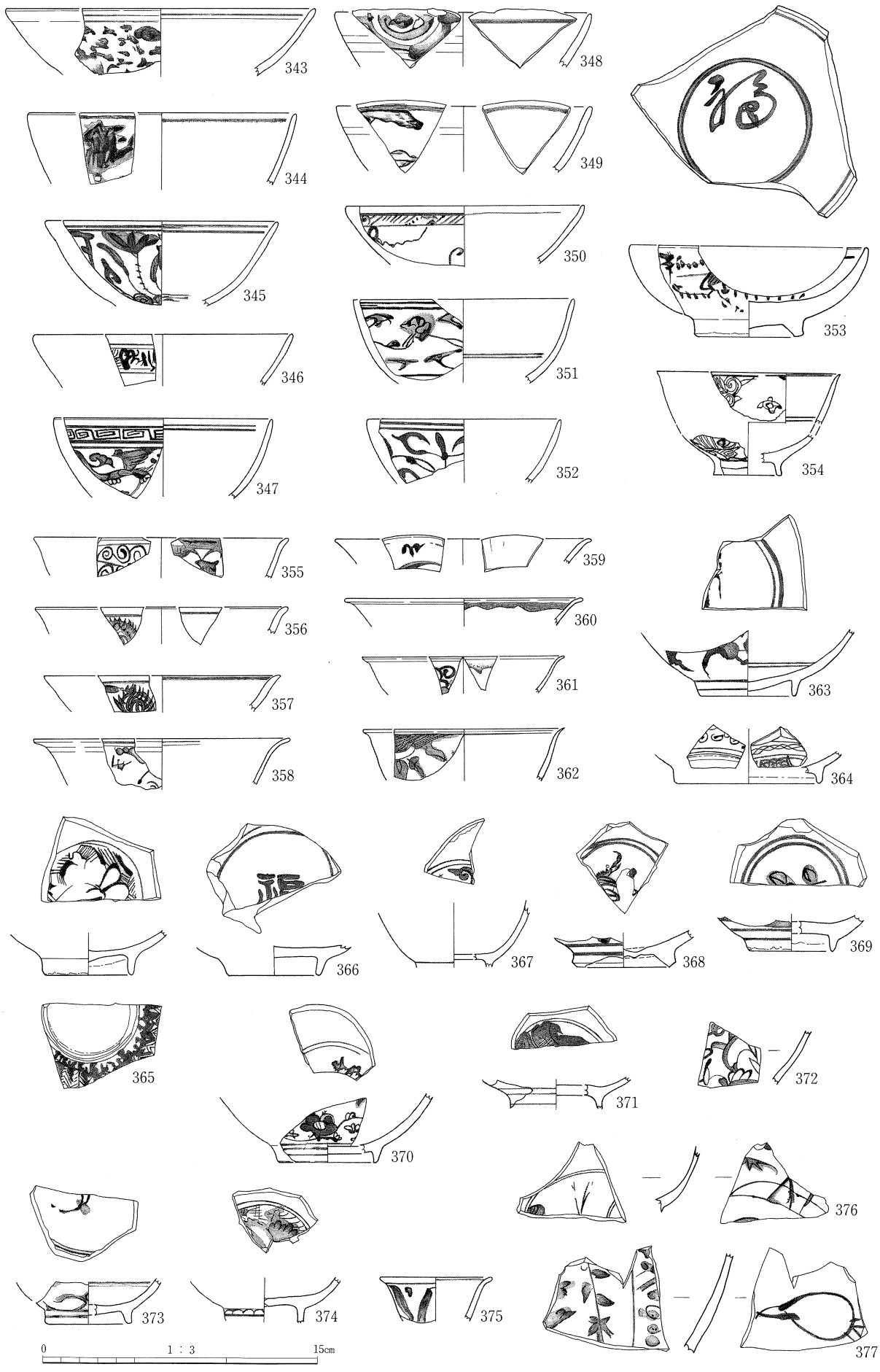
第116図　中国製磁器 8　(1/3)



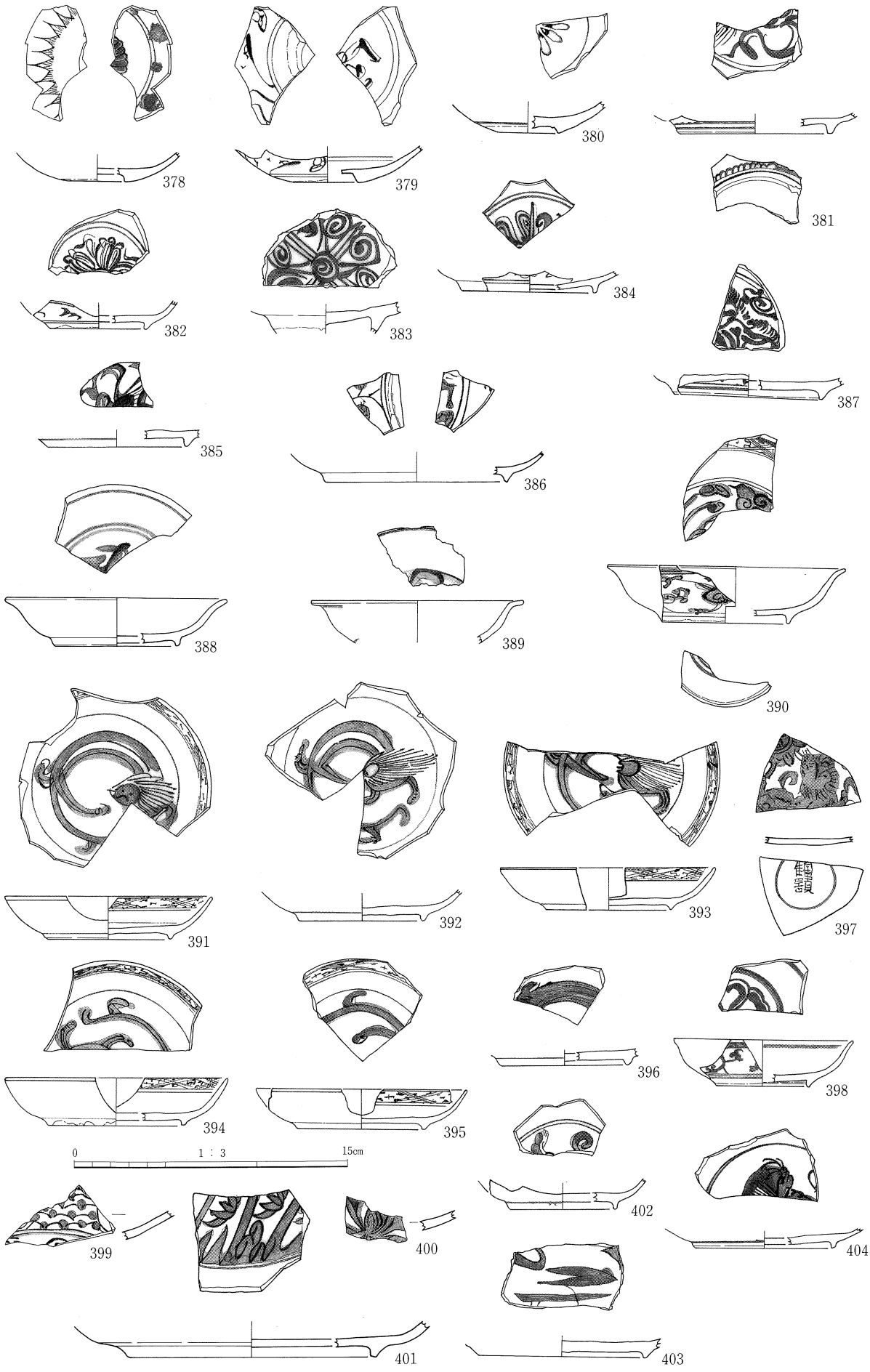
第117図　中国製磁器 9　(1/3)



第118図　中国製磁器10　(1/3)



第119図　中国製磁器11　(1/3)



第120図　中国製磁器12　(1/3)

5．瀬戸美濃（窖窯～大窯期）

ここで取り上げるものは，窖窯または大窯で焼成された白瓷系陶器（山茶椀）と灰釉陶器の系譜を引く施釉陶器としての瀬戸美濃焼である。連房式登窯で焼成された近世のものについては次項で述べる。器種名については生産地のものを踏襲し，器種ごとに時期を追って述べていく。時期区分については，瀬戸市埋蔵文化財センターの藤沢良祐氏にご教示いただき，窖窯期は『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X[注1]』，大窯期は『瀬戸市史IV[注2]』を参考にした。遺構別で目立つものは，主に大窯期の天目茶椀・皿・擂鉢がそろって出土するＳＤ9301，窖窯期から大窯期の天目茶椀が多く出土するＳＤ10101がある。また以速寺の堀といわれるＳＤ5910からは大窯期の皿が出土する。

(1) 窖　窯　期（第121・122図，図版51）

窖窯期の遺物は前期から後期までみられるが特に後期から終末期のものが目立つ。器種構成は椀，皿，擂鉢，壺，香炉，花瓶である。これらは溝と土坑から多く出土している。遺物を器種ごとに時期を追って説明する。

山茶椀（１～３）　１・２は椀の底部で，糸切り痕がみられる。貼り付高台である。それぞれIV・Ｖ形式である。３は入子である。全面になでが施され，底部は糸切り痕がみられる。

縁釉小皿（４・５）　５の底部は右回転糸切りで，若干煤が付着する。

椀（６～33）　６～24は天目茶椀である。６・７・20は口縁部が直線的に立ち上がるものである。６は後期Ｉ期に当たる。体部外面は施釉時に何かが付着した痕跡がみられる。錆釉はみられない。体部内面は光沢がない。７・20は体部下方に若干錆釉がみられる。22は体部が緩く内湾し，口縁外面をややおさえるもので，若干錆釉がみられる。19は体部が緩く内湾し口縁が直立ぎみになる。８～10・12・14・15・17・18・21・23・24は体部が屈曲し，Ｓ字口縁となる。端部を丸くおさめるものとつまみ上げるものがある。外面底部付近には濃い錆釉を施すもの，漆継ぎされるものがある。削りだし輪高台のものは13・16である。体部下方から底部は錆釉を施す。16は底部にトチンが付着している。内反り高台のものは11で，後期後半に当たる。底部にはトチンが剝がれた痕がみられる。７～10，12～24は後期最終末期に当たる。

25～33は灰釉平椀である。25は後期Ｉ期，26は後期II期で内面にトチンの痕跡がある。27は後期IIかIII期，28～30は後期IV期である。27・28の底部は糸切り痕を残したまま中央を削り込む。33は後期Ｉ～III期の大平椀である。31・32は底部は糸切り痕を残し，中央を削り込む。32は内面にトチンが残る。31は後期Ｉ～III期，32は窖窯末である。

香炉（34・35）　体部は筒状である。34は灰釉，35は鉄釉をそれぞれ施す。窖窯終末期である。

皿（36～51）　36～42は窖窯末の腰折皿で灰釉が施される。36は見込み３ヶ所にトチン痕がみられ，口縁端部には煤のようなものが付着する。高台の中央は浅く削り込まれる。40は見込みにトチンが残る。41は灰釉に鉄釉が施される。

43～46は卸皿である。43・44は前期後半である。43は片口部分が残る。45は灰釉を施す。口縁外面は強く押しなでられ，端部は外に面取りする。中期である。46は口縁部に鉄釉を施す。内面の卸目は底部から口縁に対して垂直に，またそれを切るように垂直に施される。後期である。47は灰釉の底卸目皿で，見込みは三重の円が彫り込まれ釉が溜まって文様となる。外底面は無釉で卸目が施される。前期後半である。48は卸目付大皿である。体部下方外面から底部にかけてヘラ削りする。内面はなで調整である。内面に鉄釉のハケ塗り痕，断面には漆継ぎがみられる。後期III期である。

49～51は折縁深皿である。49は体部下方外面から底部にかけてをヘラ削りする。内面はなで調整で

ある。50・51は灰釉が施される。50は水平口縁の中央が凹み，端部を丸くおさめている。後期III期である。51は，端部を屈曲させてつまみ上げるもので，後期IV期である。

花瓶（52～57）　52は体部外面に灰釉を施したもので，底部は糸切りである。前期の可能性がある。53は外面に灰釉を施す。内面はロクロなでである。後期ⅠかII期である。54・55は灰釉を施す。54は尊式花瓶である。裾部の広がりが少なく，底部に糸切り痕がある。55は内面に胴部と頸部の接合痕がみられる。ともに後期IIIかIV期である。56は内外面に鉄釉を施すが見込みの一部は露胎である。後期末である。57は灰釉の尊式花瓶の頸部で，内面は黒く煤け，ロクロ目が顕著である。胴部の接合痕がみられる。後期IIIかIV期である。

壺（58～60）　59・60は灰釉が施され，底部は糸切りである。それぞれ後期，後期IIかIII期である。58は鉄釉が施され，後期最終末のものである。61は灰釉の四耳壺で，体部内面に粘土紐輪積み痕がみられる。内面はなで調整，外面は回転ヘラ削りされる。底部に高台が貼り付けられる。時期は前期後半である。

(2)　大窯期から登窯期（第123～130図，図版52～55）

この時期の遺物は窖窯期に比べて多く，器種構成は椀，皿，擂鉢といった食膳具が目立っている。

天目茶椀（62～159）　62～109は大窯第Ⅰ段階である。高台のつくりは，削りだし輪高台である。高台径が小さく，高台幅が狭い。また体部下方から高台にかけて濃い錆釉が施される。大部分が黒褐色の鉄釉であるが，灰褐色のものもある。口縁部が直線的に立ち上がるもの（69～72・78・79・82・93・96・108），口縁部が直線的に立ち上がり，外面を若干おさえるもの（62・65・70・73・75・80・81・83・86・87・88・90・91・92・94・95・97・98・100～106・109），体部が屈曲し，S字口縁をもつもの（64・68・76・99）がある。105には体部外面の鉄釉部分に胎土と類似した土が長楕円形に癒着しているが，これはトチンではない。この時期のものでトチンなど製作時の痕跡を残すものはみられない。83～85・87は見込みに，また106は体部から口縁にかけて細い線状に光沢がなく擦れている。これは茶筅の使用痕と考えられる。漆継ぎが断面にみられるものもあり，98・106は炭化してタール状になっている。108は外面の錆釉部分と断面に煤が付着する。

110～132は大窯第II段階である。体部が直線的に立ち上がり，中央で屈曲し，口縁は外面を若干おさえるもの（116・117・124・129・131），体部が屈曲し，S字口縁をもつもの（110～114・118～121・123・126～128・130・132）がある。外面体部下方には錆釉を施すものと施さないものがみられる。底部が残存するものはすべて内反り高台である。112は高台が低く，錆釉が施される。底部は中央が浅く削られ，接地面となる部分には柾目状の圧痕がみられる。３ヶ所にトチン痕を残す。117・122の高台の内反りは中心から反時計回りに渦巻き状に削られる。117は錆釉がなく，122は濃い錆釉を施す。117の内面は茶筅の使用痕と思われる傷で，鉄釉の光沢は失われている。117・125・130は高台端部を面取りする。

133～159は大窯第III段階以降である。時期が限定できるものは，144・147が大窯第III段階，153が大窯第IV段階第７小期，156が大窯IV段階第８小期である。この時期の傾向としては，口径に対する器高の割合が低いこと，高台幅が広いこと，錆釉が施されないものが多いことである。高台は削りだし輪高台と内反り高台がある。口縁部が直線的に立ち上がり，外面を若干おさえるもの（133・134・142・147・152・153・155・158），体部が屈曲し，S字口縁をもつもの（135～140・143・145・146・148・149・156・157・159），体部が屈曲して直立するもの（144・150・154）がある。削りだし輪高台のもの（136・156）と，内反り高台のもの（141）がある。141の底部は中央から渦巻き状に削られ，薄い

錆釉が施される。

丸椀（160～167）　灰釉を施す。160・161・164・167は付高台の底部全面に釉を施し，輪ドチ痕がみられる。さや鉢中に丸椀を1個入れて焼成しているものと思われる。162は削りだし輪高台で，体部下方から高台は無釉である。164は割れ口の胎土が黒変していること，外面の高台に煤が付着していることから，2次被熱を受けたものと思われる。大窯第Ⅰ段階にあたるものが大部分で，大窯第Ⅱ段階にあたるものは162・167である。

端反皿（168～190・192・193）　体部中央が丸みを帯びて立ち上がり，口縁が外反する形態である。付高台で断面が逆三角形である。全面施釉である。時期は大窯第Ⅰ段階にあたる。口径の大きさで大（15cm）・中（10cm前後）・小（8.5cm）に分けられる。大皿は184で鉄釉を施す。見込みにはトチン痕，底部には輪ドチ痕がある。大きさや胎土から186と同一個体の可能性が考えられる。小皿は192で灰釉を施し印花が押捺される。その他は中皿である。底部には輪ドチ痕があるもの（170・171・179・180・187・193），トチン痕がみられるもの（182・190）がある。見込みには中心から若干ずれて印花が押捺される。178は花菱，179・182・190は菊，187はかたばみである。189は内面に刻印のようなものがみられる。170・171は全体に黒変しており2次被熱を受けたと考えられる。

丸皿（191・194～206）　口径の大きさは10cm程度である。191は大皿である。器高が低く，高台を貼り付けた後，削り調整する。断面に漆継ぎ痕がみられる。見込みには菊の印花がある。大窯第Ⅰ段階にあたる。194～201は体部が丸みをもって立ち上がるもので，灰釉を施す。大窯第Ⅱ段階にあたる。196・197・198は底部に輪ドチ痕がある。197は胎土が黒変しているため2次被熱したものと思われる。200は内面体部にソギが入り，灰釉が施される。内面は2次被熱を受けたためか白っぽくなっている。202～206は丸皿の口縁を指押さえして輪花風にしたものである。202は灰釉を施したもので大窯第Ⅰ段階である。203～206は鉄釉を施したもので，内外面底部に輪ドチ痕がある。高台の接地面は磨滅のため釉の有無は不明である。大窯第Ⅲ段階である。

内禿皿（207～214）　体部は偏平に近く，内面底部にコテの押圧による凸部が形成される。灰釉を施し，凸部のみ無釉である。210は底外面の高台から5㎜の部分から中央に向かって一段低くなる。付高台と思われる。第Ⅲ段階にあたる。207・208・212～214の底部は削り込み高台である。207・212・214は底外面に，208・213は内面の凸部と底外面に輪ドチ痕がある。大窯第Ⅳ段階にあたる。

稜皿（215・216）　口縁が緩く外反する形態である。216は底部に輪ドチ痕がある。ともに大窯第Ⅰ段階である。

折縁皿（217～223）　体部は直線的に開き，口縁は大きく外反し，端部は短く立ち上がる。灰釉を施す。217・223の内面体部にはノミ状工具によるソギが施される。217は底部に凸部が形成される。凸部は無釉で釉滴が付着する。外面底部には輪ドチ痕がある。218・219は全面施釉で，見込みに印花を施す。底部には輪ドチ痕がある。221は内外面に輪ドチ痕がある。217～221は大窯第Ⅲ段階，222・223は大窯第Ⅳ段階である。

志野菊皿（224）　口縁端部をヘラ状工具でカットして花弁風にしている。削りだし高台で全面に長石釉が施される。内外底面には円錐ピン痕がみられる。

志野丸皿（225～231）　全面に長石釉が施される。削りだし高台をもち，口縁が外反するもの（231）と外反しないもの（226～230）がある。228は内面には鉄絵で文様が施される。226は内外面とも円錐ピン痕，230・231は底部に円錐ピン痕がある。

志野椀（232）　体部は丸みをもち，口縁がやや外に開く。灰釉が施されるが，高台周辺は無釉で，

削りだし高台をもつ。見込みに円錐ピン痕がある。224～227・232は大窯第IV段階，228・231は大窯第IV段階から登り窯期Ⅰ－1段階，229は大窯第IV段階から登り窯期Ⅰ－1～3段階，230は大窯第IV段階から登り窯期Ⅰ－2～3段階である。

マメ皿（233～235）　体部は偏平で，削り込み高台をもつ。全面に灰釉が施される。233は見込みに六花弁の印花が押捺され，トチンのようなものが付着する。口縁端部は剝落し，赤色になっている。紅皿として用いたのであろうか。大窯第II段階にあたる。

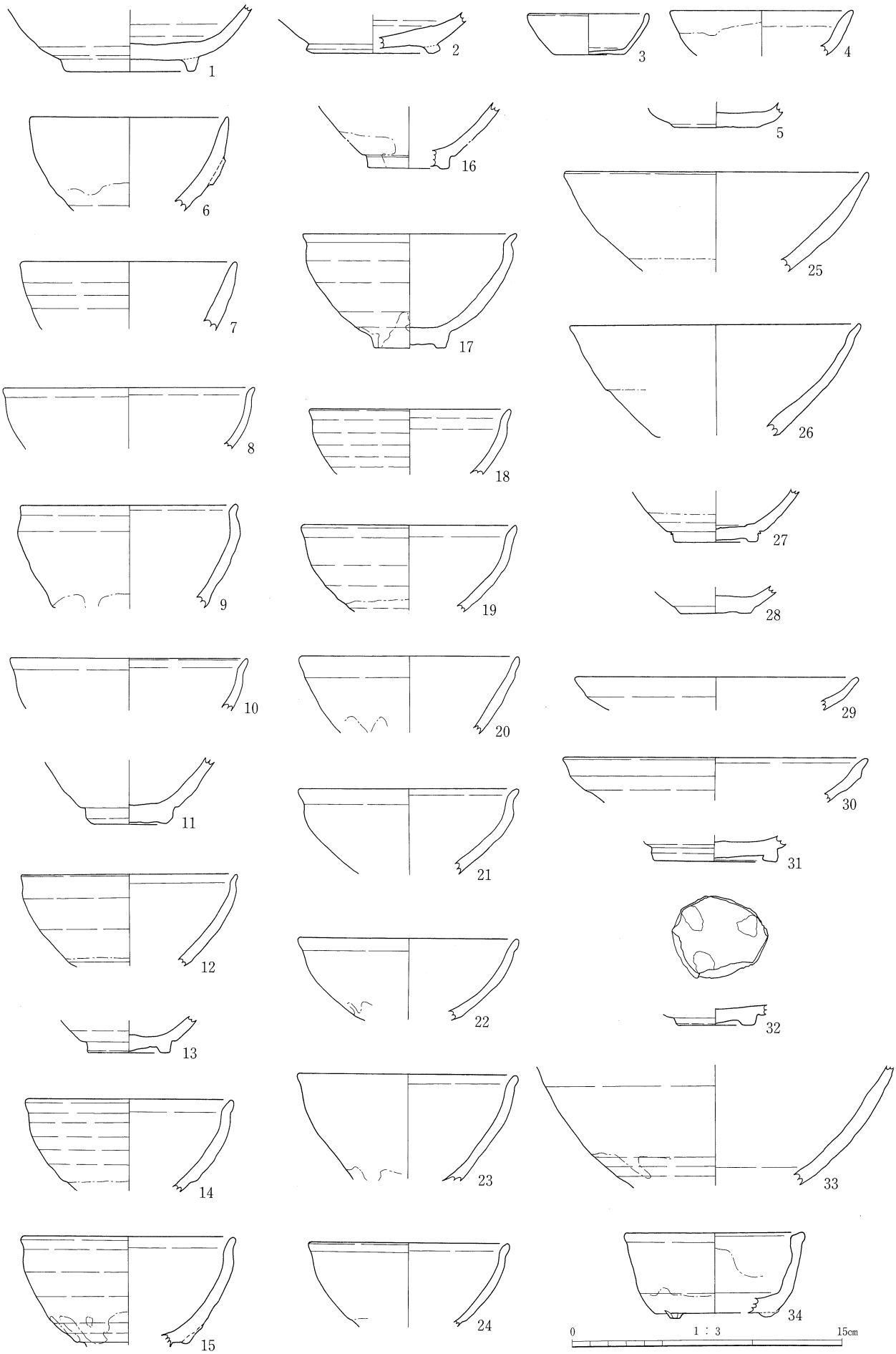
小杯（245）　全体に灰釉を施す。大窯第Ⅰ段階である。

壺類（236～241）　底部は平底で糸切り痕を残す。237・238は茶入である。撫肩で頸部は短い。鉄釉を施すもの(237・239～241)と灰釉を施すもの(236・238)がある。238の底部は露胎である。236～238は大窯第Ⅰ段階にあたる。240は大窯第II段階第4小期である。

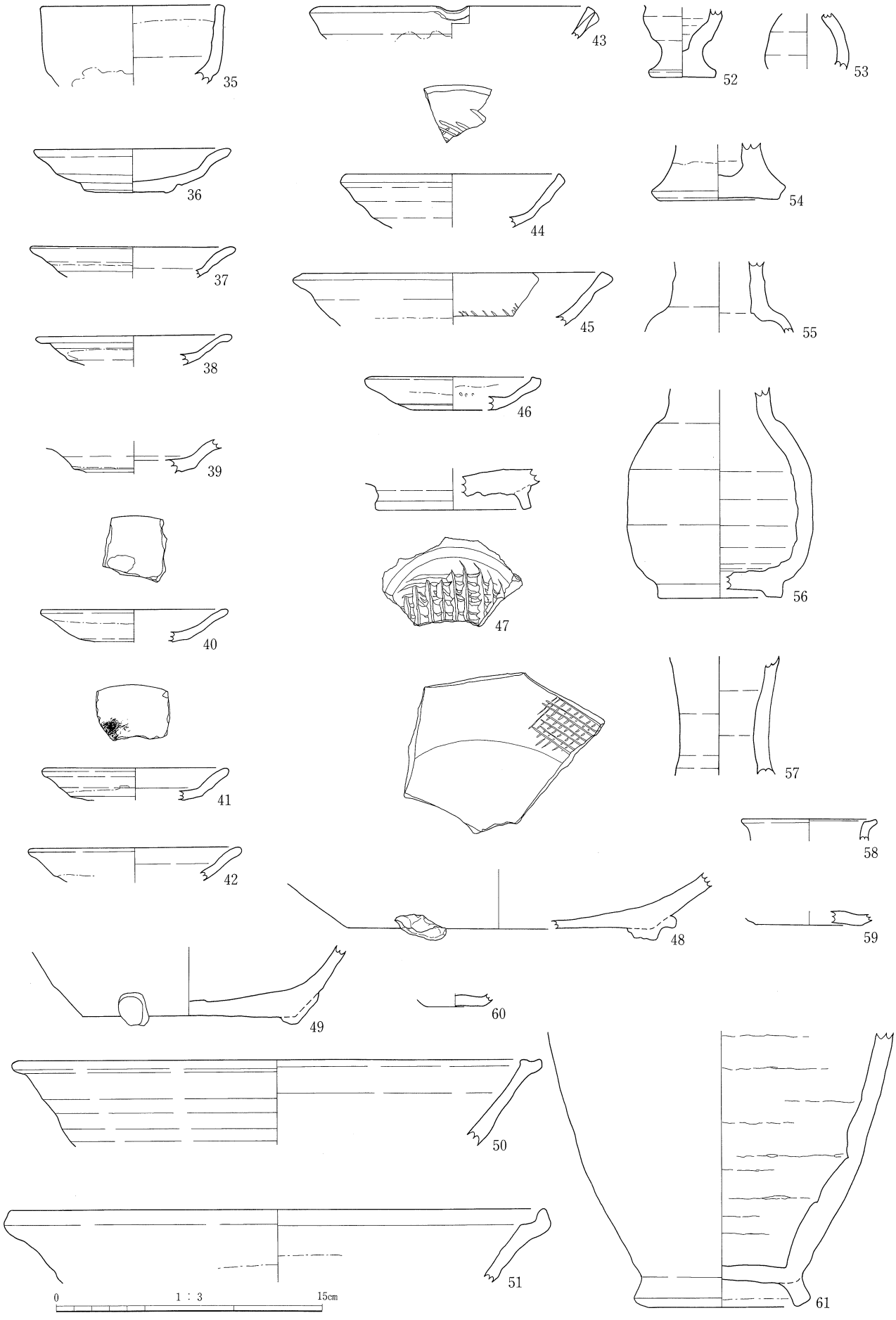
瓶類（242～244・246）　242・243は鉄釉の水滴である。球形に近い胴部に，短く立ち上がる頸部を有する。外面体部下方から底部は無釉である。底部は糸切り痕を残す。242・243の見込みは反時計回りの渦巻き状になで調整される。242・243は窖窯期の終わりから大窯期にかけての時期である。246は徳利である。内外面鉄釉を施すが，外面の鉄釉はガラス質である。底部はヘラ削りされた後，部分的に施釉される。大窯第II段階である。244は瓶である。

擂鉢（247～257）　全面に錆釉が施され，底部は糸切り痕がみられる。247・249は口縁端部をつまみ，断面形が鋭い三角形を呈する。247は卸目が口縁端部まで施される。248は口縁は断面が鋭い三角形を呈し端面に浅い溝が巡る。9条1単位の卸目は見込みから体部に，また内底面は十字に施される。大窯第Ⅰ段階である。250は内面は部分的に煤が付着する。卸目は体部に8条1単位，底部には中央に直線で1単位施される。251は施釉された表面は焼成温度の関係からかしわしわになっている。底部付近には，かすかにトチン痕が残る。250・251は窖窯期終わりか大窯第Ⅰ段階にあたる。252・253は底部で，見込み付近と底部付近の体部に白色粒が多く混入したトチン痕が長方形を呈するようにみられる。卸目は16条1単位で体部下から上へ，見込みは中央に向かって施される。大窯Ⅰ段階かII段階にあたる。254は口縁端部を内側につまみ上げ，外側に面を取るものである。255～256は口縁端部をつまみ上げたものである。256は卸目は9条1単位で見込みから体部にかけて反時計回りに，見込みは不定方向に弧を描くように施される。内外面底部付近にトチン痕と思われる白色の土が付着する。大窯II段階にあたる。257は卸目の幅が細かい。大窯II段階またはIII段階にあたる。　（横山和美）

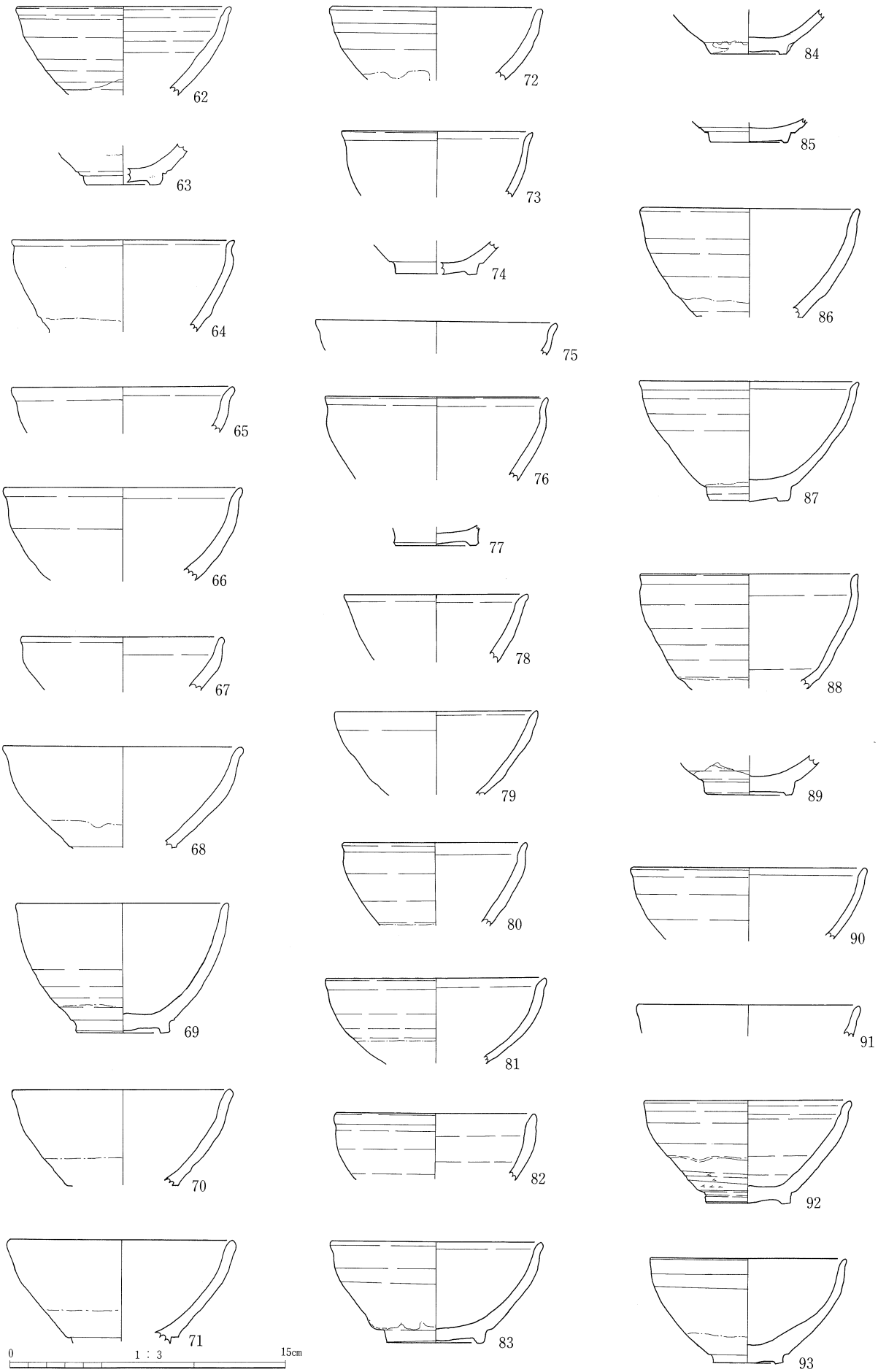
注1　瀬戸市歴史民俗資料館　1991　『研究紀要X』
注2　瀬戸市史編纂委員会　1993　『瀬戸市史IV』



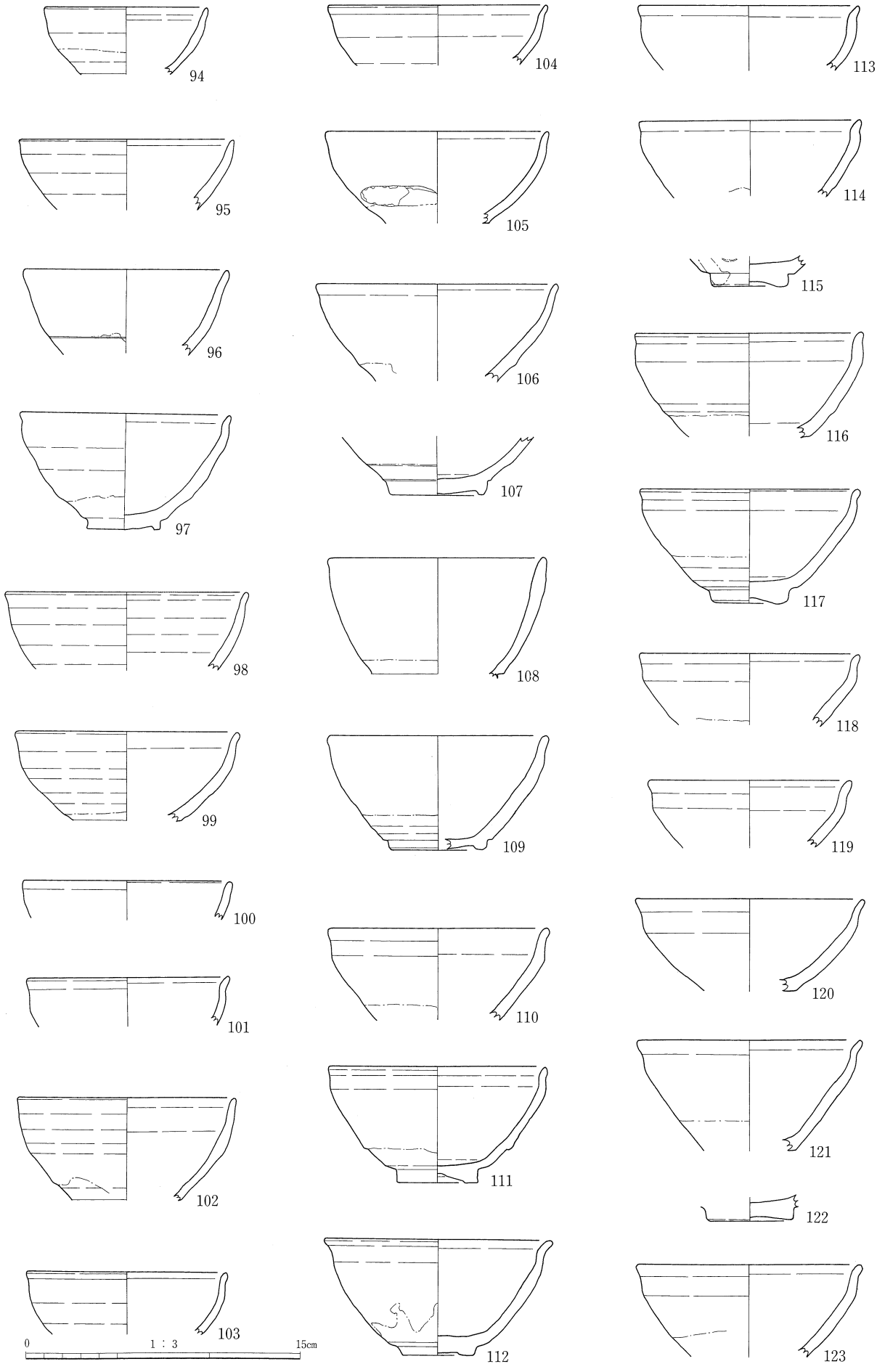
第121図　瀬戸美濃１（窖窯期）　(1/3)



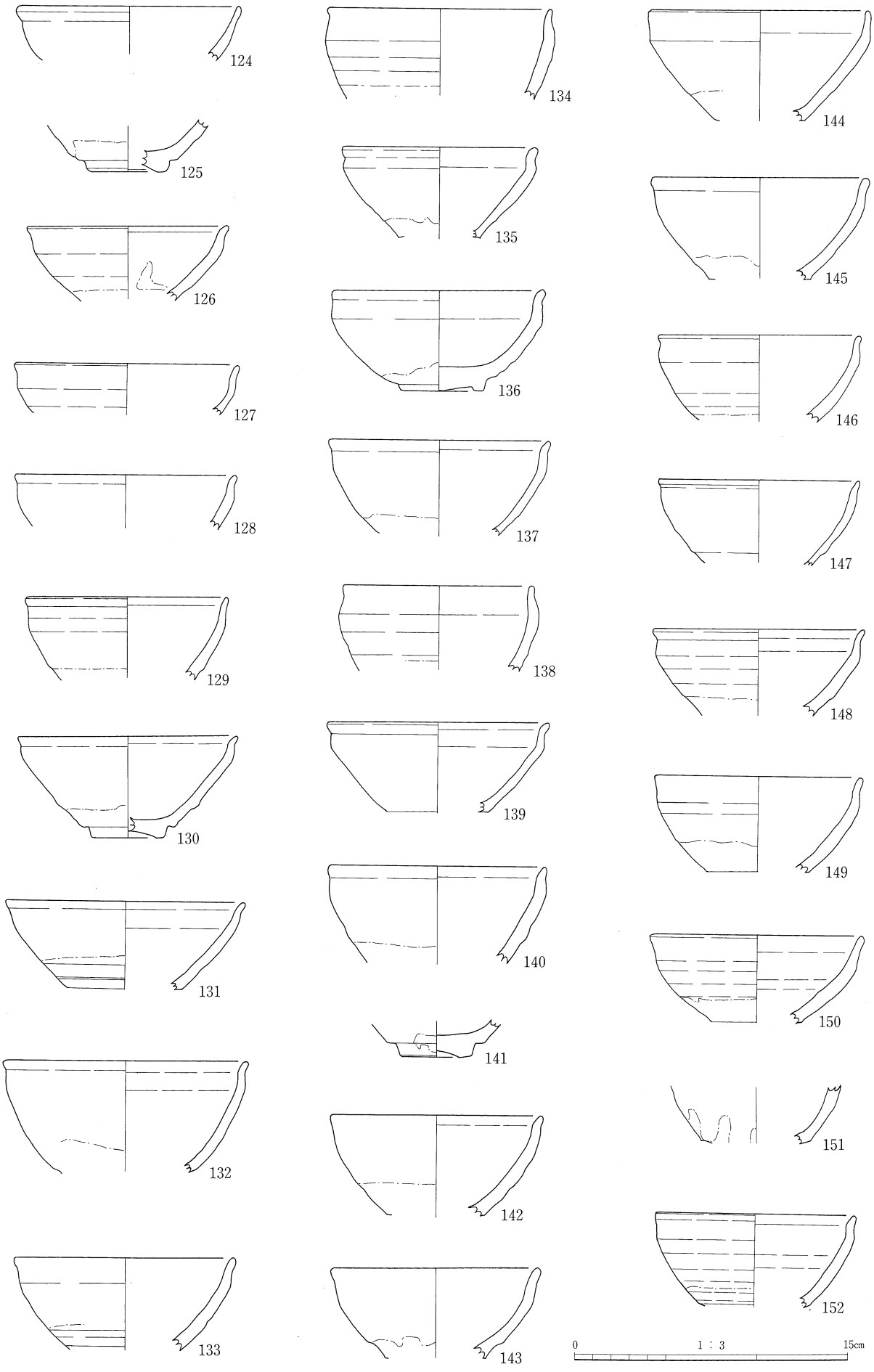
第122図　瀬戸美濃 2（窖窯期）　(1/3)



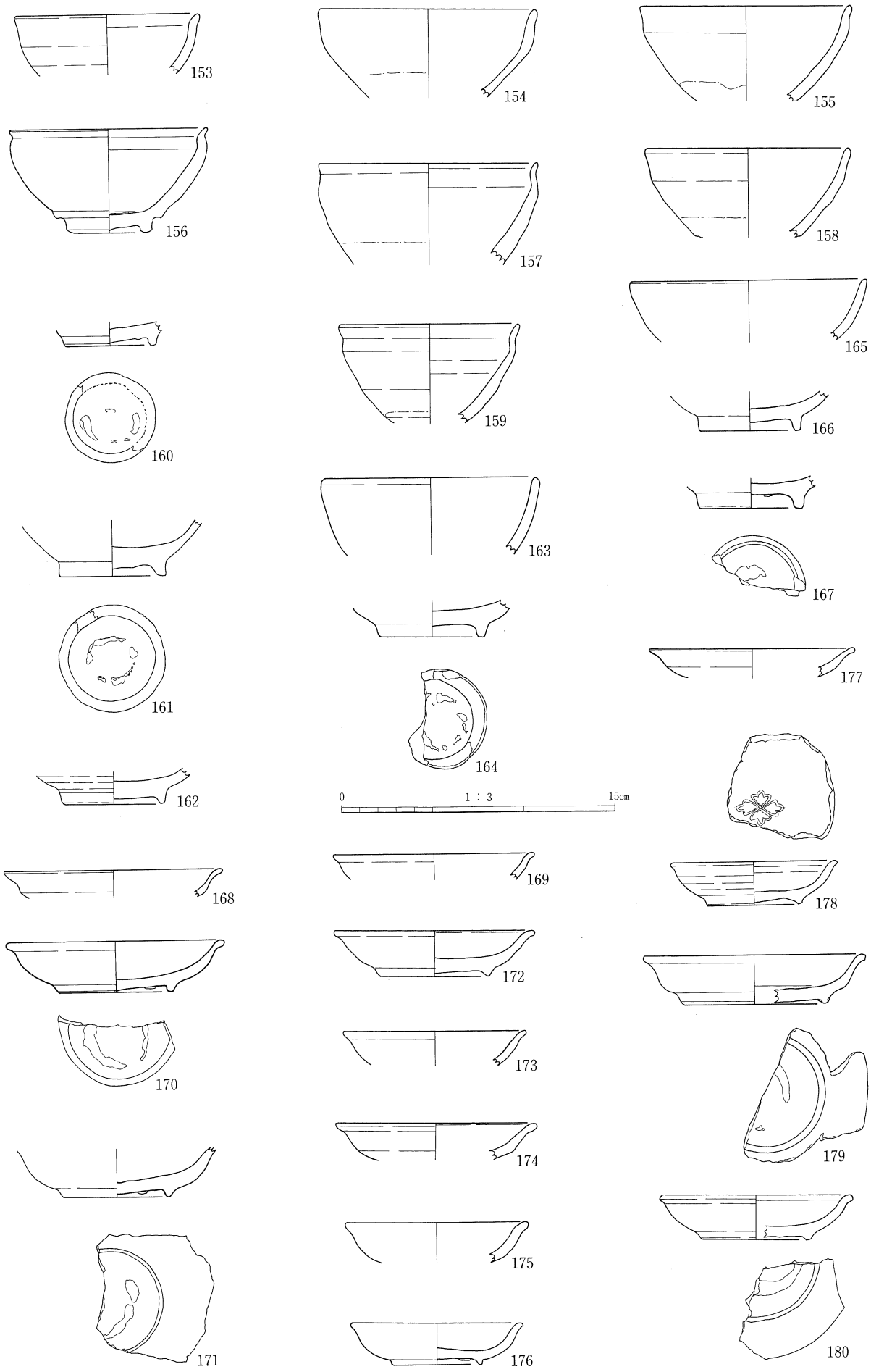
第123図　瀬戸美濃 3 （大窯期）　(1/3)



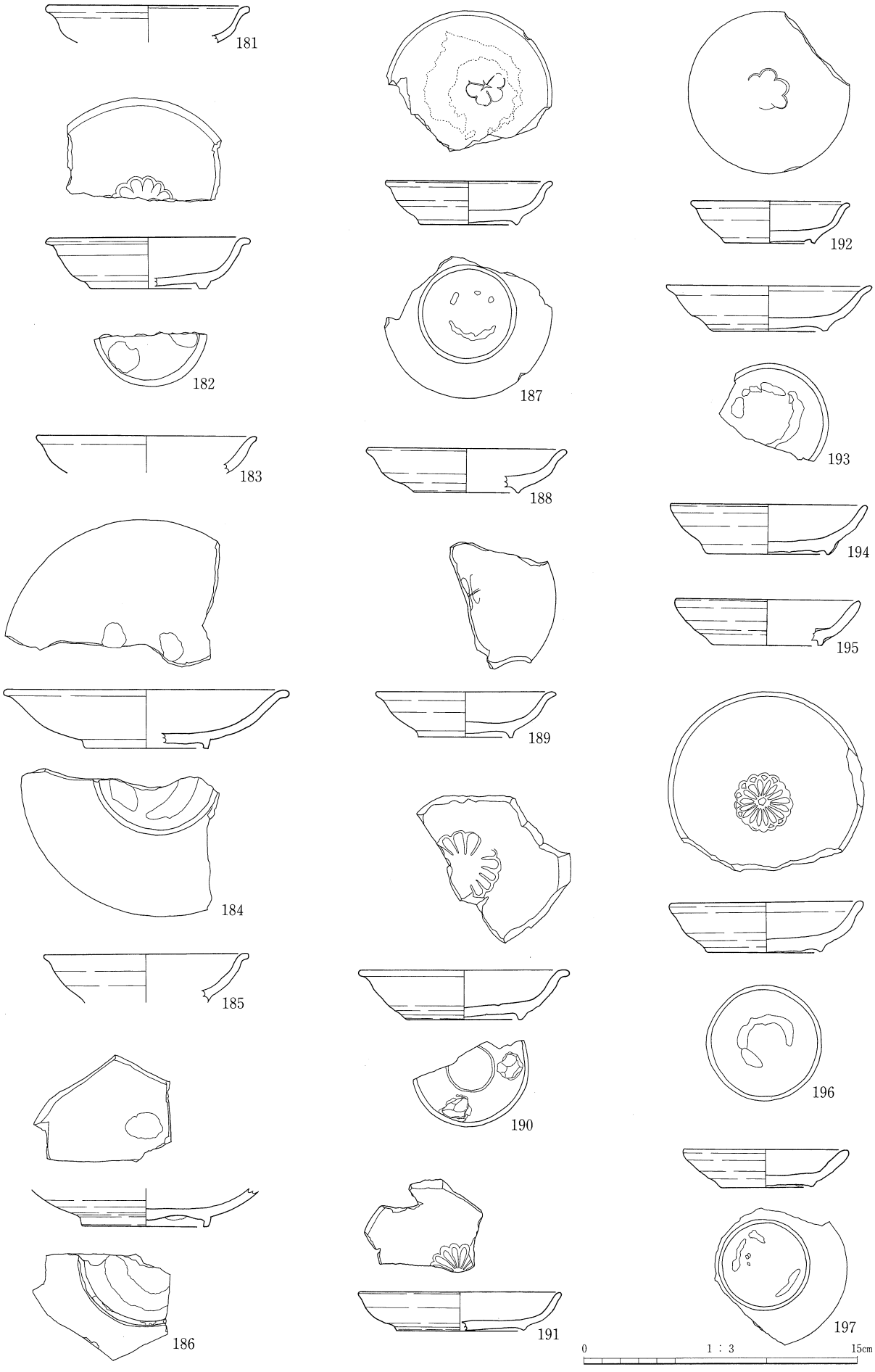
第124図　瀬戸美濃４（大窯期）　(1/3)



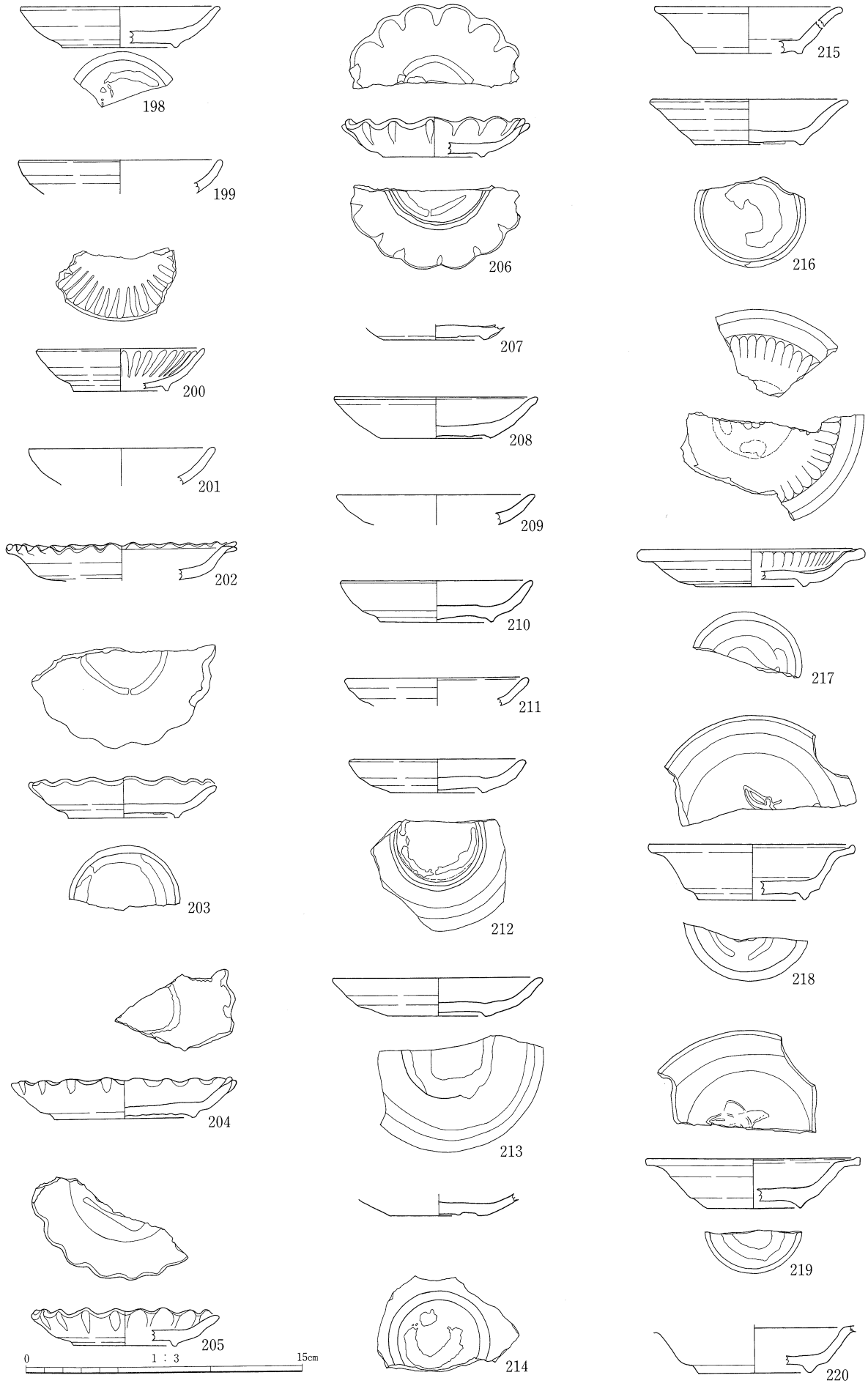
第125図　瀬戸美濃 5 （大窯期）　(1/3)



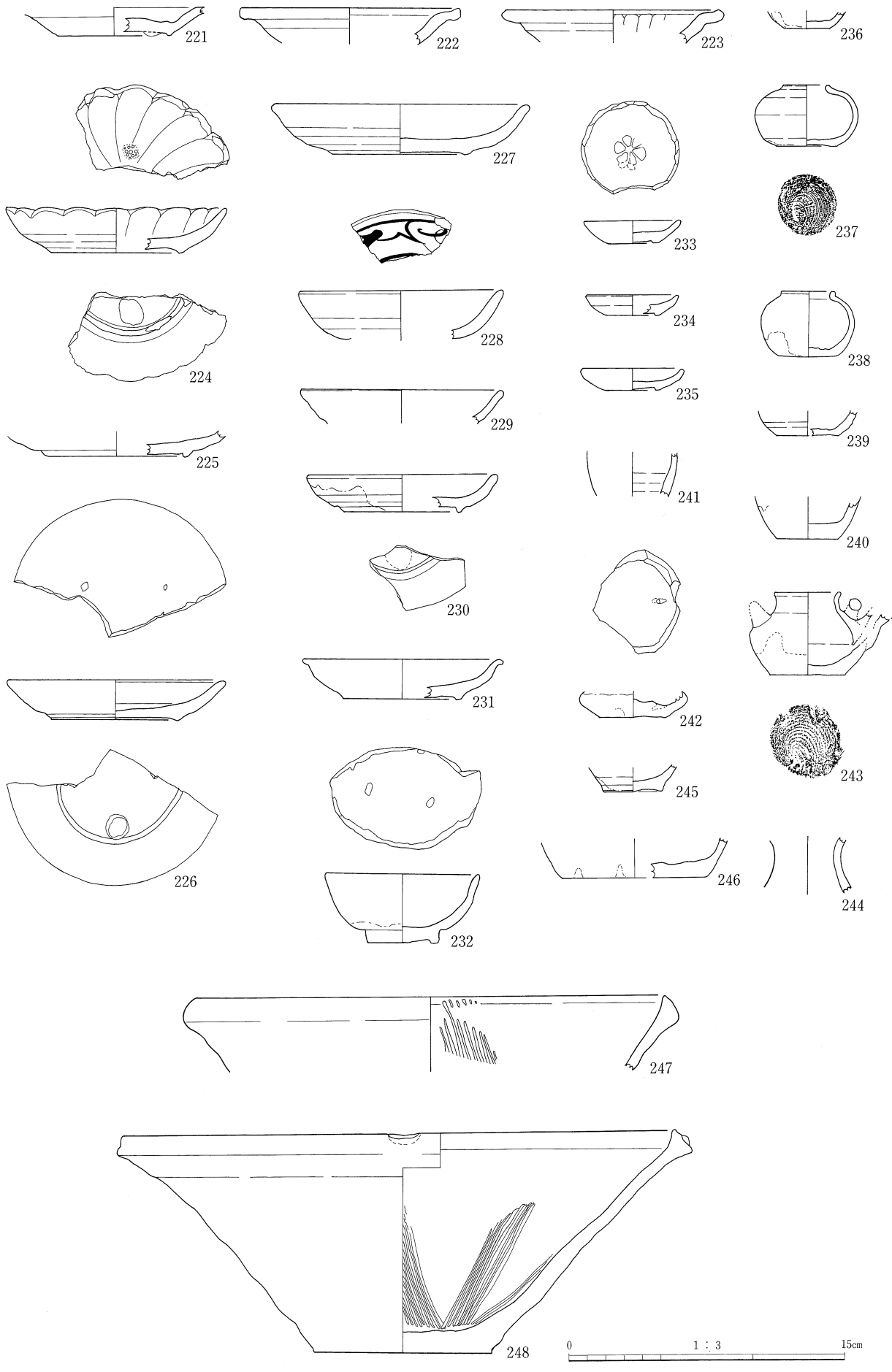
第126図　瀬戸美濃6（大窯期）　(1/3)



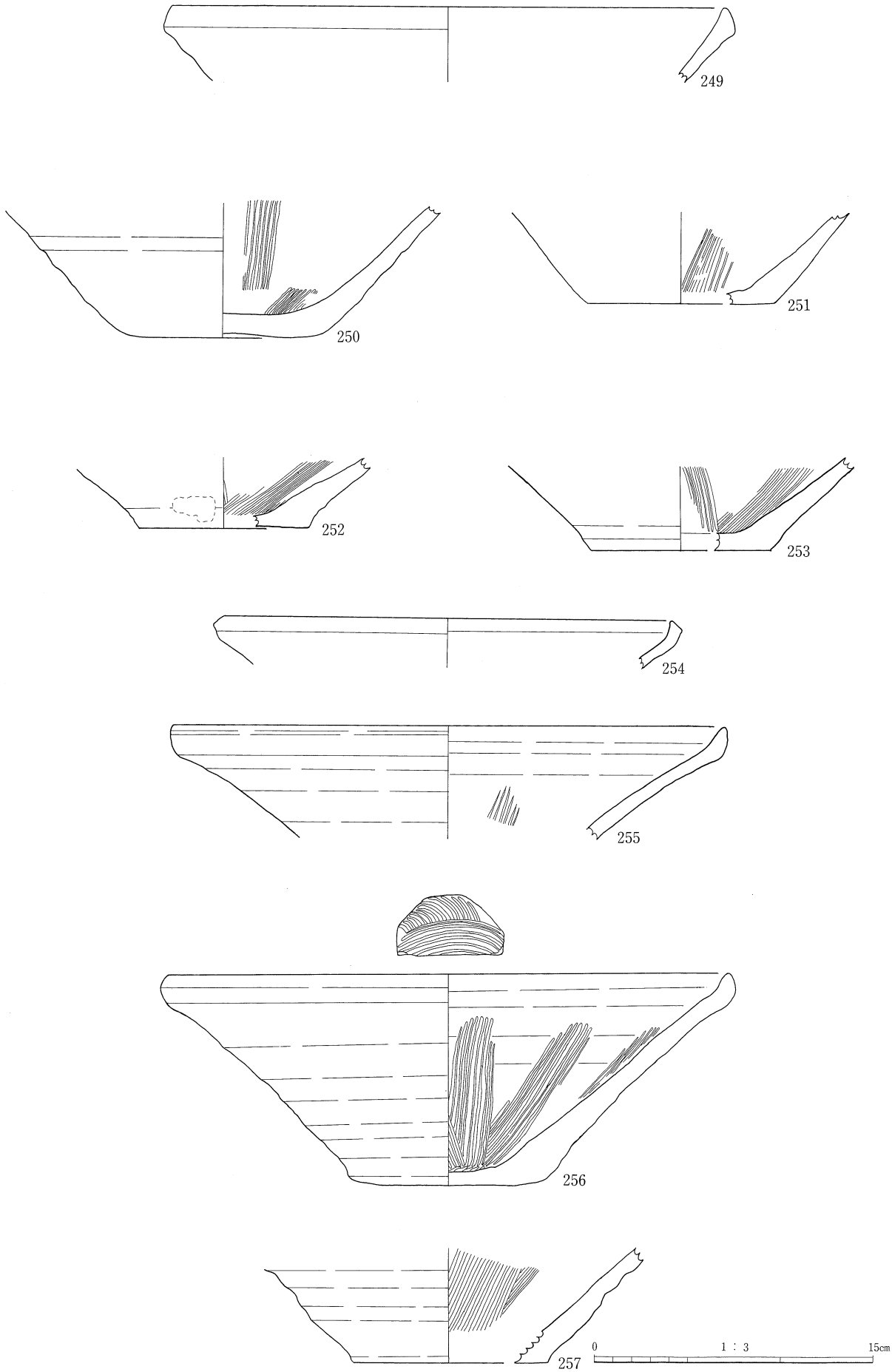
第127図　瀬戸美濃 7（大窯期）　(1/3)



第128図　瀬戸美濃 8 （大窯期）　(1/3)



第129図　瀬戸美濃 9（大窯期）　(1/3)



第130図　瀬戸美濃10（大窯期）　(1/3)

6．瀬戸美濃（登窯期以降）

近世の瀬戸美濃製品は，17世紀初頭の地上式連房登窯導入以降19世紀中葉までの施釉陶器を「本業焼」，19世紀初頭以降の磁器類を「新製焼」あるいは「染付焼」と呼んで区別している[注1]。量的には少ないが，本遺跡からは，各時期の陶磁器類が出土しており，該期の製品を一括して報告することにする。

(1) 本　業　焼（第131図1～7・10・11・14・15・18，図版56・57）

椀・皿・壺・植木鉢がある。1は鉄釉を施す椀である。高台は高く，やや外方に開き，底部との境は丸味をおびる。胎土は白色を呈し，高台下半及び高台内は露胎となる。本業Ⅰ期2小期の丸椀に類似するものがあり，17世紀第2四半期のものと考えられる。2も鉄釉を施す椀の底部である。蛇目高台を持ち，高台下面には「上△」の押印がある。

3は体部が内湾しながら立ち上り，口縁部が外上方に開く器形の椀である。体部外面に鉄絵で柳文様が描かれる。いわゆる「柳茶椀」である。胎土は灰白色を呈し，透明で黄味白色を呈する灰釉？が施される。本業Ⅲ期の製品で，18世紀第4四半期～19世紀中頃の年代が与えられる。4・5は，逆三角形の高台を持ち，体部と口縁部が直線的に外上方に開きながら立ち上る器形の椀で，いわゆる「広東椀」型のものである。体面には竹笹文，内底面には五弁花が呉須で描かれる。胎土は灰白色を呈し，高台下端を除き，全面に透明釉が施される。これらは本業Ⅲ期でも新しい段階に位置づけられ，19世紀中葉～後葉と考えられる。6・7は，小型の筒形椀である。体部外面には，呉須による菊花と斜格子が描かれる。胎土は灰色を呈し，やや硬質である。19世紀代と考えられる。

10・11は口縁部がほぼ直線的に外上方に開く器形の染付皿である。10の体部内面には呉須による扇文と花文？，内底面には帆掛舟が描かれ，体部外面にも文様がある。胎土は乳白色を呈しやや軟質で，透明釉が全面に施される。11も同様であるが，呉須絵はさらに簡略化されている。これらは，本業Ⅲ期のもので，18世紀第4四半期から19世紀代に置くことができる。14は，鉄釉の施される小型の壺，15も同じく鉄釉の施される壺類で，いずれも本業Ⅲ期と考えられる。

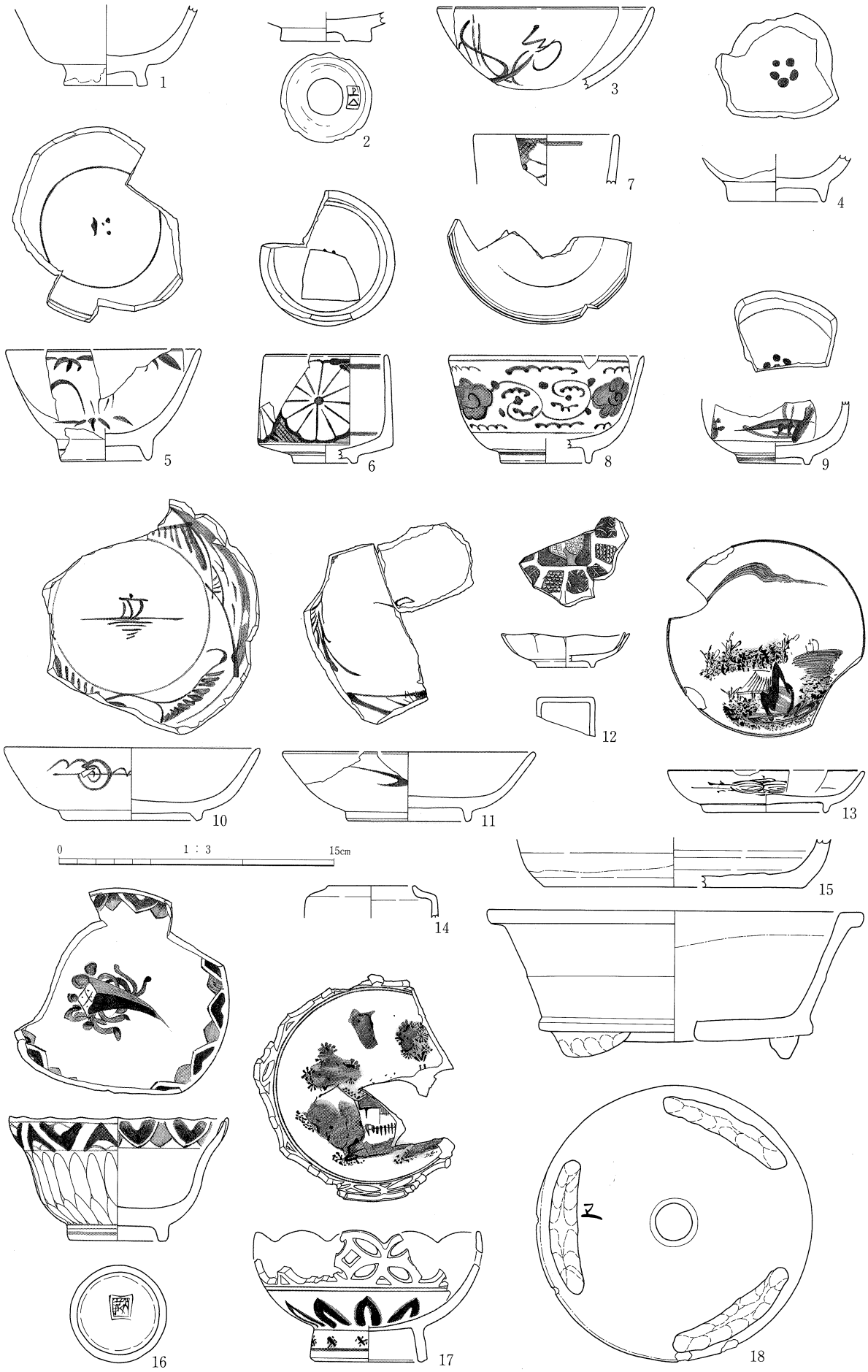
18は，皿形の植木鉢である。体部外面及び口縁部内面に透明釉が施される他は，露胎となる。底部中央に円孔があけられ，指おさえの明瞭な三脚が付く。脚部内側に「エ(衛)」と読める墨書がある。陶質であるためとりあえずここに含めておくが，時代等は不明である。

(2) 新　製　焼（第131図8・9・12・13・16・17，図版56・57）

碗・皿・鉢等がある。8は，体部が内湾しながら立ち上り，口縁部がほぼ直線的に外上方に開く器形の染付碗である。体部外面には花文・渦文・波状文などが呉須絵で描かれる。胎土は白色を呈し，磁質である。年代については19世紀前葉～中葉が考えられる。9は小型の碗で底部のみ残る。胎土は灰色を呈し，やや陶質であり，本業焼に分類することも可能かもしれない。内底面には五弁花が描かれる。

12・13・16・17は，磁質な胎土を持ち，コバルト色に近い発色の染付が施されるもので，明治時代以降のものと考えられる。産地についても確実なものではなく，その他の項で取り扱う方が良いのかもしれないが，染付の発色や胎質などから瀬戸美濃の可能性のあるものを集めたものである。12は，小型の型打ち皿である。内底面の鳥形や木葉・鱗形等の文様は型押しによる浮き彫り状になっている。高台は四角形である。13は小型の皿で，内面に山水を描く。口縁端部に染付を施す他，体部外面にも文様がある。16は口縁部が外反する器形の鉢である。体部は面取りを施し，口縁部は波状となる。口縁部内外面及び内底面には幾何学的な抽象文が描かれる。17は，体部上半から口縁部に，透かしを入れた鉢である。内底面には山水文，体部外面下半には蓮弁状の文様を描いている。　（山本正敏）

注1　藤澤良祐　1987　「本業焼の研究(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ



第131図　瀬戸美濃11（登窯期以降）　(1/3)

7．越中瀬戸（第133～141図）

越中瀬戸は，現在の立山町に瀬戸から工人を呼び寄せ，操業が開始され現在に至っている。その起源は1585年以前と考えられ，大窯の操業は出現期から17世紀中頃まで，登窯の操業はそれ以降といわれる[注1]。当遺跡からは大窯期，登窯期(17・18世紀)の椀・皿・擂鉢といった食膳具，灯明具・壺類・匣鉢が出土している。遺構別ではＳＤ701，ＳＢ6390，ＳＥ8978からの出土が目立つ。ＳＤ701からのものはこの溝の上面を流れるＳＤ1441のものと思われる。これらのうち代表的なものを抽出し，器種別に報告する。また量的にまとまって出土する皿・擂鉢については，形態的な特徴と製作技法上から分類を試みた。時期区分については，年代と窯の時期を併用して報告する。

椀（１～27）　胎土は灰白色系で，細かい黒色または白色粒を含む。１～６は鉄釉の天目茶椀である。１は体部に丸みをもち，口縁端部を軽く外反させたものである。２は屈曲して，口縁を外に引き出す形態である。３・４は体部に丸みが少なく，口縁部はほぼ直立する。３は体部下方には釉を施さない。登窯期にあたる。５は体部中央にはりをもつ。削りだし輪高台で，高台周辺が無釉である。６は鉄釉に灰釉を流し掛けしたものである。体部は丸みをもち，口縁端部はやや外反する。７～23は，体部下半が丸みを帯び口縁部が直線的またはやや開きぎみに立ち上がる丸椀である。大部分は鉄釉を施したものであるが，灰釉を施したもの（11），外面は鉄釉で内面は灰釉を流したもの（７・14・19）がある。外面高台付近はほとんどが無釉であるが，22は錆釉が施される。高台が残っているものは削り出し輪高台である。底部の中心に向かって円錐状に削られ，厚みも増す。高台部分の内面は外側に開くように削り出されるもの（８・９・11・12・17・18・23），高台の外側端部が面取りされているもの（17）がある。また高台内面は垂直に浅く削られ，幅が広いもの（７・22），高台の断面が逆三角形のもの（10）もある。23は高台を削り出した後，なで調整する。高台裏面の３ヶ所にトチン痕のあるもの（７），釉が付着するもの（９）がある。24～27は高台のみ残るもので，削りだし輪高台である。高台部分の内面は外側に開くように削られ，器高が高く，高台付近は無釉である。25は高台外端部を軽く面取りする。

火入れ（28～30）　28・30は高台付近から直線的に，29は丸みをもって立ち上がる。28は灰釉を，29・30は鉄釉を施す。高台付近と見込みは無釉である。いずれも削りだし輪高台である。

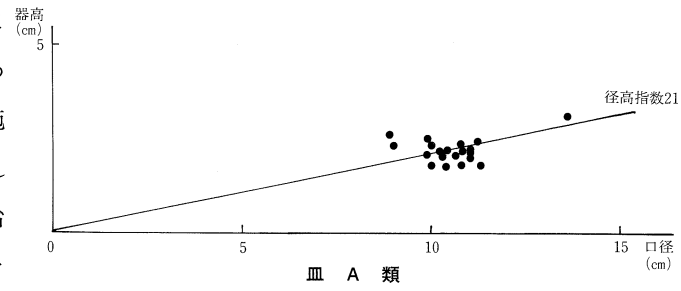
皿（31～132）　体部と口縁部の形態でＡ～Ｆに分類した。また遺物観察表中には，高台のつくりが明確なものに関してⅠ：付高台，Ⅱ：削り出し高台，Ⅲ：削り出し輪高台，Ⅳ：底部糸切り，に分類した。皿の胎土はにぶい黄橙色系が多く，細かい白色粒が混入する。

Ａ類（31～53）　体部中央で丸みをもって立ち上がる丸皿である。内外面底部と高台付近は無釉の内禿皿である。口径は10㎝前後のものが多く，口径と器高の比はほぼ５：１である。見込みに印花を押捺するもの（31～34・36～38・40～46・49）があり，その位置は中心から若干ずれている。印花には梅（31），十六弁菊（38・42～46），二重菊（33・36・37・49）などがある。これまでの報告例[注1]では梅の印花は山下窯にみられるため，31は大窯製品の可能性が考えられる。35は鉄釉が施される。断面が逆三角形の削り出し高台である。高台の内側は深く削られる。見込みに重ね焼きの痕跡がある。高台端部には釉が付着する部分もある。31～34・36～40・43・44・46・47・49・51は灰釉が施される。41は内禿である。印花押捺の溝に釉が流れ込んでいる。底部の中央が削られ，高台付近は胎土の盛り上がりがみられる。この部分と外面体部下方がなで調整されるため，付高台と思われる。見込みに重ね焼きの痕跡をとどめるものは31・32・33，外面底部にそれをとどめるものは40・44である。33の内底面には焼成時の上段の皿が付着する。36は見込みと高台付近に漆が付着し，断面に漆継ぎの痕跡を

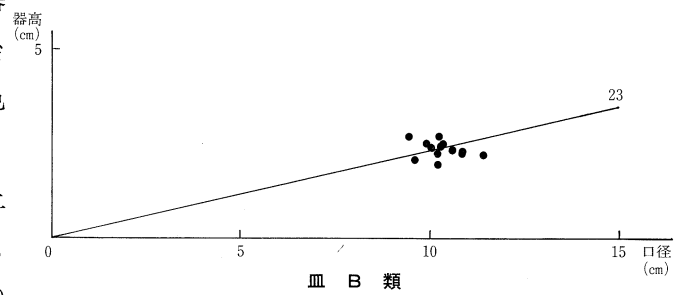
とどめる。46は表面が黒変し，断面の一部に煤が付着する。２次被熱を受けたものと思われる。50は口径が13.6cmと大ぶりで鉄釉が施される。外面体部下方から底部全体に削られる削り出し高台である。外面体部中央の露胎と見込みはなで調整される。51～53は鉄釉を施し，口径約９cmといった小ぶりに対して器高が高い丸皿である。これらは削り出し高台をもつ。また51は皿の胎土には珍しい赤褐色を呈する。

B類（54～66）　若干丸みをもって立ち上がり，口縁部が端反り風になる内禿皿である。鉄釉を施すもの（55・60）と灰釉を施すもの（54・56～59・61～66）がある。54は見込みと外面下半は無釉の内禿皿である。57・62・63・65は底外面中央に回転篦削り調整が施される。高台付近は胎土が盛り上がり，なで調整される。付高台である。54・55・59・61・66は体部下方から底部を削り，高台部分をなで調整する。断面が逆三角形を呈する削り出し高台である。見込みに印花を押捺するもの（54・55・57・59～66）がある。印花には桜（55・57・61・62・64），六弁桜（65），十六弁菊（59）がある。印花の部分に重ならないように，重ね焼きの痕跡を残すもの（56･63･65・66）がみられる。58・66は見込みに釉止めの段をもつ。54は印花の溝に釉が流れ込んでいる。63･64は底部に墨書がみられる。58･60の胎土は橙色を呈する。

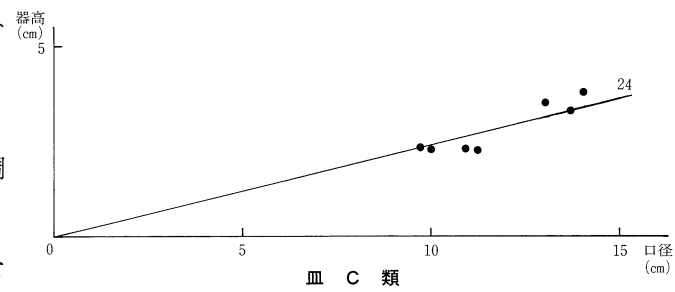
C類（67～73）　丸みをもって立ち上がり，体部中央で屈曲し，口縁部が直線的にのびるものである。削り出し高台である。口径が13～14cm（71～73）のものと，口径10～11cm（67～70）のものがある。68・69は鉄釉を，67・70は灰釉を施す。68～70は内禿皿で，67は内面全面に釉が施される。両者とも体部下方から底部は無釉である。68･70は見込みに印花を施す。70は重ね焼きの痕跡がある。67･68は付高台，69・70は削り出し高台である。72・73は灰釉



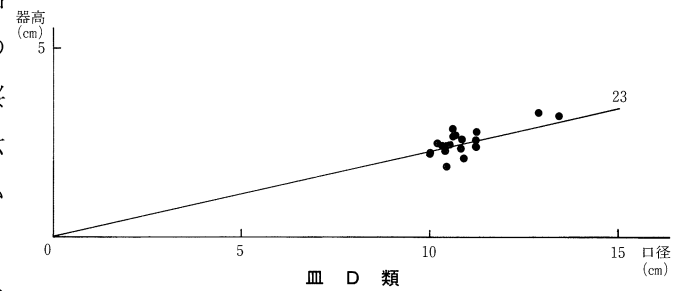
皿　A　類



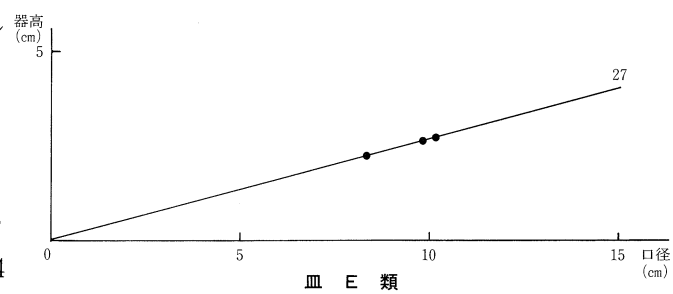
皿　B　類



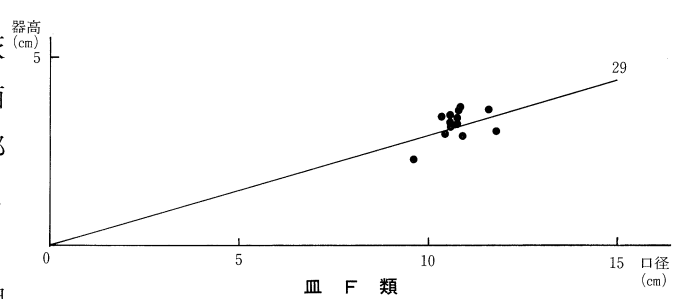
皿　C　類



皿　D　類



皿　E　類



皿　F　類

第132図　越中瀬戸皿法量表

と鉄釉をかけ分けた内禿皿で，73は口縁端部を輪花風につまむ。72は17世紀前半である。

D類（74～93）　体部下半から口縁端部まで直線的にのびる内禿皿である。削りだし高台で削りが深く，断面が逆三角形になる。登窯期のものと思われる。74・75は口径が13cm前後である。74は灰釉と鉄釉をかけ分ける。また見込みに重ね焼きの痕跡を残す。75は鉄釉を施す。76～93は口径が12cm以下のものである。灰釉を施すものが多く，鉄釉を施すもの（80・86・87・89・91・93）もある。釉止めの段をもつもの（77・78・80・82・84～86・91～93）があり，91は3段みられる。印花を押捺するもの（77・81・84・85・92）がある。見込みに重ね焼きの痕跡を残すもの（77・81・82・85・87），見込みや体部外面に煤が付着するもの（76・79・84・87・93）がある。90は見込みの表面が灰色に変色し，2次被熱を受けたものと思われる。これらは灯明皿として用いられた可能性が考えられる。

E類（94～97）　体部下半から口縁端部まで直線的にのび，内面は全面に，外面は体部に鉄釉を施すものである。底部は糸切り痕を残す。灯明皿と考えられる。

F類（98～113）　口縁部が屈曲して直立し，口縁中央からやや外反するいわゆる「向付」の鉢形態で，削り出し高台をもつ。登窯期のものである。108は灰釉を，その他は鉄釉を施す。98・104は内面に灰釉が流し掛けされる。見込みと外面体部から底部無釉である。98・100・103・104・106・109・110は釉止めの段をもつ。103は底部に墨書がみられる。

114～131は底部のみが残る内禿皿である。灰釉を施すものは，114・115・124・125・127・128・130で，他は鉄釉を施す。高台は，付高台のもの（117・120），削り出し輪高台のもの（122・126・127・129・130），底部糸切りのもの（131）がある。削りだし高台で，断面が逆三角形のもの（122・126・130）は登窯期と思われる。見込みには菊の印花を施すものがほとんどであるが，部分的に押捺し損なったものもある。122は半円のような押捺がみられる。115は見込み中央が深くなり，煤が付着することから灯明皿と考えられる。115・118・123・128は見込みに釉止めの段をもつ。130は底部に墨書がみられる。115・120は見込みが，127は内外面が黒変する。見込みに重ね焼きの痕跡がみられるものは，115・117・128・129・131である。

132は鉄釉を施し，口縁端部をつまむ皿で，内面体部に4つの段がみられる。

灯明具（133～137）　133・134は内面に鉄釉を施した灯明受皿である。底部は無釉で，糸切り痕がみられる。135～137は秉燭である。胴部内外面は鉄釉が施され，脚部は無釉である。見込みには幅5㎜～1㎝の燈心立てがつく。底部は糸切りである。135の脚部は部分的に黒変する。これらは登窯期と思われる。

小杯（138）　糸切りの平底である。鉄釉を施すが，底部は無釉である。

徳利（139）　口頸部と思われる。内外面とも鉄釉を施す。

壺類（140～144）　140は全面に鉄釉が施される。見込みに段をもち底部に糸切り痕を残す。141は体部に丸みをもち口縁部が若干くびれるものである。底部は無釉で，糸切り痕を残す。外面体部は鉄釉に自然釉がかかる。142は体部が中央が張りだし，口縁部がすぼまる。肩部には耳が付く。体部下方から底部にかけて無釉である。底部は糸切り痕がみられる。143・144は体部が直線をなし，肩部で鋭く屈曲し口縁部が短いものである。144は鉄釉に灰釉が流しかけられる。

145・146は筒状の形態をもつものと考えられるが不明である。体部上方に外面から直径5㎜の孔があけられている。鉄釉が施されるが体部内面下半は無釉である。

匣鉢（147～152）　体部に丸みをもちながら直立し筒状を呈する。149・152・153は底部中央に向かって器壁が薄くなる。鉄釉を施すもの（147・151・152），錆釉を施すもの（148～150）がある。底部

には糸切り痕がみられ，無釉である。148・152は見込みも無釉である。

擂鉢（154～184）　全面に錆釉が施される。口縁形態から６つに分類した。

Ａ類（154～163）　口縁の縁帯が短く折れるものである。体部はロクロなでされ，底部は糸切りである。内面の口縁部は直線的にのびるが，160は凹状になる。卸目は見込みから口縁に向かって施される。口縁端部まで施すもの（154・155）がある。155は幅２cm６条，157は幅４cm11条，158は幅３cm10条がそれぞれ１単位である。158の見込みは，左回りの放射状に施される。157は17世紀後半である。162は幅3.2cm12条１単位で，見込みは左回りに巴状に曲交する。底部も施釉される。162は内面に重ね焼きの痕跡がある。

Ｂ類（164～167）　口縁の縁帯を外方につまみ出すものである。体部はロクロなでである。164は幅３cm10条１単位の卸目が施される。

Ｃ類（168）　口縁端部が屈曲して直立するものである。卸目は左回りに2.7cm13条１単位で沈線まで施される。

Ｄ類（169～171）　口縁の縁帯がほとんど外にでないものである。体部はロクロなでである。

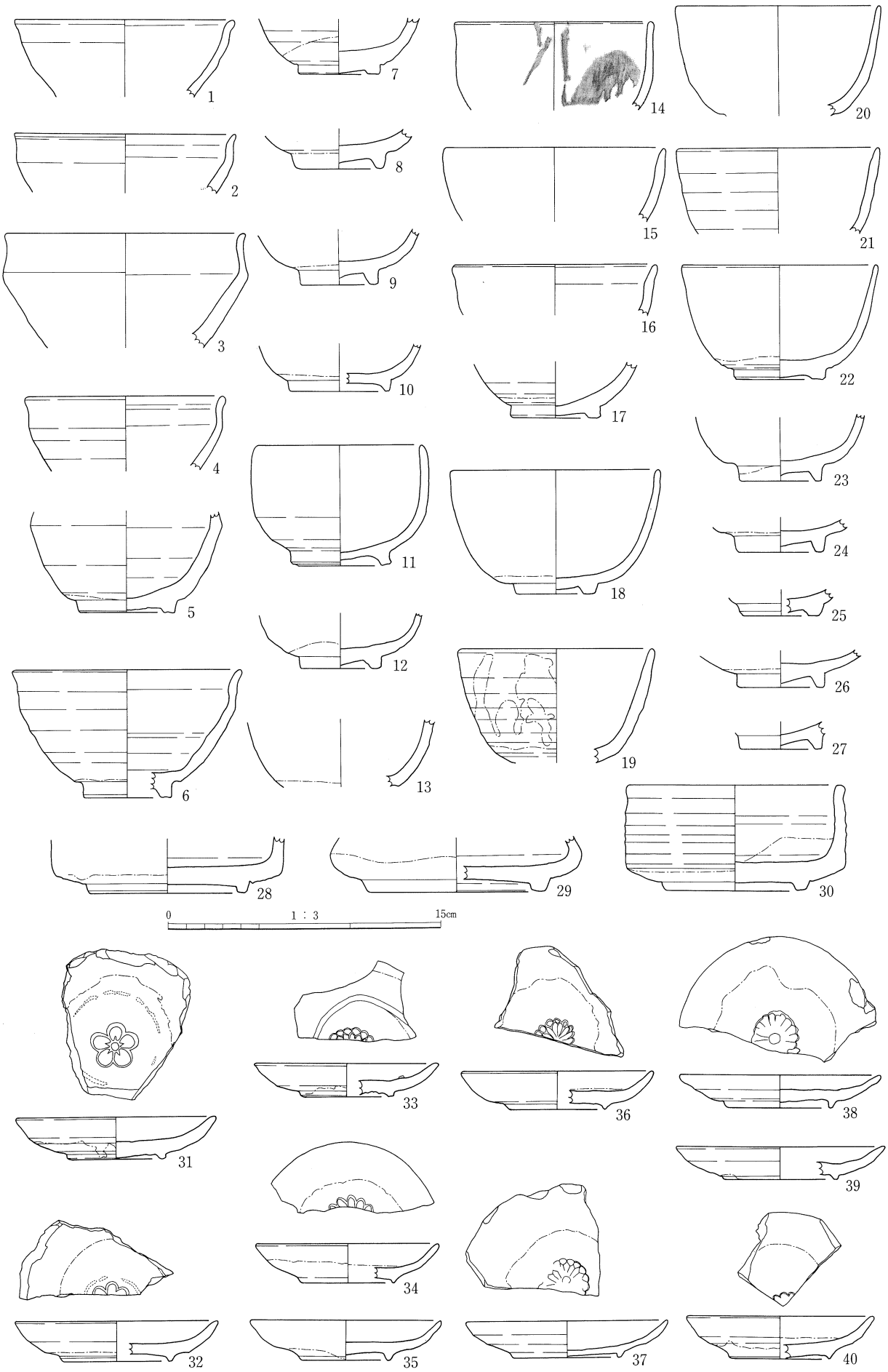
Ｅ類（172～177）　口縁は外側に折り返され縁帯を形成するものである。外面の体部中央から下方は削られる。卸目は口縁に向かって施され，幅２cm，幅2.6cmに９条１単位（176・177）で施される。

Ｆ類（178・179）　口縁が内側に折り返され，内面に凸帯を形成するものである。凸帯の中央は，やや凹む。体部はロクロなでである。

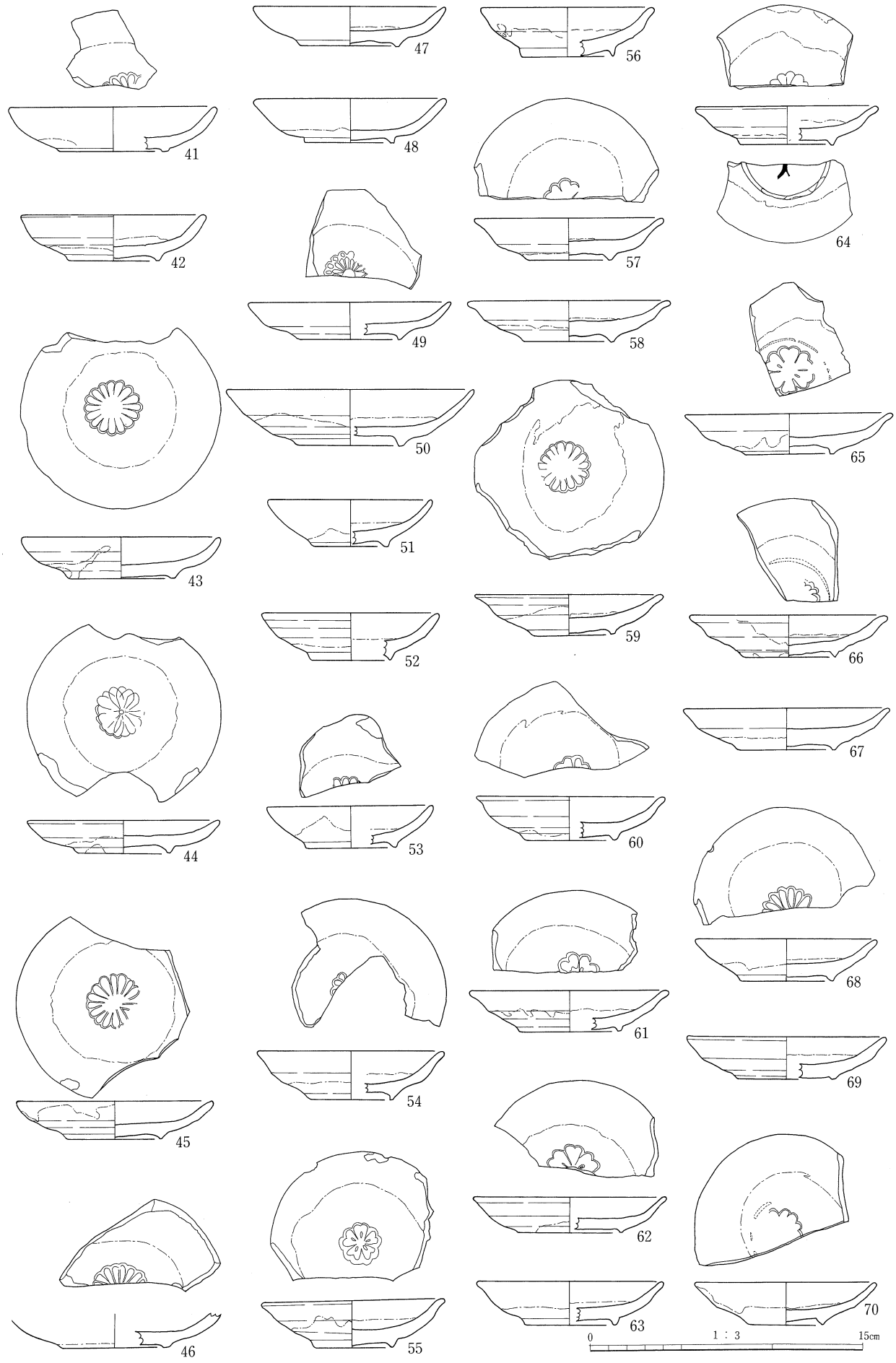
180～184は体部と底部が残るものである。体部はロクロなでで，体部の底部付近に指頭圧痕がみられるもの（180・183）がある。底部には糸切り痕がある。卸目は見込みから体部へ左回りに，見込みは巴状に曲交するもの（181・183），１単位で六角形を描くもの（182・184）がある。182は11条，183は９条，184は17条がそれぞれ１単位である。157は17世紀後半，172・173・180は登窯期と思われる。

（横山和美）

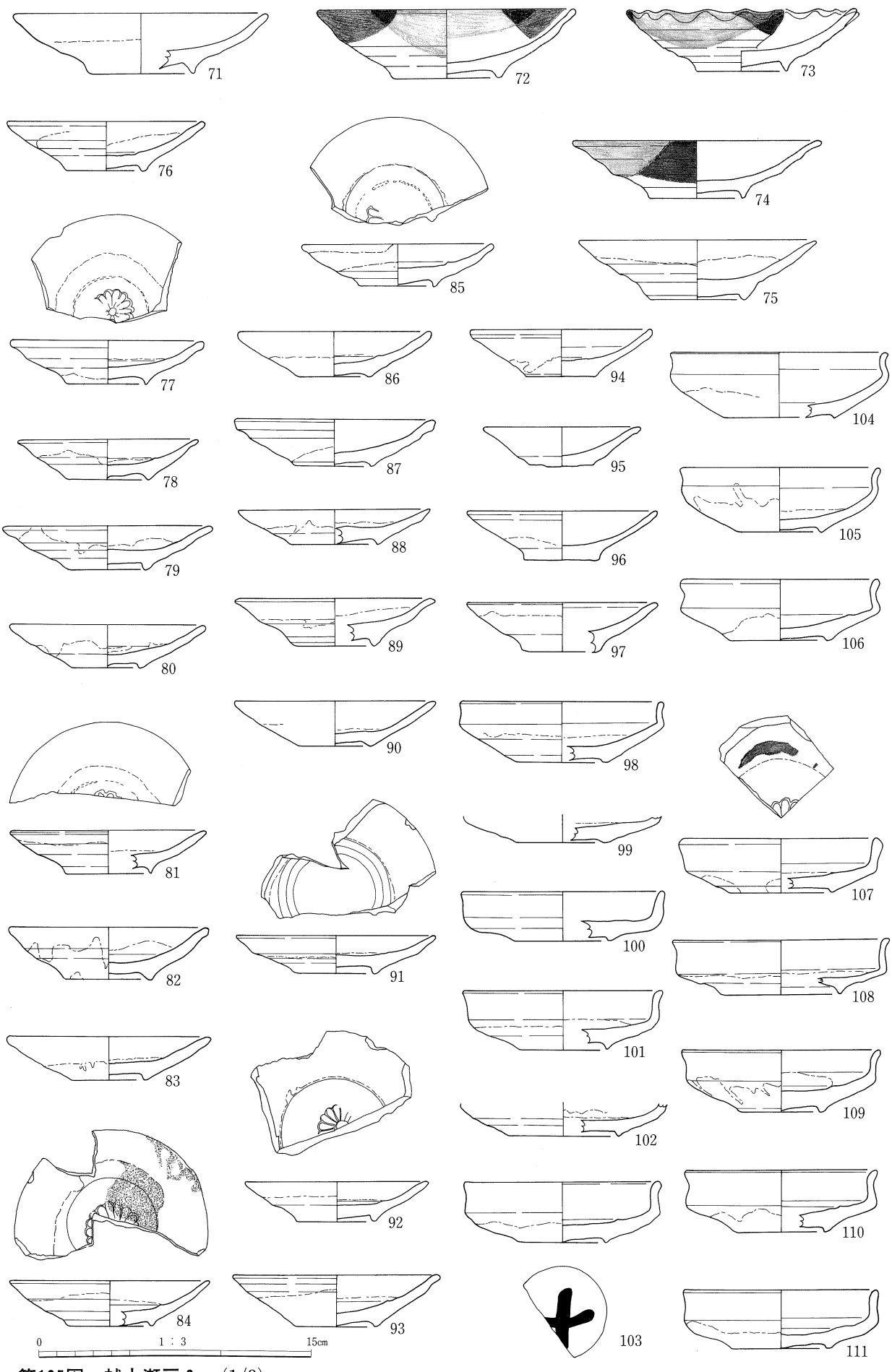
注１　越中瀬戸焼発祥400年記念顕彰会実行委員会　1988　『越中瀬戸発祥400年記念誌』
宮田進一　1988　「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号　富山考古学会



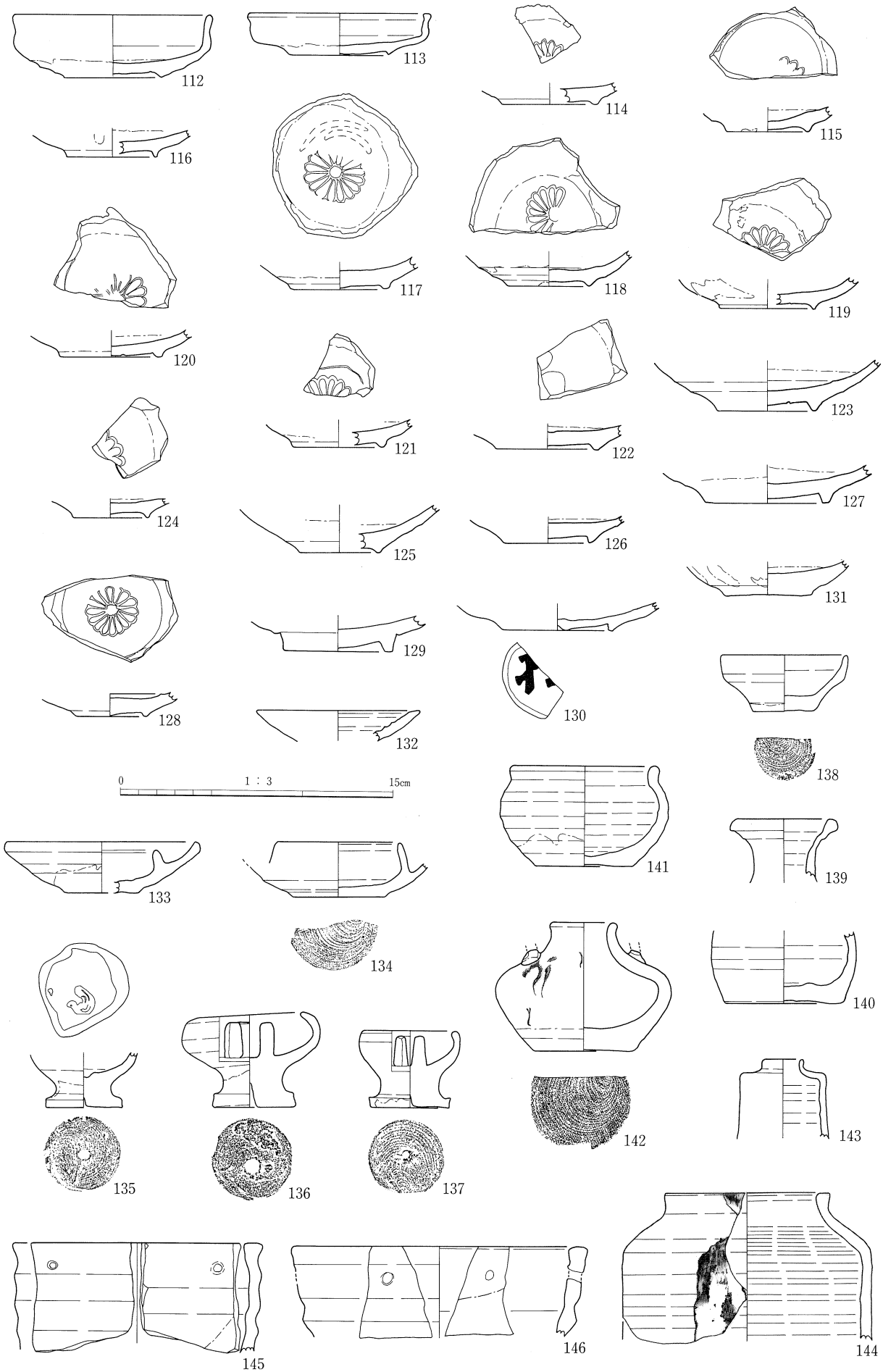
第133図　越中瀬戸 1　(1/3)



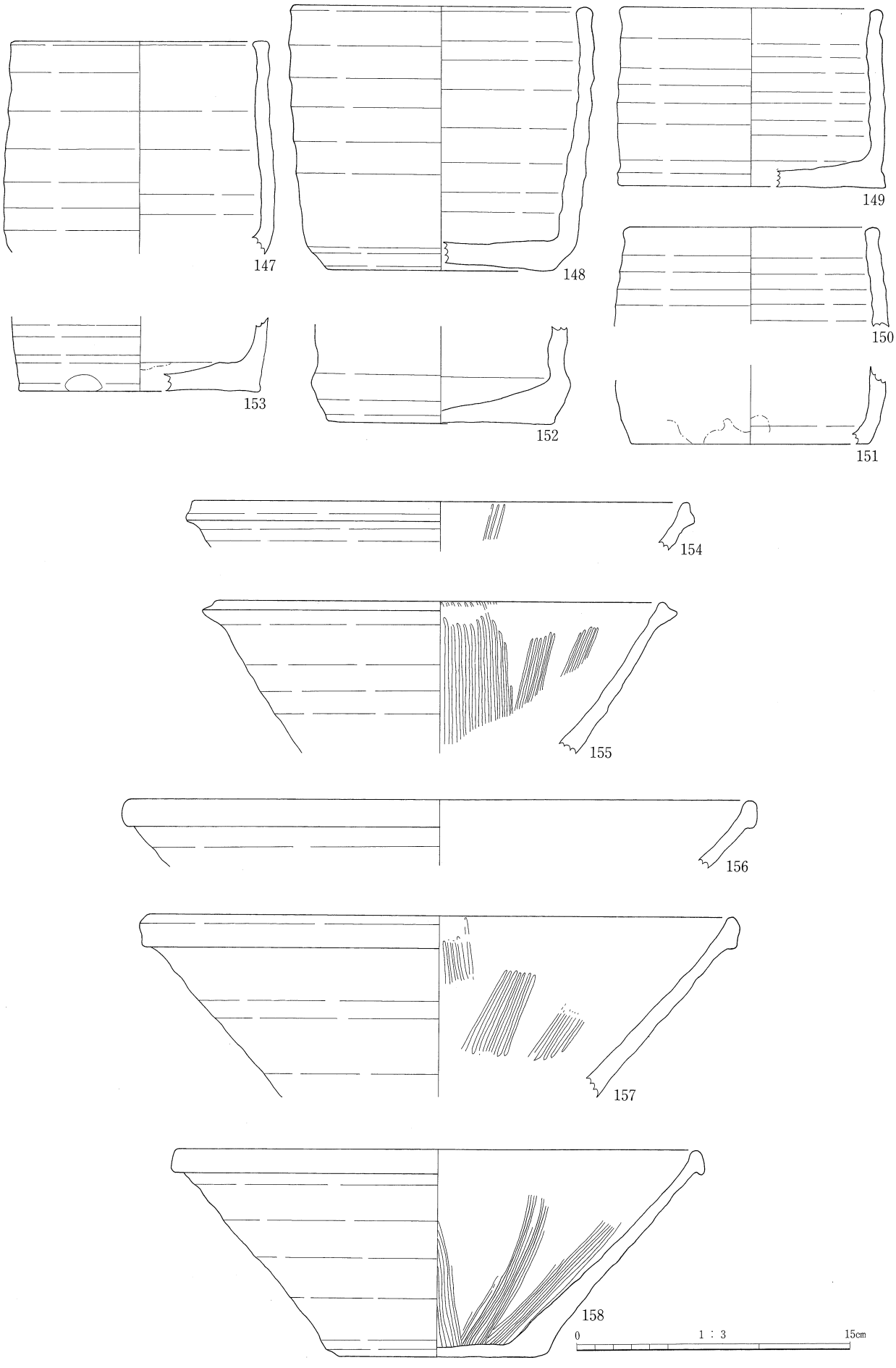
第134図　越中瀬戸 2　(1/3)



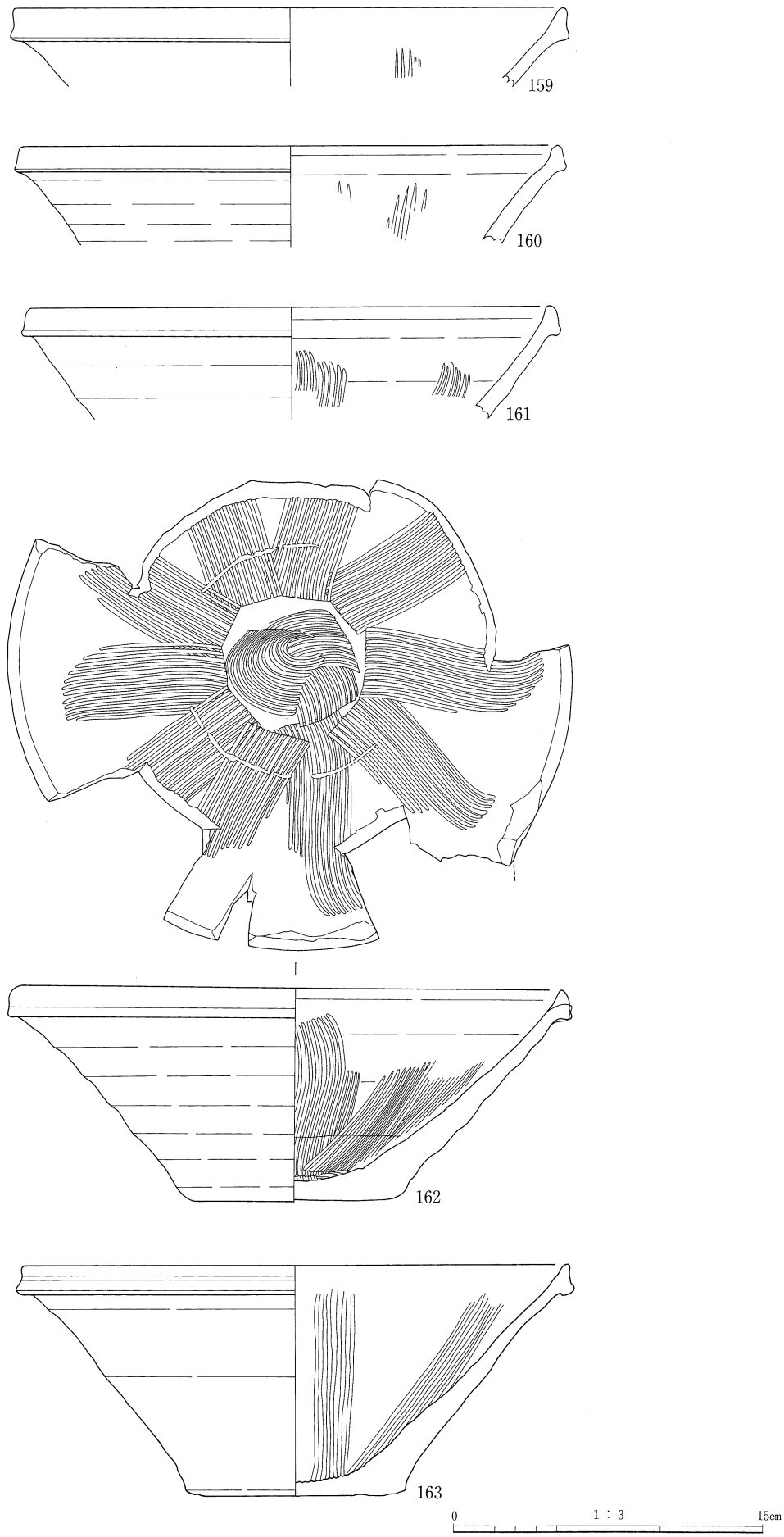
第135図　越中瀬戸 3　(1/3)



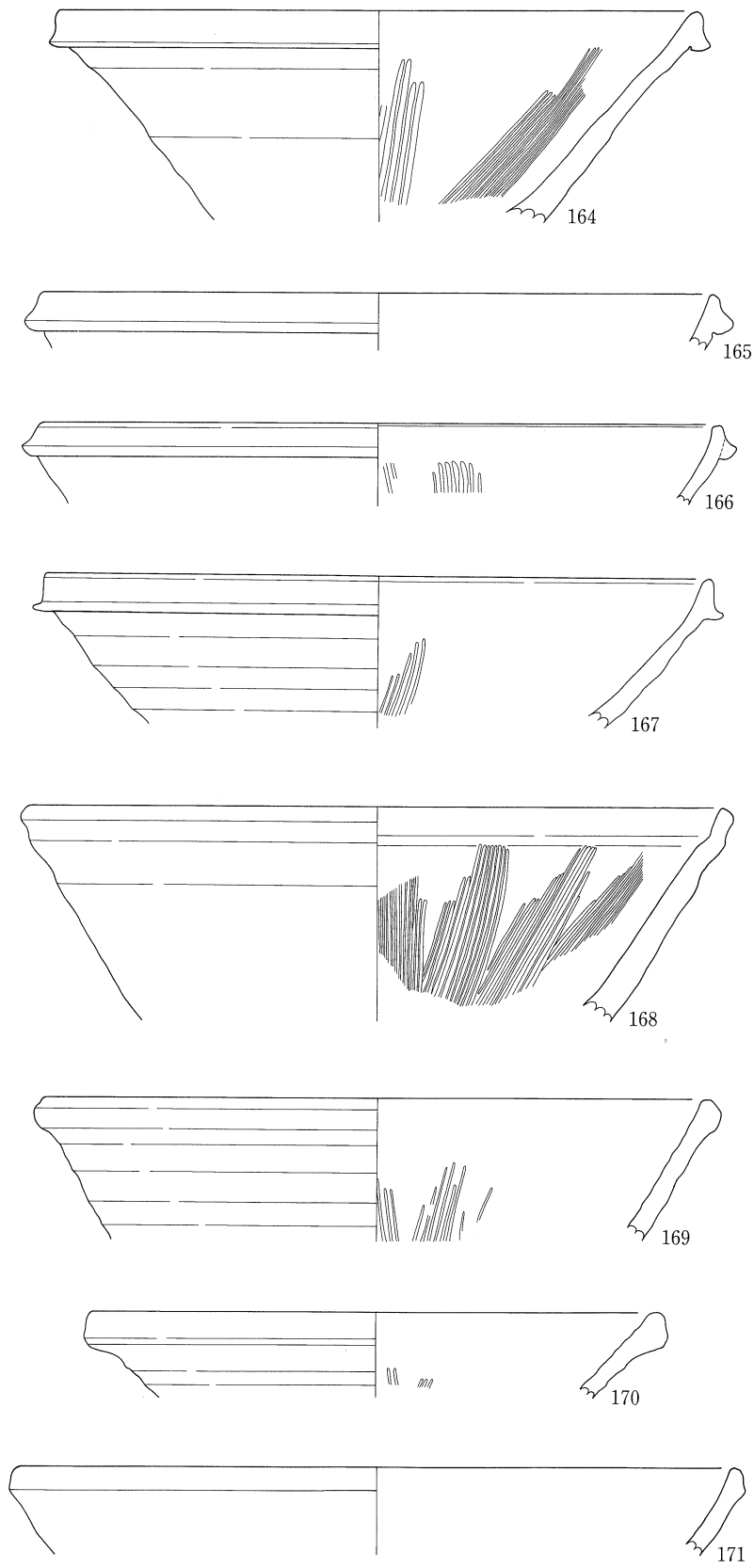
第136図　越中瀬戸 4　(1/3)



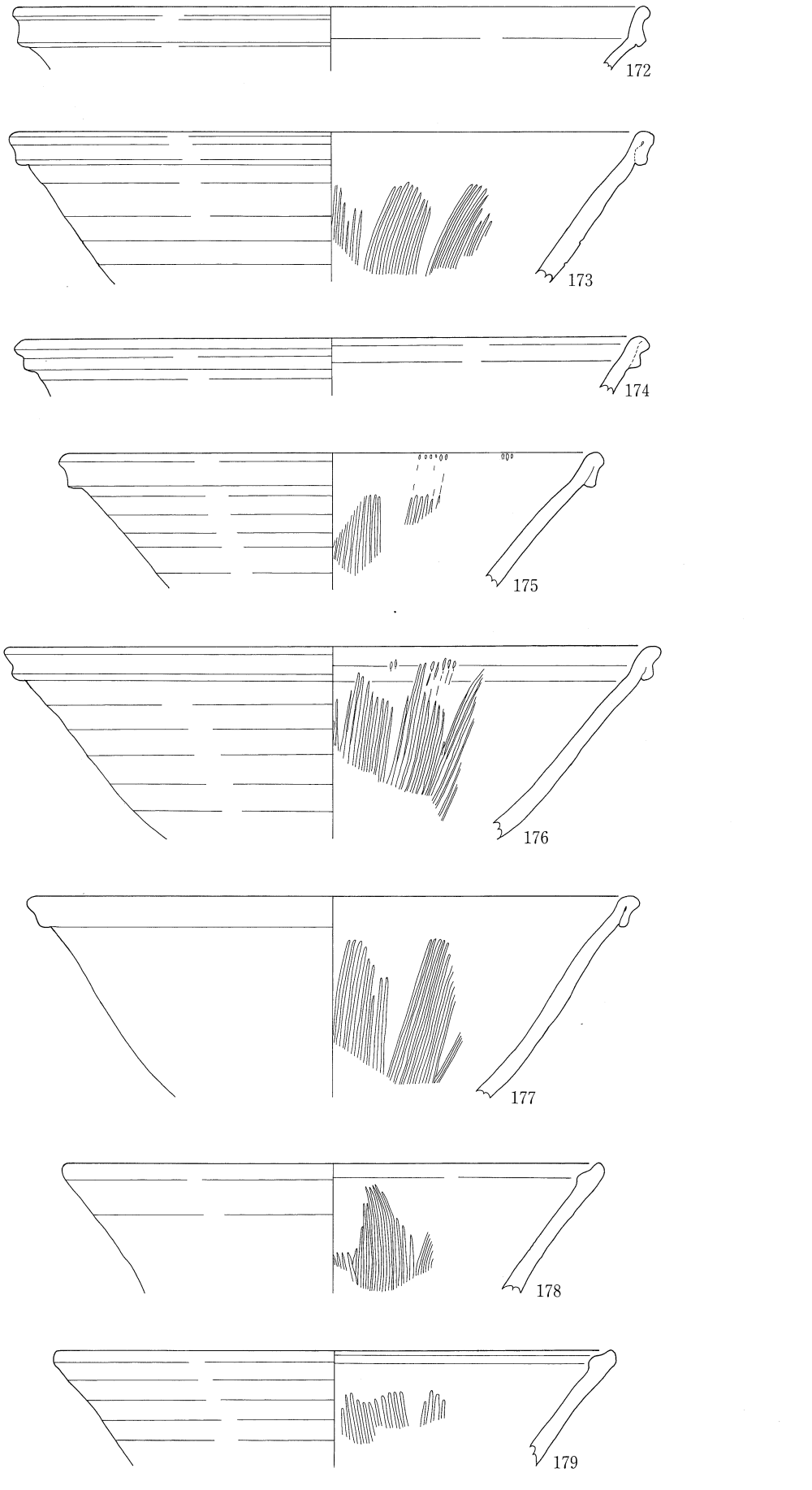
第137図　越中瀬戸 5　(1/3)



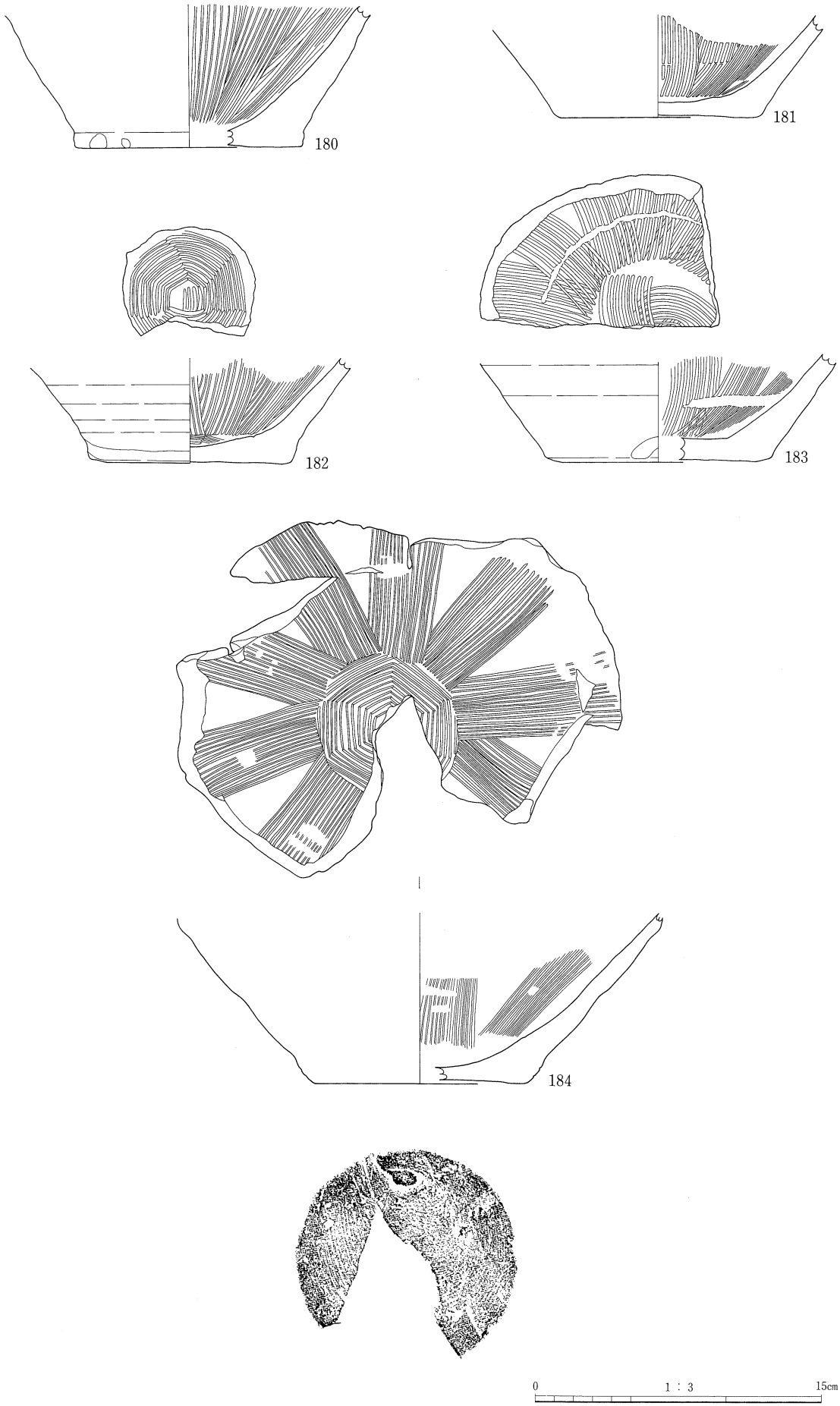
第138図　越中瀬戸 6　(1/3)



第139図　越中瀬戸 7　(1/3)



第140図　越中瀬戸 8　(1/3)



第141図　越中瀬戸 9　(1/3)

8．唐　　津

現在の佐賀県有田町とその近隣の諸窯で焼成された，中世末期～近世におよぶ施釉陶器を，一括して唐津に分類し報告する。ただしこの中には，時期差のあるもの，器形・釉薬・製作技法などが異なるものなどが含まれ，多様な様相を示しているため，以下の様に，

(1)　唐津（(2)～(4)以外をすべて含む）

(2)　刷毛目唐津（三島手を含む）

(3)　京焼風唐津

(4)　嬉野町内野山西窯の銅緑釉系陶器

の4群に大分類し，それぞれ述べていく。

(1)　唐　　津（第142～149・151・152図，図版64～72）

器種としては，皿・椀・小椀・小鉢・大皿・瓶（徳利）・壺・片口・甕・擂鉢などがある。このうち，出土個体数が最も多いのは皿で，次いで椀・擂鉢・甕がある程度あり，その他の器種は少ない。

皿（1～120）　皿類については4類に分け，そのうち1～3類については形態・釉薬・文様等でそれぞれ細分した。

皿1類（1～71）　いわゆる胎土目積期のものである。目跡の確認できない資料でも，器形・釉薬等で総合的に判断したものもある。1類についてはさらに1a～1f類の6類に細分する。

1a類（1～4）は，器形的には，口縁部が外反するもの，やや内湾ぎみに開くもの，波状になるものなど変化が認められるが，釉が白濁色を呈するいわゆる藁灰釉を用いる点で共通する。これらは佐賀県北波多村岸岳城周辺の古窯群で焼成されたもので，唐津の草創期段階のものとされている[注1]。

1b類（5～15）は，体部が強く内湾して口縁部が立ち上りぎみになるもの（5～7）と，わずかに内湾しながら外に開くものとがある。釉は，やや透明な灰緑色ないし暗緑色を呈するもので，1aおよび1c類以下と区別できる。

1c類（16～34）は，口縁部がゆるく内湾しながら外上方に開く器形で，削り出し高台を持つ。口径は10～13cm程度でやや小ぶりである。内面全体と体部外面中位まで灰釉が施釉され，体部下半や底部は無釉となる。内底面には胎土目が3～4個残るものが多い。釉調は，緑味灰色・灰白色・茶味灰色など変化があるが，このことは1d～1f類も同様である。

1d類（35～41・47）は，口縁部が外反する器形のもので，口縁端部のみ外反するもの（35～37）と，大きく外反するもの（38～41・47）にさらに細分できる。前者は口径13.5～17.5cmと大ぶりで，底部に厚味がある。後者は，口径に差があり，また破片が多くて，1e類との区別が困難なものもある。

1e類（42～46・48）は，体部が内湾して立ち上り，口縁部が屈曲して外反する器形で，体部中程に明瞭な段を持つものである。釉調・施釉範囲・底部形状・目跡等は1c類に共通する。

1f類（49～58）は，体部が内湾して外に開きぎみに立ち上り，明瞭な屈曲部を持たずに口縁部がさらに外反するか，直線的に外上方に開く器形で，口縁部が波状口縁になるものである。波状の程度は様々で，間隔の広いゆるやかな波状のものから，いわゆる雑皿に近い密な小波状のものまである。1f類も，釉調・施釉範囲・底部形状・目跡等は1c類と同様である。

59～71は，皿1類の底部破片である。63は底面高台内に墨書があるが字意不明。

皿2類（72～91）　胎土目積期の皿で，鉄絵を施すいわゆる絵唐津である。これも文様と器形から4類に細分しておく。

2a類（72～78）は，口縁部にそって鉄釉を施すもので，いわゆる「皮鯨手」と呼ばれるものであ

る。器形的には，口縁部が内湾ぎみに開くもの（72～74）と，体部中位で屈曲して口縁部が外反し，明瞭な段を持つもの（75～78）とがある。

２ｂ類（79～81）は，口縁部内面に相対する様に二本の太い線を引くものである。口縁部は内湾ぎみに外上方に開くもので，皿１ｃ類と器形が共通する。口径が10～12cm前後と小ぶりな点も同じである。内底面には４か所ずつの胎土目跡が残る。

２ｃ類（83～85・90・91）は，内底面に木葉あるいは草葉文を描くものである。器形は，体部中位で外に屈曲し，口縁部が大きく外反する。体部内面中位に明瞭な段を持つものが多い。皿１ｅ類に器形が共通し，口径もやや大ぶりになる。84は口縁部に外と内に交互にひねりを加えるもので，口縁部は内湾ぎみになる。なめらかな筆さばきで内底面に草葉文を描き，高台はやや高く削り出す。

２ｄ類（82・86～89）は，その他の文様のものである。器形は２ｃ類と共通である。86は口縁端部に鉄釉を引き，口縁部内側に二本組の直線を放射状に引く。89は意匠はわからないが曲線文様を施す。

以上皿２類の釉調・施釉範囲・胎土等は皿1c類と同様であるが，２ｂ類の釉調はやや灰白色に近いものが多いようである。

皿３類（92～117）　砂目積期の灰釉皿で器形等により３ａ～３ｅ類に細分する。灰釉の釉色は，灰色・灰緑色・茶味灰色などを呈し，若干のバラエティーがある。施釉範囲は内面全体と体部外面中程までで，体部下半と底部は無釉となる。ほとんどのものは，高台を削り出しているが，例外的に円盤状の底部で無高台のものがある。

３ａ類（92・93）は，体部がわずかに内湾しながら立ち上り，口縁部はほぼ直線的に外上方に開く器形のものである。92は円盤状の底部で無高台のものである。内底面には３か所に大きめの砂目跡が残る。口径は11～11.5cmとやや小ぶりである。

３ｂ類（94～97）は，口縁部が外反する器形のものである。口縁端部のみ小さく折れて，内面に稜のみみられるもの（97）と，口縁部全体がゆるく外反するもの（94～96）がある。口径が10.5～11.5cm前後の小型と，15cm前後の大型がある。

３ｃ類（98～100）は，体部が内湾しながら立ち上り，口縁部が外反する器形で，体部中位に段を持ち，口縁部が波状口縁となるものである。98は，口縁部がごく一部しか残ってなく復元図が平縁で作成してあるが，実際は波状口縁になる。高台の削り出しは粗雑なもので，高台内側のみを削り込み，高台外側はロクロナデかわずかに削るだけで，いわゆる碁笥底状になる。

３ｄ類(101)は，体部が強く内湾して立ち上り，口縁部が屈曲して直線的に外方に開く器形である。内面には明瞭な段を有し，内底面は平坦で目跡は残らない。底部は厚味があり，高い高台を有する。施釉は内面全体と外面は体部と高台の境までである。１点のみの出土。

３ｅ類（102～108）は，体部がやや内湾しながら立ち上り，口縁部が一度外に折れて，さらに端部が内湾して短く立ち上る器形のもので，いわゆる溝縁皿である。内底面には大きめの砂目が残り，施釉範囲は３ａ～３ｃ類と同様である。106は口縁端部に煤状炭化物が付着している。

109～117は，３類の底部破片である。内底面に３～４個の大きめの砂目跡が残る。109の底部高台内側に墨書があるが，判読できない。

皿４類（118）　灰色を呈する灰釉が施釉され，内底面を蛇の目釉剝ぎするものである。１点のみ出土している。胎土は比較的細かく，高台を逆三角形状に削り出すもので丁寧な作りである。口縁部等の形態が不明であるが，砂目積期に後続するものであろう。

皿５類（119・120）　ほぼ水平に開く体部が折れて口縁部が垂直に立ち上る器形で，向付と称され

るものである。内面全体と体部外面中程までに，やや透明感のある灰釉が施釉され，削り出し高台及び底面は無釉となる。出土量は少い。

椀（128～161）　器形の違いにより4類に分け，そのうち1類については釉薬の違い・細部形態・装飾等によりさらに細分する。

椀1類（128～136・139～147・153～156）　体部が丸く内湾し，口縁部がわずかに内湾するか，あるいは直線的にやや外上方に立ち上る形態で，いわゆる丸椀形のものである。釉は，藁灰釉・灰釉・鉄釉などがある。施釉範囲は，内面全体と体部外面下半部までで，高台を含めて底部は無釉となる。これらを1ａ～1ｅ類の5類に細分する。

1ａ類（128）は，口縁部を欠くが，体部が丸く内湾して立ち上る器形で，内面及び体部外面下半まで，濁白色を呈する藁灰釉を施すものである。高台の削り出しはわずかであり，無高台に近い。この藁灰釉を施すものは皿1ａ類に共通するもので，岸岳系唐津窯のみにみられ，唐津草創期の製品と考えられている。

1ｂ類（129～136・139・140）は，灰釉椀で体部が丸く内湾し，口縁部もわずかに内湾するか，少し外方に開きぎみに立ち上る器形のものである。釉調は，灰色・茶味灰色・緑灰色・暗緑色等を呈する。129･131は，胎土目積期に特徴的な暗緑色の灰釉を施す。139は灰釉椀の底部で1ｂ類の可能性が高い。140は内底面に灰釉と鉄釉の掛け分けがみられる。

1ｃ類（141～147）は鉄釉椀で，器形・施釉範囲等は1ｂ類と同様である。鉄釉の発色は黒色に近いもの，褐色のものなどがある。144～147は，口縁部を欠くが，1ｃ類の底部と考えられるものである。以上のうち，141については，高台が逆台形状で細長く，1ｄ類にやや近い形態を示す。

1ｄ類（154～156）は鉄釉椀で，体部大半が丸く内湾して，口縁部がほぼ垂直か，わずかに外方に開きぎみに立ち上る器形で，1ｃ類に類似する。ただし，底部は比較的薄く，逆台形状の高台を高く削り出すものである。1ｃ類より時期的に新しくなる。156は内面に乳灰色の長石釉を，口縁部内面と外面には黒褐色の鉄釉を施すものである。

1ｅ類（153）は鉄釉椀で，器形･施釉範囲等は1ｃ類に類似する。体部外面の鉄釉地の上に，白色の長石釉を幅3～4㎜程で，盛り上げるように波状文を描く，いわゆる「素麺手」と呼ばれるものである。底部は比較的厚手で，高台は断面四角形状に削り出す。

なお，137・138は口縁部がわずかに外反するものである。全形が不明であるため分類については保留にしておく。

椀2類（148～150）　体部がわずかに内湾しながら立ち上り，口縁部が内側にくびれ，端部が外反する器形の鉄釉椀で，いわゆる天目茶碗である。施釉範囲は内面全体と外面は体部中程までである。148・149は口縁部を欠くが，高台と体部下端との境に平坦部を削り出すもので，椀2類の底部になる可能性が強い。

椀3類（151・152）　体部下半が直線的に外上方に開き，体部中程で折れて，口縁部が垂直に立ち上るもので，いわゆる筒形椀と呼ばれるものであろう。内面全体と外面下半まで鉄釉を施す。底部は厚く，高台を削り出す。151・152は接合しないが釉調・胎土は似ており，同一個体の可能性が強い。

椀4類（157～161）　体部下半で屈曲し，口縁部が外上方へ立ち上る器形で，総釉となるものである。口縁部の形態は，ほぼ直線的に伸びるもの(157)，直線的に伸びて端部が外反するもの(158･161)，端部の形状は不明であるが，内湾しながら立ち上るもの(159)など若干のバラエティーが認められる。釉は，灰色・灰白色を呈するものがほとんどで，長石釉もしくは石灰釉と考えられるものである。高

台内も含めて全体に施釉されるものが多いが，158は高台及び高台内が無釉となる例外的なものである。高台は断面四角形状もしくはわずかに外に開く様に削り出す。

小椀（122～124）　口縁部が内湾して立ち上る小型の灰釉椀である。施釉は，内面全体と体部外面中程までで，体部下半及び底部高台は無釉となる。122は器高の低いもので，皿に分類することも可能である。

鉢（125～127・164・197）　125～127は鉄絵の描かれる灰釉小鉢である。内湾する体部が屈曲して口縁部は大きく外反する。口縁部は波状となる。施釉範囲は内面全体と体部外面中程までで，体部下半から底部にかけては無釉となる。口縁部内面には数本単位の縦線を引き，内底面には意匠不明の曲線文様を描く。164は全形が不明であるが口径約36cmの大型の灰釉鉢と考えられる。197も灰釉鉢である。

中・大皿（121・165・166）　121は，中型の皿である。灰釉の上に緑色釉の曲線文様を施す。口縁部は嘴状に強く外反する。削り出し高台を持ち，総釉で，内底面には砂目跡が残る。165は，体部破片のみであるが，灰釉に鉄絵を施す。166は鉢の可能性もある。透明感のある灰緑色の灰釉を施し，体部下半と底部・高台は無釉のものである。

壺（167～169・172・173）　167～168は灰釉，169は鉄釉の施されるもので，壺類の底部と考えられる。172は鉄釉の壺である。体部下半と底部・高台は無釉。内底面には胎土目跡が残る。173は全形が不明であるが，壺に分類しておく。体部外面に灰釉の上から鉄絵を施すもので，やはり体部最下部と底部高台は無釉となる。内底面の剝落部に鉄釉が流し込まれるのは，補修目的であろう。

瓶類（170・171・174）　170・171は，口縁部から頸部上半部に長石釉，頸部下半部以下は鉄釉を掛け分けるものである。174は鉄釉瓶で，内面には同心円状のあて具痕が残る。

片口（175）　灰褐色を呈する無釉の片口である。体部はやや内湾して立ち上り，口縁部は外に折れて肥厚する。口縁部下に注口部を設け，平底である。

甕（176～186）　176・177は同一個体の可能性が強い。口縁部は肥厚して上端部は幅広になる。内外面ともナデ調整し，外面全体と内面の一部に鉄釉が施される。口縁部上端は無釉で貝目跡が残る。178は鉄釉の甕である。口縁部は外に折れて肥厚する。体部内面には同心円状あて具痕がみられ，体上部には低い凸帯がめぐる。接合しないが182は178の底部である可能性が強い。179も鉄釉の甕である。口縁部は外に折れて肥厚する。口縁部上端及び内面は無釉で，一部に自然釉がかかる。口縁上端には貝目跡と考えられる痕跡が残る。体部上半には斜めの切り込みを入れた縄状の凸帯がめぐる。180～186は，甕の体部及び底部と考えられる。内面に同心円状あて具痕，外面に平行タタキ痕の残るものが目立つ。底部は平底で，ナデで仕上げる。184・185は同一個体と考えられる。

擂鉢（207～229）　形態から4類に分ける。

擂鉢1類（207～214）　口縁端部を内側に折り曲げ，尖らせるもので，断面形は鳥の嘴状になる。口縁部内外面のみに鉄釉を施し，他は無釉となるものが多い。卸目は少し間隔をあけて内底面から口縁部に向って引くものと，円弧を描き，交差させて引くもの（212）がある。卸目溝は広目で浅い。高台は削り出し高台となるものが多い。213・214は1類の底部と考えられる。

擂鉢2類（215）　口縁部内面が幅広に肥厚するもので，口縁部内外面にのみ鉄釉を施し，他は無釉となる。

擂鉢3類（216～222）　口縁端部外面が丸く肥厚し，玉縁状になるものである。口縁部内面には沈線もしくは段がめぐる例が多くみられる。口縁部内外面に鉄釉を施し，他は無釉となるものが多い。

内面の卸目は密に引き，上端位置を大体そろえてナデ消している。卸目溝は細く，やや深い。

擂鉢4類（223～229）　口縁部がわずかに肥厚して外反する器形である。底部・高台も含めて全面に鉄釉が施される。内面の卸目は密に引き，上端をそろえてナデ消すものがある。卸目溝は3類に比べ若干太く浅くなる。高台は付け高台で，229は体部下部に貼り付ける。

(2)　刷毛目唐津（第149・150図，図版73・74）

褐色の素地に白土を刷毛で塗り，縞状の文様を施す，いわゆる刷毛目のものである。器種は，椀・鉢・大鉢・甕がある。なおここでは褐色の素地に，線彫りや印花で文様を陰刻し，その上に白化粧土を施してこれをふきとる，いわゆる三島手のものも含めて報告する。

椀（187～194）　187は，体部下半で屈曲し，口縁部がわずかに内湾して立ち上る器形の椀である。内底面に印花をちらし，体部上半には刷毛目を施す。188は，長崎県現川窯で焼成された，螢手の椀である。光沢のある透明釉が掛けられ，胎土はきめ細かく硬質で，濃い褐色を呈する。194は体部下半にくびれのある腰折れ椀である。胎土は赤味をおびた淡褐色で，白化粧土はやや黄味をおびる。全面施釉であるが，高台下面の釉は剝ぎ取る。

鉢（195・196・206）　195は，口縁部が外反し，口縁端部が強く内湾する器形の小鉢である。内外面に同心円状の刷毛目を施す。196は浅鉢形で，口縁部を外側に折り曲げ，玉縁状にする。施釉は内面全体と体部外面中程までで，刷毛目の上から透明釉を掛ける。高台は高く削り出し，底部・高台は無釉である。206は口縁部がわずかに内湾しながら外上方へ直線的に開く器形の鉢である。高台を高く削り出し，体部下半から底部・高台は無釉となる。

大鉢（198～204）　口径26cm以上の鉢を大鉢とした。198は，内面に花弁と剣先状の陰刻を行い，灰釉を施す。体部外面下半には薄く鉄釉を掛け，その上に灰釉を流す。高台の下面と内面は無釉である。内底面には砂目跡が残る。

199～204は刷毛目の大鉢で，口縁部が外に屈曲し，端部が内湾して短く立ち上る器形である。刷毛目の上から，透明な灰釉をかけるが，外面は口縁部までで，体部以下は薄く鉄釉が掛かるか無釉となる。199・200は同一個体と考えられ，202・203の内底面には砂目跡が残る。204の刷毛目は白色と淡い灰褐色の二種の化粧土を用いる。口縁部周辺のみ厚めの鉄釉を掛ける。高台は逆三角形状に削り出す。

甕（205）　体部のふくらみは少なく，口縁部は直立ぎみになる。口縁端部は肥厚して水平に横に伸びる。高台は断面四角形の付け高台になると思われる。体部外面と口縁上面には刷毛目で文様を描き，この上に透明な灰釉を施す。内面は体上部から，外面は体下部から底部全体に鉄泥を施している。内底面には砂目跡，高台下面には胎土目跡が残る，いわゆる砂胎目積のものである。

(3)　京焼風唐津（第152・153図，図版75）

わずかに灰色味を帯びた黄白色を呈する胎土に，黄色味を帯びた透明釉を施すもので，いわゆる京焼風唐津と称されるものである。器種は，椀・皿・火入れが出土している。

椀（234～257）　体部が内湾して立ち上り，口縁部がほぼ直立する器形であるが，底部形態及び施釉の違いから1～3類に分類し，3類はさらに細分する。

椀1類（234・235）は，体部外面は下半まで，内面は全面に施釉するもので，削り出し高台と底部は無釉となる。底部は体部下半より厚く削り出す。234の底部には「清水」印が押される。

椀2類（236～246・253～255）は，角の丸い高めの高台を持ち，内外面底部も含めて総釉となる。全体にやや厚手の作りで，いわゆる呉器手と称されるものである。体部外面に沈線を巡らすもの(241)や，緑釉を施すもの（241～246）がある。253～255は2類の底部である。

椀３類（247～252・256・257）は，施釉範囲は１類と共通するが，底部の厚みは体部下半と同じ程度で，やや薄くなる。体部下半から底部にかけて，鉄泥を施す３ｂ類(251･252)と無釉の３ａ類(247･248・256・257）に細分できる。256の底部には「富永」の押印，257には墨書がある。

皿（230・231）　体部から内湾しながら口縁部が立ち上る器形で，内面全体と外面は体部下端まで施釉し，高台及び底部は無釉となる。高台は断面四角形に削り出し，底部は薄い。内底面には鉄絵で楼閣山水文を描く。

火入れ（232・233）　体部下半で屈曲し，口縁部がやや外方に直立する筒形の器形で，口縁端部内側は肥厚する。体部外面は下半まで，内面は口縁部付近のみ施釉され，他は無釉となる。233の体部外面には鉄絵で楼閣山水文が描かれ，底部中央には「小松吉」の印銘が押される。

(4)　銅緑釉系陶器（第153図，図版76）

佐賀県嬉野町にある内野山西窯などで焼成された銅緑釉系の陶器である。ほとんどが皿で，１点のみ鉢と思われるものがある。胎土は灰白色ないし明灰色を呈し，内面に緑青色の銅緑釉，外面には灰白色の灰釉を掛け分ける。

皿（259～277）　体部がやや内湾しながら立ち上り，口縁部が外上方に開く器形で，削り出し高台を持つ。内面及び口縁部にのみ緑青色の銅緑釉を施し，内底面を蛇の目釉剝ぎする。体部外面は下半まで灰白色の灰釉を施す。口径19cmをはかる１類（259・260）と，口径11～13.5cmの２類に分類できる。なお259・260は同一個体である。

鉢（258）　口径22cmの大型で，口縁部の立ち上り角度から鉢と考えられるものである。釉薬等は皿類と共通であるが，体部内面には薄く透明な鉄釉も施す。

(5)　小　　結

中世末～近世の唐津については，窯跡や消費遺跡での調査例が増加し，編年的な枠組みも固まりつつある。ここでは大橋康二氏の研究成果[注2]に基づき，唐津を

Ⅰ期（1580～1600年代）　　Ⅱ期（1600～1650年代）
Ⅲ期（1650～1690年代）　　Ⅳ期（1690～1780年代）
Ⅴ期（1780～1860年代）

の５期に区分する編年案を参考に，本遺跡出土の唐津についての時期比定を検討しておきたい。

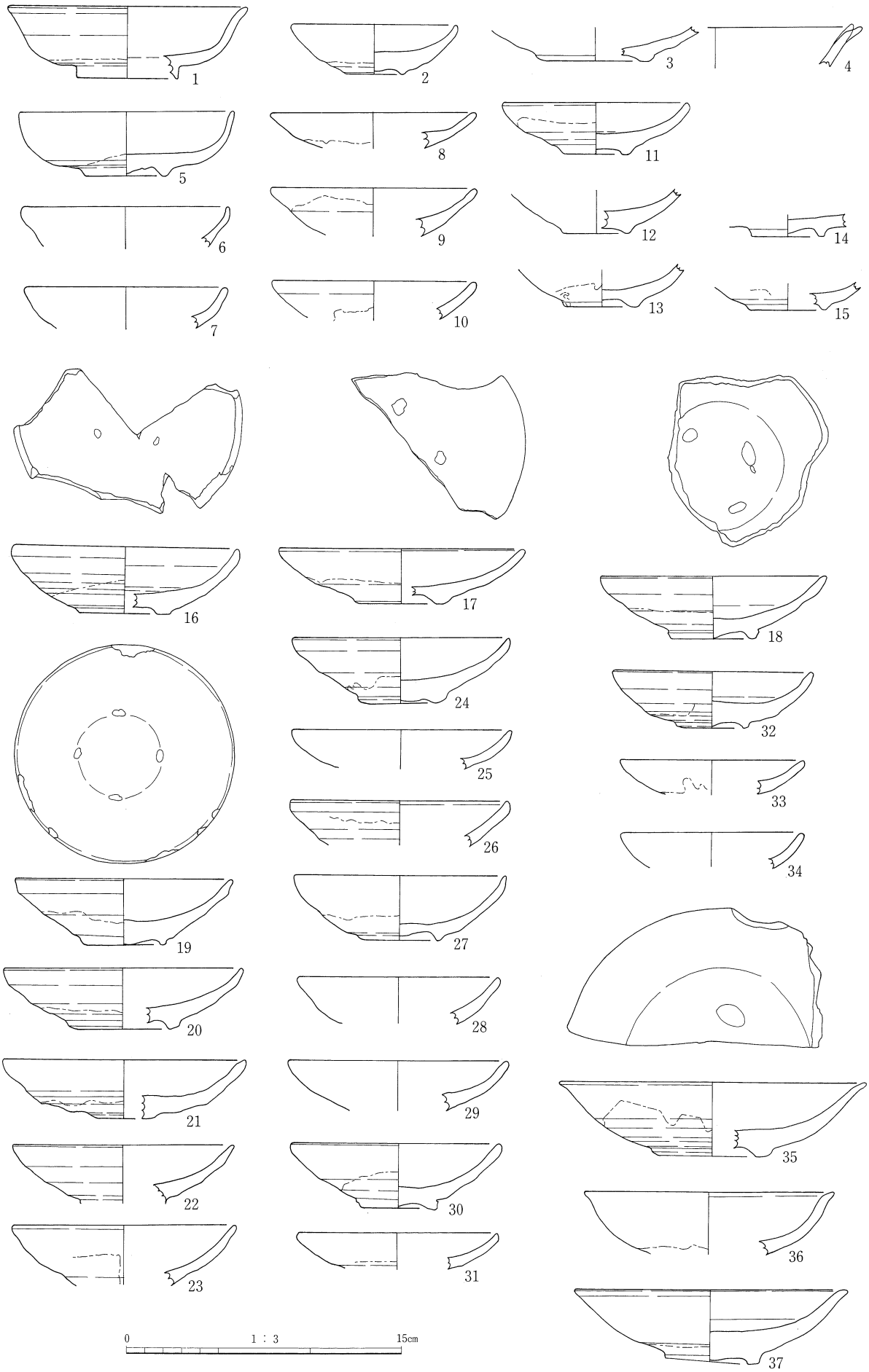
第Ⅰ期は，胎土目積の皿類が指標となる。これに該当するのは皿では１ａ～ｆ類・２ａ～ｄ類・５類など，椀では１ａ類・１ｅ類などである。他の器種では，鉄絵の小鉢，大型皿，壺，瓶，片口，甕などはほとんどがこの時期のものである。なお第Ⅰ期に限定できず，第Ⅱ期までの時期幅を考えざるをえないものに，椀１ｂ類・１ｃ類，椀２類，椀３類，小椀，擂鉢１・２類などがある。

第Ⅱ期は砂目積の皿類がその前半期の指標となる。この時期のものとしては，皿３類・４類（やや後出的），椀１ｄ類･４類，緑釉の中型皿などのほか，刷毛目椀のうち，内面印花を持つ三島手のものなどが該当する。

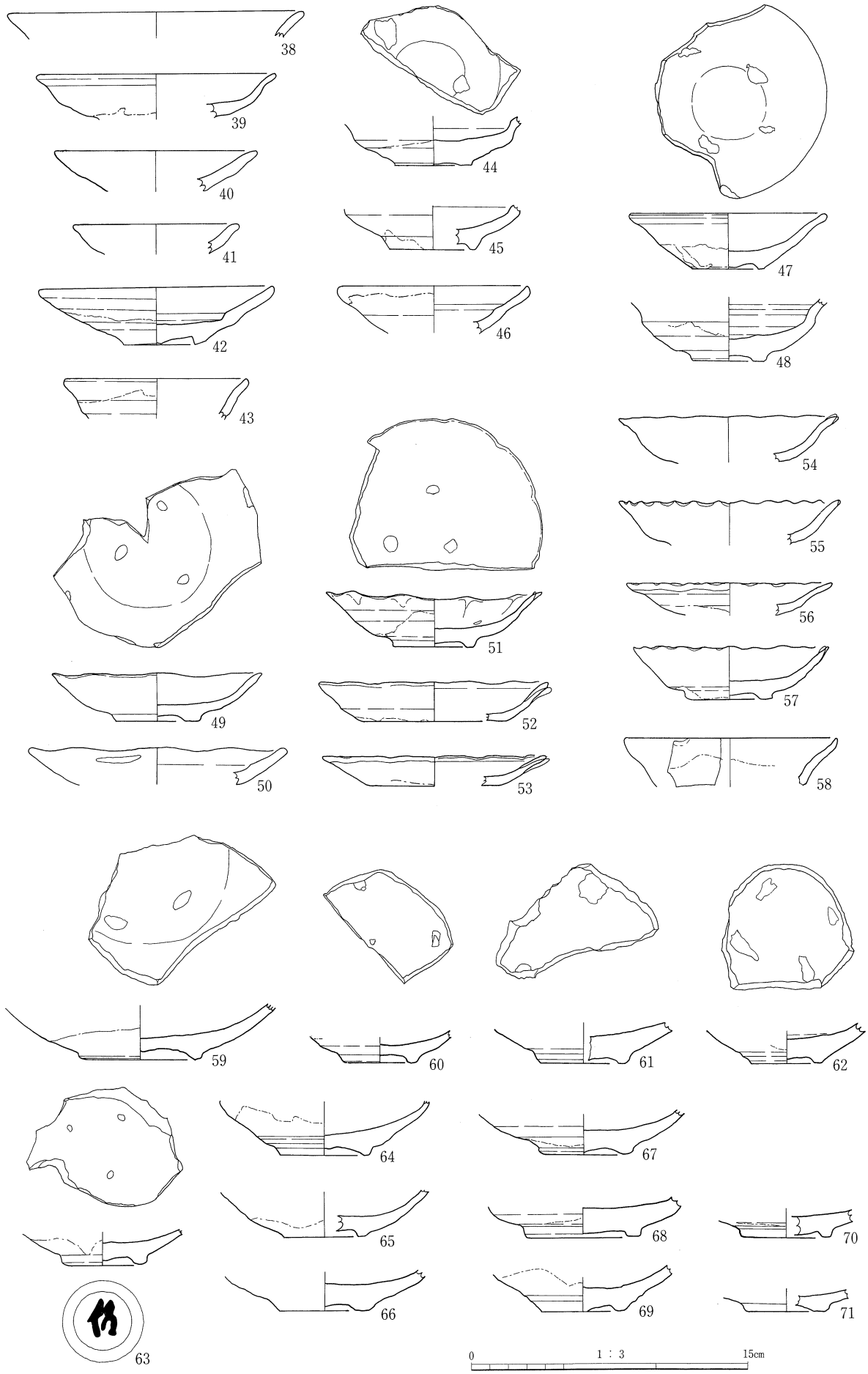
第Ⅲ期の唐津は，擂鉢３類，刷毛目大型鉢のうちいわゆる三島手のもの，京焼風唐津椀１類・２類などが該当する。その他の刷毛目椀，大型鉢類は第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけてのもので，時期幅を広く見ておく必要がある。

第Ⅳ期の唐津は，刷毛目の小・中型鉢，京焼風唐津の椀３類・皿・火入れ，内野山西窯系の銅緑釉系皿・鉢類が該当する。なお擂鉢４類についてはⅣ期からⅤ期にかけてのものである。（山本正敏）

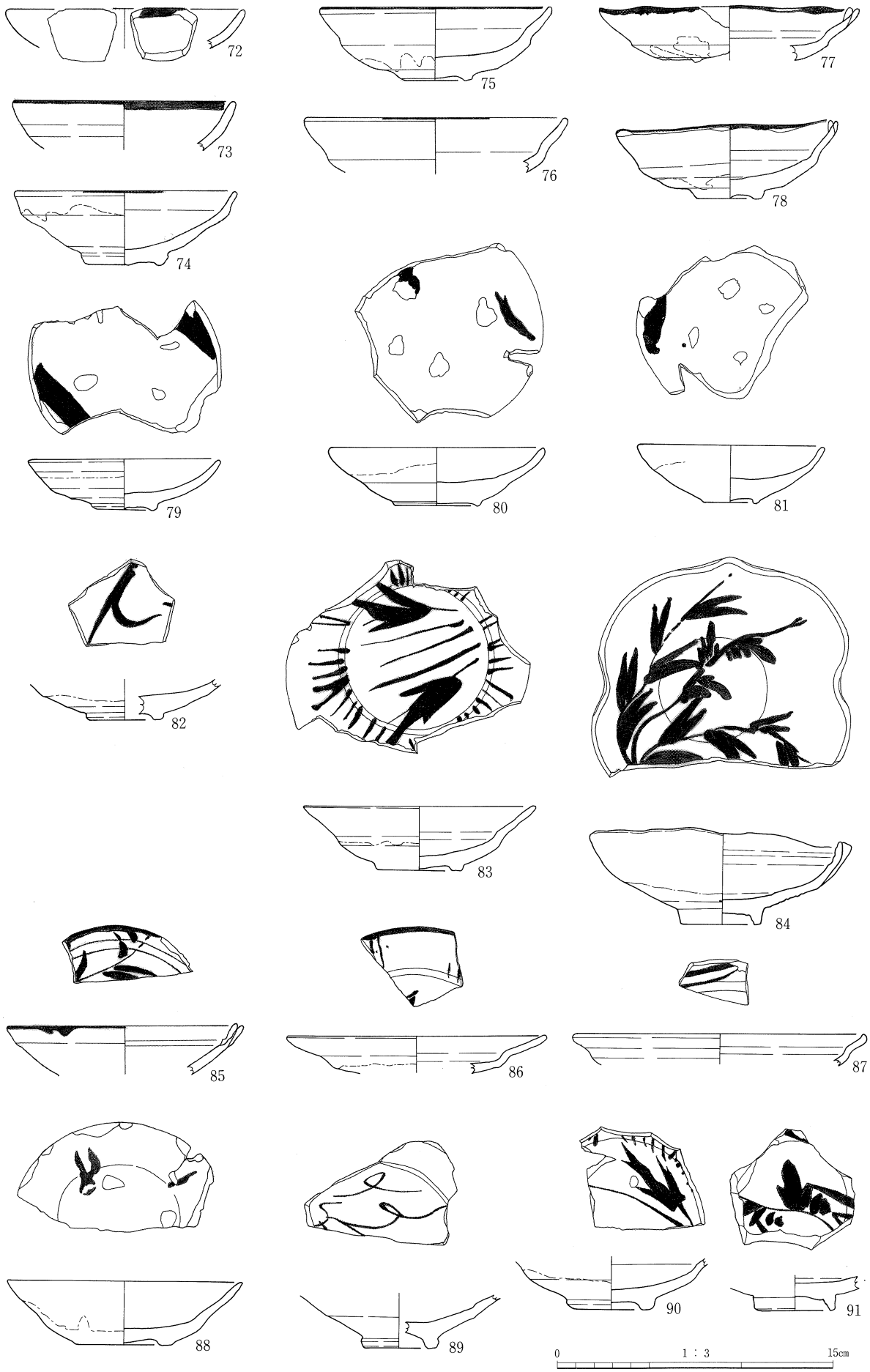
注１・２　大橋康二　1988　『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
1 : 3
15cm

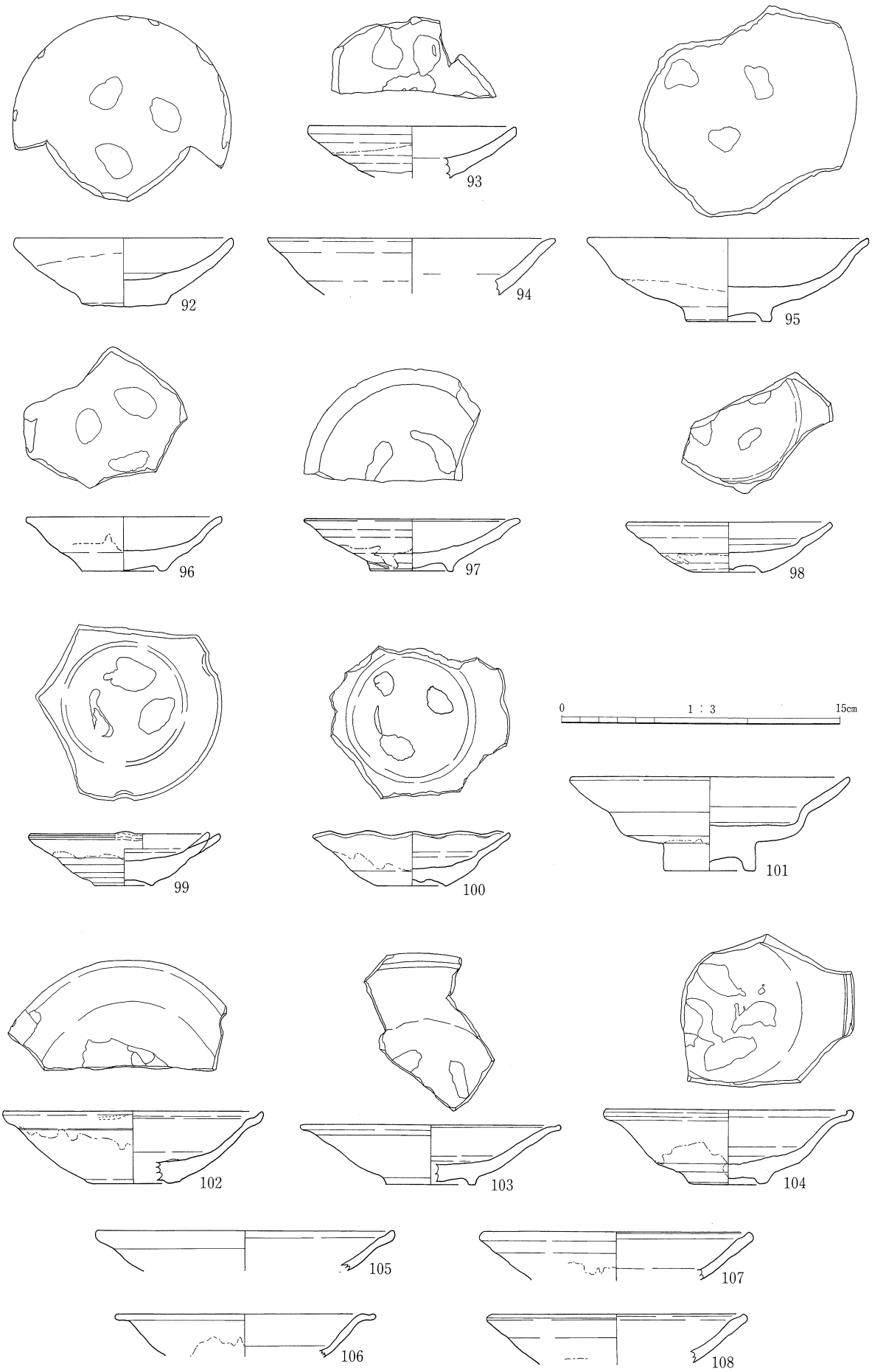
第142図　唐津１　(1/3)


38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
0
1 : 3
15cm

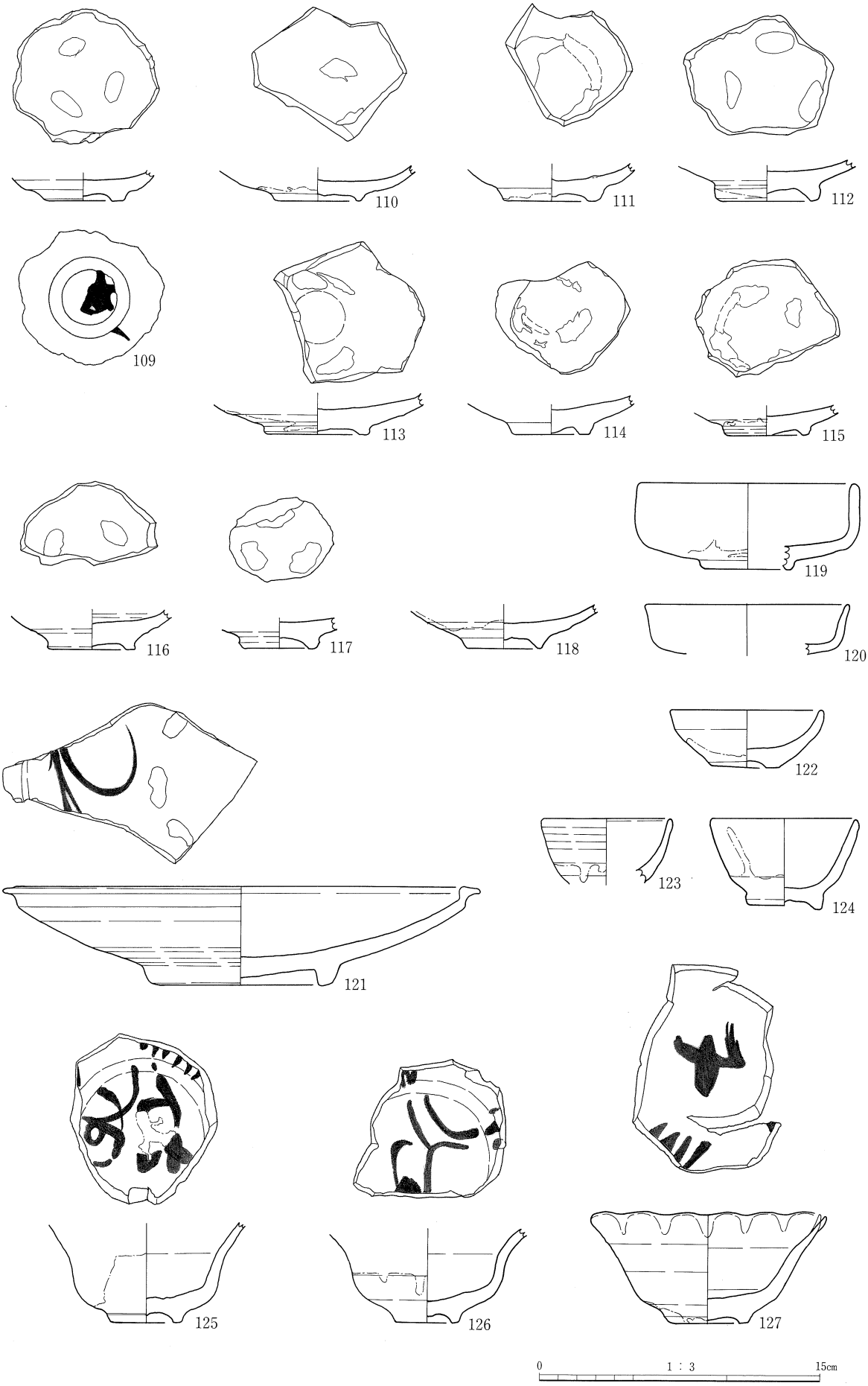
第143図　唐津 2　(1/3)



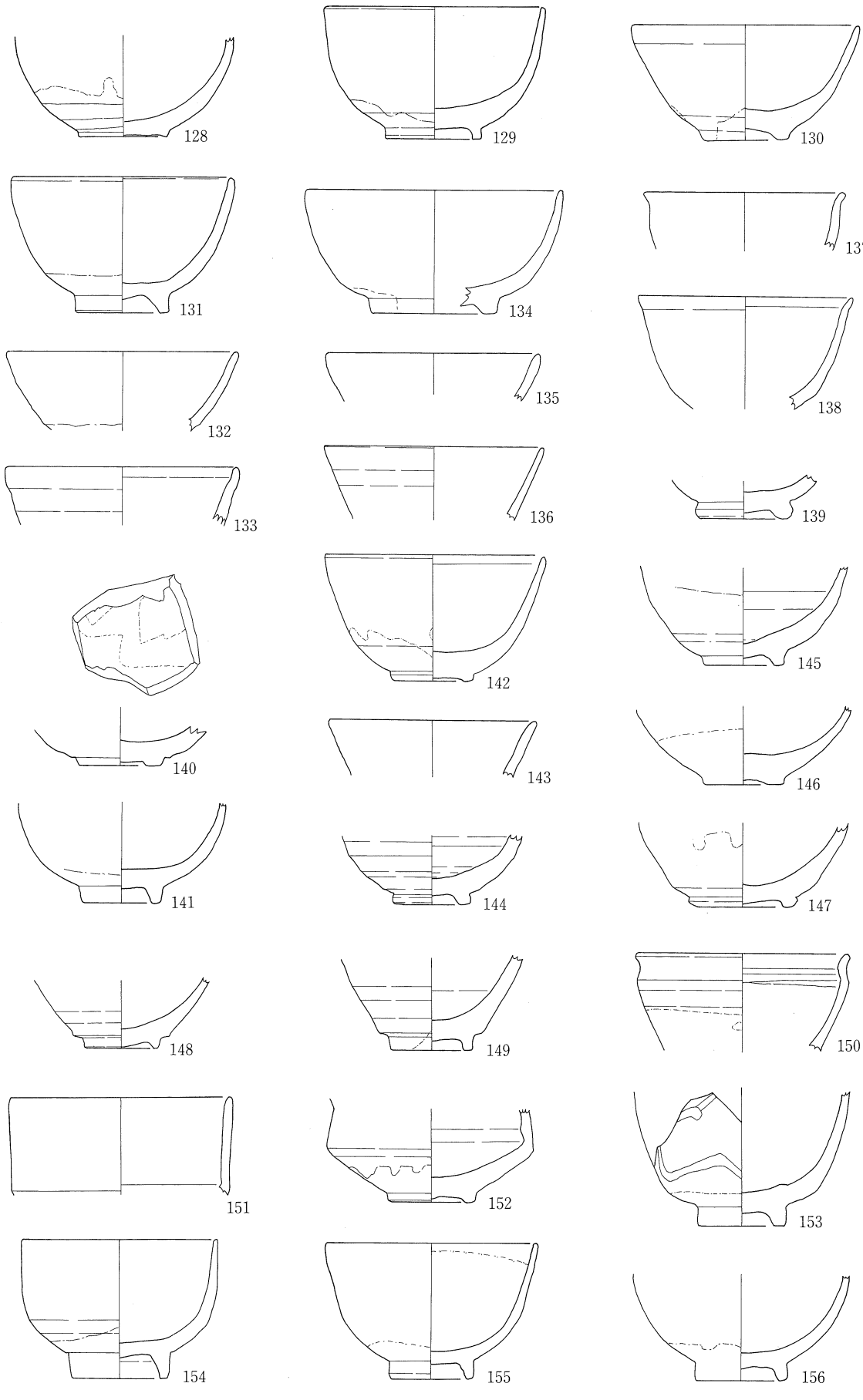
第144図　唐津 3　(1/3)


92
93
94
95
96
97
98
99
100
0
1 : 3
15cm
101
102
103
104
105
106
107
108

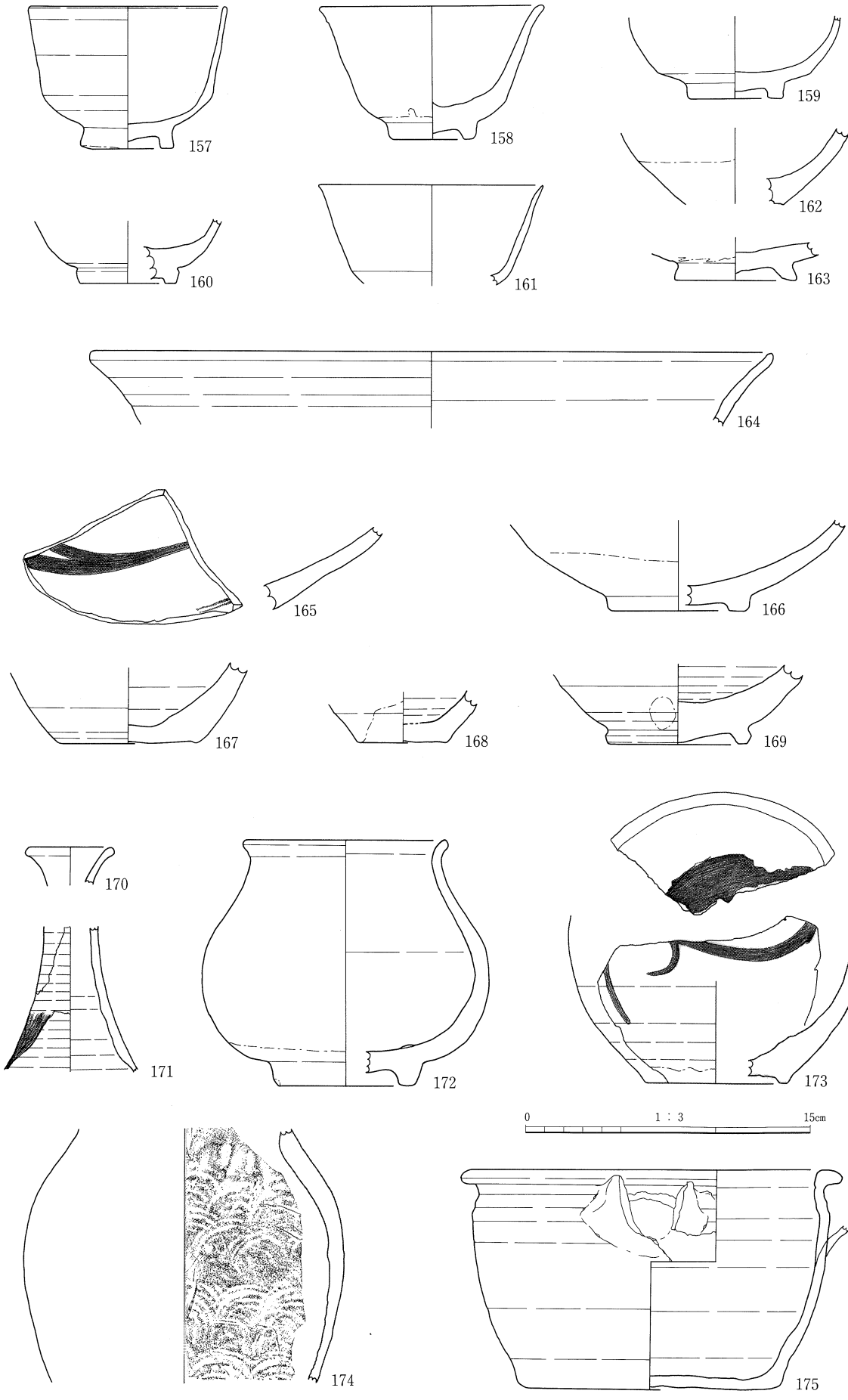
第145図　唐津 4　(1/3)


109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
0
1 : 3
15cm

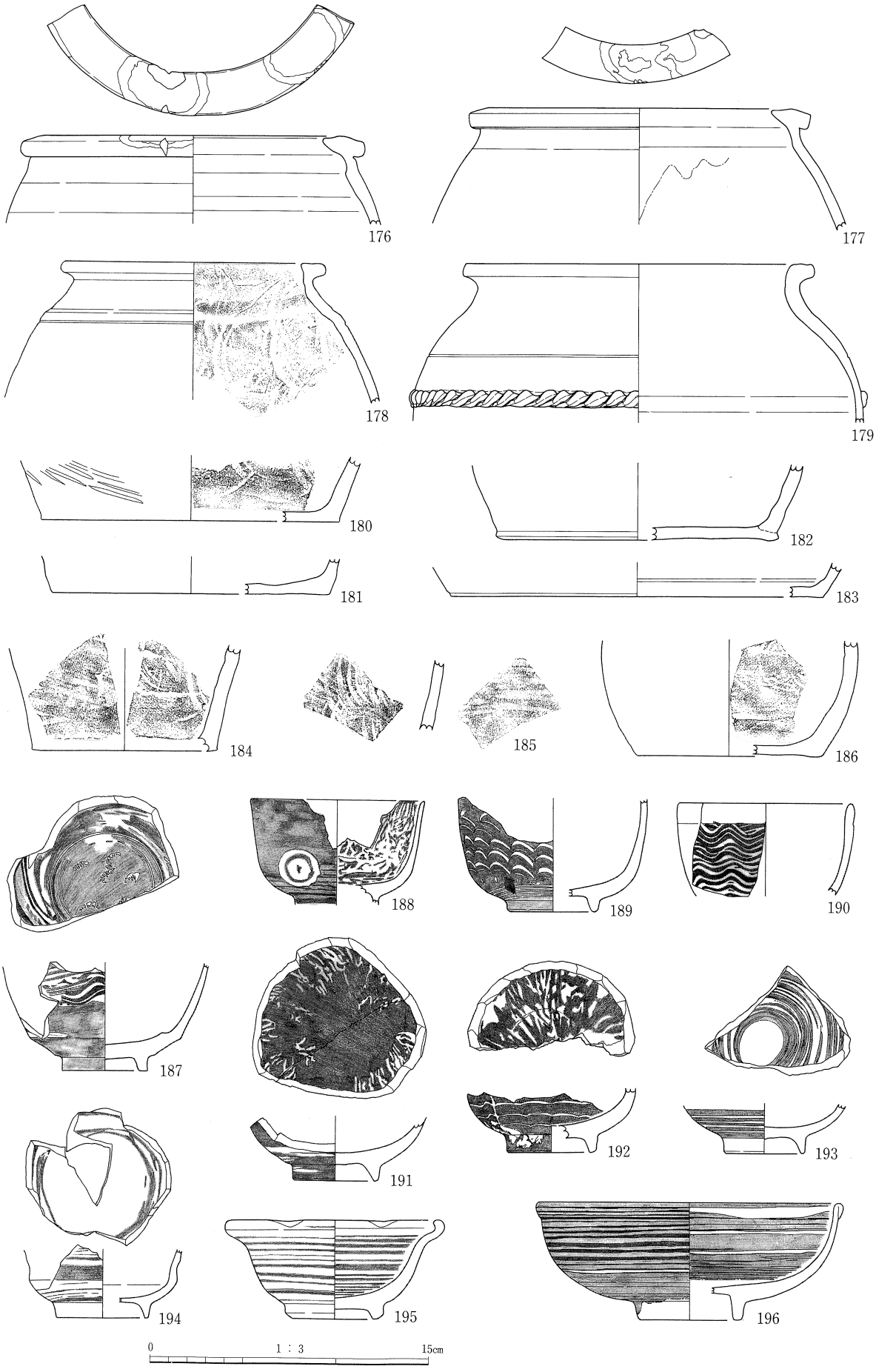
第146図　唐津 5　(1/3)


128
129
130
131
134
137
132
135
138
133
136
139
142
145
140
143
146
141
144
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
0
1 : 3
15cm

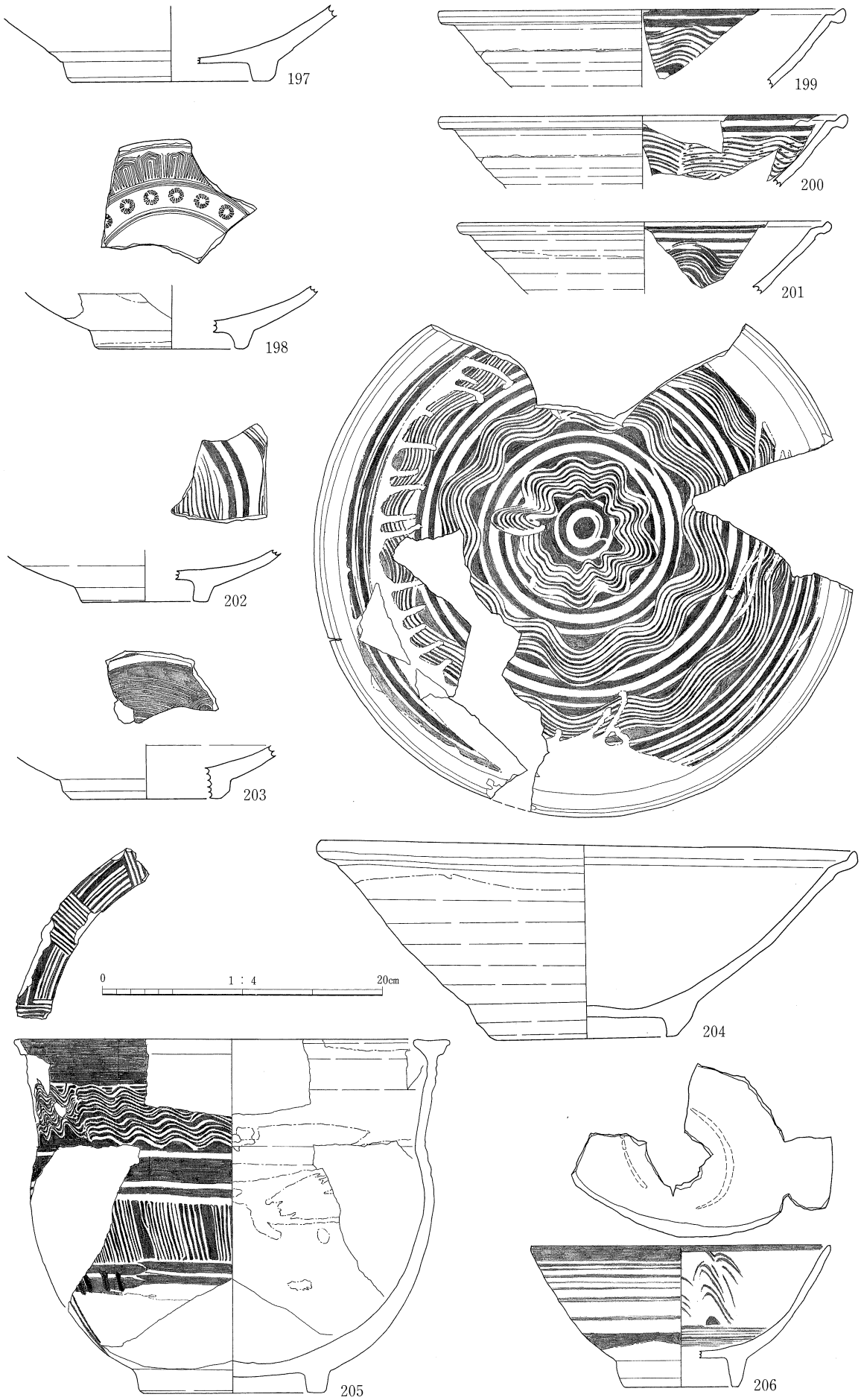
第147図　唐津 6　(1/3)


157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
0
1：3
15cm

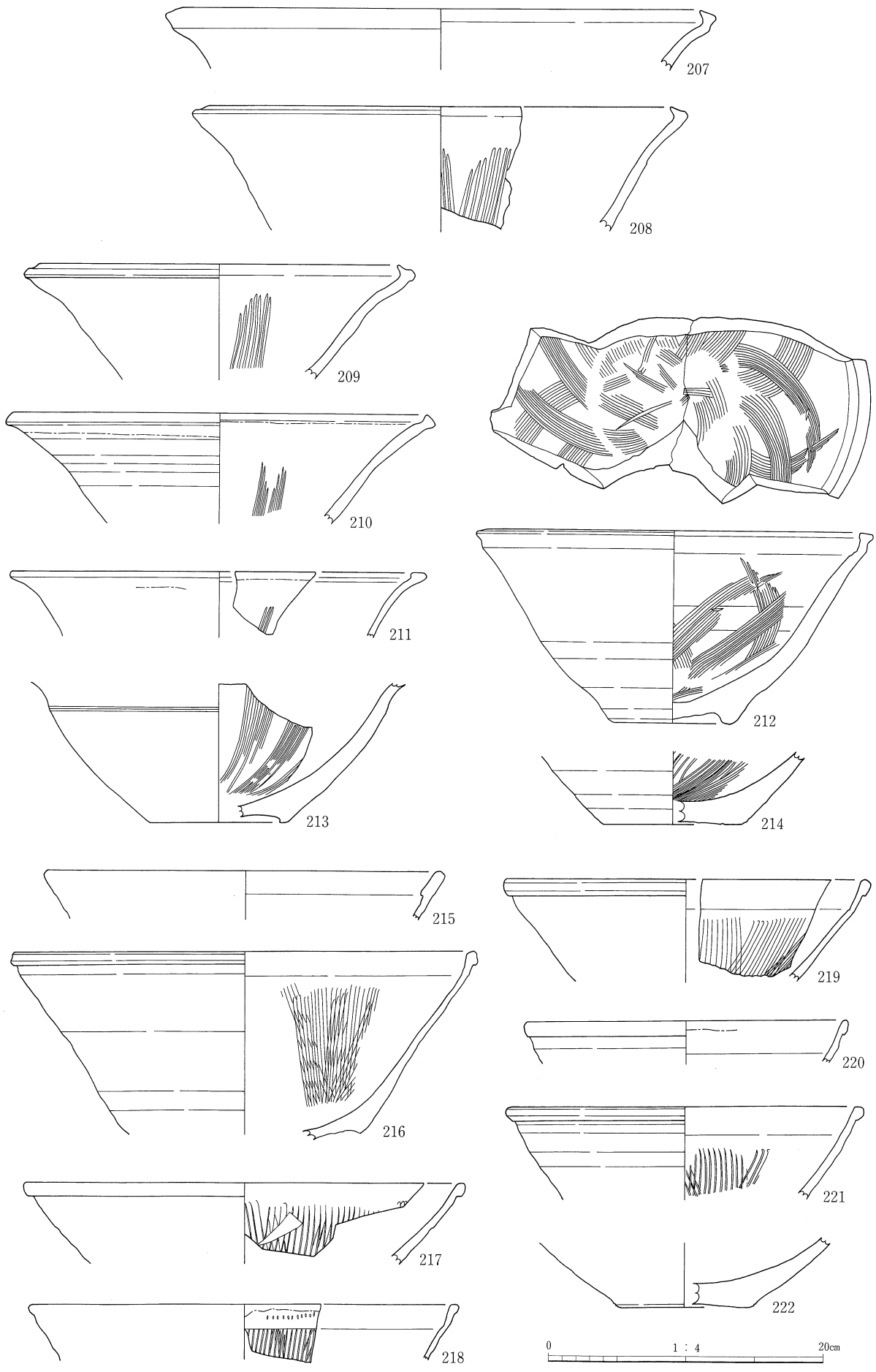
第148図　唐津 7　(1/3)


176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
0
1：3
15cm

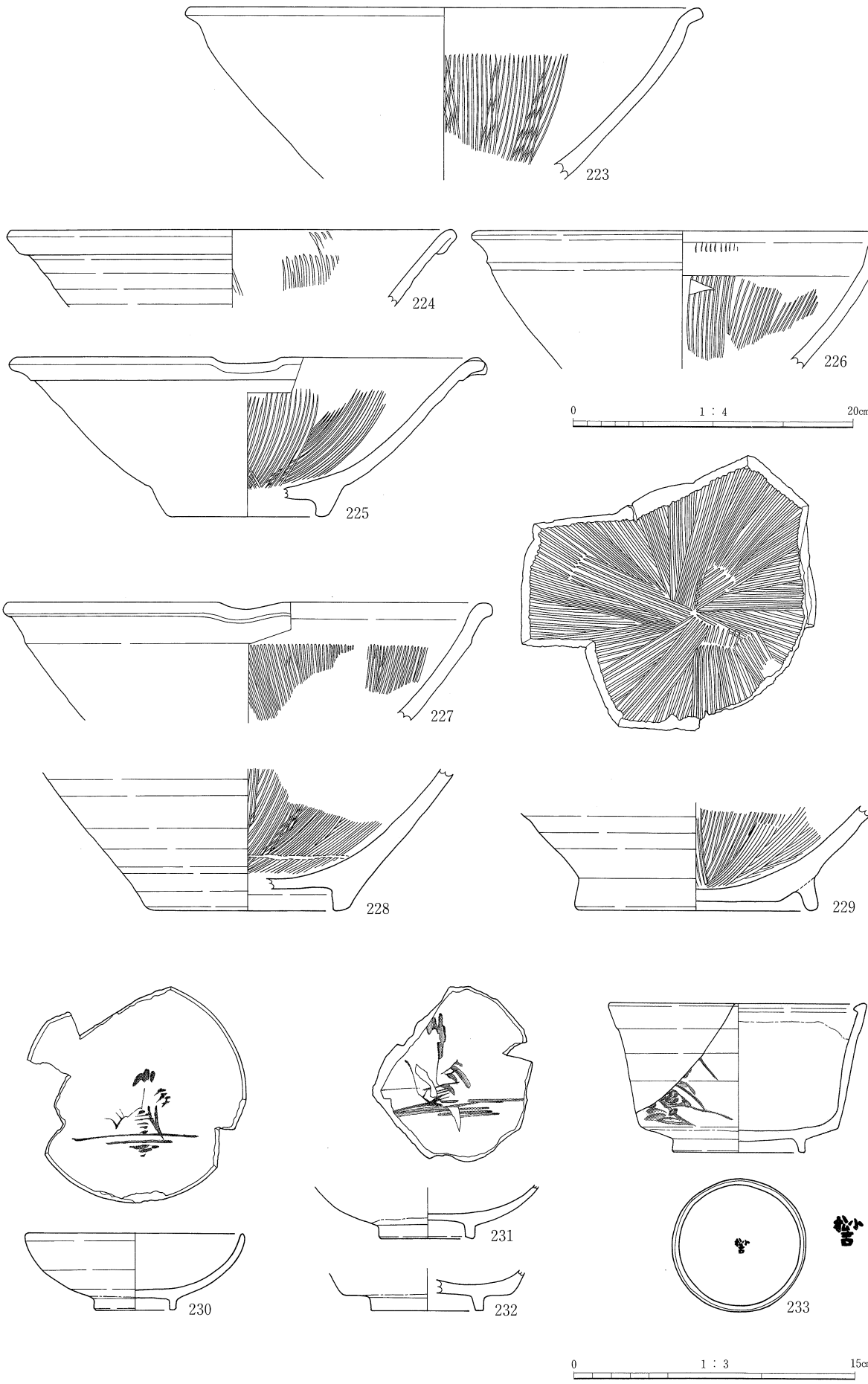
第149図　唐津 8　(1/3)



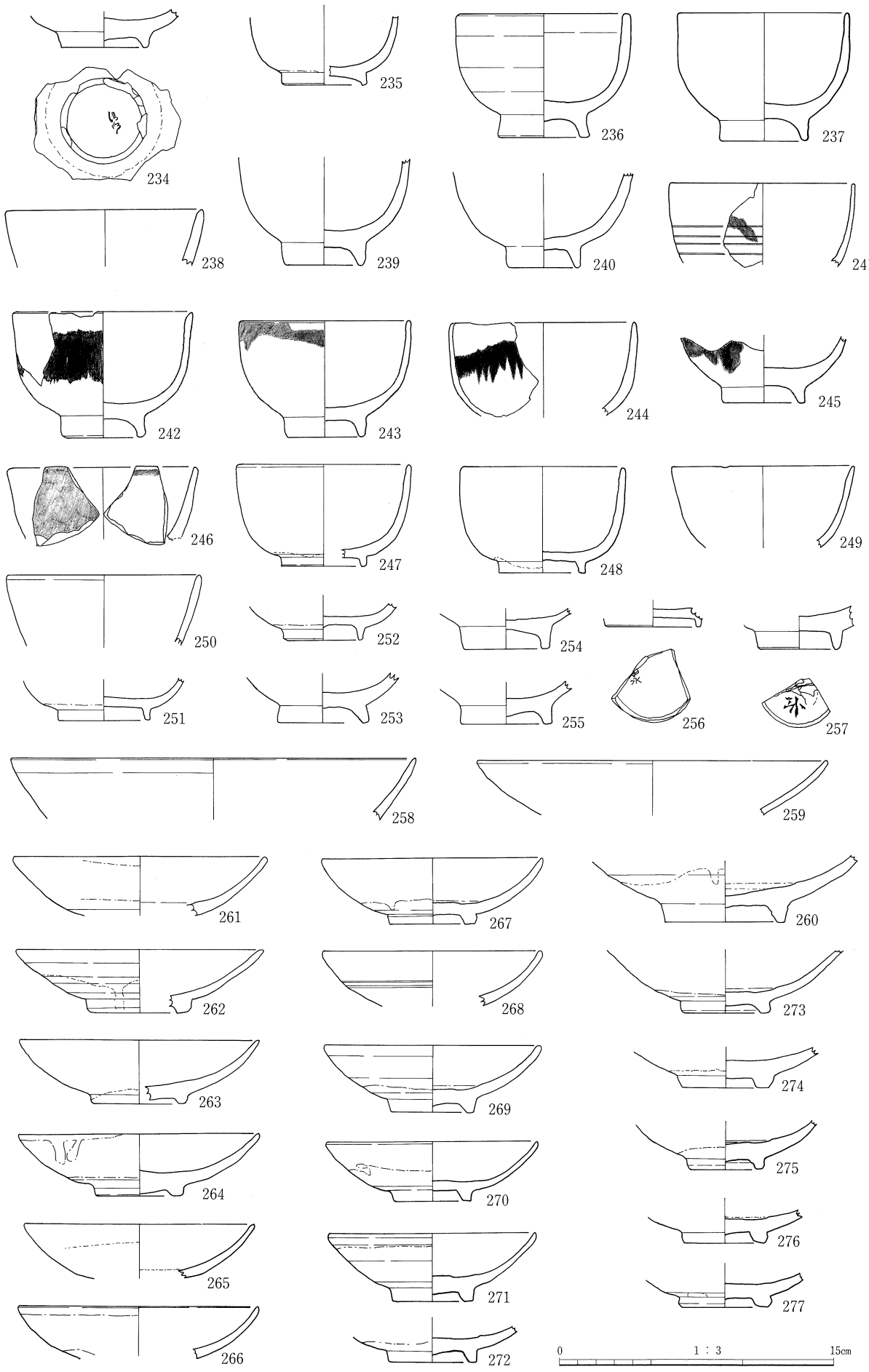
第150図　唐津 9　(1/4)



第151図　唐津10　(1/4)



第152図　唐津11　(223～229　1/4, 230～233　1/3)



第153図　唐津12　(1/3)

9．伊　万　里（第154～160図，図版77～84）

佐賀県有田町とその近隣の窯跡群で焼成された近世以降の染付・青磁・白磁等の磁器を一括して伊万里とし，報告する。出土した伊万里は種類が多く，時期幅もあるので，まず器種により大分類を行ったあと，碗・皿類については最近の編年的研究の成果[注1]に基づき大まかな時期区分を行い，各時期ごとに器形・文様・釉薬・焼成などで細分する。なお，陶胎の染付碗についてはここに含めておく。

碗（1～86）

Ⅰ群（1～8）　大橋康二氏による肥前陶磁編年の第II期にあたり，ほぼ17世紀前半の年代が推定される。Ⅰ群はさらに染付碗のⅠａ類（1～3）と，青磁碗のⅠｂ類（5～8）に分けることができる。1は呉須の滲みが激しく染付の意匠は不明。胎土は灰色を呈し，透明釉が掛る。3は外面に簡略化した山水図を描くもので，高台は逆三角形状に削り出す。灰白色の胎土に透明釉を内面全体と高台外側まで施釉し，高台下面から底面にかけては露胎となる。5・6は水色の青磁釉を掛ける。7は水色の青磁釉を施すもので，高台下面から底部内側にかけては露胎となる。8は外面と口縁部内側に灰緑色の青磁釉，内面には透明釉を掛け分けるものである。

II群（9～14）　II群は同じく第III期にあたり，17世紀後半の年代が推定されるものである。染付碗のIIａ類（9～13）と，型紙摺り碗のIIｂ類（14）に細分できる。IIａ類の染付は網目文様や草花文？を描く。

III群（15～22）　III群は同じく第III期後半から第IV期前半にあたるもので，17世紀末葉から18世紀前葉の年代が与えられよう。いずれも染付碗で，高台径が比較的大きく，腰の張った体部が直立する器形のものである。15は草花文，16・17は風景を描く。18は高台内側に銘款を施す。

IV群（23～52・62～71）　IV群は同じく第IV期にあたるもので，染付の種類も多く，1類から5類まで中分類し，それぞれをさらに細分する。

IV1類（23～31）は，いわゆる陶胎染付のものである。胎土は茶灰色や灰色ないし暗灰色を呈し，陶質で，灰味を帯びた厚い透明釉が掛かる。これも染付絵柄と器形から3類に細分できる。IV1ａ類（23～26）は，体部が内湾して口縁部がほぼ直立する器形で，口縁部外面に斜格子と体部に草花文を描く。IV1ｂ類(27～29)は器形はIV1ａ類と同じであるが，やや小型になり体部外面に非常に簡略化した唐草文を描く。IV1ｃ類（31）は体部中程がくびれる器形の碗で，口縁部外面に草花文が描かれる。

IV2類（32～44）は，文様装飾技法としていわゆるコンニャク印判を用いる染付碗である。これも器形の違いでａ～ｄの4類に細分する。IV2ａ類（32～36）は，高台径が大きく，体部下半が張り，口縁部が直立する器形のものである。体部外面に菊花・若松・松・団鶴などのコンニャク印判が施される。32は染付草花文様と並用され，高台内に銘款を入れる。IV2ｂ類（38～42）は，高台径がやや小さくなり，体部下半が丸みを持って立ち上る器形である。底部はやや厚手の作りとなり，銘款はみられない。コンニャク印判は松と団鶴が多い。IV2ｃ類（43）は，さらに高台が小さくなり，全体に小型化する。IV2ｄ類（44）は，体部が外上方に開く器形で口径が大きく，浅碗型のものである。外面のコンニャク印判は藤花である。IV2ａ類は，17世紀末葉から18世紀前葉，IV2ｂ類は18世紀前葉，IV2ｃ・ｄ類は同中葉から後葉と，時期差が考えられる。

IV3類(45～50)の染付碗は，波佐見窯系のいわゆる「くらわんか碗」である。製作年代は1700～1780年であるが，49・50はやや後出的で18世紀後半のものである。体部が丸く内湾し，口縁部が外上方に開く器形で，体部外面に梅樹文（45～48），丸文（49･50）を描く。49の内底面にはコンニャク印判に

よる五弁花が施される。51・52は白磁碗の小片で，染付になるかもしれない。

Ⅳ4類（62～64）は外面青磁の染付碗である。器形の相違からⅣ4ａ類とⅣ4ｂ類に細分する。Ⅳ4ａ類（62）は体部が内湾するいわゆる丸碗の形態のもので，外面には青磁釉，内面及び高台内には透明釉を施す。内底面には筆書きの五弁花，底部高台内には崩れた「福」字が描かれる。Ⅳ4ｂ類（63・64）は体部下半で屈曲し，口縁部が直立する筒形碗である。外面には青磁釉を，内面及び高台内には透明釉を施す。いずれも口縁部内側に四方襷文を描き，63の内底面にはコンニャク印判による五弁花が施される。

Ⅳ5類（65～68）はⅣ4類に似るが，やや小型化し，外面も透明釉となる染付碗である。これも丸碗になると思われるⅣ5ａ類（65）と筒型碗になるⅣ5ｂ類（66～68）に細分できる。65は口縁部内側に四方襷文を描き，66は外面に松木と草，67・68は矢羽を描く。Ⅳ5類は18世紀後半から19世紀にかけての年代が想定されるものでⅣないしⅤ期に属する。

69～71はⅣ4・Ⅳ5類の底部である。筒型碗の器形になると考えられ，内底面にはコンニャク印判による五弁花，69には崩れた「福」字の裏銘が施される。70の裏銘は判読困難であるが「筒江」かもしれない。

Ⅴ群（53～61・72・84）　大橋康二氏の肥前陶磁器編年の第Ⅴ期にあたり，実年代は1780～1860年が考えられるものである。これもⅤ1類～Ⅴ4類に細分する。

Ⅴ1類（53～61・72～74・76・77）は，体部が丸く内湾し，口縁部がわずかに内湾ぎみに直立する器形で，高台は小さく，全体に小振りのものである。体部外面には松文（53），楼閣山水文（54），竹笹文（55），人物と竹笹文（56），梅文（57），草文（72･73），蕪文（74），矢羽状文（76），草花文（77）などが描かれる。内底面には，太陽文（72・73），昆虫文（74），五弁花（77）などが描かれる。これらのⅤ1類については，18世紀末葉～19世紀初頭の製作と考えられる。

Ⅴ2類（78）は，薄手の作りで，丸碗と広東碗の中間的な形態である。外面には暦文が描かれる。

Ⅴ3類（79）は，広東碗型のものである。体部は高台脇から直線的に外上方に立ち上り，細く高い高台を持つ。体部外面には捻り花弁文，内底面には崩れた「寿」字文を施す。19世紀前半の製作と考えられる。

Ⅴ4類（80～84）は，体部が丸く内湾して立ち上り，口縁部がわずかに外反ぎみに外上方に伸びる器形である。高台はやや高く削り出す。80は，外面に簡略化した唐草文？内底面に崩れた花文，81・82は外面区画内に意匠化した「寿」字文，内底面にも崩れた「寿」字文を描く。内底面にはハリ跡が残り，外底面には数字状の墨書が記される。83･84はやや小型の器形であるが草葉文（83），斜格子文（84）が描かれる。これらⅤ4類については，19世紀前葉から幕末頃の製作である。

Ⅵ群（85・86）　85は内底面を蛇の目釉剝ぎし，高い高台を持つものである。86は筒型の器形で，外面に草石文を描く。いずれも明治時代以降の製作である可能性が高い。

蓋付碗（87～91）　蓋と共通の染付文様が描かれるため，蓋付であることが確かなものを蓋付碗と分類した。すべて共通の図柄で，おそらく組み物であったと思われる。体部は丸味を持ち，口縁部がわずかに内湾しながら立ち上る器形である。口縁内側に四方襷文，外面には草花文と縞状文，内底面には木葉文を描く。91は焼き継ぎ痕の残るもので，底部高台内に朱墨書で「か八」と記される。これらは，18世紀後半代の製品と考えられる。

蓋（92～95）　92・93は87～91の蓋である。94は外面に波濤文と菊花文，口縁内面には四方襷文，内面中央に木葉文を描く。95はつまみ部の径が大きくなり，体部が直線的に外に開く器形のもので，

おそらく広東碗の蓋になる。つまみ内に鳥文，口縁部外面に風景文，内面中央には簡略化した山水文が画かれる。19世紀前半代の製作と考えられる。

皿（96～127）

皿も肥前陶磁の５期区分に従い，Ⅰ～Ⅴ群に大分類し，さらに器形や文様等で細分する。

Ⅰ群（96～100）　５期区分の第Ⅱ期（1610～1650年代）に焼成されたもので，出土数量は多くない。96・97は染付皿の小破片。98は内底面に菊花弁を描く，菊型皿である。高台内側も含めて総釉で，高台下面には砂が付着する。99は内底面に山水文を描くものである。100は青磁の中型皿で，内面にヘラ彫りで蕪？を描く。全面に淡い灰青色の釉が掛り，高台下面は釉剝ぎされる。高台周辺には砂が付着し，胎土は灰白色を呈する。

Ⅱ群（101～111）　同じく５期区分の第Ⅲ期から第Ⅳ期前半期の製品で，白磁あるいは青磁釉の小型皿である。年代は17世紀後半から18世紀前半と考えられるもので，染付はない。器形は体部がわずかに内湾ぎみに外上方に開き，高台は外側を垂直に，内側を斜に削り出す。釉は内面全体と外面は体部下端まで施釉され，高台および底部は無釉となるものである。内底面は蛇の目釉剝ぎされる。釉調は白色透明もしくは淡い水色に発色するが，大きな違いはなく，区別は明瞭でない。便宜的に白色透明釉のⅡ１群（101～106）と，淡い水色青磁釉のⅡ２類（107～111）に分けておく。なお106の底部高台内には記号状（Ｔか）の墨書がある。

Ⅲ群（112～120･122）　肥前陶磁５期区分の第Ⅳ期でも後半期にあたり，18世紀後半代の年代が想定される。これも染付文様や施釉方法により２類に分類する。

Ⅲ１類（112～118）は，口径12～14㎝の大きさで，体部・口縁部はゆるく内湾して外上方に開く器形である。逆三角形状もしくは逆台形状の高台を削り出し，内底面には蛇の目釉剝ぎが行われる。文様は口縁部から体部にかけての内面にのみ染付され，外面は無文である。Ⅲ１類はさらに内面文様により，唐草文と内底面中央にコンニャク印判による五弁花が施されるⅢ１ａ類（112～114・117）と，二重格子文のⅢ１ｂ類（115・116）に細分できる。

Ⅲ２類（119･120･122）は，口径12～13.5㎝の大きさで，口縁部はⅢ１類に比べやや急に立ち上る。内面には草花文，外面には唐草文を描き，内底面中央にはコンニャク印判による五弁花，底部高台内には渦福字が記される。内底面に蛇の目釉剝ぎは行われず，高台下端に砂の付着するものがある。

Ⅲ１・Ⅲ２類はともに波佐見窯系の製品と考えられるが，Ⅲ２類はⅢ１類に比べやや丁寧な作りのものである。

Ⅳ群（121・123・124）　同じく第Ⅴ期の中でも前半期のもので，18世紀末葉から19世紀前葉期の年代が想定される。器形・文様からⅣ1類とⅣ2類に２分できる。

Ⅳ１類（121）は，断面逆三角形状の高台を持つもので，内面全体に松木文を描く。

Ⅳ２類（123・124）は，いわゆる蛇の目凹型高台を持つもので，体部・口縁部内面や，内底面中央に花文・三方割銀杏文・風景文を，外面には唐草文を描く。

Ⅴ群（125～127）　第Ⅴ期の後半以降のものを一括しておく。125は口縁部が外反し波状になる器形の中型皿で，内面に竹・花文を描く。呉須は一部に滲みがあり，輪郭がぼやける。高台内側にはハリ跡が２か所みられ，胎土塊が溶着する。佐賀県塩田町の志田山窯の製品と考えられる。126は口縁輪花の小皿で，内面に果実と蝙蝠，外面に唐草文を描く。127は内面に旭日を描く皿。内底面は蛇の目釉剝し，外底部は中央を凹ませて，断面四角形に近いしっかりした高台を持つ。125・126は，19世紀前葉から幕末にかけて，127は明治以降の製品と考えられる。

火入れ（128・129・131～134）　香炉との区別は厳密には不可能であるが，とりあえず，三足の付かないものを火入れとした。128･129は外面に鎬の入る青磁の火入れ。体部はやや内湾して立ち上り，口縁部内側が肥厚する。内面は無釉となる。128･129は接合しないが同一個体の可能性がある。131は陶胎染付で体部が直立する器形である。外面に雲文を描く。蛇の目高台を持ち，内面・高台・底部は無釉である。132･134も陶胎染付と考えられる。134は蛇の目高台を持ち，いずれも体部下半まで釉がかかり，内面と高台・底部は無釉となる。外底面高台内に墨書がある。133は外面青磁釉の火入れで，胎土は磁質である。蛇の目高台を持ち，無釉の内面にはロクロビキの痕が残る。以上の火入れは第IV期に属し，18世紀代の製品である。

香炉（130）　三足と円盤状の底部を持つ青磁の香炉である。体部は外方へ開きぎみに直線的にのび，口縁部は内側に肥厚する。釉は淡緑色を呈し気泡が多く入り，内面は無釉である。やはり第IV期の製品とみられる。

鉢（136～138）　136は口縁部が外反する器形の鉢もしくは片口になるもので，第II期の製品である。137は体部が外に開き，口縁部が短く直立する器形の鉢で，浅鉢型になると考えられる。外面青磁釉で，口縁部内面には帯状文を描く。138は中型の鉢で，口縁部が直線的に外反し，蛇の目凹型高台を持つ。外面は淡い青磁釉で，口縁部内側には波濤文，内底面には家屋・松・雲等を描く。底部高台内中央には「筒江長春」の銘款が書かれている。18世紀後半の筒江窯の製品である。

壺（135）　外面青磁釉を施す小型の壺である。暗青緑色の釉で貫入が多く入る。

そば猪口（139～141）　いわゆるそば猪口と称されるものである。体部は少し開きぎみに直線的にのびる器形の小鉢である。139は蛇の目凹型高台を持ち，口縁部内面に四方襷文，外面に草花文を描くもので，18世紀末～19世紀前葉の製品である。140・141は別図になっているが同一個体のもので，外面下部に交叉線文が描かれる。第IV期に属し，18世紀後半の実年代が想定される。

瓶類（142・143）　142は青磁瓶の口縁部と考えられる。143は染付の瓶で徳利形になろう。いずれも18世紀代の製品である。

小杯（144～149）　染付あるいは白磁の小杯である。144は内面と体部外面のみ施釉され，底部･高台は無釉となるもので，体部外面には蘭文様が描かれる。第II期の製品である。149は外面にコンニャク印判による紅葉が描かれるもので，第IV期に属し，17世紀末葉から18世紀前半にかけてのものである。他の小杯（145～148）もほぼ同時期のものと考えられる。

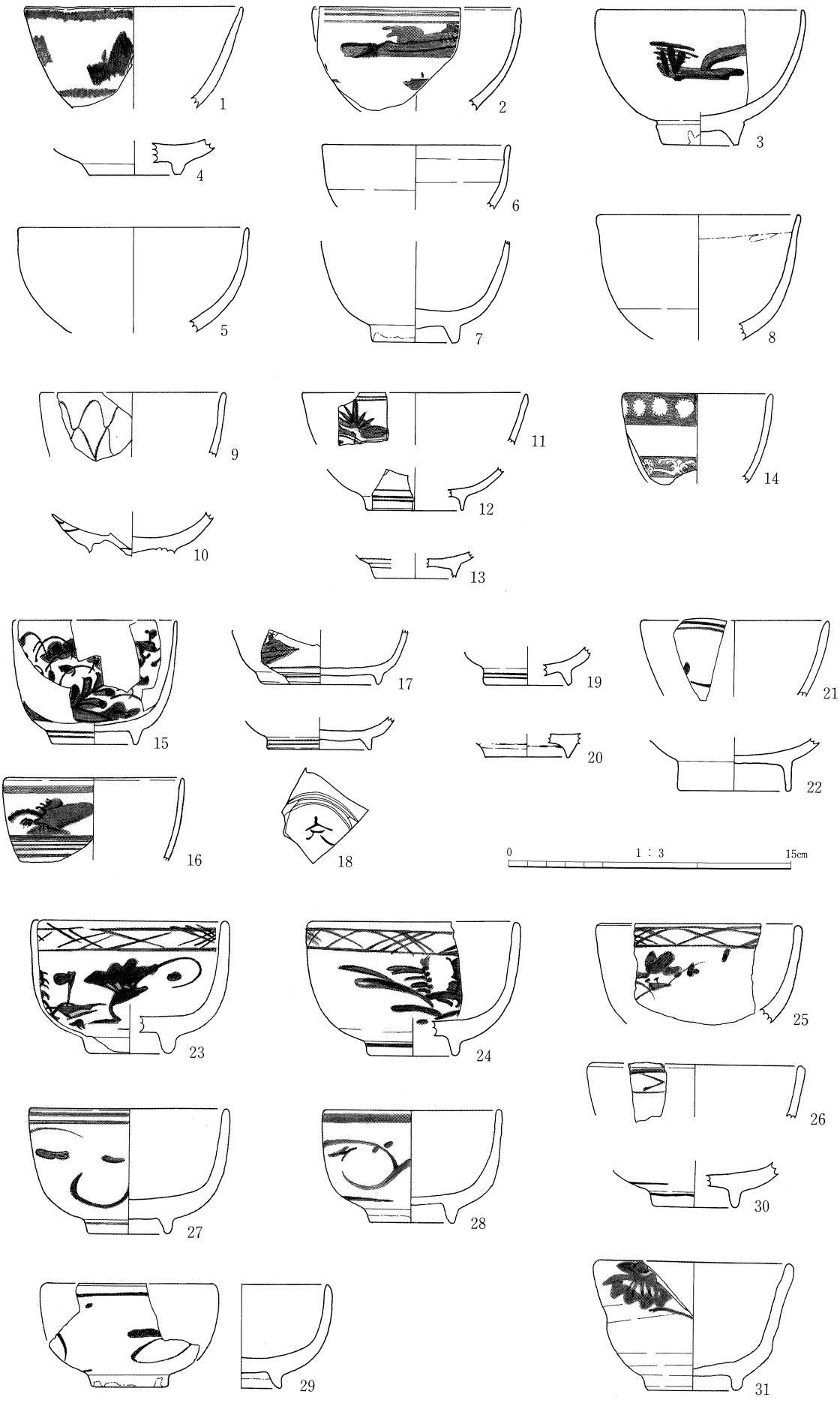
仏飯器（150･151）　小碗に高台の付いたものを仏飯器とした。150は淡い灰色味を帯びたオリーブ色の釉が施されるもので，下底面と高台下面は無釉である。151は透明釉の掛るもので，高台下面を除き総釉となる。いずれも第IV期に属し，18世紀代の製品である。

紅皿（152～154）　口紅や頬紅を入れる白磁の極小皿で，外面に型押しによる菊花を表す。口縁部が薄手の作りの152・153はIV期（18世紀後半），口縁部が厚みを持つ154はV期（19世紀初頭～幕末）のものである。

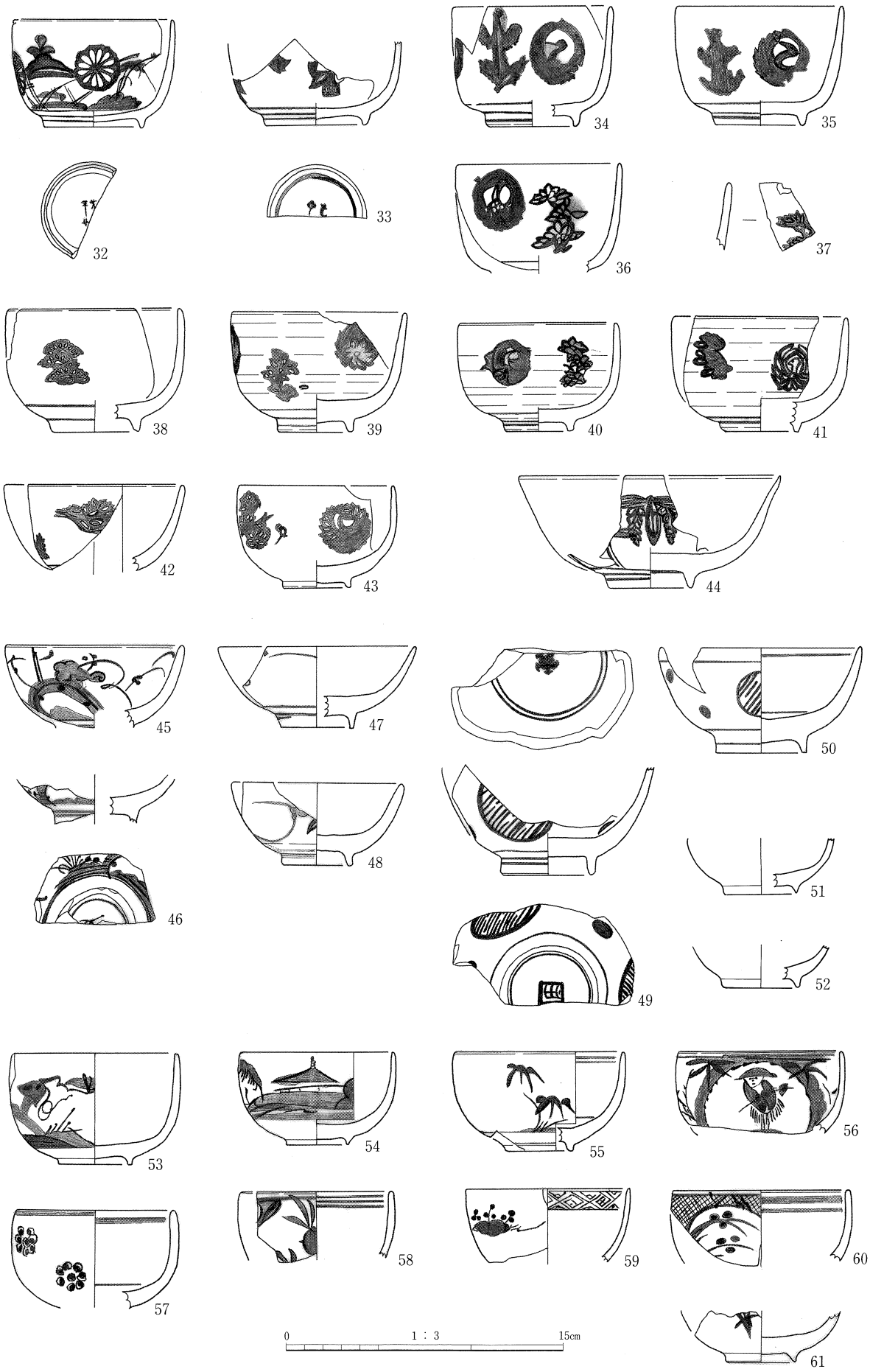
（山本正敏）

注1　大橋康二　1988　『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社

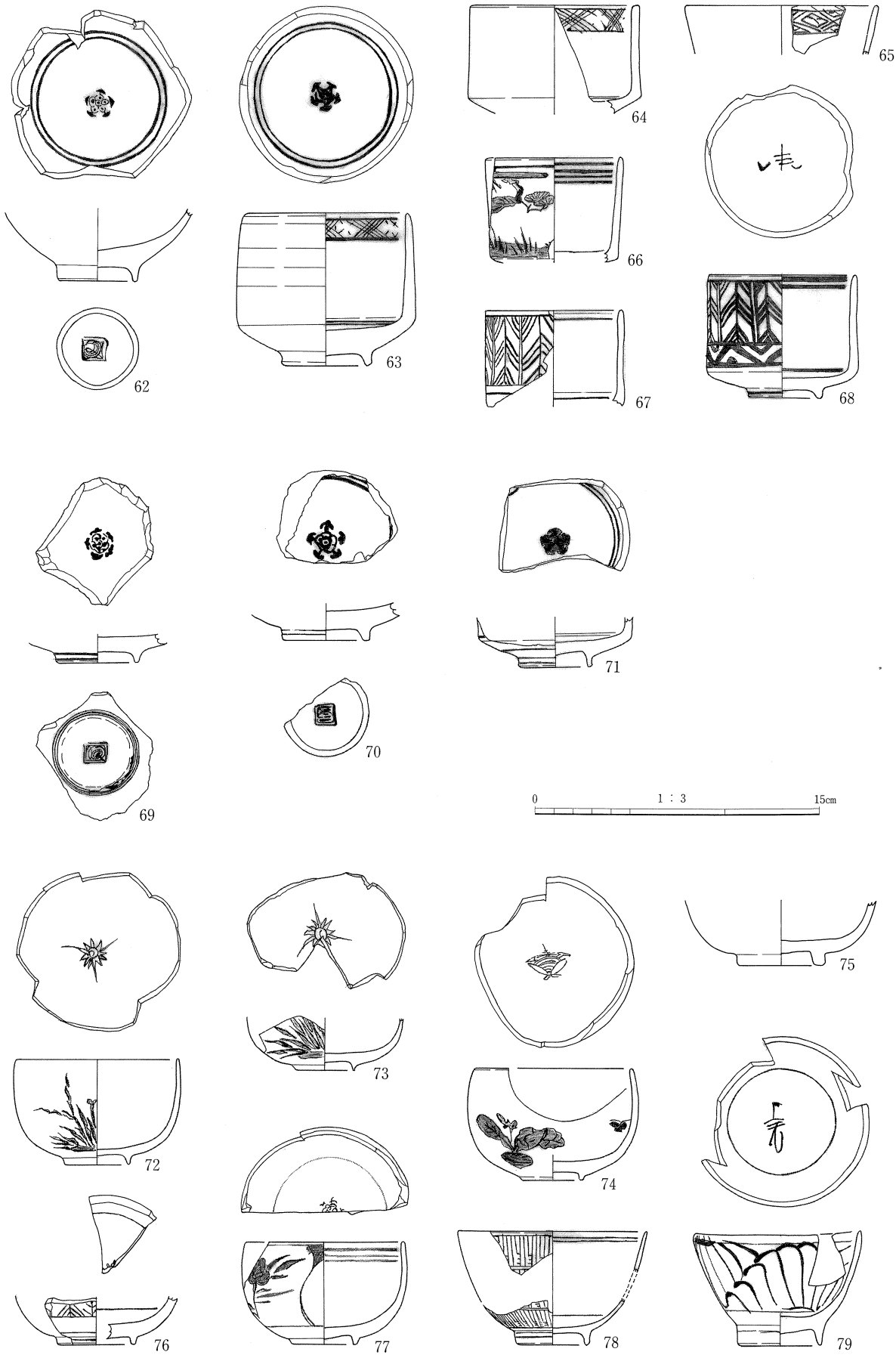
上記文献の他，大橋康二　1984　「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館，西田宏子・大橋康二他　1988　『別冊太陽　古伊万里』日本のこころ63　平凡社，を参考にした。



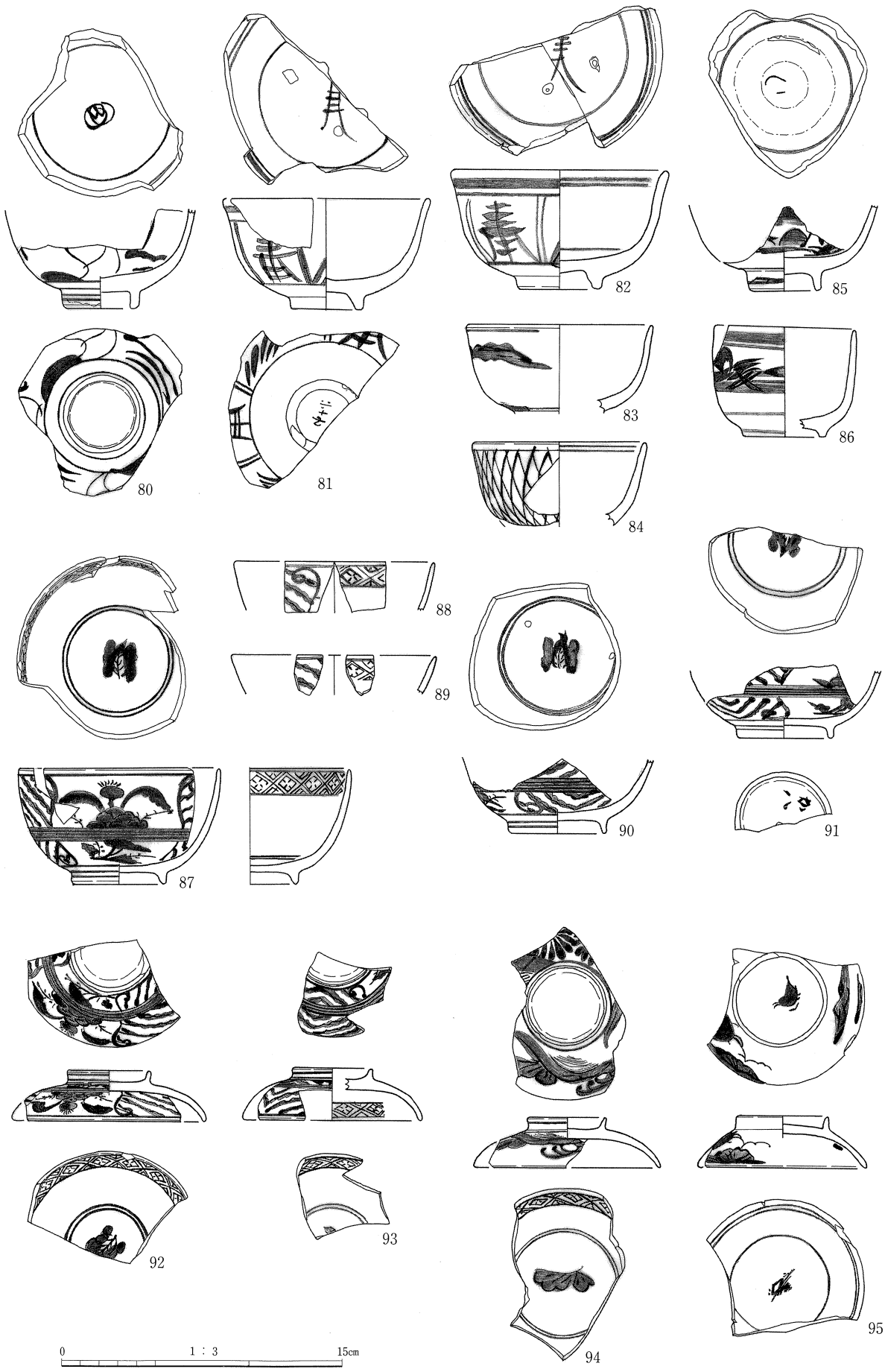
第154図　伊万里 1　(1/3)



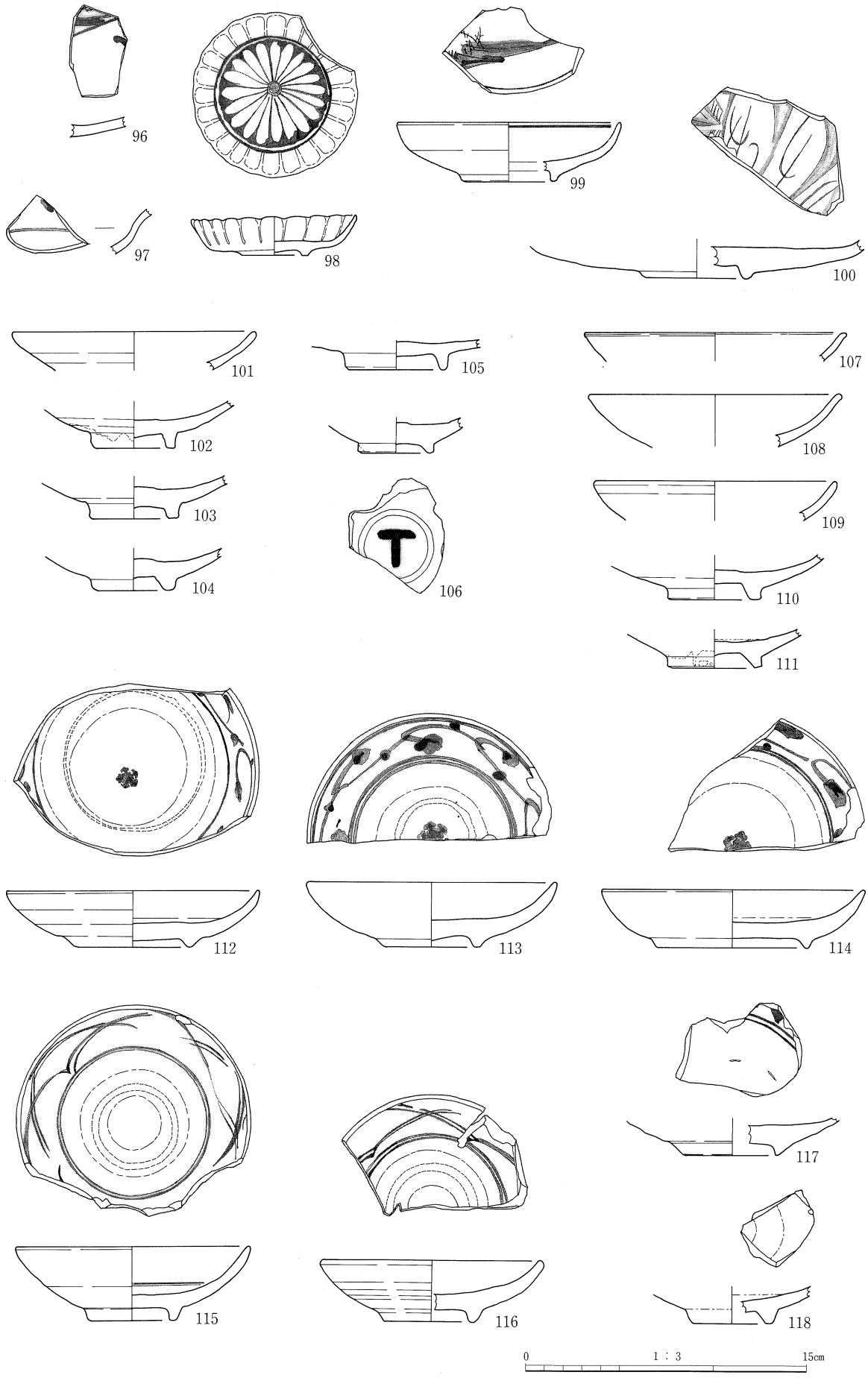
第155図　伊万里 2　(1/3)



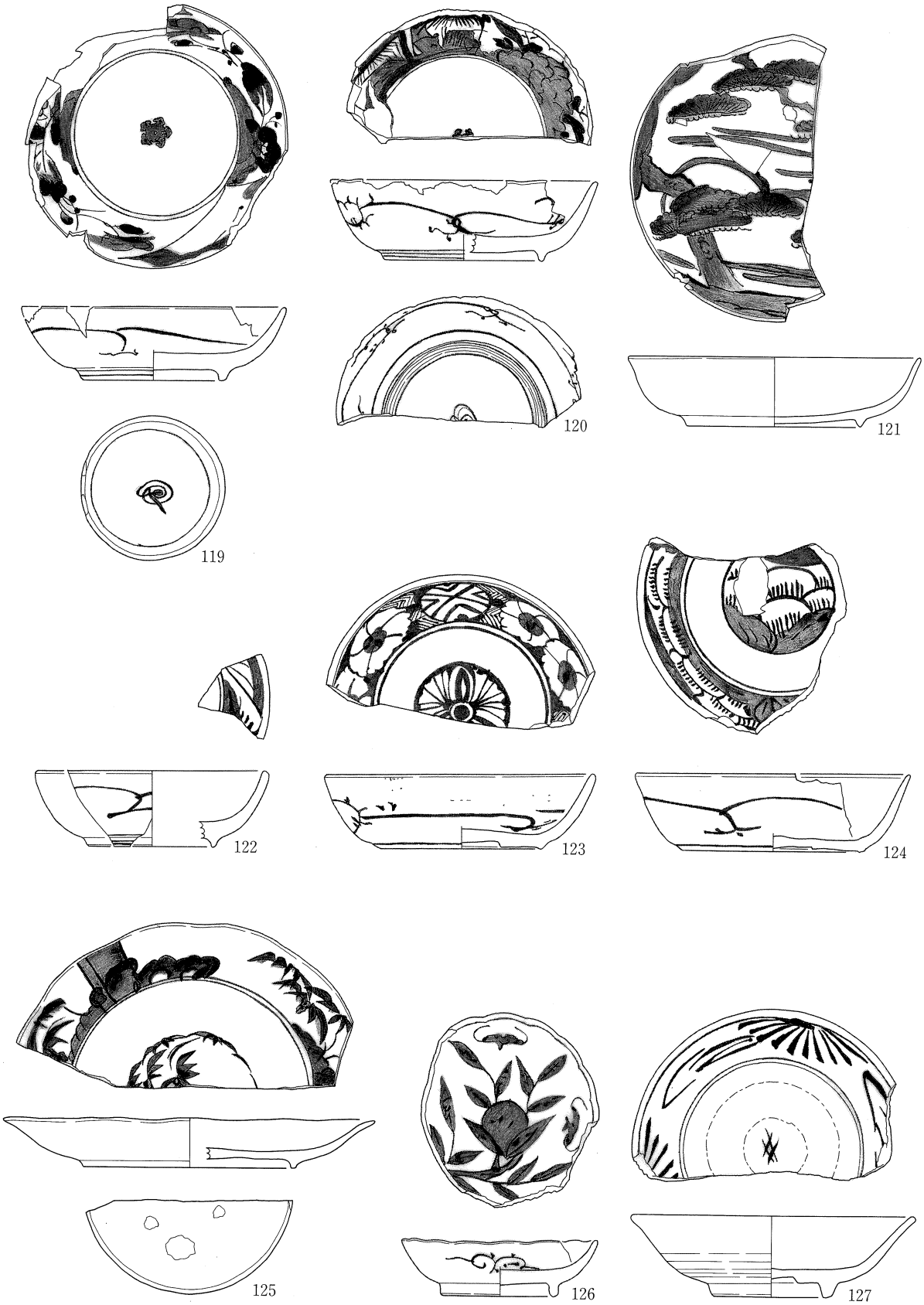
第156図　伊万里 3　(1/3)



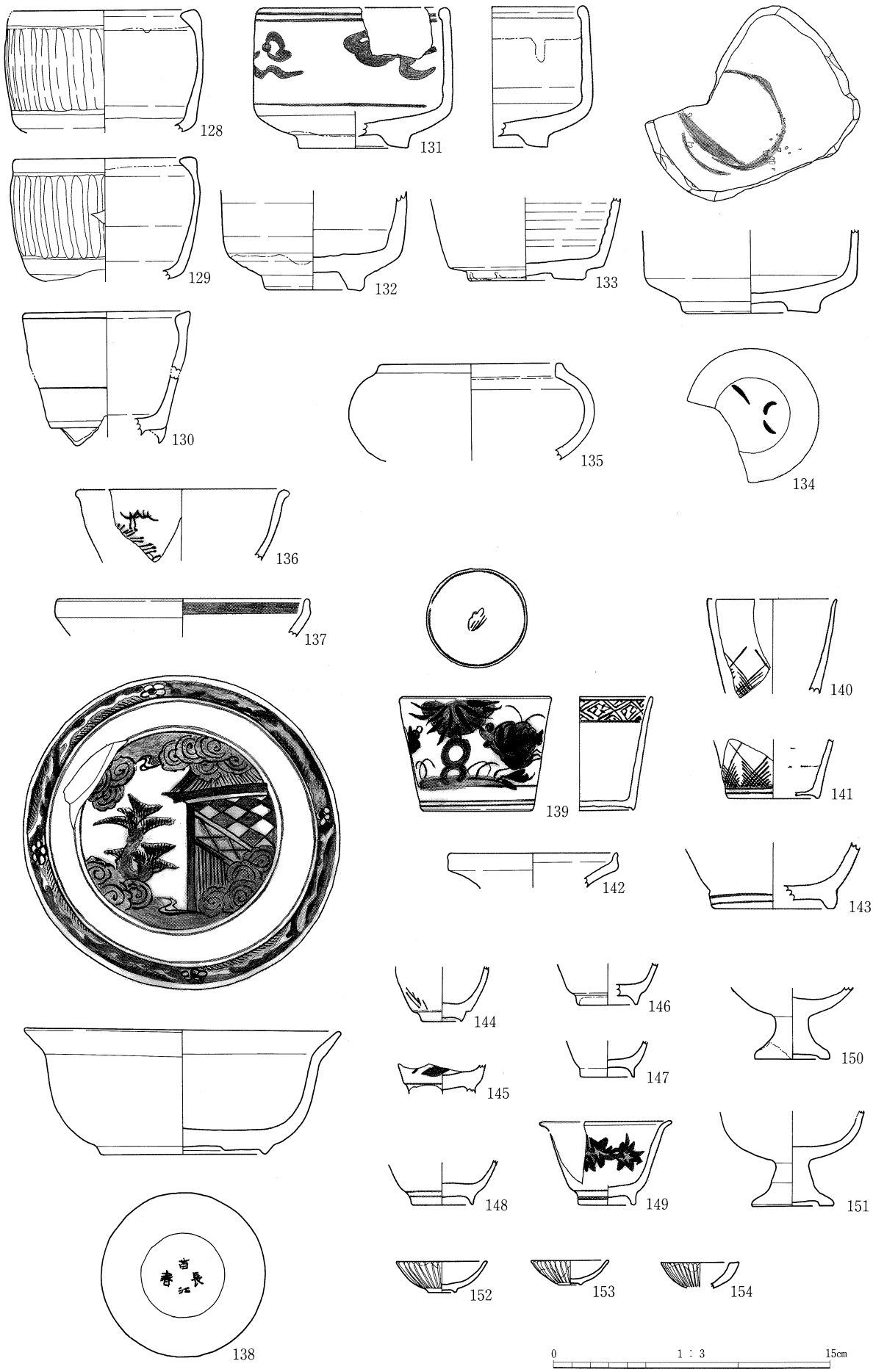
第157図　伊万里 4　(1/3)



第158図　伊万里 5　(1/3)



第159図　伊万里 6　(1/3)



第160図　伊万里 7　(1/3)

10. 信楽・九谷

(1) 信　　楽（第161図１～10，図版85）

信楽については中世にさかのぼるものと，近世のものがある。後者の一部は，京焼とされるものとの区別が充分でないことをことわっておく。

１は信楽の壺である。体部はあまりふくらみのない器形で，底部から直線的に斜めに立ち上る。体上部は丸みを持ち，ややなで肩になる。頸部はかなりしまり，口縁部はゆるく外湾しながら外上方に伸びる。口縁端部は外側に肥厚し，玉縁状になる。口径14cm，器高推定47.5cmの大きさに復元できる。胎土は石英・長石等の大粒砂粒を多く含むもので，明灰色を呈し，硬質である。体部外面下半はヘラケズリ，ほかはナデで調整する。体部内面下半には，わずかに凹凸が残るが，これはタタキ締めのあて具痕の名残りであろう。器外面は明茶褐色で，体部下半部でも底部に近い部分は褐色味を帯びた灰褐色を呈する。体部上半から口縁部外面にかけては自然釉が降り掛り，断面には漆継ぎがみられる。口縁部形態や器形から，この壺は，信楽編年[注1]の第Ⅶ期に比定でき，実年代は16世紀後半と考えられる。２も信楽壺である。胎土に長石・石英等の大粒砂粒を多く含む特徴を持つもので，１に比べやや小型になる。

３～９は近世の信楽と考えられる。底部周辺はヘラケズリを施して全体に薄手の作りとなっている。胎土は灰白色を呈し，半磁化しており硬質である。３は灯明皿である。内面全体と口縁部周辺のみ透明な灰釉が掛かる。体部外面と底部はヘラケズリが行われ露胎となる。口縁部外面には煤状炭化物が付着する。４～７は灯明受皿である。体部内面に凸帯を環状に巡らした仕切りを持ち，これに切り込みを入れ，灯明皿を乗せて垂れた油を受けるものである。体部および口縁部は，わずかに内湾するか直線的に外に開く。内環の一部に浅い半月状の切り込みを入れる。内面全体と口縁部端部外面もしくは体部上半まで，透明な灰釉が施される。体部下半と底部はヘラケズリを行い，露胎となる。

８は半環状の把手がつく蓋である。上面のみ灰釉を施し，下面は無釉である。９・10は，土瓶と考えられる。９はやや大型のもので，内面中程以下と体部外面下半まで灰白色を呈する灰釉が掛かる。体部下半と底部はヘラケズリを行い露胎となる。体部下端には３か所に突起状の三足が付く。10はやや小型で底部のみ残る。内底面には灰釉と鉄釉を掛け分け，体部外面は下半まで灰釉を掛ける。体部下半と底部はヘラケズリを行い露胎とし，三足を付ける。８～10については産地が明確ではないが，３～７の胎土・焼成等と似るためここに含めておく。

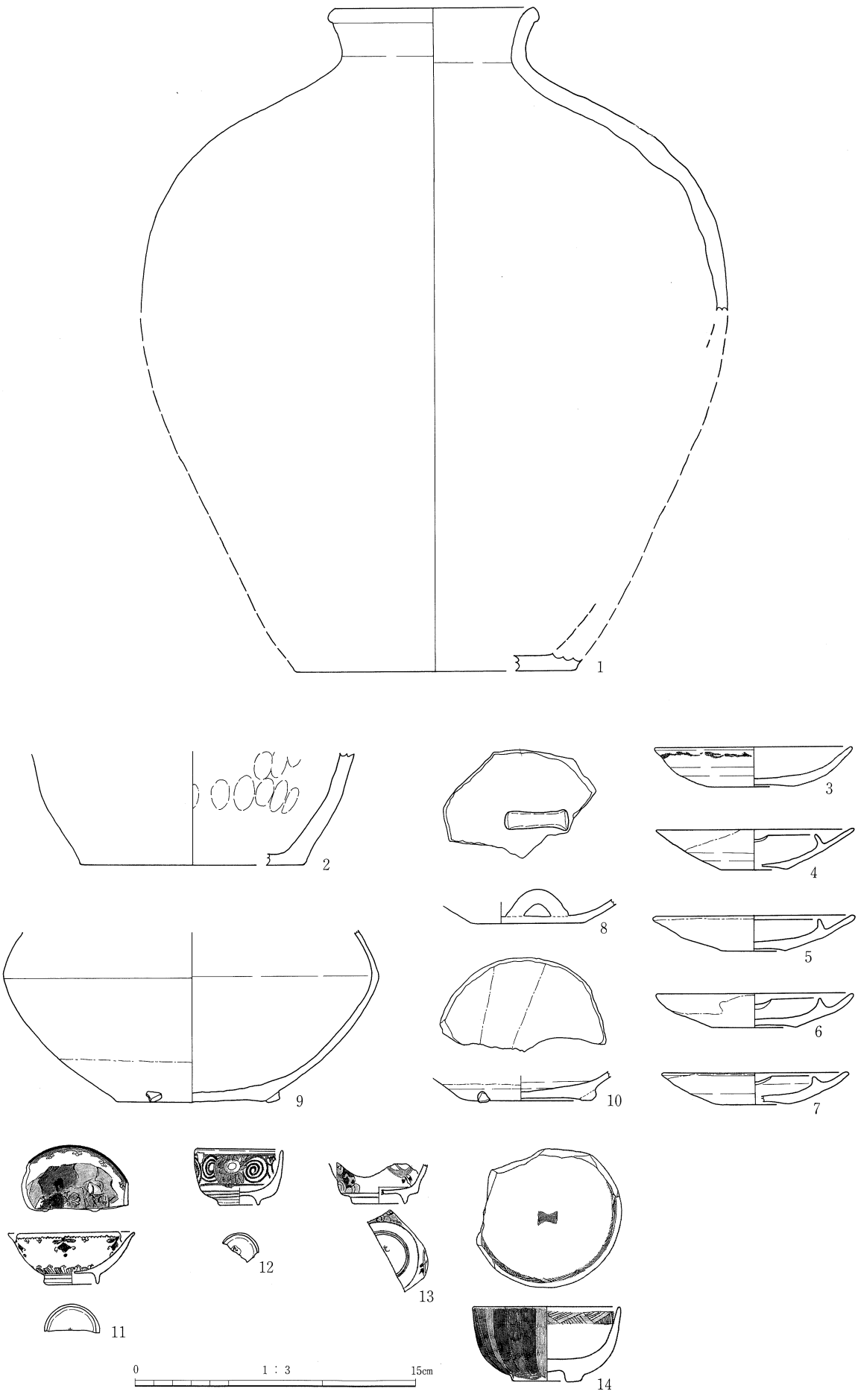
(2) 九　　谷（第161図11～14，第166図15，図版88）

九谷は再興九谷以降のものが若干出土している。

11～13は酒杯である。いずれも胎土は磁化している。11は色絵で外開の器形になる。12は体部が直立するもので，朱色の下地の上に金箔で文様を描く。底面高台内に「九□」の銘が入る。13も体部がやや外開きに直立する器形で，体部外面に染付，内面には朱を施す。これも底面高台内に「九□」の書銘を入れている。14は陶質の色絵椀である。体部外面に四色の縦縞文様を施し，口縁部内面に，黄色地に茶色で斜線を入れる。

第166図15は染付大鉢である。体部がわずかに内湾しながら外上方に立ち上る器形で，高台は少し外に開き，下面を釉剝ぎする。染付文様は体部内外両面に雲鶴文を描く。胎土は灰色を呈し，充分に磁化していない。底部高台内には「金城文化年製」と三行の染付銘が入る。この染付大鉢は，その銘款から再興九谷の中でも，春日山窯の製品と考えられ，19世紀前半の年代が与えられる。（山本正敏）

注１　松沢　修　1989　「信楽焼の編年について」『中世の信楽』滋賀県立近江風土記の丘資料館



第161図　信楽・九谷　(1/3)

11．瓦器・土器類（第162～165図，図版86・87）

ここでは表面が燻されて黒色を呈しているものを瓦器とし，土器類は土師質であるが堅く締まった胎土をもつものを土師質土器とする。これらは中世後期以降の遺構から出土している。以下種類ごとに中世後期，近世と時期を追って報告する。

(1) 瓦　　器

火鉢類（1～24）　1～9は中世後期のものである。1は一条の隆帯を巡らしている。2は隆帯の下方に半菊花文のスタンプを押捺，内外面とも磨きが施される。3は外面に2条の隆帯間に珠文が貼り付けられている。磨滅が激しく調整は不明。4は体部を内湾させ，肩部にみられる2条の隆帯間には花菱文が施される。口縁部は2次被熱のためか赤橙色を呈する。5は中世後期の溝ＳＤ10101から出土した。底径が15cmと小ぶりで，表面は橙色を呈する。胎土は他に比べ締まっており，焼きも堅い。体部に隆帯を巡らせ，底部外面縁辺に猫足を貼り付けている。内外面は丁寧ななでを施す。6は底部付近に一条の隆帯を巡らしたものである。底部外面縁辺に猫足を貼り付けているが一部欠損する。7は体部を内湾させ，肩部にみられる2条の隆帯間に半菊花文が押捺される。

8は風炉である。2本の隆帯間に菊花文のスタンプを押捺する。底部外面縁辺に足を貼り付け，丁寧ななで調整が施される。体部外面はにぶい黄橙色であるが，一部は2次被熱のためか赤橙色を呈する。

9は丸みを帯びた体部をもち口縁が外反する。体部外面には雷文の直下に半菊花文の押捺を施す。またその下方に貼り付け凸帯を巡らす。これは16世紀の火鉢類にみられる特徴である。底部外面縁辺には板状の足を貼り付けている。内面体部下半から底面までを除いて磨きが施される。外底面は足の裏面をはじめ全面にハケ状のなでが施される。出土状況は，完形の底部に割れた口縁部が重なって見つかり，共伴遺物はみられなかった。そのため正確な時期は不明である。類例を見ない器形であるため，宗教的な要素が強いものと考えられる。当遺跡における中世の火鉢類は，胎土中に骨針が混入しているものがあり，遺跡の周辺で製作された可能性が強く，文様においては花菱文，菊花文といった畿内の意匠を忠実に模倣をしている。これは北陸における一般的な傾向といわれる[注1]。

10～24は近世の火鉢類である。平坦な底部から体部が垂直に立ち上がるもの（15･21），体部が内湾するもの（22～24）がある。口縁部は内折し，肥厚するのが特徴である。折り返した端部と口縁部の間に空洞ができるもの（19・20・22）がある。10～15は昭和初期まで梅原に所在した「以速寺」の堀と推定されるＳＤ5910から出土しており，同一個体の可能性も考えられる。10～13，15は内外面ともなで調整を施す。底部外面縁辺に円錐逆台形の足を貼り付け，その周囲は半円を描くようになでられている。13の内底面はヘラのようなもので抑えられた痕跡がみられる。15は三足をもつ，内面の口縁端部から体部5cm程度まで使用時のものと思われる煤が付着している。また，口縁上面には「二十九八七六五三」と彫り込まれている。16，17はＳＥ6095から出土した口縁部である。17は端部が丸みを帯びており，外面には赤色の顔料のようなものが，内面には煤が付着している。また断面には漆継ぎの痕跡をとどめている。24は丸みを帯びた体部で口縁端部は内傾し，体部内外面に煤が付着する。21は円錐逆台形の三足をもち，周囲は半円を描くようになでられている。このような足の付き方は関東地方に類例がみられる[注2]。底部中央付近も円を描くようななでと墨書が認められる。内底面はヘラのようなもので抑えた痕がみられる。23は体部が内湾しながら立ち上がる形態である。体部外面は上下に櫛描き文が施され，それを切るように口縁および底部付近それぞれをめぐる2本の沈線が描かれている。沈線上には円形の凸帯がほぼ等間隔に貼り付けられている。内面には口縁端部から体部約5cm

に煤が付着している。

こうしてみると火鉢類では，中世後期には畿内の，近世には関東の影響を受けていたことが判明した。しかしこの変化は，いつ，何が要因となって生じたものか定かではない。転換期にあたる資料の出土が待たれる。

(2) 土師質土器

暖房具・他（25～28） 25はバンドコである。外面の下方は黒変している。内面は工具のようなものでくり抜いた痕跡が見られる。26は七輪である。

27は羽釜の口縁部で，端部は内外面につまみ出している。耳の部分は貼り付けて端部をつまんでいる。外面は煤けている。

28は鉢で，火鉢類の可能性も考えられる。底部には墨書が見られる。

擂鉢（29～48） 磨滅しているため調整が不明のものが多い。その形態は越前に類似するものがあり，一般的にその編年をあてることもある。

29・30は内面の口縁下に緩い凹線をもち，その2㎝下から希薄な卸目が施される。30は体部中央と口縁の凹線間に卸目が施されている器壁は薄く，端部は丸くおさめる。内面口縁部には煤が付着する。これらは共伴遺物から，中世後期の古い段階に位置するものと考えられる。

31は体部にみられる9条1単位の卸目が凹線下から見込みに向かって左回りに施されている。

32・33は口縁部が内傾し，端部はつまみ上げられる。胎土には骨針を含む。卸目は10条1単位である。

34・35・41は内面端部をつまむことで外面も軽く面取りされている。凹線下1～1.5cmから見込みへ7条1単位の卸目が施される。41は見込み付近に煤が付着する。35は越前の編年に当てはめれば，16世紀前半にあたる。

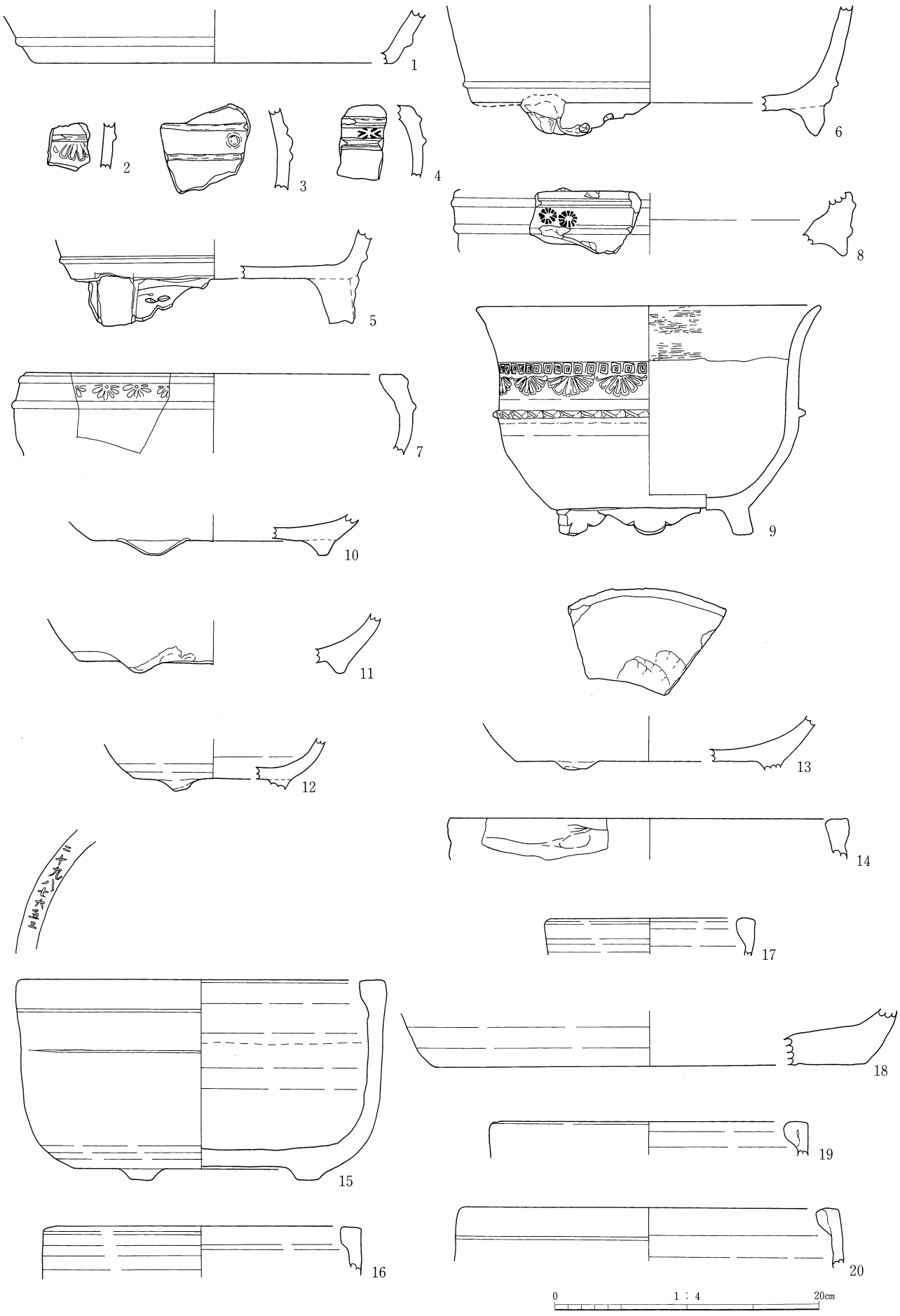
36～40は口縁はほぼ水平で，外面を強くなでるものである。内面の口縁断面は凹線を呈する。36は凹線から1.5cmのところから6条1単位の卸目が施される。37は内面の特に見込みに近い部分の磨滅が激しく，卸目の単位は不明瞭だが，越前の編年に当てはめれば16世紀後半に当たる。38は立ち上がりが丸みを帯び，凹線直下まで8条1単位の卸目が施される。39・40は内面端部を強くつまみ出す。緩い凹線1㎝下まで9条1単位の卸目が施される。39・43はＳＫ4855から出土しており，卸目や胎土から同一個体の可能性が考えられる。40は弱い片口がみられる。42は前述の擂鉢に比べ堅く締まった胎土で，卸目はみられない。

44～48は底部である。体部と底部の境は強い指押さえでくびれている。44は体部に左回りの卸目を施した後，見込みに半円形の卸目を施す。内面全体に煤が付着する。45は8条1単位の卸目を施す。46は底部内外面が煤けている。体部の卸目は左回りに，底部は見込みから中央へ向かって施される。47は内面が黒変している。磨滅しているため体部の卸目の単位は不明である。見込みに卸目は見られない。

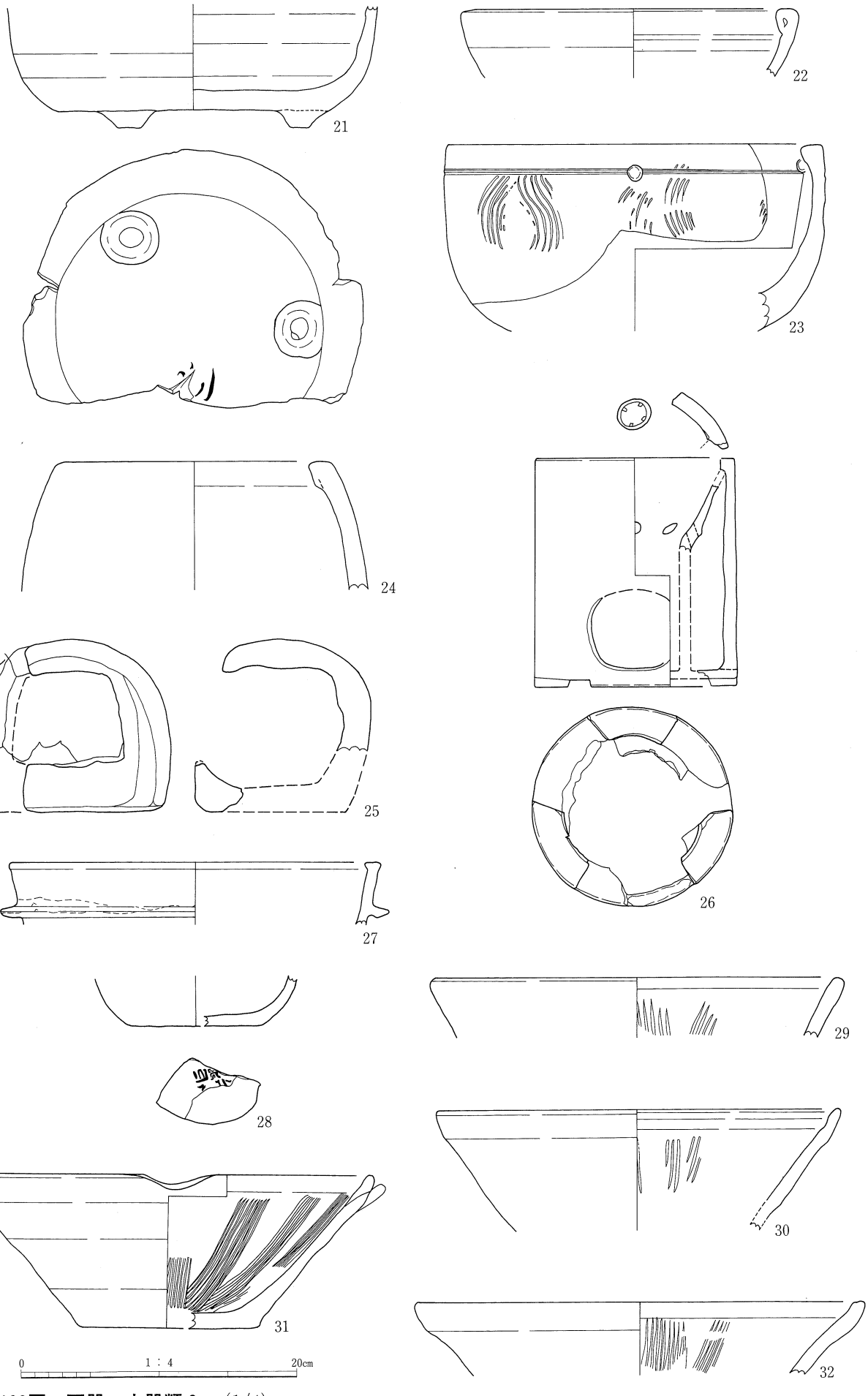
（横山和美）

注1 滝川重徳氏の御教示による。

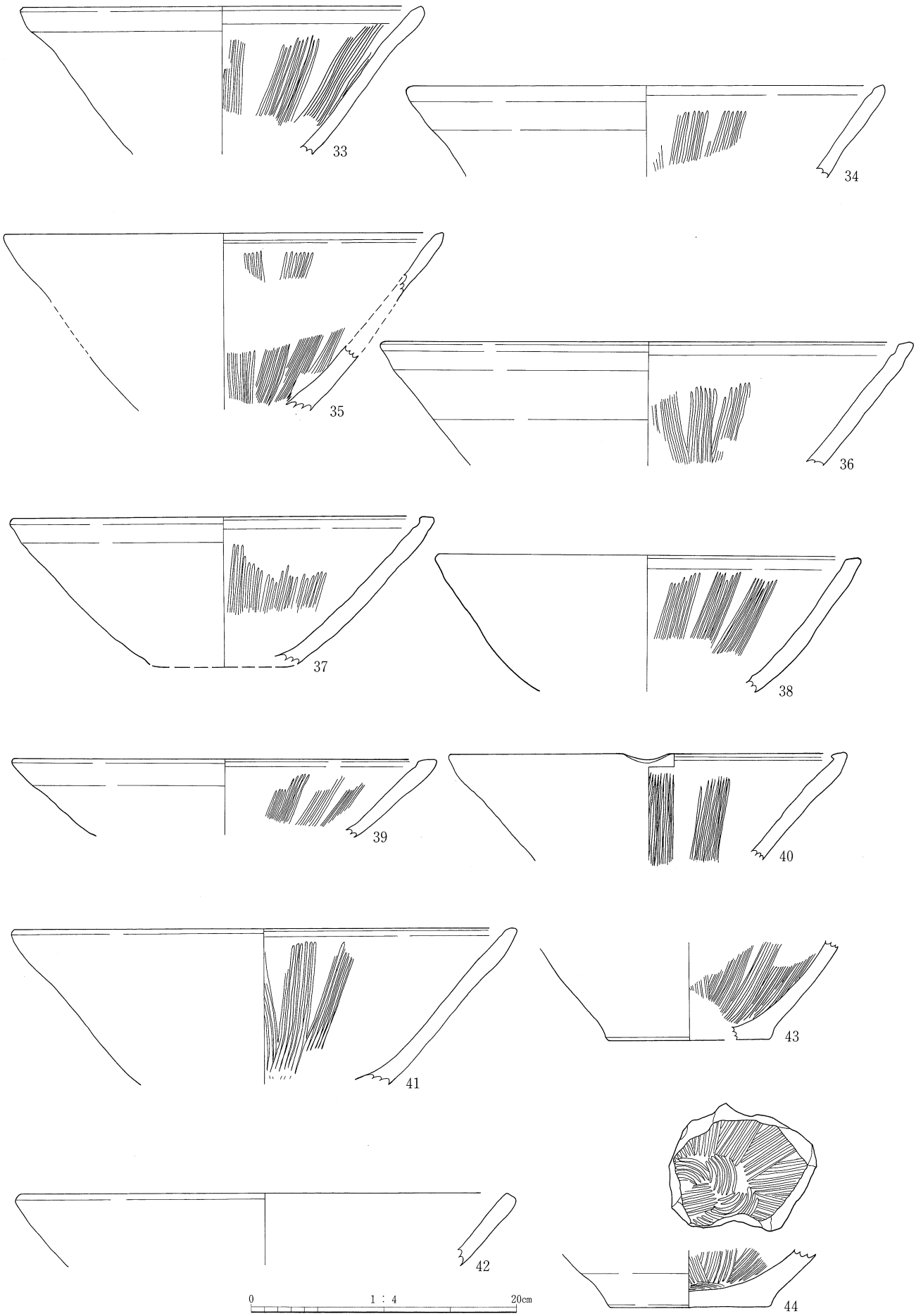
注2 小川望・小俣悟 1988 「関東の瓦質土師質火鉢類」『月刊考古学ジャーナルNo.299』 ニュー・サイエンス社
菅原正明 1989 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』



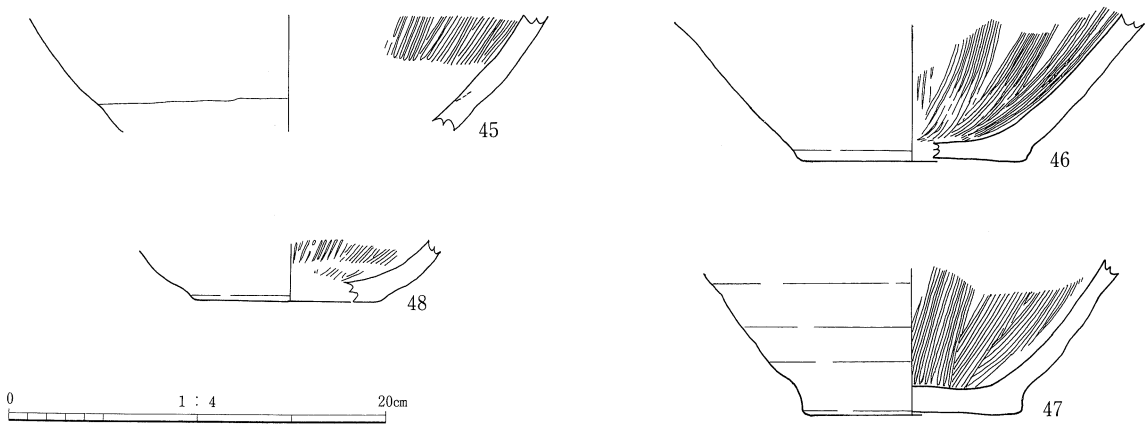
第162図　瓦器・土器類１　(1/4)



第163図　瓦器・土器類 2　(1/4)



第164図　瓦器・土器類 3　(1/4)



第165図　瓦器・土器類 4　(1/4)

12. そ　の　他（第166～173図，図版88～93）

近世以降の陶磁器には様々な種類のものがあるが，生産地（窯跡）の全く不明なものや，あるいは推測はなされても確証のないものなどが多くあり，時代が新しくなるにつれてその傾向が強くなる。これらの陶磁器についても，今後，生産地や製作年代等を明らかにしていく必要があるが，とりあえず一括して報告することにし，できるだけ資料化して将来の研究に備えておきたい。

その他の陶磁器の中でも，富山県八尾町に窯跡の残る越中丸山窯で焼成された製品の可能性のある一群を別にまとめておき，その他については陶器と磁器に大別し，器種ごとに細分して述べておく。

(1)　陶　　器1（第166図1～14）

1～14までは，越中丸山窯産の可能性のある一群である。器種は，椀・皿・鉢があり，染付・色絵・鉄釉・灰釉などを施す。陶器の胎土は非常にきめ細かく，混入物のない均質なものである。色調は灰色を呈するが，底部周辺を中心に充分に還元せず，一部黄褐色になる場合が多くみられる。また器種の別なく底部は削り出し高台を有するが，底部高台内側を深く削り込み，底部を非常に薄く作る例も多く，この一群の特徴となっている。

1～6は体部下半が内湾して立ち上り，口縁部が直立する器形の椀で，いずれも内面全体と体部外面下半まで施釉され，底部・高台は無釉となる。1～3は灰色釉を施すもので，高台は外に開く形態である。4の染付椀は，体部に草文を描き，半透明な白濁釉を施す。染付文様は薄くて不鮮明。5は鉄釉，6は銅緑釉を施釉するもので，断面四角形の小さな高台を削り出す。7はやや大ぶりの椀で，体部中程で屈曲して口縁部が立ち上る器形のものである。体部外面には鉄釉，内面には灰色釉を掛け，さらに口縁部周辺のみ反転して外面灰色釉，内面鉄釉を重ねて施釉する。

8～11は小さな玉縁の皿である。内面全体と体部外面下半まで灰色釉を施し，内面には鉄釉と長石釉？で花木を描く。高台は幅広のいわゆる蛇の目高台で，下面を斜めに削り出し，無釉となる。

12は透明な灰釉を施す皿である。13は染付皿で，体部内面に簡略化した唐草文様，内底面には意匠不明の小文様が描かれる。透明というよりは白色に近い釉を施す。胎土は黄褐色を呈し，焼成は不良。内面を蛇の目釉剝ぎし，直立する高台は細く高い。伊万里写しのものであろう。14は鉄釉を施す鉢。口縁部は屈曲して短く立ち上り，底部高台は無釉である。

(2)　陶　　器2（第167図16～第170図73）

椀（16～29・31）　16・17は体部下半が張り，口縁部がやや外反する器形の椀である。釉は灰味を帯びた黄色で，底部高台は無釉となる。17の外面には緑色釉の文様が入る。18・19は口縁部が外反する器形の鉄釉椀である。18の体部下半以下は無釉となる。19は天目形になるかもしれない。20～22は体部が内湾し，口縁部が直立する器形の鉄釉椀である。23･24は鉄釉椀の底部。26は灰釉椀の底部で，高台は蛇の目高台に近く，底面の削り込みは浅い。23・24・26はいずれも体部下半から底部・高台にかけて無釉となる。27は貫入の多い長石釉を施す。29は体部中程でくびれ，図化していないが口縁部は直立する器形になる。内外面鉄釉を施す。

皿（32～35）　32は四角形の型打ち皿である。底部は無釉で布圧痕が残り，内面には色絵で草木を描く。33・34は卸皿である。胎土は黄褐色を呈し，焼成は不充分で，土器に近い。内面に卸目を格子状に引き，黄緑色の灰釉を施す。34の口縁部外面には煤状の炭化物が付着する。

蓋（38～40）　38は濁黄色透明釉を掛ける蓋である。輪状のつまみを持ち，天井部には同心円状沈線がめぐる。39は透明な灰釉を施すもので，下面は無釉となる。40はつまみ部を欠損する染付蓋。

小壺（41～44）　41～44は内外面鉄釉を施す小型の壺である。底面には回転糸切り痕を残すもので，

茶入れや水滴等になる可能性がある。

擂鉢（46～53）　口縁部が肥厚し，内面に卸目を施す鉄釉の擂鉢である。口縁端部の形態に変化があるが，時期や生産地の違いと考えられる。

鉢（30・45・54～57）　30は口縁部がやや受け口状になる小型の鉢で，灰釉を施すものである。45は鉄釉の餌鉢で，口縁部に小さな持手が付く。54は大型のこね鉢と考えられる。口縁部は外側に折り曲げて肥厚させ，内面と体部下半まで灰釉を施し，内外面に抽象的な鉄絵を描く。底部は無釉となり，低平でやや幅広の高台を削り出す。胎土・焼成・釉の類似性から越中丸山窯産とも考えられるが確実ではない。55は白濁色の灰釉を施す鉢で体部は外湾して開き，口縁端部は内屈する。内底面に5か所の胎土目跡が残り，底部・高台は無釉である。56・57は同一個体の可能性がある。内面と口縁部及び体部外面には曲線文様の鉄釉を施す。

片口（58）　58は透明な黄色釉を施す片口である。内面全体と体部外面下半までの施釉で，底部高台は，無釉となる。

壺（59～66）　様々な大きさ・形態がある。59は体部がわずかに内湾ぎみに立ち上る器形で，深型の鉢とすることもできよう。底面を除き褐色を帯びた灰白色の釉が掛る。胎土は灰色を呈し気泡が入る。60は筒胴型の壺で底面を除き，茶褐色の鉄釉の上に部分的に黒釉を流し掛ける。無釉の底部には墨書がみられる。61・62は口縁部がややしまり，体部がふくらむ器形のものである。61は底部を除き鉄釉を施し，肩部に白釉を流し掛ける。62は口縁部と体部外面に鉄釉を施し，内面と底部は無釉となるものである。体部に縦長の凹みを入れ，横断面形が隅円方形状になる。63は，黄白色の透明釉を施し，体部上半に花弁を鉄絵で描く。64は透明な灰色釉，65は無釉，66は鉄釉の壺である。

溲瓶（67）　頂部に半環状の把手の付くもので，底部を除き全面に黒褐色の鉄釉を施し，上部の一部に白色釉を薄く掛ける。完形品。富山県内からの溲瓶の出土は他に例を知らず，初例となる可能性が強い。

火入れ（37）　37は口縁部が直立する器形の火入れと考えられる。口縁部内外面と体部外面に透明な鉄釉を施し，体部内面は無釉となるもので，外面には波状の沈線がめぐる。

小杯（36）　体部・口縁部が屈曲する器形のものである。貫入の多い白色釉を施し，小さな削り出し高台を含めて，底部は無釉となる。

甕（68・69）　小破片で全形は不明である。68は口縁部を外に折り曲げて肥厚させ，内外面ともに鉄釉を施す。69はやや小型であるが，これも口縁部を外に折り曲げ，灰釉？を施す。

瓶類（70～72）　70は染付の瓶で花文様を描く。底部を含めて外面全体に施釉し，内面は無釉となる。71は薄手の作りのものである。内外面とも茶褐色の鉄釉を施し，高台下面と外面の一部のみ無釉である。72は貫入の多い灰白色の長石釉？を厚く掛け，内面は無釉となる。

73は器種不明のもので，全体に褐黄色の釉を掛け，獣面を貼り付ける。

(3)　磁　　器（第171図80～第172図106）

碗（80～83・85・87～93）　80は透明釉の上に緑色釉を口縁部内外面にのみ流し掛けるものである。底部・高台は無釉となり，内底面に三足ハマの痕跡が残る。81・82は染付椀で産地不明のもの。83は色絵碗，85は体部面取りの白磁碗。高台は細く高い作りで，全体に薄手の作りでやや軟質の焼成である。87～90は摺絵の碗である。体部外面，口縁部内面，内底面などに人物・花文などの文様が施される。91・93は銅版染付が，92は染付文様が施されるものである。87～93は明治時代以降に焼成されたものである。

皿（94～96）　94は蛇の目凹型高台の染付皿である。内底面には陰刻文様に染付が加えられる。95は色絵皿，96は，摺絵皿である。いずれも明治時代以降のものである。

小杯等（84・86）　84は染付小杯で，外面に竹笹文様等が描かれる。86は白磁の盃である。

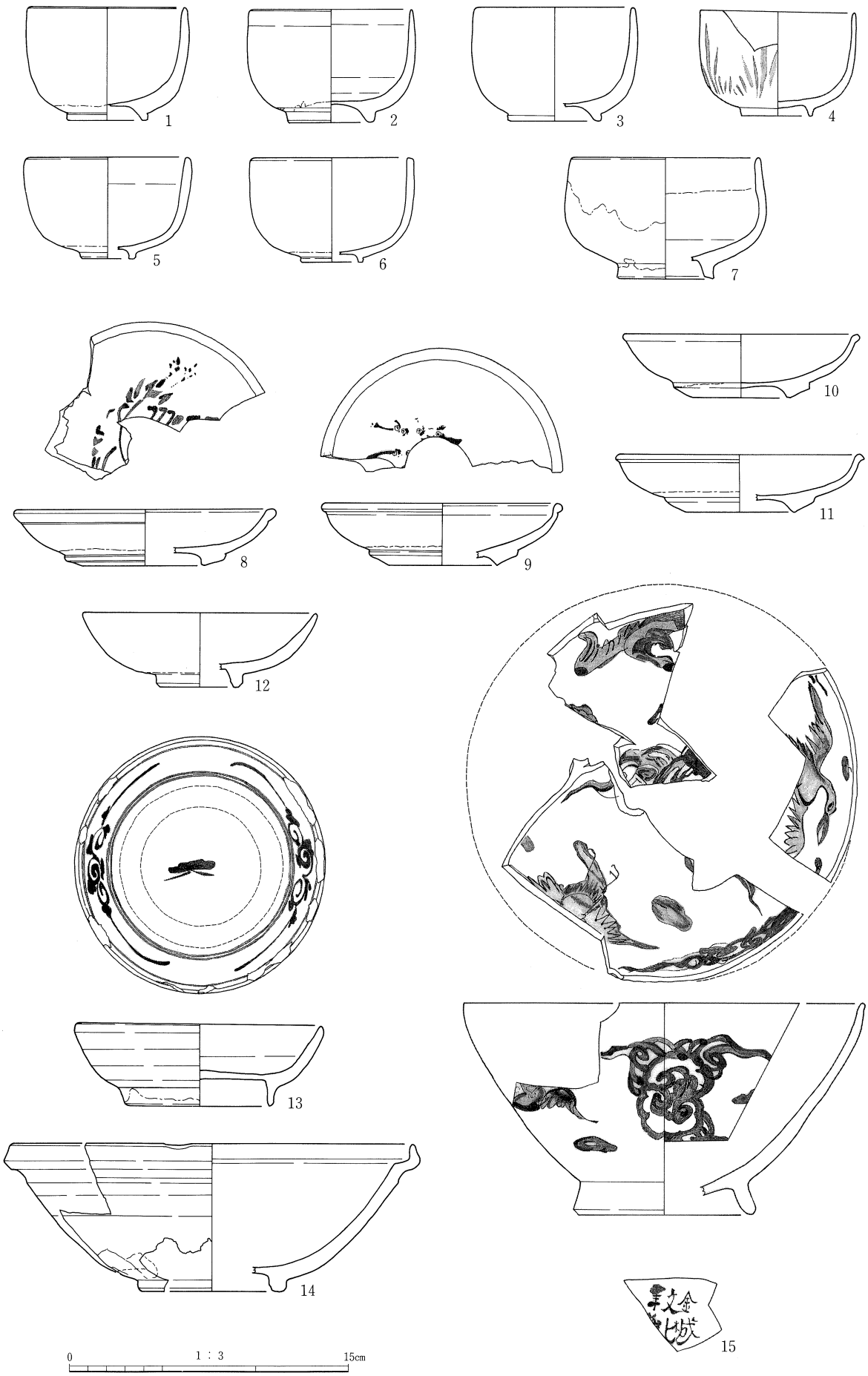
蓋（97～99）　97・98は色絵，99は摺絵の蓋である。97・99は口縁部が内湾しながらもやや直線的に伸びて終る器形となる。98はやや軟質で口縁部が下向きに折れるものである。

仏飯器（103～105）　103は色絵を施すもので，脚部中央を深くえぐる。104･105は白磁の仏飯器で，脚部のえぐりのみられない型式である。

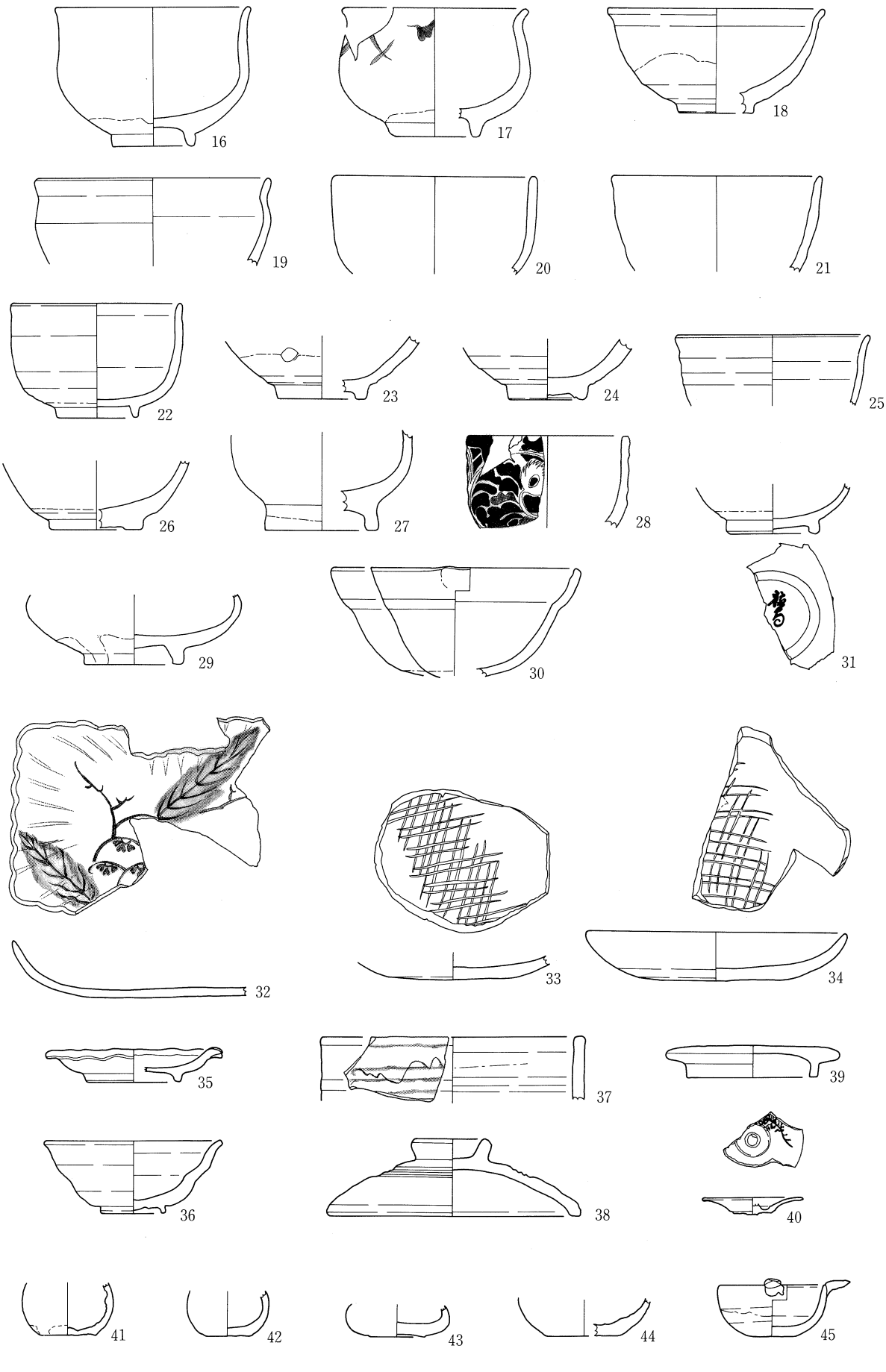
その他100は色絵付した四方菱や，花弁の貼り付けを行い，体部全体を梨地にした急須である。101は大型の鉢で，口錆と体部内外面に染付による花文を施す。102は染付と型押しによる装飾を施すもので，芯押さえと考えられる。106は染付の植木鉢である。

(4)　そ　の　他（第170図74～79・第173図）

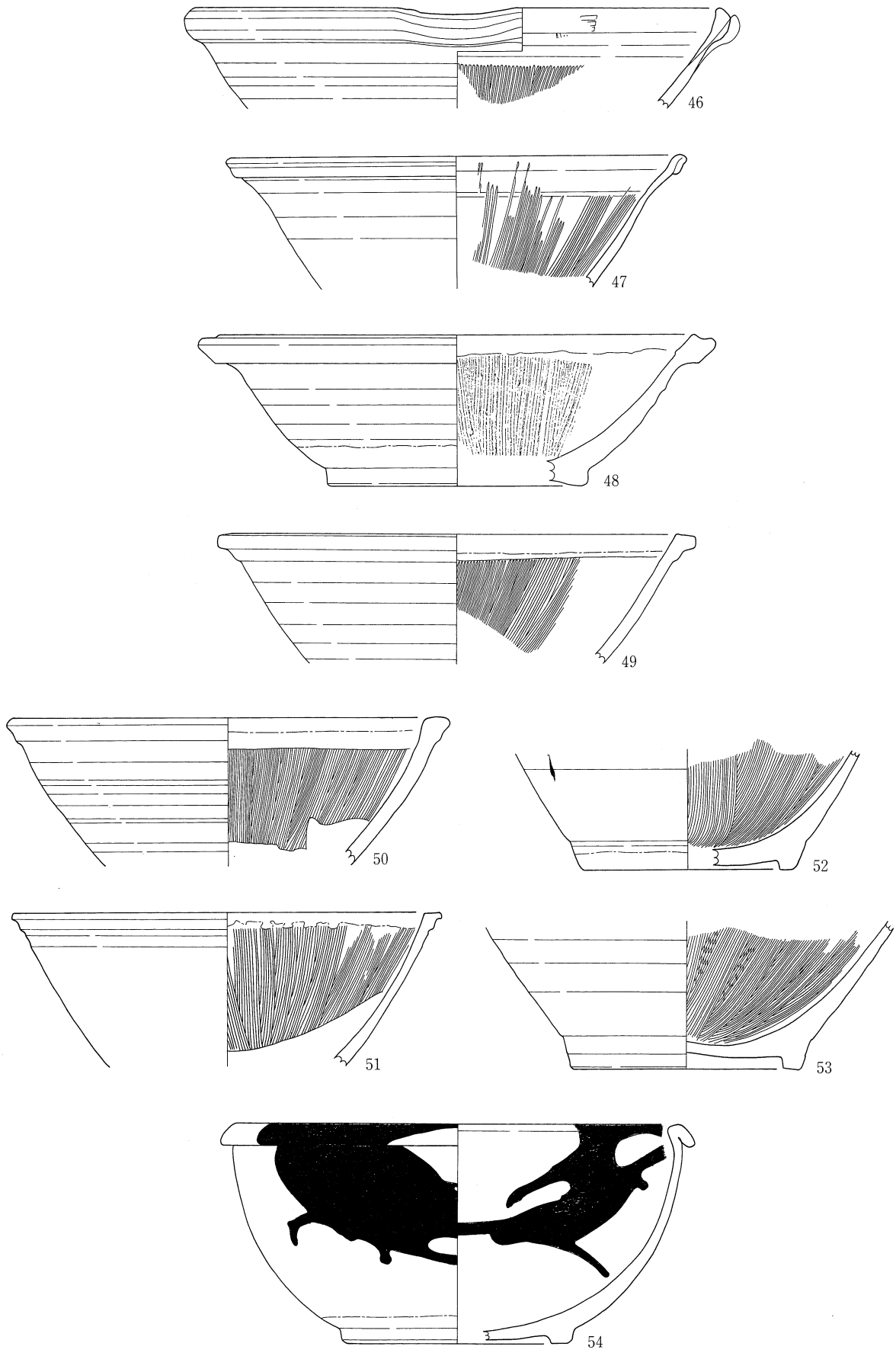
74の土製品は，非常に簡略化されているが，狆抱き僧と推定される。75・76は同一個体と考えられる中空の土製品。77は土錘。78は軒平瓦である。79は用途不明の陶器であるが，二次焼成を受けた痕跡があるので，焼台（窯道具）の可能性がある。第107図の家形土製品は旧以速寺を巡る溝から出土したもので，用途・時代とも不明である。写実的に家を模したミニチュアで，内部は空洞となるが，煤などの付着はみられない。土師質であるが，正面の一部に釉がかかる。　（山本正敏）



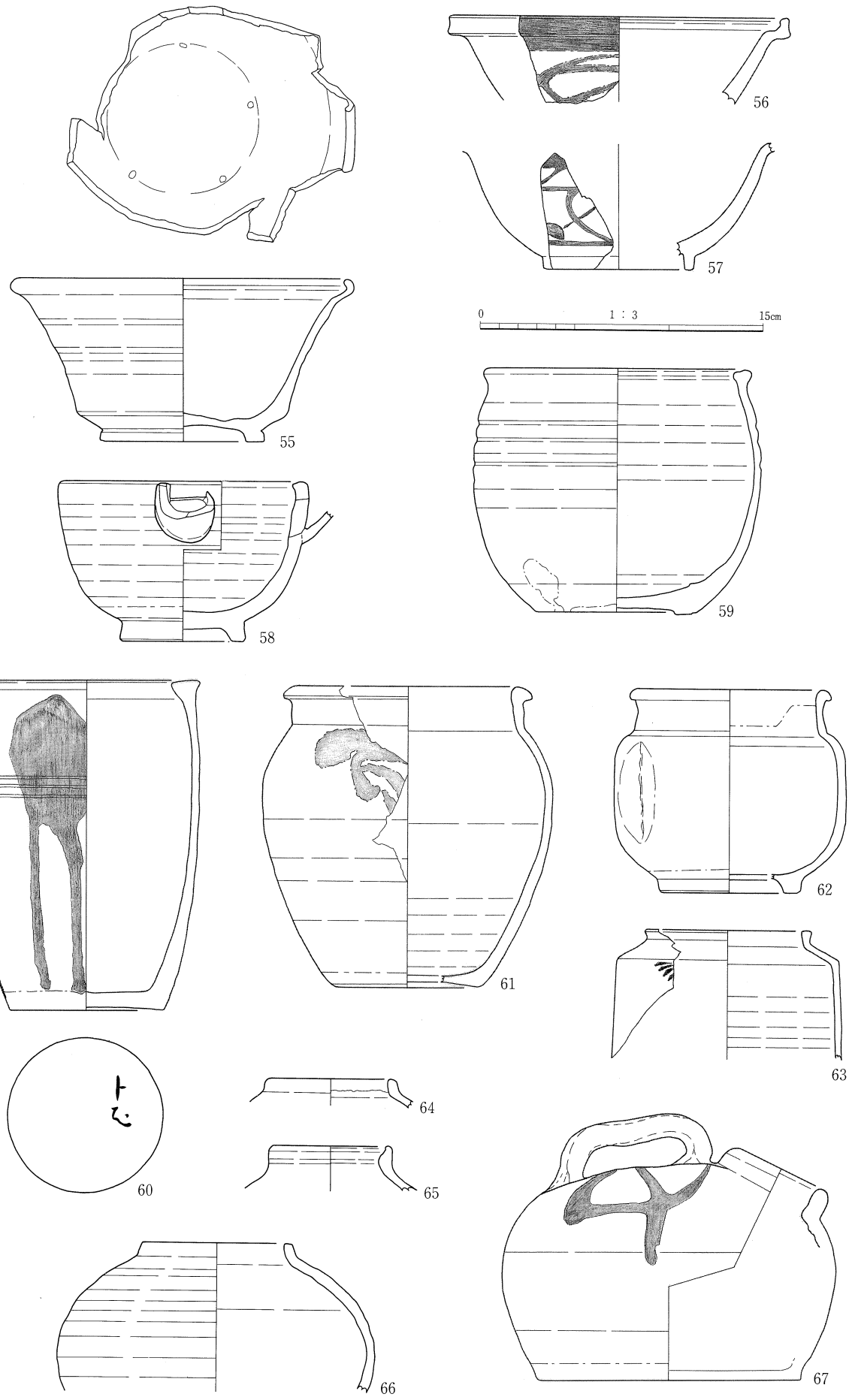
第166図　その他の陶磁器１　(1/3)



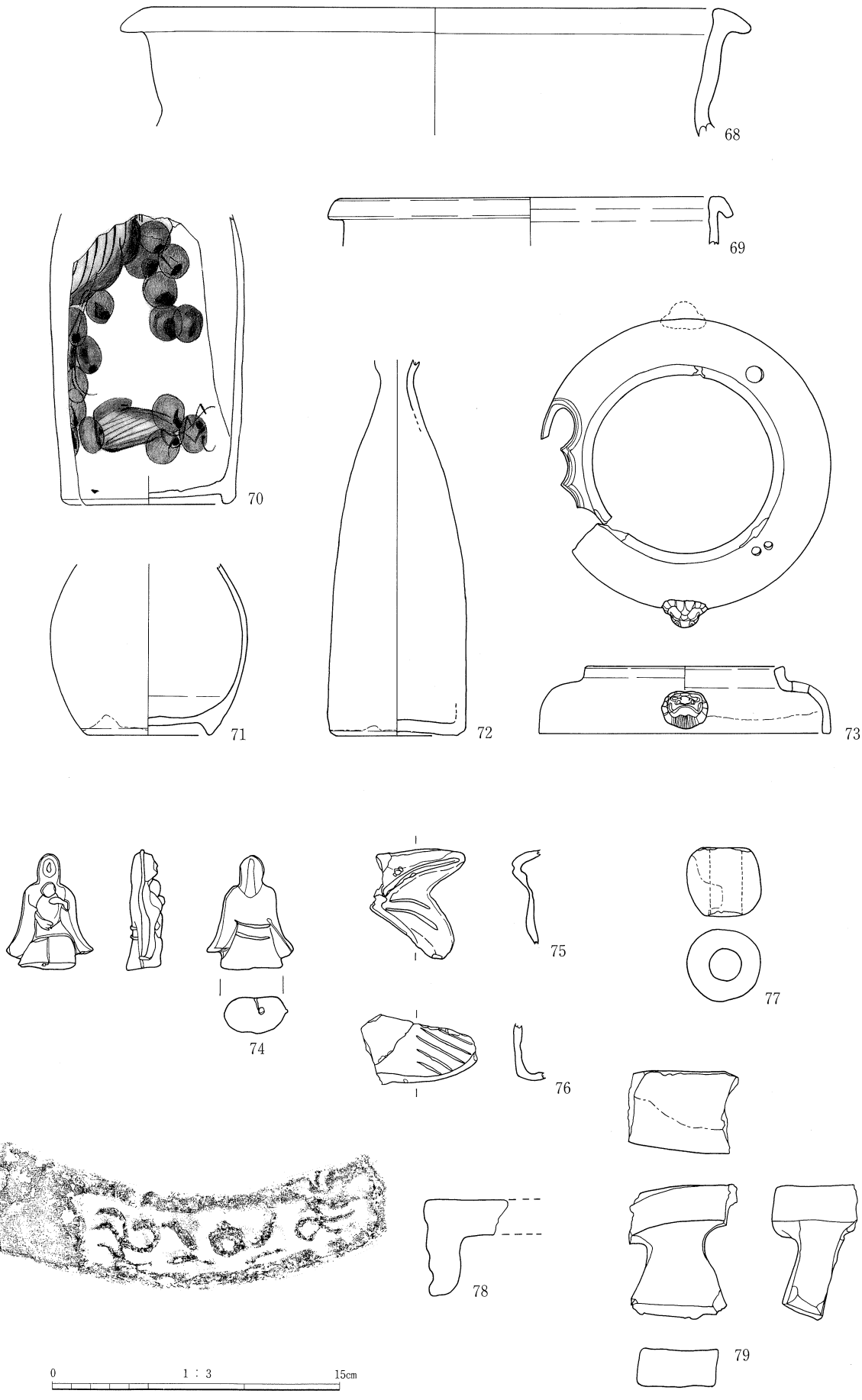
第167図　その他の陶磁器 2　(1/3)



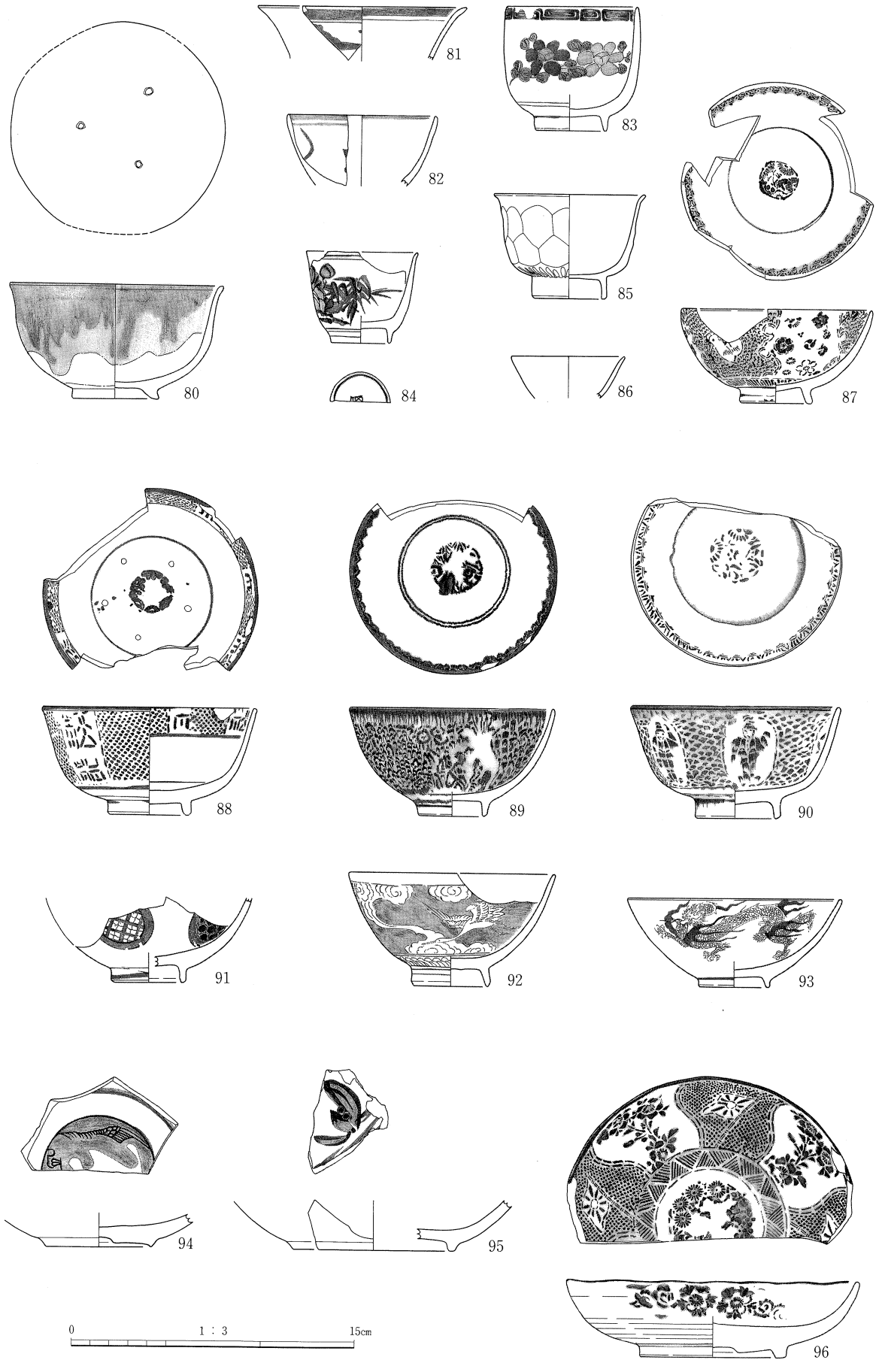
第168図　その他の陶磁器 3　(1/4)



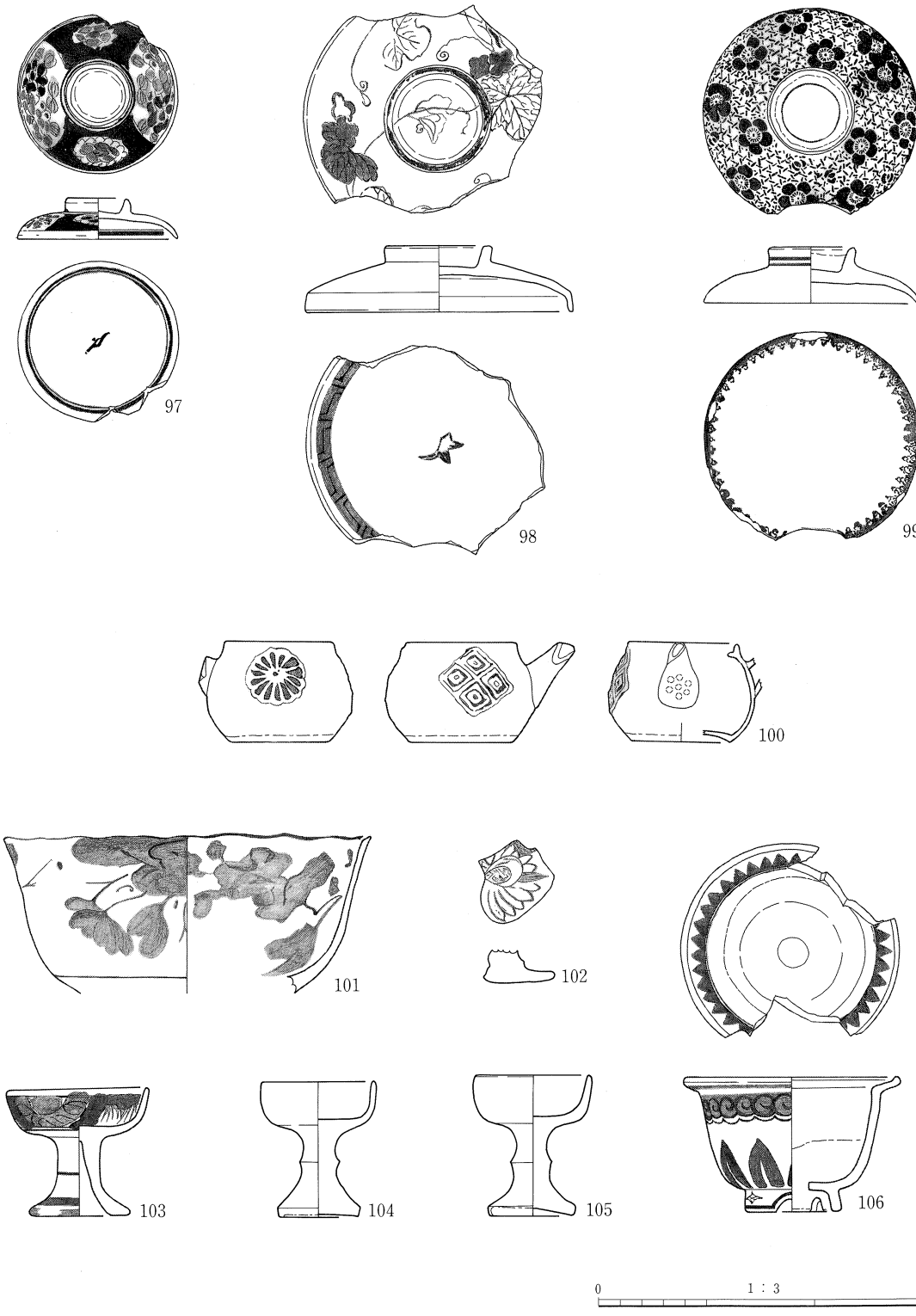
第169図　その他の陶磁器 4　(1/3)



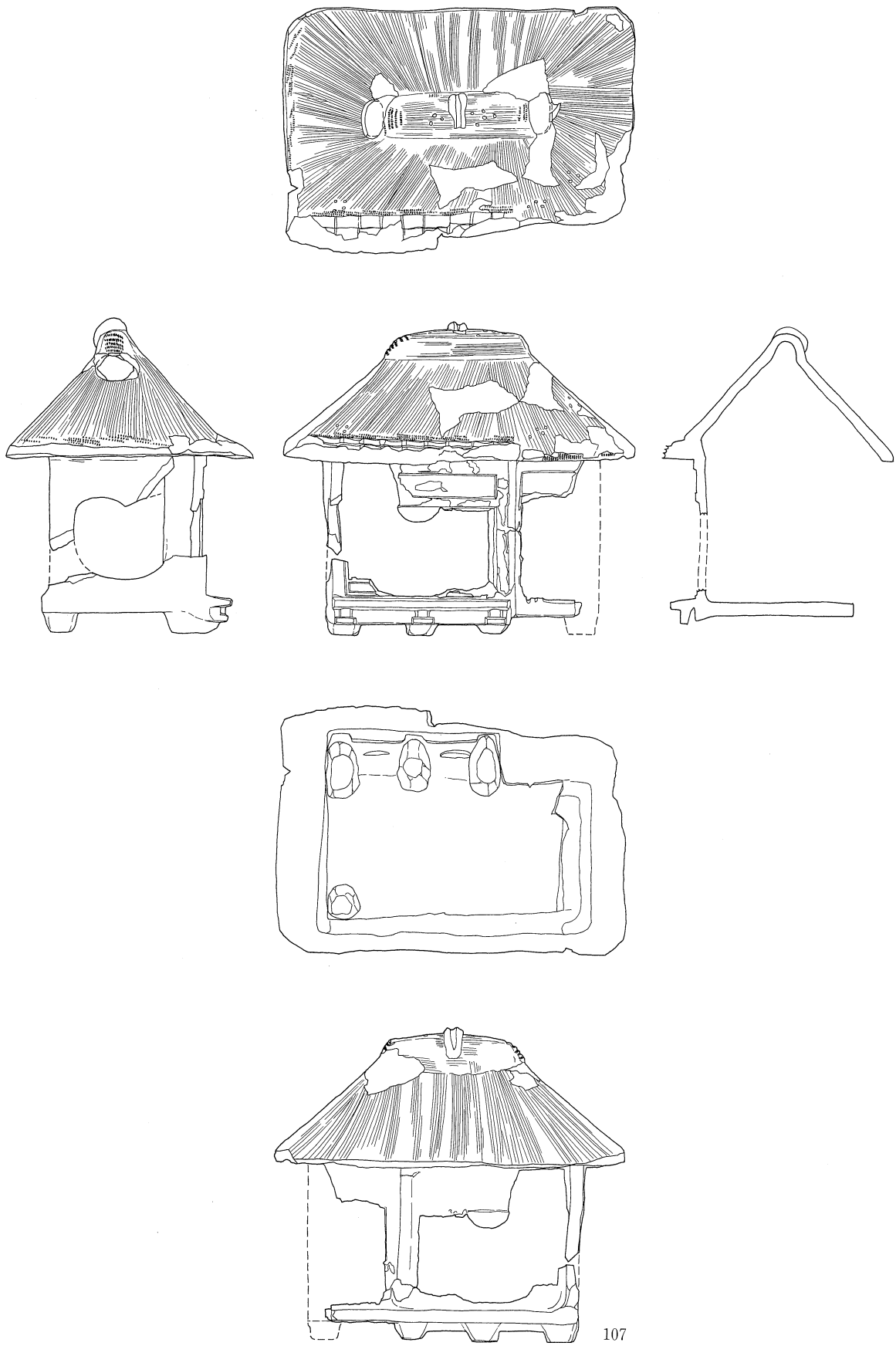
第170図　その他の陶磁器 5　(1/3)



第171図　その他の陶磁器 6　(1/3)



第172図　その他の陶磁器 7　(1/3)



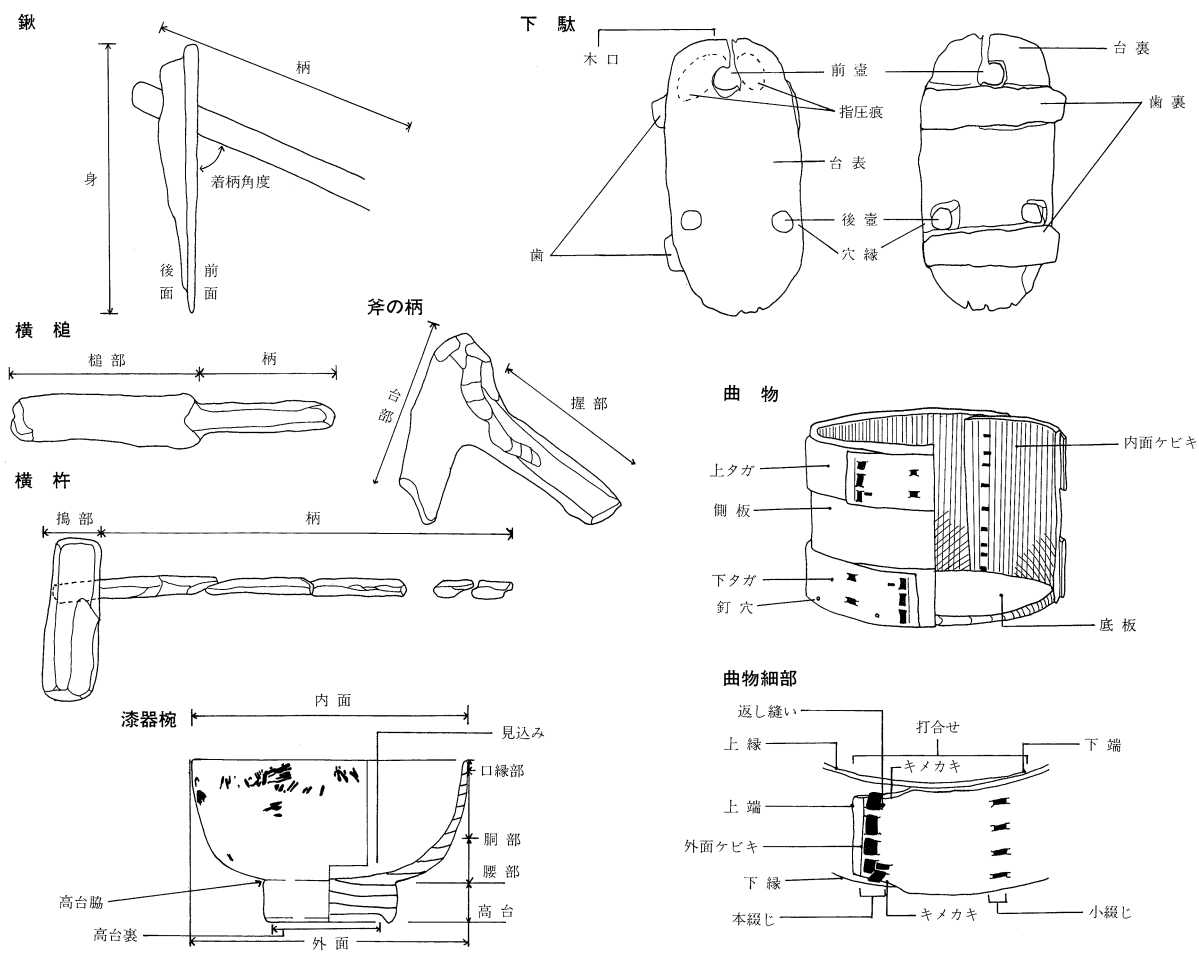
第173図　その他の陶磁器 8　(1/4)

D．木　製　品

木製品は，主に中世後期の遺構から出土している。種類の傾向としては，生産に関する遺物に比べ生活用具が多くみられる。ここでは残存状態がよい遺物を対象とする。はじめに種類名を与えた。椀はすべて漆塗りなので種類名を漆器椀とし，その他のもので漆塗りの場合は特記事項に示した。次に『木器集成図録　近畿古代篇[注1]』を参考に，すべての種類を１：農工具，２：服飾具，３：容器，４：食事具，５：遊戯具，６：雑具，７：祭祀具，８：木簡，９：井戸枠，10：柱・杭，11：加工木，といった機能上の分類を中心とした便宜的な分類にあてはめた。この数字は遺物観察表中の分類Ⅰにあたるものである。以下，この順で事実記載を行う。なお本文中で述べる主な用語については，第174図を参照されたい。また，まとまった数が出土している種類の中で，形態における特徴を記号化し，分類Ⅱに記した。計測値については最大長，最大幅，最大厚を記す。漆器椀については漆の色，文様，文字等を記入した。黒／赤は黒色漆に赤色漆で文様が描かれるが，文様名が不明であることを意味する。また挿図中の一点破線は漆塗りの範囲，破線は焼けた範囲を示し，スクリーントーンの表示は巻頭の凡例に従う。

１．農　工　具（第175～177図，図版94～96）

鍬身（１～６）　樹種はすべて広葉樹である。１～４は平面形を半楕円にかたどるものである。厚さは中央から刃縁に向かって薄くなる。１は表面全体が摩滅しており，部分的に焼けている。柄孔の平面形は台形を呈する。前面の柄孔付近は刃部より削りが深い。柄孔の幅は前面より後面の方が広く，後面から柄を挿入したものと思われる。着柄角度は前面に対して80°である。２は表面が焼けており，欠損部分が多い。３～６は柄孔の平面形が台形のものである。３は後面周縁には金属の鍬先を装着し



第174図　木製品部分名称

たと思われる痕跡がみられる。５の平面形は頭部の両端が外に張り出す。前後面とも摩滅しており，外周は面取りされている。柄の先端が身に装着されたまま残る。前面に対する着柄角度はほぼ90°である。中世後期の井戸から出土した。６の平面形は頭部の両端が外に張り出し，中央部分がくびれる。表面は部分的に焼けている。７は平面形が撥形を呈し，材の芯部分に円形孔をもつ。厚みは全体にほぼ1.5cmと薄く，均一に近いため鍬とは言い切れない。

背負子（８）　二又の木を利用したもので，端部から約２cmの所に抉りが入る。枝部には樹皮が，幹部には一部欠損するが加工痕が残る。背負子の枠木と考えられる。背負子は古くは弥生時代の遺跡から出土例が報告されているが，ここでは遺構の年代から中世前期の遺物と考えられる。

斧の柄（９）　台部･握部先端ともに欠損する。握部は木の枝部分で，台部側が木の根方向である。握部と台部の境は，細かく加工される。着柄角度を調整するため，握部下方から削った後，台部先端から削る。その角度は約80°である。

横杵（10）　搗部は断面が隅丸方形になるように面取りされ，柄も丁寧に削られる。搗部の臼と接する部分が相対する面より広くなっている。搗部には長方形の柄孔がみられ，柄が装着されて残る。柄の先端は搗部を突き出ない。着柄角度は95°である。搗部は径が14cm以上の，柄は径3.5cm以上の共に芯持ち材から製作される。

横槌（11）　芯持ち材で，槌部の先端は欠損する。槌部・柄ともに摩滅が激しく加工痕は不鮮明である。

臼（12）　籾殻を取り除くために用いられた木摺臼の上臼である。弥生時代から使用されていた杵と竪臼に取って変わったのは，平安時代からといわれる[注2]。中央に幅約７cmの抉りが巡る。この部分に縄を掛け，引き合ったものと思われる。抉りより上部内面と下部底面には放射状に幅３～５mmの目が刻まれる。芯棒は丁寧に削られている。本体，芯棒ともに広葉樹の芯持ち材である。

挽き木（13）　臼の挽き木と考えられる。芯持ち材で長辺の中央が緩く弧を描くように加工されている。握部は細かく削られる。もう一端は断面が隅丸方形で，長方形のほぞ穴に別材をはめ込んでいる。別材の凸部は先端が細く削り出され，臼に差し込まれていたものと思われる。

刷毛（14）　中央となる部分には５cm間隔で径３mmの３孔がみられ，２つの同材を結合していたものと思われる。

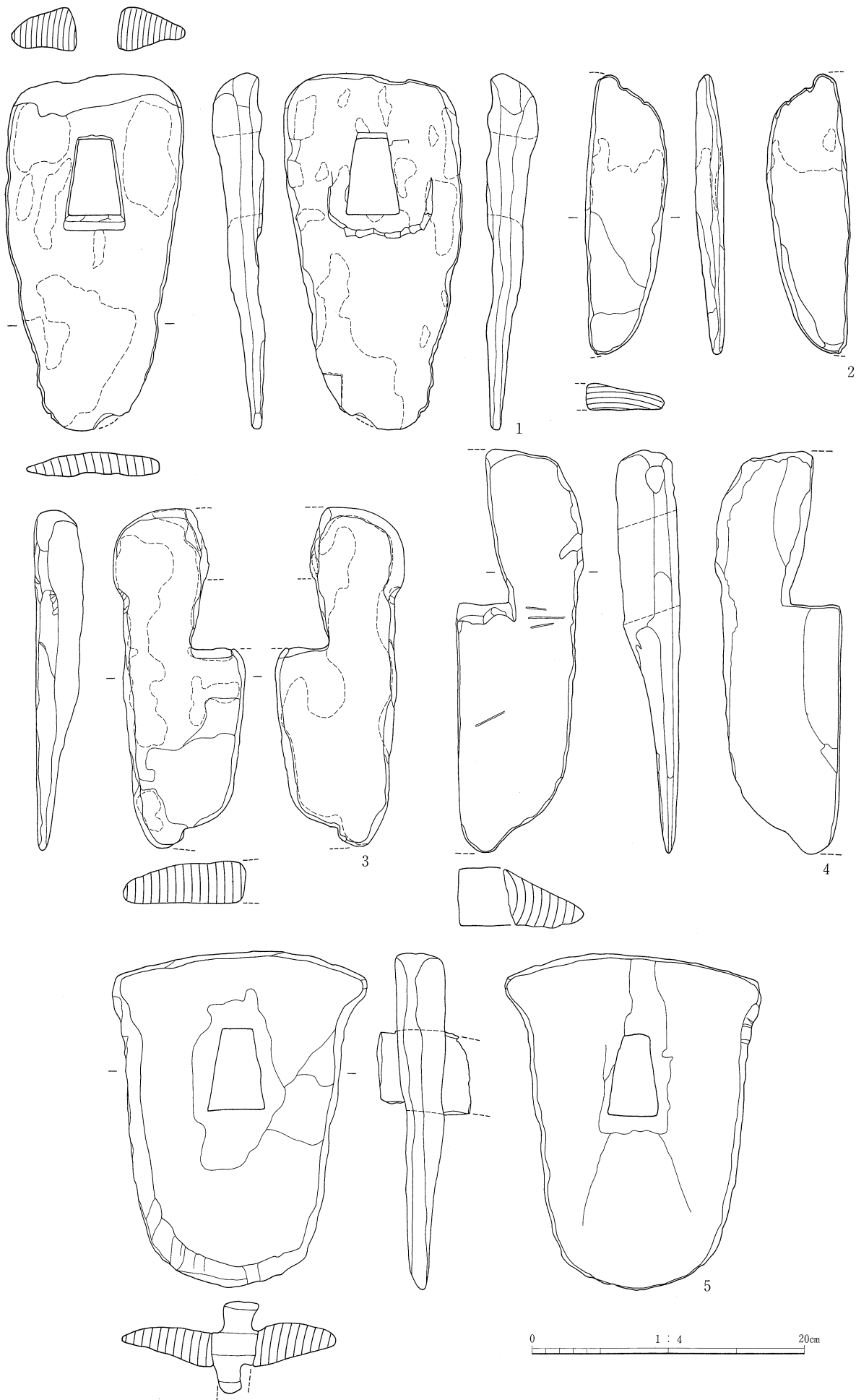
墨壺（15）　全体の２分の１と糸車を欠く。頭部は圭頭を呈すると思われ，中央に逆ハート形の壺をほり込む。壺の内側には細かい加工痕がみられ，若干墨が付着する。糸道は壺の中央部をわたって水平に貫通する。尾部は端部で蕨手状になるものと思われる。外側面には軸受け孔はみられない。尾部上面の径５mmの孔が軸受け孔となるのか。

２．服　飾　具（第177～183図，図版95～100）

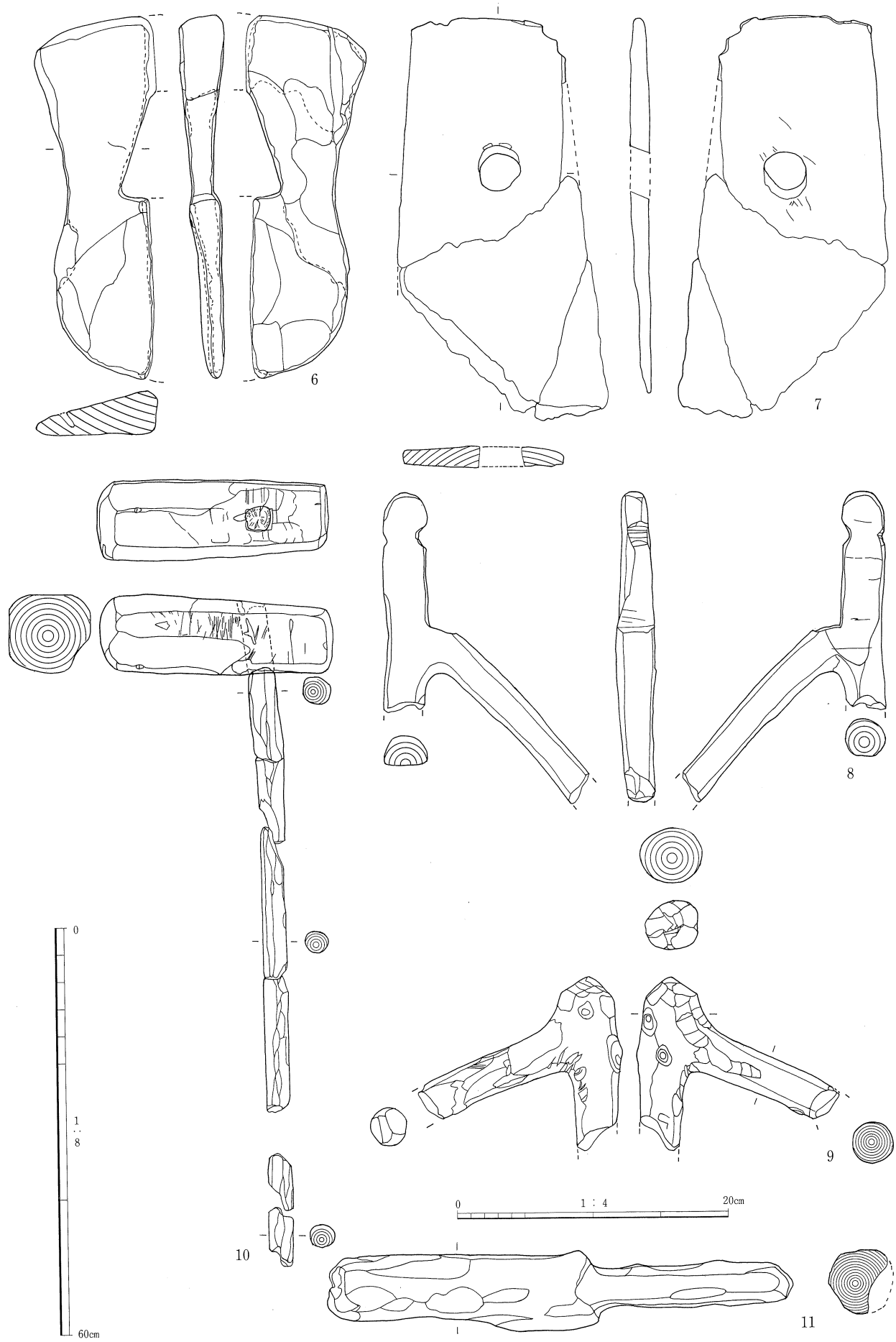
提灯（16）　２枚の側板が右回りに巻かれ，内側の内面・外側の外面はそれぞれ赤色・黒色の漆が塗られる。また２ヶ所に釣り手金具が残る。これは，ＳＥ5974からの出土で近代のものと思われる。

傘轆轤（17）　体部は赤・青色，底部は薄い桃色が彩色される。これは昭和初年に埋められた旧橋本川ＳＤ3401からの出土である。

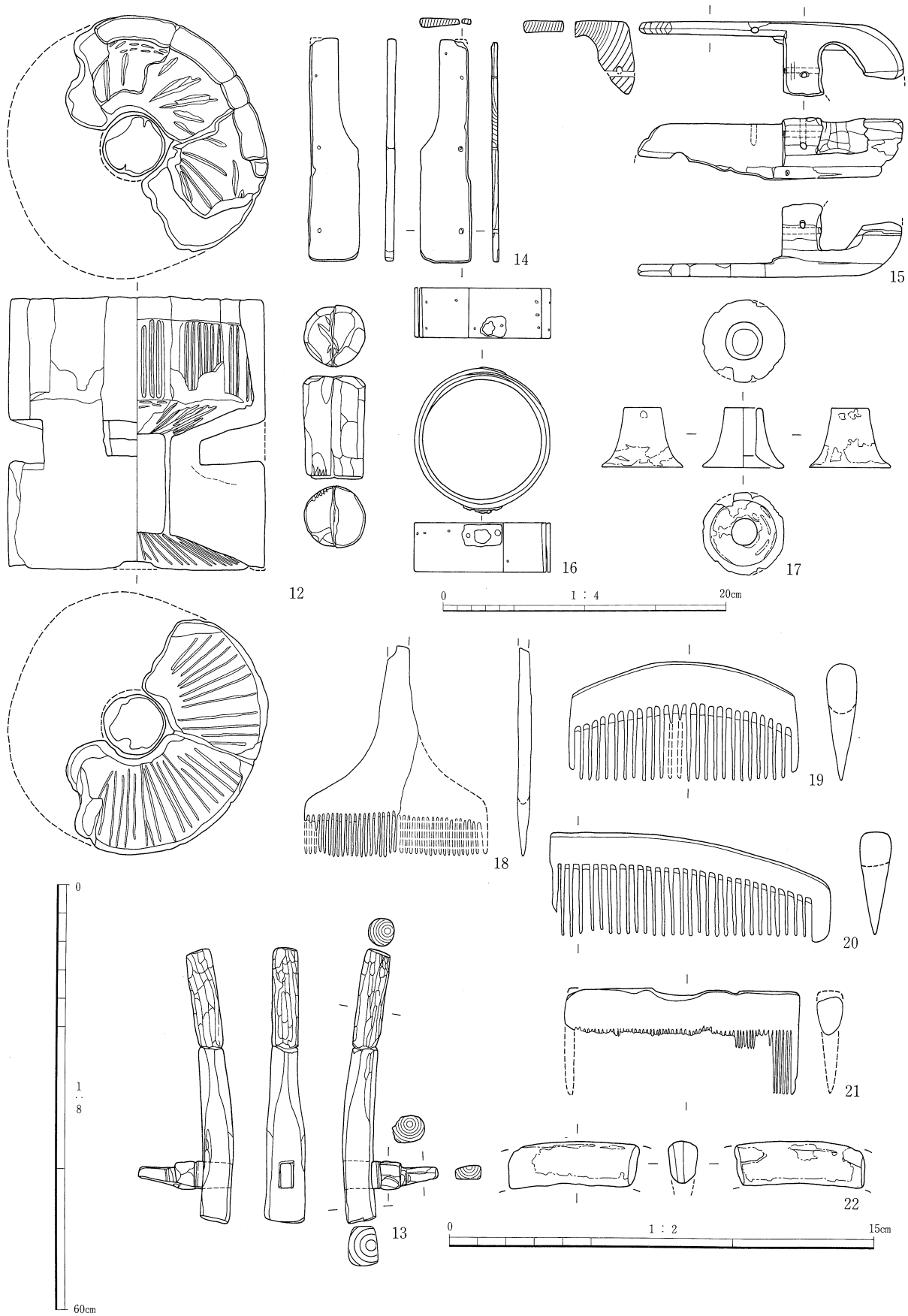
櫛（19～22）　18は黒漆塗りの竪櫛である。19～22は横櫛である。背が馬の背状のカーブを描き目が粗く歯数が少ないもの（19・20），背が直線的で目が細かく歯数が多いもの（21）がある。前者は梳櫛，後者は解櫛である。ともに断面は楔形を呈する。22は表面に赤色漆が塗られる。歯は欠損する。21は近世土台建物ＳＢ6390から，18・22はＳＤ3401から出土する。ＳＤ3401の上限は中世まで遡ると



第175図　木製品 1　〔農工具〕(1/4)



第176図　木製品 2　〔農工具〕（6～9・11　1/4，10　1/8）



第177図　木製品 3　〔農工具・服飾具〕(12・13　1/8, 14～17　1/4, 18～22　1/2)

考えられるため，遺物の時期は不明である。

下駄（23～55）　溝からの出土が多く，特にＳＤ10101からが多い。左右対で出土しない。構造は台と歯を一木からつくる連歯下駄と，台と歯を別材にしてほぞで組み合わせる差歯下駄，台裏後方をくり抜いたぽっくり形のものがある。

連歯下駄（23～50・55）　前壺はほぼ中央に，後壺は後歯より前方に穿たれる。歯を削りだした時の線状の鑿痕が，歯の際にみられる。後歯が後端に向かってすり減っているもの（25・30・33・41～43・46・47）がある。これらを形態から分類する。台の平面形は以下の４つに分けられる。Ａ：隅丸方形，Ｂ：長さに対して幅が狭く，前後端が半円形を呈する，Ｃ：小判形，Ｄ：前後端を弧状にするが，前幅より後幅が狭い。歯のつくりは，Ⅰ：台と同じ幅で縦断面が台形または方形である，Ⅱ：歯の下辺幅を広くすると共に，歯の四隅の角をおとして平面形を隅丸方形にする。Ⅲ：後壺より後方全体が歯となる，Ⅳ：台裏を抉り込んだもの，に分類できる。前壺の位置は１：中央に位置するもの，２：左右どちらか寄りに位置するものがある。以下ＡⅠ１類などとよぶことにする。

ＡⅠ$_1$類（48～50）　48は前歯高が欠損する。前壺の周辺は使用時の指圧痕がみられる。49は前壺前方は欠損し，前歯裏は摩滅，後歯は欠損する。４つの後壺がみられるが，後方の後壺は後歯を削って穿たれているため，後に作り替えられたものと考えられる。

ＢⅠ$_1$類（36）　前後の壺は欠損する。台表の指圧痕から右足用と思われる。

ＣⅠ$_1$類（23～29・32・38・41・44・45）　23は前後歯とも左側が欠損する。台裏の前後歯間には歯に平行した鑿痕が多数みられる。24は後壺の穴縁が狭く，欠損している。前後歯は低く，前歯の四隅に径２㎜の孔がみられる。これは補修孔と考えられる。25は指圧痕から左足用と思われる。26は台底の後壺間に鼻緒の圧痕と思われるものがみられる。27は一方の後壺は欠損し，表面の摩滅が激しい。28は壺がまっすぐ穿たれている。29は後方が欠損し，台中央と前壺付近に指圧痕がみられる。32の前後壺は台裏から穿たれる。前壺付近の台表裏は焼けている。38は壺の径が約８㎜と他の下駄より小さい。台裏左の前後歯の間には，後歯側から前歯側に面取りした痕跡と，歯に平行する鑿痕がみられる。41は後歯裏が摩滅して台の厚みとほぼ同じになっている。45は前歯が欠損し，前後壺は台裏から穿たれる。

ＣⅠ$_2$類（30・40）　30は前壺が台幅中央より若干右に穿たれるため左足用と思われる。40は前壺が台幅中央より右に穿たれる。後壺は１つしかみられないため未製品と考えられる。

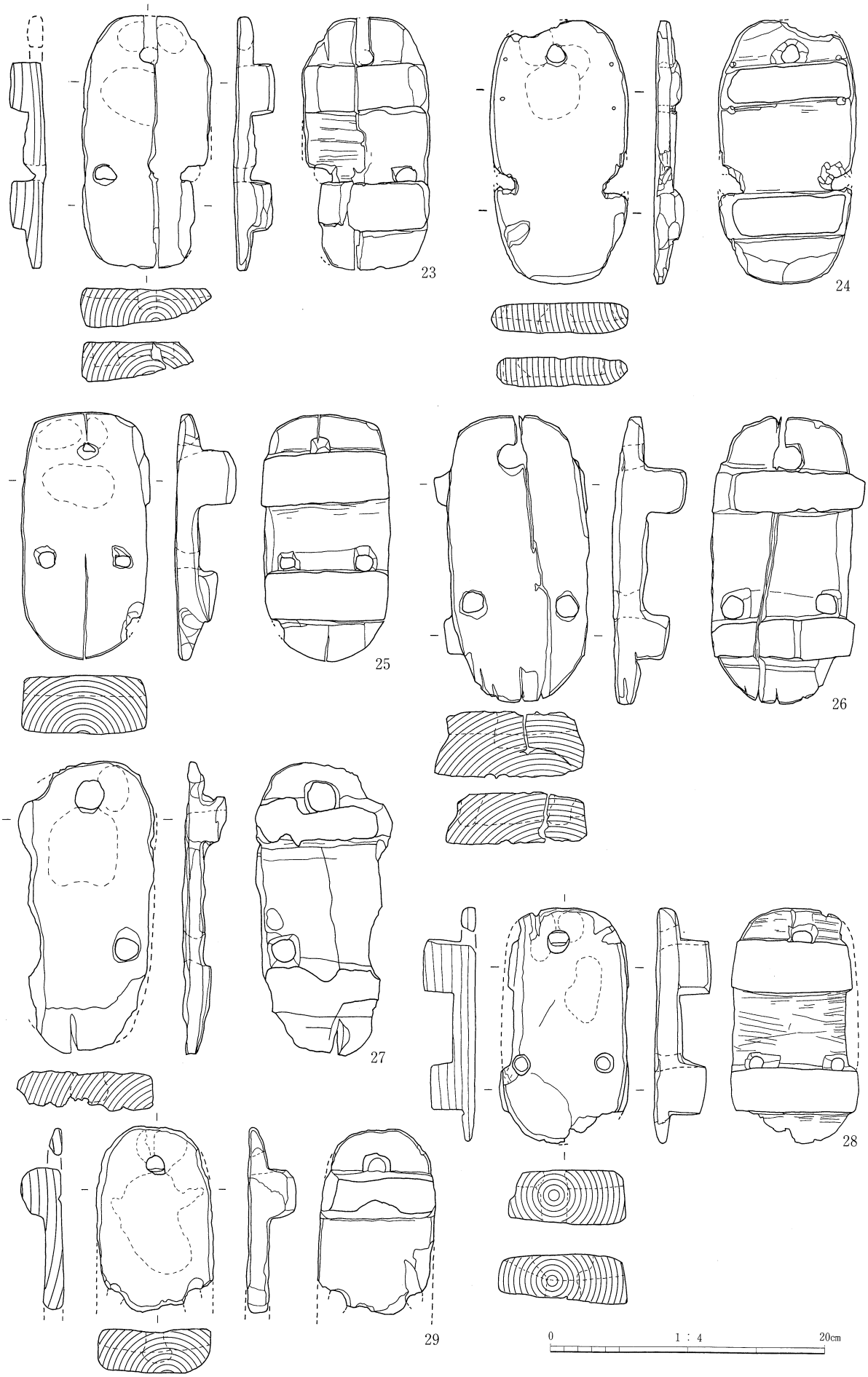
ＣⅡ$_1$類（34・35・42・43・46）　34は前歯前方が欠損し，前歯に比べ後歯の摩滅が激しい。35は歯幅厚みともに大きい。42は台表の左端に「×」状の切り傷がみられる。前後壺は台裏から穿たれる。43は後歯の右側が欠損する。台表の指圧痕から左足用と思われる。

ＣⅢ$_1$類（37・39）　39は前歯高が若干残る。台裏の後壺付近に線状痕がみられるため，もともとは後歯をつくりだしていた可能性もある。

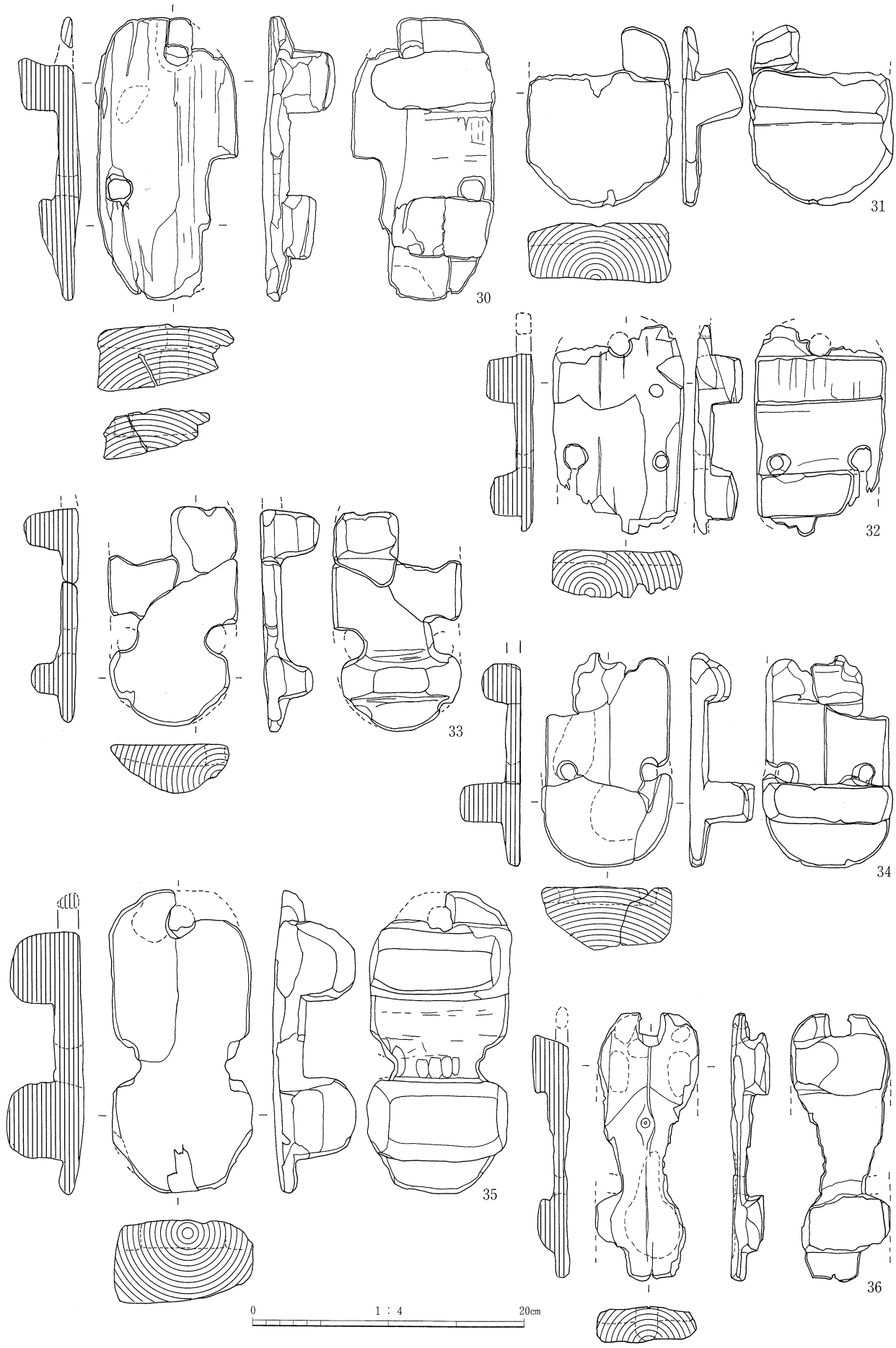
ＣⅣ$_1$類（55）　前後壺間が長く，前後壺から上端下端までの長さが短いといった近世的な要素をもつ。台側面は黄色漆が，表は緑色漆が塗られ赤色漆で文様が描かれる。ＳＤ3401から出土している。

ＤⅡ$_1$類（47）　前歯高に対する後歯高の摩滅が激しい。

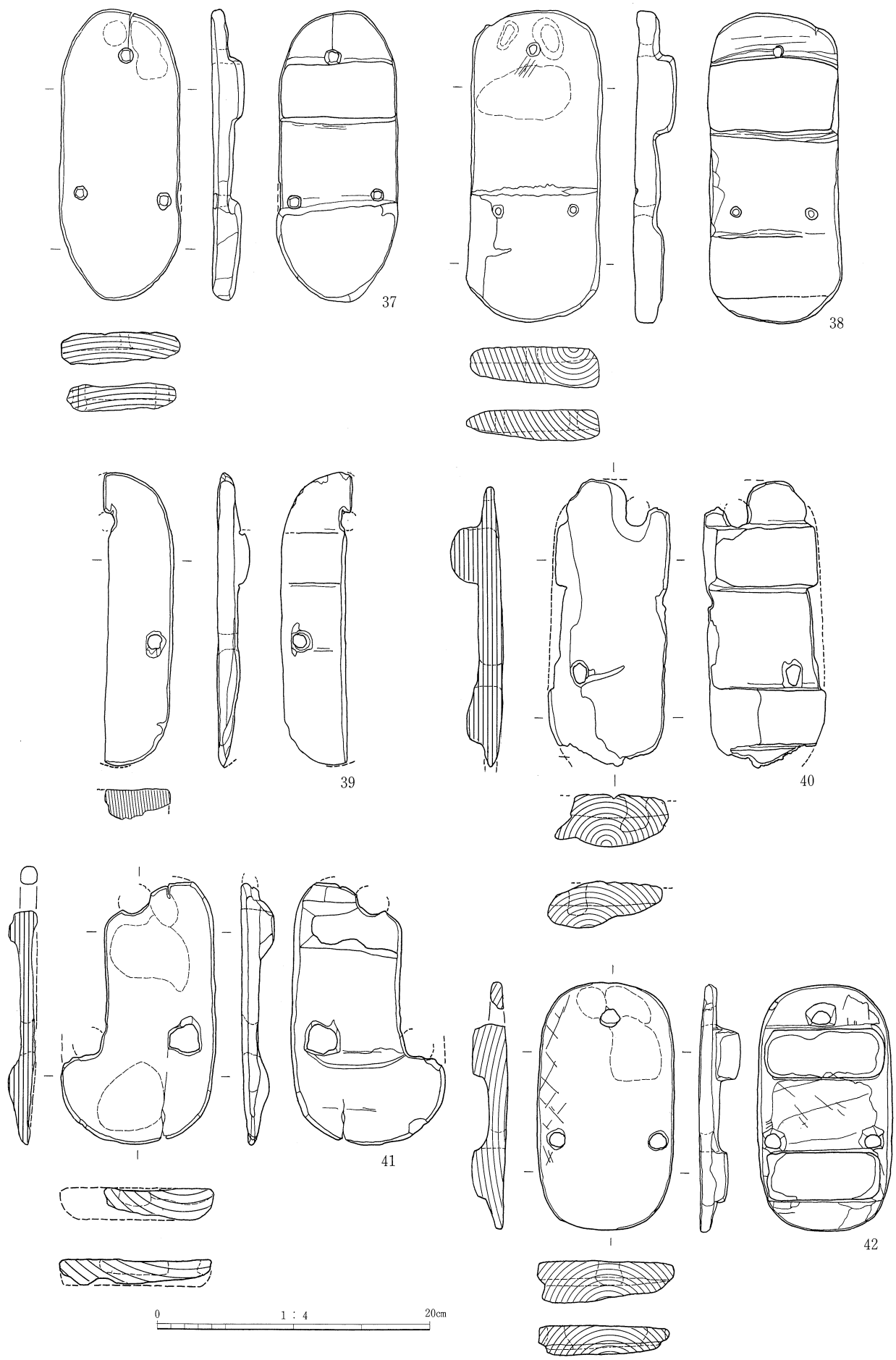
差歯下駄（51～54）　台裏に溝を切り歯をはめ込み，ほぞが台表に露呈する露卯下駄である。51・52・54は前穴式である。51は台中央に歯を挿入するための孔が方形に４つ並ぶ。前歯が若干残る。52は台中央に前歯を挿入するための孔が２つ並ぶ。53は台裏には細かい加工痕がみられる。歯は残存しない。54は歯を挿入するほぞ孔が前後１つずつみられるものである。後壺から後ろ木口までが長く，



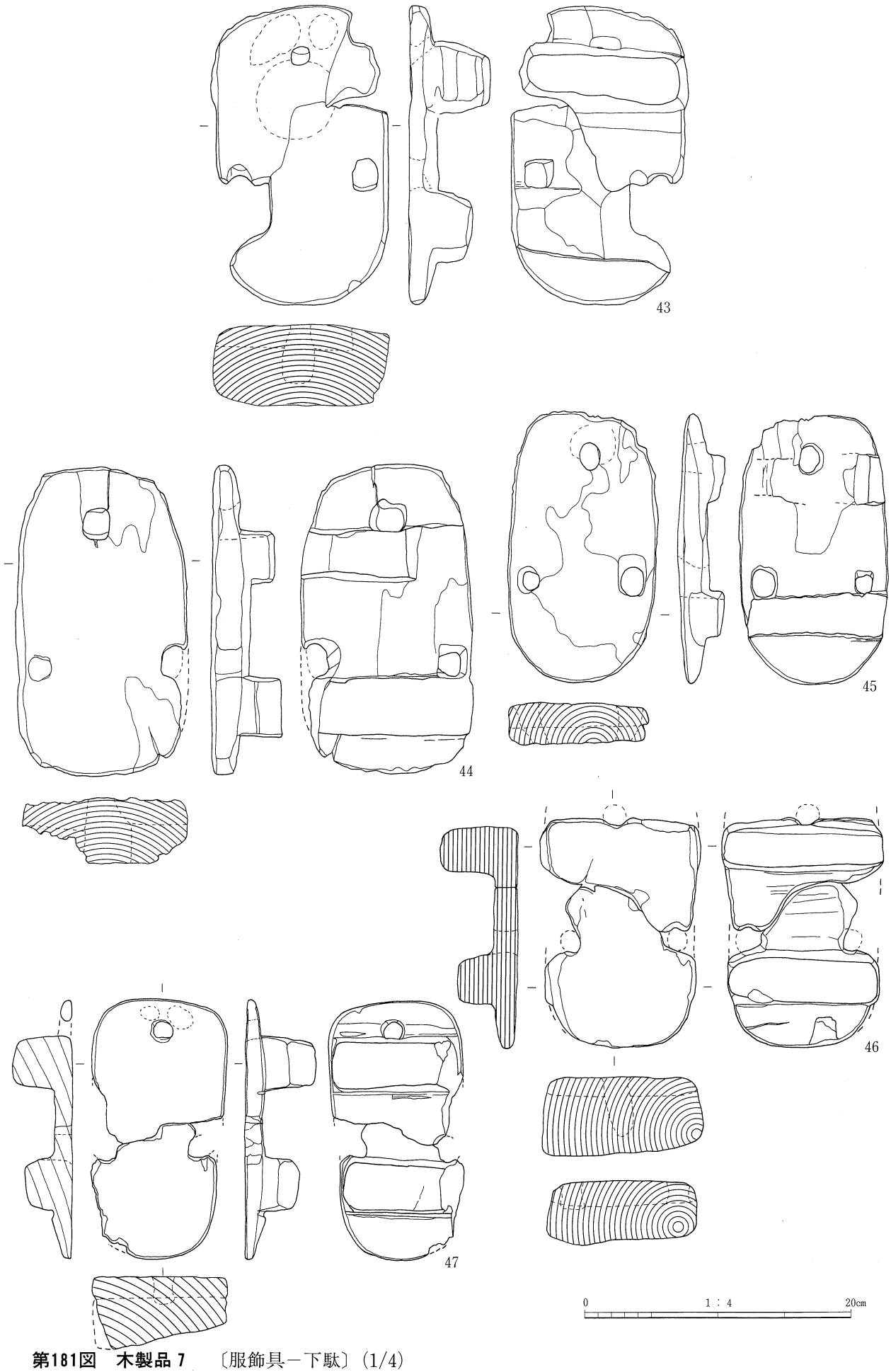
第178図　木製品 4　〔服飾具－下駄〕(1/4)



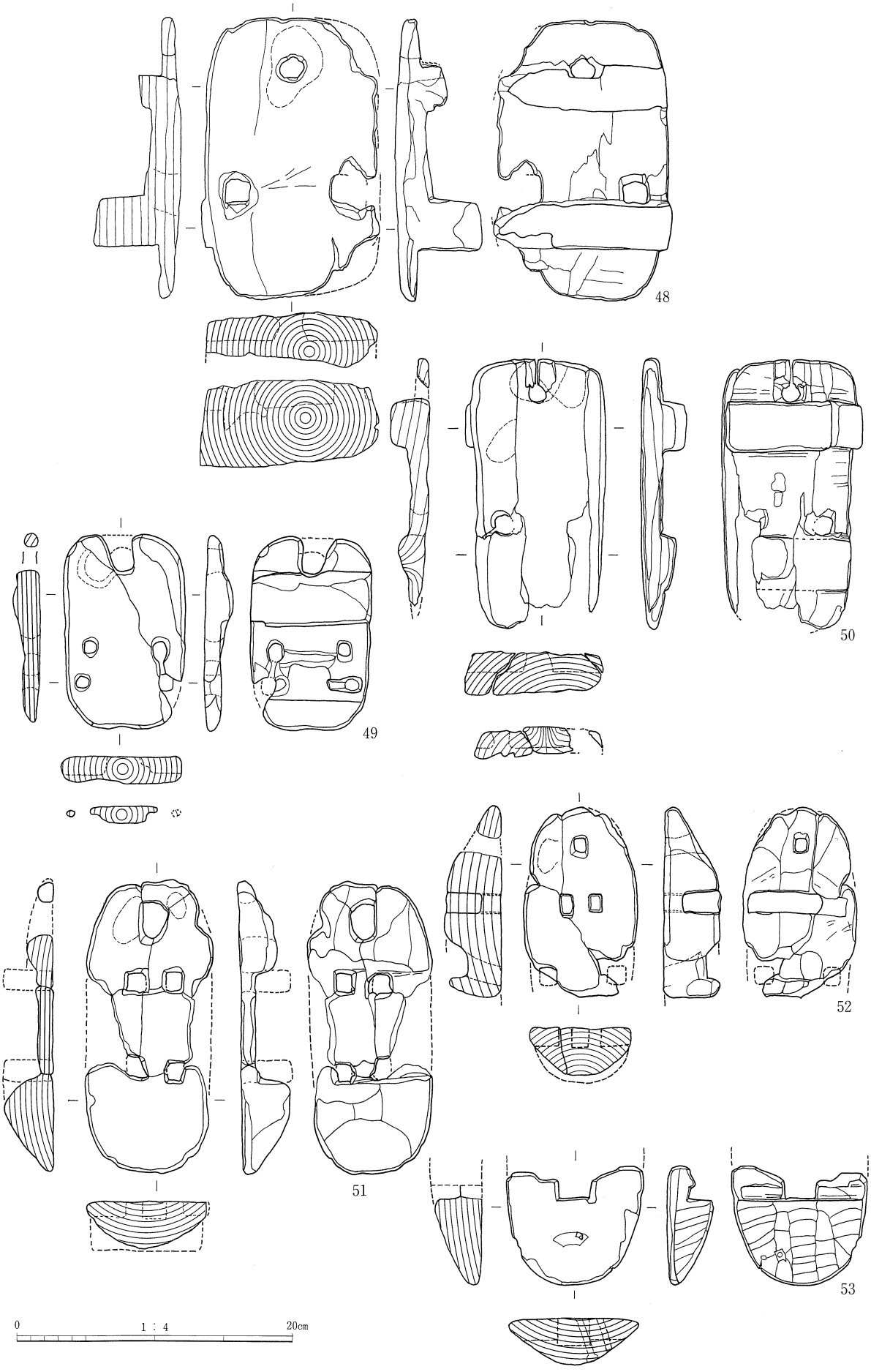
第179図　木製品 5　〔服飾具－下駄〕(1/4)



第180図　木製品 6　〔服飾具－下駄〕(1/4)



第181図　木製品 7　〔服飾具－下駄〕(1/4)



第182図　木製品 8　〔服飾具－下駄〕(1/4)

中世的である。台と歯の樹種は異なる。

3．容　　器（第183～193図，図版100～121）

容器には長方形の薄板を曲げてつくった側板を綴り皮で綴じ合わせ，底板を取り付けた曲物，柄杓がある。側板と結合されている円形の板に関しては底板，円形の板が単独で出土している場合は，円形板と表現する。側板の重ね綴じ方，側板と底板の結合法に関する用語は『木器集成図録　近畿古代篇』[注1]，「曲物細部技法」[注3]を参考とした。

柄杓（56～67）　66・67は挽物で，広葉樹を用いている。66は体部外面に3条1単位の沈線が3ヶ所にみられる。最上の沈線部分に方形孔が，相対する面の最下沈線上部に円形孔がみられる。横木取りで，芯から離れた部分を用いてつくられる。これはＳＥ9916の最下層から唐津の皿と一括で出土した。17世紀と考えられる。

56～65は円形曲物を身にして，棒状の柄を取り付けたものである。58・62・63は中世後期の遺構から出土しているが，その他は不明である。側板は柄の握部側に方形孔，柄の先端が側板を突き抜ける側に円形孔が確認できる（56～59･65）。側板の本綴じは1列で最上段が長くなっている。また方形孔の右側は2列1段で，孔に近い方の縫い目が長い。円形孔の両側はハの字に綴じられるが，綴り皮がみられないもの（58・59）もある。柄の装着角度は13～20°である。底径は7.2～10.2cmの間におさまる。製作技法に着目すると，56～59・62・65は側板の上端際の上下縁を直線的あるいは曲線的に抉って両角をおとしている。これは縁の仕上げをしやすくしたり，摩擦などで綴り皮が切断されるのを防ぐために考案された技法で，現在曲物の一大生産地として名高い木曽地方では「キメカキ」と称される。ここでもこの用語を用いることにする。

また56～59・61・62・65の側板重ね綴じ方に着目すると，本綴じは綴り皮で1列外綴じされ，その上端側に一条のケビキが引かれる。これは「外面ケビキ」とよばれる。綴り皮を通す孔は，木目と平行に穿たれるため割裂が生じやすい。そこでケビキを設けることにより緩和できるという。

側板と底板の結合法に着目すると，底板が側板の内側に入り込むもの（56～60）がある。これは「クレゾコ」とよばれ，木釘（56・58～60）を用いて固定される。

56の側板の綴じ合わせは，綴り皮を用いており3ヶ所にみられる。本綴じ部分，方形柄孔の右際，柄の先端を挿入する孔をハの字で囲む。柄は残存しない。底板は底面に墨で「十」と書かれ，内面は丁寧に削られる。57の側板と底部は綴り皮で2ヶ所結合される。底板は一部欠損する。58の側板は漆塗りである。身の口縁端部は摩滅している。本綴じは1列外3段綴じである。側板と底板は木釘で結合される。柄は一部が残存し細かく面取りされ，先端は焼けている。59は1列外4段で本綴じされる。61は側板が一部しか残らないが，漆塗りである。底板内面は丁寧に加工される。63は上端が欠損するが，本綴じと縦長の方形孔がみられる。底板は完形で残存するが，側板からはずれている。64は底板は完形であるが，側板は製作技法のわかる部分が残存しない。65は身と柄が残存する。握部側の柄孔の左右は，綴り皮でしっかり止められている。柄のほぼ中央に小孔が穿たれる。

曲物（68～73）　69・72・73は漆塗りである。身の部分を二重の側板でつくり，側板を補強するためにその上下縁にタガを巻き付ける。上下ともに残るものは68，下方に残るものは70・72・73である。68・72・73のタガ上端，68・69の側板上端には外面ケビキがみられる。68・72・73のタガ部分にはキメカキがみられる。69は上端の両角が丸く削られている。68･70は側板と底板が綴り皮で結合される。70は底板内面に漆の縮み皺がみられ，漆液容器の可能性がある。69は底板が一部欠損するが，3ヶ所に丸い木釘が残り，結合されていたと思われる。側板と底板は丸と四角の釘がセットで3ヶ所にみら

れるためここで結合していたと思われる。クレゾコである。70は側板の上縁が欠損する。内底面には漆が皺のようになってはりついており，漆液容器の可能性が考えられる。68のタガ部分の本綴じは2列前外3段綴じで，後列は欠損する。72のタガ部分は1列外7段綴じである。73のタガ部分は2列前外6段綴じ，後内4段綴じである。71は1列内綴じである。73の底板は外面に細かい線状痕，内面に幅2～3㎝の削り痕がみられる。71・72は側板内面に平行ケビキが入る。

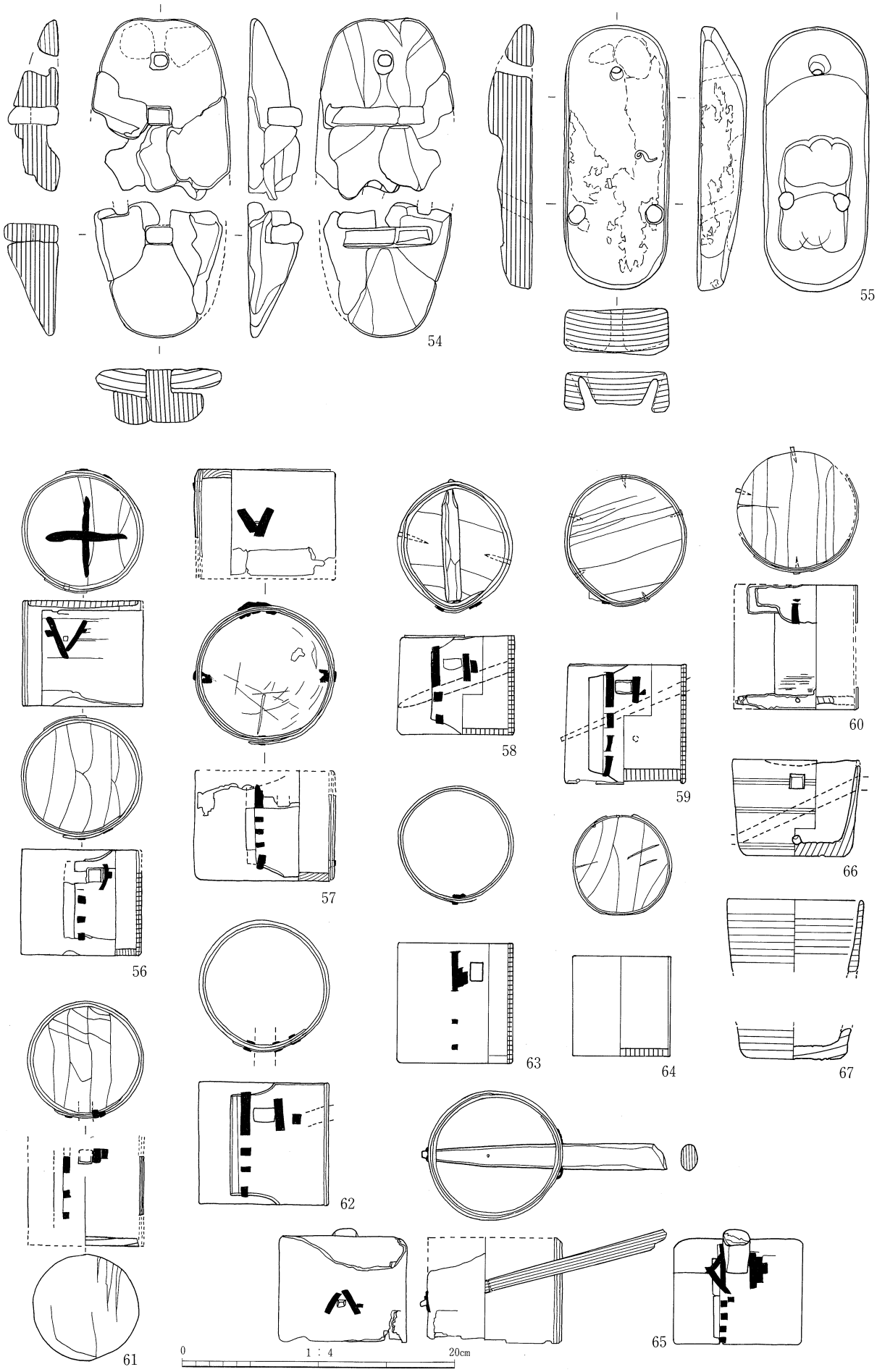
円形板（74～116）　渋塗りされるものがある。樹種はスギ・ヒノキなどの針葉樹である。74～80・82～85は側板との結合痕を残さないものである。板端の削り方は，片面からもう片面へ斜めに削るもの（74～76・84）がある。74は漆が塗られている面の中央に墨で「十」？と書かれている。77は片面に線状痕が多くみられる。78は部分的に焼けている。80はある単位を形成しているように見える線状痕がある。83は斜め上下方向に加工痕が，外周には切り込みがみられる。84は他に比べて厚く，表面は一定方向にハケメ状の加工痕がみられる。近代と思われる。85は表面は部分的に焼けており，線状痕が多くみられる。

綴り皮や木釘がみられるものがある。これは側板との結合あるいは複数の材を結合させるために用いられたものである。86～92は綴り皮がみられる。87～89・91は3ヶ所に綴り皮がみられ，その位置を直線で結ぶと二等辺三角形を呈する。92は2ヶ所に割れが認められ，綴り皮で補修したものと思われる。

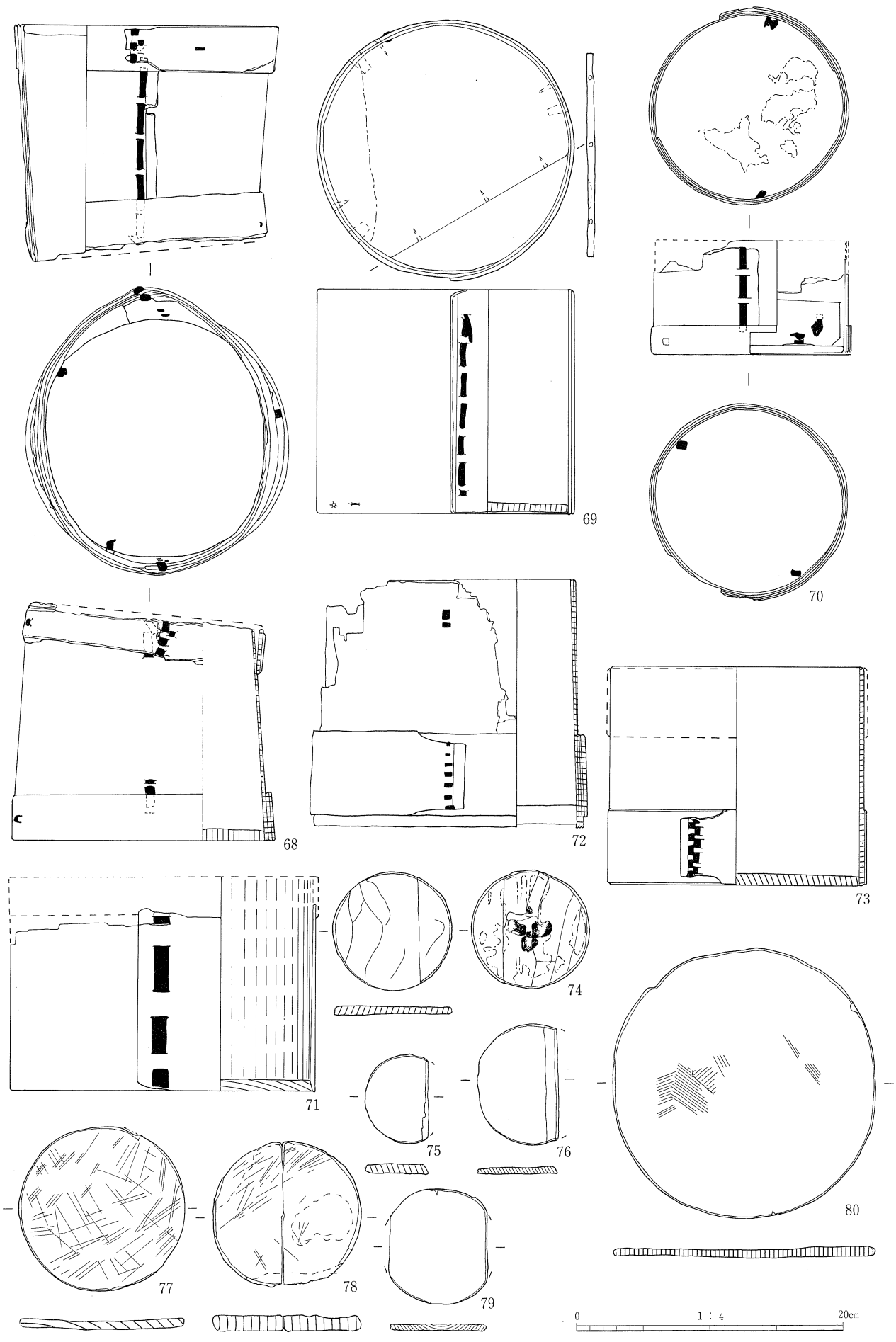
93～101は木釘がみられる。94～96・98～101は複数の材を結合してつくられている。93・97は外周に木釘がみられ，側板と結合されていたと思われる。98・101は3枚の板を木釘で結合させ，片面は線状痕がみられる。近代と思われる。101は木の根部分が用いられたため，年輪がうねっている。103は外周に切り込みがみられる。104は外周側面を細かく面取りし，平面も幅2㎝程度を単位とする加工痕を残す。

81・102・105～116は平面に孔が穿たれるものである。割れた材を木釘で結合しているもの（105・107）がある。ここで孔について着目する。外周に沿ってみられるもの（106）がある。これは，内面の周縁を一段低くして，ここに側板を木釘で結合させたと考えられ，カキゾコといわれる。中央に1孔みられるもの（105・107）がある。中心に1孔あり複数の孔がそこを通って直交するもの（108・111）がある。108は外周の3ヶ所に木釘痕がみられ，片面の中央は焼けている。孔が一直線上に並ぶもの（109・110・114）がある。110は中央に2列の孔が，外周付近には極小の2孔がみられる。81は複数の板を結合させて1枚としたもので，表面が焼けている。孔は不規則に並び，中央部と端部に穿たれる。端部の孔の中に植物繊維のようなものがみられるため，紐が通されていたと推測できる。102は漆塗りである。長辺の1辺には3孔があり，別材と結合していたと考えられる。112は板の中心に4つの小孔が方形を描くように並び，その一外端に径1.2㎝の孔がみられる。115は中心よりやや外周寄りに3孔が並び，真ん中の孔から外周に向かって垂直方向に2つの小孔がみられる。116は部分的に焼けている。外周付近に径約6㎝の孔がみられ，栓がはめ込まれていたと思われる。桶蓋と考えられる。

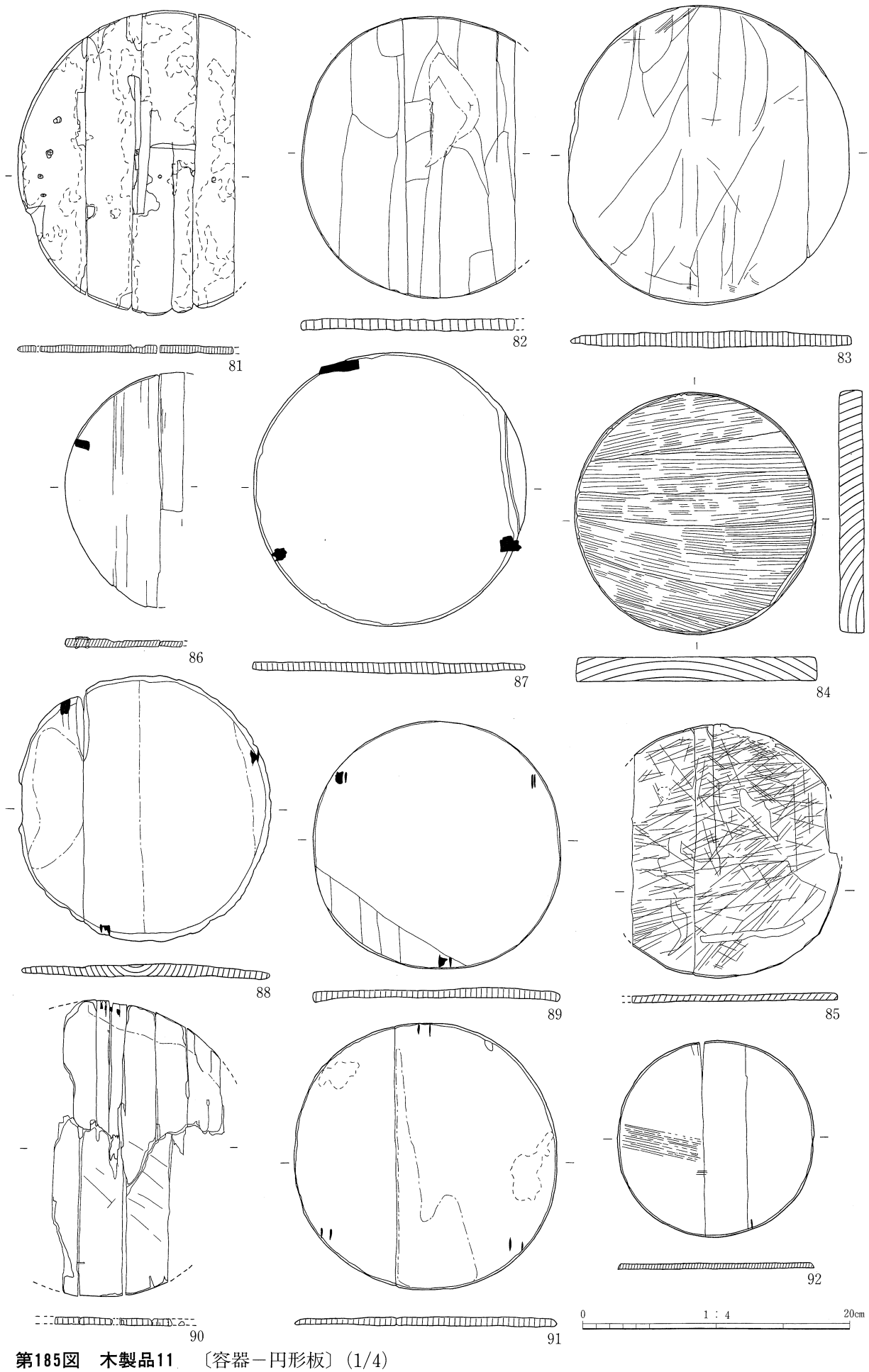
蓋（117～121）　117は芯持ち材を六角形の板に切り，面取りされた直方体の取手が付く。118～121は円形を呈する。内面中央が突出し，容器の口径におさまるものと思われる。119・121は全面に黒漆が塗られる。



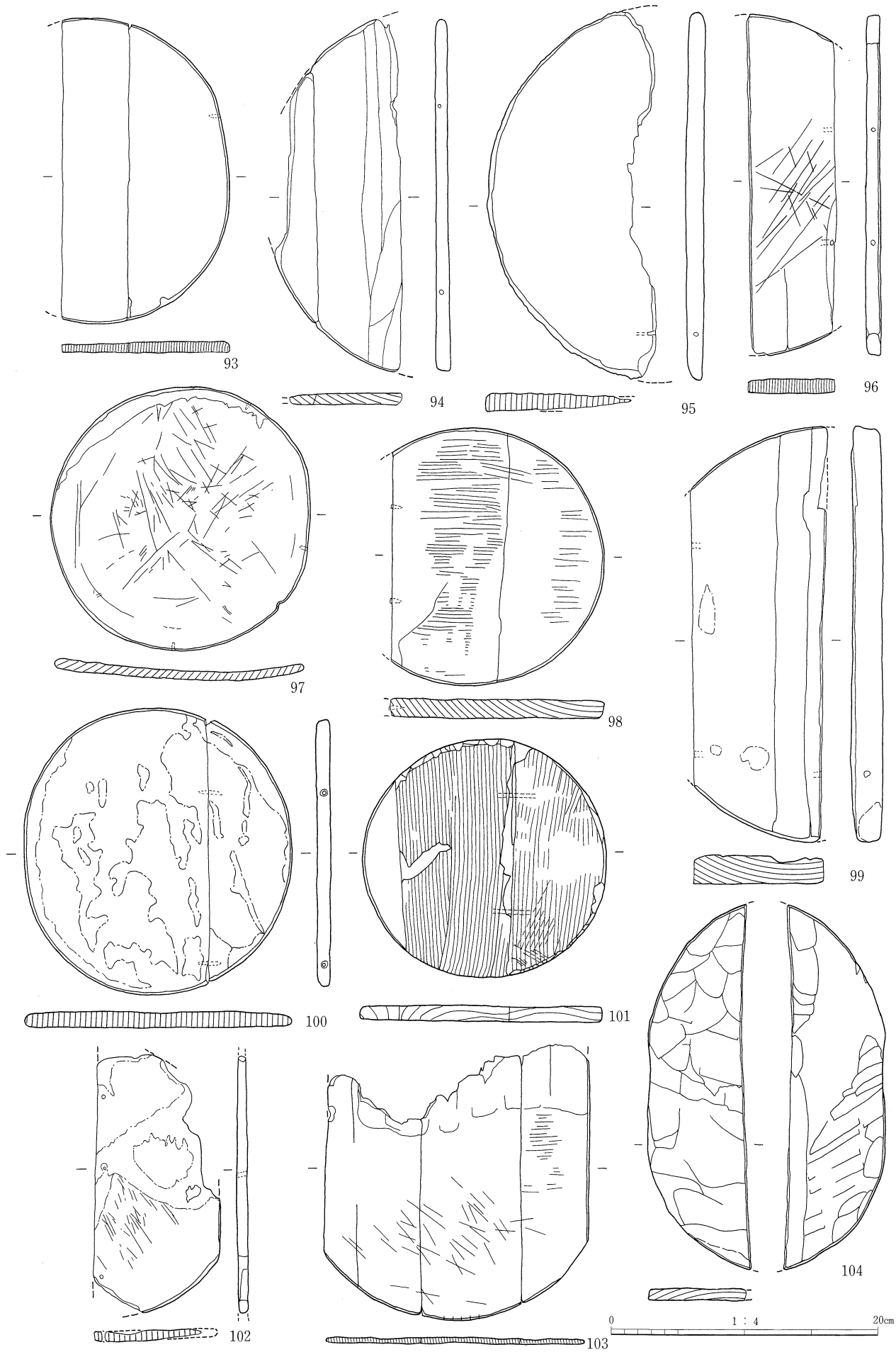
第183図　木製品 9　〔服飾具－下駄・容器－柄杓〕(1/4)



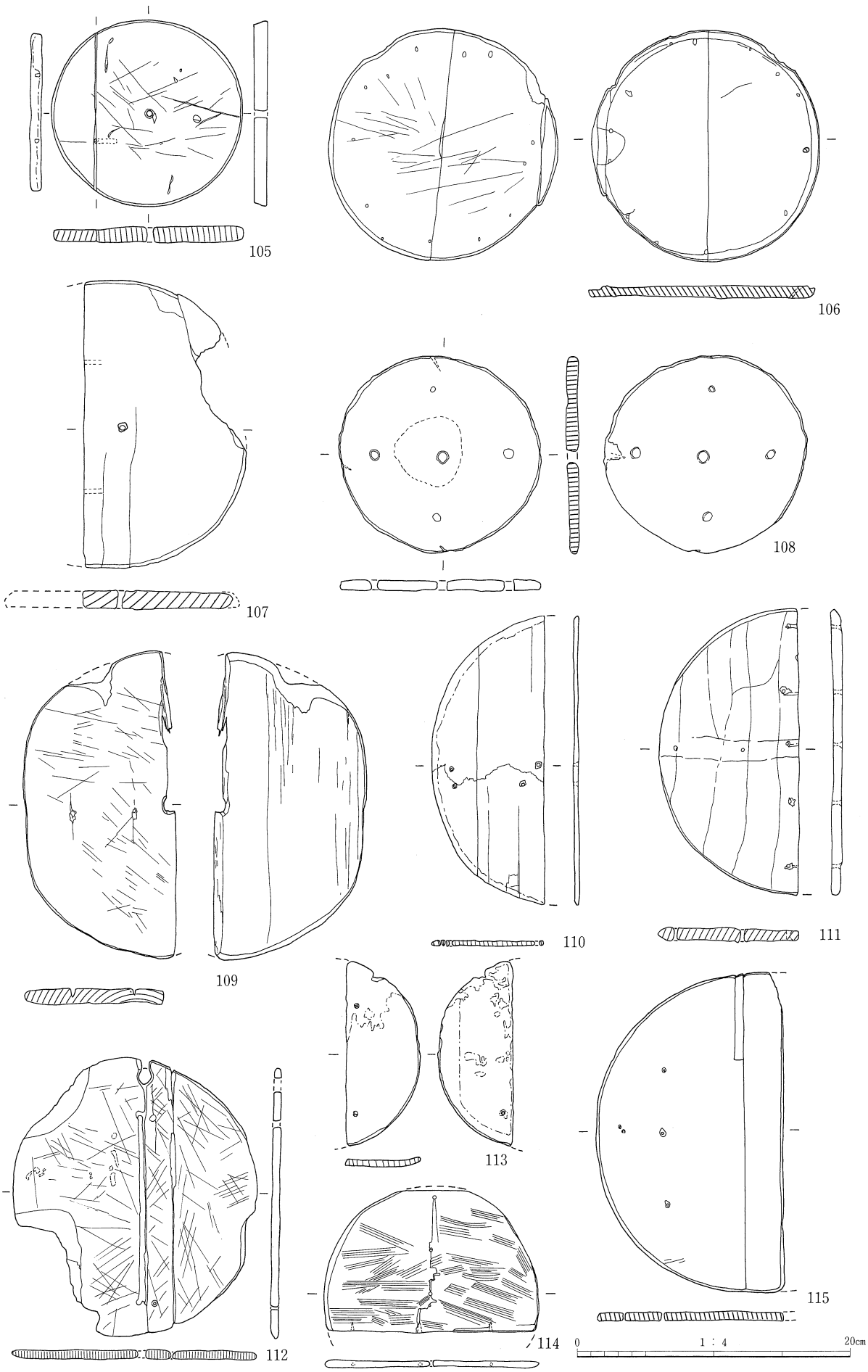
第184図　木製品10　〔容器－曲物・円形板〕(1/4)



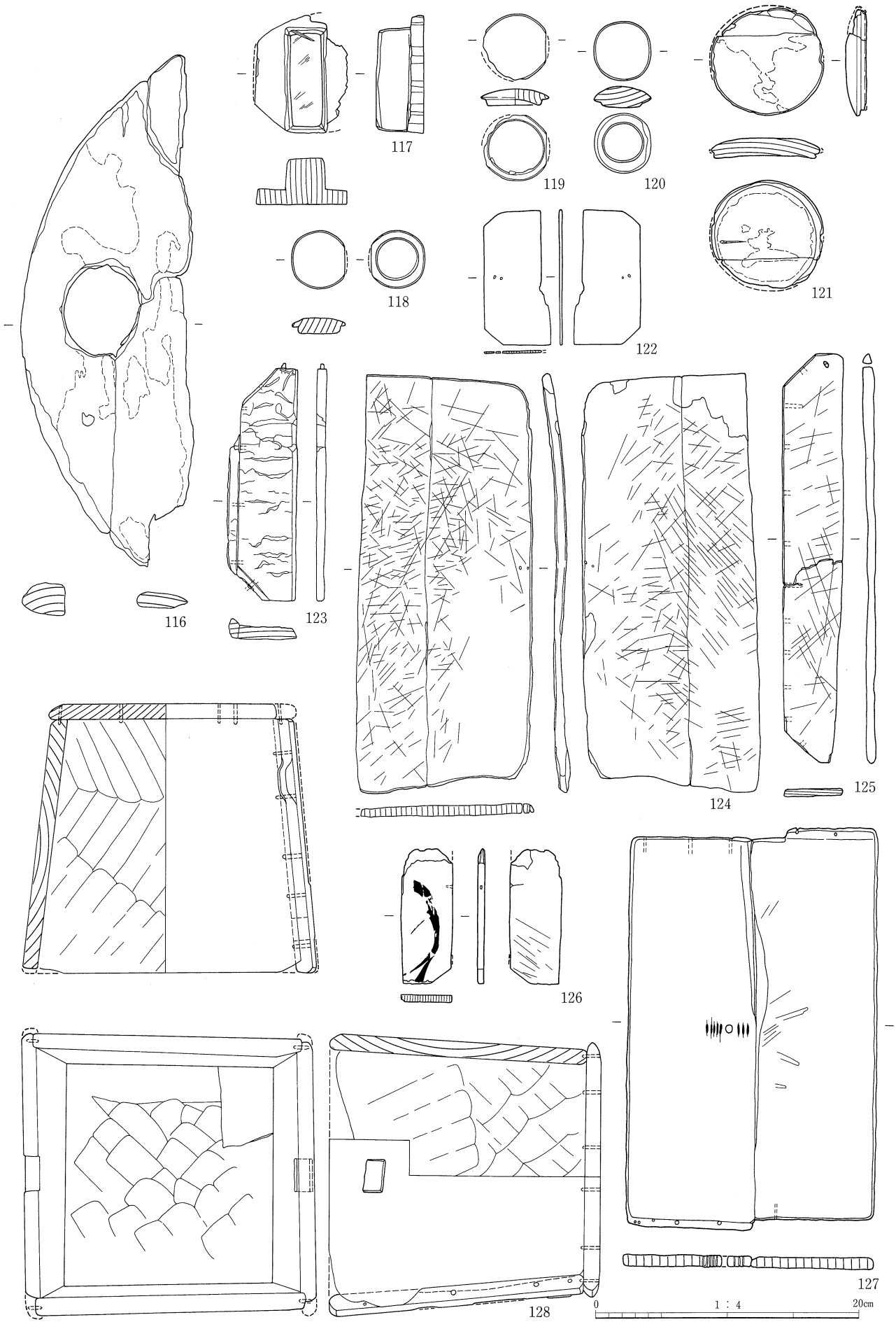
第185図　木製品11　〔容器－円形板〕(1/4)



第186図　木製品12　〔容器－円形板〕(1/4)



第187図　木製品13　〔容器－円形板〕(1/4)



第188図　木製品14　〔容器〕(1/4)

折敷（122～127）　底板と考えられる。平面形は，長方形あるいは方形の四隅を切り落とした八角形と推測できるものがある。123は表面は炭化しているが，漆塗りであったと思われる。外周縁には木釘がみられる。124は外周縁に２つの小孔がみられる。両面とも線状痕が多くみられるため，まな板に転用されたとも考えられる。125は漆塗りで，外周に約２㎝間隔で木釘がみられる。126は全面黒漆塗りで，片面に赤色漆で文様が描かれる。外周に木釘がみられる。127は両短辺縁は一段薄く削られ，木釘がみられ，２枚の長方形板を結合させていると思われる。中央に外面から内面に穿たれた径５㎜の孔があり，その両側に綴り皮がみられる。

手桶（128）　丁寧に加工された側板と底板は木釘で結合される。結合部分は一段薄く削られる。一側板の口縁付近に方形孔がみられ，相対する面の口縁上端は凹状に抉りがみられる。取手を付けていたのであろうか。

漆器椀（129～193）　木材を刳っておおよその形を整え，ロクロによって整形した挽物で，形態から４つに分類した。Ａ・Ｂ類はいわゆる一般的な「椀」を基調とするものである。Ａ類は高台が２㎝前後で，器高が高く総体的に大ぶりなもの（129～153）である。Ｂ類は高台が１㎝前後で，口径に対して器高が比較的低いもの（157～158・160～167・171・172・175）である。これらは黒色漆塗り，または黒色漆に赤色漆で文様が描かれる。文様はすべて手描きである。漆は全般的に塗りが薄く，剝離しているものが多い。Ｃ類は杯形態であり，高台裏は黒色漆その他の部分は赤色漆が塗られるものもみられ，塗りが比較的厚い。高台裏に文字または線刻がみられる。Ｄ類は皿形態である。

ＡⅠ類（129～137）　高台脇から腰部はゆるやかなカーブを描き胴部は比較的垂直に立ち上がるものである。129は見込みに銭文を描く。131は外面黒色漆，内面赤色漆塗りである。高台裏は右回りに削られた痕跡がみられる。132は胴部上方に外面から穿孔される。130･133は内面が赤色漆，外面は黒色漆に赤色漆で文様が描かれる。134は全体に黒漆塗りで，内外面に赤色漆で文様が描かれる。136は外面に角立て井筒文が描かれる。137は内外面ともに赤色漆で文様が描かれ，高台裏に右回りに削られた痕跡がみられる。

ＡⅡ類（138･140～145，147～153）　高台脇から腰部が緩く屈曲しながら胴部から口縁へ開き気味に立ち上がるものである。138は外面に鶴と草木文が描かれる。141・142は見込みに俵文を描く。142は四方柾の材からつくられている。143は直径60㎝以上の材から横木取りされる。径約２㎝の孔が高台裏から穿たれる。148は胴部に径約５㎜の孔が穿たれる。漏斗に転用されたと考えられる。144は内外面ともに赤色漆で文様が描かれ，高台裏に「一」？と書かれる。145は高台裏に「上」？と書かれ，長方形の傷がみられる。ロクロの爪痕か。木取りは木口面を三等分にミカン割りし，各々に３個ずつ椀を取ったのではないかと推測される。151は見込みに扇文が描かれる。14～15世紀である。150は高台裏の外周に浅い沈線が入る。151は14～15世紀，139・141は16世紀である。

ＢⅠ類（157～162・172・175）　高台脇から胴部にかけて直線的で胴部から上は緩やかなカーブを描くもの。158は外面が黒漆に赤色漆で文様が描かれ，内面が赤色漆である。高台裏には「一」と書かれる。160は見込みに扇文が描かれる。161は高台が欠損し，内外面に赤色漆で鶴と草木文が描かれる。162は高台裏に「常」と書かれ，長方形の傷がみられる。ロクロの爪痕か。172は内外面ともに二の丸文と鶴丸文が描かれる。二の丸文は円を描いた後，円に重ねるように二を描く。外面は二つの文様が対称的な位置に描かれると推測する。175は高台裏の漆が剝離した部分に長方形の浅い溝がみられる。ロクロの爪痕か。

ＢⅡ類（163～166・171）　器高が低く，高台脇から緩く湾曲しながら立ち上がるもの。164は内外

とも文様が描かれ，内面には鶴と草木が描かれる。鶴はひっかき技法を用いている。165は内外に扇文が描かれる。166は高台裏に線刻がみられる。171は他に比べて器高が高い。このほか挿図には掲載していないが，ＳＤ4605から漆液容器と思われる内面赤色漆椀が出土している。

ＣⅠ類（173・176・178～185）　胴部が緩いカーブを描くものである。183は全体に黒色漆塗りで，見込みに赤色漆で文様が描かれる。高台裏に「十」の線刻がみられる。173・176・180～182・184・185は内面赤色漆塗りである。173は外面黒漆で赤色漆で文様が描かれる。176は高台が若干擦れている。外面は黒色漆で鳥が描かれ，高台裏は「上」と書かれる。180は外面が黒色漆で高台裏は「吉」？と書かれる。181・182は高台裏のみ黒色漆塗りで「一」・「安」とそれぞれ書かれる。182は漆が厚く塗られ，木胎は朽ちている。185は高台と高台裏のみ黒漆塗りである。185は15世紀，178・180は16世紀である。

ＣⅡ類(186)　高台脇から口縁へ直線的に外に開き，器壁が厚いものである。口径と深さの比は７：１である。黒色漆塗りである。

ＣⅢ類（187）　高台脇から胴部へ直線的に外に開き，口縁部が外反するものである。全体に赤色漆である。高台裏のみ黒色漆が塗られ，「シ」？が書かれる。

Ｄ類（177）　口径に対して器高が低い皿形態のものである。内外面とも赤色漆塗りである。高台裏が黒色漆塗りで高台裏に線刻がみられる。これは梅原と宗守の境界に位置するＳＤ7600から出土する。

このほかの椀として，155には脚部に幅約１㎝前後の鋸歯状の刻みがみられる。156は高台裏には長さ１㎝幅２㎜の浅い溝が２つみられる。ロクロの爪痕か。159は見込みに赤色漆で銭文が描かれる。丸を描いた後に方形を描く。170は見込みと外面に花文が描かれる。円を描いた後に右回りに花弁の輪郭を描く。174は外面黒漆，内面赤色漆塗りである。外面には植物が描かれ，ひっかき技法で描かれる。高台裏は文字が書かれているが，漆が剝離しているため判読できない。

その他の形態として，高台脇から垂直に立ち上がり胴部に凸帯を巡らす豆子（188・190）がある。188はＳＤ3425出土で，高台脇から高台裏まで黒色漆が，他は赤色漆塗りである。漆は厚く塗られるが，木胎はほとんど朽ちている。ケヤキである。高台裏に「臨」と書かれる。190は褐色の漆が塗られる。高台脇から口縁に直線的に立ち上がる。体部上方には隆帯が巡る。近代のものと思われる。189は高台をもたず，底部から垂直に立ち上がり，黒色漆が塗られる。内面は削られ凹凸が顕著である。

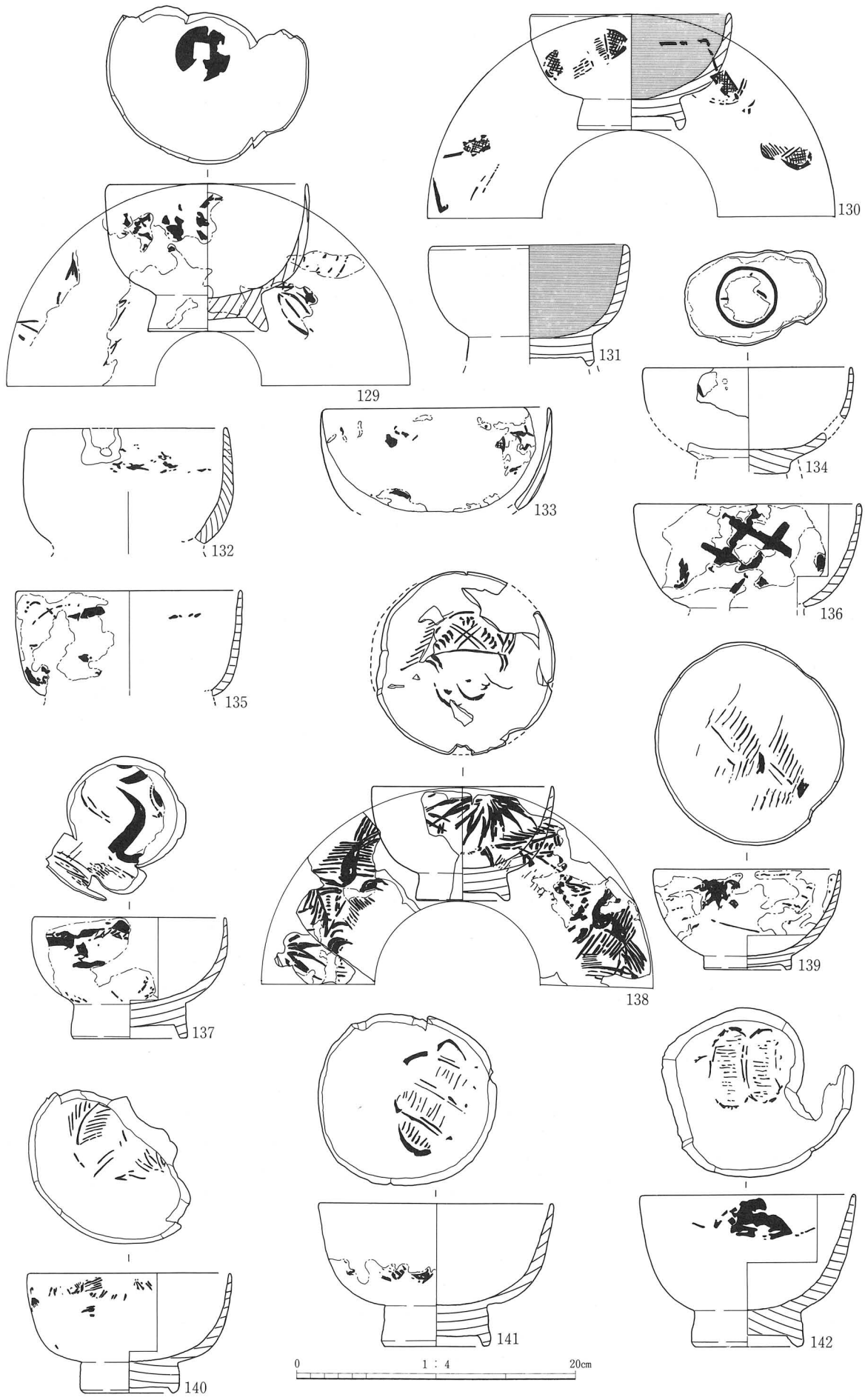
瓶子（203）　脚である。胴部はロクロ目が顕著である。底部はロクロの爪痕を削ったと思われる痕跡が，中心から径6.6㎝の範囲にみられる。口縁部は欠損する。竪木取りの芯持ち材を用いている。これは，ＳＤ5002とＳＤ5105の合流点にみられるしがらみ付近から出土している。

鉢（194）　材を刳り抜いてつくったものである。全体に焼けている部分が多いが，底部は欠損部分のみ焼けている。見込み中央はくぼみ，胴部の立ち上がり際に線状の傷が多くみられる。

４．食　事　具（第192～194図，図版121・122）

食事具は食物の調理や食事をとるときに使う道具である。杓子形木器・刳物匙，擂粉木，箸がある。他の用途も考えられるが，形態が現在と類似することからここに分類した。

杓子形木器（195～197）　いわゆる「めしひしゃく」に類似するものである。195は両面に赤色漆が塗られ，焼印されたような「高野山」文字がみられる。196は漆塗りで，身の先端は欠損，柄の先端は山形に成形される。197は身の先端が欠損し，柄の先端は丸く成形され，側面に加工痕がみられる。



第189図　木製品15　〔容器－漆器椀〕(1/4)